

八日嘯山の葎亭で開かれ、第二十回は同四年九月二十五日長松下の會で終つてゐる。その歌仙二十卷をその儘に捨て置くのも惜しいといふので、明和六年に至り、蕪村を初め諸家の四季發句を卷末に添へて上梓したのである。【價值】太祇・嘯山・隨古の三人は何れも蕪村と親交があり、當時の平安俳壇に高踏的な蕉風復古の志を抱いてゐた者である。隨つてこの三吟の試みは、彼等の懷抱を積極的に世に示さうとしたものといふべく、當時の停

たが目的は終に達せられなかつた。明治二十九年十二月十七日高輪御殿に於て、當宮周宮兩内親王殿下が幕末斯道の名手多くは凋落して殘星寥々たる中から、深川照阿を召されて語らしめ給へる時、伊豆島宗昌が琵琶を弾じた一日の清興は六百年間演奏の最後の花であつた。京都に於ても木下帝大總長が主唱者となり、最後の檢校藤村性禪を保護して復興を謀り、檢校も獻身的に専心普及に努めたが、實現を見ずして明治四十四年に歿した。京都の豪商伊勢佐の長男として生れた藤村檢校、長崎奉行筒井肥前守の子として生れた福住檢校が共に平曲の名人であり、平曲の末路に立ち、悲愴な生を終へた事は平家の末路にも似通つてゐる。平曲が多く熱心家の努力にも拘らず、終に衰滅に歸した原因は、一般民衆に向かない點にある。清元・常磐津等の三絃樂、或は箏曲・義太夫・謠曲等に比して、その發生が古

の字を承けて如一名乗り、一方といひ、或は坂東に住んだ故坂東方ともいつた。「八坂・一方の相違、八坂流の滅亡」八坂流は室町時代永享頃には既に亡びたらし、たとひ亡びない迄も大に衰へ、室町末期には全く亡びたので、その語り方が一方と如何に異なるか今日では知られないが、ただその詞章についての相違を見ると、八坂本の方が修飾の度が多く、一方本即ち流布本の方が素材味が多いし、八坂本には「灌頂卷」を立ててないが、一方本に

後小松天皇より「夜の雨の城了」の號と紫衣とを賜はつた野史。平安時代の琵琶法師は卑賤のもので高貴の前に召されるやうの事は無論なかつたし、平曲草創時代もなほその餘流として低い地位であつたのが、天才覺一の出現によつて社會的地位が著しく高められ、至尊仙洞親王等の御聽に達した事が何十回となしくあつた(花園院宸記・看聞御記)。彼の傳記は詳しくはわからないが、後醍醐天皇の朝(或は後村土師)に檢校に補せられ、應安四年に死んだ。

かく上流に歡迎せられると共に無論民間でも盛んに行はれ、特に神社佛閣の境内で語るのを人々は芝の上に坐して聞いた。京都の矢田地藏堂・六條御堂・五條高倉樂師堂・北野神社等が盛んであつた(中原師守日記)。「波多野・前田二流の分立」室町末期から江戸初期にかけて波多野孝一(慶安四年歿)と前田九一(貞享二年歿)といふすぐれた二人の檢校が出て、こゝに波多野・前田の二流が生じた。波多野流は京都を中心として榮え、河瀬檢校の歿後一時衰へたが幕末に藤村性禪が出た。前田流は江戸を中心として榮え、「平家吟譜」を著した岡村玄川が出た。有名な「平家正節」の著者萩野檢校(享和元年歿)は前田流であつたが、波多野流をも兼修して名古屋に住し、立派な弟子が澤山あつた。横井也もその一人である。島津公の寵遇を得た麻岡檢校(安政五年歿)は特に斯道に熱心で屢々上洛し、萩野檢校更正の正節を學びて一切の傳授を受け、江戸に於ける正節の祖となつた。その後をついだのが福住順賀で、文久三年十四代將軍家茂公の喪に際し、増上寺に於ける頓寫の法會に平曲を語つてその妙技は衆人の視聽をひいた。併し間もなく維新の政變にあひ、天下平曲を顧る者なく、増上寺の盛儀を追懐しては「頓寫もあれきり、平家もあれきり、幕府もあれきり」と歎きつつ悲運のうちに生を終へた。「波多野・前田二流の衰滅」明治四年官制廢止、京都の職屋敷江戸の總録屋敷沒收といふ大變革にあひ、收入を失つた檢校勾當は平曲を捨てて陋巷に隠れ、僅に按摩を業として餘生を送るの餘儀なきに至つた。明治十年頃から二十年頃にかけて、福地櫻痴・成島柳北・大槻如電等の篤志家が東京に於て頻りにその復興に努力し

いただけに、音曲としては原始的たるを免れない。芭蕉の「奥の細道」に平曲の事が見えてゐるから、元祿頃には民間にも相當にひろがつてゐたらうと思はれるが、川柳に「琵琶の弟子一人ふえれば二人へり」とあるから幕末には既に衰運に傾いてゐた。一般民衆の歡迎を受けないから必然の結果として、八橋檢校の八橋流(別項)、生田檢校の生田流(別項)、山田檢校の山田流(別項)等の華曲、或は杉山檢校の杉山流(別項)など、平曲を捨てて他の方面に轉向する盲人が多かつた。即ち平曲自身の内在理由及び保護者を失つたといふ外的理由から終に平曲は衰滅に及んだ。

【音樂としての特徴】臨濟宗の名僧中巖圓月は「一曲琵琶愁殺人」といひ、頼山陽は「其音悲壯感憤、聽者莫不悽愴」といつて共に平曲を讚歎してゐる。かくの如く賞讃せられるのはどういふ點にあるかといふに、二つの方面の特色を數ふべきである。第一、詞章のすぐれてゐる事。平曲以前の音樂は、神樂・催馬樂・朗詠・今様・風俗等が主なものであるが、これ等は皆數行乃至十數行の短章で、而も文學として高い價值を有するものは稀である。然るに「平家物語」は大篇長章で且つ文學的價值は多くの國文學中でも特に傑出したもの一つである。第二、曲調の價值。神樂・催馬樂・朗詠・今様各別項等は、歌詞の内容と曲節とに有機的不可分離の相即關係がない。喜怒哀樂善惡美醜その内容は如何やうであつても、曲節はいつも同一の冷靜な調子である。高低の音が形式的に連續するのみで、そこに形式的的美感は求められるが、その旋律は歌詞の内容と一致した感情を表現しない。故に音樂として極めて幼稚なものである。然るに平曲に於ては曲節が内容に一致してゐる。即ち勇ましい詞章の語り口は勇ましいやうに、悲しい所は悲しく、美しい所は美しく語るを本旨としてゐる。琵琶の演奏は詞章と同時に、その前後合間々々であるが、その旋律は詞章と連關して詞章の内容の効果を發揮しようとする。後三絃樂や謠曲の雛子に比べると、遙かに幼稚である事は否めないが、作曲の根本方針は同一である。否同一であるといふよりは、寧ろ平曲に於てこの有機的作曲方針を創始したもので、平曲以前には絶えてなく、以後のものはいずれも繼承したものである。要するに平曲の特徴は、(一)詞章が文學として人心を感動せしめる偉大な魅力を有する事。(二)作曲の根本方針が眞に藝術的である事。以上の二點に存し、而して幼稚な先

行音樂に對し、新興音樂としてひろく歡迎せられたのである。【曲調】平曲中には、その先行音樂たる神樂・催馬樂・朗詠・今様等の曲節も採用されてゐるが、最も多く採り入れられたのは聲明(別項)特に天台聲明(別項)である。天台聲明は二つの要素から成る。一は引聲(聲を長く引く。大原聲明六卷帖・法華經法など)、二は短聲(引かずに短く切る。舍利講式・羅漢講式・涅槃講式・六道講式など)である。講式の偈は引聲であるが、その本文は短聲で、節をつける部分と節なしに單に讀む部分とある。平曲にはこの二部分が取り入れられて、節なしの部分は白聲となり、節をつけて語る部分は引句となつた。聲明との密接の關係は、初重・二重・三重・刺聲・中ユリ等の術語が同一で、しかもその内容が類似して居り、節博士もまた類似してゐる等の諸點から明かに知られる。【曲名】「平家物語」は成長發達した文學で、異本の多い事は全日本文學中の隨一である。これは盲人傳誦の間に次第に變化したので、隨つて曲調も漸次變化し發達したに相違ない。現存墨譜付の語り本はすべて江戸時代に出たもので、創始時代の曲調は今日からは全く知る由もない。「當道要集」には生佛頃の曲調として、口説・拾・三重・初重・中音・中ユリ・サシ聲・折聲・甲ノ聲・胸ノ聲・一ノ聲・二ノ聲・歌・祝詞・讀物の十五種を掲げてゐるが恐らく推定であらう。岡村玄川の「平家吟譜」では二十七種を數へ、萩野檢校の「平家正節」では次に示す如く三十三種をあげてゐる。「萩野檢校更正の曲節三十三種」一、口説、詞折口説、位口説、艶口説。二、下ゲ、強り下ゲ、長下ゲ、半下ゲ、長強り下ゲ。三、素聲、ハズミ、四、

5 初重呂、6 初重、7 重初重、8 中音、一ノ聲、二ノ聲、中ユリ、9 初重中音、10 三重、11 下リ、12 走リ三重、13 折聲、引ステ、引下ゲ、14 指聲、15 上歌、16 下歌、17 曲歌、18 峰聲、19 強ノ聲、20 拾、呂一ノ聲、突居、21 下音、22 上音、23 音曲、24 音曲呂、25 拾掛、26 中音吟、27 散、28 讀物、29 下音、30 上音、31 運、32 野曲掛、33 今様語。然るに音響學の方面から見れば同種異名のもが多く、科學的に整理すれば、次の如く二類十種六音階となる。これを文章の内容に応じて巧みに交互錯綜させ、旋律の特色と文章の妙味とを十分に發揮する事に努めてゐる。

平曲の曲調名	旋律の特色	六音階、低い方からの順位
一、白聲(一)	節無し朗讀調	二
(2) 口説	ヤ、朗讀的	三
(3) 初重	曲折多し	三
(4) 中音	同	五
(5) 三重	同	六
(6) 刺聲	流麗優雅、歌謡風	一
(7) 拾	早拍子、勇壯	四
(8) 折聲	感慨悲愴の調	四
(9) 色音	同	四
(10) 歌	以上諸種の混合	五

【秘曲十九句】「平家」十二巻を凡そ二百章に分ち、章を句と稱へる。二百句中秘曲として扱ふものが十九句あり、普通の章を平物と稱へる。【第一、讀物十三句】(一)康頼祝詞、(二)山門陳狀、(三)南都陳狀、(四)南都返

赦免されて歸洛する事となつたが、成程が鳥で契つた海女千鳥が別を惜しんで悲歎するを見かねた俊寛は、自分の代りに千鳥を船に乗せてくれと申し出で、邪慳にこれを拒む瀬尾を刺し殺す。かくて俊寛は一人淋しく船を見送る。【三段】(口、小松の第)重盛の病氣を慰めるために召した早乙女達が田植歌に託して清盛の姿容の亂行を重盛に訴へる。重盛は實否を糺す役を元源氏の侍であつた宗清に仰せ付ける。(中、朱雀御殿裏小門)常磐の腰元

牒、(5)勸進帳、(6)伊豆院宣、(7)木曾願書、(8)木曾山門牒狀、(9)山門返牒、(10)木曾山門連署、(11)八島院宣、(12)請文、(13)腰越、(第二、都遷)【第三、灌頂五句】(一)女院御出家、(二)大原入御、(三)大原御幸、(四)六道、(五)女院御往生。【小祕事二句】(一)祇園精舎、(二)延喜聖代、(善光寺炎上を加へたものもある)。【大祕事三句】(一)宗論、(二)劍卷、(三)鏡卷。大小祕事五句は秘曲十九句よりも一層重視したもので、祇園精舎の外は語り本にも除いてある。

【五種二十四句傳授次第】【第一、初五十句の傳、又は讀物の傳】平物五十句習熟者に初めて授ける。【第二、百句の傳、又は都遷の傳】讀物の傳授を受けた後、平物百句を習熟した者に對してはじめて都遷を授ける。【第三、後五十句の傳、または灌頂卷の傳】都遷の傳授を受けた後、平物五十句を習熟した者に授ける。以上平物全部と秘曲十九句を習熟した者を「平家部」に通達したといふ。【第四、最後の傳】大小祕事五句は、灌頂五句よりも一層尊重して平家一部に通達した者に對しても容易に傳授しない。後に檢校となつた者でも師匠の生前にはとうとう傳授されず、その歿後、兄弟子から傳授を受けた例が澤山ある。つまり祕事の傳授を受ける有資格者は、盲人にあつては將に檢校たらんとする者、俗人にあつては公卿大名に限られてゐた。

【祕事秘曲の特色】詞章と曲節との両面に存する。第一讀物は「チラシ」拾」と稱する特殊の曲節がある。第二都遷は曲節にも重要な口訣があるが、帝尊皇室に關する内容上の理由が主なるものである。第三灌頂五句は、

家追討の院宣を申し下し、姪が小鳥へと急ぐ途中、大道に假寝して頼朝の擧兵から平家滅亡に至るまでの有様をありありと夢に見る。【構想】各段が因果の鎖で繋がれてゐない。つまり全體が有機的に統一されてゐない作である。勿論一貫した主人公はなく、第二段、第三段の如きはそれ、獨立して居り、その他の段は無用とも見られる。俊寛、宗清、松が枝等の行爲にはひどい無理があり、彼等は單に義理と人情との葛藤を生ぜしめるための傀儡に

内容からいへば平家全巻を貫く無常悲哀觀の壓縮ともいふべき建禮門院の記事で、「平家物語」中最も美しい文章であり、曲節からいへば平曲中最も美しい節が澤山用ひられてゐて、平曲としての特色も價値も極度に發揮せられてゐるので、この兩方面から重視された。第四小祕事は内容曲節兩面の理由による。祇園精舎は平家物語の冒頭として全十二巻の思想精神を壓縮豫言したもの、延喜聖代は皇室に關するもの。曲節からいへば「位口説」と稱する莊重端正な曲節は全十二巻中ただこの二章にのみ用ひられてゐる。第五大祕事は専ら内容上の理由から、曲節としては特色の認めべきものはない。

【参考】平曲沿革(岩波講座日本文學)○平家物語考(山田孝雄)○平家音楽史(館山漸之進)○日本の音楽(常清)○歌舞音楽略史(小中村清矩)○日本音楽の話(鈴木木鼓村)○日本歌謡史(高野辰之)○初期の平曲に關する研究(後藤丹治)【國語】(國文學四ノ九)【沼澤】

【平家雜感】感想文【作者】高田樗牛【發表】明治三十四年四月、「太陽」刊行【樗牛全集所収】内容】平家の中心人物たる清盛のことを叙し、次いで重盛の苦衷に説き及び、源平合戦から平家の都落及びその衰亡を叙述し、その最後に見る悲哀美を讚嘆してゐる。【批評】人生美を中心として平家を考察し、平家が美の生活に於て卓越したこととを認識し、美に徹した爲めに亡びた平家は、いよゝ美しいと見た。至つて短篇ではあるが、この詩的な主觀的解釋に樗牛の特長がある。権力や、權勢や、さうしたものは俗衆の喜ぶところであるが、美の前にはそれも風塵の如きものだ。美に生き美に亡びるところに

番にめされて、七徳の舞をふたつ忘れたらければ、五徳の冠者と異名をつきにけるを、心うき事にして、學問をすて、通世したりけるを、慈鎮和尚、一藝ある者をば、下部までもめしをきて不便にせさせ給ければ、此信濃入道扶持し給ひけり。此行長入道、平家物語を作りて、生佛といひける盲目に教へてかたらせけり。さて山門の事を殊にゆゑしくかけり。九郎判官の事はよく知て書のせたり。蒲冠者の事はよく知らざりけるにや、おほくの

人生の意氣があるとした「美的生活論」(別項)的見方で、平家史論に關する限りでは、もつとも獨創的な解釋である。そして人はそれと共に、内容によく調和した聲調の流麗な朗々誦すべき名文章に魅せられるであらう。なほ彼は、本篇を書いた同じ年の初冬に「平相國」を公にしたが、それによると、「平家雜感」は清盛を研究した時の副産物であつたことが知られる。【高須】

【平家女護鳥】浄瑠璃 五段 時代物【作者】近松門左衛門【初演】享保四年八月十二日より竹本座。【諸本】十一、二行二十九丁本、山本九兵衛板。七行八十四丁本、同上板。同上、紙屋與右衛門板。近松時代浄瑠璃集(帝國文庫)・近松名作集(日本名著全集)・近松門左衛門集(近代日本文學大系)・諸種の近松全集所収。【題材】「平家物語」中の諸説話を基とし、第三段に吉田御殿の巷説を取り入れたもの。第二段は謡曲「俊寛」に據つた點もある。

【梗概】【初段】(大序、六波羅)重衡は南都燒討の際、俊寛の妻あづまやを捕へて歸るが、清盛はその美貌に戀慕する。(中、六條河原獄門場)南都よりの戦利品なる金銅の塵遮那佛の首の中から文覺が躍り出て、警固の侍難波、瀬尾等を打ち据ゑる。(切、六波羅)あづまやは清盛の執心を憤つて自害する。俊寛の召使有王丸はこの事を聞きつけ、怒り猛つて邸内に斬り込むが、教經に諭されて引き返す。【二段】(口、鳥羽の作り道)教經は中宮安産の祈禱のため清水代參に下向の途中、鬼界が鳥の流人召還の使者丹左衛門・瀬尾等に逢ひ、俊寛一人赦免なしと聞き、自らその赦文を書いて渡す。(切、鬼界が鳥)成經・康頼・俊寛等皆

ので、異本の作者と見るべきであらう。吉田資經は「醍醐雜抄」に「十二巻平家資經御書」と見え、「鶴談集」第七にも同説を掲げてあるから、これは原本を増補して十二巻本とした人らしく思はれる。又「醍醐雜抄」には、「平家物語」民部少輔時長書之、合戰事依無才學、源光行誦之と見え、「鶴談集」第七にも同様にいつてある。これによると、源光行も「平家物語」編述の一部に關與したらしいが、これも異本の製作に關係したものと思れば、首肯するこ

(7)拾	早拍子、勇壯	四
(8)折聲	感慨悲愴の調	四
(9)色音	同	四
(10)歌	以上諸種の混合	五

【秘曲十九句】「平家」十二巻を凡そ二百章に分ち、章を句と稱へる。二百句中秘曲として扱ふものが十九句あり、普通の章を平家物と稱へる。【第一、讀物十三句】(一)康頼祝詞、(二)山門隱狀、(三)南都隱狀、(四)南都返

家追討の院宣を申し下し、姪が小鳥へと急ぐ途中、大道に假寝して頼朝の擧兵から平家滅亡に至るまでの有様をありと夢に見る。【構想】各段が因果の鎖で繋がれてゐない。つまり全體が有機的に統一されてゐない作である。勿論一貫した主人公はなく、第二段・第三段の如きはそれ／＼獨立して居り、その他の段は無用とも見られる。俊寛・宗清・松が枝等の行爲にはひどい無理があり、彼等は單に義理と人情との葛藤を生ぜしめるための傀儡に過ぎぬ感がある。【影響】本作の二段目は、その後にも十數回繰り返された。寶曆七年二月一日より竹本座上場の「姫小松子日の遊」(吉田冠子・近松景輝・竹田小出雲・近松半三・好松落)は本作の雛案で、安永九年正月七日より竹本座興行の「立春日・姫小松」(香江堂・原羽登・吉田冠子)は更に増補改作を加へたもの。歌舞伎では享保五年正月、大阪中の芝居、竹島幸左衛門座で本外題のまゝ上演されたのを初めとして三都で度々繰り返された。

【参考】近松名作集下解題黒木勲藏 ○近松全集第十一巻解題藤井乙男 ○俊寛物の検討宮本隆運(歴史と國文學七ノ五・六) ○近世邦樂年表(義太夫節之部) ○歌舞伎年代記伊原敏郎 ○大歌舞伎外題年鑑 ○正・續・續々歌舞伎年代記 (高野(正))

【成立】昔からいろいろな説があるが、「平家物語」卷五「物怪」の條に見えたる夢物語の中に、大内の神祇官とおぼしいところで、神々の議定があつた際、かねて平家の氏神嚴島明神から平家へ預けられた節刀を、源氏の氏神八幡大菩薩が取りあげ、伊豆の國の流人源頼朝に賜はる旨を仰せられると、藤原氏の氏神春日大明神が、その後は我が子孫にも、その節刀を賜はれと仰せられたが、これは平家が亡びて源氏の世となり、更に源氏の世が盡きた後には、藤原氏の子孫が天下の將軍に成られることを豫言したものとしてある。この記事を根據として菅茶山の「筆のすきび」には、その

赦免されて歸洛する事となつたが、成經が鳥で契つた海女千鳥が別を惜しんで悲歎するを見かねた俊寛は、自分の代りに千鳥を船に乗せてくれと申し出で、邪慳にこれを拒む瀬尾を刺し殺す。かくて俊寛は一人淋しく船を見送る。【三段】(口、小松の第)重盛の病氣を慰めるために召した早乙女達が田植歌に託して清盛の妾常磐の亂行を重盛に訴へる。重盛は實否を糺す役を元源氏の侍であつた宗清に仰せ付ける。(中、朱雀御殿裏小門)常磐の腰元笛竹・雛鶴が物見の亭から往來を見下し、通りかゝる男達を呼び入れる。(切、朱雀御殿内)常磐は呼び入れた男達を色仕掛でたらし込んだ上、源氏一味の血判を求め、應じない者を殺してしまふ。牛若は女装して殿中に忍び入り笛竹となつてゐる。宗清は往來の男に化けて常磐の間に到り、その陰謀を知るや、正八幡大菩薩と記した源氏の白旗を投げ與へ、暗に擧兵を勧めて逃さうとするが、一方平家の恩義があるので煩悶する。折から縁の下より雛鶴が不意に宗清を突き通す。雛鶴は先年別れた宗清の娘松が枝であるが、今主を助け且つ父の武士を立てさすためにこの事に及んだのである。雛鶴の物語に常磐等は驚くが、宗清は娘出來したと喜び、三人を促して落ちさせる。【四段】(口、舟路の道行)成經・康頼・千鳥等の船が備後の數名の浦に着く。(中、數名の浦)清盛は嚴島參詣と稱して法皇を誘ひ來り、船中より海へ投げ込む。蘆蔭より様子を見てゐた千鳥は、續いて海へ飛び入り、法皇を救つて陸から逃がす。怒れる清盛は千鳥を捕へて踏み殺す。(切、六波羅)清盛は猛烈な熱病に罹り、あづまや・千鳥の亡靈に惱まされながら悶死する。【五段】(大切、東への道筋)文覺が平

家追討の院宣を申し下し、姪が小鳥へと急ぐ途中、大道に假寝して頼朝の擧兵から平家滅亡に至るまでの有様をありと夢に見る。【構想】各段が因果の鎖で繋がれてゐない。つまり全體が有機的に統一されてゐない作である。勿論一貫した主人公はなく、第二段・第三段の如きはそれ／＼獨立して居り、その他の段は無用とも見られる。俊寛・宗清・松が枝等の行爲にはひどい無理があり、彼等は單に義理と人情との葛藤を生ぜしめるための傀儡に過ぎぬ感がある。【影響】本作の二段目は、その後にも十數回繰り返された。寶曆七年二月一日より竹本座上場の「姫小松子日の遊」(吉田冠子・近松景輝・竹田小出雲・近松半三・好松落)は本作の雛案で、安永九年正月七日より竹本座興行の「立春日・姫小松」(香江堂・原羽登・吉田冠子)は更に増補改作を加へたもの。歌舞伎では享保五年正月、大阪中の芝居、竹島幸左衛門座で本外題のまゝ上演されたのを初めとして三都で度々繰り返された。

【参考】近松名作集下解題黒木勲藏 ○近松全集第十一巻解題藤井乙男 ○俊寛物の検討宮本隆運(歴史と國文學七ノ五・六) ○近世邦樂年表(義太夫節之部) ○歌舞伎年代記伊原敏郎 ○大歌舞伎外題年鑑 ○正・續・續々歌舞伎年代記 (高野(正))

【成立】昔からいろいろな説があるが、「平家物語」卷五「物怪」の條に見えたる夢物語の中に、大内の神祇官とおぼしいところで、神々の議定があつた際、かねて平家の氏神嚴島明神から平家へ預けられた節刀を、源氏の氏神八幡大菩薩が取りあげ、伊豆の國の流人源頼朝に賜はる旨を仰せられると、藤原氏の氏神春日大明神が、その後は我が子孫にも、その節刀を賜はれと仰せられたが、これは平家が亡びて源氏の世となり、更に源氏の世が盡きた後には、藤原氏の子孫が天下の將軍に成られることを豫言したものとしてある。この記事を根據として菅茶山の「筆のすきび」には、その

くすけび くすけも

成立を藤原氏將軍時代と推定し、諸學者も大抵この説に従つてゐた。然るに「平家物語」の古本たる八坂本・皇代本等には、春日明神と藤原氏とのことを載せず、源氏の氏神たる八幡大菩薩が頼朝のために節刀を要求し給ふことをいつてあるだけである。これによると、本書の成立は、源氏將軍時代、即ち建久以後、承久以前、約三十年ばかりの間にあるといはなければならない。そして藤原氏將軍時代に増補せられた形跡が見えるが、その後も増補改竄が續いて行はれ、幾多の異本を派生したものでらしい。【卷數】「平家物語」が最初に成立した當時は三卷から成つてゐたものらしく、それが増補改修せられて六卷となり、更に十二卷となり、次いで灌頂の巻が分立するに至り、また別に二十卷の長門本や四十八卷の「源平盛衰記」を派生したもののやうに思はれる。

三卷本の「平家物語」は現存しないが、諸本を比較してみると、卷首の記事の同じ所が始まつて、内容や辭句の全く符合するところが三ヶ所あり、「平家物語」が最初三卷であつたといふ痕跡を残してゐる。そして三卷本が存したの承久以前であつて、それが増補されて六卷となり、十二卷となつたものと思はれるが、六卷本があつたといふことは、現に延慶本が六卷になつてゐるのも明かである。但し延慶本は六卷本を増補して十二に區分しながら、卷數だけは元のまゝに存してゐるものである。また東山御文庫所藏「兵衛記」の裏に書かれてゐる消息に、「治承物語六局(卷)號平家候間書寫候也」とあるによつて、「平家物語」は「治承物語」ともいつたことや、六卷であつたことが知られる。なほ「平家勸文録」や「平家相傳大綱」に、「少納言入道信西の子息玄用法

師の作文の平家は、上中下三卷の書に作る。(中略)その後中二年有て六卷の書に作る」とあるのによると、「平家物語」には三卷のものがあつて、六卷に作りかへられたといふ傳説があつたことがわかり、これも「平家物語」が三卷から六卷へ増補改修されたといふ上述の意見を裏書する譯になる。

【諸本】「平家物語」は、國民の間に愛讀せられた上に、琵琶に合せて語られ、廣く世にもはやされたので、多數の異本を派生し、諸本の間には編次内容にも少からざる異同を生じてゐる。今日までに筆者が知り得た諸本は凡そ百二十六本ばかりあつて、それは二十二類四十四種に分類される。これを部門に分けると、

第一門―灌頂の巻を立ててゐるもの(一方系統のもの)十三類・三十一種・九十四本、第二門―灌頂の巻に當る部分を纏めながら、また分立させてゐるもの(八坂系統のもの)五類・九種・二十八本、第四門―零本にして性質の明かでないもの(二類二種二本)、第五門―繪巻物(一類二種一本)。

となる。第一門諸本は十二卷の外に灌頂の巻を立ててゐるもので、諸本中最も多數を占めてゐる。灌頂の巻は平曲傳授上の都合から、建禮門院に關する記事を祕曲として別に分立したものである。従つて發達の過程から見ると、新しい姿であり、且つ或る目的のために人為的に施した作爲である。この部門に屬するものは、一方系統の諸本であるが、その中で目ぼしいものを擧げてみると次のやうである。一方本と稱するのは平曲一方流の臺本で流布本のことであるが、これには片假名交り

寫本・平假名交り寫本が、いろ／＼な體様で諸家に傳はつてゐる。片假名古活字本には、慶長活字・元和活字・寛永活字など數様あり、平假名古活字本にも、元和・寛永の版式が數様ある。片假名整版本には、元和七年版・寛永三年版・寛治二年版など、平假名整版本には、寛永三年版・正保三年版など、平假名整版繪入本には、明暦二年版・寛文十一年版・延寶五年版・天和二年版・元祿四年版・元祿十一年版・元祿十二年版・寶永七年版・享保十二年版などが行はれてゐる。覆刻本としては、日本文學叢書・國文叢書・新釋日本文學叢書・有朋堂文庫・日本文學大系、その他單行の諸本が甚だ多い。嵯峨本は平假名交りの活字版で、流布本に酷似してゐるが、少しく異同がある。この同種の

本に下村本がある。又嵯峨本に近似した類本に、片假名活字嵯峨類本・書寫嵯峨本がある。唱譜を附した語り本には、東京帝國大學舊藏本・文部省本・松井本・高階訪月本・早稻田大學本等が知られてゐるが、鏡巻を加へた譜本もある。分類した譜本には、堀本・竹内本の外、「平家正節」又は「平家曲節」など稱するものが諸方にある。古寫一方檢校本は流布本に似てゐるが、古色を帯びて誤が少い。野村本は草野本に近い本と流布本とを六卷づつ併せたもので完本ではない。嵯峨本に似て而も鏡巻を加へたものに藤波本があり、この同種に淺草文庫本・京師本がある。東京帝國大學本(舊藏)は、藤波本に似て少しく趣を異にし、永森本も藤波本に近くして異同があり、康豊本は京師本に似て「堂供養」のことを載せ、慶長本は一方本に似て「國綱の沙汰」を載せ、草野本は嵯峨本に似て國綱の事蹟を叙し、神宮文庫本は草野本に似て多少の異同がある。劍巻と鏡

巻とを加へたる本としては、京都大學本・靜嘉堂文庫本があり、劍巻・鏡巻・宗論を加へたものに葉子七行本・吉澤本・葉子十行本などがある。覺一本は前記の本よりも内容がやゝ豊富となつてゐて、卷十一は「重衡被斬」で終り、卷十二は「大地震」から始まつてゐるが、これには高良神社本・寂光院本・成瀬本がある。覺一別本は、覺一本と組織が一致して、覺一本に見えない「祇王祇女」「小宰相身投」等を載せてゐるもので、平家灌頂本・大村家舊藏本・久原文庫本・吉田梵舜本・山田本・片假名古活字覺一本等がある。眞字本には尾張熱田の別當宗亮が書寫したものがあつたが、その影寫に内閣文庫本・木村本・色川本・高野本等がある。また卷首に「四部合戰狀第三番圖證」と記した眞字本、所謂四部合戰狀本には、高野氏四部合戰狀本・阿波文庫眞字本・黒川眞字本・色川校正本・伴信友本・圖書寮眞字本等がある。南部本は宗論を加へ、編次内容にも特色が少なくない。長門本は二十卷から成り、十二卷本に比すれば、記載事項も二百七項ばかり増加し、分量も二倍に達し、編次内容も著しく趣を異にしてゐるが、灌頂の巻を立ててゐるのは、一方系統本と趣を同じうしてゐる。「源平盛衰記」は四十八卷から成り、分量は十二卷本の約二倍半に及び、記載事項も三百八十四項ばかり増加し、著しく趣を異にしてゐるが、記事内容は延慶本・長門本と最も近似し、その四十八卷は灌頂の巻に相當してゐる。第二門は灌頂の巻に相當する内容を卷十二の終りに近いところに一括してあるもので、これは灌頂の巻が別に分立する前の姿である。これに屬するのは城一本であるが、この本はただ卷十二だけが現存してゐる零本であるけれども、灌

寫本・平假名交り寫本が、いろ／＼な體様で諸家に傳はつてゐる。片假名古活字本には、慶長活字・元和活字・寛永活字など數様あり、平假名古活字本にも、元和・寛永の版式が數様ある。片假名整版本には、元和七年版・寛永三年版・寛治二年版など、平假名整版本には、寛永三年版・正保三年版など、平假名整版繪入本には、明暦二年版・寛文十一年版・延寶五年版・天和二年版・元祿四年版・元祿十一年版・元祿十二年版・寶永七年版・享保十二年版などが行はれてゐる。覆刻本としては、日本文學叢書・國文叢書・新釋日本文學叢書・有朋堂文庫・日本文學大系、その他單行の諸本が甚だ多い。嵯峨本は平假名交りの活字版で、流布本に酷似してゐるが、少しく異同がある。この同種の

平家物語

後園やうりやうり... 平家物語の序文... 平家物語の成立... 平家物語の流布...

鏡之沙汰

カリケル事ハナシ御袖ヲ着テ奉リタラハ何程ハ事々可シ
在ツ責テノ御志ニノ深サ哉トテ武キ武士共モ皆涙ヲ
流ケル
同二十八日鎌倉ノ前兵衛佐頼朝朝臣從二位三
給フ越階トテ二階ヲスルタニ難在朝恩十ニ是ハ既ニ
三階也三位ヲコソシ給フヘカリニカ共平家ノ三給タリ

平家物語卷第十二
 三つ程よか三位中るき源輝をく物
 是も新まきりまをさゆり伊豆國よあり
 きはく南都の大斎壇よりマケレハりもは
 さうアとして徳三位入るの孫伊豆荒人大
 吏執道一ノ作て作ぬよ素良へうけのけさ
 きりうとそやまやらの中へそりまられ
 正大津一う山科せげりよ醍醐路アケル
 けし日登を道りつとまりうの小方とマヤ島
 飼中ぬき惟妻のじものヌ来大ゆと國邊の

(藏氏治簡井松) 本字活古名假平行十

平家物語卷第十二
 後園やりのゆりあはれひまきあひのりる
 けし日登を道りつとまりうの小方とマヤ島
 飼中ぬき惟妻のじものヌ来大ゆと國邊の
 三つ程よか三位中るき源輝をく物
 是も新まきりまをさゆり伊豆國よあり
 きはく南都の大斎壇よりマケレハりもは
 さうアとして徳三位入るの孫伊豆荒人大
 吏執道一ノ作て作ぬよ素良へうけのけさ
 きりうとそやまやらの中へそりまられ
 正大津一う山科せげりよ醍醐路アケル
 けし日登を道りつとまりうの小方とマヤ島
 飼中ぬき惟妻のじものヌ来大ゆと國邊の

本版整名假平刊年三永寛

平家物語卷第十二
 三つ程よか三位中るき源輝をく物
 是も新まきりまをさゆり伊豆國よあり
 きはく南都の大斎壇よりマケレハりもは
 さうアとして徳三位入るの孫伊豆荒人大
 吏執道一ノ作て作ぬよ素良へうけのけさ
 きりうとそやまやらの中へそりまられ
 正大津一う山科せげりよ醍醐路アケル
 けし日登を道りつとまりうの小方とマヤ島
 飼中ぬき惟妻のじものヌ来大ゆと國邊の

(藏館書圖立府都京) 本行十子葉

鏡之沙汰
 同二十八日鎌倉ノ前兵衛佐頼朝朝臣從二位三
 給フ越階トテ二階ヲスルニ難在朝恩十ニ是ハ既ニ
 三階也三位ヲコソニ給フヘカリニカ共平家ノミ給タリ
 シヲ思フテ也其夜子刻ニ内侍所太政官ノ廳ヨリ靈
 景殿へ入せ給主上行幸成テ三箇夜臨時ノ御神樂
 アリ右近將監小家能方別勅ヲ承ツテ家ニ傳レル弓
 立官人ト云神樂ノ秘曲ヲ往テ勅賞蒙リケルコソ目
 出テ此樂祖父ハ條判官資忠ト云云云云云云云云

(藏氏之辰野高) 本字活古名假片行二十

六卷となり十二巻となつたものと思はれる
 が、六巻本があつたといふことは、現に延慶
 本が六巻になつてゐるのでも明かである。但
 し延慶本は六巻本を増補して十二に區分しな
 がら、巻數だけは元のまゝに存してゐるもの
 である。また東山御文庫所藏「兵衛記」の裏に
 書かれてゐる消息に、「治承物語六局(巻)號平
 家候間書寫候也」とあるによつて、「平家物語」
 は「治承物語」ともいつたことや、六巻であつ
 たことが知られる。なほ「平家勸文録」や「平家
 相傳大綱」に、「少納言入道信西の子息玄用法

となる。第一門諸本は十二巻の外に灌頂の巻
 を立ててゐるもので、諸本中最も多數を占め
 てゐる。灌頂の巻は平曲傳授上の都合から、
 建禮門院に關する記事を秘曲として別に分立
 したものである。従つて發達の過程から見
 と、新しい姿であり、且つ或る目的のために
 人為的に施した作爲である。この部門に屬す
 るものは、一方系統の諸本であるが、その中
 で目ぼしいものを擧げてみると次のやうであ
 る。一方本と稱するのは平曲一方流の臺本で
 流布本のことであるが、これには片假名交り

あるが、古色を帯びて誤が少い。野村本は草
 野本に近い本と流布本とを六巻づつ併せたも
 ので完本ではない。嵯峨本に似て而も鏡卷を
 加へたものに藤波本があり、この同種に淺草
 文庫本・京師本がある。東京帝國大學本(舊藏)
 は、藤波本に似て少しく趣を異にし、永森本
 も藤波本に近くして異同があり、康豊本は京
 師本に似て「堂供養」の事を載せ、慶長本は
 一方本に似て「國綱の沙汰」を載せ、草野本は
 嵯峨本に似て國綱の事蹟を叙し、神宮文庫本
 は草野本に似て多少の異同がある。劍巻と鏡

一方系統本と趣を同じうしてゐる。源平盛衰
 記は四十八巻から成り、分量は十二巻本の約
 二倍半に及び、記載事項も三百八十四項ばか
 り増加し、著しく趣を異にしてゐるが、記事
 内容は延慶本・長門本と最も近似し、その四十
 八巻は灌頂の巻に相當してゐる。第二門は灌
 頂の巻に相當する内容を卷十二の終りに近い
 ところに一括してあるもので、これは灌頂の
 巻が別に分立する前の姿である。これに屬す
 るのは城一本であるが、この本はただ卷十二
 だけが現存してゐる零本であるけれども、灌

二 語 物 家 平

平家物語卷第一
 祇園精舎の鐘の聲 諸行無常の響
 おのほろほろ花の色 盛者衰者
 唯春の夜は 風の音の 夢の心
 先皇の政 治 平 家 物語

(藏氏之辰野高) 本別一覺藏舊家爵伯村大

平家物語卷第四
 并序 本朝四部合戦 收并三番 御等
 治承四年 正月元三 向鳥羽殿 無糸
 寄人 被許 勝中 綱言 成 寛元 京大 丈修
 寛西人 許 惟平 去 年 未 無 能 事 被 命 龍
 御在 悲 矣
 同日 春宮 御 禱 着 可 召 御 奠 味 花 色 事
 世 間 万 法 皇 祇 御 命 御 耳 外 表 也
 此 位 春 宮 今 年 僅 三 箇 年 何
 能 拍 恙 不 辨 在 被 奉 押 下 是 大

(藏氏朝宗村野) 本狀戦合部四寫書年八十正永

平家物語卷第六
 治承六年正月一日 ありし後のと
 りなりしを せうきりやうらん ぬり
 られて 皇 上 之 御 心 之 事 ありし
 一人も せんせられ 二日後 上の せんせ
 りし ぬりし せうきり せうきり せうきり
 せうきり せうきり せうきり せうきり
 せうきり せうきり せうきり せうきり

(藏館書圖大帝京東) 本院ノ中

平家卷第一
 祇園精舎 鐘の聲 諸行無常 響有 沙羅雙樹 花
 色 盛者 必衰 理 欽 奢 人 不 乏 只 如 春 夜 夢
 猶 者 終 止 偏 同 風 前 塵 遠 訪 異 朝 泰
 趙 高 漢 王 蜂 梁 朱 守 唐 祿 山 此 寺 皆 舊 主 先
 皇ノ 政 不 隨 完 樂 不 思 入 諫 天 下 乱 事 不 悟
 民間ノ 憂 不 知 不 之 減 者 也 近 伺 本 朝
 兼 平 將 門 天 慶 紙 安 康 和 義 親 平 治 信 賴 驕

(藏氏之辰野高) 本代屋

平家物語卷第一
 祇園精舎の鐘の聲 諸行無常の響
 おのほろほろ花の色 盛者衰者
 唯春の夜は 風の音の 夢の心
 先皇の政 治 平 家 物語

(大) 本句十二百

平家物語卷第一
 祇園精舎 鐘の聲 諸行無常 響有 沙羅雙樹 花
 色 盛者 必衰 理 欽 奢 人 不 乏 只 如 春 夜 夢
 猶 者 終 止 偏 同 風 前 塵 遠 訪 異 朝 泰
 趙 高 漢 王 蜂 梁 朱 守 唐 祿 山 此 寺 皆 舊 主 先
 皇ノ 政 不 隨 完 樂 不 思 入 諫 天 下 乱 事 不 悟
 民間ノ 憂 不 知 不 之 減 者 也 近 伺 本 朝
 兼 平 將 門 天 慶 紙 安 康 和 義 親 平 治 信 賴 驕

家平本語流田前

御在悲矣
同日春宮御侍者可召御英味花也事
世同丁罰法皇被命合御耳外表也
此位春宮今年僅三箇年何
能前怕恙不御在御奉押下是六

(藏氏朔宗村野) 本狀戦合部

平家物語第一
此位春宮今年僅三箇年何能前怕恙不御在御奉押下是六

(藏氏郎太雅島大) 本句十二百

平家物語第一
祇園精舎鐘聲暮行空
鐘聲暮行空
花也感著其理
顯人不久
春夜夢尚
殘極者
終滅不備
風前塵上
訪夫
朝者秦趙高漢
王莽樂周
大周
根山
星天
清
舊皇先皇
勢不臣
臣同
悲世亂
六文
進乃我朝
夫限軍
將門
大慶
休交
床和
乘觀
摩路
信賴
歸心
幸三
有
ケレト
運滅
能人事
能ト
天道
訪
ソナ
去武
巨靈
如し
猶也
況人
臣位
夫御
中慎

(藏氏治簡井松) 本慶延

色盛者必衰
理難奢
人不足
只如春夜夢
極者終亡
偏同風前
塵遠訪異朝
秦趙高漢
王莽梁朱
阜唐祿山
此等皆舊皇先
皇ノ政
不随完樂
不思入讓
天下乱事
不悟
民間ノ憂
不知
不之
滅者
也近伺本朝
兼手
將門天慶
純女康和
義親平治
信賴騷

(藏氏之辰野高) 本件

平家物語第一
祇園精舎鐘聲暮行空
鐘聲暮行空
花也感著其理
顯人不久
春夜夢尚
殘極者
終滅不備
風前塵上
訪夫
朝者秦趙高漢
王莽樂周
大周
根山
星天
清
舊皇先皇
勢不臣
臣同
悲世亂
六文
進乃我朝
夫限軍
將門
大慶
休交
床和
乘觀
摩路
信賴
歸心
幸三
有
ケレト
運滅
能人事
能ト
天道
訪
ソナ
去武
巨靈
如し
猶也
況人
臣位
夫御
中慎

平家物語第一
祇園精舎鐘聲暮行空
鐘聲暮行空
花也感著其理
顯人不久
春夜夢尚
殘極者
終滅不備
風前塵上
訪夫
朝者秦趙高漢
王莽樂周
大周
根山
星天
清
舊皇先皇
勢不臣
臣同
悲世亂
六文
進乃我朝
夫限軍
將門
大慶
休交
床和
乘觀
摩路
信賴
歸心
幸三
有
ケレト
運滅
能人事
能ト
天道
訪
ソナ
去武
巨靈
如し
猶也
況人
臣位
夫御
中慎

本語流野多波
(藏室究研語國大帝京東)

平家物語第一
祇園精舎鐘聲暮行空
鐘聲暮行空
花也感著其理
顯人不久
春夜夢尚
殘極者
終滅不備
風前塵上
訪夫
朝者秦趙高漢
王莽樂周
大周
根山
星天
清
舊皇先皇
勢不臣
臣同
悲世亂
六文
進乃我朝
夫限軍
將門
大慶
休交
床和
乘觀
摩路
信賴
歸心
幸三
有
ケレト
運滅
能人事
能ト
天道
訪
ソナ
去武
巨靈
如し
猶也
況人
臣位
夫御
中慎

(藏室究研語國大帝京東) 節正家平本語流田前

頂の巻が分立する過程を、よく示してある點で、重大な意義と價値とを有してゐるものである。第三門は灌頂の巻を立てず、建禮門院に關する記事は、卷十一・十二の然るべき箇所に收めてあるもので、古い自然の姿をなしてゐる。これに屬するものは八阪系統の諸本であるが、目ぼしいものは次のやうである。八阪本は平曲八阪流の臺本で一方本とは編次内容に著しい相違がある。灌頂の巻を立てず、

も、一卷十句、十二卷百二十句の組織を存するもので、帝國圖書館と京都府立圖書館とに所藏せられてゐる。南都本は現存八冊の關本であるが、普通本よりは内容が豊富であり、記載事項や辭句にも著しい特異な點がある。延慶本は六卷本を増補して内容を増大し、十二に區分しながら卷數だけはそのままに存してゐるもので、十二卷本に比すれば、記載事項も二百四十六項を増し、分量も殆ど二倍く

が、忠盛が鳥羽上皇の御信任を得て昇殿を許されてから、一門榮達の端緒が開かれ、次いで清盛が權勢の壇上に立つに至つてからは、自ら太政大臣從一位に上つたのを初めとし、一族皆顯官高位を占めて時めき榮えた。そして機會ある毎に、藤原氏や南都・北嶺・三井寺の佛徒たちに擁せらるゝ傳統的勢力團を抑壓した。こゝに於て不平の徒が東山鹿谷に集まつて、平家討滅の陰謀をめぐらした。然るに

は文覺上人の勸めにより、伊豆で兵を擧げたので、平氏は維盛・忠度等を大将として討手を差向けたところ、源氏の威勢に恐れ、戦はずして都に逃げ歸つた。南都の大衆も平氏に反抗のけはひがあつたので、清盛は重衡を遣はして攻めさせ、興福寺・東大寺を焼かしめた。木曾義仲は信濃に兵を起し、北國の平氏を征服して勢が盛んであり、九州や四國でも、平氏に背いて蜂起するものが續出した。よつて平

頂の巻が分立する過程を、よく示してある点で、重大な意義と価値とを有してゐるものである。第三門は灌頂の巻を立てず、建禮門院に關する記事は、卷十一・十二の然るべき箇所に收めてあるもので、古い自然の姿をなしてゐる。これに屬するものは八阪系統の諸本であるが、目ぼしいものは次のやうである。八阪本は平曲八阪流の臺本で一方本とは編次内容に著しい相違がある。灌頂の巻を立てず、劍卷・鏡卷等は、その存在すべき位置を示しながら、章句を載せてない。これに彰考館本・京都府立圖書館本・慶長書寫城方本・祕閣粘葉本等がある。中院本は平假名古活字版で、編次内容は八阪本と一致してゐるが、劍卷・鏡卷・宗論の三秘事を本文中に載せてゐる。東京帝國大學・内閣文庫・帝國圖書館等に所藏せられてゐるが、覺仙院本・西三條本・楠美家八阪本・寛永平假名古活字本・中院別本等も同系統に屬するものである。如白本は片假名寫本であつて中院本に似てゐるが、「堂供養」嚴島願文」などのあるのが特異な點で、彰考館の所藏である。東京帝國大學にも震災前には所藏せられてゐた。大前神社も同系統のものである。米澤本は如白本にやゝ似てゐるが、義經の最期の事を加へてあり、特異な趣がある。東寺執行本は、如白本に似てやゝ趣を異にするもので、現存四冊の關本である。鎌倉本は「參考源平盛衰記」に「一本」と稱するものであつて大體の組織が八阪本に近く、宗論は「流砂葱嶺の事」と題して卷六中に掲げ、卷十二の初めに「宗盛父子關東下向」を載せて居り、彰考館の所藏であるが、平松眞字本・屋代本・奈須本等もこの系統に屬するものである。百二十句本は、内容記事は鎌倉本に似てゐるけれど

も、一巻十句、十二巻百二十句の組織を存するもので、帝國圖書館と京都府立圖書館とに所藏せられてゐる。南都本は現存八冊の關本であるが、普通本よりは内容が豊富であり、記載事項や辭句にも著しい特異な點がある。延慶本は六巻本を増補して内容を増大し、十二に區分しながら巻數だけはそのままに存してゐるもので、十二巻本に比すれば、記載事項も二百四十六項を増し、分量も殆ど二倍くらゐになつてゐる。そして灌頂の巻を立てないで、八阪本と大體の組織を同じうしてゐるが、記事や辭句には著しい特色がある。長門本及び「源平盛衰記」と類似してゐるのは、寧ろこれ等の本が延慶本に據つたものらしい。久原文庫に所藏せらるゝのが最も古く、松井博士の所藏本はこれを複寫したものらしい。朽木文庫本は原本の一冊を四冊に分け、全四十八冊になつて居り、榎原本は朽木本を複寫したもので、二十四冊に分けてある。なほこの種の零本二冊が京都帝國大學にもある。第四門は零本で、性質不明なものであるが、これには南都異本と「源平闘争録」とがある。第五門は繪巻物で、「平家物語繪巻」がある。その他、天草出版の「平家物語抜書」があり、所在不明のものに、伊藤本・佐野本・飛鳥井本・生佛本・金澤本等があり、「平家物語」の秘事を抜き出して別冊としたものに、「平家物語奥祕」「平家宗論」「平家物語補闕鏡卷」「平家物語肝文」の卷「平家物語大祕書」などがあり、劍卷が獨立して發達したものに、古本平家物語劍卷・屋代本添附平家劍卷・平家物語補闕劍卷・平家物語劍卷等がある。

が、忠盛が鳥羽上皇の御信任を得て昇殿を許されてから、一門榮達の端緒が開かれ、次いで清盛が權勢の壇上に立つに至つてからは、自ら太政大臣位一位に上つたのを初めとし、一族皆顯官高位を占めて時めき榮えた。そして機會ある毎に、藤原氏や南都・北嶺・三井寺の佛徒たちに擁せらるゝ傳統的勢力團を抑壓した。こゝに於て不平の徒が東山鹿谷に集まつて、平家討滅の陰謀をめぐらした。然るにその事は未然に發覺して、關與者は悉く處分せられたが、その中で、西光法師は斬られ、新大納言成親は備前に流されて殺され、俊寛僧都・平判官康頼・丹波少將成經等は鬼界ヶ島に流された。清盛はなほ後白河法皇にも疑ひをかけて、幽閉し奉らうと企てたが、嫡子重盛に諫められて果さなかつた。次いで中宮御産御祈りのため大赦が行はれ、成經と康頼とは都へ召還されたが、俊寛だけは罪が重いとて取殘されて死んだ。重盛は父清盛の專横を憂ひ、一門の運命の長からざるべきを察し、熊野權現に死を祈つて薨去したので、清盛は憚るところなく、益々横暴を逞しうし、關白太政大臣以下、月卿雲客四十三人の官職を奪ひ、後白河法皇を鳥羽殿に幽し奉つた。しかのみならず、清盛の計らひとして、三歳の安徳天皇を御位に据ゑ奉り、天下の事を意のままに取行ふことになつたので、世にはその專横を憤るものが愈々多くなつた。治承四年五月、源頼政は高倉宮を奉じ、平家追討のため、先づ旗を擧げたが、機運がまだ熟してゐなかつたので、宇治に戦つて敗死し、高倉宮も流矢に中つて薨じ給つた。同年六月、清盛は都を福原に遷したが、事がうまく運ばないので、數ヶ月にして、また都を舊都に復した。源頼朝

は文覺上人の勸めにより、伊豆で兵を擧げたので、平氏は維盛・忠度等を大将として討手を差向けたところ、源氏の威勢に恐れ、戦はずして都に逃げ歸つた。南都の大衆も平氏に反抗のけはひがあつたので、清盛は重衡を遣はして攻めさせ、興福寺・東大寺を焼かした。木曾義仲は信濃に兵を起し、北國の平氏を征服して勢が盛んであり、九州や四國でも、平氏に背いて蜂起するものが續出した。よつて平氏は討手を差向けようとしてゐるところに、たま／＼清盛が熱病に罹つて薨去したので、追討の計畫も頓挫した。壽永二年四月、維盛・通盛等は、義仲を追討せんとて北國に向つたが、義仲のために俱利伽羅・篠原で散々に破られて都に還つた。義仲は平軍を追つて都近くに迫つたので、平家一門は主上を奉じて都を落ち、九州に赴いたけれども、源氏に妨げられて落着くことが出来ず、四國へ渡つて讃岐の屋島に居を定めた。義仲は都へ入つたが、鼓判官の譏奏を憤り、法住寺殿を犯して狼藉した。頼朝は義仲の狼藉を鎮めんとて、その弟範頼・義經に大軍を託して西上させた。義仲はこれを宇治・勢多に防いだが、敗れて粟津に戦死した。平家はその後、攝津一の谷に據つて城を構へたが、範頼・義經がこれを攻めて陥れたので、平家は敗れて四國の屋島へ逃れた。この役で、通盛・忠度・經正・敦盛・經俊・知章・師盛・業盛・清房・清定等は戦死し、重衡は捕へられて鎌倉に送られた。維盛は屋島の館を脱して高野山に瀧口入道を訪ひ、出家して那智の沖で入水した。壽永四年二月、義經は暴風を冒して四國へ渡り、屋島を襲撃したので、平家は敗れて長門へ逃れた。翌月、平家は義經に追撃せられ、壇の浦で防戦したが、敗れ

たので、二位の尼は安徳天皇を抱き奉つて入水し、一門これに殉ひ、平家はこゝに滅亡した。建禮門院は入水し給うたのを源氏の兵に引上げられ給ひ、宗盛・時忠・信基・時實以下、三十八人ばかりは捕へられた。義経は神器を奉じ、建禮門院を伴ひ奉り、宗盛以下の人々を具して都に入つたが、更に宗盛父子を護送し、鎌倉へ向つて東下した。然るに頼朝は、義経を忌み、金洗澤に關するて、宗盛父子を請取り、義経を追ひ返した。よつて義経は陳情して苦衷を訴へたけれども、聽かれなかつた。頼朝は宗盛父子を斬らしめ、かねて抑留中の重衡をも南都へ渡して處刑せしめ、時忠以下を流罪に處した。土佐房昌俊は頼朝の旨をうけて義経を夜討したが、失敗して殺された。義経は危険を感じて都を落ち、吉野に隠れたが、更に奥州へ下つた。六代御前は捕へられ、文鏡上人の請によつて一旦宥されたが、後再び捕へられて斬られた。(以下は灌頂の卷の内容)。建禮門院は吉田にて御出家の上、大原の寂光院に入ら給ひ、先帝や一門の人々の御菩提を申うて往生の素懷を遂げ給うた。

【解説】「平家物語」は、歴史や文學として重んぜられた上、平曲としてもはやされたものであるから、それを語る上の都合から、記事を脱漏したり、編次を改修したりしてあるところがあるが、その最も著しいのは、「秘事」と「灌頂の卷」である。秘事には大小があり、(一)祇園精舎(巻一巻頭)、(二)延喜聖代(巻五「朝敵擲」の次にあるべきもの)、(三)宗論(巻十一「高野卷」の次にあるべきもの)、(四)劍卷(巻十一「内侍所都人」の次に)、(五)鏡卷(巻十一「二門大路被渡」の次に)を大秘事とし、(一)を除けば、他は何れも普通本には脱漏してある。

しかし異本の中には、これ等の事項を本来あるべき位置に載せてあるものも少くない。「灌頂の卷」は、(一)女院御出家(巻十一「副將被斬」の前に)、(二)女院大原入(巻十二「平大納言被流」の次に)、(三)大原御幸(巻十二「六代」の次に)、(四)六道の沙汰(同前)、(五)女院御往生(同前)等を収めたもので、第一門諸本はこれを十二卷の外に立ててある(但し、長門本は卷二十八にこれを収め、「源平盛衰記」は、卷四十八をこれに當ててある)が、第三門諸本は、右の各項は、括弧内に示してあるやうに、それぞれ然るべき箇所収めてある。この物語の結構を見るに、これを二部に分けると、前半六卷には平家一門の榮華を叙し、後半六卷にはその没落を寫してある。更にこれを三部に分けて見ると、卷一から卷五までは平家の全盛を叙してあるが、この部では清盛が中心人物であり、重盛が副となつてゐる。卷六から卷八までは清盛の薨去を界として、一門の運命が傾き初め、都を落ちて諸方に流離する過程を寫してあるが、源氏では義仲が主として活動してゐる。卷九から卷十二までは一門が滅亡する次第を叙してあるが、源氏の方では義仲が滅び、義経が主として活動してゐる。本書全篇の主材は、固より源平の争亂であるけれども、平家一門の興亡榮枯が叙事的主流をなして居り、而もその没落破滅を叙してあるところに眼目があつて、一篇の大團圓をなしてゐる。それで、物語に於ては、源氏の一族は、シテなる平氏に對して、ワキの役を演じて居り、藤原氏及び南都北嶺等の勢力團を點出してあるのも、中心叙事の進展を補助するワキツレの役を務めてゐるに過ぎない。平家一門が相率ゐて九天の上昇り、二十餘年

の榮華を擅にして、やがてまた九地の下に落ち、眷族を擧げて壇の浦の藻屑と消え果てた始終は、事實そのまゝが絶好の戯曲をなしてゐるのに、作者は更に多分の空想を配して、これを一層劇化し、詩化してゐるので、榮枯常なく、盛衰掌を反すやうな、哀れにはかなく痛ましい人生の相が如實にあらはれてゐる。そして、かういふ過程は、ひとり中心的叙事の上にはあらはれてゐるだけでなく、その助成してゐる幾多の小事相の上にも見られるのである。藤原成親・俊寛僧都・源賴政・木曾義仲・源義經などは、何れも華やかに時めいて、哀れにはかなく滅びたものであつて、とりとくに哀絶なる悲響を傳へ、坐ろに涙を催さしむるものがある。その他、傑僧文覺の流離、さては祇王・祇女・佛御前の中に纏はる榮枯の因縁、奏前小督局の艶に哀れなる境涯、時頼と横笛とを永遠に隔てた悲戀の宿世など、すべて運命の手に翻弄せられて、痛ましい徑路を辿つてゐるものであるが、これ等は何れも平家一門の運命をさながら縮圖にしたものである。従つて本書の冒頭に、「祇園精舎の鐘の聲、諸行無常の響あり、沙羅雙樹の花の色、盛者必衰の理を顯す云々」といつてあるのは、實に全篇を貫いてゐる主旨を標榜してゐるものであつて、これを發端に掲示し、一篇の歸趣を明かにしてゐるものといはなければならぬ。

源平の争亂を主題とするこの物語には、到るところに力の發動があり、衝突があり、力に對する禮讚があり、信賴があり、多くの物事は力によつて解決されてゐる。併しこの力は正義と本務とに立脚した力であり、源平兩軍とも名分や名譽を重んじ、欺騙や卑怯を賤しんだ。それで、披流先陣の功名にあせるとか、

目ぼしい敵と組打して手柄を樹て、名を揚げるとかいふことが、當時の武士に共通なる念願であり、筆者も亦、これに對して滿腔の同情を傾けて熱筆を揮つてゐる。併し、決して合戦描寫に始終してゐるものではなく、「力」と相並んで「愛」を強調し、禮讚してゐる。そしてこの愛は、義理と結びついて君臣・親子・夫婦の間に、強烈豐潤に發動し、深刻なる闘戰の叙事と相對峙してそれを和げ、殺伐陰慘なる氣分を減殺し、優しく、明るく、清い情調風味を齎し、人生を修羅の巷から、安養淨土へと導いてゐる。殊に「平家物語」にあらはれたる女性は、多く平家の一門であつて、殆どすべて平安朝式の色彩を帯びて居り、而もそれは、急角度で降下する悲しい運命に引摺られ、境遇の逆轉によつて捲き起された、はかなき愛の破綻、主従・親子・兄弟・夫婦の間における哀別離苦、一家一族の分散流離など、さまざまな苦しい現實に痛めつけられ、もがきつゝ淪滅の淵に沈んで行くのであつて、殆どすべてが、はかない殉情的薄命者の面目を具へてゐる。平家の人々は平安貴族の轍を履んでゐるだけに、情愛によつて人生を美化してゐることの著しいのは勿論であつて、優美可憐なる情話は隨所に興趣をそゝつてゐる。なほこの情愛は人倫以外の生活事象や自然の風物などに向つても發動し、そこに情趣の世界を展開し、藝術的の觀照を擅にしてゐることが多い。平家の人々は、武人であると同時に貴族であり、詩人であり、樂人であつた。それで、日常生活において、花を愛し、月を賞し、詩歌を吟詠し、管絃を弄んだのはいふまでもなく、闘戰に従事して寧日なき兵馬倥傯の間にも、山水花月を觀賞し、歌に託して

幽懷哀情を抒べ、琵琶や笛を携へて憂悶を遣り、破滅の運命が眼前に迫つてゐるのを殆ど忘れてゐる。従つて彼等は、その生活のみならず、殺伐なる闘戰までも美化し、藝術化してゐるので、これを題材として創作せられた「平家物語」は、豪華絢爛、優雅哀絶なるさまさまの色彩情調に描き成された一篇の繪卷であり、諸行無常盛者必衰の理法を強調した人生の哀詩であり、「雄々しさ」と「ものあは

ことである。佛教は、本来、信仰を勧め、解脱を目標とするものであるのに、當代においては、道徳的色彩が加味せられてゐるので、「平家物語」においても、發心求道の便が、やがて勤善修行の媒となり、眞を求むる心が善を求むる心と一致してゐる場合が多い。敬神の信念は崇祖の精神と結びついて、肇國以來我が國民の内面生活を支配する有力なる事項となつてゐるが、この觀念も平家の全篇を貫い

て、また國民文學の代表的名作として、廣く國民の間に愛讀せられた上、語り物として琵琶に合せて語られ、その普及が一層助成せられたから、この物語に對する國民の感銘愛着は白熱の域に入つた。従つてこれが後代文學に及ぼした影響の如きも、頗る甚大なるものがあり、この物語から取材してゐる作品だけでも、優に數百種に上るであらう。後出の戦記物語たる「太平記」「義經記」「曾我物語」(各別

め、浮世草子に「寛瀧平家物語」「風流今平家」「義經風流鑑」(各別項)、「忠盛祇園櫻」「略平家都遷」「風流平家」「風流西海硯」(別項)、「優源平歌袋」その他十數篇、草雙紙類では、黒本に「門出八鳥」「義經一代記」「義經千本櫻」「平家女護島」「實盛本末記」、青本に「義經八鳥軍談」「奈須與市扇の的」「源家武功記」「源平合戦記」「壇浦二人教經」「義經一代記」その他十餘篇、黄表紙に、「頼政名歌芝」「畫解平家物語」「二人義

であるからそれを語る上の都合から、記事
を脱漏したり、編次を改修したりしてあると
ころがあるが、その最も著しいのは、「秘事」と
「灌頂の巻」とである。秘事には大小があり、
（一）祇園精舎（巻一巻頭）、（二）延喜聖代（巻五
「朝敵捕」の次にあるべきものを小秘事とし、（三）
宗論（巻十高野巻の次にあるべきものを）、（四）劍
巻（巻十二内侍所御入の次に）、（五）鏡巻（巻十一
「二門大路被渡の次に）を大秘事とし、（一）を除
けば、他は何れも普通本には脱漏してある。

本書全篇の主材は、固より源平の争亂である
けれども、平家一門の興亡榮枯が叙事的主流
をなして居り、而もその没落破滅を叙してあ
るところに眼目があつて、一篇の大團圓をな
してゐる。それで、物語に於ては、源氏の一
族は、シテなる平氏に對して、ワキの役を演
じて居り、藤原氏及び南都北嶺等の勢力團を
點出してあるのも、中心叙事の進展を補助す
るワキツレの役を務めてゐるに過ぎない。平
家一門が相率ゐて九天の上昇り、二十餘年

全篇を貫いてゐる主想を標榜してゐるもので
あつて、これを發端に揭示し、一篇の歸趣を
明かにしてゐるものといはなければならぬ。
源平の争亂を主題とするこの物語には、到る
ところに力の發動があり、衝突があり、力に
對する禮讃があり、信賴があり、多くの物事
は力によつて解決されてゐる。併しこの力は
正義と本務とに立脚した力であり、源平兩軍
とも名分や名譽を重んじ、欺騙や卑怯を賤し
んだ。それで、披瀝先陣の功名にあせるとか、

なる情話に隨所に興趣をそよつてゐる。なほ
この情愛は人倫以外の生活事象や自然の風物
などに向つても發動し、そこに情趣の世界を
展開し、藝術的の觀照を擅にしてゐることが
多い。平家の人々は、武人であると同時に貴
族であり、詩人であり、樂人であつた。それ
で、日常生活において、花を愛し、月を賞し、
詩歌を吟詠し、管絃を弄んだのはいふまでも
なく、開戦に従軍して學日なき兵馬倥傯の間
にありても、山水花月を觀賞し、歌に託して

幽懷哀情を抒へ、琵琶や笛を携へて憂悶を遣
り、破滅の運命が眼前に迫つてゐるのを殆ど
忘れてゐる。従つて彼等は、その生活のみな
らず、殺伐なる闘戦までも美化し、藝術化し
てゐるので、これを題材として創作せられた
「平家物語」は、豪華絢爛、優雅哀絶なるさまざ
まの色彩情調に描き成された一篇の繪巻で
あり、諸行無常盛者必衰の理法を強調した人
生の哀詩であり、「雄々しさ」と「ものあは
れ」と、「力」と「愛」と、「貴族」と「武家」と、
「文」と「武」と、「舊思潮」と「新思潮」と、對蹠
的な兩要素が、或は對抗し、或は混淆して、そ
こに一種の對照美・錯綜美・調和美を發揮して
ゐるのが認められる。又この物語には、多數
の國民的傳説を配合し、事件の發展や人物の
活動なども、著しく國民劇的に仕組まれ、國
民的な思想・信仰・趣致などが豊富にあらはれ
てゐる。従つてこの物語は、最もよく國民的
の特色を發揮し、我が國における國民文學の
代表作品と目せらるゝに至つてゐる。加之、
神道・武士道・儒教などによつて培はれ、著し
く複雑化深刻化せられてゐる時代思潮は、當
代人士を驅つて、感情本位から理智本位へ、
趣味から思索へ、美から眞へと轉向を強要し
た。従つて「平家物語」にあらはれた精神的歸
趣も、感情や趣味の中に、理智的・思索的な分
子を多分に加増して居り、自然や人生に對す
る觀照態度の如きも、主觀的から客觀的への
轉向の兆が明かに現はれてゐる。従つて、「平
家物語」には、隨所に教訓的な挿話を挿入した
り、感想評論などの文中に、教訓的な口吻を
弄してゐることの多いのは、この傾向のあら
はれと見られるが、殊に注意すべきは、尊王
忠君の大義に關する意識が強調せられてゐる

ことである。佛教は、本來、信仰を勧め、解脱
を目標とするものであるのに、當代において
は、道徳的色彩が加味せられてゐるので、
「平家物語」においても、發心求道の便が、やが
て勸善修徳の媒となり、眞を求むる心が善を
求むる心と一致してゐる場合が多い。敬神の
信念は崇祖の精神と結びついて、肇國以來、我
が國民の内面生活を支配する有力なる事項と
なつてゐるが、この觀念も平家の全篇を貫い
て現はれ、幸運成功は神明の擁護利生に歸し、
不幸失敗はその冥罰の然らしむる所としてゐ
る。殊に氏神は、それに所屬せる氏族を専ら
擁護するものとなつてゐるから、氏族と氏神
との關係は、一層緊密に寫されてゐる。なほ
この時代においては、神佛混淆の思想が普及
し、崇佛の念は敬神の思想と合流してゐたか
ら、物語においても、神に對する場合と同様
に、佛の擁護利生又は冥罰を受け、感應を忝
うする過程が少くない。その他、因果應報の
觀念や輪廻轉生思想も隨所にあらはれ、死ん
で淨土に往生し、又は地獄に墜ちて呵責に苦
しみといふやうな來世の見地も到るところに
あらはれてゐる。従つて時人は、臨終の際に
は、大抵念佛又は讀經して淨土往生の素懷を
披瀝し、三尊の來迎引攝を欣求するのが常で
ある。「平家物語」の文章は、漢文脈と和文脈
とを適當に配合調和した謂はゆる和漢混淆文
であり、而もその中には、漢語・佛語・雅語・俗
語等を自由に豊富に取入れ、雄剛勁健の中に、
優雅・絢爛・流麗・暢達な趣を宿し、詩的劇的の
興趣の豊かな内容と相俟つて、極度に形象美
を發揮し、文章史上、劃期的の成功を収めて
ゐる。

て、また國民文學の代表的名作として、廣く
國民の間に愛讀せられた上、語り物として瑤
琶に合せて語られ、その普及が一層助成せら
れたから、この物語に對する國民の感銘愛着
は自熱の域に入つた。従つてこれが後代文學
に及ぼした影響の如きも、頗る甚大なるもの
があり、この物語から取材してゐる作品だけ
でも、優に數百種に上るであらう。後出の戰
記物語たる「太平記」「義經記」「曾我物語」(各別
項)などが、「平家物語」から系統を引いて、一
生面を開いたものであることはいふまでもな
く、「明德記」「結城戰場物語」「大塔物語」「石山
軍記」「難波戰記」以下、室町時代から江戸時代
へかけて續出した幾多の軍記類も「平家物語」
の流を汲んでゐる。戯曲の方面について見る
に、謡曲には「兼平」(木曾物の謡曲参照)「千手」
「頼政」「實盛」「忠度」「俊寛」「八島」「通盛」「敦
盛」「六代」「内府」「月見」「紅葉」「横笛」「大原御
幸」(平家物の謡曲・源氏物の謡曲参照)その他七十
餘番があり、狂言には「ひめ糊」「通圓」「那須與
一」「横坐」など散見してゐるに過ぎないが、幸
若舞曲には「硫黄島」「木曾願書」「腰越」「四國
落」「八島」「祇王」「堀河夜討」「築島」「文覺」(各
別項)など十番ばかりあり、影響の率は、作品總
數の四分の一以上に及んでゐる。淨瑠璃では、
「淨瑠璃十二段草子」(別項)「源平兵者揃」(頼朝
伊豆日記)「加賀國篠原合戦」(門出八島)(別項)
「凱陣八島」(別項)「弓勢智勇湊」(新版腰越狀)
「南蠻鐵後藤目貫參照」(大原問答青葉笛)(大原問
答參照)「平家女護鳥」(別項)「御所櫻堀河夜討」
(別項)「義仲勳功記」(津平三郎)「清和源氏十五
段」その他四十餘曲がある。小説の方面では、
御伽草子類に、「横笛草紙」(別項)「八島尼公物
語」(六代御前物語)(別項)など散見するのを初

め、淨世草子に「寛平平家物語」「風流今平家」
「義經風流鑑」(各別項)「忠盛祇園櫻」(略平家都
遷)「風流平家」(風流西海硯)(別項)「優源平
歌袋」その他十數篇、草雙紙類では、黒本に「門
出八島」「義經一代記」「義經平本櫻」「平家女護
鳥」「實盛本末記」、青本に「義經八島軍談」「宗
須與市扇的」「源家武功記」「源平合戦記」「壇
浦二人教經」「義經一代記」その他十餘篇、黄表
紙に、「頼政名歌芝」「畫解平家物語」「二人義
經堀川合戦」「源平合戦記」「源平布引瀧」「木曾
義仲一代記」その他十餘篇、合巻に、「清盛一
代記」「義仲一代記」「義經一代記」「源平はちか
づき姫」「昔語兵庫築島」「裕鏡女俊寛」「谷青
葉後記」「義仲旭軍配」その他二十餘篇、讀本實
録に、「俊寛備前物語」(別項)「義經勳功記」(西
海波間の月)「義經磐石傳」「花實義經記」「兵庫
築島傳」「木曾將軍義仲記」その他十餘篇等頗
る多い。次に、「平家物語」のどのいふ部分が、
後代文學に最も多く影響を及ぼしてゐるかとい
ふことを見るに、「宇治川」「木曾最期」「那須
與市」「嗣信最期」「土佐房切られ」「橋合戦」「敦
盛最期」「壇浦合戦」「判官都落」「二度の駐等、
物語の内容のうち、最も興味深い箇所である
から、これ等の部分の影響が多であるのは
怪しむに足りないが、これに次いで、「俱利伽
羅落」「先帝御入水」「能登殿最期」「實盛最期」
「伊豆院宣」「二門都落」「忠度都落」「逆櫓」「祇
王」「宮御最期」「逆落」「入道逝去」「經島」「腰
越」「木曾願書」等の影響の多いのも亦、その事
相が或は哀れに、或は花々しくして、人の感興
をそよることが強いためであらう。なほ形式
上の影響について見るに、「平家物語」の文章
は、流麗優雅にして著しく音律的であるが故
に、謡曲や淨瑠璃などの戯曲類には、よく襲

いけも

用せられて居り、殊に「重衡東下」の道行文の筆致を適用してゐるところが多い。また小説類の作品中にも、「平家物語」の文體を模倣したものや、それを振つて「平家物語」に擬したものなどが少からずある。その他、「平家物語」の名稱までも襲用して、「寛潤平家物語」「風流平家」(以上浮世草子)(各別項)「風流平家」「畫解平家物語」(實表紙)「御伽平家」(讀本)などと云つてゐるものもある。

【参考】参考源平盛衰記今井弘濟考訂・内藤貞顯重校 ○平家物語抄(國文註釋全書所收) ○平家物語考證野宮定基編(同上) ○平家物語標注平道樹 ○平家物語聞書 ○平家物語攷 ○平家物語考岡本保孝 ○平家物語問答抄(國文註釋全書) ○平義器談伊勢貞丈 ○五武器談同上 ○平家勘文錄 ○平家相傳大綱 ○平家物語評判秘傳抄 ○平家物語備考黒川春村 ○平家物語評判瑕類適竹繁直 ○平家物語類語(輪地叢書) ○平家物語類字 ○平家物語類標 ○平家物語につきての研究國語調査會 ○校定平家物語山田孝雄・高木武 ○平家物語略解御橋重言 ○平家物語講義今泉定介 ○平家物語評釋内海弘義 ○平家物語通解赤堀又次郎 ○評釋平家物語梅澤和軒 ○平家物語評釋阪口玄章 ○新註平家物語石村貞吉 ○平家物語全釋石川佐久太郎 ○平家物語山田孝雄 ○平家物語藤村作 ○平家物語史論館山漸之進 ○平家音楽史同上 ○軍記物語研究五十嵐力 ○戰記物語の研究高木武(日本文學講座) ○平家物語の考察 友枝照雄(岩波講座日本文學) ○平曲沼澤龍雄(同上) ○平家物語と時代精神沼澤龍雄(日本文學聯講) ○平家物語源平盛衰記は誤謬多し 星野恒(史學雜誌九ノ一) ○平家物語源平盛衰記考同上(同誌一ノ五) ○平家物語異本の研究 山田孝雄(興術大正四ノ七)

くさげ

○平家物語諸本一覽同上(同誌大正四ノ一) ○國民的叙事詩としての平家物語 生田弘治(帝國文學二ノ三・五) ○叙事詩としての平家物語 岩野泡鳴(文章世界五ノ一四) ○亡族史平家物語を讀む 菊池謙蔵(中央美術雜誌一ノ五) ○平家物語管見長尾素枝(國學院雜誌三ノ三) ○平家物語詞曲談 梅澤和軒(新小説一三ノ三) ○平家物語雜觀中村孝(黒潮三ノ二) ○平家特有の叙事法内海月枝(文章世界三ノ九) ○平家物語に現れたる女性の一考察 峯尾格(國語教育一三ノ四) ○平家物語の典故ありと思はるゝ文に就て御橋重言(國語と國文學三ノ一) ○諸書に引かれたる平家物語につきて 後藤丹治(藝文二ノ二) ○忠度集と平家物語志田義秀(二ノ三・五・七・八) ○平家物語著述の資料に就て 後藤丹治(藝文一四ノ四一) ○平家物語灌頂卷と與義抄灌頂卷 橋本進吉(國語と國文學三ノ一) ○平家物語と太平記との關係高木武(わか竹八ノ一八) ○平家物語に關係する傳説志田義秀(東亞之光二ノ三) ○小松内府の心事内藤弘聖(國學院雜誌二ノ七) ○平家物語の小督 吉田勿來(新小説一ノ八) ○小督と大原御幸 島津久基(國語と國文學三ノ一) ○實定と小侍從兒山信一(書樹三ノ七) ○平家物語と時代精神沼澤龍雄(國語と國文學三ノ一) ○平家物語者が見た過渡時代のあはれ 内海月枝(わか竹七ノ一) ○平家物語延慶本長門本源平盛衰記の關係につきて 高木武(東亞之光二ノ八) ○長門本平家と盛衰記との關係後藤丹治(藝文一五ノ二) ○根來平家物語と他書との關係野村八良(史學雜誌二ノ四) ○南部本平家物語考 友枝照雄(藝文四ノ六) ○天草本平家物

語抄 龜井高孝(藝文一七ノ九一) ○平家物語の斷簡中村直勝(藝文一三ノ四) ○慈心坊の説話と冥途蘇生記 後藤丹治(藝文一六ノ七) ○天草吉利支丹版の平家物語抜書及其編者新村出(南蠻廣記) ○戰記物語に現れた清盛と重盛 高木武(わか竹七ノ七八・一〇・一一) ○長門本平家物の原本に就て中島正國(國學院雜誌三ノ二) ○平家物語出典の研究 後藤丹治(國語と國文學六ノ二・三・五) ○平家物語出典の研究 追記 後藤丹治(同誌六ノ六) ○平家物語中の逸話に偽作多し 上田恭輔(帝國文學二六ノ二) ○平家物語と源平盛衰記との關係に就いて 津田左右吉(史學雜誌二六ノ七) ○平家物語の註釋及び研究 後藤丹治(國語と國文學三ノ一) ○武人としての平家の人々 山田孝雄(新公論大正五ノ一) ○平家物語に出でたる浄土眞宗の名稱につきて 御橋重言(無盡燈大正四ノ一) ○平家物語の一異本野村八良(史學雜誌四三ノ六) ○平家物語と源平盛衰記 高木武(國語と國文學一〇ノ一) ○國文學比較研究號 (高木武)

ある事由を明かにしてある。また後編に於ては「平家物語」の語法に關する詳細なる研究を試みてある。

平家物語の語法

【著者】國語調査委員會(但し同會補助委員山田孝雄、専らこれを擔當す) 【刊行】大正三年十二月 【内容】本書は「國語史料」平家物語につきての研究の後編である。前編「平家物語考」に於て「平家物語」の諸本中、延慶本「平家物語」のみが鎌倉時代の形を存してゐることの確實であることを考證し、後編即ち本書は、延慶本「平家物語」の語法について調査した結果を叙したものである。(一)序説(延慶本を用ふることの理由、延慶本の異體字、用例の異様な文字について記してゐる)。(二)假名遣と發音との大要。(三)名詞。(四)代名詞。(五)數詞。(六)形容詞。(七)動詞。(八)助動詞。(九)副詞。(一〇)接續詞。(一一)感動詞。(一二)助詞。(一三)音便。(一四)語の位格。(一五)句の組織。(一六)句の用法。最後に本書に記した所を概括して述べてゐる。

【研究號】(高木武) ○平家物語と源平盛衰記 高木武(國語と國文學一〇ノ一) ○國文學比較研究號 (高木武) ○平家物語につきての研究 三冊 【作者】本書は國語史料(鎌倉時代之部)として臨時國語調査會で研究・編纂せられたものであるが、研究編纂の當事者は、山田孝雄博士である。【解説】本書は前編(一冊)と後編(二冊)とに分れてゐるが、前編に於ては、鎌倉時代語法研究上の對象として「平家物語」を選び、その諸本七十を十七類三十種に分類し、それに解説を加へて比較検討し、その系統上の關係を論じ、「平家物語」の組織並に成立・變遷・作者等について、精細なる研究を試み、現存諸本のうち、鎌倉時代の國語史料として採るべきは、延慶本だけで

ある事由を明かにしてある。また後編に於ては「平家物語」の語法に關する詳細なる研究を試みてある。

平家物語の語法

【著者】國語調査委員會(但し同會補助委員山田孝雄、専らこれを擔當す) 【刊行】大正三年十二月 【内容】本書は「國語史料」平家物語につきての研究の後編である。前編「平家物語考」に於て「平家物語」の諸本中、延慶本「平家物語」のみが鎌倉時代の形を存してゐることの確實であることを考證し、後編即ち本書は、延慶本「平家物語」の語法について調査した結果を叙したものである。(一)序説(延慶本を用ふることの理由、延慶本の異體字、用例の異様な文字について記してゐる)。(二)假名遣と發音との大要。(三)名詞。(四)代名詞。(五)數詞。(六)形容詞。(七)動詞。(八)助動詞。(九)副詞。(一〇)接續詞。(一一)感動詞。(一二)助詞。(一三)音便。(一四)語の位格。(一五)句の組織。(一六)句の用法。最後に本書に記した所を概括して述べてゐる。

る。形容詞に於ては「ナシ」の用法が擴大せられた事及び「御」を形容詞に冠する用ひ方は、近世の用法の先蹤をなすものである。助動詞に於ては語尾のムがウに轉じたものが多い。副詞に於ては擬聲の語が頗る多いのは興味ある事である。助詞に於ては、ガ、ヘ、ニ、バン等が注意すべきものである。その他、句法に於ても、義仲に關する章には田舎詞が用ひられてゐる如きは注意すべきことである。【價値】

政「俊成忠度」「忠度」「知章」「通盛」「清經」「源平」「千手」「盛久」「大原御幸」及び敦盛物(別項)景清物(別項)がある。【諸本】現行諸流諸本。諸曲叢書・國民文庫・日本文學大系 諸曲三百五十番集(日本名著全集)所收。【祇王】四番目「作者」不明(能本作者註文)「名稱」喜多流では「二人祇王」といつた。「内容」清盛の寵を専らにしてゐた祇王は、清盛にお目にかゝりたいといつて推參して斥けら

界島に流された流人のうち、丹波少將成經(ツツ)と平判官康頼(ツツ)は島に熊野權現を勧請して信心してゐたが、今一人の俊寛(シテ)は谷水を桶に入れて持ち、二人を迎へに行つて、酒のない島で、水の酒宴を催した。そこへ早船が着いて、都から赦免使(ツツ)が来た。中宮御産の御祈りのために非常大赦が行はれ、丹波少將と平判官とが赦免されたのである。俊寛は自分獨り洩れる筈がないと思つて、赦免

は歎かせ給ひ、使(ツツ)を遣して仲國(前シテ)にその行方を尋ねるやうに仰せ出された。仲國は畏つて出立した。嵯峨では、小督(ツツ)が琴を弾いて思ひを慰めてゐると、仲國(後シテ)が折柄十五夜の月を幸ひに彼方此方と尋ね歩いた末、琴の音によつて小督の在家を見出し、懇慮を傳へ、小督の返り事を受け、名残の宴に男舞を舞つて、やがて都に立ち歸るといふ曲。【題材】「平家物語」卷六「小督の事」

吉○平家物語全釋石川佐久太郎○平家物語山田孝雄○平家物語藤村作○平家物語史論館山漸之進○平家音楽史同上○軍記物語研究五十嵐力○戦記物語の研究高木武(日本文学講座)○平家物語の考察友枝照雄(岩波講座日本文学)○平曲沼澤龍雄(同上)○平家物語と時代精神沼澤龍雄(日本文学講座)○平家物語源平盛衰記は誤謬多し星野恒(史学雑誌九ノ一)○平家物語源平盛衰記考同上(同誌一ノ五)○平家物語源平の研究山田孝雄(典籍大正四ノ七)

幸島津久基(國語と國文学三ノ一)○實定と小侍從兒山信一(書齋三ノ七)○平家物語と時代精神沼澤龍雄(國語と國文学三ノ一)○平家物語の關係について高木武(東亞之光二ノ八)○長門本平家と盛衰記との關係後藤丹治(藝文一五ノ二)○根來平家物語と他書との關係野村八良(史学雑誌二六ノ四)○南部本平家物語考友枝照雄(藝文四ノ六)○天草本平家物語

語史(鎌倉時代)として臨時國語調査會で研究・編纂せられたものであるが、研究編纂の當事者は、山田孝雄博士である。【解説】本書は前編(二冊)と後編(二冊)に分れてゐるが、前編に於ては、鎌倉時代語法研究上の對象として「平家物語」を選び、その諸本七十を十七類三十種に分類し、それに解説を加へて比較検討し、その系統上の關係を論じ、「平家物語」の組織並に成立・變遷・作者等について、精細なる研究を試み、現存諸本のうち、鎌倉時代の國語史料として採るべきは、延慶本だけで

は歎かせ給ひ、使(ワキ)を遣して仲國(前シテ)にその行方を尋ねるやうに仰せ出された。仲國は長つて出立した。嵯峨では、小督(ツレ)が琴を弾いて思ひを慰めてゐると、仲國(後ジテ)が折柄十五夜の月を幸ひに彼方此方と尋ね歩いた末、琴の音によつて小督の在を見出し、歡喜を傳へ、小督の返り事を受け、名残の宴に男舞を舞つて、やがて都に立ち歸るといふ曲。「題材」「平家物語」卷六「小督の事」に據つた。二段劇能。五流現行。

る。形容詞に於ては「ナシ」の用法が擴大せられた事及び「御」を形容詞に冠する用ひ方は、近世の用法の先蹤をなすものである。助動詞に於ては語尾のムガウに轉じたものが多い。副詞に於ては擬聲の語が頗る多いのは興味ある事である。助詞に於ては、ガ、ヘ、ニ、バシ等が注意すべきものである。その他、句法に於ても、義仲に關する章には田舎詞が用ひられてゐる如きは注意すべきことである。【價值】本書は前編に於て七十餘種の異本を具さに研究し、その基礎研究の上に立つて、一に實例の上から歸納したものであつて、その研究の結果は十分信頼するに足り、その研究方法は、文獻を主とする言語研究に資する所が多い。本書は國語史研究上極めて重要な一つの礎石を据えたものと云ふべきである。【編田】

政「俊成忠度」忠度「忠度」通盛「清經」(磯瀨)「千手」盛久「大原御幸」及び敦盛物(別項)景清物(別項)がある。【諸本】現行諸流諸本。諸曲叢書・國民文庫・日本文学大系・諸曲三百五十番集(日本名著全集)所収。

界島に流された流人のうち、丹波少將成經(ツレ)と平判官康頼(ツレ)は島に熊野權現を勧請して信心してゐたが、今一人の俊寛(シテ)は谷水を桶に入れて持ち、二人を迎へに行つて、酒のない島で、水の酒宴を催した。そこへ早船が着いて、都から赦免使(ワキ)が来た。中宮御産の御祈りのために非常大赦が行はれ、丹波少將と平判官とが赦免されたのである。俊寛は自分獨り洩れる筈がないと思つて、赦免の状を繰返して見たが、その名は記されてゐない。俊寛は泣いた。やがて成經・康頼は、赦免使に促されて舟に乗つた。俊寛も乗らうとしたが、赦免使は許さない。舟は出て行く。待てよ、と叫んだが、舟は次第に遠ざかつて行つたといふ曲。「題材」「平家物語」卷二「卒都婆流の事」、卷三「赦免の事」「足摺の事」に據つた。一段劇能。五流現行。

【熊野】三番目【作者】世阿彌(能本作者註文。二百十番謡目録)。「内容」遠江國池田の宿の長熊野は平宗盛の愛妾であつたが、國の老母が病氣なので、屢々暇を請うたが許されない。今度はまた國から朝顔(ツレ)が老母の文を持つて来て暇を願つたが、やはり許さないで、そのまゝ清水へ花見に連れ出した。やがて酒宴が開かれる。熊野が舞を舞つてゐると、村雨が降つて来た。熊野は母を思ふ歌を詠んだ。さすが宗盛もその心根を憐んで、暇を與へたといふ曲。「題材」「平家物語」卷十「海道下りの事」に據つたが、作者の構想した部分が多い。一段劇能。五流現行。

【平家物語評判秘傳抄】(平家物語)の作者として由井正雪が擬せられてゐるけれども、何等の根據もなく、信するに足りない。作者は不明である。【諸本】平假名整版本が流布してゐるが、明治十九年三月、金櫻堂から活字に翻刻した本が出た。【解説】本書は十二卷であるが、各卷を上下に分ち二十四冊としてある。内容は「平家物語」に記載されてゐる事項を、逐條に項目として掲げ、それについて、事柄の是非善悪や利害得失などを説き、或は人物の言行態度を品評して、精緻な評論を試みてある。【高木武】

【佛原】三番目【作者】世阿彌(能本作者註文。二百十番謡目録)。「内容」都方の僧(ワキ)が白山禪定に出掛け、加賀國佛の原の草堂に立ち寄ると、一人の女性(前ジテ)が来て、佛御前が祇王の後を追つて出家した次第を語り、自分がその佛であると打明けて内に入る。その夜の夢に佛御前(後ジテ)が現はれ出で、舞を舞つて消え失せるといふ曲。「題材」前曲と同じ「祇王が事」の後半を主材とした。複式夢幻能。觀世・金剛現行。

【俊寛】四番目【作者】世阿彌(能本作者註文。二百十番謡目録)。「内容」喜多流では「鬼界島」といふ。「内容」平家討伐の陰謀が顯はれて鬼

【實盛】二番目【作者】世阿彌(能本作者註文。二百十番謡目録)。「内容」加賀國篠原で、廻國の僧(ワキ)が念佛說法してゐると、餘人には見えないが、老人(シテ)が毎日來て稱名するので、その名を尋ねると、この所で討死した齋藤別當實盛であると打明けて消え失せる。それで僧が別時の稱名をして回向すると、實盛の靈(後ジテ)が現はれ出で、最期の様を懺悔物語するといふ曲。「題材」「平家物語」卷七「實盛最期の事」に據つた。複式夢幻能。五流現行。

【平家物語の謡曲】(平家物語)の作者として由井正雪が擬せられてゐるけれども、何等の根據もなく、信するに足りない。作者は不明である。【諸本】平假名整版本が流布してゐるが、明治十九年三月、金櫻堂から活字に翻刻した本が出た。【解説】本書は十二卷であるが、各卷を上下に分ち二十四冊としてある。内容は「平家物語」に記載されてゐる事項を、逐條に項目として掲げ、それについて、事柄の是非善悪や利害得失などを説き、或は人物の言行態度を品評して、精緻な評論を試みてある。【高木武】

【佛原】三番目【作者】世阿彌(能本作者註文。二百十番謡目録)。「内容」都方の僧(ワキ)が白山禪定に出掛け、加賀國佛の原の草堂に立ち寄ると、一人の女性(前ジテ)が来て、佛御前が祇王の後を追つて出家した次第を語り、自分がその佛であると打明けて内に入る。その夜の夢に佛御前(後ジテ)が現はれ出で、舞を舞つて消え失せるといふ曲。「題材」前曲と同じ「祇王が事」の後半を主材とした。複式夢幻能。觀世・金剛現行。

【俊寛】四番目【作者】世阿彌(能本作者註文。二百十番謡目録)。「内容」喜多流では「鬼界島」といふ。「内容」平家討伐の陰謀が顯はれて鬼

【實盛】二番目【作者】世阿彌(能本作者註文。二百十番謡目録)。「内容」加賀國篠原で、廻國の僧(ワキ)が念佛說法してゐると、餘人には見えないが、老人(シテ)が毎日來て稱名するので、その名を尋ねると、この所で討死した齋藤別當實盛であると打明けて消え失せる。それで僧が別時の稱名をして回向すると、實盛の靈(後ジテ)が現はれ出で、最期の様を懺悔物語するといふ曲。「題材」「平家物語」卷七「實盛最期の事」に據つた。複式夢幻能。五流現行。

【平家物語評判秘傳抄】(平家物語)の作者として由井正雪が擬せられてゐるけれども、何等の根據もなく、信するに足りない。作者は不明である。【諸本】平假名整版本が流布してゐるが、明治十九年三月、金櫻堂から活字に翻刻した本が出た。【解説】本書は十二卷であるが、各卷を上下に分ち二十四冊としてある。内容は「平家物語」に記載されてゐる事項を、逐條に項目として掲げ、それについて、事柄の是非善悪や利害得失などを説き、或は人物の言行態度を品評して、精緻な評論を試みてある。【高木武】

【佛原】三番目【作者】世阿彌(能本作者註文。二百十番謡目録)。「内容」都方の僧(ワキ)が白山禪定に出掛け、加賀國佛の原の草堂に立ち寄ると、一人の女性(前ジテ)が来て、佛御前が祇王の後を追つて出家した次第を語り、自分がその佛であると打明けて内に入る。その夜の夢に佛御前(後ジテ)が現はれ出で、舞を舞つて消え失せるといふ曲。「題材」前曲と同じ「祇王が事」の後半を主材とした。複式夢幻能。觀世・金剛現行。

【俊寛】四番目【作者】世阿彌(能本作者註文。二百十番謡目録)。「内容」喜多流では「鬼界島」といふ。「内容」平家討伐の陰謀が顯はれて鬼

【實盛】二番目【作者】世阿彌(能本作者註文。二百十番謡目録)。「内容」加賀國篠原で、廻國の僧(ワキ)が念佛說法してゐると、餘人には見えないが、老人(シテ)が毎日來て稱名するので、その名を尋ねると、この所で討死した齋藤別當實盛であると打明けて消え失せる。それで僧が別時の稱名をして回向すると、實盛の靈(後ジテ)が現はれ出で、最期の様を懺悔物語するといふ曲。「題材」「平家物語」卷七「實盛最期の事」に據つた。複式夢幻能。五流現行。

【平家物語評判秘傳抄】(平家物語)の作者として由井正雪が擬せられてゐるけれども、何等の根據もなく、信するに足りない。作者は不明である。【諸本】平假名整版本が流布してゐるが、明治十九年三月、金櫻堂から活字に翻刻した本が出た。【解説】本書は十二卷であるが、各卷を上下に分ち二十四冊としてある。内容は「平家物語」に記載されてゐる事項を、逐條に項目として掲げ、それについて、事柄の是非善悪や利害得失などを説き、或は人物の言行態度を品評して、精緻な評論を試みてある。【高木武】

【佛原】三番目【作者】世阿彌(能本作者註文。二百十番謡目録)。「内容」都方の僧(ワキ)が白山禪定に出掛け、加賀國佛の原の草堂に立ち寄ると、一人の女性(前ジテ)が来て、佛御前が祇王の後を追つて出家した次第を語り、自分がその佛であると打明けて内に入る。その夜の夢に佛御前(後ジテ)が現はれ出で、舞を舞つて消え失せるといふ曲。「題材」前曲と同じ「祇王が事」の後半を主材とした。複式夢幻能。觀世・金剛現行。

【俊寛】四番目【作者】世阿彌(能本作者註文。二百十番謡目録)。「内容」喜多流では「鬼界島」といふ。「内容」平家討伐の陰謀が顯はれて鬼

【實盛】二番目【作者】世阿彌(能本作者註文。二百十番謡目録)。「内容」加賀國篠原で、廻國の僧(ワキ)が念佛說法してゐると、餘人には見えないが、老人(シテ)が毎日來て稱名するので、その名を尋ねると、この所で討死した齋藤別當實盛であると打明けて消え失せる。それで僧が別時の稱名をして回向すると、實盛の靈(後ジテ)が現はれ出で、最期の様を懺悔物語するといふ曲。「題材」「平家物語」卷七「實盛最期の事」に據つた。複式夢幻能。五流現行。

【平家物語評判秘傳抄】(平家物語)の作者として由井正雪が擬せられてゐるけれども、何等の根據もなく、信するに足りない。作者は不明である。【諸本】平假名整版本が流布してゐるが、明治十九年三月、金櫻堂から活字に翻刻した本が出た。【解説】本書は十二卷であるが、各卷を上下に分ち二十四冊としてある。内容は「平家物語」に記載されてゐる事項を、逐條に項目として掲げ、それについて、事柄の是非善悪や利害得失などを説き、或は人物の言行態度を品評して、精緻な評論を試みてある。【高木武】

【佛原】三番目【作者】世阿彌(能本作者註文。二百十番謡目録)。「内容」都方の僧(ワキ)が白山禪定に出掛け、加賀國佛の原の草堂に立ち寄ると、一人の女性(前ジテ)が来て、佛御前が祇王の後を追つて出家した次第を語り、自分がその佛であると打明けて内に入る。その夜の夢に佛御前(後ジテ)が現はれ出で、舞を舞つて消え失せるといふ曲。「題材」前曲と同じ「祇王が事」の後半を主材とした。複式夢幻能。觀世・金剛現行。

【俊寛】四番目【作者】世阿彌(能本作者註文。二百十番謡目録)。「内容」喜多流では「鬼界島」といふ。「内容」平家討伐の陰謀が顯はれて鬼

【實盛】二番目【作者】世阿彌(能本作者註文。二百十番謡目録)。「内容」加賀國篠原で、廻國の僧(ワキ)が念佛說法してゐると、餘人には見えないが、老人(シテ)が毎日來て稱名するので、その名を尋ねると、この所で討死した齋藤別當實盛であると打明けて消え失せる。それで僧が別時の稱名をして回向すると、實盛の靈(後ジテ)が現はれ出で、最期の様を懺悔物語するといふ曲。「題材」「平家物語」卷七「實盛最期の事」に據つた。複式夢幻能。五流現行。

【平家物語評判秘傳抄】(平家物語)の作者として由井正雪が擬せられてゐるけれども、何等の根據もなく、信するに足りない。作者は不明である。【諸本】平假名整版本が流布してゐるが、明治十九年三月、金櫻堂から活字に翻刻した本が出た。【解説】本書は十二卷であるが、各卷を上下に分ち二十四冊としてある。内容は「平家物語」に記載されてゐる事項を、逐條に項目として掲げ、それについて、事柄の是非善悪や利害得失などを説き、或は人物の言行態度を品評して、精緻な評論を試みてある。【高木武】

【佛原】三番目【作者】世阿彌(能本作者註文。二百十番謡目録)。「内容」都方の僧(ワキ)が白山禪定に出掛け、加賀國佛の原の草堂に立ち寄ると、一人の女性(前ジテ)が来て、佛御前が祇王の後を追つて出家した次第を語り、自分がその佛であると打明けて内に入る。その夜の夢に佛御前(後ジテ)が現はれ出で、舞を舞つて消え失せるといふ曲。「題材」前曲と同じ「祇王が事」の後半を主材とした。複式夢幻能。觀世・金剛現行。

【俊寛】四番目【作者】世阿彌(能本作者註文。二百十番謡目録)。「内容」喜多流では「鬼界島」といふ。「内容」平家討伐の陰謀が顯はれて鬼

【實盛】二番目【作者】世阿彌(能本作者註文。二百十番謡目録)。「内容」加賀國篠原で、廻國の僧(ワキ)が念佛說法してゐると、餘人には見えないが、老人(シテ)が毎日來て稱名するので、その名を尋ねると、この所で討死した齋藤別當實盛であると打明けて消え失せる。それで僧が別時の稱名をして回向すると、實盛の靈(後ジテ)が現はれ出で、最期の様を懺悔物語するといふ曲。「題材」「平家物語」卷七「實盛最期の事」に據つた。複式夢幻能。五流現行。

【平家物語評判秘傳抄】(平家物語)の作者として由井正雪が擬せられてゐるけれども、何等の根據もなく、信するに足りない。作者は不明である。【諸本】平假名整版本が流布してゐるが、明治十九年三月、金櫻堂から活字に翻刻した本が出た。【解説】本書は十二卷であるが、各卷を上下に分ち二十四冊としてある。内容は「平家物語」に記載されてゐる事項を、逐條に項目として掲げ、それについて、事柄の是非善悪や利害得失などを説き、或は人物の言行態度を品評して、精緻な評論を試みてある。【高木武】

【佛原】三番目【作者】世阿彌(能本作者註文。二百十番謡目録)。「内容」都方の僧(ワキ)が白山禪定に出掛け、加賀國佛の原の草堂に立ち寄ると、一人の女性(前ジテ)が来て、佛御前が祇王の後を追つて出家した次第を語り、自分がその佛であると打明けて内に入る。その夜の夢に佛御前(後ジテ)が現はれ出で、舞を舞つて消え失せるといふ曲。「題材」前曲と同じ「祇王が事」の後半を主材とした。複式夢幻能。觀世・金剛現行。

【俊寛】四番目【作者】世阿彌(能本作者註文。二百十番謡目録)。「内容」喜多流では「鬼界島」といふ。「内容」平家討伐の陰謀が顯はれて鬼

【實盛】二番目【作者】世阿彌(能本作者註文。二百十番謡目録)。「内容」加賀國篠原で、廻國の僧(ワキ)が念佛說法してゐると、餘人には見えないが、老人(シテ)が毎日來て稱名するので、その名を尋ねると、この所で討死した齋藤別當實盛であると打明けて消え失せる。それで僧が別時の稱名をして回向すると、實盛の靈(後ジテ)が現はれ出で、最期の様を懺悔物語するといふ曲。「題材」「平家物語」卷七「實盛最期の事」に據つた。複式夢幻能。五流現行。

に行く。俊成(ツレ)はその歌を見て、忠度の文武二道に勝れてゐたのを感じ、成佛を祈つてゐると、忠度の幽霊(シテ)が現はれ出て、俊成と歌道について語り合つたが、夜の明けると共に消え失せたといふ曲。「題材」「平家物語」卷九「忠度の最期の事」を題材にした。劇的夢幻能。観世・寶生・金剛・喜多現行。

【忠度】二番目【作者】世阿彌(能本作者註文、二百十番謡目録)。「古名」薩摩守(申樂談儀)。「内容」俊成御内の者(ツキ)が俊成の死後出家して僧となり、西國行脚に出て、須磨に來ると、一老翁(前ジテ)が出て、花の木蔭の旅寢を勧め、夢の告を待ち給へといつて消える。その夜僧の夢に、忠度の靈(後ジテ)が現はれ、わが詠歌の「千載集」に讀人知らずとして入れられた恨みを述べ、最期の様を語りといふ曲。「題材」「平家物語」卷七「忠度の都落の事」及び卷九「忠度の最期の事」に據つた。複式夢幻能。五流現行。

【知章】二番目【作者】世阿彌(能本作者註文、二百十番謡目録)。「内容」西國方の僧(ツキ)が都に上る途次、須磨の浦で、物故平知章と書いた卒都婆を見てゐると、一人の男(前ジテ)が來て、知章及びその父知盛の事を語つて消え失せる。僧が回向してゐると、知章の靈(後ジテ)が現はれて、最期の様を委しく語り、回向を乞ふといふ曲。「題材」「平家物語」卷九「落足の事」に據つた。複式夢幻能。五流現行。

盛(後ジテ)小宰相(後ツレ)の靈が現はれ出て、通盛最期の様を委しく語るといふ曲。「題材」「平家物語」卷九「落足の事」、「小宰相」に據つた。複式夢幻能。五流現行。

【清經】二番目【作者】世阿彌(申樂談儀)。「内容」平清經の臣淡津三郎(ツキ)は清經が入水したので、その形見の品を持つて都に歸り、清經の妻(ツレ)に渡す。妻は夫がわれとわが身を捨てたことを恨み歎いてゐると、清經の亡靈(シテ)が夢現の如くに現はれ出て、都落以來の平家の悲惨な様を語りといふ曲。「題材」「源平盛衰記」卷三三「平家太宰府落并平氏宇佐宮歌附清經入海事」に據つたらしい。劇的夢幻能。五流現行。

【碓氷】二番目【作者】不明(能本作者註文)。「内容」平家に縁故のある都方の僧(ツキ)が平家の跡を弔ふために、長門國早朝に下り、便乗した老舟夫(前ジテ)に、この浦の合戦の様を尋ねると、老人は能登守教經の最期の様を語り、自分も平家の幽霊であると、回向を乞うて去る。僧が海際で回向してゐると、海上に大船が浮び出て、琵琶を弾く音が聞える。舟には二位尼(ツレ)・大納言局(ツレ)及び知盛(後ジテ)が乗つてゐて、二位尼が安徳天皇を抱き奉つて海に入つた様、知盛が碓氷の上に戴いて海底に飛び入つた様を再演して見せるといふ曲。「題材」「平家物語」卷十二「先帝御入水の事」に據つた。複式夢幻能。観世・金剛現行。

【千手】三番目【作者】金春禪竹(能本作者註文、二百十番謡目録)。「古名」千手重衡。「内容」狩野介宗茂(ツキ)は一の谷の合戦に生捕られた平重衡(ツレ)を預かつてゐる。手越の長の娘(千手(シテ))は頼朝の命を受けて、今日も琵琶を

を持つて重衡を慰めに來た。やがて雨中徒然の慰めに酒宴が催され、千手は舞を舞つた。かうして二人は親しくなつたのに、重衡は救命によつてまた都に上ることとなつたので、互に別れを悲しんだといふ曲。「平家物語」卷十「千手の事」に據つた。一段劇能。五流現行。

【盛久】四番目【作者】世阿彌(能本作者註文)。「内容」元雅(二百十番謡目録)ともいふ。「内容」盛久(シテ)は愈々關東に下るについて、守護人士屋三郎(ツキ)の許しを得て、清水觀音に參詣し、やがて鎌倉に送られた。鎌倉に着くと、直に誅せられることとなつた。盛久は死に先立つて觀音經を讀誦した。太刀取(ツキ)が盛久を斬らうとすると、太刀は段々に折れてしまつた。頼朝はこの不思議に感じて、盛久を召して杯を與へた。盛久は喜んで舞を舞つて退出したといふ曲。「題材」長門本平家物語「卷廿に據つたものか。その他の平家諸本には見えない。二段劇能。五流現行。

【大原御幸】三番目【作者】世阿彌(二百十番謡目録)。「内容」大原寂光院に世を避けてゐられる建禮門院(シテ)は、大納言局(ツレ)を隨へて橋をとり山に上られた。その留守に後白河法皇(ツレ)が萬里小路中納言(ツキ)等を隨へておはした。庵に留つてゐた阿波内侍(ツレ)が御相手を申し上げると、女院が歸られて、六道廻りのお話を申し上げられたといふ曲。「題材」「平家物語」灌頂巻に據つた。二段劇能。観世・寶生・金剛・喜多現行。

【構想】世阿彌が「能作書」に「源平の名將の人體の本説ならば、殊に平家物語のままに書くべし」といつてゐるやうに、上掲の諸曲は、「平家物語」に從つたものが多いのであるが、その中、複式夢幻能は、その本文をタセな

どシテの物語として採り入れてゐるので、無理をしたものがないが、劇能には餘りに「平家物語」に捉はれ過ぎて失敗したものと、巧みに劇化して成功したものがある。「千手」は前者の適例であり、「小督」は後者の好例であり、「大原御幸」は原文の引用に妙を得たものであらう。「熊野」は「平家物語」から遠く離れて、大きな成功を収めたものである。

【参考】諸曲評釋 大和田建樹○諸曲大觀 佐成謙太郎

閉鎖音(ハヒ)「子音」を見よ。

平治物語(ヘイジ) 戦記物語 三卷(又は二卷)【別名】「平治記」ともいふ。【作者】

「平治物語」は「保元物語(別項)」と姉妹篇をなす。編次・體裁・構想・措辭など、兩者殆ど趣を同じうし、作者と稱せらるゝ者も、大抵同一人を以てこれに擬し、その成立も殆ど同じ頃と見られてゐる。そしてその作者に擬せらるゝ者には葉室時長・中原師梁・源暎(又は公暎)僧正の三人がある。時長説は「醍醐雜抄」に、「平家物語(中略)民部權少輔時長作之、又將門保元平治已上四部同人作」とあるものである。時長は「平家物語」の作者にも擬せられて居り、「保元物語」や「平治物語」の作者として、ふさはしい人物であるが、併し單にこれだけの材料では、しかと斷定することは出来ない。中原師梁説は、參考本に「大外記中原師香所撰書」上「保元物語」狀云、故師梁所撰鈔、師香之師梁子也。」とあるものである。師梁は外記補任「尊卑分脈」中原系圖等によると、時長よりも百年以上の後輩であり、原本の作者としては、時代が降り過ぎてゐて、事理に適應しない。「鈔」といふ字は「著作」の意に用ひらるゝこともあるけれども、「謄寫」又は「拔録」してゐるだけである。なほ所在不明のものに岡崎本・一松本等がある。

【梗概】藤原信賴は、信西入道と不和であるところから、義朝と結託して清盛等が熊野參詣に出かけた隙を窺ひ、院の御所を犯し、信西が宿所を焼き拂つた。信西は變事を豫知し、都を落ちて南都の方に赴き、隠れてゐたのを見出されて斬られ、獄門にかけられた。六波羅からは紀州へ早馬を立てて、この旨を知ら

の義に用ひらるゝことも多いから、右の説を生かすとすれば「師梁が書寫したもの」と解すると、一番都合がよい。但しこれを或る種の異本の作者と見れば、固より差支はない。源暎(又は公暎)僧正説は、永正四年の奥書がある「旅宿問答」に、「有説ニハ多武峯ニ源暎僧正トテ宏才有智ノ貴僧御坐ス。此僧正、保元平治源義賢與ニ義平ニ亂ヲ作出シ玉フ。實是開事也」とあり、「安齋隨筆」にもこの説を引擧し

次、建部八幡社に參詣通夜した夜の夢に、天童が打鐘を六十六本ばかり持ち出して頼朝に賜はつたので、頼朝がそれを食すると見たが、これは將來頼朝が日本六十六箇國を支配すべき前徴であるから、配所に下つても出家などし給ふなど、盛泰が忠告した由の記事があつて、何れの本にも見えてゐる。この記事は、頼朝が平家を滅して日本六十六箇國を支配すべきことを豫言したもので、本書が鎌倉幕府

本半井本などと近似しながら、篇末に「半若奥州下向」以下の記事が増補せられてゐる點は、流布本と趣を同じうしてゐる。杉原本は松井本内閣文庫本・半井本・京師本等に似てゐるが、また特殊の特色があり、目次を添へ、句節を分ち、流布本と趣を同じうする點もある。九條家本は、松井本・楠本等の一類に似た點もあるが、記事や編次に著しい特色があり、篇末に「半若奥州下向」以下の記事が増補せら

してゐるだけである。なほ所在不明のものに岡崎本・一松本等がある。

失せる。僧が回向してゐると、知章の靈(後ジテ)が現はれて、最期の様を委しく語り、回向を乞ふといふ曲。「題材」平家物語卷九「落足の事」に據つた。複式夢幻能。五流現行。「通盛」二番目「作者」井阿彌(申樂談儀)。「内容」阿波の鳴戸に一夏を送る僧(ツキ)が、毎夜磯に出て平家一門の回向をしてゐると、漁翁夫婦(前ジテ、前ツレ)が来て、平通盛の討死した事、小宰相が後を追うて入水した事を語つて海に入る。僧がなほも讀經してゐると、通

て海に入つた様、知盛が碇を兜の上に戴いて海底に飛び入つた様を再演して見せるといふ曲。「題材」平家物語卷十一「先帝御入水の事」能登殿最期の事「内侍所の都入の事」に據つた。複式夢幻能。觀世・金剛現行。「千手」三番目「作者」金春禪竹(能本作者註文・二百十番番目録)。「古名」千手重衡。「内容」狩野介宗茂(ツキ)は一の谷の合戦に生捕られ、平重衡(ツレ)を預かつてゐる。手越の長の娘千手(シテ)は頼朝の命を受けて、今日も琵琶琴

がおはした。庵に留つてゐた阿波内侍(ツレ)が御相手を申し上げてゐると、女院が歸られ、六道廻りのお話を申し上げられたといふ曲。「題材」平家物語「灌頂巻」に據つた。二段劇能。觀世・寶生・金剛・喜多現行。「構想」世阿彌が「能作書」に「源平の名將の人體の本説ならば、殊に平家物語のままに書くべし」といつてゐるやうに、上掲の諸曲は、「平家物語」に從つたものが多いのであるが、その中、複式夢幻能は、その本文をクセな

「平家物語」の作者として、ふきしい人物であるが、併し単にこれだけの材料では、しかと断定することは出来ない。中原師梁説は、參考本に「天外記中原師香所」手書「上保元物語」狀云、故師梁所、師香之師梁子也。」とあるものである。師梁は外記補任「尊卑分脈」中原系圖等によると、時長よりも百年以上の後輩であり、原本の作者としては、時代が降り過ぎてゐて、事に適應しない。「鈔」といふ字は「著作」の意に用ひらるゝこともあるけれども、「謄寫」又は「抜録」

の義に用ひらるゝことも多いから、右の説を生かすとすれば「師梁が書寫したもの」と解すると、一番都合がよい。但しこれを或る種の異本の作者と見れば、固より差支はない。源諭(又は公諭)僧正説は、永正四年の奥書がある「旅宿問答」に、「有説ニハ多武峯ニ源諭僧正トテ宏才有智ノ貴僧御坐ス。此僧正、保元平治源義賢與義平ニ亂ヲ作出シ玉フ。實是開事也」とあり、「安齋隨筆」にもこの説を引擧してある。また「新續古事談」にはこれを公諭僧正とし、「一本には源諭僧正と有」と註して、同様な記事がある。そして、これは二條院の頃といつてあるけれども、「保元物語」「平治物語」には、二條院以後の記事も少からず、又義賢と義平との合戦の過程は見えてゐないから、この説は信じ難い。要するに、「保元物語」や「平治物語」の作者は、今のところ、不明といふ外はない。

【成立】古本と目せらるゝ「平治物語」にありては、永曆元年源頼朝が伊豆國の配所へ下着する事を以て獲麟として居り、これが物語本來の姿を存するものと目せられる。流布本その他の異本に、「牛若生立并に奥州下向の事」以下十數項の記事を終りに附してゐるのは、後で加へた増補であるといふことは、異本の比較研究によつて明かに知らるゝところであるから、原本の製作年代を論ずるに當つては、これ等の増補事項を載せない古本を標準として考察すべきである。平治の古本は、永曆元年の事を以て筆を擱いてゐるけれども、この當時を以て直ちに平治原本の製作年代と速断すべからざるは勿論である。「平治物語」卷下「頼朝配所へ向ふ事」の條に、頼朝源五盛泰といふ者が、頼朝の供をして伊豆國へ下向の途

次、建部八幡社に參詣通夜した夜の夢に、天童が打鐘を六十六本ばかり持ち出して頼朝に賜はつたので、頼朝がそれを食すると見たが、これは將來頼朝が日本六十六箇國を支配すべき前徴であるから、配所に下つても出家などし給ふなど、盛泰が忠告した由の記事があつて、何れの本にも見えてゐる。この記事は、頼朝が平家を滅して日本六十六箇國を支配すべきことを豫言したもので、本書が鎌倉幕府創立後に成つたことの證ともなるであらう。加之、本書を通して源氏に肩を持ち、平氏を貶した書きやうであるから、本書の原本は平氏滅亡後、源氏將軍時代に成立したものであらうと思はれる。

【諸本】松井本・内閣文庫本等は目次なく、句節を分たず、流布本に比すれば記事が簡潔であつて、編次・内容・文辭に著しい相違があり、「頼朝伊豆下着の事」で筆を擱いて古い姿である。靜嘉堂文庫本・色川本・瑞本・金刀比羅神社本・東大國語研究室本などは、その間に多少の異同はあるが、大體において松井本・内閣文庫本などと同じ系統に屬するものやうである。前田本・久原文庫書寫本・池田本等も、前の諸本の系統を引いて、而もそれと多少の異同があり、特に池田本は半井本と近似してゐる點が少くない。半井本は獨特の特徴もあるが、前記諸本との類似も少い。康豊本は卷三を存してゐるだけであるから、その全貌を知り難いけれども、現存の卷についていふと、大體の編次内容が半井本に近い。元和本は康豊本・半井本に似て、分卷の次第を異にし、上下二冊になつてゐる。「平治記」は、前記諸本との類似を有しながら、流布本とも近似し、特殊の趣がある。京師本は、松井本・内閣文庫

本半井本などと近似しながら、篇末に「牛若奥州下向」以下の記事が増補せられてゐる點は、流布本と趣を同じうしてゐる。杉原本は松井本・内閣文庫本・半井本・京師本等に似てゐるが、また特殊の特色があり、目次を添へ、句節を分ち、流布本と趣を同じうする點もある。九條家本は、松井本・瑞本等の一類に似た點もあるが、記事や編次に著しい特色があり、篇末に「牛若奥州下向」以下の記事が増補せられてゐる點は流布本に似てゐる。京都大學本は、松井本・内閣本等の一類に似てゐる點もあるが、内容や辭句の上に著しい異色があり、特殊な趣がある。高野本は内容記事、諸本と異同多く、篇末に「義經生立、平家討滅の次第」を簡単に叙し、特殊な姿を呈してゐる。流布本の系統では、片假名書寫本・平假名書寫本が諸方に傳へられてゐるが、平假名書寫で六卷に分けられてゐる本もある。古假名古活字本では元和四年の岩崎文庫本・東京大學本・京都大學本・内閣文庫本・久原文庫本等があり、平假名古活字本では、東京大學本・久原文庫本・渡邊文庫本等がある。片假名整版本には東京大學・黒川家その他諸家に見え、平假名整版繪入本には、寛永元年版・寛永三年版・明曆三年版・貞享二年版・元祿十五年版・享和元年版等が多く流布してゐる。現行活字本としては、

日本文學全書・國文大觀・國文叢書・國民文庫・有朋堂文庫・校註日本文學大系・日本古典全集等を初め、單行本にもいろいろ刊行せられてゐる。「平治物語繪詞」は、平治の亂を題材としたもので、鎌倉時代初期の作と稱せられてゐるが、その詞書は「平治物語」の古本に近似してゐる。もと數卷あつたのが、今は「院御所夜討」「信西獄門」「六波羅行幸」の三卷を現存

してゐるだけである。なほ所在不明のものに阿崎本・一松本等がある。【梗概】藤原信賴は、信西入道と不和であるところから、義朝と結託して清盛等が能野參詣に出かけた隙を窺ひ、院の御所を犯し、信西が宿所を燒き拂つた。信西は變事を豫知し、都を落ちて南都の方に赴き、隠れてゐたのを見出されて斬られ、獄門にかけられた。六波羅からは紀州へ早馬を立てて、この旨を知らせたので、清盛は直ちに都へ引返した。後白河院は仁和寺へ御幸あり、主上は六波羅へ行幸なされたので、平氏は大に喜んで、これを迎へ奉つた。その内に源平互に勢揃をなし、待賢門を中心として戦の火蓋を切り、義平と重盛との目ざましい接戦があり、源氏は遂に禁中から平氏を追ひ、勢に乗じて義朝は六波羅に攻め寄せたが、利を失つた。信賴は脆くも待賢門の守りを失ひ、仁和寺に逃れたが、やがて捕へられて斬られた。義朝は東國に落ちたが、長田忠致に殺された。義平は近江石山寺の邊りに隠れてゐたが、捕へられて殺された。頼朝は生捕られて斬られる筈であつたのを、池禪尼の盡力によつて流罪となつた。常磐は、人質に取られてゐる母を助けんがために六波羅に到り、母と三人の幼兒とを助け、新大納言經宗・別當惟方は、捕へられて遠流に處せられたが、頼朝も伊豆の配所へ赴いた。(以下は流布本等の内容)牛若は鞍馬に入つて學問修行をしてゐたが、義經と名乗り、金商人に從ひて奥州へ下り、藤原秀衡にたよつた。頼朝は配所で二十一年の春秋を送り、文覺上人の勧めによつて兵を擧げたが、これを聞いた義經は、奥州から黃瀬川に來て頼朝に對面し、範頼と力を協せて平家を討滅した。

然るに義経は、頼朝と不和になり、奥州に遁れて秀衡の許に身を寄せたが、秀衡の死後、その子泰衡のために殺された。頼朝は泰衡を滅して天下を一統し、正治元年正月、五十三歳で薨去した。

【解説】本書は、平治の亂の顛末を叙したものであるが、體裁・結構など「保元物語」と酷似してゐる。平治の亂は信賴と信西との不和、義朝と清盛との軋轢などが動因となつて爆發したものであるが、戰の幕が開かれてからは、源義平を花形役者として正面の舞臺に活躍せしめ、鬪争の幕が閉ぢられると、信賴・義朝・義平・頼朝・朝長等の没落破滅に移り、頼朝の伊豆下向で筆を擱いてゐるが、京師本・九條家本・高野本・流布本・岡崎本等には「平若奥州下向の事」頼朝義兵を擧ぐる事并に平家退治の事等を載せてある。併し、これは後で改修した際に増補されたものと目せられ、物語全篇の結構からいふと、蛇足となつてゐる。平治における義平が、保元における爲朝の役目を演じてゐるのはいふまでもなく、平治の信賴も保元の頼長に擬せられてゐるのなど、全くその趣を一にしてゐることは、最も著しい例である。その上、事件の内容を作りかへ、人物の性格を殊更に特性化した形跡も少くない。そして、かういふ傾向は、義平・義朝・頼朝・信賴・信西等の上にも固より見られるが、清盛と重盛との上には、ことさらに相反した性格を附與し、兩者を巧みに配合してあるのが際立つて目につく。即ち清盛は無能臆病漢とし、重盛は識見あり、情あり、勇氣あるあつばれの武將として面白く仕組まれてゐるのである。この物語においても、義朝・義平等は、敵を壓迫して優勝者の地位に立つべきものと見えた

のに、境遇はいつしか逆轉して敗者の憂目を見ることになつた。そして義平が清盛父子を討たんと隙を狙つてゐるうち、敵にさとられ生捕られて斬られたのも、勇士の末路のあはれさと運命の力強さを物語つてゐるが、義朝がその股肱と頼む正家の舅であり、自分の家臣である長田忠致の許に身を寄せて、その逆刃に斃れたのも、悲痛の極みである。なほ夜叉御前の入水の過程や、三兒を伴ひ、酷寒を冒して途方に暮るゝ常磐御前の没落などの描寫は、特にあはれ深くして、無限の哀感・同情をそよめるものがある。その他、敗亡者の眷族郎黨共が、散りくゝになつて破滅の淵に落ちて行く徑路も悲惨の極みで、源氏の上に加へられた宿命の鐵槌は、人力を以ては到底支へ難く見える。但しこの間にありて、頼朝だけが、一旦敵手に捕へられながら、池禪尼のなさけによりて不思議にも命を助かり、伊豆に配流せられることになつたが、これが後年において、平家討滅の原動力となり、武家政治の開祖となるのであつて、奇しき運命の手は、こゝでも活潑に働いてゐる。また信賴の破滅は、無能臆病な上に傲慢輕率であつたところから招いた自業自得であるとしても、賢明にして識見の高かつた信西が非業の最期を遂げたところには、宿命の暗い影が躍つてゐるのが認められる。なほ熊野參詣の途中において、事變の起つたことを聞いて引返し、不用意のまま勁敵に當つた平氏が、どう見ても勝味がなく、また合戦に際しても、絶えず源氏に壓迫されながら、不思議に勝者の地位に立つことになつたといふのも奇蹟であつて、やはり平氏の上にも、運命の手が加へられてゐるといふことは見逃せない。かういふ次第

で、「平治物語」は一種の運命悲劇であり、描かれてゐる事件と筋も、單純ながら結構も整ひ、筋も通つてゐる。なほ文章も簡素勁健であつて生氣があり、作品としては相當に成功してゐる。

【影響】本書は國民文學の代表作品として、廣く世に愛讀せられ、また作品の内容も頗る興趣に富んでゐるので、これが後代文學に及ぼした影響も相當に大きい。戯曲方面について見るに、謡曲に「朝長」「悪源太」「兵擲」「鎌田」「石山義衡」「材木義平」、幸若舞曲に「伊吹」「鎌田」「伏見常磐」「常磐問答」(各別項)、淨瑠璃に「源氏烏帽子折」「伏見常磐音物語」「悪源太平治合戦」「頼朝三島詣」「鎌田兵衛名所盃」「孕常磐」「待賢門夜軍」等、小説方面では、浮世草子に「優源平歌袋」「義経後軍談」「略平家都選」「風流詭平家」、草雙紙類では、青本に「義経一代記」、黄表紙に「源平布引瀧」「實盛一代記」、合巻に「伏見常磐」「石橋山義兵白旗」「頼朝一代記」「清盛榮華の殿島」「義経一代記」「源平武者かみ」、讀本・實録類に「義経記」「保元平治鬪争圖繪」「義経勳功記」「義経磐石傳」「敦盛源平桃」「木曾將軍義仲記」等の上に、取材・趣向・表現形式などについて、平治に據つた形跡があらはに見えてゐる。また後代文學に題材として採られてゐる箇所についていへば、「義朝野間下向并に忠致心替の事」「待賢門軍事」等が、特に目立つて多いのは、これ等が物語叙事の眼目にして興趣が深いためであらう。次いで「常磐落つる事」「常磐六波羅に出づる事」が多いのは、その事情が優しくあはれにして、世人の同情をひくことが強かつた爲めであらう。その他、「頼朝生捕らるゝ事」「悪源太誅せらるゝ事」「平若奥州下向の事」「義朝青葉落着

の事」「頼朝遠流の事」「信賴謀反の事」等の影響も少くないのは、これ等の事項が、比較的によく後人の注意を惹いたことを示してゐるものと見るべきであらう。

【参考】参考平治物語今井弘濟・内藤貞顯○平治物語考岡本保孝○平治物語大全○保元平治物語類字○平治物語武器談○參訂平治物語註釋内藤貞顯・平井頼吉○頭書平治物語中根源○保元平治物語解釋今泉定介○平治物語講義同上○校註保元平治物語鳥野幸次○平治物語新釋吉村重徳○軍記物語研究五十嵐力○戰記物語の研究高木武(日本文學講座)○保元平治物語考星野恒(史學雜誌一ノ三三)○保元平治物語の武人 待鳥清九郎(國語と國文學三ノ一)○保元平治物語の語法について 小山朝丸(國語國文の研究九・一〇・一一)○保元平治物語の書史學的考察高木武(國語と國文學三ノ一)○保元平治物語の一研究 土橋寛(國語國文三ノ六七) [高木武]

平治物語繪卷

【解説】現存三卷あるが、米國ボストン博物館・岩崎男爵及び松平伯爵に各一卷づつ分藏されてゐる。ボストン博物館本は、藤原信賴・源義朝等が後白河上皇の三條殿を焼き拂つて、上皇を内裏に遷し奉らんとする段、岩崎家本は上皇の寵臣信西が難の免れ得ざるを知り、伊賀の山中で自害したのを、信賴方の者共がその首を取つてこれを獄門にさらす段、松平家本は上皇・主上・女院等が巧みに監視の目をぬすんで、内裏を逃れて清盛の邸六波羅に赴かれたのを、信賴が後に氣づいてくやしがる段である。軍記物語は勇壯活潑な鎌倉時代の好尚に應じて流行し、當時この種の物語を題材にした繪巻も多く作られたが、遺品の中でその

平治物語上

じつとつたのうらなをさうやれ
えんくくはをてあきうまうのやれ
ととつたのうらなをさうやれ
あきうまうのやれ



松井本平治物語

平治物語卷中

六り、秋皇后小は公卿僉多てきよまりを
めされりりつむのひたれは黒糸木く
まもあき小右右乃きてをさうておりの
引たて、おをむるより、こゝろ頼中將を
をもて、おをむるより、こゝろ頼中將を

嵯峨本平治

の性格を殊更に特性化した形跡も少くない。そして、かういふ傾向は、義平・義朝・頼朝・信頼・信西等の上にも固より見られるが、清盛と重盛との上には、ことさらに相反した性格を附與し、兩者を巧みに配合してあるのが際立つて目につく。即ち清盛は無能臆病漢とし、重盛は識見あり、情あり、勇氣あるあつばれの武將として面白く仕組まれてゐるのである。この物語においても、義朝・義平等は、敵を壓迫して優勝者の地位に立つべきものと見えた

このから抑いた自業自得であるとしても賢明にして識見の高かつた信西が非業の最期を遂げたところには、宿命の暗い影が躍つてゐるのが認められる。なほ熊野参詣の途中において、事變の起つたことを聞いて引返し、不用意のまま、勁敵に當つた平氏が、どう見ても勝手がなく、また合戦に際しても、絶えず源氏に壓迫されながら、不思議に勝者の地位に立つことになつたといふのも奇蹟であつて、やはり平氏の上にも、運命の手が加へられてゐるといふことは見逃せない。かういふ次第

表現形式などについて、平治に據つた形跡があらはに見えてゐる。また後代文學に題材として採られてゐる箇所についていへば、義朝野間 downward 忠致心替の事、「待賢門軍事」等が、特に目立つて多いのは、これ等が物語叙の眼目にして興味が深いためであらう。次に「當磐落つる事」「當磐六波羅に出づる事が多いのは、その事情が優しくあはれにして、世人の同情をひくことが強かつた爲めであらう。その他、「頼朝生捕らるゝ事」「悪源太誅せらるゝ事」「牛若與州 downward の事」「義朝青葉落着

等が白河上皇の三修殿を襲撃して、上皇を内裏に遷し奉らんとする段、岩崎家本は上皇の龍臣信西が難の免れ得ざるを知り、伊賀の山中で自害したのを、信頼方の者共がその首を取つてこれを獄門にさらす段、松平家本は上皇・主上・女院等が巧みに監視の目をぬすんで、内裏を逃れて清盛の邸六波羅に赴かれたのを、信頼が後に氣づいてくやしがる段である。軍記物語は勇壯活潑な鎌倉時代の好尚に應じて流行し、當時この種の物語を題材にした繪巻も多く作られたが、遺品の中でその

平治物語

平治物語上
...
...

(藏氏治簡井松) 語物治平本井松

平治物語上
...
...

(藏室究研語國大帝京東) 語物治平

平治物語卷中
六...
...

語物治平本峨嵯

平治物語卷第一
信頼信西不快事
竊惟ハ三皇五帝ノ國ヲ治四岳八元ノ民ヲナツク皆是器
ヲ見テ官ニ任シ身ヲ額テ禄ヲ請ル故也君臣ヲ撰テ官ヲ授
ケ臣已ラ計テ職ヲ受ル時ハ任ヲ委シ成ヲセムル事營セシメ
テ化スト云ヘリ故ニ舟航ノ船海ヲ渡必橈楫ノ功ナカリ鶴
鶴ノ鶴雲ヲ凌必羽翻ノ用ニヨル帝王ノ國ヲ治必馬弼ノ
助ニヨルト云々國ノ匡輔ハ必忠良ヲマツ任使其人ヲ得
時ハ天下有治ルト見ヘタリ古ヨリ今ニ至テ王者ノ人臣ヲ
賞ヌル和漢兩朝同ク文武二道ヲ以テ先トス文ヲ以テ八萬
機ノ政ヲラス武ヲ以テ八四海ノ亂ヲ治天下ヲ保國土ヲ

語物治平本字活古和元

製作の優秀を以て嶮然群を抜くものはこの三巻である。描寫纖秀、構圖布局の如きも周到を極めたもので、各場面事件の發展に伴ひ、抑揚頓挫の妙を見るべく、生氣潑刺として而も品致にも富んでゐる。蓋し藤原以來發達し來つた大和繪の技巧を洗練して、鎌倉繪卷がその達し得べき頂點を示した代表作の一と言ふ



するに至つたものであらう。(田中二)

陪從じゆう「東遊歌」を見よ。

平城京へいじやう 故實【解説】平城京址に關して記したるものには、夙く無名園古道著

「平城址跡考」、北浦定政著「平城大内裏坪割圖」等があるが、工學博士關野貞氏著「平城京及大内裏考」(東京帝國大學紀要工部第三冊)を以て、最も精細で且つ的確な文獻とする。又文學博士喜田貞吉氏の論文「平城京の四至を論

啓發に資するであらう。享保十四年の自序がある。(和田)

平水韻へいすい「韻」を見よ。

秉穗錄へいすい 隨筆 二編四卷【著者】岡田宜生【刊行】寛政七・十一年【解説】和漢の事物の稱謂、俗諺の所據、品物の源始等

から文字・訓詁等に至るまで、汎く史書に互つて簡單な考證を試みたもので、世諺等が和漢同揆であることを示した條が多い。著者は別

より歸朝。翌二年、異母弟伊豫親王・藤原宗成

桓武天皇

平城天皇

高岳親王

大江真人

嵯峨天皇

仁明天皇

阿保親王

在原行平

淳和天皇

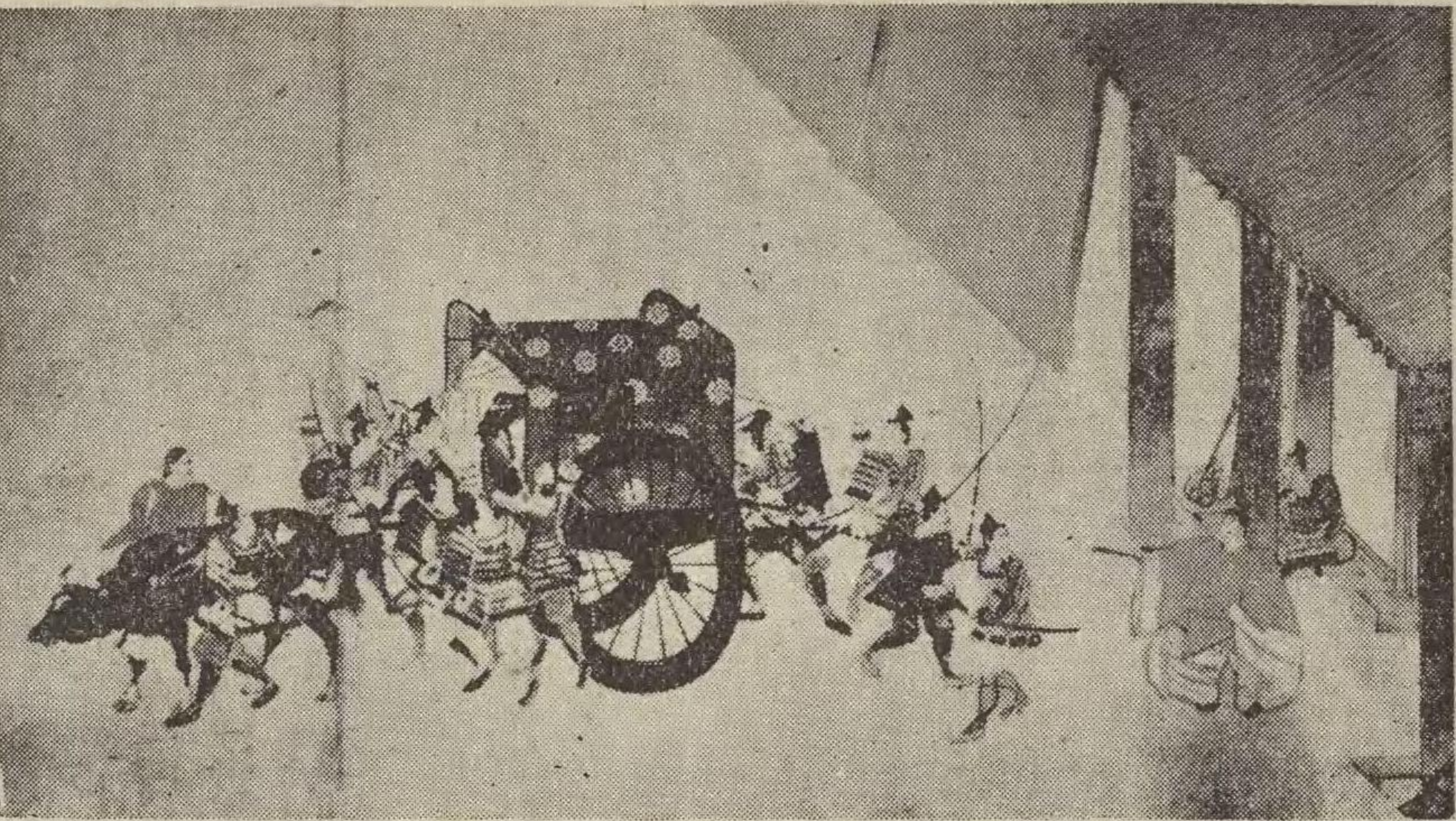
同

業平

伊豫親王

等の謀叛が發覺し、親王は御母と共に大和川原寺に幽閉され、間もなくそこで薨せられた。同四年帝御病篤く、遂に御位を皇太弟に譲ら

製作の優秀を以て嶄然群を抜くものはこの三巻である。描寫纖秀、構圖布局の如きも周到を極めたもので、各場面事件の發展に伴ひ、抑揚頓挫の妙を見るべく、生氣潑刺として而も品致にも富んでゐる。蓋し藤原以來發達し來つた大和繪の技巧を洗練して、鎌倉繪卷がその達し得べき頂點を示した代表作の一と言ふ



(藏 爵 伯 平 松) 卷 繪 語 物 治 平

べきもので、製作年代は當代中葉と思はれる。傳へて住吉慶恩の筆といふが、抑もこの人の存在は甚だ明かでない。思ふに新因果經繪の作者慶忍を讀み誤つたまふ徳川の初め住吉家を立てる際に、これをその家祖に祭りあげて更にこれ等の繪卷の筆者を、その人に附會

するに至つたものであらう。

陪從へいじゆう「東遊歌」を見よ。

平城京

關於記したものは、夙く無名園古道著「平城址跡考」、北浦定政著「平城大内裏坪割圖」等があるが、工學博士關野貞氏著「平城京及大内裏考」(東京帝國大學紀要工學部第三冊)を以て、最も精細で且つ的確な文獻とする。又文學博士喜田貞吉氏の論文「平城京の四至を論ず」(歴史地理八ノ二三四・五・七・八・九・一)も亦頗る有力な考説で、「平城京及大内裏考」と併せて必讀すべきものである。その他一般遺蹟名所等に關しては、丸屋勘兵衛著「平城坊目考」、金澤昇平著「平城坊目遺考」(一名奈良名所記)、太田叙親著「南都名所集」(近世文藝叢書二)、大久保秀興著「奈良名所八重櫻」、水木要太郎氏著「大和名所奈良のしるべ」、著者未詳「大和名所記」(續群書類第八、秋里離島著、大和名所圖會)等がある。又地圖には「和州南都繪圖」(安永七年)、宗孟實著「靈樂古今圖」(明治二十六年)等がある。

秉燭譚くわいしよ 隨筆 五卷 【著者】伊藤長胤(東進) 【刊行】寶曆十三年 【解説】著者の父仙齋が門人・故舊との間になした舊話に交へるに、自家の新説を以てしたものと云ふ意が自序中に見える。なほ該序の末に、「經旨大義、先子遺書具在、故不_レ多及_レ也、徒錄瑣事奇話、以示_レ後葉_二耳」とある。卷一に主明樂美御徳ノコト以下三十二則、卷二に大極殿ノコト以下三十四則、卷三に天行健ノコト以下四十一則、卷四に仰宇ノコト以下四十則、卷五に勝國ノコト以下四十四則を收む。和漢品物の稱謂・字義等に係る考説が多く、初學の

啓發に資するであらう。享保十四年の自序がある。

平水韻へいすい「韻」を見よ。

秉穗錄

岡田宜生 【刊行】寛政七・十一年 【解説】和漢の事物の稱謂、俗諺の所據、品物の源始等から文字・訓詁等に至るまで、汎く史書に互つて簡單な考證を試みたもので、世諺等が和漢同揆であることを示した條が多い。著者は別に「彼此合符」の一書を著したが、その餘材と視るべきものが本書に出てゐる。第一編卷之上に數に香の物以下、同卷之下に山谷の題、小景扇詩以下、第二編卷之上に岳嶽同字以下、同卷之下に東華以下、各數十則を載せてゐる。第一編に寛政六年雲霞堂老人(正親町實連)の題言、第二編に寛政十年恩田仲任の小引がある。

【著者小傳】岡田宜生。通稱彦左衛門、字は挺之、號は新川、暢園、朝陽、廿谷等。名古屋の儒家で藩塾教授、繼述館總裁。讀書該博を以て鳴つた。寛政十一年三月二十四日歿。享年六十三。劉向列仙傳「彼此合符」晞髮偶詠「常語數」等の著述がある。

平城天皇

後、安殿 【御諡】日本根子天排高彥尊小殿。後、安殿 【御諡】日本根子天排高彥尊【生歿】寶龜五年八月十五日御降誕、天長元年(一四八四)七月七日崩御。寶算五十一。【御陵】大和國生駒郡跡村佐紀【閔歷】桓武帝の皇長子。御母は藤原良繼の女乙牟漏。嵯峨・淳和兩帝の御兄にあらせらる。延暦二年九月皇太子早良親王廢せられ、十一月安殿親王御年十二にして皇太子とならせられ、同七年御元服。大同元年三月、父帝の崩御に遭ひ給ふ。五月御即位、御年三十三。この年空海(別項)唐

より歸朝。翌二年、異母弟伊豫親王・藤原宗成

桓武天皇

平城天皇

高岳親王

大江真人

嵯峨天皇

仁明天皇

阿保親王

在原行平

淳和天皇

同

藥平

伊豫親王

等の謀叛が發覺し、親王は御母と共に大和川原寺に幽閉され、間もなくそこで薨せられた。同四年帝御病篤く、遂に御位を皇太弟に譲られた。即ち嵯峨帝(別項)御即位あり、平城帝は太上天皇とならせられ、御子高岳親王が皇太子とならせらる。その後御病を諸所に養はれたが、遂に奈良の宮に居られ、なほ政務をもみなはせられた。この頃、尙侍藤原藥平、その兄仲成と共に帝の御寵愛を待みて權勢を擅にし、帝の聖明を覆ふことが多かつた。藥平は藤原種繼の女で、中納言藤原繩主に嫁して三男二女を生んだが、その長女が、平城帝の皇太子でおはした頃、選ばれて東宮に參つたので、母藥平も東宮宣旨となつて御殿に入出した。然るに父君桓武帝のお憎しみに遭ひ、出入を禁ぜられたこともあつた。併し帝は御即位の後、再び藥平を召して尙侍となし、寵幸甚だ厚かつた。ために弘仁元年九月、藥平は帝の重祚を謀り、太上天皇の命を偽つて都を奈良に遷さんとしたので、嵯峨帝は詔を下して藥平・仲成の罪を鳴らされた。平城帝大に怒つて畿内・紀伊の兵を徴し、藥平と共にされて東國に走られたが、仲成既に誅に服し、甲兵路を遮ると聞いて駕を還され、宮に入つて剃髮入道され(御年三十七)、藥平は毒を呷いで自殺した。又高岳親王を廢し、大伴親王(淳和帝)を立てて皇太弟とされた。同十二年空海に就いて灌頂せられた(當時の灌頂圖文一卷がある)。

同十四年淳和帝御即位。翌天長元年崩御。世に奈良の帝と申上げる。

【業績】帝は御幼少の頃より學を好まされ、文を善くし給うた。御即位の後、政務に御精勵遊ばされ、四方の奏請は御自ら裁斷し給うた。また行政整理をなして諸司を併合し、元員を淘汰し、官吏の減俸を實行し、或は采女を諸國より貢することを停め、節儉の範を垂れ給うた。薬子の變によつて一時聖明を覆うたことがあつたにしても、その御業績は逸するに出来ぬ。なほ安部眞直・出雲廣貞に命じて勅撰せしめられた「大同類聚方」百卷(醫書、御書堂文庫に數部の寫本がある)がある。御製詩は「凌雲集」「經國集」(上卷)に、歌は「古今集」「續後拾遺」「類聚國史」(卷三十一)等に載せられてゐる。

平淡美 平淡美「歌論」を見よ。
平亭銀鷄 平亭銀鷄「銀鷄」を見よ。

米點 米點「繪畫」【解説】文人畫乃至南宗畫(各別項)に於ける描法の一で、また米法とも云ふ。水墨の横點を重ねて峰巒の層翠滴るが如き趣や、雲雨烟嵐の滋潤な光景を、印象的に描出するものである。この法は、宋の文人畫家として名高い米芾(字元章)父子の創始するところと傳へられ、この故に、その一字を冠して米點と呼ぶのである。この點描法は、蕭散な畫趣を喜ぶ文人者流の畫技が、繪畫様式上の南宗畫として確立大成するや、この派の特殊な一描法として以後長く傳承されてゐる。 (田中二二)

【作者】曲亭馬琴【挿畫】葛飾北齋【名稱】



(傳畫國子芥) 點 米

全篇の主人公紅血・缺血の名から出たものである。【刊行】文化十年刊【諸本】間もなく版が焼けたので、文化十二年再刊され、安政五年には再摺された。【題材】繼子傳説を素材としたもので、説話の前半を謡曲「唐船」より、後半を「落窪物語」(別項)から取つてゐる。【梗概】明人朱縞と我が國人との間に生れた唐綺宗卿は、妻片塊と二女唐草紅血を伴ひて安房國に赴く途中、戰禍に身を投じて妻子を見失ひ、圖らずも里見義堯の姫君の難を救つた功によつて、その譜代の臣繼橋家に婿となり、素大夫と稱して鮮衣を配されるが、主家の寶刀織月を乞目の疊六といふ金剛神の通力を得た強盜に奪はれて所領を沒收される。かくて織月を探索して旅に出で、偶然鮮衣が金剛神の冥助によつて疊六を討つが、これを疑つて鮮衣を死に至らしめる。後、織月を得て所領を復し、又妻片塊、娘唐草紅血と會ふ。こゝに鮮衣の腹に出来た楓は、繼母等に虐待されて名も缺血と改められる。然るに紅血は

を諭し、又紅血を時忠の叔父正木時吉に嫁せしめた。

【構想】説話の基礎を最も著しく因果應報に置いてゐる。即ち朱縞が妻子を捨てて日本に來り、再び妻を娶つて子を儲けた業因が宗卿に報いて彼も亦二妻を娶るが、鮮衣は非命に終り、善良な缺血は繼母片塊に虐待されて泣き暮す。又紅血が身の不幸は、母の悪心の自然の應報に歸してゐる。而もその間、彼の武士的精神、儒教思想によつてこれを厳正に批判し、かの缺血と時忠との戀愛もその自由を許さず、手兒奈の神の夢に出づるものとしたといふやうな窮屈さはあるが、とにかく孝女缺血は最後に於て片塊を善心に立ち返らしめて大團圓となる。善は惡に打勝つといふ何處までも勸懲主義の下に筆を取つたもので、本篇は「三七全傳南柯夢」(別項)等の如く、著しく原説話を變化してはゐない。彼の理想を盛り、その小説觀に添はせるに不適當を感じることが多くなかつたからである。【價値】古傳説を全く自己のものに創造した脚色は巧妙なもので、そこに興味もある。親子三代に互つての因果應報の物語ではあるが、餘りに親の話に力が入り過ぎて、重んずべき缺血・紅血の話が輕んぜられた嫌ひがある。

【参考】馬琴研究藤村作(日本文學講座)【笹野平凡】小説【作者】二葉亭四迷【發表】明治四十年十月より東京朝日新聞に連載【刊行】同四十三年、二葉亭全集第一卷に採録。代表的名作選集・縮刷版二葉亭全集・現代日本文學全集等所収。【解説】二葉亭の三つの長篇小説中では最後の作品であり、且つ最も自叙傳的乃至自己告白的の要素を多分に含んでゐる作である。私は今年三十九に

もすれば單調平板に流れる弊を伴ひ易い。フランスのゾラの作品、例へば「居酒屋」の如きは、餘りに平面描寫が極端に走つて、却つて單調になつてゐる。又田山花袋の或る作品なども、平面描寫のために興味をそいでゐる。而して自然派文藝が、特に日本に於て衰微の兆を示すに至つた原因の一つは、確かにこの平面描寫の極端化にあつた。【宮島】

なる。人生五十が通り相場ならまだ今日明日穴へ入らうとも思はぬが、しかし未來は長いやうで短いものだ。まだまだと云つてゐる中にいつしかこの世の隙が明いて、もうおさらばといふ時節が來ると、自ら平凡人とよぶ一人の中年者古屋の回想が展開されてゐる。祖母に甘やかされて育つた幼年時代、地方の小吏の一人息子として成長した少年時代、父の窮屈な家計の中から無理にせがんで東京遊學を志した青年時代等、過去の幾多の出來事の回想が、それ／＼短篇小説のやうな效果をもつて描かれてゐる。幼い頃捨犬を拾つて來て育てたこと、十九の時上京して親戚筋に當る小狐三平の家に身を寄せ、娘の雪子に惚い戀をよせる青年の性にめざめる頃の心理描寫をよめる青年文藝家として世に出で、お糸とよぶ年増女との情事などの各場面の情景が殊に精細に、情趣深い筆で描寫されてゐる。これ等の描寫を一貫して二葉亭自身の犀利な文藝觀や人生觀が隨所に織りこまれてゐる。一篇の構想と云ひ、筋の展開と云ひ、独自の形式のもので、その藝術表現と文體も描寫說明的の技巧をつくつて自由に驅使されてゐる。ユーモアや皮肉もウキツトも、抑壓されずに十分に表白されてゐる。これ等の點は當時の自然主義一派の作品とは異り、寧ろ漱石等の所謂徘徊趣味又は餘裕派の作品に共通するやうにも見られる。その由來するところを見るには、露西亞の作家ゴッリやゴンチャロフ等のユーモアや、皮肉乃至は説明と描寫のあらゆる技巧を驅使する手法に溯らねばならぬ。自己告白的の要素、殊に青年期の性的生活と、その心理の描寫などは特筆すべきであると共に、自己並に社會一部の裏面の解剖乃

國民精神の振興、或は和衷協同精神の鼓吹に資するものたるべきこと等がそれである。【我が國に於けるページェント】民衆劇場論の類りに提唱され始めた大正十二年頃、坪内逍遙によつて、民衆劇の具體的一方策として見本的に紹介提唱され、我が國情と傳統とに立脚したページェント用脚本も創作された。「熱海の爲のページェント」「聖徳太子と惡魔」などがそれで、坪内博士指導の下に早稲

子、の創始するところと傳へられ、この故に、その一字を冠して米點と呼ぶのである。この點描法は、蕭散な畫趣を喜ぶ文人者流の畫技が、繪畫様式上の南宗畫として確立大成するや、この派の特殊な「描法」として以後長く傳承されてゐる。〔田中(一)〕

【作者】曲亭馬琴【挿畫】葛飾北齋【名稱】



(傳畫國子芥)

醜夫政田左文太と契つて子を産み、やがて子にも夫にも死に別れるが、缺皿が重臣正木時綱の息時忠と婚を結ぶに及んで、法會を營みて一家の死靈を除き、その餘徳は片塊の惡心

が輕んぜられた嫌ひがある。【参考】馬琴研究藤村作(日本文學講座)〔笹野〕

【平凡】小説【作者】二葉亭四迷【發表】明治四十年十月より東京朝日新聞に連載さる。【刊行】同四十二年、二葉亭全集第一卷に採録。代表的名作選集、縮刷版二葉亭全集、現代日本文學全集等所収。【解説】二葉亭の三つの長篇小説中では最後の作品であり、且つ最も自叙傳的乃至自己告白的要素を多分に含んでゐる作である。私は今年三十九に

十分に表白されてゐる。これ等の點は當時の自然主義一派の作品とは異り、寧ろ漱石等の所謂低徊趣味又は餘裕派の作品に共通するやうにも見られる。その由來するところを見るには、露西亞の作家ゴーゴリやゴンチャロフ等のユーモアや、皮肉乃至は説明と描寫のあらゆる技巧を驅使する手法に溯らねばならぬ。自己告白的要素、殊に青年期の性的生活と、その心理の描寫などは特筆すべきであると共に、自己並に社會一部の裏面の解剖乃

至は當時の文藝社會の裏面の批判的描寫は注目すべきである。【批評】標題とその内容とは近代露西亞の作家ゴンチャロフの作品に由來すると見られてゐる。併しこの作品に表現されたところの内容とその態度は、二葉亭の自叙傳的乃至自己告白的要素を中心として理解されるべきである。前年の「其面影」について「平凡」の發表されたのは、處女作「浮雲」以來、すでに滿二十年を経過して、自然主義一派の文藝運動の最高潮に到達しかけた時であつた。而も二葉亭がその派の先驅者のやうに見做されてゐたことが、彼自身にとつては可なり不満であつた事實は、この作品の中にも語られてゐる。元來二葉亭の作品に現れた現實主義の傳統は、近代露西亞文學のリアリズムのそれであつて、しかも一方に彼の文藝的の教養には、江戸時代後期の俗文學以來の小市民氣質が若干残つてゐたことも否み難い。二葉亭晩年の二作品「其面影」(別項)と「平凡」との文藝史的乃至は廣義の社會史的の意義と價値とに就いては、「浮雲」(別項)のそれは全然本質的に別個のものと思われ、且つ理解されるべきである。

いつもの高調な兆民の文體とは異つて、平易な問答體を採つてゐる所にも著者の用意が窺はれる。明治二十三年の國會開設を目前にして、國民を啓蒙し、議會政治に對する認識を正さうとしたので、議會制度そのものが常識的な英國に源を發してゐるだけに、フランス流の急進自由思想家であつた彼も、こゝでは穩健な説を述べてゐる。即ち國民の眞の代表たる代議士を議場に送るには、國民の正しい總意の反映によつてなされなければ意味がないことを諸外國を例として論じてゐる。非常に當時流行したパンフレットである。〔木村〕

もすれば單調平板に流れる弊を伴ひ易い。フランスのゾラの作品、例へば「居酒屋」の如きは、餘りに平面描寫が極端に走つて、却つて單調になつてゐる。又田山花袋の或る作品なども、平面描寫のために興味をそいでゐる。而して自然派文藝が、特に日本に於て衰微の兆を示すに至つた原因の一つは、確かにこの平面描寫の極端化にあつた。〔宮島〕

國民精神の振興、或は和衷協同精神の鼓吹に資するものたるべきこと等がそれである。【我が國に於けるページェント】民衆劇場論の頻りに提唱され始めた大正十二年頃、坪内逍遙によつて、民衆劇の具體的一方策として見本的に紹介提唱され、我が國情と傳統とに立脚したページェント用脚本も創作された。【熱海町の爲のページェント】「聖徳太子と惡魔」などがそれで、坪内博士指導の下に早稲田大學文學部内の文化事業研究會の手でその一部が試演されたりしたが、十分の成長を見ずじまつた。

【参考】明治文學研究號(早稻田文學)〇二葉亭四迷研究 藤森成吉

【平民の目さまし】(平民の目さまし)【別名】國會のこゝろえ【著者】中江篤介(兆民)【刊行】明治二十年八月、磯部太郎兵衛。後、明治文化全集第七卷政治篇に所収。【解説】第一章國會、第二章君主、第三章上院下院、第四章代議士の選舉人との關係、第五章代議士の任期、第六章選舉の方法、第七章選舉權並に被選舉權、第八章政府の組立、第九章憲法、第十章政黨、第十一章輿論の十一章から成り、

【参考】我がページェント劇坪内逍遙【飯塚】

【著者】藤原定家(大日本史に、未來記・雨中吟・三五記と共に假託の撰作してゐるのは常らぬ)

【名稱】「辭案集」ともいふ。【名義】本書中に他人の謬説を「辭事」「辭案の了簡也」などの如く記してゐる。定家本「古今集」の奥書にも、「辭案之好士」とある。本書の奥書に自らの説をも「管見謬説」と記してゐる點から、他人の謬説を「ひが事」と稱すると共に、自らのをも「辭案」と稱したものと考へられる。【諸本】群書類從二八八。刊年未詳の刊本(二冊)もある。【成立】定家は治承の頃、「古今」後撰・兩集に就いて、庭訓の口傳をその父俊成から受けてゐたが、先達古賢の註するところすら誤りがある位であるのに、まして自らは管見謬説であるからとて、口傳をも記載する所なくして年を経た。然るに餘命幾くもないことを察し、歿後に於て遺孤の蒙を教ふるため、要點を抽いて記載したのが本書であつて、時に嘉祿二年(興書)。定家はこれより先、貞應元年にも同種の記述をして「三代集之間事」(別項)

いつもの高調な兆民の文體とは異つて、平易な問答體を採つてゐる所にも著者の用意が窺はれる。明治二十三年の國會開設を目前にして、國民を啓蒙し、議會政治に對する認識を正さうとしたので、議會制度そのものが常識的な英國に源を發してゐるだけに、フランス流の急進自由思想家であつた彼も、こゝでは穩健な説を述べてゐる。即ち國民の眞の代表たる代議士を議場に送るには、國民の正しい總意の反映によつてなされなければ意味がないことを諸外國を例として論じてゐる。非常に當時流行したパンフレットである。〔木村〕

【平民の目さまし】(平民の目さまし)【別名】國會のこゝろえ【著者】中江篤介(兆民)【刊行】明治二十年八月、磯部太郎兵衛。後、明治文化全集第七卷政治篇に所収。【解説】第一章國會、第二章君主、第三章上院下院、第四章代議士の選舉人との關係、第五章代議士の任期、第六章選舉の方法、第七章選舉權並に被選舉權、第八章政府の組立、第九章憲法、第十章政黨、第十一章輿論の十一章から成り、

【参考】我がページェント劇坪内逍遙【飯塚】

【著者】藤原定家(大日本史に、未來記・雨中吟・三五記と共に假託の撰作してゐるのは常らぬ)

【名稱】「辭案集」ともいふ。【名義】本書中に他人の謬説を「辭事」「辭案の了簡也」などの如く記してゐる。定家本「古今集」の奥書にも、「辭案之好士」とある。本書の奥書に自らの説をも「管見謬説」と記してゐる點から、他人の謬説を「ひが事」と稱すると共に、自らのをも「辭案」と稱したものと考へられる。【諸本】群書類從二八八。刊年未詳の刊本(二冊)もある。【成立】定家は治承の頃、「古今」後撰・兩集に就いて、庭訓の口傳をその父俊成から受けてゐたが、先達古賢の註するところすら誤りがある位であるのに、まして自らは管見謬説であるからとて、口傳をも記載する所なくして年を経た。然るに餘命幾くもないことを察し、歿後に於て遺孤の蒙を教ふるため、要點を抽いて記載したのが本書であつて、時に嘉祿二年(興書)。定家はこれより先、貞應元年にも同種の記述をして「三代集之間事」(別項)

十分の成長を見ずじまつた。

を残してゐるから「僻案抄」の記載までは口傳を書きとめなかつたといふのは主観的な表現である。と解せねばならぬ。記載の後は拾遺相公(侍従參議爲家)の外には誰にも見せなかつたが、嘉禎四年に至り前員外典既(末名未勅)の懇望により一見を許した旨、延應元年六月の奥書もある。嘉祿には、定家は所謂嘉祿本「古今集」を書寫したこゝになつてをり、嘉祿本は冷泉家の傳本となつたといはれてゐる。又本書の奥書と大部分共通な奥書のある「古今集注」五冊(寫圖書院藏)には、同書を爲相から大江廣貞に傳へる旨の奥書がある。これによつて本書も亦冷泉家に用ひられたのではないかと察せられる。また飛鳥井雅有が本書を所持してゐたことが、彼の日記「春能深山路」六月十一日の條に見えてゐる。【解説】「古今」後撰「拾遺」の三集に就いて、難語の註、本文の批評等を行つたものであるが、奥書に「古今」後撰「拾遺」の口傳を受くことあり、「三代集之間事」に「拾遺」は口傳なしとあるから「拾遺集」に就いては定家自ら註したものであらう。「古今集」は、「袖ひぢて結びし水の云々」に於ける「ひぢて」の註を初めとして短歌六十一首、長歌一首、旋頭歌一首、單語として「まくら詞」「をがたまの木」以下數項に就いて註し、「後撰集」は「ふる雪のみのしろ衣」に於ける「みのしろ衣」の註を初め、短歌四十六首を註する外、作者考二を試み、「拾遺集」は「うちきらし雪はふりつゝ」に於ける「うちきらし」の註を初め、短歌十四首を註してゐる。このうち、「古今」後撰「兩集」に關するものは、俊成からの開書が骨子とされてをり、俊成は説を基俊に受けただのであるから、俊成の立場からは、「金吾申されけるは」などとあり、定家の立場からは、

「庭訓如此」の如く記されてゐる。註には「萬葉集」「源氏物語」「狭衣物語」などを引用し、「狭衣物語」に就いては、「裸子内親王(前齋院)宣旨つくりたりときこゆ」と記してゐる。その他、「和歌論義」「綺語抄」「佐國の目録」「資房卿記」などの書名も見える。さて「古今集」に於ては、人々が貫之自筆本(恐らくは崇徳院御本)を信用して本文の解釋を進めてゐるのを非とし、その本は貫之自筆でないといひ、「後撰集」に於ては、清輔本に對抗して家本並に定家が校合に用ひた行成筆本の説をあげてゐる。清輔俊成は、甚だしい對抗をしてゐたが、清輔が崇徳院に奉つた抄物、二條院に奉つた「奥義抄」を俊成が一覽せしめられた時の顛末が本書に記されてゐる。本書は、「顯註密勸(別項)ほどには流行しなかつたものか、兼良の「古今集童蒙抄」(別項)に、「うちまかせては世に廣がらざれども近年聞き傳へて寫しおける人も侍るにや」とある。【類書】三抄抄三卷。

【参考】國文學研究史野村八良 【西下】
碧玉集 へきぎよ 歌集【著者】冷泉政爲
 【別名】「政爲卿碧玉集」「政爲和歌集」【諸本】三冊本・二冊本・一冊本の種々別本が存するがすべて同系の書である。三冊本は、寛文十二年の刊本、他は寫本であつて、内閣文庫の藏本によれば、二冊本には學習院藏印があり、一冊本には淺草文庫藏印があるのみで、寫本の年代共に不明。淺草文庫本(政爲卿碧玉集)とあり、半紙型本には、朱筆で多くの校合と註書が入つてゐる。【内容】計千三百餘首の歌を春・夏・秋・冬・戀・雜の六部立に分類したもの。大部分が題詠である。詠出年處の附註を見るに、大部分が禁中月次歌會で、明應・永正・文龜と云ふあたりのものが殊更目立つ。殆ど毎月缺けることなく歌會が二十四五日の交に催されたことが知られる。なほ宗祇忌に於ける張行追善詠の頻出することは、その寂後、永く追慕された一證となり得るであらう。東常和・鴨長恒・三條西實香の名も屢々出てくる。【價值】冷泉爲尹からは釋正徹のやうな天才が現はれ、二條派に對して冷泉派の特質を高揚すること尠少でなかつた。而もその血族的後繼者は、冷泉爲之にせよ、同持爲にせよ、何等の活躍發展を示さなかつた。正徹門の秀才に全然一蹴されてしまつた觀がある。持爲の方は下冷泉家を立てたのであるが、その後繼者が、即ち「碧玉集」の著者冷泉政爲なのである。後相原帝・宗祇・實隆と同時代に歌壇に立ち、かなり精進努力もしたらしいが、宗祇や肖相やの諸星の光のためにその影は甚だうすい。が、これはその歌調の平板單一であると云ふ弊の點にも歸すべきである。

行年の雲のかよひ吹きわけてけふや立つらん春の初風(慶應立卷)
 浪かすむ入江をとをみ青柳のみどりのまほはさにかにもなし(江野柳)
 こゝに例示した程度の新鮮ささへ、その歌集から求めるに甚だ困難であると言ひたい。随つて後世二條派から歡迎された理由も首肯される譯で、「碧玉集」(別項)の一に數へられたやうに、殆ど反二條派的新味は詠出されてない。【註解書】「三玉桃事抄」五卷(享保八年刊)は野村尚房が「三玉集」中より、和漢の故事を詠んだ歌七百四十五首を選出し、計百三十餘部に互る諸典を引用してその故事に解註を施したものである。【未書】「三玉和歌集類題」七卷(寛政四年刊)は松井幸隆の編輯による「三玉集」の類題別で、かうしたものが上載されてゐる

ことは、近世に於て「三玉集」の行はれた一證左と見てよい。
碧梧桐 へきぎよ 俳人【本名】河東兼五郎(齋藤清)
 【別號】海紅堂主人【流派】正岡子規に學ぶ。子規歿後、新傾向(別項)の一派を立つ。【閱歴】明治六年二月二十三日、伊豫松山市千舟町七十六番地に生る。父は坤、號を靜溪といふ。母はせい。同二十七年六月松山中學校を卒業し、同年九月京都第三高等學校に入學、翌年九月仙臺第二高等學校に移り、同年十一月退學して東京に假寓した。同二十八年新聞「日本」に入社。
 同三十九年八月日本全國行脚の途に上り、同四十四年



河東兼五郎 碧梧桐
 本全國行脚の途に上り、同四十四年

行脚を終つた。爾來政教社同人として、「日本及日本人」(別項)の編輯に與り、新聞「日本」時代より繼承せる「日本俳句」欄を擔任した。大正八年、大阪に創刊された大正日日新聞に入社。間もなく同社解散後、同九年十二月歐米漫遊の途に上り、同十一年一月歸朝。これより先、大正四年三月俳句雜誌「海紅」(別項)を創刊したが、後これを中塚一碧樓に譲つた。歐米より歸朝後、同十二年二月個人雜誌「碧」を刊行し、同十四年三月同人雜誌「三味」(別項)を刊行した。昭和七年「三味」を解消して、新に「壬申帖」を以て同門の作品を世に問ふ事となつた。又、昭和八年三月、還曆に際して俳壇引退を聲明した。【著作】俳句評釋「俳句初歩」(數帳つり草)(續春夏秋冬(別項))。○三千里(續三千里(各別項))。○日本の山水(南アルプ

ス縦走記○新俳句研究談○日本俳句鈔第一、第二(別項)○八年間(句集)(別項)○碧梧桐は斯ういふ○畫人蕪村○蕪村新十一部集○新興俳句への道○碧梧桐句集(別項)等。
 【批評】子規在世の頃から、門下の二俊秀として碧梧桐・虚子と並び稱せられ、個人的に子規に親炙することも最も深く、俳句道に於ける子規の衣鉢を嗣ぐ事もこの二人であると一般から目せられてゐたが、その性格に於て氣稟に於て、この二人には大なる相異があつた。

更に劃期的なる開展を成し遂げられた。その間、常に第一線に立つて、言説と試作とを以て後進を指導し、且つ自ら幾多の優れたる句作を公にしつゝ新進作家を統率していつた。その大旅行の後、新傾向運動唯一の機關雜誌であつた「層雲」(別項)に於て、井泉水と主張を異にして分離し、新に「海紅」を興したが、又編輯者と主張を異にして袂を分ち、次に「三味」を興したが、更に又編輯者と主張を異にして相乖くに至つた。且つ雜誌「日本及日本人

字【刊行】大正五年二月、俳書堂【由来】内容【乙字】碧梧桐の俳句を「新俳句」春夏秋冬冬三續春夏秋冬二數帳釣草「日本俳句鈔」新傾向句集、俳誌「ホトトギス」日本新聞切抜帳等から選抜したもので、約千四百句收められてゐる。乙字がその序文中に、「感覺の鋭敏さに於ては碧梧桐は稀有の人である(中略)。調子のうまいことも碧梧桐の特色に數へなければならぬ(中略)。藝術の爲めの藝術として

卯正月元日より起り、寛正元年庚辰、同二年辛巳、同三年壬午、同四年癸未(この分には缺文がある)に至り、同五年甲申は全く缺く。次に同六年乙酉に缺文あり、應仁元年丁亥は全く缺く。次に同二年戊子に至る前後七年の日記である。禪林諸僧の往來、詩文の贈答等に關することが多い。應仁二年三月七日の條に、「前關白一條殿下、賜碧山目錄之序一篇」とあり、同十五日の條に、「與左太史長公、謁

「をがたまの木」以下數項に就いて註し、「後撰集」は「ふる雪のみのしろ衣」に於ける「みのしろ衣」の註を初め、短歌四十六首を註する外、作者考二を試み、「拾遺集」は「うちきらし雪はふりつゝ」に於ける「うちきらし」の註を初め、短歌十四首を註してゐる。このうち、「古今」は「後撰」兩集に關するものは、俊成からの開書が骨子とされてをり、俊成は説を基俊に受けただであるから、俊成の立場からは、「金吾申されけるは」などとあり、定家の立場からは、

年の刊本、他は寫本であつて、内閣文庫の藏本によれば、二冊本には學習院藏印があり、一冊本には淺草文庫藏印があるのみで、寫本の年代共に不明。淺草文庫本（政爲卿碧玉集）とあり、半紙型本には、朱筆で多くの校合と註書が入つてゐる。【内容】計千三百餘首の歌を春・夏・秋・冬・戀の六部立に分類したもの。大部分が題詠である。詠出年處の附註を見るに、大部分が禁中月次歌會で、明應・永正・文龜と云ふあたりのもが殊更目立つ。殆ど毎

つて後世二條派から歓迎された理由も首肯される譯で、「三玉集」(別項)の一に數へられたやうに、殆ど反二條派の趣味は詠出されてない。【註解書】「三玉集抄」(五卷、享保八年刊)は野村尚房が「三玉集」中より、和漢の故事を詠んだ歌七百四十五首を選出し、計百三十餘部に互る諸典を引用してその故事に註を施したものである。【未書】「三玉和歌集類題」(七卷、寛政四年刊)は松井幸隆の編輯による「三玉集」の類題別で、かうしたものが上載されてゐる

り先、大正四年三月俳句雜誌「海紅」(別項)を創刊したが、後これを中塚一碧樓に譲つた。歐米より歸朝後、同十二年二月個人雜誌「碧」を刊行し、同十四年三月同人雜誌「三味」(別項)を刊行した。昭和七年「三味」を解消して、新に「壬申帖」を以て同門の作品を世に問ふ事となつた。又、昭和八年三月、還曆に際して俳壇引退を聲明した。【著作】俳句評釋「俳句初歩」(蚊帳つり草)續春夏秋冬(別項)○三千里○續三千里(各別項)○日本の山水○南アルプ

ス縦走記○新俳句研究談○日本俳句鈔第一、第二(別項)○八年間(句集)(別項)○碧梧桐は斯ういふ○畫人雜料○雜料新十一部集○新興俳句への道○碧梧桐句集(別項)等。

【批評】子規在世の頃から、門下の二俊秀として碧梧桐・虚子と並び稱せられ、個人的に子規に親炙することも最も深く、俳句道に於ける子規の衣鉢を嗣ぐ事もこの二人であるとい一般から目せられてゐたが、その性格に於て氣稟に於て、この二人には大なる相異があつた。従つてその作品も各々好む所を異にする傾きがあつたけれども、それも各自の特色として子規の指導に統率せられてゐた。虚子は雜誌「ホトトギス」(別項)を主宰經營して、子規の主張を一般的に普及することに努め、碧梧桐は日本俳句欄を擔任して子規の句骨を藝術的に向上せしめようとした。これもその性格に適應した任處を得た譯であるが、子規の歿後はこの二人の氣稟に依る行き方が著しく分れて來た。虚子は一時(漱石歸朝の後)、小説に没頭して俳句から遠ざかつた觀のある時、碧梧桐は子規の單純なる寫生主義の行詰つてゐる事を感じて、如何にもしてそれを打開せんものとなつた。その頃の碧門に、東京には六花・碧童等の新進氣鋭の作家があり、地方には八重櫻・師竹の如き人々があつて、或は俳三昧に夜を徹し、一題百句に心を砕く等、その精進ぶりは血のじむやうなもので、その間から所謂新傾向運動は興つた。この新傾向運動は碧梧桐の全國行脚に依つて、全国的に擴大せられた。尤も新聞「日本」及び雜誌「日本及日本人」といふ好き機關がその宣傳効果を扶けた。而して新傾向運動の内容そのものが行脚した各地に於ける青年作家の新しい研鑽に依つて、

更に劃期的なる開展を成し遂げられた。その間、常に第一線に立つて、言説と試作とを以て後進を指導し、且つ自ら幾多の優れたる句作を公にしつゝ新進作家を統率していつた。その大旅行の後、新傾向運動唯一の機關雜誌であつた「層雲」(別項)に於て、井泉水と主張を異にして分離し、新に「海紅」を興したが、又編輯者と主張を異にして袂を分ち、次に「三味」を興したが、更に又編輯者と主張を異にして相垂くに至つた。且つ雜誌「日本及日本人」も亦分解作用を起す等、分裂に次ぐに分裂を以てして、今彼は「壬申帖」の孤壘に據つてゐる。社會的にさうであつた如く、彼の句風も實に速度的に變遷推移した。これでは追隨して行く者が段々少くなるのも當然だが、その句質も最近に於ては難解極まるものになつたことが彼を孤獨にした所以であらう。彼は初めより日本俳句に於て向上の聖道に専念し、續く者なくとも吾獨り往かんといふ意氣を以て貫いて來たので、最近ルビ付の句を作るなど、藝術的に疑問に思はれる如き點は遺憾であるけれども、併し又通俗に迎合せんとせずして、己の信する所に殉じようとするその詩人的の行き方は壯とすべきでもある。蓋し明治大正俳句史に於て史的に概観するとなれば、第一期の中心人物は子規であり、第二期の中心人物は碧梧桐である事に異議はあるまい。子規は事業上の成功者であるが、作品としては、子規よりも碧梧桐の方に優秀なる作が多い。これは碧梧桐が子規より長生した爲め、又時代であるといふためばかりではなく、時代を解した爲め、又作家的の天分のためでもある。

【刊行】大正五年二月、俳書堂。(由来・内容)乙字が碧梧桐の俳句を「新俳句」春夏秋冬冬「續春夏秋冬」蚊帳釣草「日本俳句鈔」新傾向句集、俳誌「ホトトギス」日本新聞切抜帳等から選抜したもので、約千四百句收められてゐる。乙字がその序文中に、「感覺の鋭敏さに於ては碧梧桐は稀有の人である(中略)。調子のうまいことも碧梧桐の特色に數へなければならぬ(中略)。藝術の爲めの藝術としての俳句は、子規・碧梧桐に至つて完成されたといつてもよいのである」といひ、その凡例中に「新俳句より採録せる句は、歴史的價値を較量したるなり」と云ひ、「新傾向と言はれたるもの前半は可、後半は不可、全く其質を異にする。明治四十二年以後のものは僅に兩三句を選ぶ」と云つてゐるやうに、乙字のかうした見解によつて選ばれた句集で、それは碧梧桐の句集であると共に、乙字が凡例中に「本集編纂は余の評論の一部也」と云つてゐるやうに、碧梧桐の作句に對する乙字の批判でもある。そして又新傾向以前の碧梧桐句集であるともいへる。

【碧童】(白田) 俳人「本名」小澤忠兵衛(別號)仲丙(流派)碧梧桐門(閱歴)明治十四年十一月十四日東京日本橋區本船町に生る。家は魚河岸の西徳といふ問屋である。年少の頃より俳句を好み、後、碧梧桐に師事してより認められるに至り、明治三十六年「西行百句」を吟じてより名を成した。子規歿後の日本俳句時代に於ける屈指の作家である。新傾向運動興つてより以後は、往年の如き力作を見せず、店も亦、實務を他に任して、下谷根岸に閑居し、家傳の目薬を練りながら、書と篆刻とに専ら親しんでゐる。俳句の作品は、「續春夏秋冬」日本俳句鈔第一集に多く見られる。【參考】明治大正文學全集和歌俳句篇○現代日本文學全集現代俳句集 (荻原) 碧瑠璃園(渡邊實守)を見よ。

【碧山日録】(荻原) 日記 五卷【著者】太極正易(諸本)史籍集覽所收【解説】漢文を以て記された正易の日記である。太極正易は、東福寺の禪僧で、碧山は東福寺境内の一菴に名づけたものである。慧鳳の「竹居清事」(別項)に、太極正易の燕居せる吾雲軒の記があつて、「吾曾披北戸一坐、前山蕩々、以來碧而集乎吾懷焉、因以碧山佳處(命矣)」とある。この書、長祿三年五月七日の條に、「攤朽册於碧山窓下、得往年予之所賦偈頌若干篇、從此逐日記之」とある。乃ちこの書を「碧山日録」と題したものである。長祿三年已

【碧梧桐句集】(荻原) 俳句集【撰者】大須賀乙

【平秩東作】(初代) (ハッ) 狂歌師・戯作者・儒者【本名】立松懷之。字は子玉、通稱稻毛屋金右衛門【號】東家・嘉德庵【生歿】享保十一年江戸内藤新宿の家に生れ、寛政元年(二四四九)三月八日に歿した。享年六十四【法名】釋宗專【墓所】牛込區市ヶ谷富久町善慶寺【閱歴】父は太郎右衛門といひ、尾張國海

六五七

西郡平島新田に生れた。元祿年間に江戸に來つて武家奉公をした末に、内藤新宿に馬宿を營む稻毛屋金右衛門からその株を買ひ、名も



平秩東作

そのまゝ譲り受けて馬宿業を営み、傍ら甲州煙草を鬻いでゐたが、東作が十歳の時、四十九歳で歿した。東作は十四の歳から母を助け、家業に當り、その餘暇に學問にも勵んだ。そして川名林助・内山椿軒・平賀源内・唐衣橋洲・朱樂菅江・大田南畝、その他の人々とも識り、橋洲等によつて勃興した狂歌にも手を染め、狂歌師として知らるゝに至り、その豊富な才分から、戯作や淨瑠璃にも筆を執つた。しかも東作は企業家たらしとして、安永年間には伊豆の天城山に炭を焼いて、それを賣り弘めようとしたり、天明三年(五十八歳)には、蝦夷地に渡つて計畫するところがあつたりして、世人からは山師を以て目された。さうかと思ふと、一時儒者として立つてゐたこともあり、また中年から眞宗の他力の信仰に入り、五十四歳で剃髮、黒髮をおろし大根法の道ほとけのそばや近づきぬらん」なども詠じてゐる。その性格が複雑で、一部から誤解もされたが、根は好人物で、狂歌の仲間などから

は大に慕はれてゐたことが、追悼集その他によつて知られる。

【著作】怪談老の杖(殘闕本、新燕石十種第三に收む) ○水濃行方五卷五册(別項) ○二國連壁談(殘闕本、新燕石十種第五に收む) ○納大刀響鑑一册(紀上太郎・松實四と合作。刊、未覆刻) ○當世阿多福假面一册(別項) (刊、日本名著全集滑稽本集に收む) ○狂歌師細見一册(刊、未覆刻) ○歌帳帳一卷(未刊) ○東遊記二卷(未刊) ○華野若談(別項) (續燕石十種第一・江戸叢書卷十一に收む) ○東作遺稿(新燕石十種第三に收む) ○吉原燈籠評判一册(刊) ○永福帳 ○華野雜談 ○四谷の風 ○東作鼠百首 ○嘉種庵家集(以上五種所在不明)。

【附記】東作の傳記の從來傳へらるゝものは、



東作

平秩東作筆蹟(山人判取帖)

誤謬極めて多く、「先哲叢談」續篇所載のもの是最もそれが甚しい。なほ洒落本の「騷者三友(別項)には、中に東作の噂も記されてゐるところから、東作の作といふ人もあるが、從ひ難い。

【参考】平秩東作の傳 四世繪馬屋額輔(風俗畫報一四八・二五〇) ○平秩東作と其著東遊記について 花見朔巳(日本近世史談の内) ○平秩東作の東遊記 三田村杏魚(旅と傳説昭和五ノ六) ○東作翁六十の賀野崎左文(今昔昭和六ノ七) ○平秩東作雜話 森三(歴史地理大正一五ノ九一・二〇) ○平秩東作の歌帳帳同上(旅と傳説昭和六ノ二) ○悼東作翁夷曲歌同上(今昔昭和六ノ六) ○平秩東作の生涯 同上(國語國文昭和八ノ七八)

平秩東作(二世) (トウサク) 狂歌師 【本名】鈴木光村 【別名】平秩庵・平原屋 【生歿】寶曆八年に生れ、文政八年(二四八)八月二十日歿す。享年六十八。 【開歴】江戸の郊外豊島村の紀州明神の祠官であつた。芍薬亭長根(別項)に隨つて、狂歌の判者となつた。初代東作とは別に關係がなかつたのではないかと思はれる。文化十二年十月二十一日に千住で催された酒合戦には、この二世東作が酒量を記したことが「後水鳥記」に見えてゐる。

【参考】後平秩庵東作碑 芍薬亭長根(芍薬亭文集初篇の内) ○平秩東作の生涯(下) 森三(國語國文昭和八ノ八) 【野崎・森】 濟西遊話 (トウサク) 黄表紙 三册 十五丁十七圖 【作者】曲亭馬琴 【書工】喜多川秀麿 【名稱】花浴之水、浪速風爐の角書がある。 【刊行】享和三年 【諸本】明治三十七年、大阪鹿田靜七版。後摺本がある。 【解説】西鶴の「名残の友(別項)に擬した目錄が附いてゐる。(一)商賣に抜目のない上方者が鹽風呂、藥風呂からの案じで、道三湯をたてて人を入浴させ、金を儲けた話。(二)京と江戸の言葉の比較。(三)五十三次の誦誦。(四)寢小便と灸。(五)頭のとつべんより上の妙藥。

(六)相の山の話。(七)尾張津島天王の祭。(八)近江八景。(九)風流茶屋の話。(一〇)淨瑠璃と頼杖。(一一)伊勢路の据風呂。(一二)江戸最良客の洒落。(一三)宇治黄檗寺での洒落。(一四)手跡執心の男の洒落。(一五)伊賀越の旅人の失敗。(一六)嘘つき名人齋藤文次の話。以上十六の小咄が集めてある。黄表紙としては異體で、「騎旅漫録(別項)中の記事と材料の一部が共通してゐる。 【小池】 別源圖旨 (トウサク) 圓旨を見よ。

別座鋪 (トウサク) 俳諧集 一册 【編者】子珊 【本稱】題簽に「別座鋪」とある。 【名義】巻頭の歌仙の芭蕉の發句「紫陽草や藪を小庭の別座鋪」の句によつて名づけたのである。 【刊行】元祿七年 【諸本】寶曆二年橋屋治兵衛の覆刻本があり、これには芭蕉の「贈桃隣新宅自畫自讚」の「寒からぬ露や牡丹の花の露」の句のところに、「芭蕉翁圖、二調寫之」として牡丹の後ろに屋根らしいものが見えて遠くに時鳥の飛んでゐる畫が挿まれてゐるが、果して原畫が芭蕉の筆であるかどうか明かでない。なほこれは漢字假名を勝手に改め、語句の誤や誤脱がある。この寶曆本が其成の「俳諧新七部集(文政十一年)にも收められてゐる。「蕉門珍書百種」や俳書大系の「蕉門俳諧前集」には元祿本が收められてゐる。 【内容】本書の成つた由來は子珊の自序に大體述べられてゐるが、芭蕉が元祿七年に西國行脚を思ひ立つて最後の旅に出る時、その出發前に門人子珊が芭蕉を自分の別屋に招いて錢別の會を開き、俳諧に對する芭蕉の意見を尋ね、芭蕉の發句を乞つて歌仙を巻いた。この歌仙を本として本集を撰し、これを郷里に帶在の芭蕉に送つたのである。内容は巻頭に芭蕉子珊 杉

甘美なロマンチズムから、自然主義思潮に動かされようとするあとが著しい。 【土岐】 紅血 缺血 (トウサク) 説話 【解説】馬琴の「血血郷談(別項)に久米の血山の古歌を引いて、戀娘・實娘の二人の同胞の争ひを説いた趣向は、シンドレラ姫物語の筋を引いた日本の昔話の復活であつた。現在ある形は既にやゝ壊れてゐるけれども、やはり血に鹽と松の葉とを載せて出して、二人に歌を詠ませて見た

た。併し自惚はなくとも、さすがに春を思はない譯もなく、秘かに妻にと望んでゐる娘があつた。それは猿樂町の藥種屋仁壽堂の主人の妹で、今年十七のお濱だつた。開店以來第一のお得意場として出入してゐるうち、娘がいつも笑顔で迎へるのをわが様の可笑しさ故とも知らずに、店を手傳つてゐる主人の従弟定二郎から惡戯にお濱の方にも氣があると聞かされて、傳吉は眞剣に戀する身になつた。

風・桃隣・八桑五吟歌仙、外に桃隣・杉風・子珊・李里・八桑・子珊・太夫・龜水・楚舟九吟歌仙、八桑・楚舟・桃隣・子珊・杉風・龜水・李里・太夫・子珊九吟歌仙、子珊・杉風兩吟歌仙、滄波・杉風兩吟歌仙の四歌仙と夏の發句八十一句、それに錢別句二十二句と、素齋全故の「贈芭蕉(芭蕉別辭)が加へられてゐる。 【價值】本書は芭蕉晩年の俳風を代表すべき撰集の一である。許六は「別座鋪」炭俵の風熱吟せよとる人、いか

【從島】に據り、主として古俳書十俳人の研鑽に力を注いでゐる。 【編著】文章集 ○丙寅句鈔 ○丁卯句鈔 ○戊辰句鈔 ○己巳句鈔 ○庚午句鈔 ○家集雁來紅等。又俳人眞蹟全集第二編「談林時代(平凡社)を編述し、その他蕉門珍書百種(神戸なつめ屋)の解説を執筆すること三十五編に及んだ。 【作風】季題を尊重し詩形の破壊や淺薄な客觀寫生主義を排けると自ら主張してゐる。 【志田】

しかも東作は企業家たらんとして、安永年間には伊豆の天城山に炭を焼いて、それを賣り弘めようとしたり、天明三年(五十八歳)には、蝦夷地に渡つて計畫するところがあつたりして、世人からは山師を以て目された。さうかと思ふと、一時儒者として立つてゐたこともあり、また中年から眞宗の他力の信仰に入り、五十四歳で剃髮、黒髮をおろし大根法の道ほとけのそばや近づきぬらん」なども詠じてゐる。その性格が複雑で、一部から誤解もされたが、根は好人物で、狂歌の仲間などから

誤謬極めて多く、「先哲叢談」續篇所載のものも最もそれが甚しい。なほ洒落本の「騷者三友」(別項)には、中に東作の噂も記されてゐるところから、東作の作といふ人もあるが、從ひ難い。

冊 十五丁十七圖【作者】曲亭馬琴【書工】喜多川秀磨【名稱】花浴之水、浪速風爐の角書がある。【刊行】享和三年【諸本】明治三十七年、大阪鹿田静七版。後摺本がある。【解説】西鶴の「名残の友」(別項)に擬した目録が附いてゐる。(一)商賣に抜目のない上方者が鹽風呂、藥風呂からの案じて、道三湯をたてて人を入浴させ、金を儲けた話。(二)京と江戸の言葉の比較。(三)五十三次の誦誦。(四)寢小便と灸。(五)頭のでつべんより上の妙藥。

た。併し自惚はなくとも、さすがに春を思はない譯もなく、秘かに妻にと望んでゐる娘があつた。それは猿樂町の藥種屋仁壽堂の主人の妹で、今年十七のお濱だつた。開店以來第一のお得意場として出入してゐるうち、娘がいつも笑顔で迎へるのをわが様の可笑しき故とも知らずに、店を手傳つてゐる主人の従弟定二郎から悪戯にお濱の方にも氣があると聞かされて、傳吉は眞剣に戀する身になつた。お濱ほどの娘をわが妻に出来る——と、その思ひで有頂天になつて、定二郎に意中を打明けて媒を頼み、機嫌とりに度々小料理屋へ誘つた。定二郎は笑止に堪へかねたが御馳走のなり得とばかり、その都度出鱈目の色よい返事ばかりを聞かせ、傳吉の弱みにつけこんで吉原遊びに引出したり、小遣の時借りをしたりしてゐた。その金が百圓近くも積つた上、度重なる遊びの費用で傳吉の貯蓄もなくなつて、商賣にも差し問へるやうになつたので、店を抵當に高利の金を借りましたが、期限が來ても別に返済のアテはなかつた。傳吉はふと知合ひの質屋の番頭常藏が小金を持つてゐるのを知り融通を頼むと、仁壽堂が保證に立つならといふ返事だつた。そこで主人に願つてくれるやうに定二郎に頼んだが、それを取次がないうちに、いよいよ期限の日になつた。傳吉は窮餘の一策として常藏から一判で金を出させようと、小料理屋で酔ひつづして承知させるつもりが駄目だつたので、吉原へ連れこんで遊ばせた歸途、吉原田圃で手拭で絞殺して金を奪つた。——併しもう期限が切れて店は救へなかつたし、罪の苛責に懊惱してゐる傳吉は日ならずして捕はれた。その時までも、傳吉はまだ定二郎の言葉を信じてゐ

風・桃隣・八桑五吟歌仙、外に桃隣・杉風・子珊・李里・八桑・子祐・太夫・龜水・楚舟九吟歌仙、八桑・楚舟・桃隣・子珊・杉風・龜水・李里・太夫・子祐九吟歌仙、子珊・杉風兩吟歌仙、滄波・杉風兩吟歌仙の四歌仙と夏の發句八十一句、それらに錢別句二十二句と、素齋全故の「贈芭蕉」錢別辭が加へられてゐる。【價值】本書は芭蕉晩年の俳風を代表すべき撰集の一である。許六は「別座鋪・炭俵の風熱吟せざる人、いかに後猿の風に飛入る事を得んや」(俳諧問答)と論じ、五明も本集を草の格の中に數へてゐる(小夜話)。子珊の自序によると、芭蕉が「今思ふ體は淺き砂川を見る如く、句の形付心共に輕きなり。其所に至りて意味あり」と云つたとあつて、本集の調は「炭俵」(別項)と共に輕みのものである。「續猿蓑」(別項)の如きもこれ等兩集の輕みの延長に過ぎない。この點が本集が後世「炭俵」と並稱された所以である。

「徳島に據り、主として古俳書古俳人の研鑽に力を注いでゐる。【編著】丈草集○丙寅句鈔○丁卯句鈔○戊辰句鈔○己巳句鈔○庚午句鈔○家集雁來紅等。又俳人眞蹟全集第二編「談林時代」(平凡社)を編述し、その他蕉門珍書百種(「神戶なつめ屋」の解説を執筆すること三十五編に及んだ。【作風】季題を尊重し、詩形の破壊や淺薄な客觀寫生主義を排けると自ら主張してゐる。【志田】元日や廓然として海と山 別天樓 春の海渡らはそこに何がある 同 蟬もろく己レの聲に啼きにけり 同 別當宣

甘美なロマンチズムから、自然主義思潮に動かされようとするあとが著しい。【土岐】紅血 缺血 けいさく 説話【解説】馬琴の「血血郷談」(別項)に久米の血山の古歌を引いて、戀娘・實娘の二人の同胞の争ひを説いた趣向は、シンドレラ姫物語の筋を引いた日本の昔話の復活であつた。現在ある形は既にやゝ壞れてゐるけれども、やはり血に鹽と松の葉とを載せて出して、二人に歌を詠ませて見たことを語るものが多い。グリムの童話集に採録せられた Alcebrandi、即ち佛國で「驢馬の皮」、英國で「猫の皮」の名を以て知らるゝ變裝美女の説話が、これと深い關係を持つことは、コックス女史以下のすでに説く所であるが、我が國でもこれが「鉢かつき姫」(別項)の名の下に、御伽草子の中に保存せられてゐる外に、なほ「姥皮」(別項)などと稱する昔話になつて、今も民間に併行してゐる。(粟袋米袋、姥皮參照) 【柳田(國)】

た。併し自惚はなくとも、さすがに春を思はない譯もなく、秘かに妻にと望んでゐる娘があつた。それは猿樂町の藥種屋仁壽堂の主人の妹で、今年十七のお濱だつた。開店以來第一のお得意場として出入してゐるうち、娘がいつも笑顔で迎へるのをわが様の可笑しき故とも知らずに、店を手傳つてゐる主人の従弟定二郎から悪戯にお濱の方にも氣があると聞かされて、傳吉は眞剣に戀する身になつた。お濱ほどの娘をわが妻に出来る——と、その思ひで有頂天になつて、定二郎に意中を打明けて媒を頼み、機嫌とりに度々小料理屋へ誘つた。定二郎は笑止に堪へかねたが御馳走のなり得とばかり、その都度出鱈目の色よい返事ばかりを聞かせ、傳吉の弱みにつけこんで吉原遊びに引出したり、小遣の時借りをしたりしてゐた。その金が百圓近くも積つた上、度重なる遊びの費用で傳吉の貯蓄もなくなつて、商賣にも差し問へるやうになつたので、店を抵當に高利の金を借りましたが、期限が來ても別に返済のアテはなかつた。傳吉はふと知合ひの質屋の番頭常藏が小金を持つてゐるのを知り融通を頼むと、仁壽堂が保證に立つならといふ返事だつた。そこで主人に願つてくれるやうに定二郎に頼んだが、それを取次がないうちに、いよいよ期限の日になつた。傳吉は窮餘の一策として常藏から一判で金を出させようと、小料理屋で酔ひつづして承知させるつもりが駄目だつたので、吉原へ連れこんで遊ばせた歸途、吉原田圃で手拭で絞殺して金を奪つた。——併しもう期限が切れて店は救へなかつたし、罪の苛責に懊惱してゐる傳吉は日ならずして捕はれた。その時までも、傳吉はまだ定二郎の言葉を信じてゐ

候とあるのも、當時如何に兩集の風調が共鳴されたかが知られる。なほ素齋の錢別辭は、芭蕉の江戸出立が五月八日なるべき事を確かめる資料ともなり、芭蕉との交情の知られる點に於て、炭俵の素齋序と共に注意すべきものである。【志田】

元日や廓然として海と山 別天樓 春の海渡らはそこに何がある 同 蟬もろく己レの聲に啼きにけり 同 別當宣 古文字書【解説】檢非違使廳の長官別當の命令を書いた文書、廳宣ともいふ。古來勅宣に准ぜられ、これに違背せば違勅に准ずと云はれた。その様式は公卿の御教書に據つたものである。【伊木】小早河出雲四郎左衛門尉重景與千葉大隅次郎胤泰 相論四條堀川同油小路敷地等事、任諸官評定文、可令下知重景給之由、別當殿仰所候也、仍執達如件 康永四年 五月十三日 大藏少輔重藤 謹上 正親町博士大夫判官殿

【變目傳】明治二十六年十二月、文藝俱樂部。【刊行】同四十三年、柳浪叢書前編所收。【梗概】神田淡路町の洋酒店埼玉屋の主人傳吉は、二十七といふに三尺そこ〜の小男な上に、左の目尻からかけて頬に火傷の引つりまであるので、一寸法師とか蜘蛛男とか變目傳とか綽名をつけられてゐた。さういふ人の朝りが口惜しさに、彼は主家に奉公中も一倍働いた爲めに、信用を得て逸早く店を持たせて貰ひ、小僧まで使つて相應の商賣をしてゐるのだつた。老母は不自由なく孝養されるにつけても、早く嫁を貰つて初孫を抱きたいと願つたが、傳吉はわが身の不具を思つて、母の望みには淋しい微笑で答へるのを常とし

た。併し自惚はなくとも、さすがに春を思はない譯もなく、秘かに妻にと望んでゐる娘があつた。それは猿樂町の藥種屋仁壽堂の主人の妹で、今年十七のお濱だつた。開店以來第一のお得意場として出入してゐるうち、娘がいつも笑顔で迎へるのをわが様の可笑しき故とも知らずに、店を手傳つてゐる主人の従弟定二郎から悪戯にお濱の方にも氣があると聞かされて、傳吉は眞剣に戀する身になつた。お濱ほどの娘をわが妻に出来る——と、その思ひで有頂天になつて、定二郎に意中を打明けて媒を頼み、機嫌とりに度々小料理屋へ誘つた。定二郎は笑止に堪へかねたが御馳走のなり得とばかり、その都度出鱈目の色よい返事ばかりを聞かせ、傳吉の弱みにつけこんで吉原遊びに引出したり、小遣の時借りをしたりしてゐた。その金が百圓近くも積つた上、度重なる遊びの費用で傳吉の貯蓄もなくなつて、商賣にも差し問へるやうになつたので、店を抵當に高利の金を借りましたが、期限が來ても別に返済のアテはなかつた。傳吉はふと知合ひの質屋の番頭常藏が小金を持つてゐるのを知り融通を頼むと、仁壽堂が保證に立つならといふ返事だつた。そこで主人に願つてくれるやうに定二郎に頼んだが、それを取次がないうちに、いよいよ期限の日になつた。傳吉は窮餘の一策として常藏から一判で金を出させようと、小料理屋で酔ひつづして承知させるつもりが駄目だつたので、吉原へ連れこんで遊ばせた歸途、吉原田圃で手拭で絞殺して金を奪つた。——併しもう期限が切れて店は救へなかつたし、罪の苛責に懊惱してゐる傳吉は日ならずして捕はれた。その時までも、傳吉はまだ定二郎の言葉を信じてゐ

【別天樓】(ベツテ) 俳人【姓名】野田要吉【閱歴】明治二年五月二十四日、岡山縣邑久郡磯上大塚に生る。弱冠にして大阪に出で、木津小學校教員を勤務の傍ら國文學を研究し、大阪府富田林中學、奈良縣磯城中學教諭を経て、兵庫縣報徳商業學校長に任命された。俳句は初め日本新聞及び「ホトトギス」等に投句して子規の指導を受け、後、松瀬青々を授けて俳誌

「俳島」に據り、主として古俳書古俳人の研鑽に力を注いでゐる。【編著】丈草集○丙寅句鈔○丁卯句鈔○戊辰句鈔○己巳句鈔○庚午句鈔○家集雁來紅等。又俳人眞蹟全集第二編「談林時代」(平凡社)を編述し、その他蕉門珍書百種(「神戶なつめ屋」の解説を執筆すること三十五編に及んだ。【作風】季題を尊重し、詩形の破壊や淺薄な客觀寫生主義を排けると自ら主張してゐる。【志田】元日や廓然として海と山 別天樓 春の海渡らはそこに何がある 同 蟬もろく己レの聲に啼きにけり 同 別當宣

【變目傳】明治二十六年十二月、文藝俱樂部。【刊行】同四十三年、柳浪叢書前編所收。【梗概】神田淡路町の洋酒店埼玉屋の主人傳吉は、二十七といふに三尺そこ〜の小男な上に、左の目尻からかけて頬に火傷の引つりまであるので、一寸法師とか蜘蛛男とか變目傳とか綽名をつけられてゐた。さういふ人の朝りが口惜しさに、彼は主家に奉公中も一倍働いた爲めに、信用を得て逸早く店を持たせて貰ひ、小僧まで使つて相應の商賣をしてゐるのだつた。老母は不自由なく孝養されるにつけても、早く嫁を貰つて初孫を抱きたいと願つたが、傳吉はわが身の不具を思つて、母の望みには淋しい微笑で答へるのを常とし

た。併し自惚はなくとも、さすがに春を思はない譯もなく、秘かに妻にと望んでゐる娘があつた。それは猿樂町の藥種屋仁壽堂の主人の妹で、今年十七のお濱だつた。開店以來第一のお得意場として出入してゐるうち、娘がいつも笑顔で迎へるのをわが様の可笑しき故とも知らずに、店を手傳つてゐる主人の従弟定二郎から悪戯にお濱の方にも氣があると聞かされて、傳吉は眞剣に戀する身になつた。お濱ほどの娘をわが妻に出来る——と、その思ひで有頂天になつて、定二郎に意中を打明けて媒を頼み、機嫌とりに度々小料理屋へ誘つた。定二郎は笑止に堪へかねたが御馳走のなり得とばかり、その都度出鱈目の色よい返事ばかりを聞かせ、傳吉の弱みにつけこんで吉原遊びに引出したり、小遣の時借りをしたりしてゐた。その金が百圓近くも積つた上、度重なる遊びの費用で傳吉の貯蓄もなくなつて、商賣にも差し問へるやうになつたので、店を抵當に高利の金を借りましたが、期限が來ても別に返済のアテはなかつた。傳吉はふと知合ひの質屋の番頭常藏が小金を持つてゐるのを知り融通を頼むと、仁壽堂が保證に立つならといふ返事だつた。そこで主人に願つてくれるやうに定二郎に頼んだが、それを取次がないうちに、いよいよ期限の日になつた。傳吉は窮餘の一策として常藏から一判で金を出させようと、小料理屋で酔ひつづして承知させるつもりが駄目だつたので、吉原へ連れこんで遊ばせた歸途、吉原田圃で手拭で絞殺して金を奪つた。——併しもう期限が切れて店は救へなかつたし、罪の苛責に懊惱してゐる傳吉は日ならずして捕はれた。その時までも、傳吉はまだ定二郎の言葉を信じてゐ

た。母親と女房……約束してあるお濱は何に
も知らないのだから慈悲を願ひますと、保
官にそればかり云つてゐた。仁壽堂の主人は
その心根を不憫に思つて、獄中へお濱の名で
さゝやかな差入物をさせたが、これを手にし
た傳吉は嬉し泣きに泣くのだった。

【批評】謂ゆる「悲惨小説」の一つである。主
人公を一寸法師だけで足りずに變目にまでし
て、悲惨な運命を強調してゐるが、さういふ
人物の特殊な生活乃至人間性とても云ふやう
なものが十分描かれてゐると思へない。言
ひ換へれば成程悲惨な人間を紹介されはする
が、その獨特の生活が發展してゐない。だか
ら我々を完全に片輪國へ連れて行くに至らな
い。時代に魁けてこの種の題材を手がけた功
は認めても、もつと生活に觸れた人物の個性
描寫、性格描寫のない點が、根本的な不満を
感じさせることは否まれない。

ヴェルネルの法則

言語學 【英】
Verner's Law 【獨】 das Vernerische Gesetz

【解説】音聲法則(別項)の一つ。又ゲリムの法
則(別項)の補充となる法則の一つである。カ
ル・ヴェルネル(Karl Verner, 1846—1896)
はデンマークの學者である。ゲリムが始めて
その法則を發表した時、これに合はぬものを
除外例として置いた。ヴェルネルの研究で、そ
の除外例中の或るものは、アクセントに基づ
く別の法則に纏め得ることが發見せられ、彼
はその研究の結果を雜誌(Kuhn's Zeitschrift
für vergleichende Sprachforschung, XXXIII,
1877)に公にした。例へば「父」といふ語のラ
テン語 pater の中の t 音は、ゲリムの法則
に従へばゲルマン派の語では山音になるべき
筈であるのに、ゴート語(ゲルマン派中の一古

語)では fater と d (實際の音は今日の英語
father の th と同じ摩擦音であつたらうとい
ふ)であり、古代英語で fader と d 音になつ
てゐるのが法則に合はない。これは t 音を含
む音節 (syllable) の直前の音節 (P) に、原始
語時代にアクセントがなかつたからであると
説明する。この「直前の音節」にアクセントが無
かつた云々」といふのがヴェルネルの法則の
要點である。

【参考】H. C. Wyld: Historical Study
of the Mother Tongue, 1906, p. 199.

辨疑書目録

【著者】中村富平 【成立・刊行】寶永六年目
序、同七年刊。【諸本】日本古典全集第四期
「書目集」上に收む。【解説】主として書名が
類似してゐる混同し易いものを辨別するため
に作られたものである。即ち第一、同音書目
(發音が全く同一であるか、又は近似してゐて
混同し易いものを擧げてゐる。例へば五經—
基經。五位圖—五音圖)。第二、同名書目(全
く書名の同じもの。略稱を用ひる際一層混同
が起り易いことを注意してゐる。例へば飛鳥
川(中山三柳)—飛鳥川(八助)。一步—一步鈔。
第三、兩名書目(二つ以上の書名を有するも
の。例へば紫分韻略—三重韻。新撰萬葉集—
菅萬葉)。第四、古今書目(時代によつて書名
が變つてゐるもの。例へば、和語するべ—和
句解。歌林雜和集—貞徳戴恩記)。第五、略名
書目(五車韻端を五車、白氏文集を文集と云ふ
が如きもの)。第六、讀曲書目(讀方の難しい
もの。例へば、周禮・江家次第)。第七、植字書
目(井嶋帳本書目。第八、足利本、書目。第九、
落卷書目(關卷・不足本、離本、破本等と云はれ
るもの書目)。第十、落紙書目(いはゆる落

丁のあるものの書目)。第十一、本朝作者書目
(一條兼良・北畠親房等三十六人の著述目録)。
第十二、有名未出書目(從來の書目類に名は
擧がつてゐるが、未だ板行されないもの)。第
十三、名數書目(主として從來の書目類に見え
ないものを名數により分類して擧げてゐる)。
第十四、類書目録(和歌・詩・聯句・連歌・俳諧の
作法に關するもの、醫學講筈、醫生方術、和朝
方書に關するもの、兒童に讀ましむべきもの
及び素讀に關するもの、女子に讀ましむべき
もの等の書目を擧げてゐる)。第十五、書寫本
書目(普通に流布してゐる寫本を、神書・歌書・
雜書并物語・醫書等に分類して擧げてゐる)。
【價值】著者は書肆を業とするので、本書も同
業者のために編纂したものであらうが、學問
的に見ても相當價值が高い。

辨慶物語

御伽草子 二卷

【作者】不詳 【別名】「辨慶の草子」「武藏坊辨
慶物語」「成立」「看聞御記」永享六年十一月
六日の條に、「武藏坊辨慶物語二卷」とあるに
より、永享頃の作かと「近古小説解題」には推
定してある。【諸本】古板本は寛永頃の板本、
慶安四年板(貞享二年に、河内屋兵衛板行として
再摺)。室町時代小説集所收。【題材】武勇傳
説。義經傳説中の主要人物たる辨慶の生立に
關する物語。「義經記」(卷三)と同材であるが、
本書の方が一層空想的分子を増し、豪壯なる
英雄僧の少青年時代を描出し、性格の滑稽味
をも豊かならしめてゐる。御伽草子「橋辨慶」
(別項)とも、その生立物語に於ても所謂橋辨
慶傳説に於ても相應する内容を有し、ただ記

述に異同がある。且つ橋辨慶傳説は、牛若千
人斬の方であるが、これは辨慶太刀奪ひの方
で、「義經記」と同系統。

【梗概】辨慶は熊野別當辨しんが若一王子に
祈誓して得た一子であるが、生れながら容貌
魁偉、所行も亦荒々しいので山奥へ捨てられ
たのを、神託によつて五條大納言に拾はれ、に
やく一と名づけて寵愛せられた。七歳の時、
叡山西塔のはまきの律師慶心の許に送られた
が、暴行多く師に戒められた爲め、我から暇
を乞うて下山する途、自ら剃髮して武藏坊辨
慶と名乗り、三條小鍛冶宗近、五條の吉内左
衛門、七條堀河の四郎左衛門等から太刀・甲・
小袖等を騙り取りはしたが、渡邊玄蕃允行春
の許に押掛けて強請した貨物を以て彼等に報
い、又行春のためには、その館に襲來した強盜
を平げて恩を返した。その後、いさかひ修行
を志して北陸道に出で越前平泉寺の衆徒と争
ひ、中國に行き書寫山に登つて大衆と争闘し
た結果、その炎上を見るに至つた。朝廷の命
により書寫山の堂塔が再建せられるに當り、
辨慶は釘料の獻納を思ひ立ち、洛中に出て平
家の侍の太刀を奪ふこと九十九本に及び、最
後の一本は名に高い源義經の黄金造を得よう
と望んだが、五條橋で闘つてこれに負け、遂
に主従の約を結んだ。辨慶二十六歳、義經十
九歳。清盛は二人が平家討滅の計を廻らすと
聞き、辨慶を捕へるために慶心を囮とした。
義經と北白川邊にあつた辨慶は急ぎ自首して
縛に就き、六波羅に到つて清盛を辱しめ、清
盛怒つて義經の在處の糾問を命ずると、自ら
乞うてこれに當つた吉内左衛門が、欺いて自
白させようとの意圖は外れ、却つて辨慶に讒
弄され、更に左衛門を斬手の役にして六條河

のの類で、一つの名題の下に二つ以上の舞
踊が組合され、且つ連續的に演じられるもの
で、早替りで踊りぬくのが普通である。ため
にその形式は断片的なものが多いので、その
趣向も劇本位といふよりは、寧ろ歌舞本位な
ものが多く、而も即興的、
スケッチ風なものに優れた
ものが多い。これがこの類
の特色といへよう。取材は

のの類で、一つの名題の下に二つ以上の舞
踊が組合され、且つ連續的に演じられるもの
で、早替りで踊りぬくのが普通である。ため
にその形式は断片的なものが多いので、その
趣向も劇本位といふよりは、寧ろ歌舞本位な
ものが多く、而も即興的、
スケッチ風なものに優れた
ものが多い。これがこの類
の特色といへよう。取材は

て、七代市川團十郎・四代中村歌右衛門の四人
が活躍し、名作の數々が生れたものこの期で
ある。爾來形式や内容に變遷はあつたが、明
治前まで盛行し、明治に入つて頓に衰退を來
し、新作も殆ど現はれないやうになつた。現
今では尾上菊五郎と坂東三津五郎とによつて
僅かに復活的に所演されるに過ぎない。
【代表曲目】「三變化」「三瀬川吾妻人形」寛政七年
三月都座。三代瀬川菊之丞三つ人形の所作事。長唄。

原に斬らうとする、辨慶は狼藉して刑場を
逃れ、義經と共に奥州へ下つた。

のの類で、一つの名題の下に二つ以上の舞
踊が組合され、且つ連續的に演じられるもの
で、早替りで踊りぬくのが普通である。ため
にその形式は断片的なものが多いので、その
趣向も劇本位といふよりは、寧ろ歌舞本位な
ものが多く、而も即興的、
スケッチ風なものに優れた
ものが多い。これがこの類
の特色といへよう。取材は

のの類で、一つの名題の下に二つ以上の舞
踊が組合され、且つ連續的に演じられるもの
で、早替りで踊りぬくのが普通である。ため
にその形式は断片的なものが多いので、その
趣向も劇本位といふよりは、寧ろ歌舞本位な
ものが多く、而も即興的、
スケッチ風なものに優れた
ものが多い。これがこの類
の特色といへよう。取材は

のの類で、一つの名題の下に二つ以上の舞
踊が組合され、且つ連續的に演じられるもの
で、早替りで踊りぬくのが普通である。ため
にその形式は断片的なものが多いので、その
趣向も劇本位といふよりは、寧ろ歌舞本位な
ものが多く、而も即興的、
スケッチ風なものに優れた
ものが多い。これがこの類
の特色といへよう。取材は



のの類で、一つの名題の下に二つ以上の舞
踊が組合され、且つ連續的に演じられるもの
で、早替りで踊りぬくのが普通である。ため
にその形式は断片的なものが多いので、その
趣向も劇本位といふよりは、寧ろ歌舞本位な
ものが多く、而も即興的、
スケッチ風なものに優れた
ものが多い。これがこの類
の特色といへよう。取材は

のの類で、一つの名題の下に二つ以上の舞
踊が組合され、且つ連續的に演じられるもの
で、早替りで踊りぬくのが普通である。ため
にその形式は断片的なものが多いので、その
趣向も劇本位といふよりは、寧ろ歌舞本位な
ものが多く、而も即興的、
スケッチ風なものに優れた
ものが多い。これがこの類
の特色といへよう。取材は

のの類で、一つの名題の下に二つ以上の舞
踊が組合され、且つ連續的に演じられるもの
で、早替りで踊りぬくのが普通である。ため
にその形式は断片的なものが多いので、その
趣向も劇本位といふよりは、寧ろ歌舞本位な
ものが多く、而も即興的、
スケッチ風なものに優れた
ものが多い。これがこの類
の特色といへよう。取材は

その法則を發表した時、これに合はぬものを除外例として置いた。ヴェルネルの研究で、その除外例中の或るものは、アクセントに基づく別の法則に纏め得ることが發見せられ、彼はその研究の結果を雑誌 (Kunsts Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung, XXIII, 1877) に公にした。例へば「父」といふ語のラテン語 pater の中の t 音は、ギリムの法則に従へばゲルマン派の語では th 音になるべき筈であるのに、ゴート語 (ゲルマン派中の一古

の。例へば葉分韻略一三重韻。新撰萬葉集一菅萬葉)。第四、古今書目(時代によつて書名が變つてゐるもの。例へば、和語するべし和句解。歌林雜和集一貞徳戴恩記)。第五、略名書目(五車韻端を五車、白氏文集を文集と云ふが如きもの)。第六、讀曲書目(讀方の難しいもの。例へば、周禮・江家次第)。第七、植字書目(井嶋帳本書目。第八、足利本、書目。第九、落卷書目(關卷・不足本、離本、破本等と云はれるもの書目)。第十、落紙書目(いはゆる落

より、永享頃の作かと近古小説解題には推定してある。【諸本】古板本は寛永頃の板本、慶安四年板(享享二年に、河内屋理兵衛板行として再摺)。室町時代小説集所収。【題材】武勇傳説。義經傳説中の主要人物たる辨慶の生立に關する物語。【義經記】(卷三)と同村であるが、本書の方が一層空想的分子を増し、豪壯なる英雄僧の少青年時代を描出し、性格の滑稽味をも豊かならしめてゐる。御伽草子(橋辨慶)(別項)とも、その生立物語に於ても所謂橋辨慶傳説に於ても相應する内容を有し、ただ記

後(一本は名に高い源義經の黄金遺を待よと望んだが、五條橋で闘つてこれに負け、遂に主従の約を結んだ。辨慶二十六歳、義經十九歳。清盛は二人が平家討滅の計を廻らすと聞き、辨慶を捕へるために慶心を囮とした。義經と北白川邊にあつた辨慶は急ぎ自首して縛に就き、六波羅に到つて清盛を辱しめ、清盛怒つて義經の在處の糾問を命ずると、自ら乞うてこれに當つた吉内左衛門が、欺いて自白させようとの意圖は外れ、却つて辨慶に諷弄され、更に左衛門を斬手の役にして六條河

原に斬らうとすると、辨慶は狼藉して刑場を逃れ、義經と共に奥州へ下つた。【影響】(一)別項)と共に、傳説的英雄としての辨慶の生立に關してその半生の傳記を作り上げてあるため、後世文學にも直接間接

のの一類で、一つの名題の下に二つ以上の舞踊が組合され、且つ連続的に演じられるもので、早替りて踊りぬくのが普通である。ためにその形式は斷片的なものが多いため、その趣向も劇本位といふよりは、寧ろ歌舞本位なものが多く、而も即興的、スケッチ風なものに優れたものが多い。これがこの類の特色といへよう。取材は廣範圍に互り、上は公卿から下は物乞ひまで殆どあらゆる階級を網羅してゐるのみでなく、神佛や動物等にもまで及んでゐる。所演者は一人で通して演ずる單獨變化が普通であるが、二人以上で演ずる複數變化もあれば、更に單獨と複數の混合した變化物もある。又組合せの員數によつて、三變化・四變化・五變化・六變化・七變化・八變化・九變化・十變化・十一變化・十二變化の種類があり、そのうち、七變化と五變化が最も多い。地をなす音曲も初めは一種であつたが、後には二種乃至四種が



(畫挿) 語物慶辨

辨慶は狼藉して刑場を逃れ、義經と共に奥州へ下つた。【影響】(一)別項)と共に、傳説的英雄としての辨慶の生立に關してその半生の傳記を作り上げてあるため、後世文學にも直接間接

辨慶は狼藉して刑場を逃れ、義經と共に奥州へ下つた。【影響】(一)別項)と共に、傳説的英雄としての辨慶の生立に關してその半生の傳記を作り上げてあるため、後世文學にも直接間接

辨慶は狼藉して刑場を逃れ、義經と共に奥州へ下つた。【影響】(一)別項)と共に、傳説的英雄としての辨慶の生立に關してその半生の傳記を作り上げてあるため、後世文學にも直接間接

に種々の影響を與へてゐる。特に古淨瑠璃の「辨慶誕生記」(山本角太夫正本)の如きは直接本書から出でゐる。【参考】室町時代小説集解題 (島津) 變化物 (へんげ) 所作事【名義】變化は妖怪變化の意ではなく、幾回も扮装を變へる事を意味する。【性質】構成上から分類したも

使用され、長唄(大薩摩も含む)常磐津・富本・清元・竹本が主である。【沿革】その萌芽は貞享・元祿頃に見えるが、普通元祿十年十一月、京都萬太夫座で水木辰之助所演の「七化狂詩」(七化)が最古とされ、内容は犬・業平・老人・丹前・藤壺・狸々の七種である。その後では佐渡・島長五郎所演の「盤人形」の五化、七小町の七

部郡の四季(享保十六年冬、中村座所演)等が名高く、何れも後世の變化物の基準をなした。而して江戸では正徳元年十一月森田座で、神助五郎(初代市山助五郎)が難波江千里之助役で演じた「紅梅百夜車」(七變化)が古く、内容は大洋繪の所作で輕業的に演じられて喝采を博したといふ。その後では、佐渡・島長五郎の部郡、初代瀨川菊之丞の七小町や「菱花五色櫻」(寛保二年市村座)、市山傳五郎の天狗の七變化(同三年同座)、中村桑太郎の京人形の五變化(寛延元年中村座)等が著名で、この頃から變化物の芽が伸び初めた。次いで寶曆に入つて、中村富十郎の「雛祭神路桃」(七變化)、二代瀨川菊之丞の「柳雛諸鳥轉」(四變化)、市村龜藏の「三重帶裾野模様」(七變化)等が現はれて刮目され、明和以後寛政まで、中村富十郎・同野鹽・四代岩井半四郎・三代瀨川菊之丞・二代吾妻藤藏・中山富三郎・九代市村羽左衛門・八代森田勘彌・四代市川團藏等によつて次の變化物謳歌時代の準備時代をなし、やがて化政期の變化物全盛時代を現出した。前期の漠然たる七變化・五變化のものから五節句・十二支・十二月・九曜・八景等の系統的な組合式のものとなり、内容も市井のあらゆる流行風俗までを捉へ來つて互に趣向の新奇を競ひ、内容よりも形式に重きを置かれた。音曲も數種が用ひられ、殊に拍子本位のリズムミカルなものを特徴として、輕快洒脱な清元節の如きが歓迎された。就中三代坂東三津五郎と三代中村歌右衛門とが相拮抗し



(繪錦) 字七葉爾手櫻遅

木賊刈(子守唄)○復新三組盃(傀儡師参照)。【四變化】柳雛諸鳥轉(鷺頭参照)○山姥四季英(山姥参照)○菊蝶東雛妓(石橋参照)○彌生の花淺草祭(三社祭参照)等。【五變化】門出京人形(寶曆五年九月市村座。中村桑太郎所作事。長唄。水仙丹前槍踊・楯城・花笠踊・狸々)○春昔由縁英(羽根・禿參照)○大和い手向五字(子守参照)○歌(すく)餘波大津畫(藤壺参照)○六歌仙容彩(六歌仙参照)○菱花后雛形(小鏡治参照)等。【六變化】六玉川秀歌姿(文化十四年三月市村座。三代坂東三津五郎所作事。長唄・清元・新内。俊成卿・曲馬奴・切

て、七代市川團十郎・四代中村歌右衛門の四人が活躍し、名作の數々が生れたのもこの期である。爾來形式や内容に變遷はあつたが、明治前まで盛行し、明治に入つて頓に衰退を來し、新作も殆ど現はれないやうになつた。現今では尾上菊五郎と坂東三津五郎とによつて僅かに復活的に所演されるに過ぎない。【代表曲目】【三變化】三瀨川吾妻人形(寛政七年三月都座。三代瀨川菊之丞三つ人形の所作事。長唄。男舞・春駒・切秀)○三人形紅の彩色(文化十四年四月桐座。二代市川團十郎の所作事。長唄。汐波・

廊女郎・勇み商人・勸化坊主・狂女 ○伊勢名所業土産 (安政三年九月中村座。三代中村福助所作事。長唄・常磐津・富本・清元。白女・俳人・未社・丹前・後面・傾城) 等。【七變化】 雛祭神路桃 (寶曆八年三月市村座。中村富十郎所作事。長唄。官女・富十郎・春駒・女葉平・亂拍子・繪師・傾城・柴菊翁・布晒) ○其容形七枚起請 (明和七年三月市村座。八代市村羽左衛門・尾上多見藏所作事。長唄。住吉踊・おふく女・極久・蘆葉の澤・無僧・文七清川・石橋) ○京人形三扇雲井月 (安永二年七月市村座。四代岩井半四郎所作事。長唄。花草・花傘踊・傀儡師・巫子・娘踊・切禿・猫。○杜若七重の染衣 (手習子参照) ○倭假名色七文字 (小町参照) ○七枚續花の姿繪 (同上) ○遅櫻手爾業七字 (越後獅子参照) ○深山櫻及兼柳振 (保名参照) ○月雪花名殘文臺 (淺妻参照) ○七小町姿繪 (小町参照) ○拙筆力七以呂波 (傾城・供奴参照) ○七重咲浪花土産 (石橋参照) 等。【八變化】 聞鼓姿八景 (晒女参照) ○八重霞櫻花掛合 (文化十二年三月市村座。三代嵐三五郎所作事。長唄・清元。葉平・沙汲・小僧川太郎・傘の一本足・夕霧の後面・京女郎・雷・うかれ布袋) ○花飢唇色所八景 (天保十年三月市村座。四代中村歌右衛門・三代岩井榮三郎所作事。長唄・常磐津・富本。天女・助六・秀妻・給寶・景清・船頭・新鷺・雀踊) 等。【九變化】 其九繪彩四季櫻 (後面参照) ○御名殘押繪交張 (文政二年九月市村座。初代中村芝翫 三代歌右衛門所作事。長唄・常磐津・清元・竹本。天人狂亂・黒ん坊・知盛・女伊達・鳥羽繪・巫子・關羽・傾城・玉藻の前) ○八重九重花委繪 (天保十二年七月市村座。尾上多見藏所作事。長唄・常磐津・富本。五郎・若菜・町娘・意者・國照かの西王母・雷・源師・瓢箪鮫・多見藏の狂亂) 等。【十一變化】 假名手本忠臣藏 (弘化四年三月市村座。十一代市村羽左衛門所作事。長唄・大薩摩・常磐津・清元。大序足利直義・二段目娘小浪・三段目平

搭婆小町・四段目大星力綱・五段目角兵衛獅子・六段目彌かき・七段目遊女おかる・八段目旅奴・九段目丁稚伊吾・十段目下女りん・十一段目大鷲文吾。【十二變化】 世話時代 四季詠寄三文字 (傾城参照) ○寄三津再十二支 (文化十一年三月市村座。三代坂東三津五郎十二支の所作事。長唄・常磐津・富本。小松曳・小原女・外郎賣・かちり・山・乙姫・江の鳥座頭・王子・参り・紙ぎぬた・環田彦・鶴唄・紙屑拾ひ四つ竹ぶし・仁田四郎) ○花勝十二月所作 (傾城参照) 等。【参考】 劇代集 二代禮田左交 ○日本舞臺舞踊史 町田博三 (演藝書報合同七ノ一) ○所作事類纂小谷青風 (歌舞伎研究一八二九) ○江戸近世舞踊史 九重左近 ○日本近世舞踊史 小寺融吉 ○近世邦楽年表 長唄・豊後 ○日本歌謡集成 (九・一〇・一一) 編鐘 (一) 「鐘」を見よ。 遍昭 (六) 歌仙・三十六歌仙の (俗姓名) 良宗宗貞。古本「古今集」には遍昭とあり、「歌仙傳」に定家流遍昭、昭昭流遍昭とある。高野切・清輔本「古今集」には「へせう」と假名書きしてゐる。【別號】 良少將 (大和物語、良僧正 (皇胤紹運録)、中院僧正 (百人一首一夕話、又その住所から花山僧正。【生歿】 仁和元年七十の賀を賜ひ、諸書に寛平二年(一五五〇)歿、とあるから七十五歳となる。但し或る説には七十四又は七十六といふ。歿月日に就いては正月十日・十九日・二月十九日等諸説がある。【墓所】 京都花山といふ(閑田耕筆)。【家系】 桓武天皇の御孫であつて、安世(元亨釋書には良世の子。素性・由性の父。安世は延暦二十一年良岑姓を賜はつた。【閑歴】 承和十一年藏人に補し、翌年從五位下に叙し、左兵衛佐・備中守・左近衛少將・藏人頭に歴任し、仁明天皇の御寵愛を蒙つてゐたが、嘉祥三年三

月二十一日天皇崩御によつて出家し、叡山に登つて名を遍昭と改めた。「文德實錄」に依ると、三月二十二日御大喪の裝束司に任じてゐたが、二十八日の條に「左近衛少將從五位上良岑朝臣宗貞、出家爲僧。宗貞、先皇之寵臣也、先皇崩後、哀慕無已、自歸佛理、以求報恩、時人歎焉」とある。【後撰集】 卷十七に、初めて山に登つた時の歌、兩親の愛を思ひ出して歌つた「たらちねはかゝれとてしも鳥羽玉の我が黒髪をなでずやありけん」があり、「古今集」卷十六に、諒闇があけて人々は喪服をぬぎ、或る者は位を賜はつて喜んでゐるのを見て、自らは悲しさと寂しさと堪へず、「昔の袂よ乾きだにせよ」と歌つた歌がある。「大和物語」(別項)はこの悲痛なる出家を説話化し、彼が最後の妻にも出家の内心を打明けずに姿をかくし、長谷寺に於て自分の行方を捜して祈願する妻のゐるのを知つて、斷腸の思ひをしながらも遂に會はず、仁明天皇の后(五條后)は使を出して、せめて在所なりとも知らせよと仰せられたが、御寵愛を蒙つた帝の崩御後は、世にある心地もしないとお答して、行方を晦まし、後には石上寺にて小野小町と歌を贈答してゐる。而して彼の歌集はこれ等の物語に一貫した歌物語の感がある。小町との贈答歌は「後撰集」卷十七にも出てゐるが、後の「少將小町物語」の題材となり、謡曲にも取扱はれてゐる。叡山では慈覺大師に就いて戒を受け、後は智證大師に教を受けた(僧綱補任)。貞觀中常康親王が雲林院を賜はつたので移り住み(古今集卷五に雲林院の木のかげにた、かみて、とあり)、次いで花山に元慶寺を創めて座主となり、雲林院を別院とした。貞觀十一年法眼、元慶三年權僧正に任じ、元慶六年上表して「僧

網をして諸寺の別當を兼任するものは四年を以て秩限とすること」以下七箇條の宗教政策を進行し、勅を以て施行せられた。仁和元年には近江國高島郡の廢田百五十三町を寄進せられ、次いで僧正に任じ、仁壽殿に七十の賀を賜ひ、仁和二年には食邑百戸を賜ひ、輦車に駕して宮中に入るを許され、優渥なる勅語をさへ賜はつた(三代實錄)。光孝天皇には特に御寵愛と御歸依とを賜はつたと見え、「古今集」に「仁和の帝云々」の詞書が多い。「續本朝往生傳」には、禍をなす天狗を法力によつて懺伏させた話があり、「古今集」後撰集の詞書によつて奈良・石上寺に住まつたこと、惟喬親王から御歌を頂いたことなどがわかる。【作品】 勅撰集に入る歌は「古今集」十六首、その他凡そ二十首、大部分は家集「遍昭集」(別項)に收められてゐる。【歌風】 行平に似て客觀の美を克明に描き出す所があり、なほユーモアを含めたところがあるが、餘り流暢で重みを缺いた點があり、貫之が「古今集」の序に、「歌のさまは得たれども誠すくなし。例へば繪にかけける女を見て、(イ思ひて)徒らに心を動かすが如し」と言つてゐるのが的中してゐる。併し悲壯な心を歌つたものは、かゝる難がなくてすぐれてゐる。彼の人格は花鳥風月に心を託するには餘りに大きく、結局貫之の趣味には合はなかつたものと考へられる。併し「八雲御抄」には、「誠にこの道の聖なり」と仰せられてゐる。【参考】 文德實錄 ○三代實錄 ○大和物語 ○古今集目録 ○歌仙傳 ○元亨釋書 ○僧綱補任 ○續本朝往生傳 ○大日本史八十九 ○百人一首一夕話 ○小野小町考 本居内遺 ○國文學全史 平安朝篇 (四下)

遍昭集

家集 一巻一册 【諸本】 歌仙歌集本、群書類從二六五所載本は全く同じものである。【組織】 歌の數三十六首、このうち「古今集」の歌二十二首、「後撰集」六首、「拾遺集」五首、他人の歌と認むべきもの凡そ七首があり、「大和物語」の文と一致するところもある。また歌の排列は遍昭が出家した事件を追つてゐるから一見歌物語の感がある。【大和物語】と本集との前後關係は、容易に決

安朝に入つて、最初の漢文全盛時代について國風興隆の代となり、漢學が次第に衰へる頃になると、書簡を初め日記・記録や官府の往復の文書などには、右のやうな日本化した變體漢文を用ひること漸く多く、遂にはこの種のものの常用の文となつて文語の一體をなすに至つた。さうして書簡の文としては、院政時代の初めに、その模範として作られた「明衡往來」(別項)の如き、「罷」(侍)「令」(給)のやうな

所への届や願書の文に、なほ幾分の名殘を留めてゐる。日記や記録の文は、室町時代以後も、なほ古來の傳統を追ふものがあつたが、後になるほど、書簡文の影響を受けて「候文」を用ひ、且つ假名を交へる事が多くなつた。これは明治以後は次第に少くなり、多くは普通文を用ひるに至つた。要するに、變體の漢文は正式の漢文から出たもので、もとは漢字ばかりで書いたものであるが、後世に至つて

場所も材料に用ひ盡され、新しい材料背景に一轉すべき傾向がほの見えた時機でもあつたのである。【梗概】 旅人嘉兵衛(中年の上方商人)と供の伊介(若い江戸っ子)とが、江戸への途に、追分・沓掛の宿を越して輕井澤に到着、津川屋に宿つた。その夜女郎を呼ぶのに、嘉兵衛は新造浮草を、伊介は年増の菊藻を選んだ。遊女の風俗の木綿づくめな鄙びた様子が詳細に描かれて

其九繪彩四季櫻(後面参照) ○御名殘繪交賑
(文政二年九月中村座。初代中村芝翫三代歌所
長唄・常磐津・清元・竹本。天人狂亂・黒ん坊・知盛・
女伊達・鳥羽繪・巫子・關羽・傾城・玉藻の前) ○八重
九重花菱繪(天保十二年七月村座。尾上多見藏所
作事。長唄・常磐津・宮本。五郎・若葉・町娘・森者國
盟かの西王母・雷・源師・飄箏・多見藏の狂亂)等。
【十一變化】 假名手本忠臣藏(弘化四年三月市
村座。十二代市村羽左衛門等所作事。長唄・大藤原・
常磐津・清元。大序足利直義。二段目・小浪・三段目・平

仁和元年七十の賀を賜ひ、諸書に寛平二年(一
五〇)破、とあるから七十五歳となる。但し
或る説には七十四又は七十六といふ。歿月日
に就いては正月十日・十九日・二月十九日等諸
説がある。【墓所】京都花山といふ(閑田耕筆)。
【家系】桓武天皇の御孫であつて、安世(元亨釋
書には良世の子。素性・由性の父。安世は延暦
二十一年良岑姓を賜はつた。【閏歴】承和十
一年藏人に補し、翌年從五位下に叙し、左兵
衛佐・備中守・左近衛少將・藏人頭に歴任し、仁
明天皇の御寵愛を蒙つてゐたが、嘉祥三年三

所への肩や願書の文に、なほ幾分の名残を留
めてゐる。日記や記録の文は、室町時代以後
も、なほ古來の傳統を追ふものがあつたが、
後になるほど、書簡文の影響を受けて「候文」
を用ひ、且つ假名を交へる事が多くなつた。
これは明治以後は次第に少くなり、多くは普
通文を用ひるに至つた。要するに、變體の漢
文は正式の漢文から出たもので、もとは漢字
ばかりで書いたものであるが、後世に至つて
は假名を混入することが多くなつて、假名交り
文に近づいたけれども、なほその語句や書法
の上に漢文から出た名残をとどめ、今日に於
ても、書簡文に於てその幾分の痕跡を存して
ゐる。(文法・書簡文・消息参照)

場所も材料に用ひ盡され、新しい材料背景に
一轉すべき傾向がほの見えた時機でもあつた
のである。
【梗概】旅人嘉兵衛(中年の上方商人)と供の伊
介(若い江戸っ子)とが、江戸への途に、追分・沓
掛の宿を越して輕井澤に到着。津川屋に宿つ
た。その夜女郎を呼ぶのに、嘉兵衛は新造浮
草を、伊介は年増の荻藻を選んだ。遊女の風
俗の木綿づくめな鄙びた様が詳細に描かれて
ゐる。客と遊女の對話も言葉が異なるので、
とんちんかんになる可笑味が簡潔に寫してあ
る。隣室には地廻りの色客彌五左衛門、相方
の遊女田毎と痴話喧嘩を始める。二人には頗
る滑稽である。やがて夜は明け行く。二人の
旅人は又馬上の人となる。

【構想】本書は言語風俗の異つた可笑味に、構
想の中心がある。特に言語の郷土的訛に興味
をもつてゐる。かゝる興味は、一般にあるも
のではあるが、蜀山の如き、江戸人としては
比較的旅行の経験の多い。且つ江戸っ子たる
誇りをもつた作者には多かつたであらう。彼
の作「世説新語茶」(別項)にも變體と題する章
に、東北の田舎武士と上方商人とを對照せし
めてある。本書にも上方商人と信濃遊女とを
對照せしめ、これに氣の利いた通人肌の江戸
の若者を配してある。【史的地位】輕井澤の
遊里描寫をした洒落本は、この外に見出せな
い。伊勢古市を描寫したものは存するが(幕世
物語、天明二年)、野趣横溢せる趣を主材とせる
ものではない。本書は實にこの點に於て洒落
本中に異彩を放つてゐる。【影響】旅中飯盛
を買ふ描寫、それはこの書の外、廊通交、廊集
交の「面美多通身」(別項)がある。その他に於
て田園生活を描寫せる洒落本に、「田舎芝居」

遍昭集

歌仙歌集本、群書類從二六五所載本は全く同
じものである。【組織】歌の數三十六首、この
うち「古今集」の歌二十二首、「後撰集」六首
「拾遺集」五首、他人の歌と認むべきもの凡そ
七首があり、「大和物語」の文と一致するところ
もある。また歌の排列は遍昭が出家した事
件を追うてゐるから一見歌物語の感がある。
【大和物語】と本集との前後關係は、容易に決
せられないが、「大和物語」を引用したと考へ
られる點がある。【西下】

變體假名

【平假名】を見よ。

變體漢文

國語學【解説】日本
の文語の一種。日本化した漢文で、その文字
の用法や位置など、純粹の漢文に異る所があ
つて、支那人には解せられぬもの。平安朝以
後、男子の日記・書簡や記録・法令など實用的
のものに用ひられた。漢字のみで書くのが普
通であるが、後には幾分假名を混じたものも
ある。これは初めから全文を音讀することな
く、訓讀したものと思はれる。その訓讀は大
體漢文と同じく、現代に於ても文章語(別項)
を以てする。

【起原・沿革】上古に於ては、正式の文語とし
ては漢文が用ひられたのであつて、詩賦は勿
論、官府の往復の文書や記録や書簡の如き實
用的の文に至るまで、すべて漢文を用ひた。
けれども漢文を正しく書くのは容易でないた
めに、時としてはその法格に違ふものもあり、
殊に日用の文には、漢文の素養に乏しいもの
が書いた爲めに、漢文としては無用な又は不
適當な敬語を加へたものなどもあつたが、平

安朝に入つて、最初の漢文全盛時代について
國風興隆の代となり、漢學が次第に衰へる頃
になると、書簡を初め日記・記録や官府の往復
の文書などには、右のやうな日本化した變體
漢文を用ひること漸く多く、遂にはこの種の
ものの常用の文となつて文語の一體をなすに
至つた。さうして書簡の文としては、院政時
代の初めに、その模範として作られた「明衡往
來」(別項)の如き、「罷」(待)「令」(給)のやうな
敬語を挿む事も少くなく、漢字の意味用法や
位置などに於ても、正式の漢文に違ふ所が多
かつたが、その後のものには、「候」といふ敬語
を用ひるやうになつて所謂「候文」の起原をな
し、又間々假名をさへまじへるものもあつて、
時代の下ると共に益々俗化して行つた(書簡文
参照)。日記・記録の文も、大體これと同様であ
つて、院政時代以後、益々漢文と遠ざかつた
が、併しその性質上、對手に對する敬語は用
ひず、書簡文とは多少違つた點があつた。武
家の法令の文なども、亦この種の文語を用ひ
た。室町時代より江戸時代に及んでは、書簡
も正式のものにはなほ大體古來の風を傳へ、
大抵漢字で書いたものであつて、假名を交へる
事は少かつたが、日常のものには、かなり多
く假名を交へたものがあつた。しかし慣用の
語句などは、從來の式を守つて漢字を用ひ、
漢文のやうに倒讀する習慣であつた。明治以
後及んで、よほどくづれたけれども、なほ
幾分は形式的に現今までも残つてゐる(御座
候「願上候」「可申上候」など)。私人の書簡は
かりでなく、役所から他の役所又は私人に出
す文書や、私人から役所に出す文書も、普通の
ものは右の書簡文のやうな文を用ひたのであ
つて、現代に於ても、官廳間の往復の文書や役

【参考】文藝類纂(卷三・四)編原芳野○古事類苑
文學部神宮司廳○日本文章史大町芳衛○國語
史概説吉澤義則

變體輕井茶話

【作者】山の手馬鹿人(蜀山人)【名稱】内
題には「輕井道中粹語録」とある。【刊行】安永
年間【異本】原本には山の手馬鹿人の序があ
り、大田蜀山の扇に巴の印が捺してあるから、
彼の作たる事は確實であるが、異本にこの序
を削り、朱樂菅江の「賣花新驛」の序を掲げた
ものがある。朝倉無聲の「新修日本小説年表」
に菅江作としてあるのは、このための誤謬で
あらう。【題材】當時川柳に於てしばしば、輕
井澤の飯盛が材料に用ひられてゐた。それは
信州輕井澤は中山道の要路に當り、木曾路及
び越後へ行く者は、必ずこの宿を通過せねば
ならなかつたから、比較的江戸人にも親しみ
が深く、その野趣多き宿場女郎が川柳や洒落
本に滑稽化されたのであらう。その頃既に洒
落本では、吉原・深川・品川・新宿、その他の岡

【参考】文德實錄○三代實錄○大和物語○古
今集目錄○歌仙傳○元亨釋書○僧綱補任○
續本朝住生傳○大日本史八十九○百人一首
一夕話○小野小町考本居内邊○國文學全史
平安朝篇

「田舎談義」(各別項)がある。これ等の影響を受けて出来たものに、有名な一九の「道中膝栗毛」(別項)がある。驛々の飯盛に戯れる滑稽は實に本書等に暗示を得たに違ひないし、宿々の名物古跡などを描いたのは、當時流行の名所圖會と共に「面美多通身」の影響がないとは言はれない。式亭三馬の「潮來婦志」(別項)も亦本書に暗示を得たと稱し得る。 (山崎)

【篇突】 俳論一冊【撰者】釋季由・森川許六【名義】篇突とは漢字の偏を伏せ旁を見せてその字を當てさせる遊戯で、平安朝時代に韻藻などと共に行はれたものであるが、前年に同じ兩人で「韻藻」(別項)といふ俳諧集を編したので、それと對せしめて篇突と稱したもので、従つて本書の内容とは關係のないものと思はれる。【刊行】元祿十一年九月【諸本】許六全集(俳諧文庫)・蕉門俳諧文集(俳諧大系)に所収。【由来】松井汝郎の序によると、式目等にも晦い無學な身でありながら點者となつて俳諧を案す宗匠の多いのを愁へて撰したものである。

【内容】本文は、撰者等の師芭蕉を初め同門の發句を例として、俳諧の季題の解説をなし、その間に撰者の懐く俳諧觀を述べたものである。季題として掲げられたものは、歳旦・歳暮・花・鶯・杜鵑・二季の雪等の如きものであるが、その數はあまり多くない。その解説は季題の格を定めるのが主眼となつてゐる。卷末に「發句調練の辨」を添へて發句の本質を論じ、句案の法を説き、終つて蕉門の發句五十一句を「餘興」として四季不同に收め、又相撲の句合六番を載せ、次に「追加」として李由の「四界盧賦」、許六の「飲食色欲箴」(二者共に許六の「風俗文選」にも収録)を附録して終つてゐる。

【價值】蕉門には季題を論ずることは餘り流行しなかつた。後に支考が彼此論じてゐるのが目ぼしい位のものである。芭蕉その他も關心を持たないではなかつたが、貞門のやうに季題を組織立てる如きことは、蕉門では重きを置かない方の主義であつたのである。然るに本書は蕉風俳諧に季題の格を定めようとしたものであるから、撰者は固より、廣く蕉門の季題觀を見るにも留意すべき書である。併し本書の季題觀に就いて、その「發句調練の辨」と併せて、去來の「湖東問答」(別項)に難じてゐる。 (各務)

【辨天小僧】 青砥稿花彩畫を見よ。【編年體】 歴史編纂の形式。年次に従つて事實を記したものである。この體は或る一時に於ける各方面の事情を知り易き便利を有するけれど、紀傳體(別項)に於けるが如き個人の逸事、制度の變遷等に互る叙事の詳密は望むことができないし、數年月にわたる事件の始末を直ちに知ることも容易でない。併し古來多く用ひられて居り、孔子の「春秋」(別項)は即ちこの體の祖と言はれ、宋の司馬光の「資治通鑑」(別項)は、その最もすぐれたるものと稱せられる。我が國でも、「六國史」(別項)を初めとして「日本紀略」「扶桑略記」「百鍊抄」「本朝通鑑」(以上各別項)「續史愚抄」等、おほかたの通史は殆どこの體にのみよつてゐるといふも過言ではない。 (坂本)

【辨草紙】 物語一卷【作者】不詳。恐らく日光山住侶の一人であることは疑ひなかるべく、平泉澄氏は本書中の人物眞鏡坊昌澄を以てこれに擬してゐる。【成立】「近古小說解題」は「回國雜記」に見える道興准后の「雲霧」も及ばで高き山の端に」の歌を載せてあるからとて、文明十八年以後、室町季世と推定してゐるが、更に平泉氏の「辨草紙考」では、本書中の諸人物がすべて實在したことを、主として日光常行堂施入帳によつて論證して、この物語の内容を實話とし、従つて本書の成立は天正十年から十八年に至る間と推斷してゐる。【諸本】「元祿乙亥春三月六日秋峰判」の奥書がある古寫本が内閣文庫に藏せられてゐる。これを室町時代小説集・日本文學大系第十九卷所収。【題材】「秋夜長物語」「幻夢物語」(各別項)等と同種の兒物語で、又本地物(別項)の色彩及び靈石傳説の地方口碑が附加せられてゐる。

【梗概】常陸國行方郡に、平貞盛の末孫で竹原左近尉平昌保といふ文武に優れた人がゐた。發心の志切であつたが、父母や妻の歎きを思つて遂げ得ぬうち、兵亂が起つて討死したので、二男に當る遺兒は、父の遺言によつて七歳の時日光山の座主に預けられた。初め學問修行のため西谷の圓實坊昌譽僧都の許に託せられたが、やがて僧都の重病に遭ひ、その依託で十二歳の年から東谷の教城坊昌長僧都の坊に移り、千代若丸と名乗り、十五歳の時剃髮して辨公昌信と號した。偶々東谷の僧大輔公は美しい辨公の姿に思ひを寄せ、互に睦み合ふたが、その嬉しい夢は東の間で、圖らず大輔公は病を得て世を去つたので、昌信は深い悲歎の末終に病み臥して又その跡を慕つた。眞鏡坊昌澄といふ僧は辨公に天台の四教五時の名目を書寫することを頼まれてゐたのであつたが、峯入の先達に當つてゐた爲め、その生前に果し得なかつたことを悔ひ、下山してから急ぎ成就して墓前に供へ、往生院の傍らに庵室を結んでその菩提を弔つた。辨公昌信

からとて、文明十八年以後、室町季世と推定してゐるが、更に平泉氏の「辨草紙考」では、本書中の諸人物がすべて實在したことを、主として日光常行堂施入帳によつて論證して、この物語の内容を實話とし、従つて本書の成立は天正十年から十八年に至る間と推斷してゐる。【諸本】「元祿乙亥春三月六日秋峰判」の奥書がある古寫本が内閣文庫に藏せられてゐる。これを室町時代小説集・日本文學大系第十九卷所収。【題材】「秋夜長物語」「幻夢物語」(各別項)等と同種の兒物語で、又本地物(別項)の色彩及び靈石傳説の地方口碑が附加せられてゐる。

【梗概】常陸國行方郡に、平貞盛の末孫で竹原左近尉平昌保といふ文武に優れた人がゐた。發心の志切であつたが、父母や妻の歎きを思つて遂げ得ぬうち、兵亂が起つて討死したので、二男に當る遺兒は、父の遺言によつて七歳の時日光山の座主に預けられた。初め學問修行のため西谷の圓實坊昌譽僧都の許に託せられたが、やがて僧都の重病に遭ひ、その依託で十二歳の年から東谷の教城坊昌長僧都の坊に移り、千代若丸と名乗り、十五歳の時剃髮して辨公昌信と號した。偶々東谷の僧大輔公は美しい辨公の姿に思ひを寄せ、互に睦み合ふたが、その嬉しい夢は東の間で、圖らず大輔公は病を得て世を去つたので、昌信は深い悲歎の末終に病み臥して又その跡を慕つた。眞鏡坊昌澄といふ僧は辨公に天台の四教五時の名目を書寫することを頼まれてゐたのであつたが、峯入の先達に當つてゐた爲め、その生前に果し得なかつたことを悔ひ、下山してから急ぎ成就して墓前に供へ、往生院の傍らに庵室を結んでその菩提を弔つた。辨公昌信

【梗概】常陸國行方郡に、平貞盛の末孫で竹原左近尉平昌保といふ文武に優れた人がゐた。發心の志切であつたが、父母や妻の歎きを思つて遂げ得ぬうち、兵亂が起つて討死したので、二男に當る遺兒は、父の遺言によつて七歳の時日光山の座主に預けられた。初め學問修行のため西谷の圓實坊昌譽僧都の許に託せられたが、やがて僧都の重病に遭ひ、その依託で十二歳の年から東谷の教城坊昌長僧都の坊に移り、千代若丸と名乗り、十五歳の時剃髮して辨公昌信と號した。偶々東谷の僧大輔公は美しい辨公の姿に思ひを寄せ、互に睦み合ふたが、その嬉しい夢は東の間で、圖らず大輔公は病を得て世を去つたので、昌信は深い悲歎の末終に病み臥して又その跡を慕つた。眞鏡坊昌澄といふ僧は辨公に天台の四教五時の名目を書寫することを頼まれてゐたのであつたが、峯入の先達に當つてゐた爲め、その生前に果し得なかつたことを悔ひ、下山してから急ぎ成就して墓前に供へ、往生院の傍らに庵室を結んでその菩提を弔つた。辨公昌信

は鹿島のみかくれの明神の化現で、黒髮山の辨石はこの話に因縁があるといふ。【參考】近古小説解題○室町時代小説集解題○辨草紙考平泉澄(歴史地理三七〇一) (島津)○辨内侍(辨内侍の歌人「稱呼」詳しくは後深草院辨内侍「生殘」未詳「家系」左大臣冬嗣の後、父は藤原信實(正四位、右京權太夫、中務大輔)。信實は父隆信と共に歌人として名があり、又似繪の名手として有名である。【人物・閱歴】頓阿の「水蛙眼目」

冬嗣一長良(七代)爲忠
爲業(寂念)
爲隆(隆信)
爲業(寂然)
爲隆(隆信)

に、信實の女子三人とも皆歌人であることを、辨内侍の老の後尼になりて、坂本の北に仰木といふ所にこもりゐて侍りけり。龜山院きこしめして、七夕御會の時、題をつかはされれば、七夕衣に、秋來ても露お袖のせばればたなばたつめに何をかさましとよみて侍りけるを、げにこそとあはれがらせおはしませて、つねに御とぶらひなど侍りけるよし、仰木に行宣法師とてふるきもの、侍りしが語申侍りき」と書いてある。【辨内侍日記】はその宮廷生活の自記であるが、宮仕の始終は詳かでない。池田龜鑑氏は「日記の本文を熟讀するに、着眼の焦點といひ、叙述の態度といひ、そこに青春の若々しさは見えても、中年女性の惱みはいか

【解説】子音(別項)に對する名稱。日本語ではアイウエオの假名で表はされる音、又はカシメ等の假名で表はされる音の中、子音を除いた残りの音が母音である。英獨佛その他の國語で a e i o u の文字で表はされるものは多く母音である。【一般的性質】各國語の音聲中、母音に通ずる一般的要素は二つある。(一)「こゑ」即ち聲帯の振動によつて起る樂音的音響。(二)或る

にしても見ることが出来ないから(宮廷女流日記文學)、多分十七八歳頃に仕仕したものであらう」と言つてゐる。【著作】辨内侍日記二卷(別項)。勅撰集に載つてゐる歌は、續後撰四、續古今八、續拾遺九、新後撰六、玉葉七、續千載二、續後拾遺二、新千載二、新拾遺三、新續古今三、以上合計四十六首(勅撰作者部類)。【參考】辨内侍日記○尊卑文脈○宮廷女流日記文學 池田龜鑑 (野村)

ゐない事は惜しい。要するに記叙多くは禁廷の行事で、和歌を交へてゐる事の多いのは特に目に附く。日次はとび／＼で而も簡單である。一體に言辭は擬古の調を帯びて居り、古歌を引用して文飾とした所がこれである。筆づかひは極めて簡であるが、記叙に引締つた而も鮮明な所があつて、印象の深い點は、長所としてよい。この日記に寫された辨内侍の心境に對して、池田龜鑑氏がいかにも少女

狂歌讀本集三冊(同三年刊)○袖玉狂歌集二冊(同四年刊)○新撰東西集二冊(同四年刊)【野崎】辨要抄 一巻一冊【著者】今川了俊【別名】了俊辨要抄【成立】「應永十六年七月日八十四 徳翁」とあるからこの時に成つたのであらう。【諸本】群書類従本がある。【解説】本書は了俊が歌をよむ心得を初心者に語つたものであつて、彼自身身の八十餘年の修行から得た體驗を基礎とし

【解説】子音(別項)に對する名稱。日本語ではアイウエオの假名で表はされる音、又はカシメ等の假名で表はされる音の中、子音を除いた残りの音が母音である。英獨佛その他の國語で a e i o u の文字で表はされるものは多く母音である。【一般的性質】各國語の音聲中、母音に通ずる一般的要素は二つある。(一)「こゑ」即ち聲帯の振動によつて起る樂音的音響。(二)或る

る。季節として掲げられたものは、歳旦・歳暮・花・鶯・杜鵑・二季の雪等の如きものであるが、その数はあまり多くない。その解説は季節の格を定めるのが主眼となつてゐる。卷末に「發句調練の辨」を添へて發句の本質を論じ、句案の法を説き、終つて蕉門の發句五十一句を「餘興」として四季不同に収め、又相撲の句合六番を載せ、次に「追加」として李由の「四羅廬賦」、許六の「飲食色欲賦」(二者共に許六の「風俗文選」にも収録)を附録して終つてゐる。

(別項)を初めとして「日本紀略」扶桑略記「百鍊抄」本朝通鑑(以上各別項)「續史愚抄」等、おほかたの通史は殆どこの體にのみよつてゐるといふも過言ではない。【坂本】

辨草紙 せんそうし 物語一卷【作者】不詳。恐らく日光山住侶の一人であることは疑ひなかるべく、平泉澄氏は本書中の人物眞鏡坊昌澄を以てこれに擬してゐる。【成立】「近古小説解題」は「回國雜記」に見える道與准后の「雲霧」も及ばで高き山の端に」の歌を載せてある

して辨公昌澄と號した。假令東谷の偉大輔公は美しい辨公の姿に思ひを寄せ、互に睦み合ふたが、その嬉しい夢は東の間で、圓らず大輔公は病を得て世を去つたので、昌澄は深い悲歎の末終に病み臥して又その跡を慕つた。眞鏡坊昌澄といふ僧は辨公に天台の四教五時の名目を書寫することを頼まれてゐたのであつたが、峯入の先達に當つてゐた爲め、その生前に果し得なかつたことを悔い、下山してから急ぎ成就して墓前に供へ、往生院の傍らに庵室を結んでその菩提を弔つた。辨公昌澄

【解説】「子音」(別項)に對する名稱。日本語ではアイウエオの假名で表はされる音、又はカシメ等の假名で表はされる音の中、子音を除いた残りの音が母音である。英獨佛その他の國語で a e i o u の文字で表はされるものは多く母音である。

【一般的性質】各國語の音聲中、母音に通ずる一般的の要素は二つある。(1)「こゑ」即ち聲帯の振動によつて起る樂音的音響。(2)或る空洞中で「こゑ」が受ける音色の差異。「こゑ」に於ては、その屬性たる高さ強さ長さは、通例單語を組織する上でアクセントの名を以て呼ばれ、母音本來の要素と考へられない。母音としては、單に何等かの「こゑ」であればよいのである。音色の差異は「こゑ」が或る空洞を通過するによつて生ずる。その空洞は聲帯よりも奥にある胸腔もその一であるが、言語の音聲としての母音を生ぜしめるのは、聲帯よりも上部の咽頭・鼻腔・口腔である。その中最も重要なものは口腔である。

【母音の差別】種々なる母音を生ぜしめる最も重要な直接原因は、口腔の形及び大きさである。口腔の形と大きさを決定するものは、勿論口腔を圍む諸部分、即ち上顎(口蓋)・上齒列・兩頬・唇・下齒列・舌等で、その中動き易いものが主として口腔の形と大きさの變化を生ぜしめる。更にその中に於て重要なものは、下顎及び舌、これに次いで唇である。口腔に次いで重要なものは鼻腔である。これは所謂通鼻母音を生ずる。

【分類】各國語に用ひられる總ての母音を包括し得るやうな一般的分類は、色々に試みられるが、從來の音聲學で最も普通に用ひられるものは、舌の形及び位置、殊にその表面を基

にしても見ることが出来ないから(宮廷女流日記文學)、多分十七八歳頃に仕出したものであらう」と言つてゐる。【著作】辨内侍日記二卷(別項)。勅撰集に載つてゐる歌は、續後撰四、續古今八、續拾遺九、新後撰六、玉葉七、續千載二、續後拾遺二、新千載二、新拾遺三、新續古今三、以上合計四十六首(勅撰作者部類)。

【参考】辨内侍日記○尊卑文脈○宮廷女流日記文學 池田龜鑑

辨内侍日記 べんないじ 日記二卷【野村】

ゐない事は惜しい。要するに記叙多くは禁廷の行事で、和歌を交へてゐる事の多いのは特に目に附く。日次はとび／＼で而も簡單である。一體に言辭は擬古の調を帯びて居り、古歌を引用して文飾とした所がこれである。筆づかひは極めて簡であるが、記叙に引締つた而も鮮明な所があつて、印象の深い點は、長所としてよい。この日記に寫された辨内侍の心境に對して、池田龜鑑氏がいかにも少女らしい素直な精神が反映せられてゐるものと考察して、これを「微笑の文學」と目してゐるのは、蓋し適評であらう。洵に書中殆ど陰鬱な空氣はない。後宮の才媛を取巻いた陽氣な場面の現出したものである。因みに、後の「増鏡」内野の雪に、おほきおと(實氏)と少將内侍(實貴の女)との雪の歌の贈答を載せてゐるのは、この日記に據つたことは争はれぬ。この日記が、後々讀者を得てゐたことは、この一例でも分る。なほ本書の語句索引に「類標」(圖書寮蔵)がある。

狂歌撰集三册(同三年刊)○袖玉狂歌集二册(同四年刊)○新撰東西集二册(同四年刊)【野村】

辨要抄 べんようしやう 歌論書一卷一册【著者】今川了俊【別名】了俊辨要抄【成立】「應永十六年七月八日八十四 徳翁とあるからこの時に成つたのであらう。【諸本】群書類従本がある。【解説】本書は了俊が歌をよむ心得を初心の者に語つたものであつて、彼自身の八十餘年の修行から得た體驗を基礎として語つてゐる。彼は歌の技巧を修得してよくよまうとする態度を退けて、「心を養ふまてなり」と言つてゐる。かくて歌をよくよまうとすれば惡念になつてしまひ、結局うたよまぬ人となると言つてゐる。かくて初心の時はお學がましい事や、めづらしい事に心ひかれて、うら／＼と一ふしあるやうにむむのは、まぎらはしい事であるとしてゐる。従つて彼のいふ歌の修行も「三代集」をよむ外に、「伊勢物語」清少納言枕草子や「源氏物語」をよむべきであり、殊に「源氏」をくりかへしよむべきであるとしてゐる。了俊が常に心を主としてそこに修行の根本をおき、又歌の中心をおいた立場をよく見ることが出来る。【價值】本書は了俊の他の歌論書とともに、その素樸美を重んずる歌論を見られる點に注意すべきであるが、全體としては創見の尠いために絶對的價值は高くない。【久松】

【解説】「子音」(別項)に對する名稱。日本語ではアイウエオの假名で表はされる音、又はカシメ等の假名で表はされる音の中、子音を除いた残りの音が母音である。英獨佛その他の國語で a e i o u の文字で表はされるものは多く母音である。

【一般的性質】各國語の音聲中、母音に通ずる一般的の要素は二つある。(1)「こゑ」即ち聲帯の振動によつて起る樂音的音響。(2)或る空洞中で「こゑ」が受ける音色の差異。「こゑ」に於ては、その屬性たる高さ強さ長さは、通例單語を組織する上でアクセントの名を以て呼ばれ、母音本來の要素と考へられない。母音としては、單に何等かの「こゑ」であればよいのである。音色の差異は「こゑ」が或る空洞を通過するによつて生ずる。その空洞は聲帯よりも奥にある胸腔もその一であるが、言語の音聲としての母音を生ぜしめるのは、聲帯よりも上部の咽頭・鼻腔・口腔である。その中最も重要なものは口腔である。

【母音の差別】種々なる母音を生ぜしめる最も重要な直接原因は、口腔の形及び大きさである。口腔の形と大きさを決定するものは、勿論口腔を圍む諸部分、即ち上顎(口蓋)・上齒列・兩頬・唇・下齒列・舌等で、その中動き易いものが主として口腔の形と大きさの變化を生ぜしめる。更にその中に於て重要なものは、下顎及び舌、これに次いで唇である。口腔に次いで重要なものは鼻腔である。これは所謂通鼻母音を生ずる。

【分類】各國語に用ひられる總ての母音を包括し得るやうな一般的分類は、色々に試みられるが、從來の音聲學で最も普通に用ひられるものは、舌の形及び位置、殊にその表面を基

【作者】後深草院辨内侍と傳へられる。併し書中、彼女の歌のところに、一々辨内侍云々と本文に記してゐるのは、自作の文章として疑はしい筆致とも思はれる。即ち辨内侍の家集の如きを種にして、誰か別人がこの日記に綴りなしたのではなからうかとも疑はれないことはない。が併しそれを強く主張するほどの證據もない。【名稱】「辨内侍日記」と云ふ名號は、頼阿の「水蛙眼目」に見えてゐて、その名の行はれたことはかなり古い。別に「後深草院辨内侍集」と稱せられ、又「辨内侍寛元記」と題せられてゐるものもある。【諸本】寫本は少く、内閣文庫・彰考館・無窮會文庫・靜嘉堂・京都帝國大學・加茂文庫・住吉文庫・松井簡治氏・佐佐木信綱氏・池田龜鑑氏等の所藏本があるが、蟲損の部分は一で、善本となし難い。刊本としては群書類従日記部に収めてある。これは二本を以て校合したもの。日本文學全書の如き覆刻物もある。【解説】上巻は寛元四年正月の御讓位に始まり、寶治三年(建長元年)九月に終り、下巻は前を承けて、十一月の五節の事から建長三年十月頃に至つてゐる。併し何分卷末に蠹蝕が多かつたやうで、今到底読み分けられぬ。完全な善い本の傳はつて

【参考】宮廷女流日記文學 池田龜鑑 【野村】

便々館湖鯉鮒 べんべんくわんこりふ 狂歌師【本名】大久保正武。通稱、平兵衛。【別號】福林堂巨立(初號)【生歿】寛延二年江戸に生れ、文政元年(一四七八)四月五日歿す。享年七十。

【法名】便了院殿松譽夕山居士【墓所】牛込藁店光照寺【閑歴】幕府の御家人で牛込山伏町に住み、狂歌を朱樂菅江(別項)に學んだが、後、琵琶連の一社を結んで、その棟梁となつた。歿後門人八景園(阿久澤彌市)が後を襲いで二世便々館琵琶彦と號し、その門人便雲居(加藤利吉)が三世便々館琵琶彦と號した。【著書】狂歌杓子栗二册(寛政十二年刊)○春の戯れ歌一册(享和二年刊)○狂歌不卜集二册(文化二年刊)○

der Vokal, der Selbstlaut 【佛】 la voyelle

【解説】「子音」(別項)に對する名稱。日本語ではアイウエオの假名で表はされる音、又はカシメ等の假名で表はされる音の中、子音を除いた残りの音が母音である。英獨佛その他の國語で a e i o u の文字で表はされるものは多く母音である。

【一般的性質】各國語の音聲中、母音に通ずる一般的の要素は二つある。(1)「こゑ」即ち聲帯の振動によつて起る樂音的音響。(2)或る空洞中で「こゑ」が受ける音色の差異。「こゑ」に於ては、その屬性たる高さ強さ長さは、通例單語を組織する上でアクセントの名を以て呼ばれ、母音本來の要素と考へられない。母音としては、單に何等かの「こゑ」であればよいのである。音色の差異は「こゑ」が或る空洞を通過するによつて生ずる。その空洞は聲帯よりも奥にある胸腔もその一であるが、言語の音聲としての母音を生ぜしめるのは、聲帯よりも上部の咽頭・鼻腔・口腔である。その中最も重要なものは口腔である。

【母音の差別】種々なる母音を生ぜしめる最も重要な直接原因は、口腔の形及び大きさである。口腔の形と大きさを決定するものは、勿論口腔を圍む諸部分、即ち上顎(口蓋)・上齒列・兩頬・唇・下齒列・舌等で、その中動き易いものが主として口腔の形と大きさの變化を生ぜしめる。更にその中に於て重要なものは、下顎及び舌、これに次いで唇である。口腔に次いで重要なものは鼻腔である。これは所謂通鼻母音を生ずる。

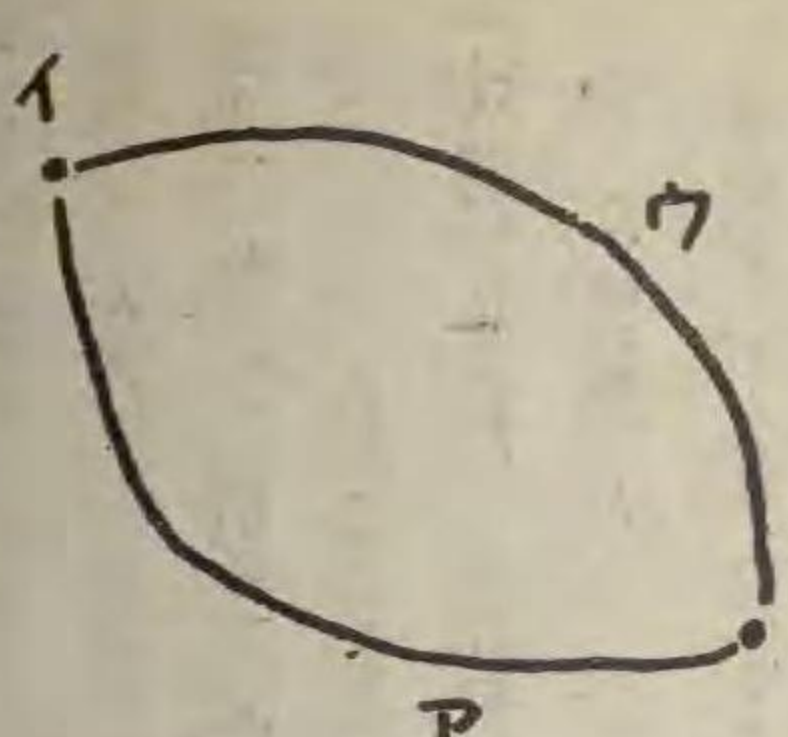
【分類】各國語に用ひられる總ての母音を包括し得るやうな一般的分類は、色々に試みられるが、從來の音聲學で最も普通に用ひられるものは、舌の形及び位置、殊にその表面を基

準とするものである。身體の中線に添って口腔を縦断したと想像し、舌の表面の縦断によつて生ずる曲線を以て母音を説明する(第一圖イロの線)。而してその曲線中、最高の一線を



第一圖

探り、その他は自然の圓みをもつものと假定する。この最高點が口腔の中で、最も前唇に近い方向に進み、同時に最も高い時、「イ」といふ母音及びこれに類似の母音の舌の位置といふ。但しその高さが或る程度を越えて口蓋に近づき過ぎる時は、其處に摩擦的音響を生ずる。かゝる摩擦的音響は、通例母音の中に入れて、従つて摩擦のない限りに於て、最高の位置を母音の極限とする。又舌の最高點が口腔内で最も奥に在つて、而して最も高い(軟口蓋に近い)時は、「ウ」に類似の母音を作る。この時も、摩擦的音響のない最高の位置を母音の極限とする。また下顎が下り、舌の位置が口蓋から最も遠ざかり、口腔が大きくなる時は「ア」に類似の母音を作る。この時、舌の位置が前に寄る場合と、奥に引込む場合とで、「ア」の音色



第二圖

に多少の差異を生ずる。以上が母音の發生の舌の極限的位置である。更に口腔を圍む諸部分に沿つて以上の諸點を結ぶ線を想像する時(第二圖)、この線で圍まれた範圍を、口腔により生ずるあらゆる母音の可能範圍となすことが出来る。各國語の

母音は、この可能範圍のうち、若干の點を基準として説明する。日本語で標準的な母音と考へられるものは五種あり、それら「アイウエオ」の假名で表はされる。勿論これ等の各音は圖中の一點に當るものでなく、大體の範圍内の色々な位置により生ずるものが、同じ母音と考へられるのである。即ちイは第二圖中のイの類、アはそのアの類、ウは第二圖中のウよりも、前方に偏つた邊で作られる音の類、エはイとアとの中間、オはウとアとの中間といふ大體の區別による。イとアとを結ぶ線及びそれに近い處で發する母音を前部母音と名づけ、ウとアとを結ぶ線及びそれに近い處で發するものを後部母音と名づける。以上の如く、從來母音の説明は、側面から見た舌の形と位置とを以てしたが、正面から見た舌の形と位置、上部から見た舌の形と位置といふ三方面による立體的説明は、今日までまだ十分に研究が進んでゐない。

【器官の位置・運動】「唇」唇の開口の大きさと形とが母音の音色に種々なる影響を及ぼすものである。多くの國語では、後部母音に唇の圓形(唇の開口に近いもの)が伴ふ。日本語ではこの傾向が殆どない。又或る國語では前部母音に唇の圓形を伴はせる慣習がある。例へばドイツ語のiiで表はす母音、フランス語のuで表はす母音(音聲符號y)は、「イ」の類の母音に唇の圓形の伴ふものである。ドイツ語のeで表はす母音、フランス語のeuで表はす母音(音聲符號ø)は、「エ」の類に唇の圓形の伴ふものである。「通鼻母音」口腔に於て種々の母音の位置を作ると同時に、軟口蓋と咽頭壁との接觸を離し、鼻腔への通路を開く時、「こゑ」は鼻腔にも入り、母音の音色に變化

を來す、これを通鼻母音と名づける。フランス語の如きは數種の通鼻母音を言語音として使つてゐる。以上母音の説明は、從來音聲器官の形・位置・運動等を以てしたが、同時にそれより發する音聲の聴覺上の性質をも併せ考へることが必要である。又言語音として或る意義を表はす語句を組立てる上に、實際發せられる具體音響の中での屬性が、抽象的に各國語の語音として慣習をなすかの點も考慮しなければならぬ。

【參考】「音聲學」の參考を見よ。= Russell: *The Vowel* 1928. = Russell: *Speech and Voice* 1931. 【神保】

母音組織は「音聲」を見よ。

法は文法【英】mood, mode【獨】(der) Modus(複modi)【佛】le mode【解説】イン

ドヨーロッパ語族(別項)に於ける文法範疇の一つ。動詞の語形變化及びその意義を區別する範疇の一つ。主なるものを挙げれば、(一)Indicative(直説法)(この譯語は、本書における假定的に定めたもの、以下同じ)。多くは或る事柄を事實として断定叙述する。(二)Konjunktiv(獨)(接續法)。古くは意志・豫見(何々せんがため、又はせざらんがため等)を表はした形。(三)Optative(希求法)。願望或は可能等を表はす。(四)Imperative(命令法)。命令・禁止を表はす。古く古代インド派等にて禁止を表はす形があつて、特にInjunktiv(獨)と名づけることがある(Brugmann: *Kurze veygl. Gram. S. 578*)。以上各類はインヨーロッパ語族中、各派各國語により、用法が種々に變遷した爲め、今日一様に分類することは困難である。例へば、ゲルマン派(ドイツ語・英語等)に於てKonjunktiv, Optativは合一し、今日の

文法ではKonjunktive(英語でSubjunctive)の名で呼ばれる。又英語等で可能の意を表はすものにPotential moodの名を附けることあり、又別にInfinitive(不定法)を別の法として立てることあり、凡て「法」に通ずる全體の定義の如き説明法を求めれば、ブルックマンの如く「話し手の心の氣分を表はし、或る主觀的狀態に「動作」が客觀的に伴ふことを表はす」等の言ひ方による外はない。

【參考】Brugmann: *Kurze veygleichende Grammatik der indogermanischen Sprachen* 1922. [特] S. 578f. = Dellück: *Einleitung in das Studium der indogermanischen Sprachen* 6. Auflage. 1919. [特] S. 224. = Jespersen: *Philosophy of Grammar* 1924. 【神保】

抱一はいつ「屠龍之技」を見よ。

法雲はふん國語學者【名】初め寶雲と云つたやうである。【生歿】寛政六年生れ、慶應三年(一五二七)十一月二十四日歿す。享年七十四

【墓所】若狭國遠敷郡野村光徳寺【閑歴】法雲は若狭國遠敷郡野村光徳寺の住職であるが、初め同國小濱の妙玄寺住職(東條義門(別項)に就いて國語を學んだ。中年以後は寺を弟智常に譲つて、多く京都及び名古屋に住んでゐた。名古屋では正願寺と云ふ寺にゐた。而して常に國語の研究に従事し、傍ら佛教學を研究した。晩年は郷里へ歸つて村童に習字などを教へた。法雲は又數學を得意とし、これを村人に教へてゐたといふ。【著書】五十文字以呂波開書一冊(天保十四年成)「いろは及び」京字と四十九字の一字々々について、音義字形を講義した(一)○音韻鏡略圖一冊(文久二年刊。五十音圖に神代文字を書き入れ、音義に依つて解説したも

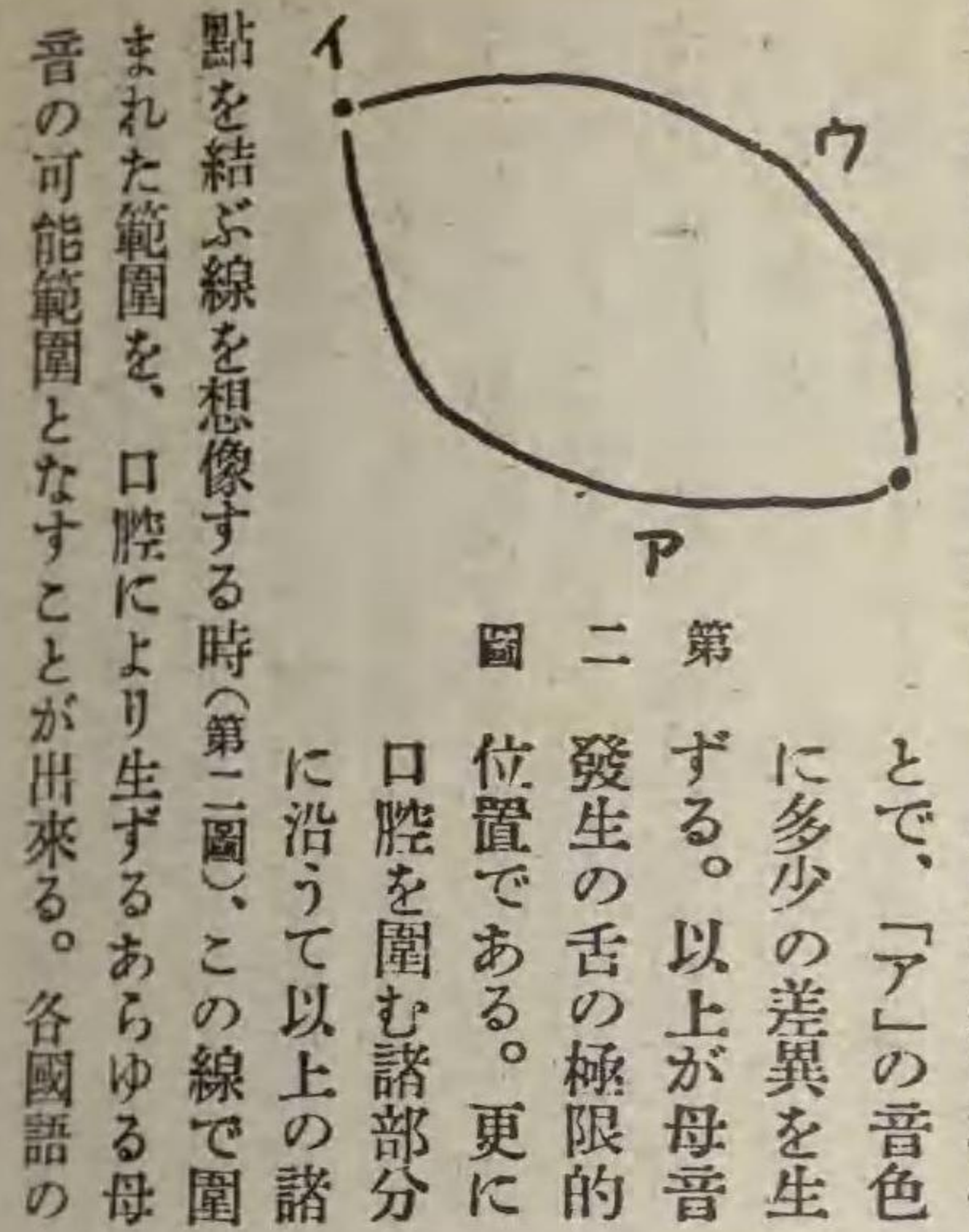
の)○和語活用略圖一冊(嘉永元年成。刊。義門の「和語略圖」(別項)を少く訂正したもの)○和語活用略圖一冊(嘉永元年成。前記「和語活用略圖」を自ら註解したもの)○眞宗聖教活語圖解二冊(義門の「友鏡」(二)に「和語略圖」を解説したもの)○眞宗聖教活語圖解(別項)に依つて、活用手爾波の事を説明し、その例證に、主として眞宗の聖教を用ひたもの)○三經字音清濁考一冊(淨土三部經の字音の清濁を研究したもの)○韻學策一冊(天籟鐘の説に依つて、親鸞著

兵衛は、嘗て主人の用で江戸に下つた折の定宿、關の宿屋の下女に知邊があつたので尋ねて行き、その女と貧しいながら共稼ぎの月日を送ること五年に及んだ。偶々故郷の親許から勸當を赦され、立ち歸つて父親の後を相續する。春になれた藤兵衛は忽ち親の遺産を潰してしまひ、着のみ着のみ、に村を追はれる(一)二、情を笠に著る櫻(櫻)本。藤兵衛は遠江國まで來て、昔の定宿仙臺屋九平次といふに

城町島原の外見(吾國島原の戲言)、四條河原若衆歌舞伎の有様(四條河原の戲言)を叙し、見雪唐一者叫消、近紅顔者被照、徒停於舞臺下と結んである(卷五)。

嘆じた狂歌である。【沿革】發生については、寺院との關係等も考へられるが詳かでない。その藝能は呪師や傀儡子(各別項)の藝能より出てゐるが、更に田樂と結びついたので、鎌倉以後に大に行はれ、今日も太神樂(別項)に面影を残してゐる。

【參考】見世物研究朝倉無聲【小寺】法界坊はつか「隅田川續傳」を見よ。



とで、「ア」の音色に多少の差異を生ずる。以上が母音の發生の舌の極限的位置である。更に口腔を圍む諸部分に沿つて以上の諸點を結ぶ線を想像する時(第一圖)、この線で圍まれた範圍を、口腔により生ずるあらゆる母音の可能範圍となすことが出来る。各國語の

がため、又はせざらんがため等)を表はした形。(三)Optative(希求法)。願望或は可能等を表はす。(四)Imperative(命令法)。命令禁止を表はす。古く古代インド派等にて禁止を表はす形があつて、特に Injunctive(獨)と名づけることがある(Brugmann: Kurze vgl. Gram. S. 578)。以上各類はインドヨーロッパ語族中、各派各國語により、用法が種々に變遷した爲め、今日一樣に分類することは困難である。例へば、ゲルマン派ドイツ語(英語等)に於て Konjunktiv, Optativ は合一し、今日の

に就いて國語を學んだ。中年以後は寺を弟智常に譲つて、多く京都及び名古屋に住んでゐた。名古屋では正願寺と云ふ寺にゐた。而して常に國語の研究に従事し、傍ら佛教學を研究した。晩年は郷里へ歸つて村童に習字などを教へた。法雲は又數學を得意とし、これを村人に教へてゐたといふ。【著書】五十文字以呂波開書一冊(天保十四年成、いろは及び「寛」字と四十九字の一字々々について、音義字形を講義したもの)○音韻略圖一冊(文久二年刊。五十音圖に神代文字を書き入れ、音義に依つて解説したもの)

○和語活用略圖一冊(嘉永元年成。刊。業門の「和語略圖」(別題)を少しく訂正したもの)○和語活用略圖解一冊(嘉永元年成。前記「和語活用略圖」を自ら註解したもの)○ニッケテ活語圖解二冊(業門の「友鏡」(二)にをば「和語略圖」(別題)に依つて、活用手爾波の事を説明し、その例證に、主として眞宗の聖教を用ひたもの)○三經字音清濁考一冊(淨土三部經の字音の清濁を研究したもの)○韻學策一冊(天籟鐘の說に依つて、親鸞著「教行信證」の行卷の音韻を説いたもの)○韻學功證一冊(安政四年成。親鸞著「愚禿鈔」の中の「即是亦斯」の四字について字義を研究したもの)。この他國語に關するものには、表題のない書が二部あり、數學に關するもの一部、曆學に關するもの二部がある。

兵衛は、嘗て主人の用で江戸に下つた折の定宿、關の宿屋の下女に知邊があつたので尋ねて行き、その女と貧しいながら共稼ぎの月日を送ること五年に及んだ。偶々故郷の親許から勸當を赦され、立ち歸つて父親の後を相續する。奢になれた藤兵衛は忽ち親の遺産を潰してしまひ、着のみ着のまま、に村を追はれる(二ノ二、情を笠に著る(櫻)本)。藤兵衛は遠江國まで来て、昔の定宿仙臺屋九平次といふに泊る。以前宿つた時少しの恩をかけてゐたので、宿屋夫婦は大に歡待する。藤兵衛は身の上を打明け、夫婦に勧められて流泉寺といふ寺に入り、心にもなく青道心となり、名を靈性と改める(二ノ一、和惠鏡又殊之呪詛。靈性は九平次を誘つて伊勢拔參りの幾之助といふ少年を殺して所持金を奪はんとし、過つて九平次の子供を殺してしまふ。この事顯はれて二人は重き罪におちる。幾之助の免れたのは太神宮の加護によると聞く人感じあふ(二ノ二、神靈不思議雞鳴の時。つづいて話は太神宮の靈驗談にうつる。神宮奇瑞の御祓。洛陽あまべ村御祓の奇瑞。追剝初瀬越の奇瑞(卷三)。次に寶永二年三月朔日より、京大阪伊勢路に於て、金銀・米錢・衣服・器財・食物等に限らず、ぬけ参りに志をなす人数帳とあり、上半段に京都の部、下半段に大阪の部及び堺の部がある。續いて大阪御霊の宮へ納めたてまつる御祓。戸閉さぬ御代堺の御奇瑞。誓は同じ伊勢の神風。太神宮御奇瑞問答の諸項が並べてある。この最後の二項に來て突然傳之助が出現し、言辭なるものと太神宮の靈驗についての回答になつてゐる(卷四)。傳之助、諸國を一見して故郷に立ち歸り、なほ洛中洛外を巡る。この條道行文の形式である(風流都めぐり)。次に都の傾

城町島原の外見(洛陽島原の戲言)。四條河原若衆歌舞伎の有様(四條河原の戲言)を叙し、見雪膚・消・近・紅・顔・者・被・照・徒・停・於・舞臺下・と結んである(卷五)。

【解説】序に、京西山の邊に風流傳之助といふ男があつた。或る時北野に參籠して、父母にあはせ給へと赤心こめて祈ると、満願の夜に神託があり、「日本國中をあまねくめぐり山川萬里を越え、神社佛閣に詣で、且つはその國の市店田舎民屋邊土遠郷色里烏々所々のあらゆる人の言行善惡を見聞して重ねて我前に來りて語るべし、またこれを書物に書きて廣く世にあらはさば必ず父母聞きおよび尋ね來り、對面することを得べし」といふのであつたから、寶永二年初春京を出でて、日本國中を巡つて立ちかへるとある。これに依つても、作者は傳之助の見聞記に假託して、諸國の名所・色里・人情等を叙するを目的としたと見える。かく見聞の事實等を述べることに重きを置いたから、自然に小説としての筋の運びがおろそかになつて、支離滅裂になつてしまつてゐる。隨つて佳作とは稱し難い。

嘆じた狂歌である。【沿革】發生については、寺院との關係等も考へられるが詳かでない。その藝能は呪師や傀儡子(各別項)の藝能より出てゐるが、更に田樂と結びついたので、鎌倉以後に大に行はれ、今日も太神樂(別項)に面影を残してゐる。

【参考】見世物研究 朝倉無聲 (小寺)

法界坊(一隅田川續傳)を見よ。

奉加狀 古文書【解説】勸進に就いて淨財を寄進する文書。奉加帳或は奉加牒とも云ふ。寄進の品目・數量・姓名等を勸進狀(別項)の續きに書くこともあるが、多くは別紙である。

奉加 馬壹定 右、爲江州長命寺塔婆供養、所奉加之狀如件 元應二年三月九日 左兵衛尉(花理)

【業績】法雲は義門に従つて國語學を修めたが、後、音義説に傾いた。又漢字の音韻にも通じて居り、その著十餘部の中、全く音義説に依つたものは一二部に過ぎないが、音義説の影響は大部分の著に見受けられる。【田田】

【作者】田村榮秀【刊行】寶永二年板。

【名義】「名義」禪家に於て諸縁を打捨てることを放下するといひ、その心から出たといふ。【名稱】一種の曲藝又はそれをなす者。中古、僧形の演者で放下僧なる者のあつた事は謡曲「放下僧」に見えてゐる。別に放下師の語もある。謡曲「放下僧」に、「某は放下になり候べし、御身は放下僧に御成り候へ」と兩者を區別してゐる。【性質】放下の演じた藝能は、一種の曲藝で手玉を取り、刀の使ひ分け、コキリコ竹の綾取りの如きもので、「したたまか、何ぞと人のとひしとき、露とこたへん、消えてなければ」は放下の技藝を

【作者】田村榮秀【刊行】寶永二年板。

【種概】風流傳之助は元近江國の生れである。十三の時京都に上り、三條室町の加賀屋といふ大店の手代となり、名を藤兵衛と改めた。或る時關東者に加賀絹一疋を丹後絹にすりかへて賣渡し、首尾よく儲けたと思つてゐると、請取つた金は悪銀であつたので却つて損をした。主人は戒めのために、その悪銀を藤兵衛に與へる。それより藤兵衛は實直に勤めてゐたが、商用で伏見に赴いての歸るさ、ふと稻荷茶屋に立ち寄りてかの悪銀を使ふ。それより遊びの味を覺えて、終に勘當の身となる(一ノ一、天運自然之色里。頼るべき方とてもない藤

【作者】田村榮秀【刊行】寶永二年板。

【名義】「名義」禪家に於て諸縁を打捨てることを放下するといひ、その心から出たといふ。【名稱】一種の曲藝又はそれをなす者。中古、僧形の演者で放下僧なる者のあつた事は謡曲「放下僧」に見えてゐる。別に放下師の語もある。謡曲「放下僧」に、「某は放下になり候べし、御身は放下僧に御成り候へ」と兩者を區別してゐる。【性質】放下の演じた藝能は、一種の曲藝で手玉を取り、刀の使ひ分け、コキリコ竹の綾取りの如きもので、「したたまか、何ぞと人のとひしとき、露とこたへん、消えてなければ」は放下の技藝を

【作者】田村榮秀【刊行】寶永二年板。

【種概】風流傳之助は元近江國の生れである。十三の時京都に上り、三條室町の加賀屋といふ大店の手代となり、名を藤兵衛と改めた。或る時關東者に加賀絹一疋を丹後絹にすりかへて賣渡し、首尾よく儲けたと思つてゐると、請取つた金は悪銀であつたので却つて損をした。主人は戒めのために、その悪銀を藤兵衛に與へる。それより藤兵衛は實直に勤めてゐたが、商用で伏見に赴いての歸るさ、ふと稻荷茶屋に立ち寄りてかの悪銀を使ふ。それより遊びの味を覺えて、終に勘當の身となる(一ノ一、天運自然之色里。頼るべき方とてもない藤

【作者】田村榮秀【刊行】寶永二年板。

【名義】「名義」禪家に於て諸縁を打捨てることを放下するといひ、その心から出たといふ。【名稱】一種の曲藝又はそれをなす者。中古、僧形の演者で放下僧なる者のあつた事は謡曲「放下僧」に見えてゐる。別に放下師の語もある。謡曲「放下僧」に、「某は放下になり候べし、御身は放下僧に御成り候へ」と兩者を區別してゐる。【性質】放下の演じた藝能は、一種の曲藝で手玉を取り、刀の使ひ分け、コキリコ竹の綾取りの如きもので、「したたまか、何ぞと人のとひしとき、露とこたへん、消えてなければ」は放下の技藝を

【作者】田村榮秀【刊行】寶永二年板。

【種概】風流傳之助は元近江國の生れである。十三の時京都に上り、三條室町の加賀屋といふ大店の手代となり、名を藤兵衛と改めた。或る時關東者に加賀絹一疋を丹後絹にすりかへて賣渡し、首尾よく儲けたと思つてゐると、請取つた金は悪銀であつたので却つて損をした。主人は戒めのために、その悪銀を藤兵衛に與へる。それより藤兵衛は實直に勤めてゐたが、商用で伏見に赴いての歸るさ、ふと稻荷茶屋に立ち寄りてかの悪銀を使ふ。それより遊びの味を覺えて、終に勘當の身となる(一ノ一、天運自然之色里。頼るべき方とてもない藤

【作者】田村榮秀【刊行】寶永二年板。

【名義】「名義」禪家に於て諸縁を打捨てることを放下するといひ、その心から出たといふ。【名稱】一種の曲藝又はそれをなす者。中古、僧形の演者で放下僧なる者のあつた事は謡曲「放下僧」に見えてゐる。別に放下師の語もある。謡曲「放下僧」に、「某は放下になり候べし、御身は放下僧に御成り候へ」と兩者を區別してゐる。【性質】放下の演じた藝能は、一種の曲藝で手玉を取り、刀の使ひ分け、コキリコ竹の綾取りの如きもので、「したたまか、何ぞと人のとひしとき、露とこたへん、消えてなければ」は放下の技藝を

【作者】田村榮秀【刊行】寶永二年板。

新纂(初編)に収めてある。「鬼一法眼」と題する寫本は三卷本である。【題材】判官物。義經傳説中の鬼一法眼傳説を取扱ひ、兵法傳説話の一異型としての物語が主眼で、戀愛談がその挿話となつてゐる。「義經記」の叙述に於て挿入的である辨慶の生立物語が、辨慶物語(別項)では主題をなすが如く、同じく鬼一法眼傳説は本書に於て重要な展開をなし、兵法傳説話であるところから、鞍馬天狗傳説との融化が行はれ、戀愛譚から「二段草子」の淨瑠璃姫傳説と混淆してゐる。又勇者求婚説話の傍をも留めて、牛若丸島渡傳説即ち御曹司島渡りの内容とは、それが神話的童話的であると、これが人間の事實的であるとの差が、兩者を異つた説話にしてゐるに過ぎないと言つてよい程の類似點を持つてゐる。(御曹司島渡り参照)

【梗概】奥州の冠者義經が、鎌田の少進に案内されて来たのは、一條今出川にある鬼一法眼の宿所であつた。彼の相傳する兵法の秘書を學ぼうためである。鬼一は公卿・殿上人・奈良法師等、都の内外六千人を弟子にしてゐる兵法家であるが、元來の大慾深で、それを心得てゐる少進に唆され、義經の佩いてゐると云ふ黄金作りの太刀に心を動かしてその冠者を引見する事になり、傍若無人の威勢を示して接しようとしたが、一見した御曹司の非凡な眼光に恐れて逃げ入り、早々に連れ歸れと少進を責めたが、義經は肯んぜず、鎌田は面目を失つて若君を残して獨り辭去した。八日目の曉、部の隙から窺つた法眼は、廣縁の寒風の中に悠々横はりながら右眼を開いて些の油斷も見せずゐる冠者を見た。若しこれが噂に聞く左馬頭殿の御子九郎御曹司なら、弟子に

取つても不足はないと思つたが、平家への聞えもあつて敬遠したもの、更に七日経たず、廣縁の冠者は食も攝らず立ち去りもしないといき、主の命令はともあれと、女房達の無情を歎じて厚くもてなし、法物語して歸さうと裝束を繕つて對面した。美濃守すけもりや相馬將門の事、樊噲・張良の事を語つて兵法の由來を述べ、鬼一渡唐して張良二十七代の孫から傳へた四十二卷を習へば、望の遂げぬ事はないと誇るので、御曹司は愈々習學の念に堪へなかつた。鬼一には三人の姫があり、長はたこ(麗麗)の藏人に、次は五條の悪とかい坊に嫁し、洛中一の美人の聞えある三の姫は繁き艶書に手も觸れず、父の理想に任せて册かされてゐたが、或る夜管絃の遊を催した時、妙音に誘はれた義經は花園山へ忍び寄り、腰なる村雨丸を取出して吹き合せたので喚び入れられ、名管名手、合奏は更に興趣を加へて、ただ時の經つのが惜しまれた。その後御曹司は自分の身の上に同情して感めてくれる姫の乳母更科に、戀の歌を記した玉章を託して姫と契を結んだ。明けて治承二年正月八日、姫の方では祝の管絃の催があつたが、寢覺の耳に聞き慣れぬ笛の音を聴き分けた法眼は、夜の明けの待ちきれず、更科を喚びつけて糺明けるのも待ちきれず、更科を喚びつけて糺明し、冠者を斬らうと怒り哮けるを人々に止められ、更に正月十五日鬼一が館に公卿達の參集があつた時、目にとまつては我までの恥、上藤達の御歸りまで傍らにあれと命じたのを、傍らとは姫の方こそと義經は態と奥へ行つたので、鬼一の怒り心頭に發し、長刀の鞘を拂つたが、姫が不憫と思ひ返し、俄に一同を引具して熊野詣に出で立つた。二人の仲を己が遠州の際の事と、人にも己れにも責を輕めるため

であつたが、御曹司は時こそよとと姫にせまり、法眼の秘藏する兵法の社に入つて悉く披見し、大事の箇所は寫し取つて了つた。歸京した法眼は、先づ氣に懸つてゐた兵法の社を調べると、不淨の罪免れず、一の巻が二の巻の壺に入つてゐた上、姫の行動には繼母の北方が證言を與へたので、最早赦すことはできぬとて、冠者を討ち取る事を快諾した婚の五條の悪とかい坊と、とうかいを斬れと頼まれた御曹司とは、その夜石山で出會ひ、若僧共を隨へた七尺豊かの荒法師は、白面の小冠者のために散々翻弄せられた上、太刀も長刀も、終に首までも取られてしまつた。さすが御曹司のために女房達と共に念佛回向してゐた鬼一の面前に、とうかいの首を齎して愕かした義經は、夢かと喜ぶ姫君に始めて世を忍ぶ我が素性を明かし、共にと縋る袂を拂つて立ち出でたが、姫は歎きに堪へず、十一日この世を去つた。父の法眼は泣く泣く野邊の送り虎の巻のみは飛び出て天上へ昇つて了つた。都の人目を憚つて、園城寺の九輪に登つて見渡した御曹司の方へ、煙は風に靡いて來たといふ。かくて永く我が朝に兵法の秘卷は絶えなかつたが、御曹司の筆のみが續かるところどころにこれを傳へ、且つ義經はかの兵法の奇特によつて後年天下に名將と仰がれた。

【影響】特に本書のみの影響ではなく、寧ろ「義經記」の影響とすべきであらうが、本書内容の傳説に取材し、少くとも形に於ては本書の系統に屬する後代作品は尠くない。諸曲の「淮海」、金平本「義經記」「義經興廢記」「義經勳功記」などがあり、特に文耕堂・長谷川千四合作の操淨瑠璃「鬼一法眼三略卷(別項)」は、歌舞伎にも移された。淨世草子には同じ年に祐佐の「風流軍談」、二年後れて其續の「鬼一法眼虎の巻」、讀本には馬琴の「俊寛傳都鳥物語」(別項)、その他無數の義經の一代記風の繪本や草紙類の外、歌舞伎の「鬼一法眼指南車」(寶曆四年森田進)「勝時榮源氏」(明和二年森田進)などにも、この傳説が脚色せられてゐる。なほこの傳説並に本書と關聯して、「義經虎の巻」と名づけて上梓されてゐるものもある。

【参考】近古小説新纂初編(考證) 〔鳥津〕

判官物語 義經記を見よ。

判官物の謡曲 義經記を見よ。

判官義經傳説を取扱つた謡曲は、現存のもの三十餘あり、そのうち現行のものに、「鞍馬天狗」「橋辨慶」「笛之巻」「烏帽子折」「熊坂」「關原與一」「正尊」「船辨慶」「忠信」「安宅」「攝津」及び勝修羅物(別項)の「八鳥」があり、これと關聯したものには、「錦戸」及び「淨物」(別項)がある。

【諸本】現行諸流諸本。諸曲叢書・日本文學大系・國民文庫・謡曲三百五十番集(日本名著全集)等所收。

【鞍馬天狗】五番目(作者)宮増(能本作者註文二百十番目録)「内容」鞍馬東谷の僧(ワキ)が西谷より案内を受けて、平家公達(子方)沙那王(子方)などの稚兒を伴つて西谷に行き、花見をしてゐると、僧正谷の山伏(前ジテ)がその席に近づいて來たので、一同は興をさませられ、花見を明日に延ばして立ち歸つたが、ただ沙那王だけは後に残る。山伏は平家の公達にひきかへ、沙那王の痛はしい様に同情して諸方を見物させ、自分はこの山の天狗である、明日兵法を教へようといつて飛んで行く。翌日、沙那王が支度を整へて待つてゐると、大天狗(後ジテ)が多くて天狗を引き連れて參會

亡靈の事、靜と別離の事は記してゐない。二段劇能。五流現行。

【忠信】四番目(作者)世阿彌(能本作者註文二百十番目録)「内容」義經(ツレ)一行は吉野を頼みにしてゐたところ、衆徒が心變りしたので、伊勢三郎(ワキ)の計らひによつて、佐藤忠信(シテ)に防矢させて、その間に一行は逃げ落ちることとした。やがて吉野の衆徒(立巻)が襲つてくると、忠信はこれを防いだ後、虚腹

し、沙那王に兵法を授け、平家討伐の守護にならうといつて立ち去るといふ曲。「義經記」卷一「牛若貴船詣の事」に、清盛父子の形代を討つて武術を鍛練したと記してゐるが、天狗は出ない。「平治物語」卷三「牛若奥州下りの事」に「僧正が谷にて夜な／＼兵法を學ぶ」とあるが、これは平治の異本、岡崎本・京師本に見えてゐるだけで、後世の加筆かとも疑はれる。幸若「未來記」(別項)には天狗の事があるが、諸

録)「内容」三條吉次(ワキ)が高荷を集めて奥へ下ると、牛若(子方)はその後を追つて、これに連れられ、近江國鏡宿まで來たが、追手が下る様子なので、急いで髪を生やして、烏帽子屋(前ジテ)に左折のものを所望し、その禮に太刀を與へた。烏帽子屋の妻(ツレ)は鎌田正清の妹であつたので、この太刀を見て牛若であることを知り、互に奇遇を喜び零落を歎いた。次いで美濃國青墓に泊ると、熊以長範(後ジテ)

【正尊】四番目(作者)觀世小次郎(能本作者註文二百十番目録)「内容」土佐坊正尊(前ジテ)は義經を討たがために、昨日鎌倉から上京したところ、武藏坊辨慶(ワキ)に義經(ツレ)の館に引連れられ、嚴しく詰問せられたので、異心なき由の起請文を書いた。義經はその文の器用を感じて杯を與へ、靜御前(子方)は舞を舞つて酒宴を助けた。しかし正尊が起請文を書いたのは、當座を遁れんがために過ぎな

【忠信】四番目(作者)世阿彌(能本作者註文二百十番目録)「内容」義經(ツレ)一行は吉野を頼みにしてゐたところ、衆徒が心變りしたので、伊勢三郎(ワキ)の計らひによつて、佐藤忠信(シテ)に防矢させて、その間に一行は逃げ落ちることとした。やがて吉野の衆徒(立巻)が襲つてくると、忠信はこれを防いだ後、虚腹

みる少進に唆され、義經の佩いてゐると云ふ黄金作りの太刀に心を動かしてその冠者を引見する事になり、傍若無人の威勢を示して接しようとしたが、一見した御曹司の非凡な眼光に恐れ逃げ入り、早々に連れ歸れと少進を責めたが、義經は肯んぜず、鎌田は面目を失つて若君を残して獨り辭去した。八日目の曉、部の際から窺つた法眼は、廣縁の寒風の中に悠々横はりながら右眼を開いて些の油斷も見せずにある冠者を見た。若しこれが噂に聞く左馬頭殿の御子九郎御曹司なら、弟子に

き慣れぬ笛の音を聴き分けた法眼は、夜の明けぬのを待ちきれず、更科を喚びつけて糺明けるのを待たせられ、更科を喚びつけて糺明らる。更に正月十五日鬼一が館に公卿達の集があつた時、目にとまつては我までの恥、上萬達の御歸りまで傍らにあれと命じたのを、傍らとは姫の方こそと義經は態と奥へ行つたので、鬼一の怒り心頭に發し、長刀の鞘を拂つたが、姫が不憫と思ひ返し、俄に一同を引具して熊野詣に出で立つた。二人の仲を己が遠州の際の事と、人にも己れにも責を輕めるため

いふ、かくて永く我が朝に兵法の秘卷は絶え、御曹司の筆のみが續かるところどころにこれを傳へ、且つ義經はかの兵法の奇特によつて後年天下に名將と仰がれた。

【影響】特に本書のみの影響ではなく、寧ろ「義經記」の影響とすべきであらうが、本書内容の傳説に取材し、少くとも形に於ては本書の系統に屬する後代作品は尠くない。諸曲の「浪海」、金平本「義經記」「義經興廢記」「義經勳功記」などがあり、特に文耕堂・長谷川千四合作の操持瑞鳴「鬼一法眼三略卷」(別項)は、歌

か西谷より案内を受けて平家公達(子)沙那王(子)方)などの稚兒を伴つて西谷に行き、花見をしてゐると、僧正谷の山伏(前ジテ)がその席に近づいて来たので、一同は興をさまされ、花見を明日に延ばして立ち歸つたが、ただ沙那王だけは後に残る。山伏は平家の公達にひきかへ、沙那王の痛はしい様に同情して諸方を見物させ、自分はこの山の犬天狗である、明日兵法を教へようといつて飛んで行く。翌日、沙那王が支度を整へて待つてゐると、大天狗(後ジテ)が多くの天狗を引き連れて參會

し、沙那王に兵法を授け、平家討伐の守護にならうといつて立ち去るといふ曲。「義經記」卷一「牛若貴船詣の事」に、清盛父子の形代を討つて武術を鍛錬したと記してゐるが、天狗は出ない。「平治物語」卷三「牛若奥州下りの事」に「僧正が谷にて夜な」兵法を學ぶとあるが、これは平治の異本、岡崎本・京師本に見えてゐるだけで、後世の加筆かとも疑はれる。幸若「未來記」(別項)には天狗の事があるが、諸曲との先後は分らない。兎に角諸曲作者の創作した所が多い。二段劇能。五流現行。

【橋辨慶】四番目「作者」日吉安清(二百十番謡目録)「内容」武藏坊辨慶(前ジテ)が五條天神に丑の時詣に出ようとすると、從者(トモ)が五條橋に變化の如き少童が出るからといつて、物語を引留めたが、辨慶は結局出かけることとした。五條橋には牛若(子)方)が人の來るのを待つてゐる。そこへ辨慶が來たので、牛若は散々に罵つた。辨慶は苦悶したが到底敵し難いので、呆れて少童の名を尋ねると、義朝の子牛若であつたので、潔く降参して主従の約を結ぶといふ曲。大體「義經記」卷三と同じであるが、「義經記」では辨慶が千人斬りをやるのが、これには牛若の事としてゐる。二段劇能。五流現行。

【笛之卷】四番目「作者」未詳「内容」橋辨慶の前段を、牛若丸(子)方)は夜々鞍馬寺から五條の橋へ出て、數多の人を斬るので、義朝の舊臣羽田秋長(ワキ)がこれを母常磐(前ジテ)に訴へる。常磐は牛若を厳しく叱り、且つ牛若に與へた靈妙な笛の由來を語る、と替へたもの。幸若舞曲の「笛之卷」(別項)は、これと同じのものである。觀世現行。

【烏帽子折】四番目「作者」宮増(二百十番謡目録)

【正尊】四番目「作者」觀世小次郎(能本作者註文二百十番謡目録)「内容」土佐坊正尊(前ジテ)は義經を討たんとするために、昨日鎌倉から上京したところ、武藏坊辨慶(ワキ)に義經(ツレ)の館に引連れられ、厳しく糾問せられたので、異心なき由の起請文を書いた。義經はその文の器用を感じて杯を與へ、靜御前(子)方)は舞を舞つて酒宴を助けた。しかし正尊が起請文を書いたのは、當座を遣れんがために過ぎなかつた。義經の方でも、これを察して夜討に備へた。正尊(後ジテ)は江田源三その他の從兵(立衆)を引連れて襲つたが、散々に斬り拂はれ遂に生捕りになつたといふ曲。「平家物語」卷十二「土佐坊斬られの事」、又は「義經記」卷四「土佐坊義經の討手に上る事」に據つたのである。但し起請文は、本曲と舞曲「堀河夜討」(別項)とにあるだけで、軍記物には出てゐない。二段劇能。觀世・寶生・金剛・喜多現行。

【熊坂】五番目「作者」金春禪竹(二百十番謡目録)「内容」烏帽子折の後段を複式夢幻能に脚色したもの。ワキ都方の僧、前ジテ僧、後ジテ熊坂の靈、場所美濃國赤坂。複式夢幻能。五流現行。

【關原與一】四番目「作者」不明(文安田樂記に四名見ゆ)「内容」牛若(シテ)が奥州へ下る途中、美濃國山中で出遭つた關原與一(ワキ)に馬の蹴上をかけられたのを憤つて、その從者(ワキツレ)が數人を斬り、與一の馬を奪つて、これに乗つて東路さして下つたといふ曲。「義經記」等には見えない。幸若「鞍馬出」(別項)にはある。一段劇能。喜多現行。

【船辨慶】五番目「作者」觀世小次郎(能本作者註文二百十番謡目録)「内容」文治の初め、源義經(子)方)は兄頼朝の疑ひを解くために、京を落ちて攝津國尼が崎大物浦に出た。この處まで靜御前(前ジテ)は義經に隨つて來たのであるが、辨慶は似合はしからぬ事として、都へ歸すやうに勧めたので、別離の宴が開かれた。靜は義經の不遇を歎いて舞を舞つた。やがて義經一行がこゝより舟を漕ぎ出すと、海上が俄に荒れて平知盛の幽霊(後ジテ)が現はれ、義經を海に沈めようとしたが、辨慶に祈り伏せられて次第に遠ざかつて行つたといふ曲。後段は「義經記」卷四「義經都落の事」を本とし、更に平家の怨靈を具體化して知盛としたのであらう。前段は全く諸曲作者の創意である。本曲と同趣向な幸若「四國落」(別項)にも知盛

亡靈の事、靜と別離の事は記してゐない。二段劇能。五流現行。

【忠信】四番目「作者」世阿彌(能本作者註文二百十番謡目録)「内容」義經(ツレ)一行は吉野を頼みにしてゐたところ、衆徒が心變りしたので、伊勢三郎(ワキ)の計らひによつて、佐藤忠信(シテ)に防矢させて、その間に一行は逃げ落ちることとした。やがて吉野の衆徒(立衆)が襲つてくると、忠信はこれを防いだ後、虚腹を切つて谷に落ち、都へと急いで行つたといふ曲。「義經記」卷五「忠信吉野山の合戦の事」に據つた。一段劇能。觀世・寶生現行。

【安宅】四番目「作者」觀世小次郎(二百十番謡目録)「内容」義經(子)方)辨慶(シテ)等主従十二人が偽山伏となつて奥州に落ちて行くと、その途中義經を吟味するために新しく設けられた加賀國安宅の關守富樫何某(ワキ)が一行を怪しんだ。辨慶は南都東大寺建立の勸進に與へ下る者だといつたが、肯かないで殺さうとした。辨慶等は穩かに最後の勸行をした。富樫は佛罰を恐れて、誠の山伏かを確めるために、勸進帳を讀めといつた。辨慶は往來の一卷を取出して誠しやかに讀み上げた。富樫は關の通過を許した。この時義經は人目を避けて強力姿となつてゐたのであるが、富樫はこれを見通さず、一行の最後に通らうとするのを抑へた。一行はこれこそ一期の浮沈と、武力を以て争つた。富樫は遂に關を通した。やがて一行が關から遠く離れた所に休息して不運を歎いてゐると、富樫は酒を持つて來て、先程の無禮を謝した。辨慶は舞を舞つて酒宴を助け、程よく富樫に暇を告げ、一行は毒蛇の口を遁れた心地で陸奥に下つたといふ曲。「義經記」卷七に出てゐる諸所の遭難を一所に集

六六九

め、且つ「平家物語」卷五文覺の「勸進帳」から暗示を得て、勸進帳の読み上げをも創作したのであらう。幸若「富樫」(別項)には勸進帳の事はあるが、遭難は所々に分れてゐる。一段劇能。五流現行。

【攝待】四番目(作者)宮増(二十番譜目録)

【内容】佐藤藤信・忠信の母(シテ)は、義経等主従十二人が山伏姿で陸奥に下ると聞いて、繼信の遺子鶴若(子方)と共に山伏攝待をして、これを待ち受けてゐると、義経(ツレ)辨慶(ワキ)等がこの館に立ち寄つた。初め義経等は自分の身を隠してゐたのであるが、老婆が餘りに歎くので、遂に義経主従である事を打明け、辨慶は繼信が八島の戦に討死した様、忠信がその敵をとつた様を話して聞かせた。やがて一行が立ち出でようとする、鶴若は弓矢をとつて主君の供をしようとしたが、一同に宥めすかされて、あとに留まるといふ曲。「義経記」

卷八「次信兄弟御事」から思ひついたのであらうが、「山伏攝待の事」鶴若の事は幸若「八島」(別項)にもない。諸曲作者の創案である。一段劇能。觀世・寶生・金剛・喜多現行。

【錦戸】四番目(作者)宮増(能本作者註文)【内容】秀衡の子錦戸太郎(ワキ)は、頼朝の御教書を受けて、義経を討たうと企て、まづ弟泰衡を同心させ、更に末弟泉三郎を説きつけようとして、その館を訪ねたが、泉三郎(前シテ)は、主君に背き父の遺命に背くのは一家の恥であるといつて兄に従はないので、錦戸は怒つて歸つた。やがて錦戸・泰衡が、この館へ討ち寄せてくる様子なので、泉は妻(ツレ)を呼んで、何方へなりとも身を忍ばせよといふと、妻は夫に未練な心を残させまいために自害してしまつた。錦戸(ワキ)等が襲つて来た。泉は力

戦した後、持佛堂で自害したといふ曲。「義経記」卷八「秀衡が子共判官殿に謀叛の事」に據つたが、夫婦の自害を「義経記」とは前後にかへた。二段劇能。觀世・寶生現行。

【構想】曾我物(別項)と同様、殆どすべて劇能で、曾我物よりも更に遠く原據を離れてゐる。作者自身の自由な構想の下に脚色してゐるのであるから、前後兩段の對照、ワキ・シテの對立などに十分な考慮を用ひたものが多い。「鞍馬天狗」「烏帽子折」「船辨慶」などは、前段の可憐優雅に對して後段を壯烈な場面とし、「安宅」などはワキ・シテの對立に、一張一弛、緊張を續けながら事件を展開して行つてゐるのである。いづれも後の文藝に影響を與へてゐるが、殊に「鞍馬天狗」「橋辨慶」「安宅」が最も大きい。

【參考】諸曲評釋大和田建樹 ○諸曲大觀佐成謙太郎 (佐成)

【方響】は、樂器【名稱】長方形の鐵板を並べてこれを打鳴らすからこの名がある。異名を方響(音は方形の石板を並列したものか)銅磬(音、銅板を並列したるに由るか)といふ。【性質】金屬性樂器の一。方形の木枠に兩足を附けて立て、その中央に上下二段に水平の架を置き、その架上に十六枚(一架に八枚づつ上下二段に)の方響板を並べたものである。方響板は鋼鐵製で大小一様でないが、奈良の正倉院に保存されるものは、各板の大きさは、長さ三寸四分乃至五寸、幅一寸五六分、厚さ一分五厘乃至一分九厘である。朝鮮李王家にあるのも亦これに準ずる。十六枚の方響板は黃鐘(即ち我が國の鐘)より始めて、十二律の順に八度上の夾鐘(我が國の鐘)に至る。下方の架にある八枚は低音で、上方の架にある八枚は高音に屬する。

この方響板は各々特殊の名を以て呼ばれる。「體源抄」に據れば、下架にあるものは右より順に合・四・一・上・江・赤・工・下凡と呼び、上架にあるものは左より順に、上凡・六・五・印・上印・上五・上工・上一と呼ぶ。一説に上五を亡、上工を斗、上一を下と呼ぶとある。この方響板は中央上方に小孔があつて、架上の栓に懸けるやうになつてゐる。これを奏するには二本の撥を用ひる。撥は鯨鬚又は牛角で作る。

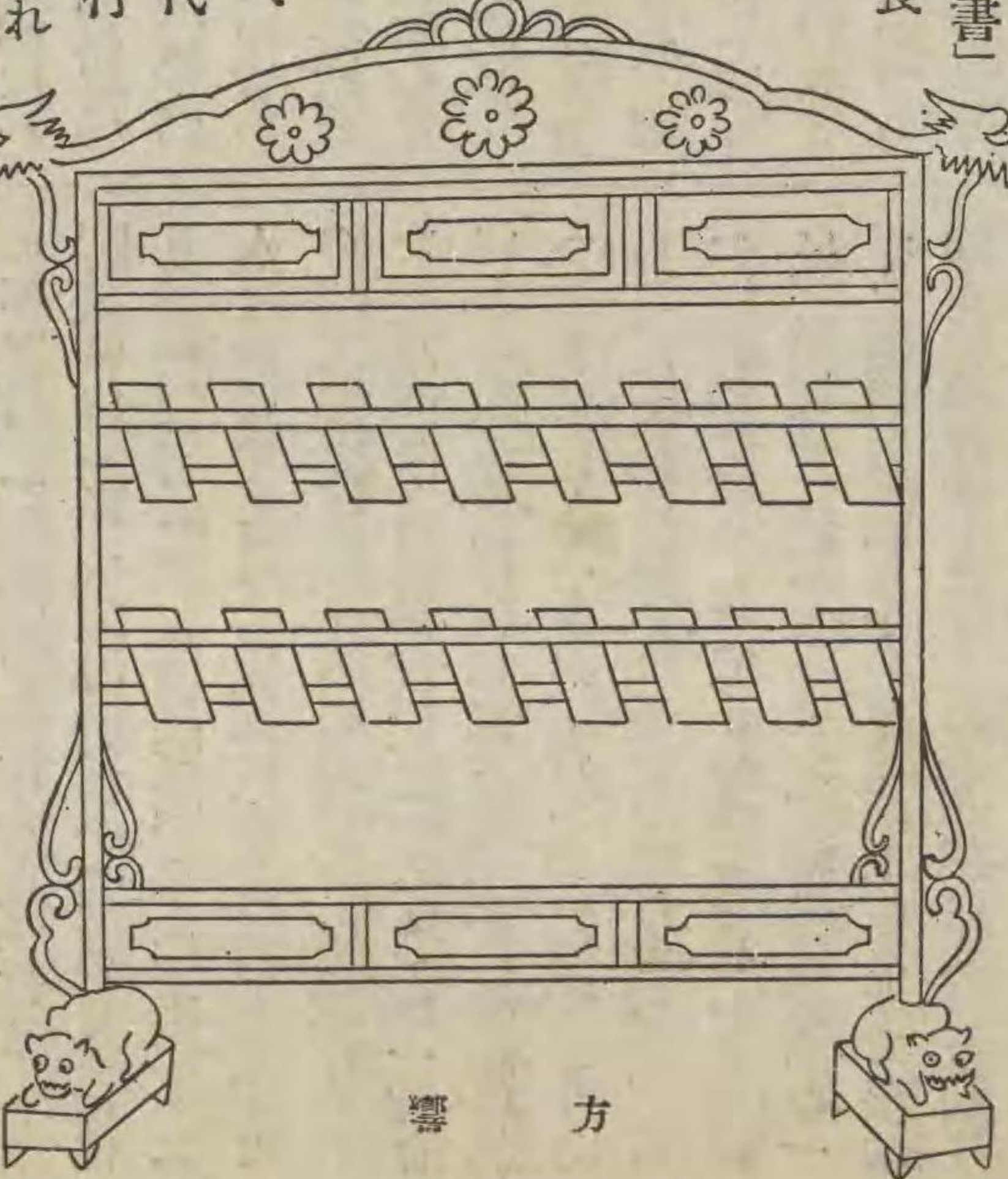
【沿革】方響は支那の南北朝の梁に起る。梁の時に銅磬といふものを作る。「樂書」に、「方響之制、蓋出於梁之銅磬、形長九寸、廣二寸、上圓下方、其數十六、重行編之、而不設業於簾上、以代鐘磬、凡十六聲、此十二律、余四清聲耳、後世或以鐵爲之、教坊燕樂用焉、今民間所用、纔三四寸耳」とある。

又「通典」には「梁有銅磬、則今方響也、方響以鐵爲之、以代磬」とある。要するに磬の石板に代ふるために、初め銅板を以て作り、後に鐵を以て代はれてゐたらしいが、その後追々と廢れてしまつた。我が國へは奈良朝頃に傳來したと見えて、奈良の正倉院にその九枚が保存されてゐる。「續日本紀」に「天平七年、入唐留學生上道真吉備、獻鐵如方響二とあるから、この正倉院の御物方響板はこの時吉備眞備が傳へたものか。その後、平安朝の初期までは雅樂合奏に用ひられ、大同四年の太政官符に雅樂寮雜樂師の中に方響師があり、又仁明天皇の嘉祥元年の太政官符に雅樂寮雜色生の人員を減せられた中にも、方響生を三人から二人に減せられたことが見えてゐるから、その

韻の側からだけ観ると、裏日本方言が表日本方言と著しく相違してゐる事が分る。例へば波行唇音の存在、「し」「す」「ち」「つ」の音の混同の如き特質は、東北地方と出雲とのみ見られるものである。大島正健・伊澤修二・北里關氏等の説の如きは、大體この見地に立つものである。(C)周圍波動説。單語の分布の側から眺めると、極北の地と極南の地とに近似を見出す場合が多い。又離島、岬角の地にも近

頃までは行はれたが、その後鉦鼓を以て代用するやうになつて、遂に方響は用ひられなくなつてしまつた。朝鮮李王家の雅樂に於ては今日も方響を用ひてゐる。これは今より八百餘年前、高麗の睿宗九年に宋から輸入したのが始まりであつて、李朝の初めに今日の合奏制度を定めたものである。【田邊】

【豐曲常盤笏】ほうきよくと、淨瑠璃段物集一卷【刊行】享保十六年五月【解説】豐竹上野少掾(豐竹越前少掾)のこの年までの語物



中、「おそめ袂の白しほり」の道行地蔵廻り、鎌倉三代記の忠臣印ぞろへ、鳥追大黒舞若狭の前道行、まよひの姿繪「心中二ツ腹帯」の道行星づくし、傾城無間鐘の淺香今川道行、りんごう鉢叩、「美又御前身替弓張月」の道行法皇順禮、洛陽名所扇、繼子立かぞへ歌、南都十三鐘の兒手がしは、二子物狂ひ等の道行や景事の如き節事三十一段を収めてある。上野少掾の段物集としては唯一のものなるべく、ために代表的なものといへやう。又上野少掾の門弟の連名を掲げてあり、その中、名取の大夫

九十餘人、素人の門人五十餘人に及び、著名な大夫としては豊竹和泉大夫(初名竹本和泉大夫、後に竹本和泉大夫)、豊竹三輪大夫(後の竹本和泉大夫)、豊竹新太夫(後の豊竹肥前掾)、豊竹河内太夫(初名豊竹品太夫)等であるが、東風(豊竹派)の初期の門弟大夫を知るべき好資料である。【參考】近世邦樂年表(義太夫節之部) (秋葉) 方響(ほうきよ)を見よ。

敘語もその一種で、これを階級的方言(階級語)と云ふ。【異稱】風俗語・風俗・俗語(以上は多く地名を冠して云ふ。例、東俗語、郷談、御國郷談、郷語、俚語、土語等。くにことば、さとことば、くになまり等。なまり(通説)・なまりことば、訛語。なまりごゑ、訛音、方言。「なまり」の語源は明かでない。「生」に關係があるとも云ひ、「隠る」に關係があるとも云ふ。【訛】は訛と通じて不正の義、「訛此云」與訛奈

線は、揖斐川の線にほぼ近いと云ふ。但しアクセントの場合では、四國のアクセントは近畿アクセントの一種であるが、中國は却つて東方のアクセントに類似して居り、東北や九州も特異なアクセントがあるやうで、語法の分布と一致するわけではない。【國語方言史】東西二大方言は、既に奈良朝に在つた。「萬葉集」の東歌・防人歌(各別項)を研究すれば當時東國に大和の方言と違つた時

見出す場合が多い。又離島、岬角の地にも近

鳳關見聞圖説(ほうかんけんわんずつ) 有職一卷

容」秀衡の子錦戸太郎(ワキ)は、頼朝の御教書を受けて、義経を討たうと企て、まづ弟泰衡を同心させ、更に末弟泉三郎を説きつけようとして、その館を訪ねたが、泉三郎(前ジテ)は、主君に背き父の遺命に背くのは一家の恥であるといつて兄に従はないので、錦戸は怒つて歸つた。やがて錦戸・泰衡が、この館へ討ち寄せてくる様子なので、泉は妻(ツレ)を呼んで、何方へなりとも身を忍ばせよといふと、妻は夫に未練な心を残させまいために自害してしまつた。錦戸(ワキ)等が襲つて来た。泉は力

立て、その中央に上下二段に水平の架を置き、その架上に十六枚(一架上八枚づつ上下二段に)の方響板を並べたものである。方響板は鋼製鉄で大小一様でないが、奈良の正倉院に保存されるものは、各板の大きさは、長さ三寸四分乃至五寸、幅一寸五六分、厚さ一分五厘乃至一分九厘である。朝鮮李王家にあるものも亦これに準ずる。十六枚の方響板は黄鐘(即ち我が意)より始めて、十二律の順に八度上の夾鐘(我が意)に至る。下方の架にある八枚は低音で、上方の架にある八枚は高音に属する。

てしまつた。我が國へは奈良朝頃に傳來、たと見えて、奈良の正倉院にその九枚が保存されてゐる。「續日本紀」に天平七年、入唐留學生上道真吉備、獻鐵如方響二とあるから、この正倉院の御物方響板はこの時吉備眞備が傳へたものか。その後、平安朝の初期までは雅樂合奏に用ひられ、大同四年の太政官符に雅樂寮雜樂師の中に方響師があり、又仁明天皇の嘉祥元年の太政官符に雅樂寮雜色生の人員を減せられた中にも、方響生を三人から二人に減せられたことが見てゐるから、その

中、「久松袂の白しほり」の道行地蔵廻り、「鎌倉三代記」の忠臣印ぞろへ、鳥追大黒舞、若狭の前道行、まよひの姿繪(心中二ツ腹帯)の道行星づくし、傾城無間鐘の淺香今川道行、りんざう鉢叩、「美文御前身替り張月」の道行法皇順禮、洛陽名所扇、繼子立かぞへ歌、「南都十三鐘」の兒手がしは、二子物狂ひ等の道行や景事の如き節事三十一段を収めてある。上野少掾の段物集としては唯一のものなるべく、ために代表的なものといへやう。又上野少掾の門弟の連名を掲げてあり、その中、名取の大夫

九十餘人、素人の門人五十餘人に及び、著名な大夫としては豊竹和泉大夫(初名竹本源大夫、後に竹本和泉大夫)・豊竹三輪大夫(後の竹本和泉大夫)・豊竹新大夫(後の豊竹肥前守)・豊竹河内大夫(初名豊竹品大夫)等であるが、東風(豊竹派)の初期の門弟大夫を知るべき好資料である。

級語もその一種で、これを階級的方言(Dialect)と云ふ。【異稱】風俗語・風俗・俗語(以上は多く地名を冠して云ふ。例、東俗語。郷談・御國郷談・郷語・俚語・土語等。くにことば・さとことば・くになまり等。なまり(通説)・なまりことば・訛語。なまりごゑ。訛音・方言。「なまり」の語源は明かでない。「生」に關係があるとも云ひ、隠るに關係があるとも云ふ。「訛」は通じて不正の義、「訛此云」與許奈摩盧こと「神武紀」に見える。「なまり」は恐らく方言の異稱であらうが、音聲に關係して用ひられた例が多い。地名を冠して、坂東なまり・京なまりなどと云ふ。

韻の側からだけ観ると、裏日本方言が表日本方言と著しく相違してゐる事が分る。例へば波行唇音の存在、「し・す・ち・つ」の音の混同の如き特質は、東北地方と出雲とのみ見られるものである。大島正健、伊澤修二、北里蘭氏等の説の如きは、大體この見地に立つものである。(己)周圍波動説。單語の分布の側から眺めると、極北の地と極南の地とに近似を見出す場合が多い。又離島、岬角の地にも近似を見出す事がある。これから考へると、言語には發生の大小の中心地があつて、新語が中心に發生すると、古語はその周圍に押出されて次第に遠方に傳播する。その傳播に周圍波動の法則が作用するらしい。然らば全國を一本の堺線で分けるのは危険である。かう云ふ考へ方をする人に柳田國男氏がある。京都とその周圍の地はその一つの強力なる中心地と推測されてゐる。(ハ)東部方言と西部方言

線は、揖斐川の線にほぼ近いと云ふ。但しアクセントの場合では、四國のアクセントは近畿アクセントの一種であるが、中國は却つて東方のアクセントに類似して居り、東北や九州も特異なアクセントがあるやうで、語法の分布と一致するわけではない。

【獨】der Dialekt, die Mundart. 【佛】Je Dialecte, Je Patois. 【名義】漢語の方言の原義は「五方の言語」で、單に各地方の言語の意。世俗では田舎言葉の義に使ふ。今日、學術語としては Dialect の譯語として使ふ。これに廣狭の二義がある。「狭義の方言」一國語が使用地域の異なるため、各地に於てそれ、別の變遷をとげて、遂に若干の言語團に分裂した時、その分團の言語全體を方言と云ふ。従つて方言とは相對的名稱であり、多くはその地方名を冠して、東京方言・大阪方言などと云ふ。普通に方言と云ふ時は、この狭義の地方的方言(Local dialect)を指す。「廣義の方言」一般に或る原因のため一言語團が若干の小言語團に分裂した場合に、その分團の言語を方言と云ふ。原因の異なるに従つて種々の類がある。たとへば、學生言葉・職人言葉の如き階

【方言發生の原因】(イ)自然的原因。その主要なものとは地勢と氣候であると云はれてゐる。高山大河が交通を阻害して方言を發生せしめた例は頗る多い。我が本州の日本アルプス連峯が東西兩方言(後出)の發生の因となつた事はその著しき例である。(ロ)人為的原因。交通が方言に影響を與へる事は、鐵道網の完成と共に標準語が各地の方言を變化させるのを見ても分るが、方言の發生に關係の深いものは民族の移動と封建制度である。我が國の江戸時代の大名領地と方言との關係は、その著しき例である。岩手縣における南部藩と一の關藩、宮崎縣における延岡藩・鹿兒島藩・伊肥藩・天領の關係の如き、隨所にその例に乏しくない。

【國語の方言區劃】各地方言における音韻語法・語彙の異同に基き、小異を大同に合して處理すれば、一國語の方言區劃を定めることができる。但しその標準のとり方に従つて結果が違ふ。次に日本語の方言區劃に關する諸説をあげる。(イ)表日本方言と裏日本方言。音

【國語方言史】東西二大方言は、既に奈良朝に在つた。「萬葉集」の東歌・防人歌(各別項)を研究すれば當時東國に大和の中央語と違つた特色をもつた方言の存在してゐた事が分る。なほ當時の東國方言の西境は、上述の東西方言境界線にほぼ一致してゐたやうである。平安朝以後には十分な資料がないので斷言はしにくい。その後、江戸の初め頃までは、この東西二大方言は對峙してゐたものらしい。江戸期に入る前後に、國語に大きな變動が起り、西部方言中の九州方言が他の西部方言と區別さるべき特色をもつに至つた。即ち西部方言の大部では東部方言と同様に「ぢ・づ」と「ぢ・ず」との區別を失つたのに、九州方言にはなほその倂を存し、二段活用動詞は本州も四國も悉く一段化したのに、獨り九州はなほ二段の痕を存してゐる。室町頃から坂東言葉、京談と共に、筑紫訛が數へられるに至つたのは、この結果である。

【三大方言區劃案】音韻・語法・語彙の三方面の相違を綜合し、方言の現狀に見て、東西二大方言區劃説を修正して本州東部方言、本州西部方言、九州方言の三大方言を立てる事が今日最も妥當と考へる。この三大方言に私案の第一次的小方言區劃をつけて次に表示して見る。表の本州中部方言地方は、本州東西兩方言の接觸混和してゐる地方を便宜上分けて見たのである。(琉球方言(別項)は本來國語の

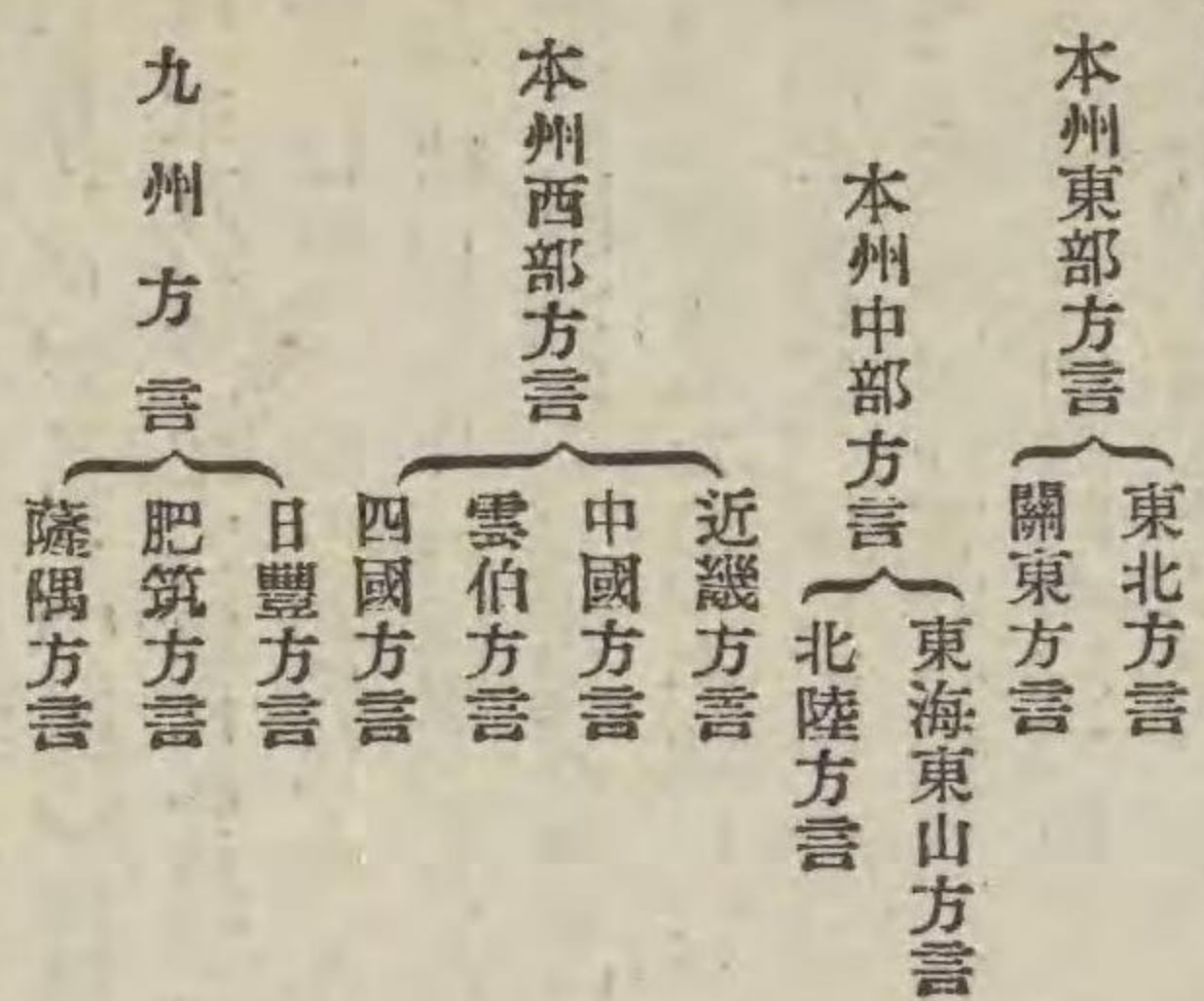
【國語の方言區劃】各地方言における音韻語法・語彙の異同に基き、小異を大同に合して處理すれば、一國語の方言區劃を定めることができる。但しその標準のとり方に従つて結果が違ふ。次に日本語の方言區劃に關する諸説をあげる。(イ)表日本方言と裏日本方言。音

韻の側からだけ観ると、裏日本方言が表日本方言と著しく相違してゐる事が分る。例へば波行唇音の存在、「し・す・ち・つ」の音の混同の如き特質は、東北地方と出雲とのみ見られるものである。大島正健、伊澤修二、北里蘭氏等の説の如きは、大體この見地に立つものである。(己)周圍波動説。單語の分布の側から眺めると、極北の地と極南の地とに近似を見出す場合が多い。又離島、岬角の地にも近似を見出す事がある。これから考へると、言語には發生の大小の中心地があつて、新語が中心に發生すると、古語はその周圍に押出されて次第に遠方に傳播する。その傳播に周圍波動の法則が作用するらしい。然らば全國を一本の堺線で分けるのは危険である。かう云ふ考へ方をする人に柳田國男氏がある。京都とその周圍の地はその一つの強力なる中心地と推測されてゐる。(ハ)東部方言と西部方言

【國語方言史】東西二大方言は、既に奈良朝に在つた。「萬葉集」の東歌・防人歌(各別項)を研究すれば當時東國に大和の中央語と違つた特色をもつた方言の存在してゐた事が分る。なほ當時の東國方言の西境は、上述の東西方言境界線にほぼ一致してゐたやうである。平安朝以後には十分な資料がないので斷言はしにくい。その後、江戸の初め頃までは、この東西二大方言は對峙してゐたものらしい。江戸期に入る前後に、國語に大きな變動が起り、西部方言中の九州方言が他の西部方言と區別さるべき特色をもつに至つた。即ち西部方言の大部では東部方言と同様に「ぢ・づ」と「ぢ・ず」との區別を失つたのに、九州方言にはなほその倂を存し、二段活用動詞は本州も四國も悉く一段化したのに、獨り九州はなほ二段の痕を存してゐる。室町頃から坂東言葉、京談と共に、筑紫訛が數へられるに至つたのは、この結果である。

一方言であるが、學者によると國語の姉妹語と見做す人もあるので、姑く區劃から省いておく。又北海道・樺太・臺灣・朝鮮にはまだ特色ある方言の發達を見ないから、勿論區劃外である。

國語の方言區劃表



【方言研究史】方言の研究は、東西共に古代に起つた。西洋では希臘で諸方言が研究され、東洋では支那の方言研究は既に周秦の頃であり、我が國では「萬葉集」に東歌が採録されてゐる。併し現代の方言學は十九世紀の言語學に伴つて起つたといつてよい。最初は先づ獨逸に興つたが、その業績の見るべきものは英佛兩國の方言研究である。英國は一八七三年に英國方言協會を創立し、方言資料の蒐集に努め、その資料を集成したのが同會理事ライト(Wright)の編纂にかゝる英國方言辭書六冊である。佛國の研究は、英國にやゝ遅れたが、一八九七年より一九〇一年にわたるエドモン・エドモンド(Edmond)の實地調査の結果を圖録したジリヤン(Gillieron)の佛國言語地圖は、方言學から更に言語地理學を生んだ。方言研究の起つた最初の動機は、方言に残つてゐる古語を調べることにあつた。獨逸では十八世紀から

「古語は方言に残る」といふ説が唱へられた。次いで方言研究によつて國語史の缺陷を補ふ方法が考へられた。特に諸方言の比較研究によつて言語變遷の過程や語原が明瞭になる事は極めて多い。なほ種々の實用の目的から方言を研究する者もある。その主要な一目的は標準語制定の準備としてこれを研究する事である。最近では地方文化を研究するために民俗學者で方言を研究する者が増加して來た。【國語の方言研究史】「古語は方言に残る」とは宣長など多くの江戸の學者の唱へたところで、古語を調べる動機から方言が研究されるやうになつたが、この古語の解釋に方言を利用する事は遠く平安末期に遡る事ができる。併し江戸期以前には、まだ眞の研究と名づくべきものはない。

【江戸期】江戸には二つの注目すべき研究がある。一は慶長九年に長崎の耶穌會學林で刊行されたロドリゲス(Rodríguez)の日本語典中の方言研究である。同書には中國・九州關東の各地にわたつて、その地特有の音韻・語法の著しきものを列挙してある。他は安永四年に出版された俳諧師越谷山著の「諸國方言物類稱呼」五巻(別項)である。これは我が國最初の全國的方言辭書である。この外に「倭訓栞」や「俚言集覽」(各別項)にも方言の資料がある。江戸にはなほ江戸言葉と方言との對照の必要から、各藩の儒者などの手で方言が研究された。今日までに發見された江戸期の方言書は約二十部以上あるが、その中の多くは寫本である。

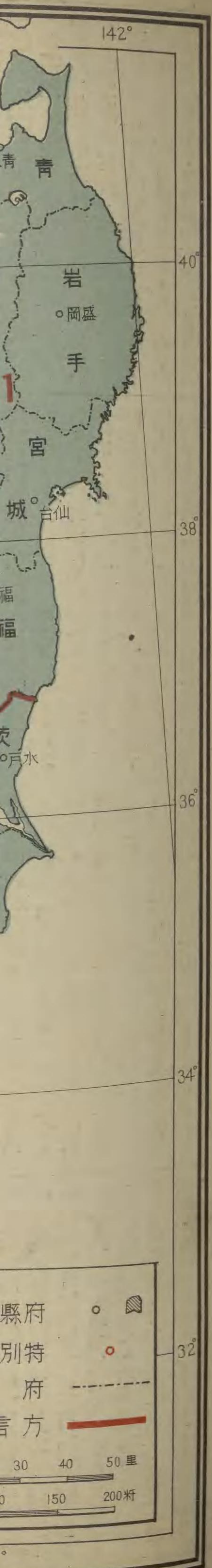
(文政二年)○水がはり(文政二年、名古屋)○宮訛言葉の掃蕩(文政四年)○方言達用抄(文政十年、仙臺)○新撰大阪詞大全(天保十五年)○松前方言考(嘉永元年)○庄内方言考(仙臺方言)編田善○仙臺方言(大里序)○濱秋(仙臺)○方言雜集(信濃その他)○世話類聚(大阪)○丹波通辭(出雲音)○他所問答(長門)○筑紫ことば○柳川方言(河沙一撮(以上年代不明))

【明治以後】明治三十五年前後と昭和三年以後の二回にわたつて研究が起つた。最初の學術的研究の起つたのは、大學に博言學講座の開かれた前後からで、早く明治二十年に「田邊方言」、同二十一年に「方言改良論」(出雲言葉のかきよせ)、同二十二年に「鹿兒島ことば」、同二十四年に「莊内方言考」、同二十五年に「越佐方言集」が出版されてゐる。同三十年前後には、東京帝國大學が方言調査や方言資料蒐集に努めた。特に同三十五年、國語調査委員會(別項)が設けられ、方言調査もその事業の一つとなるに及んで、方言研究は著しき進出を見せた。同會は同三十六年に各府縣に方言の調査を委嘱し、その答申を整理して同三十八年に音韻調査報告書一冊、同分布圖二十九枚、同三十九年に口語法調査報告書二冊、同分布圖三十七枚を公刊し、なほ同三十七年には、方言採集簿を編纂して採集者の便を計つた。これに刺戟されて各府縣も方言調査を開始し、昭和三年までに公刊された方言書は約百部に餘る。その中で百頁以上のものを地方別で掲げる。

全國方言集○東北方言集○米澤音考○遠野方言誌○茨城方言集○靜岡縣方言辭典○上田市附近方言調査○東筑摩方言○大野郡口語法並音韻調査○佐渡方言集○さことば(新潟縣)○富山縣方言○入善區域方言集(富山縣)○石川縣方言集○言葉のよしあし(大阪)○方言訛語辭典(南紀土俗資料所蔵)○出雲方言考○福岡縣内方言集○長崎方言集(長崎市史所蔵)○佐賀縣方言辭典○佐賀縣方言語典一斑○大分縣方言類集○鹿兒島語と普通語○鹿兒島方言集○鹿兒島語法○薩摩方言(日本語細亞協會報)英文○狩獵鳥類の方言○鳥類の方言○日本樹木名方言集等。

昭和以後言語學の勃興と共に再び方言研究の必要が叫ばれ、言語學者・民俗學者の中から方言に興味をもつ人々が現はれ、柳田國男氏の盡力で、昭和三年十二月、東京に方言研究會が設けられた。その後、多くの單行本の外、同五年には言語誌叢刊、同六年に雜誌「方言」の發刊を見るに至つた。

【方言研究法】方言の研究は音韻・語法・單語・語形態の各部門に分ける事ができる。補助學科は言語學・音聲學・國語學・民俗學・心理學等である。「方言採集」方言は調査者が親しくその地に臨んで採集するのを本體とする。調査者は豫めその方言の特質を調べ、調査事項をほぼ定めておく。答者には純粹の土人を選び、なるべく多數がよい。老人は古い方言を知つてゐるが、記憶の誤りもある事を知らねばならない。小・中學校等の教員や生徒などから便宜を得る場合が多い。やゝ廣い地域を調べる時には、代表的地點數ヶ所を選定して調べる。(イ)單語。方言語彙中には次の各類の單語を含む。(一)語形(發音、語義共に標準語と同じもの)。(二)語義は同じなれど發音の變化し居るもの(所謂訛語)。(三)語形は同じなれど語義の變化し居るもの。(四)語形・語義ともに變化し居るもの。但し標準語とも同類のもの。



佛兩國の方言研究である。英國は一八七三年に英國方言協會を創立し、方言資料の蒐集に努め、その資料を集成したのが同會理事ライト(Wright)の編纂にかゝる英國方言辭書六冊である。佛國の研究は、英國にやゝ遅れたが、一八九七年より一九〇一年にわたるエドモン(Eadmont)の實地調査の結果を圖録したジリエオン(Gillieron)の佛國言語地圖は、方言學から更に言語地理學を生んだ。方言研究の起つた最初の動機は、方言に残つてゐる古語を調べることにあつた。獨逸では十八世紀から

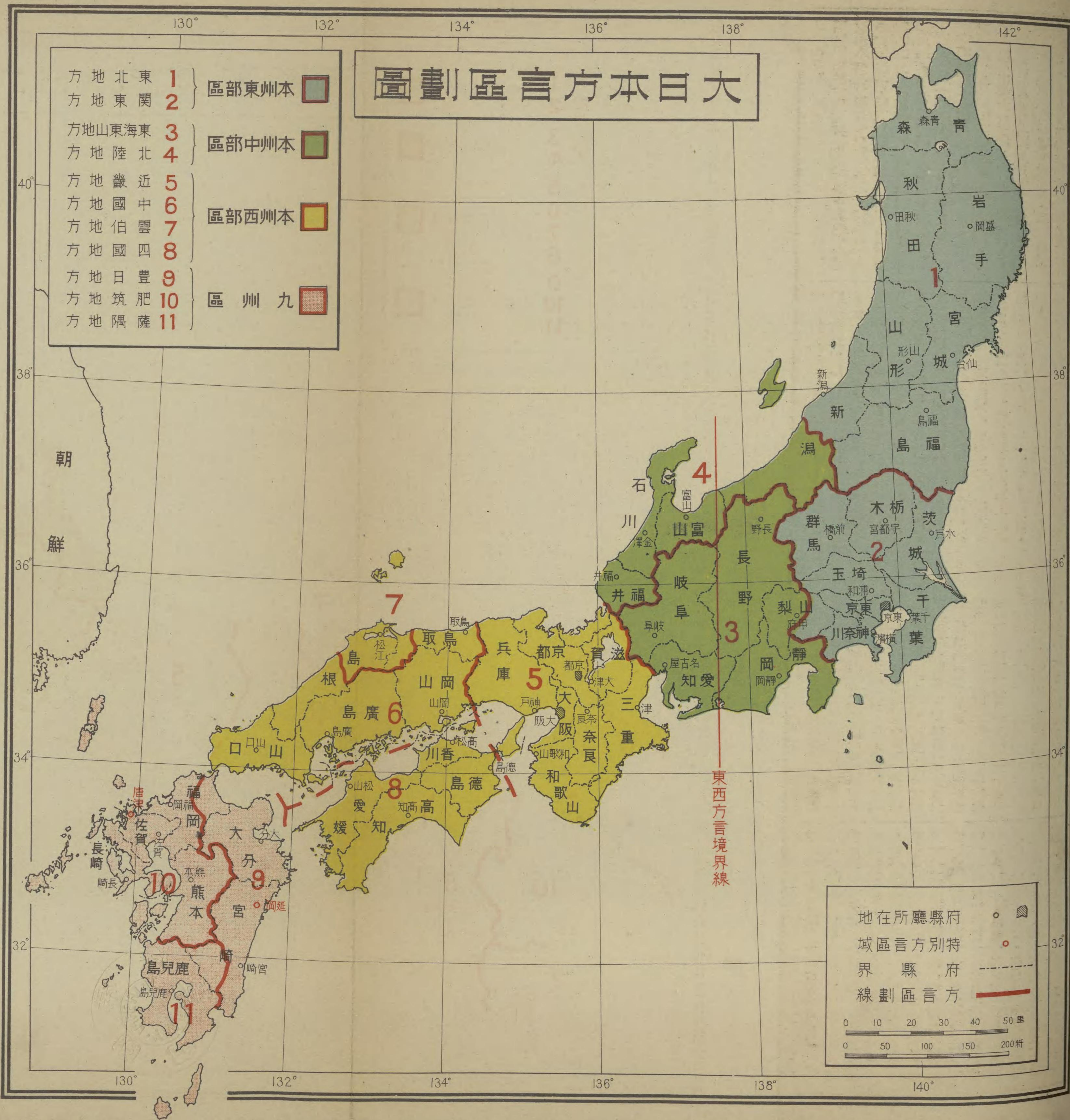
物類稱呼「五卷別項」である。これは我が國最初の全國的方言辭書である。この外に、「倭訓栞」や「俚言集覽」(各別項)にも方言の資料がある。江戸にはなほ江戸言葉と方言との對照の必要から、各藩の儒者などの手で方言が研究された。今日までに發見された江戸期の方言書は約二十部に上るが、その中の多くは寫本である。

枚、同三十九年に口語法調査報告書二冊、同分布圖三十七枚を公刊し、なほ同三十七年には、方言採集簿を編纂して採集者の便を計つた。これに刺戟されて各府縣も方言調査を開始し、昭和三年までに公刊された方言書は約百部に餘る。その中で百頁以上のものを地方別で掲げる。

全國方言集○東北方言集○米澤言音考○遠野方言誌○茨城方言集覽○靜岡縣方言辭典○上田市附近方言調査○東筑摩方言○大野郡口語法並音韻調査○佐渡方言集○さことば(新なるべく多數がよい。老人は古い方言を知つてゐるが、記憶の誤りもある事を知らねばならない。小・中學校等の教員や生徒などから便宜を得る場合が多い。やゝ廣い地域を調べる時には、代表的地點數ヶ所を選定して調べる。(イ)單語。方言語彙中には次の各類の單語を含む。(一)語形(發音)・語義共に標準語と同じもの。(二)語義は同じなれど發音の變化し居るもの(所謂訛語)。(三)語形は同じなれど語義の變化し居るもの。(四)語形・語義ともに變化し居るもの。但し標準語とも同類のもの。



(國語調査委員會音韻分布圖ニ據ル)

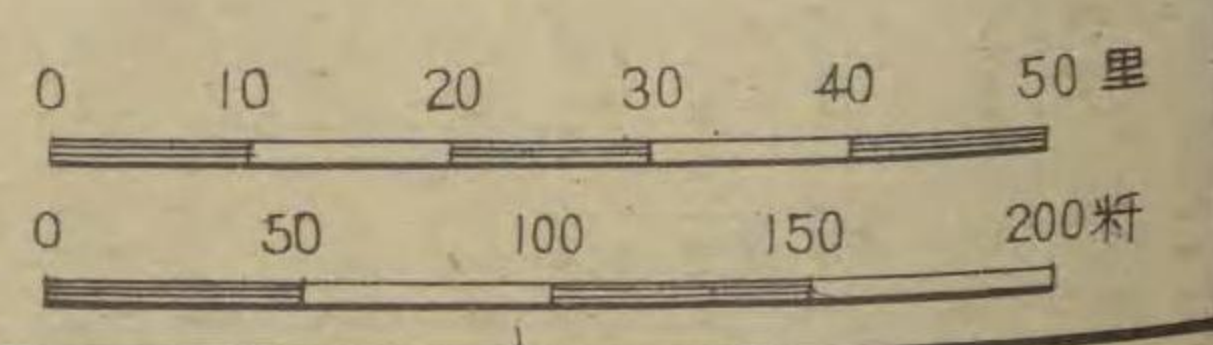


- | | | |
|----|------|--------|
| 1 | 東州本部 | 方地北東 |
| 2 | 關東 | 方地東關 |
| 3 | 本州中部 | 方地山東海東 |
| 4 | 本州中部 | 方地陸北 |
| 5 | 近畿 | 方地畿近 |
| 6 | 本州西部 | 方地國中 |
| 7 | 本州西部 | 方地伯雲 |
| 8 | 九州 | 方地國四 |
| 9 | 九州 | 方地日豊 |
| 10 | 九州 | 方地筑肥 |
| 11 | 九州 | 方地隅薩 |

大日本方言區劃圖

東西方言境界線

- 府縣廳所在地
- 特別方言區域
- 府縣界
- 方言區劃線



エロン(Gilieron)の佛國言語地圖は、方言學から更に言語地理學を生んだ。方言研究の起つた最初の動機は、方言に残つてゐる古語を調べることにあつた。獨逸では十八世紀から

である。かたこと(慶安三年、京都)○仙臺言葉以呂波寄(享保五年)○尾張方言(寛延元年)○濱荻(明和四年、庄内)○御國通辭(寛政二年、京都)○浪華方言

全國方言集○東北方言集○米澤言音考○遠野方言誌○茨城方言集覽○静岡縣方言辭典○上田市附近方言調査○東筑摩方言○大野郡口語法並音韻調査○佐渡方言集○さことば(新

もの。(二)語義は同じなれど發音の變化し居るもの(所謂訛語)。(三)語形は同じなれど語義の變化し居るもの。(四)語形・語義ともに變化し居るもの。但し標準語とも同類のもの。

カ

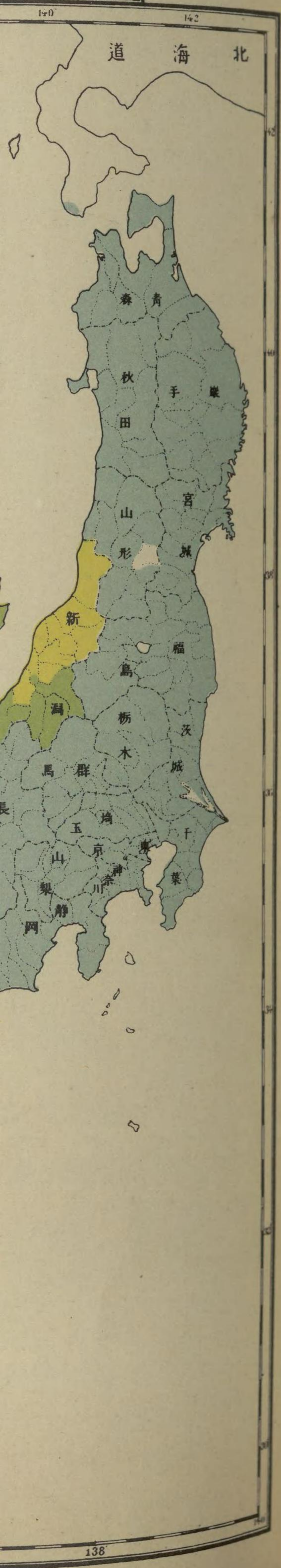


ガ行鼻音 NG 分布圖



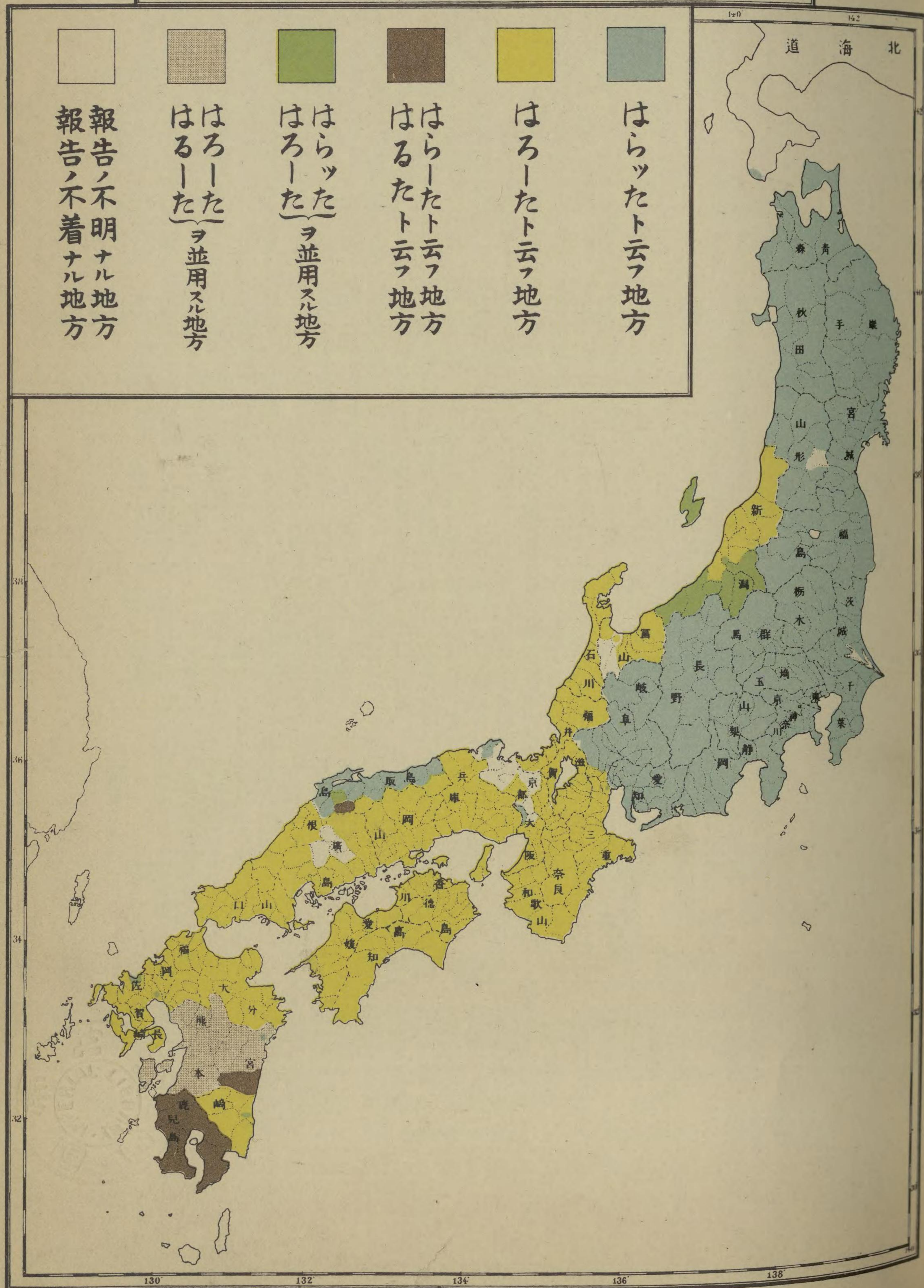
(國語調査委員會音韻分布圖ニ據ル)

活ノ用形 拂



圖布分ノ等 (用ノノ活四八) 形連語用段行 「たう拂」 「たッ拂」

形ノ用活



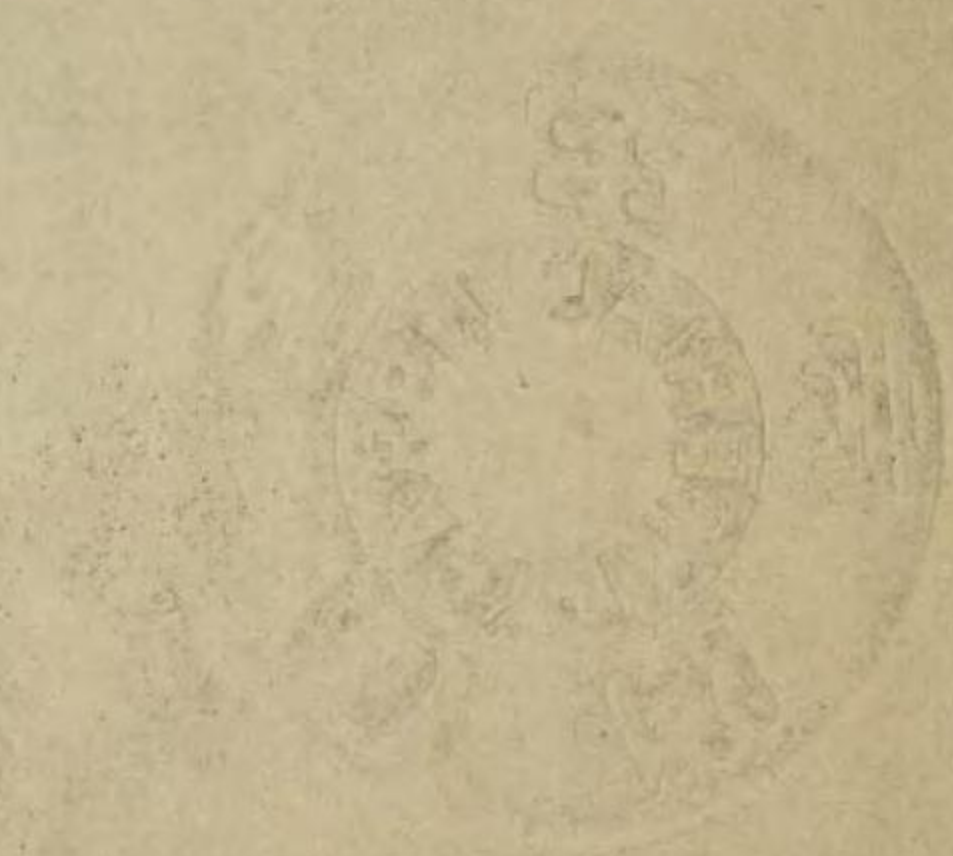
(國語調査委員會口語法分布圖ニ據ル)

(五) 全然標準語と系統を異にするもの(土語)。この中には外來語や古語の残れるものも混じりてゐる。(五)は(時)(三)(四)も、世俗で方言と云ひ、(二)の訛語と併稱することが多く、採集の興味の中心となるものである。單語の採集は方言採集簿(文部省版)や方言採集手帖・簡約方言手帖(郷土研究社版)によるのを便利とするが、各品詞にわたり、その方言の特色をなすものを網羅するに努め、自然の名稱と

俚語も蒐集したい。「方言資料の整理」採集した方言資料を整理すれば、方言辭書・方言文典・方言地圖を作ることが出来る。(イ)方言辭書には、次の如き種々の區別がある筈である。(一)方言を主として標準語を配したものと、標準語より方言を求めるものと。(二)所謂方言と訛語とを分けたものと、分けざるものと。(三)いろは順又は五十音順に排列したものと、内容により

の類に屬する。方言分布圖の中でも根幹をなすものは單語の分布圖である。音韻や語法の分布圖となると抽象的となるを免れない。これ等の單語・音韻・語法の分布圖を多數集めると、そこに國語の方言區劃の輪郭が浮んで來る。これを地圖上に現はしたものが方言區劃圖である。従つてこれは一層抽象的主觀的なものである。大日本方言地圖(會英書院)は、この方言區劃圖である。世界で有名なジリエロ

音を正確に自在に使用し、教授し得ることである。次に方言中の地方的な單語や語法形式は、これを整理して各學年に配當した矯正案によつて矯正すればよい。これは學年の進むとともに容易に矯正し得るものである。但しこの準備として、方言と標準語との精細な比較研究が必要なことは云ふまでもない。但し方言矯正は家庭内の言語にまで立ち入るべきものであるまい。



(五) 全然標準語と系統を異にするもの(土語)。この中には外來語や古語の残れるものも混じてゐる。(五)は(時)(三)(四)も、世俗で方言と云ひ、(二)の訛語と併稱することが多く、採集の興味の中心となるものである。單語の採集は方言採集簿(文部省版)や方言採集手帖・簡約方言手帖(郷土研究社版)によるのを便利とするが、各品詞にわたり、その方言の特色をなすものを網羅するに努め、自然の名稱とともに人文に關するものを多く集めたい。その他、兒童語・擬聲語・土地固有の地名・人名も採集したい。(ロ)音韻。單語を多數採集すれば自然方言に關する現象をうかがふべき材料を得られるわけであるが、豫め方針を立てて方言の音韻組織や音韻轉訛を調査するにますこととはない。各方音は萬國音聲文字(別項)に寫し、特に珍らしい音には、詳細に音質の記録を添へ、出來得るなら、口蓋圖・描線記録を作りたい。蓄音機に土人をして吹き込ませることが出來ればなほ結構である。アクセントやイントネーション(各別項)の調査も忘れてはならない。(ハ)語法。從來の語法書に従つて個條的に調査することは、答者に文法の素養のある場合の外は満足な結果をあげにくい。理想的に云へば、土人の自然の會話を多く記録して歸納的に調査すべきであるが、これもかなり困難である。比較的に行ひ易いのは、種々な表現を含む短章を用意して、その方言譯を求める方法である。この方法の缺點は答者が範文の形式に拘泥しがちな事と、地方特有な表現を逸する恐れのある事である。標準語と比較して特色のある語法形式を見出した場合には、使用例・使用範圍・分布状態を精査したい。慣用的な句法・呼應も注意し、俚諺・

ほうげん

俚諺も蒐集したい。「方言資料の整理」採集した方言資料を整理すれば、方言辭書・方言文典・方言地圖を作ることが出来る。(イ)方言辭書には、次の如き種々の區別がある筈である。(一)方言を主として標準語を配したものと、標準語より方言を求めると。(二)所謂方言と訛語とを分けたものと、分けざるものと。(三)いろは順又は五十音順に排列したものと、内容により部門別に分けたものと。(四)一地方の方言に限れるものと、各地方の方言を對照せるものと全國の方言を集めたものと。辭書中の各語の下には發音(アクセント)・品詞別(活用)・意義(圖解)・用例・語源(外來語)・使用者(身分・年齢)・使用地域・語の勢力(新古)等を註記すべきであるが、特に發音の表記と意義用例と使用區域とは、なるべく正確に詳細でありたい。方言辭書の範ともすべきものに、ライトの「英 國方言大辭典」がある。(ロ)方言文典は音韻論・語形論・品詞論・文章論(各別項)より成る。音韻論は方言文典の主要な部門をなすものである。語法はその方言の性質によつて組織づけられるものであるから、在來の文典の形式を必ずしも踏襲すべきものでないが、標準語法との對照は、方言の特質を明かにする利はある。方言文典にも地方的のものとな全國的の比較文典があるわけであるが、後者はまだ我が國にはない。(ハ)方言地圖には、方言分布圖と方言區劃圖とがある。方言分布圖は或る單語、或る音韻現象、又は或る語法形式の變化や分布を、記號や色彩等を用ひて地圖上に現はしたものである。正確であり、同時に一目瞭然たる形式を尊ぶ。國語調査委員會から出版した音韻分布圖・口語法分布圖は、こ

の類に關する。方言分布圖の中でも根幹をなすものは單語の分布圖である。音韻や語法の分布圖となると抽象的となるを免れない。これ等の單語・音韻・語法の分布圖を多數集めると、そこに國語の方言區劃の輪郭が浮んで來る。これを地圖上に現はしたものが方言區劃圖である。従つてこれは一層抽象的主觀的なものである。大日本方言地圖(會英書院)は、この方言區劃圖である。世界で有名なジリエロ・エドモン共著の佛國言語地圖は、前者即ち方言分布圖である。

「方言矯正」方言研究の實用的方面は、積極的には標準語制定の準備となる事であり、消極的には方言特に方言の矯正に役立つことである。これまで標準語普及即ち國語統一と方言矯正とは一物の表裏と考へられてゐた。標準語普及と方言矯正の意味で、文部省・帝國大學などで音聲學やアクセントの講習會を開いた事があるが、地方でも訛音の多い東北諸縣では伊澤修二氏を、出雲地方では高橋龍雄氏を聘して方言矯正法を講習した事がある。伊澤氏の方法は、生理學・音聲學に基づく口形練習を矯正法の中核においた。併し口形練習は聽覺の不完全な聾啞者に施す方法で、一般人には迂遠な方法である。矯正法としては寧ろ正確な標準音を正しく聞かせて、これを口に正しく眞似させる方法が中心となるべきものである。このためには標準音の教育レコードが推奨されるべきである。方言矯正の効果は幼年に於て著しい。従つて矯正は小學の低學年に於て行はなければならない。この目的を達するには、各府縣の師範學校で音聲學を課し、標準音の實習を勵行する制度ができればならぬ。低學年の訓導の資格の一つは標準

音を正確に自在に使用し、教授し得ることである。次に方言中の地方的な單語や語法形式は、これを整理して各學年に配當した矯正案によつて矯正すればよい。これは學年の進むとともに容易に矯正し得るものである。但しこの準備として、方言と標準語との精細な比較研究が必要なることは云ふまでもない。但し方言矯正は家庭内の言語にまで立ち入るべきものではあるまい。

【參考】「一般に關するもの」國語研究法 藤岡勝二 ○國語學精義 保科孝一 ○東方言語史 考新村出 ○方言について 保科孝一(帝國文學四ノ二七) ○方言の本質東條操(國語と國文學三六) ○方言學、その理論と實際 小林英夫(民族三ノ三)。「方言區劃」音韻漫錄 大島正健 ○大日本方言地圖、國語の方言區劃東條操 ○日本方言の分布區域 大槻文彦(風俗畫報三二八) ○國語の系統及其分派 伊澤修二(日本及日本人五九六) ○三百餘年前の日本方言に關する西人の研究 橋本進吉(民族二ノ一) ○歷史上から觀た日本の方言區劃同上(民族三ノ四) ○越中方言の位置、北陸道の東西方言分界線 田村榮太郎(國語と國文學四二) ○近畿アクセントと東方アクセントとの境界線 服部四郎(音聲の研究第三輯)。「方言研究史」國語史 春日政治(國文學講座) ○方言參考資料目錄 田村榮太郎(國語國文の研究一五・一七) ○國語學附言語學參考論文目錄同上(國語と國文學四九) ○方言研究と方言文學東條操(日本文學講座) ○方言研究の概観同上(岩波講座日本文學) ○刊行方言書目同上(國語教育一六ノ九)。「方言研究法」音韻取調ニ關スル事項國語調査委員會 ○音韻取調ニ關スル事項同上 ○口語法取調ニ關スル事項同上 ○方言の性質及其調査法 岡倉

由三郎(人類學雜誌九〇)〇方言語法の研究につき東條操(民族四ノ一)〇方言の音韻に関する諸問題 東條操(音聲の研究第二輯)〇語音變化に関する研究 柳田國男(音聲の研究第三輯)〇方言の小研究同上(民族三ノ三十五)。

「方言矯正法」東北發音矯正法 伊澤修二 (東條)

冒險小説 〔英〕Adventure Story

【解説】主として青少年を舞臺躍せしむべく、海洋・山岳・蠻地、稀には大都會などを舞臺とする事件本位の物語で、一方探偵小説(別項)・探險小説・海洋小説と相繋がる。ルネッサンスに伴ふコロンプスの新大陸発見は、あの當時、多くの航海記の出版を見る動因となつたが、資本主義が確立されて海外市場の争奪の激甚になる潮勢は、やがて近代に於て大に冒險小説なるもの起るに至つた根本原因である。即ちこゝに近代の冒險小説と中世の冒險奇譚との最も明かな差異がある。「ロビンソン・クルソー」の作者デフォ、ジュール・ヴェルヌ、「寶島」の作者ロバート・ルイ・ズステイヴンソンなどは、作家として特に名高い。日本では近代の冒險小説は安政年間横山由清の譯した「魯敏遜遠行紀略」に始まり、明治十年代、即ち翻譯の最初期時代、一書にして異譯の最も多きはロビンソンを第一とする。後に森田思軒の譯した「十五少年」(別項)は既に古典の一つに數へられてゐる。作家としては、江見水蔭、押川春浪(各別項)・三津木春影などが名高いが春浪を以て最とする。彼は殊に深くデューマに傾倒し、それに「水滸傳」などに系統を曳く東洋趣味を混和して、獨特のものを作り上げた。春影にはルブランの體案が多い。 【木村】

保元物語 戦記物語 三卷

〔又は二卷〕【別名】「保元合戦物語」「保元合戦記」「保元記」ともいふ。【作者】本書と「平治物語」(別項)とは、編次・體裁・構想・措辭など、兩者殆ど趣を同じうし、その作者と稱せらるる者も、大抵同一人を以てこれに擬してゐるので、この兩書は姉妹篇として、同一人の手に成つたものと見られてゐる。そして、保元平治の作者に擬せられてゐる者には、葉室時長・中原師梁・源隆又は公隆・僧正の三人がある。しかし種々の點から考へて、更に有力なる資料の出ない限りは、作者未詳といふの外はない(平治物語参照)。

【成立】古本と目せらるる「保元物語」は、仁安三年西行白峯詣の事と筆を擱いて居り、これが本来の姿を存するものとされてゐる。流布本等に、「清盛諸公卿の官職を奪ふ事」「讃岐院に關する夢の事」「讃岐院遷宮并に頼長贈官贈位の事」「爲朝鬼ヶ島渡り并に最期の事」などを篇末に加へてゐるのは、後から増補したものであるといふことは、異本の比較研究によつて明かに知らるゝところであるから、「保元物語」原本の成立を論ずるに當つては、これ等の増補事項を載せない古本を標準として考察しなければならぬ。本書の古本は、仁安三年の事を以て獲麟としてゐるけれども、この當時を以て、直に保元平治原本の成立年代と速断すべからざることは勿論である。「平治物語」が鎌倉幕府の創立後に成つたことはほぼ確かと見られ(平治物語参照)、延いては本書も亦、鎌倉幕府創立後の成立と見られることになる。加之、保元平治は何れも源氏に肩を持つて、平氏を貶した書きやうである。かういふ點から考へると、本書は「平治物語」と共に、源氏將軍時代に成立したものと見られるやうである。

【諸本】黒川本は、「新院御経沈并に崩御の事」で篇を終へ、編次・内容・辭句も普通本とは著しく異同があり、記事も簡潔で古色を帯びてゐるが、内閣文庫本も、黒川本と多少の異同はありながら、大體趣を同じうし、同じ系統の本と目せられてゐる。靜嘉堂文庫本・瑞本・金刀比羅神社本・岸谷本なども、それと異同があるけれども、やはり、この系統に屬するやうである。前田本は、前記諸本に近似してゐるが、又特殊な趣もあり、京都本と一致してゐる點も多い。「保元記」には東京帝大本と京都帝大本の本とがあるが、兩者は同じ系統に屬しながら、編次や記事にも異同があつて、別種のものと思はれる。根津文庫本は、京都帝大史學研究室本に似た點もあるやうであるが、特殊な趣もある。康豊本は上下の二巻だけ現存してゐるが、内閣文庫本の一類や半井本等とも近似しながら、また異色があり、篇末に「爲朝鬼ヶ島渡り并に最期の事」を添へてゐる。等覺院本も中巻だけが現存してゐるが、康豊本や半井本に似て、同じ系統のものと思はれる。半井本は康豊本・杉原本・京師本などと近似したところもあるが、編次・内容に特別な特色を有し、爲朝鬼ヶ島へ渡る事并に最期の事」を加へてゐる。これには、彰考館本と内閣文庫本とがある。文保本は中巻だけ現存してゐるが、多少辭句の出入はありながら、半井本と殆ど一致し、同じ系統のものと思はれてゐる。京師本は上下二冊に分けられ、他と著しく編次を異にし、篇末に「爲朝鬼ヶ島渡り并に最期の事」を加へてゐる。しかし記事の上では、内閣文庫本の一類や康豊本・半井本・杉原本等と近似してゐる點もある。これには、彰考館本・松井本とがある。杉原本は前記諸本と似てゐる點も少くないが、編次・内容に特殊な趣があり、又目次を加へ、句節を分けてゐる。京都帝大本と京都帝大史學研究室本とは、他の諸本に比して著しい異色があり、同じ系統と目せられるけれども、史學研究室本は上下二巻に分たれ、編次や記事の上にも特殊な趣がある。東京帝大國語研究室本は、上下二巻に分たれ、内閣文庫本・京師本・流布本などに似た點もあるが、編次・内容共に、他本と頗る趣を異にしてゐるが、大震災で焼失した。「保元合戦物語」と編次・内容が一致してゐる。流布本では、片假名書寫本・平假名書寫本が諸家に傳へられてゐるが、片假名古活字本では、元和四年版の外、刊記のない版本も傳へられ、平假名古活字本にも數種の版式がある。片假名整版本も二三の様式があるが、平假名整版本には、寛永三年版・明暦三年版・貞享二年版・元禄十五年版・享保元年版・享和元年版などがある。東京帝大本は、上下二巻に分ち、編次・内容が全く他本と異なり、辭句も近代的であるが、天明以後に改作した形跡もあり、所謂「讀本」の體様をなしてゐるが、これも大震災で焼失した。なほ所在不明のものに岡崎本がある。國文叢書・有朋堂文庫・國文大觀・名著文庫・國民文庫・日本古典全集・日本文學大系等所收。他に諸種の單行本も頗る多い。

【種別】鳥羽天皇は、御位を第一皇子崇徳院に譲り給うたが、やがて美福門院の御腹に體仁親王(近衛院)が御誕生になつたので、その三

保元物語上

追須帝の御... 天... 大... 御... 皇... 院... 大... 實...

京師本保元物語

保元物語上

中... 天... 大... 御... 皇... 院... 大... 實...

京師本保元物語

山由清の譯た「魯敏遜漢行紀略」に始まり、明治十年代、即ち翻譯の最初期時代、一書にして異譯の最も多きはロビンソンを第一とする。後に森田思軒の譯した「十五少年」(別項)は既に古典の一つに數へられてゐる。作家としては、江見水蔭、押川春浪(各別項)・三津木春影などが名高いが春浪を以て最とする。彼は殊に深くデューマに傾倒し、それに「水滸傳」などに系統を曳く東洋趣味を混和して、獨特のものを作り上げた。春影にはルブランの翻譯が多い。

本を標準として考察しなければならぬ。本書の古本は、仁安三年の事を以て獲麟としてあるけれども、この當時を以て、直に保元平治原本の成立年代と速断すべからざることは勿論である。「平治物語」が鎌倉幕府の創立後に成つたことはほぼ確かと見られ(平治物語参照)、延いては本書も亦、鎌倉幕府創立後の成立と見られることになる。加之、保元平治は何れも源氏に肩を持つて、平氏を貶した書きやうである。かういふ點から考へると、本書は「平治物語」と共に、源氏將軍時代に成立したものと見られるやうである。

などと近似したところもあるが、編次・内容に特別な特色を有し、爲朝鬼島へ渡る事并に最期の事」を加へてある。これには、彰考館本と内閣文庫本とがある。文保本は中巻だけ現存してゐるが、多少辭句の出入はありながら、半井本と殆ど一致し、同じ系統のものと思られてゐる。京師本は上下二冊に分けられ、他と著しく編次を異にし、篇末に「爲朝鬼ヶ島渡り并に最期の事」を加へてある。しかし記事の上では、内閣文庫本の一類や康豐本・半井本・杉原本等と近似してゐる點もある。これには、彰考館本・松井本とがある。杉原本は前

元年版などがある。東京大本は、上下二巻に分ち、編次・内容が全く他本と異なり、辭句も近代的であるが、天明以後に改作した形跡もあり、所謂「讀本」の體様をなしてゐるが、これも大震災で燒失した。なほ所在不明のものに岡崎本がある。國文叢書・有朋堂文庫・國文大觀・名著文庫・國民文庫・日本古典全集・日本文學大系等所収。他に諸種の單行本も頗る多い。

【種概】鳥羽天皇は、御位を第一皇子崇徳院に譲り給つたが、やがて美福門院の御腹に體仁親王(近衛院)が御誕生になつたので、その三

保元物語

保元物語上
 迫須帝の御時、この御時、松平右衛門尉の禰定は、
 天をう大神早急の御末は、
 七十四代あり、
 ありし御母贈皇太后宮内院の大御女官を
 康和五年三月十六日、
 月十七日、

(藏氏治簡井松) 語物元保本師京

保元記
 神皇正統記
 康和五年三月十六日、
 月十七日、

(藏室究研語國大帝京東) 記元保

保元物語下
 七月十一日、
 皇太子、

(藏氏治簡井松) 語物元保本崎

保元物語下
 七月十一日、
 皇太子、

(藏師高京東) 本字活古名假平

歳の時、崇徳院は強ひられて御位を近衛院に御譲りになつた。然るに近衛院は御歳十七歳で崩御なされたので、新院(崇徳上皇)はその御子重仁親王が即位されるものと期待して居られたところ、美福門院の御計らひで、後白河院が御位に御即きになつた。その結果、新院と主上とは、自然と御仲が圓滿に行かなかつた。また左大臣藤原頼長は、兄の關白忠通と氣が合はず、事毎に暗闘をしてゐたが、偶々

んで新院の靈を慰めた。爲朝は捕へられて伊豆大島に流された。(以下、前田本・康慶本・半井本・京師本・流布本等の内容)爲朝はやがて大島を征服して管領し、更に鬼ヶ島へ渡つて威を振つたので、その事が都に聞え、爲朝討伐のため、五百餘騎の軍勢を差向けられた。爲朝は大鎧にて兵船を射て沈めた上、自害して相果て、勇名を後代に残した。
【解説】本書は、保元の亂の顛末を叙した戦記

つべきのに、敵が白河殿に火をかけた爲めに、味方の防備が壊れて、忽ち敗者の位置に立つことになり、又彼が再舉の志を懐いて、一旦没落したものの、運悪くも病體に襲はれて湯治してゐる際、敵に發見せられて生捕られたが、その剛勇と卓越した武技とを惜しまれ、死を赦されて流罪に處せらるゝことになつてゐるが、この間、宿命の力が彼を支配してゐるのが認められる。そしてこの宿命の力よ、

多く採られてゐるかといふことを調べて見ると、「義朝白河殿夜討の事」が最も多く、次いで「爲朝生捕遠流の事」「爲朝鬼ヶ島渡り并に最期の事」の影響が著しい。なほ「新院御經沈并に崩御の事」「新院讃岐へ遷幸の事」「新院爲義を召さるゝ事」「爲義最期の事」等の影響のやゝ見るべきものがある。【高木(武)】
【参考】参考保元物語今井弘濟・内藤貞顯○保元

多く採られてゐるかといふことを調べて見ると、「義朝白河殿夜討の事」が最も多く、次いで「爲朝生捕遠流の事」「爲朝鬼ヶ島渡り并に最期の事」の影響が著しい。なほ「新院御經沈并に崩御の事」「新院讃岐へ遷幸の事」「新院爲義を召さるゝ事」「爲義最期の事」等の影響のやゝ見るべきものがある。【高木(武)】

歳の時、崇徳院は強ひられて御位を近衛院に御譲りなされた。然るに近衛院は御歳十七歳で崩御なされたので、新院(崇徳上皇)はその御子重仁親王が即位されるものと期待して居られたところ、美福門院の御計らひで、後白河院が御位に御即きになつた。その結果、新院と主上とは、自然と御仲が圓滿に行かなかつた。また左大臣藤原頼長は、兄の關白忠通と氣が合はず、事毎に暗闘をしてゐたが、偶々保元元年七月二日、鳥羽上皇が崩御なされたので、新院は頼長を語らひ、源爲義、その子爲朝、平忠正等を召され、主上は源義朝、平清盛等を召して變に備へられた。新院御所では爲朝がいろ／＼と獻策したが、頼長の干渉でそれが用ひられなかつた。主上は三條殿に行幸になり、官軍は勢揃ひをして七月十一日寅の刻に、義朝は白河殿を夜討した。爲朝は最も力戦して善く防いだ、義朝が火をかけたので、白河殿が遂に攻め落され、新院は如意山に落ち、髪を剃つて仁和寺へ入らせられた。頼長は落ち行く際、流矢に中つて遂に命を落とし、新院方の人々はそれ／＼召捕られた。忠正は出家して降を乞うたが、六條河原で斬られた。爲義は病にかゝり、出家してゐるのを、義朝が引取つて再三宥免を請うたけれども許されず、勅諭もだし難く、鎌田正清に命じて斬らしめた。又爲義の子達も、義朝に命じて斬らしめられた。爲義の北の方は桂川に身を投げて果てた。新院は仁和寺から讚岐へ遷され給ひ、後生菩提のためとて、五部の大乘經を寫して都へ送り、寺へ奉納方を請はれたが、許されないうで返送して来たので、新院はそれを海にお沈めになり、やがて崩御なされた。西行法師は諸國修行の序に白峯に詣り、歌を詠

んで新院の靈を慰めた。爲朝は捕へられて伊豆大島に流された。(以下、前田本・康慶本・半井本・京師本・流布本等の内容)爲朝はやがて大島を征服して管領し、更に鬼ヶ島へ渡つて威を振つたので、その事が都に聞え、爲朝討伐のため、五百餘騎の軍勢を差向けられた。爲朝は大鎧にて兵船を射て沈めた上、自害して相果て、勇名を後代に残した。

つべきのに、敵が白河殿に火をかけた爲めに、味方の防備が壊れて、忽ち敗者の位置に立つことになり、又彼が再舉の志を懐いて、一旦没落したものの、運悪くも病體に襲はれて湯治してゐる際、敵に發見せられて生捕られたが、その剛勇と卓越した武技とを惜しまれ、死を赦されて流罪に處せらるゝことになつてゐるが、この間、宿命の力が彼を支配してゐるのが認められる。そしてこの運命の力は、實際に於てこの事件や彼の人物を支配してゐることは言ふまでもないが、作者が故意に脚色して、この力の作用を強烈ならしめてゐることも少くない。要するに本書は、骨肉相殺傷するといふ痛ましい事件を材料として、更にそれに空想を加へ、劇的に仕組んだ叙事的の運命悲劇であつて、寫されてゐる事件や説話の筋は簡單であるけれども、その結構には筋道が立つて要領よく統一せられてゐる。文章は簡素適勁にして質實であり、且つ叙寫も緊張して生氣があり、良作として推すべきものである。

【影響】本書は國民文學の代表的名作として、廣く世人に愛讀せられたので、後代文學に及ぼした影響も相當に大きい。戯曲方面では、謡曲に「鶴の丸」、淨瑠璃に「保元軍物語」「崇徳院讚岐傳記」「鎮西八郎射往來」「鎮西八郎唐土船」「鎌田兵衛名所盃」その他。小説の方面では、お伽草子類に「立烏帽子」、草雙紙類で黄表紙に「爲朝鳥廻」「爲朝飛鳥廻」「實盛一代記」、合巻に「爲朝一代記」「清盛榮華の嚴島」「石橋山義兵白旗」、讀本實錄類に「保元平治鬪争圖繪」「義經勳功記」「木曾將軍義仲記」「雨月物語(別項)」「椿説弓張月(別項)その他がある。また本書の如何なる箇所が、後代文學に最も多く採られてゐるかといふことを調べて見ると、「義朝白河殿夜討の事」が最も多く、次いで「爲朝生捕遠流の事」「爲朝鬼ヶ島渡り并に最期の事」の影響が著しい。なほ「新院御經沈并に崩御の事」「新院讚岐へ遷幸の事」「新院爲義を召さるゝ事」「爲義最期の事」等の影響のやゝ見るべきものがある。(高木武)

【参考】参考保元物語今井弘濟・内藤貞顯○保元物語大全○保元物語類編○保元平治物語類字○保元物語武器談 伊勢貞丈○參訂保元物語註釋内藤耶曳・平井頼吉○頭書保元物語中根淑○保元平治物語解釋今泉定介○保元平治物語講義森野由之○保元物語講義 三木五百枝○保元物語評釋鳥野幸次○保元物語新釋吉村重徳○講本保元物語玉井幸助○軍記物語研究五十嵐力○戰記物語の研究 高木武(日本文學講座)○保元平治物語考 星野恒(史學雜誌)一〇三〇○保元物語における鎮西八郎爲朝内海弘藏(史學界)一〇一〇○保元物語の文章 同上(同誌)一〇二〇○をよささの露 宮西惟助(國學院雜誌)九〇五〇○保元平治物語の武人 待島清九郎(國語と國文學)三〇一〇○保元平治物語の書史學的考察 高木武(同誌)三〇一〇○保元物語の教育的價值 玉井幸助(國語教育)一四〇八

【解説】本書は、保元の亂を叙した戦記物語の代表作品である。保元の亂は、新院と主上及び美福門院等との間に横たはれる暗流と、頼長と忠通・信西等との間に醸された暗流とが、御位争ひや權勢争ひによつて爆發したものであるが、源平の兩武家がこれに利用せられて合戦の衝に當り、父子・兄弟・叔甥が互に相分れて確執殺傷し、痛ましい活劇を演じてゐる。かくていよいよ争亂の幕が開かれると、爲朝を中心とし、幾多の人物を配して叙事を展開し、全篇の中樞を構成してゐる。そして戦敗の原因を、頼長等の長袖者流が爲朝等の議を用ひず、その行動を束縛したこと

に歸し、戦鬪の活劇を演ずるに當つても、爲朝は舞臺の全局を支配する花形役者として、その活動は頗る誇大に描かれ、作者の同情は殆ど彼の頭上に集中してゐる。併しながらこの物語の眞の興趣は、新院方一味の没落破滅を叙してあるところに存するが、殊に爲義の幼少なる子達のあはれな最期のさまや、爲義の北の方が夫や子を失うて桂川に投身する次第の描寫などには、至純なる人情が迸つて、そゞろに涙を催さしめるものがある。又爲朝が必勝の策を獻じたのを、頼長に斥けられて、あたら勝算を反故にし、なほ合戦に臨んでも、始終敵を壓迫して惱まし、當然勝者の側に立

【影響】本書は國民文學の代表的名作として、廣く世人に愛讀せられたので、後代文學に及ぼした影響も相當に大きい。戯曲方面では、謡曲に「鶴の丸」、淨瑠璃に「保元軍物語」「崇徳院讚岐傳記」「鎮西八郎射往來」「鎮西八郎唐土船」「鎌田兵衛名所盃」その他。小説の方面では、お伽草子類に「立烏帽子」、草雙紙類で黄表紙に「爲朝鳥廻」「爲朝飛鳥廻」「實盛一代記」、合巻に「爲朝一代記」「清盛榮華の嚴島」「石橋山義兵白旗」、讀本實錄類に「保元平治鬪争圖繪」「義經勳功記」「木曾將軍義仲記」「雨月物語(別項)」「椿説弓張月(別項)その他がある。また本書の如何なる箇所が、後代文學に最も

【法語】佛敎書【名義】佛敎の義理を平明通俗に述べたるもの。御書・語錄・聞書・御詞・打聞など名づけられてゐるものもある。【性質】廣義に解釋すると、佛敎の義理を説する法談・説經(別項)も法語であり、宗教敎説の宣揚書・論說文書、何れも法語ならざるはないが、一般には限定された意味、即ち平明通俗なる敎義宣傳文書、又宗教的體驗告白の書、即ち述懷書の如きもの、又は敎誡の文書を云ふ。法語には國文體・漢文體の二様がある。普通

法語と云ふと、大體國文體のもの、即ち假名法語を指して云ふやうである。【形式】法語の體には、問答體、講經體、講話體、註釋體、垂示教體、書簡體、隨筆體等種々變化がある。問答體には、自問自答、對話問答の形式があるが、これは佛敎文學通途の形式である。講經體は聖典を講ずる形式、註釋體は經典を註釋しつつ宗義を了解せしむる形式、垂示教體は「示して曰く」に初まつて、遺訓・開書等門弟湯仰者の記録したものの類に多く見える。書簡體は日常起居、世間的事件の報告以外に、宗敎宣揚、信仰勸化、宗敎的教誡の意を含んでゐて、特定の人に對して信仰の保持や激勵や、信者としての用意、經典宗義の説明等を傳へたもので、私信であつても公開的な意義を多分に有るのである。天台の惠心僧都は、「日本國は、まことに如來の金言たりと雖も、唯假名を以て書き奉るべきなり」と云はれたと傳へてゐる如く、平安中期頃より鎌倉に入つて諸宗の宗意を國文の時様體で記述することが漸く盛んに行はれ、所謂假名法語に類するものが頗る多く出てゐる。而して法語の多く作られた宗派を求むるならば淨土系であらう。

【淨土系の法語】開祖法然上人(別項)の著作、法語、消息は、殆ど「黒谷上人語燈錄」(十八卷)に輯められてゐる。漢文のものには「漢語燈錄」(十卷)、「拾遺漢語燈錄」(一卷)にまとめられ、和文は「和語燈錄」(五卷)、「拾遺和語燈錄」(二卷)に纏められてゐる。「漢語燈錄」は上人滅後六十二年、即ち文永十一年十二月、「和語燈錄」は翌文永十二年正月二十五日望西樓了惠(正應三年歿)の手によつて編集された。「漢語燈錄」にある了惠の跋文によると、文永の頃、既に偽書の流行があつたことが知られ、これがため

に、了惠が管見の及ぶ限り取捨選擇したのが「語燈錄」である。廣義に解すれば漢文和文の「語燈錄」は、悉く法語と云ふべきであるが、併し一般には「和語燈錄」をさして法語を總括するものとされてゐる。「和語燈錄」の序に、本朝淨土敎行を弘布せる人々の業績を述べて、法然上人に至り、次の如く記してゐる。

こゝにかながれをくむ人おほき中に、をの義をこころこまらなり、いはゆる餘行は本朝か本朝にあらざるか、往生するやせずや、三心のありさま二修のすかた、一念多念のあらそひなり、まことに金鑑しりかた、邪正いかてかわきまふべきなればきくものをほく源をわすれて流にしたかひ、新を賣て舊をしらす、尙書にいへることあり、人實し舊器貴し新、予この文におこころを薄上人のふるさあをたつて、遠近代のあたらしきみちをすてんごもふ、よて或はかの書状をあつめ、或は書籍にのするごころの詞を拾ふ、やまごころは、その文見やすく、其意さとりやすく、なほかくはもろ／＼の往生をもごめん人、これをもちて燈として、淨土のみちをてらせせ也。

この序の最後に法語の意義を一部説き示してゐる。この「語燈錄」の中には、經典の大意を説いたもの、教義を主に説いたもの、問答論説の筆録等があり、その他、消息・制誡・各種の部門に類別されるが、併しこれ等全部を總括して法語と見てよいのである。その代表的なものは、「往生大要抄」・「念佛往生要義抄」・「念佛大意」・「淨土宗略抄」・「一枚起請文」等であるが、その中でも「淨土宗略抄」の如きは最も傑出してゐる。「久久法語」の如きも出色のものであるが、これは聖觀法印の筆に成つたと云はれてゐる。「一枚起請文」は「語燈錄」に御誓書として載録されてゐるものであるが、淨土宗の信仰及び修行は悉くその中に至極せりと云は

れ、後世聖語として最も讀誦尊重されたものである。「和語燈錄」は元亨元年七月、圓智によつて印行されたものがある。平假名本。寛永二十年正月梓行、片假名本。正徳元年十二月、義山印行、平假名本。後者は淨土宗全書第九卷、法然上人全集に收む「語燈錄」以外に法然上人の法語を集めたものが數種ある。就中「勅修法然上人行狀畫圖」に載つたものが有名で、法然上人の法語を中心とする一代の傳記で、全巻法語を以て充たされ、特に第二十一・二十二・二十三の諸巻は法語のみをつらね、「語燈錄」に見えぬものも數多く摘記されてゐる。「一遍上人語錄」(二卷)は時宗一遍上人(別項)の法語を収めてゐる。今見るものは、文化八年刊行の板本で、別願和讃・百利口語・誓願文・時衆制誡・道具祕釋・消息法語・偈頌・和歌門人傳説の部類より成り、主として法語類を輯録してゐる。この外に、兵庫眞光寺洞天が安永五年八月に梓行した「一遍上人播州法語集」(一卷)がある。思想内容は、一切の執着を離れ、ただ念佛に依つて阿彌陀佛の不可思議力に救はるゝことを主張するもので、この宗敎的自覺は、熊野權現の神勅「六字名號一遍法、十界依正一遍體、萬行離念一念證、人中上々妙好華」に依つて得たもので、この神勅は一遍の思想を總括し、やがて法語の中心をなすものである。上人の文概れ燐麗「或人法門を尋申けるに書てしめしたまふ御法語」の如きは一異彩である。「一遍上人語錄」(一遍上人語錄證釋)(四卷、共に「大日本佛敎全書」六十六冊に收む)。一遍の弟子、時宗二祖の他阿上人(別項)の法語集は、安永七年刊行本八巻に輯録されてゐる。第一巻に、道場制文・他阿彌陀佛同行用心大綱・往生淨土和讃・消息法語、第二巻より第七巻に至るまで、消息法語を以て

充たされ、第八巻には和歌二百六十餘首を收めてゐる。その思想内容は一遍の淨土敎觀を繼紹し、空觀的洒脱味が極めて多い。その多くが書簡體法語で、文藻の見るべきものがある。大日本佛敎全書(第六十七冊)昭和國譯大藏經等に收む。眞宗の開祖親鸞上人(別項)の著作は、殆ど「眞宗法要」(六十七卷)に收められてゐる。本書は上人以後、眞宗諸師の國文にてものせる教義書・法語・消息を集めたもので、明和三年夏の刊行。その他、文化八年に成つた「眞宗假名聖敎」(十二卷)があるが、「眞宗法要」と同じである。但し纂排の順序を換へたものである。又先啓の「眞宗遺文彙要」(一卷)は、眞宗諸師の法語・消息・和讃を輯録したもので、これ等諸書により祖師以下眞宗諸師の法語を知ることが出来る。開祖上人の法語の文章は理路暢達、脈絡整然、而して平明通俗である。かく淨土敎系に法語が盛んに製作された理由は、民衆敎化を主とした宗旨であるからで、以て平明通俗の體を探り、勸化の便りとしたのである。なほ淨土宗には、向阿の「三部假名鈔」(別項)の如き傑出したものがあるが、これも一種の法語である。

【禪宗の法語】支那の宋代禪宗興隆の初めから行はれてゐるもので、宋の痴絶道冲禪師の語録に、「所謂法語者、蓋前輩有道之士、提持佛祖不傳之妙、警悟學者、余之不敏、烏足以能之云々」とあつて、法語は禪宗の宗意を宣揚するに重要なものとせられ、我が國に禪宗が流傳するに當つても同様であつた。入寺秉拂等の法語がある。東明慧月禪師の語録に「法語之作爲、追道勸勵之功、先輩是皆不得已、而出一言半句、示二機一境云々」とあり、寂室元光禪師の語録に、「法語者、道眼明白

底本色宗匠事業、以其宗說俱通、意句圓活、而納子取爲參禪之標式而已、是故得之者如袖階珠下壁、而歸家也云々」とある。然るに禪宗は、宋時代に興隆し、我が國の鎌倉時代に盛んに流傳することになつたので、當時の禪僧が、宗意を記述するには常に漢文の體に依つたので、我が國に謂ふ語録の體は漢文の一體であるとせられた。然るに禪宗の法語は門弟參徒に與へるものが多い故、自ら我が國

○紙衣關一卷(同、虎關師説) ○覺阿上人に與ふる法語一卷(曹洞、明峯葉哲) ○夢窓國師法語一卷(臨濟、夢窓疎石) ○夢中間答三卷(同、同) ○二十三問答一卷(同、同) ○大智禪師法語一卷(曹洞、大智祖繼) ○僧生法語一卷(同、僧生館開) ○靈山和尚法語一卷(臨濟、徹翁義孝) ○靈山法語一卷(同、法隆得勝) ○鹽山和泥合水集一卷(同、同) ○禪方便一卷(同、失名) ○月峯和尚法語一卷(同、月峯宗光) ○一休和尚法語一卷(同、一休宗純) ○大橋山夜話一卷(同、一休文守) ○大道和尚法語一卷(同、大道) ○

つたと云はれてゐるが、結果は不明である。この他に「本滿寺御書」と稱する別輯がある。慶長年中、祖書の五大部は日重、日遠、日乾の三師によつて開板され、次いで元和八年録内四十一巻が開板され(本國寺板)、後寛永・寛文二板が出来てゐる。録外は寛文二年京都で開板されてゐる。嘉永年間、小川泰堂が尾州日明の遺業を繼紹して、録内・録外三百八十七篇三十巻の「高祖遺文錄」(天茂開板)した。

名遣・口語等、國語資料として注意すべきものがある。【參考】鎌倉期の佛敎文學、伊藤康安(文學思想研究第七卷) ○法然上人の法語に就て、井川定慶(鎌倉時代の研究) ○法語の本質、筑士鈴寛(國語と國文學、國文學本質論) 【寫真】三井(筑士) 鳳岡(か) 儒者【姓名】林麟、別名信篤、字は直民、通稱春常。【別號】整字。私諱して正獻といふ。【主役】正果元手主し、享泉十七

られた宗派を求むるならば浄土系であらう。
【浄土系の法語】開祖法然上人(別項)の著作、
法語、消息は、殆ど「黒谷上人語燈錄」(十八卷)
に輯められてゐる。漢文のものは「漢語燈錄」
(十卷)、「拾遺漢語燈錄」(一卷)にまとめられ、和
文は「和語燈錄」(五卷)、「拾遺和語燈錄」(二卷)
に纏められてゐる。「漢語燈錄」は上人滅後六
十二年、即ち文永十一年十二月、「和語燈錄」は
翌文永十二年正月二十五日望西樓了惠(正應三
年寂)の手によつて編集された。「漢語燈錄」に
ある了惠の跋文によると、文永の頃、既に偽
書の流行があつたことが知られ、これがため

説いたもの、教義を主に説いたもの、問答論説
の筆録等があり、その他、消息、制誡、各種の
部門に類別されるが、併しこれ等全部を總括
して法語と見てよいのである。その代表的な
ものは、「往生大要抄」念佛往生要義抄、「念佛
大意」浄土宗略抄、「一枚起請文」等であるが、
その中でも「浄土宗略抄」の如きは最も傑出し
てゐる。「元久法語」の如きも出色のものであ
るが、これは聖徳法印の筆に成つたと云はれ
てゐる。「一枚起請文」は法語録に御誓書と
して載録されてゐるものであるが、浄土宗の
信仰及び修行は悉くその中に至極せりと云は

一遍法、十界依正一遍體、萬行離念一念證、
人中上々妙好華」に依つて得たもので、この神
勅は一遍の思想を總括し、やがて法語の中心
をなすものである。上人の文概は燦爛、或人
法門を尋申けるに書てしめしたまふ御法語」
の如きは一異彩である。「一遍上人語録」(一遍上
人語録) (四卷、共)、「大日本佛教全書」(六十六
冊)に收む。一遍の弟子、時宗二祖の他阿上人
(別項)の法語集は、安永七年刊行本八卷に輯
録されてゐる。第一卷に、道場制文、他阿彌陀
佛同行用心大綱、往生淨土和讃、消息法語、第
二卷より第七卷に至るまで、消息法語を以て

一種の法語である。
【禪宗の法語】支那の宋代禪宗興隆の初め
から行はれてゐるもので、宋の痴絶道冲禪師
の語録に、「所謂法語者、蓋前輩有道之士、提
持佛祖不傳之妙、警悟學者、余之不敏、烏足
以能之云々」とあつて、法語は禪宗の宗旨を
宣揚するに重要なものとせられ、我が國に
禪宗が流傳するに當つても同様であつた。入
寺求佛等の法語がある。東明慧月禪師の語録
に「法語之作爲、道場勸勵之助、先輩是皆不
得、已、而出、一言半句、示、一機、一境、云々」とあ
り、寂室元光禪師の語録に、「法語者、道眼明白

底本色宗匠事業、以其宗說俱通、意句圓活、而
衲子取爲參禪之標式、而已、是故得、之者如
袖階珠下壁、而歸、家也云々」とある。然るに
禪宗は、宋時代に興隆し、我が國の鎌倉時代
に盛んに流傳することになつたので、當時の
禪僧が、宗旨を記述するには常に漢文の體に
依つたので、我が國に謂ふ語録の體は漢文の
一體であるとせられた。然るに禪宗の法語は
門弟參徒に與へるものが多い故、自ら我が國
では彼等の讀解し易いものが要求せられ、所
謂假名法語なるものが生ずるに至つた。當時
の諸宗も宗旨を假名書で宣揚したが、禪宗も
鎌倉中期以後、著名な禪師が宗旨を國文の體
様によつて示すことが漸次多くなつた。江戸
時代は殊に多く諸禪師によつて作成されたの
で、所謂假名法語が普通行はるゝやうになつ
た。禪宗の法語には自ら特徴がある。即ち宗
意の直截端であるところが、構想、用語、行
文等に現はれてゐる。が、鎌倉中期以後、室町、
江戸時代に互つて自ら變遷がある。漸次普通
に行はれた江戸期に至つて、その特徴は薄れ
てしまつてゐる。法語の體様としては、鎌倉、
室町期には、書簡體・垂示體・問答體が普通で
あつたが、江戸時代になつて、隨筆體・講話體
のものが増はつて來てゐる。著名なる和語物
は道元禪師の「正法眼藏」(九十五卷)であるが、
普通法語物と稱せられるものに次の如きもの
がある。

○紙衣關一卷(同、虎關師說) ○覺阿上人に與ふる
法語一卷(曹洞、明茶業三卷(同、同)) ○二十三問
答一卷(同、同) ○大智禪師法語一卷(曹洞、大智祖
繼) ○僧生法語一卷(同、僧生館開) ○靈山和尚法語
一卷(臨濟、徹翁義孝) ○靈山法語一卷(同、拔除得
勝) ○鹽山和泥合水集一卷(同、同) ○禪方便一卷
(同、失名) ○月峯和尚法語一卷(同、月峯宗光) ○一
休和尚法語一卷(同、一休宗純) ○大梅山夜話一卷
(同、一絲文守) ○大道和尚法語一卷(同、大道) ○淨
菴和尚法語一卷(同、淨菴宗彰) ○玲瓏集一卷(同、
同) ○祖心尼法語一卷(同、祖心尼) ○梅天和和尚法語
一卷(同、梅天無明) ○無難禪師法語一卷(同、至道
無難) ○鐵眼禪師法語一卷(黃檗、鐵眼道光) ○正眼
國師法語一卷(臨濟、盤珪永琢) ○月舟夜話一卷(曹
洞、月舟宗胡) ○扣響集二卷(黃檗、鐵牛道機) ○
祖曉和尚法語一卷(曹洞、天巖祖曉) ○供養參一卷
(同、天柱傳尊) ○一鞭千里一卷(同、同) ○淨水法語
一卷(臨濟、淨水長茂) ○指月和尚法語一卷(曹洞、
指月慧印) ○夜船閑話一卷(臨濟、白隱慧鶴) ○遠羅
天釜三卷(同、同) ○さし藻草一卷(同、同) ○假名律
一卷(同、同) ○おにあさみ一卷(同、同) ○藪柑子一
卷(同、同) ○邊鄙以知吾一卷(同、同) ○自愛用三味
一卷(曹洞、面山瑞方) ○十善戒信受の人に示す法
語一卷(同、寂室堅光)。

つたと云はれてゐるが、結果は不明である。
この他に「本清寺御書」と稱する別輯がある。
慶長年中、祖書の五大部は日重、日遠、日乾の
三師によつて開板され、次いで元和八年録内
四十一卷が開板され(本國寺板)、後寛永、寛文
二板が出来してゐる。録外は寛文二年京都で
開板されてゐる。嘉永年間、小川泰堂が尾州
日明の遺業を繼紹して、録内、録外三百八十七
篇三十卷の「高祖遺文録」を大成開板した。こ
れは明治十三年に刊行されたが、更に同三十
七年、加藤文雅、稻田海素二師が新發見の材料
を加へ、一々眞蹟を以て校勘し、「日蓮聖人御
遺文」として刊行した。上人の述作の大部分は
これに網羅されてゐる。上人の述作は仁治三
年(二十一歳)より弘安三年(六十二歳)入滅に至る
間のもの、その作の饒多なること驚歎すべき
ものがある。時代別にして見ると、上人遊學
中の作六篇、この中には眞作なりや否や疑問
のものがある。更に建長五年安房開宗より鎌
倉を中心して宣法、文永八年佐渡流罪までの間
の作二百篇、同十一年佐渡歸來より身延に住
山して入滅に至る間の作二百數十篇がある。
このうち宗義的に著名なのは、「守護國家論」
、「立正安國論」聖愚問答鈔、「觀心本尊鈔」、「開
目鈔」撰時鈔、「報恩鈔」等である。その他、消
息中に注意すべきものが多い。上人の文
體は、純漢文體・漢文直譯體・和漢混淆體の三
種で、教義的なものは多く漢文の體をとつて
ゐる。上人は漢語・佛語・和語の使用自在に口
語・俗語を交へ、或は候體を用ひ、變化自在、
獨自なる文體を創造してゐる。比喩・譬句・對
句など極めて斬新奇抜であり、獨特の誇張法
を以て文勢を勁からしめ、文勢餘つて屢々破
格の調をなしてゐる。又語彙・音便使用法、假

名遣・口語等、國語資料として注意すべきもの
がある。
【參考】鎌倉期の佛教文學 伊藤康安(文學思想研
究第七卷) ○法然上人の法語に就て 井川定慶
(鎌倉時代の研究) ○法語の本質 筑土鈴寛(國語
と國文學、國文學本質論) (鷲尾三井、筑土)
○國文學、國文學本質論
鳳岡 坊う 儒者(姓名) 林鶴。別名信篤、
字は直民、通稱春鳥。【別號】整字。私諱して
正獻といふ。【生歿】正保元年生れ、享保十七
年(三九)六月朔歿す。享年八十九。【家系】
春齋(鷲尊)の第二子。梅洞の弟。【閱歷】春齋
が「本朝通鑑」(別項)を撰した時、鳳岡はその編
輯に與り、永享以來の事蹟を撰した。延寶八
年春齋歿するや、その職祿を襲いで大藏卿法
印に任ぜられ、弘文院學士の號を賜はる。初
め林羅山(別項)は私かに書院を忍が岡に建て、
弘文館と號し、孔子及び十哲の像を安置して
これを奉祀した。元祿四年、鳳岡は旨を奉じ
て、これを湯島臺に移して官祀となした。そ
の經營規畫、更に壯麗を加へ、將軍綱吉自ら大
成殿の三字を書してこれを掲げしめ、祀田千
石を附した。鳳岡五君に歴仕し、前後六十年
間。正徳中、新井白石(別項)が専ら事を用ひ、
議頗る合はず、屢々致仕を乞ふも許されな
かつた。その名望の隆なるがためである。【著
作】武徳大成記二十八卷 ○鳳岡林學士集二百
四十卷。 [佐久]

道元禪師法語一卷(曹洞、希玄遺文) ○光明藏三味
一卷(同、孤雲懷井) ○聖一國師法語一卷(臨濟、圓
爾辨圓) ○由迷能記一卷(同、白雲慧曉) ○法燈國師
法語一卷(同、心地覺心) ○大應國師法語一卷(同、
南浦紹明) ○妻鏡一卷(同、魚住一圓) ○枯木集二卷
(同、痴元大慧) ○大燈國師法語一卷(同、宗峯妙超)

【日蓮宗の法語】日蓮上人の和語宗義宣揚書
も法語とは一般に言つてゐないが、さう言つ
てよいものが多數ある。上人の述作を輯録せ
るものに「祖書録内録外」がある。上人の寂後
直ちに日朝・日昭等が「安國論」本尊鈔、「開目
鈔」報恩鈔等の遺文、その他消息類を輯録
し、これを「祖書録内」と稱した。所收の遺文
一百四十八篇、卷數四十一(内目錄一卷、次い
での編輯を「祖書録外」と稱し、所收の遺文二
百五十九篇、卷數二十六(内目錄一卷)、その後
文明の頃、本覺寺日住が關東方面で蒐集を行

抱合語 ばうごう 言語學 [英] an incorpo-
rating language [獨] eine einverleibende
Sprache, eine incorporierende Sprache 【解
説】この名稱はウィルヘルム・フォン・フンボ
ルト (Wilhelm von Humboldt) の über
die Verschiedenheit des menschlichen Spra-
chbaus で用ひたものである。抱合とは膠着

〔膠着語参照〕一種である。一つの文章が多数の部分から成立し、その一部分は獨立の單語でなく、非獨立的部分が結合すること膠着に同じい。従つて文章全體が一つの單語の如き形態をなす。例へばメキシコ語で ni-naca-ni はそれぞれ「我、肉、食」の義を有し、全體が「我は肉を食ふ」といふ一文に相當する。その中、「肉」に當る語を獨立に使ふ時は meat、といふ形があるが、文の中では常に獨立しなから、-naca- の形しか使はなからぬ。ni, qua も獨立には使はなからぬ。かゝる形態を抱合と名づけ、かゝる形態を有する國語を抱合語と名づける。メキシコ語及びアメリカインディアン語言語の多くのものは抱合語であると稱せられる。抱合語は又韓語(別項)と名づけることがある。(屈折語、膠着語、孤立語、抱合語参照)。

【参考】G. v. d. Gabelentz: Die Sprachwissenschaft. 1901. (Verlag Buch. Capitel III. 1. & 4) 【神保】

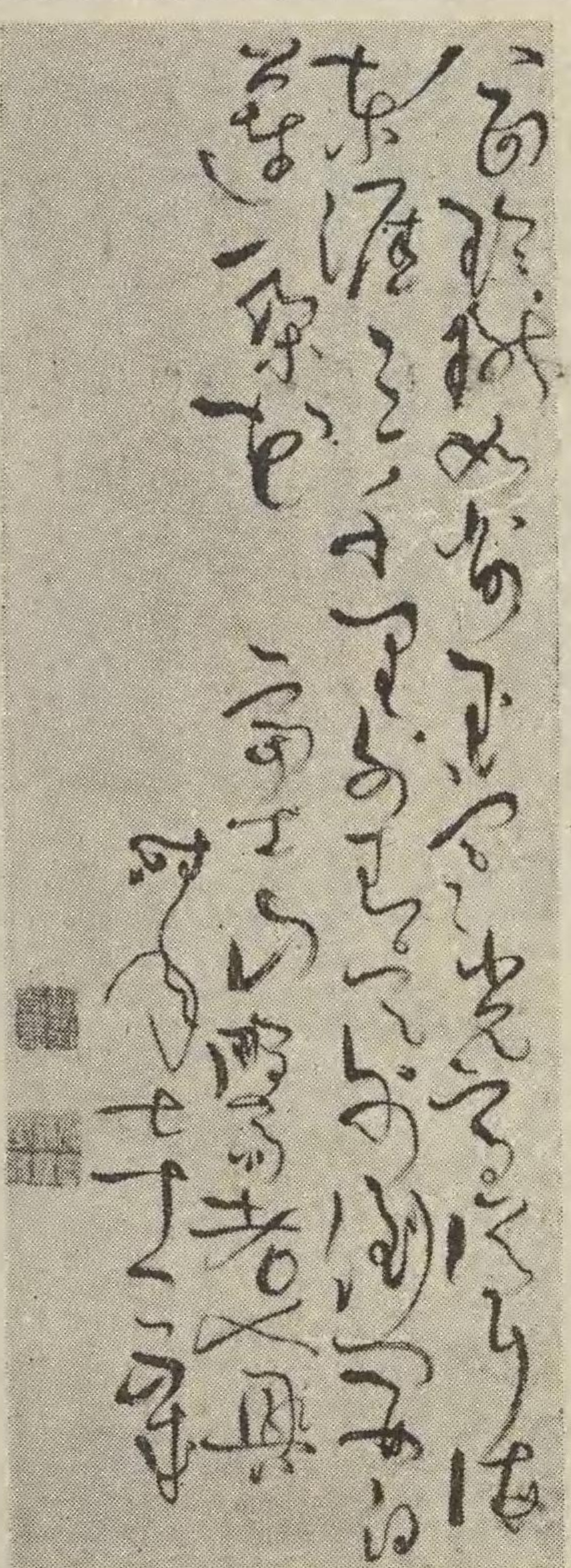
放哉 俳人【姓名】尾崎秀雄【號】初め芳哉【生歿】明治十八年一月二十日鳥取市に生れ、大正十五年四月七日香川縣小豆島に歿す。享年四十二。【法名】大空放哉居士【墓所】小豆島西光寺【流派】層雲派【閱歴】第一高等學校を経て、明治四十一年東京帝國大學法科を卒へ、東洋生命保險會社に入社。後、朝鮮火災海上保險會社の創立に際して功があつたが、事情があつて罷められた。京都の一燈園に投じ、托鉢行願の生活をなし、京都知恩院内常照院・兵庫須磨寺・小濱常高寺等に寄寓したが、同十四年小豆島八十八ヶ所の靈場たる土庄西光寺の南郷庵の堂守となり、そこで歿した。なほ井泉水(別項)とは一高時代からの友人であつた。【著作】放哉俳句集大空〇

放哉書簡集

【批評】名利得失の外に立つて、ただ風月のうちに死生を託したその心境が漸く純になるに従ひ、彼の作品も亦益々光を發した。そこには懺悔の生活、孤棲の心境、法施に合掌する心、酒脱の一面が見られる。總じて彼には古俳人の如き閑寂に生き、而も飄乎とした風采がある。「漬物桶に鹽ふれと母は産んだか」「咳をしてもひとり」「入れ物はない兩手でうける」「くるりと刺つてしまつて寒空」の如きにも、彼の全面が窺はれよう。【荻原】

鵬齋 儒者【姓名】龜田長興。略して興とも用ひてゐる。初名は翼といつた。字は初め岡南、後稱龍。通稱文左衛門【別號】岡南・善身堂【生歿】寶曆二年江戸に生れ、文政九年(二四八〇)三月九日歿す。享年七十五

【墓所】江戸今戸正福寺【閱歴】父は萬石衛門安長、上野國の人、少壯にして江戸に出で、商人として身を立たした。母は河野氏。鵬齋幼にして井上金峨に從つて折衷學を受け、同門の山本北山(別項)・原狂齋と親しかつた。北山等と歐・蘇の平散流暢の文を作るべきことを主張し、荻生徂徠・服部南郭(各別項)等の遺奉する李王古文辭の説を排撃したので、江戸の



(藏氏之辰野高) 讀筆齋鵬田龜

と中習になる。【梗概】酒好きの太郎冠者と次郎冠者を抱へてゐる主が、いつも留守の間に酒蔵の酒を飲まれるので、先づ次郎冠者を呼んで、太郎冠者が棒の手に擬つてゐるのに乗じ、棒を遣はせて後から棒縛りにし、次郎冠者が面白がつてゐる隙に、これも同じく縛り、よく留守をせよ

文風一變した。白河樂翁の執政となるや、鵬齋を以て異學を唱ふる者となし、その門に入る者の仕官を止めたので、門人皆引去つた。中年以後名望日に高く、詩文及び書を乞ふ者門に滿ち、遂に詩酒に放浪して一世に傲つた。その子綾瀨、その孫鶯谷、家學を相嗣いで名聲を墮さず、鶯谷の子雲鵬氏、またその後をついだ。【著作】大學私衡一卷○中庸辨義一卷○侯鯖一齋五卷○善身堂一家言二卷○善身堂漫錄三卷○善身堂詩鈔二卷○同補遺一卷○鵬齋文鈔一卷○國字攷一卷等。【佐久・森】

【参考】龜田鵬齋傳 芳野世育(金陵文鈔)○近世先哲叢談 松村操
法師唄 能狂言【作者】金春四郎次郎・宇治彌太郎二代のうちの作と傳へられる。【格式】大藏流・和泉流、共に入門式に屬するのであるが、和泉流では「替止」の小書が附く

【梗概】酒好きの太郎冠者と次郎冠者を抱へてゐる主が、いつも留守の間に酒蔵の酒を飲まれるので、先づ次郎冠者を呼んで、太郎冠者が棒の手に擬つてゐるのに乗じ、棒を遣はせて後から棒縛りにし、次郎冠者が面白がつてゐる隙に、これも同じく縛り、よく留守をせよ

【梗概】酒好きの太郎冠者と次郎冠者を抱へてゐる主が、いつも留守の間に酒蔵の酒を飲まれるので、先づ次郎冠者を呼んで、太郎冠者が棒の手に擬つてゐるのに乗じ、棒を遣はせて後から棒縛りにし、次郎冠者が面白がつてゐる隙に、これも同じく縛り、よく留守をせよ

と言ひつけて外出する。主が去つた後、二人は縛られた儘苦心して互に酒を飲み、散々に浮かれる。主は歸つてこの有様に驚き、腹を立てて取押へようとするのを二人は逃げる。【影響】岡村柿紅によつて所作事に改作され、大正五年一月市村座に上演されてから、尾上菊五郎等によつてしばしば演ぜられ、狂言よりも却つてこの方が有名である。【津田】

法師風 俳風【由來】稻津祇空(別項)一派の俳風を云ふ。明治三十年八月大野酒竹編の「俳家系圖」(俳諧文庫所收)の祇空系譜に「此派を法師風と云ふ」とある。併し同系圖の前身である前年一月編の「俳家系譜」の方の祇空系譜には記してない。今その出典を明かにし得ない。【解説】祇空は宗祇法師の酒流を慕ひ、諸國を廻歴し、正徳四年五十二歳の時、相州箱根の湯本に來て、早雲寺の宗祇の墓前に於て落髮し、清流の號を改めて祇空と號した。祇空は元來、其角門人、其角の酒流風を奉ずべき人であつたのであるが、宗祇(別項)を追慕したやうな隱者的傾向を持つ人格者であつたので、酒流風を奉ずるには至らず、享保十六年本所の旗本俳人などを交へた「五色墨」(別項)の連中から慕はれて「五色墨」の後見をしたり、また淺草藏前の札差連中一派の四時觀派に奉ぜられるやうになつたので、祇空一派は四時觀派を主とするのであるが、祇空は剃髮して法師となつた人であるので、その點から祇空一派の俳風を法師風といふのであらう。【志田】

鳳車 俳人【姓名】井田誠治。前姓名鳥【流派】層雲派【閱歴】作風【明治十八年十月二十八日兵庫縣揖保郡旭陽村津市場に生る。神戸の高等商業學校在學當時から句作を

始め、出京後「層雲」(別項)に據つて句作を勵んだ。現に横濱生命保險株式會社會計課長の職にある。句に個性の出たものは大正三年頃から、自分をその儘に出して行つた。その後作者の眼は自然に向つて引かれ、又澄んで行き、漸次象徴的な傾向を帯びて來ました。併し現實を離れて行くのではなく、見る事、體する事の中に、俳句の世界を感じて行くのである。又一日のはじまりに落つる木の葉あ

れて法要を説じたが、東福寺入寺の時特には金襴の袈裟を贈られた。【著作】琴川録〇不遺稿。【荻原】

【参考】自讚〇延寶傳燈錄〇本朝高僧傳
芳洲 儒者【姓名】雨森俊良。又誠清。字は伯陽。通稱東五郎。【別號】尙綱堂。橋窓【生歿】元和七年伊勢に生れ、寶永五年(二三六八)正月六日歿す。享年八十八【閱歴】年十七八の時江戸に往き、木下順庵(別項)に就

れである。次に足利時代に於ては、管領の出す御教書を一に奉書とも云つてゐるが、一般に奉書と云ふのは、奉行頭人等が上意を奉じて出すものである。これに二通りあり、一は御教書等を受けて出す政治的のもので、他は内書(別項)に添へて出すものである。

就御船渡唐奉行事、被仰付大内太宰大貳貳、令存知之、在還共以致誓固、可被馳走之由、被仰出候也、仍執達如件。

る。「書法正傳」(別項)右軍閣下序に、「學書在玩味古人法帖」と云ひ、法帖譜系に「瀧波留意翰墨、出御府所藏眞蹟、命主者摩刻禁中、釐爲十卷、此歷代法帖之祖」と見えてゐる。元來、書を學ぶには能書家の眞蹟を模範とすべきであるが、その眞蹟は多く得難いものであるが故に、自らこれを雙鉤填墨し、或は石、板等に彫刻したものを摺寫し、以てその需要に充てたものである。これを法書或は書法(寫書

に致す。享年四十二。【法名】大空放哉居士
【墓所】小豆島西光寺【流派】層雲派【関歴】
第一高等學校を経て、明治四十一年東京帝國
大學法科を卒へ、東洋生命保險會社に入つた。
後、朝鮮火災海上保險會社の創立に際して功
があつたが、事情があつて罷められた。京都の一
燈園に投じ、托鉢行願の生活をなし、京都知恩
院内常照院・兵庫須磨寺・小濱常高寺等に寄寓
したが、同十四年小豆島八十八ヶ所の靈場た
る土庄西光寺の南郷庵の堂守となり、そこで
歿した。なほ井泉水(別項)とは一高時代から
の友人であつた。【著作】放哉俳句集大空〇

門安長、上野國の人、少壯にして江戸に出て、
商人として身を立たした。母は河野氏。鴨齋幼
にして井上金峨に從つて折衷學を受け、同門
の山本北山(別項)・原狂齋と親しかつた。北山
等と歐・蘇の平散流暢の文を作るべきことを
主張し、荻生徂徠・服部南郭(各別項)等の遺奉
する李王古文辭の説を排撃したので、江戸の

と中習になる。
【梗概】酒好きの太郎冠者と次郎冠者を抱へ
てゐる主が、いつも留守の間に酒蔵の酒を飲
まれるので、先づ次郎冠者を呼んで、太郎冠者
が棒の手に擬つてゐるのに乗じ、棒を遣はせ
て後から棒縛りにし、次郎冠者が面白がつて
ゐる隙に、これも同じく縛り、よく留守をせよ

(藏氏之辰野高)

【志田】
鳳車(ほうしゃ) 俳人【姓名】井田誠治。前姓兒
島【流派】層雲派【関歴】明治十八年
十月二十八日兵庫縣揖保郡旭陽村津市場に生
る。神戸の高等商業學校在學當時から句作を

始め、出京後「層雲」(別項)に據つて句作を勵ん
だ。現に横濱生命保險株式會社會計課長の職
にある。句に個性の出たものは大正三年頃
からで、自分をその儘に出して行つた。その
後作者の眼は自然に向つて引かれ、又澄んで
行き、漸次象徴的な傾向を帯びて來もした。
併し現實を離れて行くのではなく、見る事、
體する事の中に、俳句の世界を感じて行くの
である。又一日のはじまりに落つる木の葉あ
り「目かげの浪の倒れんばかり」の如きが、そ
の作例である。【著作】第一句集「雲の音」〇
第二句集「生ある限り」。

【著原】
方秀(ほうしゅう) 禪僧【姓名】佐伯氏。字岐陽。
【號】不二道人【生歿】康安二年十二月二十
五日讃岐に生れ、應永三十年(一八三二)二月三
日歿す。享年六十二【関歴】方秀の生れた時
讃岐に兵亂が起り、父清泰は北越に走つたの
で、方秀は母に伴はれて京都に入り、外祖父に
養はれた。外祖父は儒者たつたので、方秀に
詩書を教授したが、幼少ながら善く誦誦した
といふ。應安五年外祖父の歿後、東福寺石窓
泉禪師に從つて侍童となつた。翌六年安國寺
靈濟和尚に侍して得度した。後康暦元年十九
歳の時、相模の壽福寺等の諸禪寺を歴訪し、翌
二年京都に歸り、南禪寺に入り、南北の講席に
遊び、大小の經論を探究した。明德元年三十
歳の時東福寺に歸り、藏論となり、尋いで後版
から前堂となつた。その後、讚岐道福寺、京都
普門寺を経て東福寺住持となつた。應永二十
五年五十八歳の時病に罹り、東福寺栗棘庵に
退居した。尋いで南禪寺住持となり、東福寺
に不二庵を構へた。方秀は博學を以て聞え明
の天倫舞と文通してその才能を賞せられた。
又將軍足利義持の歸依を受け、しばしば召さ

れて法要を説いたが、東福寺入寺の時特
に金襴の袈裟を贈られた。【著作】琴川録〇不
二遺稿。
【参考】自讚〇延寶傳燈錄〇本朝高僧傳
芳洲(ほうしゅう) 儒者【姓名】雨森俊良。又誠
清。字は伯陽。通稱東五郎。【別號】尙綱堂。
橋窓【生歿】元和七年伊勢に生れ、寶永五年
(一七六八)正月六日歿す。享年八十八【関歴】
年十七八の時江戸に往き、木下順庵(別項)に就
いて學び、遂にその薦めに因つて對馬侯に仕
へた。尤も語學に長じ、韓人と應對するに通
譯を假らなかつた。新井白石(別項)と同門の
誼があるにも拘らず、交情相協はず、常に白石
を稱してその心術測るべからずと言つた。勤
學老いて益々篤く、子弟を教ふるに懇々倦む
ことを知らなかつた。年八十一、初めて和歌
に志し、「古今集を誦すること一千遍、自ら
賦すること一萬首、人その精力に服した。嘗
てその子顯光をして荻生徂徠(別項)に從學せ
しめたが、「茂卿は一代の豪傑なり。然れども
その人を教ふる、浮華を尙びて德行に原かず。
久しく少年輩を託すべからず」として辭し去
らしたといふ。以てその人と爲りを知るこ
とが出来よう。【著作】橋窓茶話三卷〇橋窓
文集二卷〇朝鮮略説一卷〇雜林聘事錄五卷〇
たはれ草三卷〇隣交始末物語。 (佐久)

奉書(ほうしよ) 古文書【解説】總じて奉書とは
上の仰を奉じて下に下知する文書をいふ。公
家の繪旨、院宣、令旨、御教書(各別項)等何れも
一種の奉書である。武家の御教書・下知狀も
亦さうであるが、普通奉書といふは、鎌倉時
代に於ては政所・侍所及び奉行・頭人等より上
意を奉じて出すもので、執事・寄人等は奉行
等の署判がある。問狀奉書・召文奉書などそ

れである。次に足利時代に於ては、管領の出
す御教書を一に奉書とも云つてゐるが、一般
に奉書と云ふのは、奉行頭人等が上意を奉じ
て出すものである。これに二通りあり、一は
御教書等を受けて出す政治的のもので、他は
内書(別項)に添へて出すものである。
就御船渡唐奉行事、被仰付大内太宰大貳貳、令存
知之、往還共以致堅固、可被馳走之由、被仰出候
也、仍執達如件。
天文十四
十二月廿八日
相良宮内大輔殿
秀(花押)
秀(花押)

就奥州探題職儀、爲御禮、大鷹一本、御馬一疋
雲雀毛、黄金卅兩御進上候、目出被、思召候、仍被成
御内書候、爲其被差下孝阿候、猶得其意可申由、
被仰出候、可得御意候、恐々謹言。
九月廿四日
謹上 左京大夫殿
陸奥守晴光(花押)

前者は、堅文・折紙共にあり、後者は折紙が多
い。なほ管領がこの式で上意を傳達する奉書
もある。次に織田・豊臣時代にも奉書はあり、
殊に豊臣氏では、大老・奉行共に奉書と稱し、
右の内書に添へて出す式のものである。次に
江戸時代には普通老中から出すものを奉書と
云つた。これに二様あり、一は室町時代の奉
行頭人等の出す様式のもの、他は内書に添へ
て出す形式のものである。而して茲に注意す
べきは、織豊以後は公的の奉書も餘程私文書
たる書狀化して來たことである。 (伊木)

法帖(はふてい) 書道【解説】書の模範とすべ
き筆蹟を摺物としたる本。書を練習し、或は
鑑賞するためのもので、その起原は支那にあ
る。「書法正傳」(別項)に「右軍蘭亭序に、一學書
在玩味古人法帖」と云ひ、法帖譜系に「淵波留
意翰墨、出御府所藏眞蹟、命王著摩刻禁中、
釐爲十卷、此歷代法帖之祖」と見えてゐる。元
來、書を學ぶには能書家の眞蹟を模範とすべ
きであるが、その眞蹟は多く得難いものであ
るが故に、自らこれを雙鉤填墨し、或は石、板
等に彫刻したものを摺寫し、以てその需要に
充てたものである。これを法書或は書法(寫書
の術を書法と云ふのは別)と云ふ。即ち手本で
ある。「佩文齋書畫譜」論書 明王世貞論吳中書
の條に、「天下法書歸吾吳、而祝京兆允明爲最」
と云ひ、「易林」には「典册法書、藏在蘭臺」と
あり、また我が「類聚三代格」(卷十)には「書法屏
風障子」と見え、「東大寺獻物帳」にも「書法二
十卷」として王羲之の書を掲したる目錄が、列
擧してある。法帖と云ふも畢竟これに外なら
ぬ。この法帖を作るには、先づ原文字を普通
は石に刻するが(これを上石又は勒石と云ふ)、ま
た屢々木を以てこれに代へ、或は玉材を用ふ
ることもある(これを玉刻と云ふ)。次にこれを
墨を以て紙に摺寫するのである。その材料に
依り、また技巧に依り、出來上つた法帖に、
それ々々の特徴・趣味が現はれ、人々の鑑賞も
いろ／＼に分れるわけである。法帖に、集帖
(彙帖)と單帖とがある。集帖は一帖中に多人
數の書蹟を集めたもので、或はこれを以て法
帖の別名とする人もある。單帖は一つの法帖
が一人の書より成るもので、中には碑碣の搨
本を含め稱することもある。有名なる「淳化
閣帖」は集帖で、王羲之の「蘭亭序」は單帖であ
る。法帖の嚆矢は南唐の李後主がその臣徐鉉
をして所藏の法書を石に刻せしめたる「昇元
帖」であると傳へられるが、これに就いては議

論あり、普通には前掲の「法帖譜系」にもある如く、宋の太宗が淳化三年に侍書王著に命じて法書十卷を摹刻せしめたる「淳化閣帖」を以てその祖とする。爾來、宋・劉・唐・宋・趙・元・明・清等、歴代幾多の法帖續出し、精粗善惡、種々雑多であり、中には同一のものや屢々翻刻せられたがために、殆ど原形を留めぬものすら尠くない。否寧ろ原字の眞を正確に傳へたものはないとさへ云はれてゐる。今、古來著名なる支那法帖の幾分を擧ぐれば、

- 〔宋〕淳化閣帖、絳帖、潭帖、汝帖、太清樓帖、淳熙閣續帖、戲魚堂帖、淳熙修內司本、星鳳樓帖、百一帖、賜書堂帖、甲秀堂帖、鏡鼎帖、四聲齋韻、戲鴻堂帖(魏)賀捷表(鍾繇正書)、宣示表(同上)〔晉〕樂毅論(王羲之小楷)、黃庭經(同上)蘭亭序(同行書)、聖教序(同上)、十七帖(同草書)〔二王帖〕王羲之(王獻之)草書、洛神賦(王獻之小楷)月儀帖(秦誓章草)〔陳〕千字文(智永真行草書)〔唐〕西昇經(褚遂良正書)、聖教序(同上)、廟堂碑(虞世南)、奏議(蘇靈芝正書)、離騷九歌(歐陽詢正書)、化度寺碑(同上)、虞恭公碑(同真書)、九成宮醴泉銘(同楷書)、爭座位帖(顏真卿草書)、祭顏杲卿并十三姪文(同上)、金剛經(柳公權正書)、元駱塔銘(同上)、千字文(李陽水篆書)、雲龍將軍李思訓碑(李北海行書)、自叙帖(懷素草書)、聖母帖(同上)〔蘇東坡行書〕、夢頌(同上)、醉翁亭記(同草書)雲亭集帖(黃山谷行書)、第一山(米芾行書)、天馬賦(同上)、三館帖(同上)、長安大道詩(同上)、十篇七章(朱熹行書)、前後出師表(岳飛草書)〔元〕黃庭經(趙子昂小楷)、樂毅論(同上)、道德經(同上)千字文(同大小楷)、蘭亭序(同行書)〔明〕金剛經(文徵明小楷)、正氣歌(同行書)、唐子西詩帖(董其昌行書)、畫錦堂記(同草書)、福壽記(歐陽明行書)、奕稿(楊根山行書)、振山閣帖(王鏊行書)〔清〕弟子藏(鄧完白篆書)

なほ日本古來の金石文(別項)や名筆にして法帖として扱はるゝものもあるが、普通法帖と云へば支那のそれを指すのであるから、今これを省略することとする。

寶生院

中區門前町【解説】寶生院は、伊勢大神宮の神主從三位度會行家の子能信上人の開いた寺院で、新義眞言宗に属する。初め中島郡大須庄北野村(今は美濃の國に屬す)にあつたものを慶長十七年、徳川家康の命によりて、住僧堯遍をして今の地にうつさしめた。佛通禪師遷化の時、密教及び禪學の書籍を殘らず能信上人へ附與したので、その文庫には古寫本の書籍が頗る多い。古來これ等は大須本又は寶生院本と稱して世に有名である。現にその圖書二十餘種は國寶に指定されてゐる。〔種松〕放生川(はなづか)「神事物の詠曲」を見よ。

方丈記

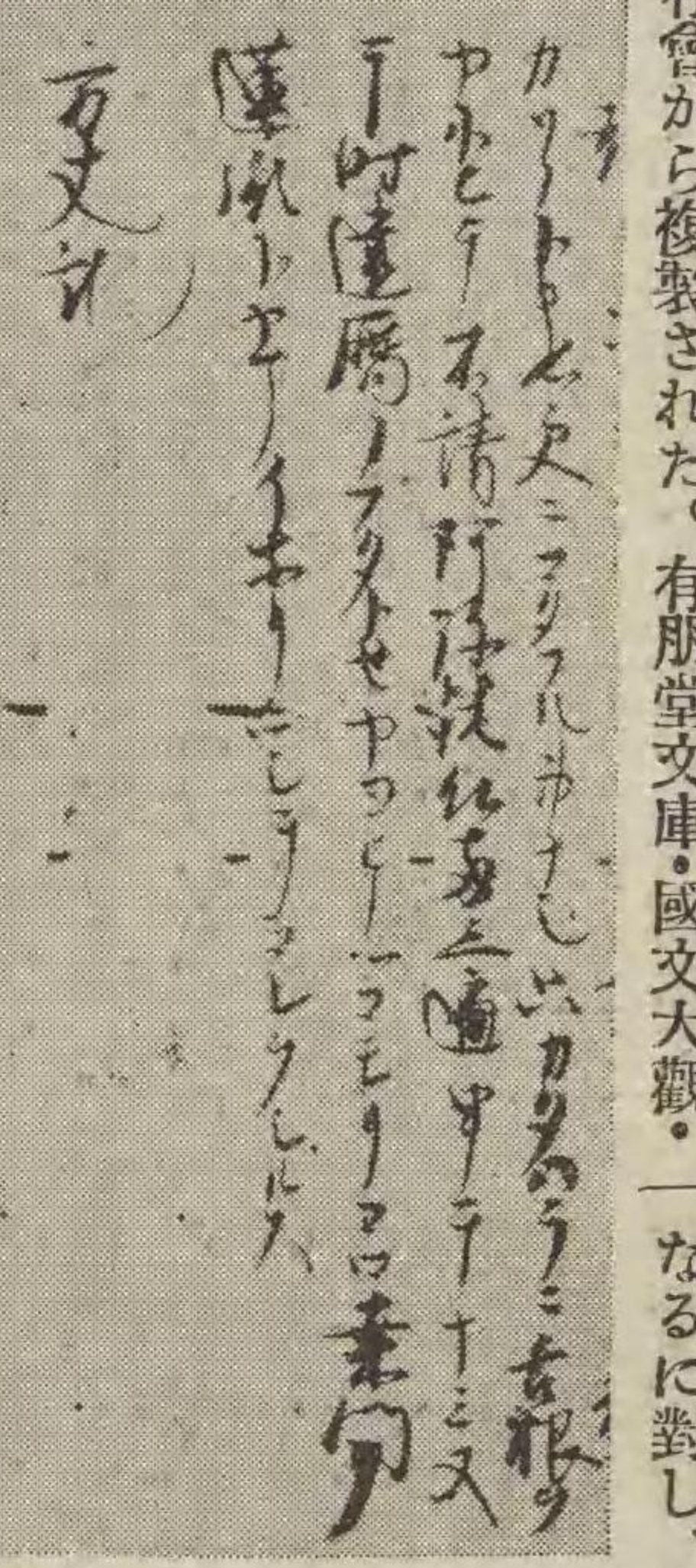
〔十訓抄〕の記事による。藤岡作太郎博士等の僞作説もあるが、それは内海弘藏氏の「方丈記評釋」の序中に論駁せられた。又別に「池亭記」(別項)の摸倣なるの故をもつて僞作となす説もある。これに對しては岩波文庫「方丈記」の「名稱」巻末に、「その家の有様世の常にも似ず、廣きは僅かに方丈、高きは七尺がうちなり」とあるによる。【成立】建曆二年三月に成れる由の奥書がある。【諸本】流布本の外に大別して三種の異本がある。その一は大福光寺藏本の系統のもの、その二は森洽藏氏舊藏の長享二年の奥書ある本の系統のもの、その三は東京帝國大學國語學研究室舊藏の延徳二年の奥書ある本の系統のものである。これ等のうち第二・三類の本は、長明の原作と斷じ難

この種の本は、毎葉表面を用ひるだけで、裏面を用ひる事は出来ない。法帖の類で、折本(別項)にしたものも少くない。これは裏面を用ひることも出る。〔種本〕

北條時頼記

【作者】岡本一抱子(洛陽隱子鑿紫子と號した。近松門左衛門の弟である。)、【刊行】元祿四年【解説】十卷六十八話。卷一は北條時頼の一代記である。鎌倉幕府草創の顛末より説き起し、

きものであり、大福光寺本(天正十五年四月國寶に指定のみ)、原作の佛に近いものと言はれてゐる。大福光寺本は片假名本で、流布本に比して簡素であり、書寫年代も鎌倉時代で、長明を去ること遠からぬものとされ、近時古典保存會から複製された。有朋堂文庫・國文大觀。



在一卷者鴨長明自筆也
從西再院相傳之
寛元二年二月日
親杖證之

意を暴露して切腹を勧めるが、大助は泰村への恩義を思つて従はない。母後室の取りなしで相智同士は意恨を遺して別れる。(鷹野)泰村・佐野源藤太は今日宗尊將軍の鷹狩を期し、大助は大敵罪人を語らひ、暗殺を企てて居り、又執權時頼に對しては既に一の宮明神に呪殺の願狀を納め、又その妾二階堂の息女玉豊姫の嫉妬深き性をも利用して事を起さうとしてゐる。大助は泰村の眞意を知つて煩悶し、義

死ぬ。三浦は故意に六郎に射られ、姉嬢がその遺児であり、我が子に鑿鑿して挑んだ事を恥ぢ、奪ひ隠せし錦旗を六郎に渡し、千種姫を託して眼目する。〔四段〕(江の島)二階堂の娘玉豊姫は未だ時頼の胤を宿さず、その龍が月小夜に移らん事を懼れてゐるが、佐野源藤太は月小夜の既に懐胎せる由を告げてこれを煽動し、神前の鬼女の面を與へて月小夜を呪殺せよと教唆する。(月小夜居間)月小夜は夜毎

に及んでゐる。【價值】本書は鎌倉初期にあはれた隨筆として、文學史上重要な作品である。その作中を貫く精神は、佛敎思想に基づく無情厭世觀である。「枕草子」や「徒然草」(別項)が、斷片的なる感想を記せる小篇の集編なるに對し、本書は短篇ながら首尾一貫せる文章である。その文體は漢文の特色を和文のそれに調和せしめたものであつて、

傳鴨長明自筆也
【研究書】方丈記潤説二卷
加藤盤齋○方丈記流水抄二卷
種島昭武○方丈記詠解二卷
攝陽山人○方丈記頭書山岡元隆○方丈記捷徑○方丈記析義鳥居悅○方丈記評釋中島幹事○標註方丈記上田胤比古

にして堅に二つ折とし、これを積み重ねて折目を揃へ、毎葉、折目と反對の側の紙端の裏面の、次の紙葉の裏面と相接するところを糊で貼けて冊子としたもの。前後に表紙をつけ、背の方は布帛を以て被ふものが多い。表紙には布帛の類を貼附する事多く、題簽は多くは絹の類を用ひ、表紙の中央又は左端に附ける。

法帖仕立

【解説】冊子本(別項)の裝幀の一種で、法帖(別項)や書帖の類に用ひられるもの。紙を二葉づつ表面を内

(李北海行書) 自叙帖(懷素草書) 聖母帖(同上) 千字文(同上) 書譜(孫過庭草書) [宋] 前後赤壁賦(蘇東坡行書) 夢頌(同上) 醉翁亭記(同草書) 雲笈七籤(黃山谷行書) 第一山(米芾行書) 天馬賦(同上) 三館帖(同上) 長安道詩(同上) 士麟七章(宋熹行書) 前後出師表(岳飛草書) [元] 黃庭經(趙子昂小楷) 樂毅論(同上) 道德經(同上) 千字文(同大小楷) 蘭亭序(同行書) [明] 金剛經(文徵明小楷) 正氣歌(同行書) 唐子西詩帖(董其昌行書) 畫錦堂記(同草書) 橋亭記(歐陽明行書) 奕稿(楊叔山行書) 擬山園帖(王穉行書) [清] 弟子藏(鄧完白篆書)

解題に於て、山田孝雄博士の反對説がある。【名稱】卷末に、「その家の有様世の常にも似ず、廣きは僅かに方丈、高きは七尺がうちなり」とあるによる。【成立】建曆二年三月に成れる由の奥書がある。【諸本】流布本の外に大別して三種の異本がある。その一は大福光寺藏本の系統のもの、その二は森治藏氏舊藏の長享二年の奥書ある本の系統のもの、その三は東京帝國大學國語學研究室舊藏の延徳二年の奥書ある本の系統のものである。これ等のうち第二・三類の本は、長明の原作と斷じ難

國民文庫・日本文學大系・岩波文庫等所收。【内容】著者が日野山に閑居せるとき、年來見聞したる世間の事どもを書き綴つた隨筆である。安元三年四月二十八日の大火、治承四年四月の大風、同四年六月の遷都、養和年間の大飢饉、長承年間の大地震等の悲惨事を叙し、世の無常轉變を嘆き、次に日野山の隱遁の事

にして堅に二つ折とし、これを積み重ねて折目を揃へ、毎葉、折目と反對の側の紙端の裏面に、次の紙葉の裏面と相接するところを糊で貼けて冊子としたもの。前後に表紙をつけ、背の方は布帛を以て被ふものが多い。表紙には布帛の類を貼附する事多く、題簽は多くは絹の類を用ひ、表紙の中央又は左端に附ける。

この種の本は、毎葉表面を用ひるだけで、裏面を用ひる事は出来ない。法帖の類で、折本(別項)にしたものも少くない。これは裏面を用ひることも出る。【橋本】

北條時頼記

【作者】岡本一抱子(洛陽隱子)鑿紫子と號した。近松門左衛門の弟である。【刊行】元祿四年【解説】十卷六十八話。卷一は北條時頼の一代記である。鎌倉幕府草創の顛末より説き起し、北條の家紋三鱗に因む神祕的説話、鎌倉三代將軍のこと、時政・泰時執權のこと、時頼幼少の頃のこと、並に貞永式目のこと等。卷二は時頼元服の次第より鶴岡八幡宮の放生會に時頼弓の妙手を現はすこと等。卷三は時頼執權のことより秋田城之介鬼女物語のこと、時頼無常を觀じて夢中に行脚に出で、諸國山野を徘徊すること等。卷四は松下禪尼居間の南表の墮子の破れを手づから小刀にて切張りして

瀧門不二房に調し給ふこと等。卷十は最明寺入道三年行脚成就のこと、日蓮上人歸國のこと、最明寺時頼逝去のこと、天下繁昌のこと等を記し、泰時時頼の二君慈悲廉直にして邪惡を遠ざけたまへば名徳後世にみちて四つの海浪なく松風萬歳を唱ふる御世のためしとぞなりける」と結んである。本書によつたものに、池田東籬亭の「北條時頼記圖會」(別項)及び繪本「北條時頼記」(明治十七年刊)がある。【小泉】

北條時頼記

【作者】西澤一風・並木宗助・安田蛙文【興行】享保十一年四月八日、豊竹座。【諸本】七行本。並木宗輔淨瑠璃集(續帝國文庫)所收【題材】若狭前司泰村・三浦吉村等の北條時頼を滅さうとする陰謀と、その失敗とを中心とし、「増鏡」以來傳へられる時頼廻國の傳説、近松の「最明寺殿百人上臈」(別項)に描かれた「女鉢の木」などを點じてゐる。

【梗概】(一段)鎌倉御所(後嵯峨院の御子宗尊親王が鎌倉將軍となり、京より三浦彈正忠吉村使者となつて征夷大將軍の除書を奉る。この時將軍に傳へるべき錦旗の紛失せる事判明。寶藏の鍵を預る佐野兵衛は若狭前司泰村等のために辱しめられる。(桐ヶ谷)兵衛は弟佐野源藤太が泰村の一味なるを察知し、欺いて大事を洩らさしめた後、錦旗の所在を責め問ふが却つて斬殺される。(白洲)泰村は將軍宣下による大赦を機とし、多くの罪人を免して籠絡し、且つ鷹殺しの重罪人弓削大助を助命して私に恩を賣る。二階堂信濃之介はこれを難するが、罪人どもに襲撃され勇戦する。

【脚色】作者として名を連ねてゐる一風は、本曲成立に就いて、「豊竹氏ふけいきなる芝居。何とぞ珍しき物と。作者も相應にかきあつめたるかなぞうし。北條時頼記といへるよりおもひ付。二三人よつて此外題を趣興に。淨る

ゐるところに、秋田城之介義景、月次の嘉禮を申述べに出仕し、禪尼より教訓せられる話、三浦泰村野心のことより、時頼・泰村和平のこと等。卷五は時頼相模守に任せられること、殺生石のこと、建長寺建立のこと、時頼下郎の忠節を糺し給ふこと等。卷六は時頼入道して最明寺殿と號することより青砥藤綱滑川に錢十文を落し、錢五十文にて松明十把を買ひ求めてこれを探さしめたこと、日蓮上人初めて宗門を開き安國論を唱へしこと等。卷七は時頼入道諸國修業のこと、その途中に於ける新宮彌次郎返忠の話、讃岐の局が怨靈の話、難波の尼公本塔の話等。卷八は時頼入道高野山參詣のこと、佐野源左衛門常世がこと、鉢の木のこと等。卷九は原田次郎常直射術のこと、原田が館戰のこと、原田地藏因縁のこと、時頼

【二段】(弓削大助)この家の妹娘松世の聲原田六郎は、姉娘幾世の聲大助の特赦の祝儀に九寸五分を贈り、泰村の大助を助命した真

意を暴露して切腹を勧めるが、大助は泰村への恩義を思つて従はない。母後室の取りなしで相智同士は意恨を遺して別れる。(鷹野)泰村・佐野源藤太は今日宗尊將軍の鷹狩を期し、大助は大赦罪人を語らひ、暗殺を企てて居り、又執權時頼に對しては既に一の宮明神に呪殺の願掛けを納め、又その妾二階堂の息女玉豊姫の嫉妬深き性をも利用して事を起さうとしてゐる。大助は泰村の眞意を知つて煩悶し、義弟原田六郎に逢つて不明を謝し、一切を打明けんと無縁寺に伴ひ去る。秋田城之助は將軍を護つて力戰惡人共を逐ふ。(三段)【決斷所】一の宮明神の神主が訴へ出た不可解な箱を開くと、泰村の署名のある時頼調伏の願書が出る。更に無縁寺に遺棄された首無し死體が運ばれるが、折から二人の聲の行方不明によつて弓削の後室と姉妹の娘が屍を檢べに來る。紋所は原田、刀は大助のもので血糊が着いてゐるため大助に殺された原田六郎の屍と認定され、妹松世は敵討に、姉幾世は夫大助の助太刀に出る事となるが、後室は拾ひ兒の姉娘への義理で、姉と行動を共にしようと言ふ。(道行くまがへ笠)虚無僧姿となつた母娘三人は大助を求めて都に上る。(三浦彈正吉村館)息女千種姫に請じ入れられた女虚無僧の姉に三浦は戯れる。大助の隠まはれる事を盗み聞いた妹松世が斬りつけて見ると、意外にもそれは良人原田六郎であつた。大助は心ならずも不義に與した事を恥ぢ、六郎に後事を託して無縁寺で自刃し、六郎は偽大助となつてこの家に入り込んだのである。姉幾世は夫大助の敵六郎を討たうと妹と争ふ。母は自ら刺して妹夫婦を許せと哀願し、今まで義理で姉を愛し、本心では妹を愛してゐた事を懺悔して

り五段にくみ立ん。いづれも知恵を出されと
ざいふりまはせば。並木宗助安田蛙文。美若
なれ共。淨るり一段も書かねぬ器量西澤の
下に任せ。どをやらかをやら五段をつゝり
云々(今昔操年代記「上巻」と言つてゐるから、
相當野心的な作である事や、直接筆を執つた
者が宗助・蛙文であつた事が判る。全曲の山は
三段目で、首無し死體に對する誤認や、實子と
義子とに對する母の愛情の偽らざる告白等に
近代的な感觸が隨つてゐるのを異とする。な
ほ本曲大成功の因を作つた第五段「女鉢の木」
は、近松作「最明寺殿百人上臈下」の卷の借用
である。【影響】諸曲の名人で一二三の聲共
に揃ひ、特に三の聲が麗しく、古今無双の妙
音と言はれた上野少掾(後の越前少掾)が五段目
「雪の段」を語り、人形出遣ひも亦その人を得
たので(時類、近本九八郎。白妙、藤井小三郎。玉笹、
中村三郎、翠享保十二年閏正月まで、二年越
十一ヶ月の間打通し、「國姓爺合戦」(別項)と
並び稱せられる當り作となつた。その利潤を
以て庫を立てたのを世に北條庫と呼んだと言
ふ。豊竹越前の大坂に於ける一世一代の語り
物にもこれが選ばれ、爾後屢々勾欄にかゝつ
た外、歌舞伎にも直ちに移された。なほ第四
段に取入れられた「肉附きの面」の傳説は、後
に歌舞伎に入つて大成するが、本曲はその最
も早い脚色の一つであらう。

【参考】今昔操年代記○淨瑠璃講○外題年鑑
○聲曲類纂卷之二○晴翁漫筆卷之五○西澤一
風累世の傳○攝津名所圖繪大成卷之六○豊竹
上野碑○攝陽奇觀卷之五「北條庫」卷之二十
五上巻之三十二○傳奇作書追加上の巻○
淨瑠璃作者としての西澤一風 黒木勲藏(近世
演劇考)○大近松全集第二巻「最明寺殿百人

上巻「解題」
【北條早雲】(近藤)
小説「作者」塚原
洲(濠洲)【發表】明治二十八年六月より東
京日日新聞に連載。【刊行】同三十年三月。
【梗概】足利の末期、伊勢新九郎長氏(後に北條
早雲)は、同志と共に關東で一旗擧げようと、
姉督今川治部大輔義忠のもとを訪ふべく船路
を急いだ。湊へ着くと、義忠は勝間田入道横
地又八の謀叛により、軍旅のうちで殺された
ことを知つた長氏は、勝間田横地を攻めて、
二人の首級を擧げた。これが長氏出世の初め
である。義忠一家と長氏とは親戚の間柄なの
で、義忠の息龍王を守り立てて行かうと決意
した。折柄義忠の有力な部下、岡部庵原が私
闘して龍王の館まで焼いたことが、關東
の公方、左兵衛督政知の耳に入り、今川家の政
治向き不都合といふ廉で取潰さうとした。そ
の時、長氏の辯舌によつて、今川家は危急を免
れた。その功で長氏は初めて一城の主となり、
五千貫の地を賜はつた。彼の智勇はやがて關
東の公方に知られ、重用されることとなつた。
政知は文弱の主で、二人の寵姫に心惹かれて、
その間に設けた茶々殿(菊殿所生・阿古殿(義
所生)のことで風波を生じた。政知は長子茶々
殿の武張つた暗愚の性を好まず、次子阿古殿
を愛したので、自然その間に黨禍を生じ、茶々
殿母子は幽閉され、菊殿は義忠一派のために
毒殺された。かくと見た茶々殿は、激怒して
父の館に赴き、父と義忠を殺し、阿古殿に負
傷せしめた。長氏は正義の上から茶々殿を成
敗し、亡主のため堂々と甲合戦をしたので、
威名大に揚り、豆州を支配するに至つた。
【解説】本篇は新聞に載せた時、百二十五回だ
つたが、單行本にはこれを六十回に縮めたの

で構圖の上に無理があり、大河の流るゝやう
な汪洋さはないが、戦國時代の殺伐な空氣を
鮮明に現はし、荒木兵庫・僧策恩の如き一風變
つた人物の面目を能く躍動せしめてゐる。政
知の家庭に於ける黨禍、子を思ふ二女性の心
持なども相當に寫され、北條早雲の性格もほ
ぼ遺憾なきまでに表現されてゐる。【高須】
法性寺入道前關白太政大臣(高須)
【北條時頼記圖繪】(讀本)
十卷十冊【作者】池田東齋亭(畫工)松川半
山【名稱】内題に「参考北條時頼記圖繪」とあ
る。【刊行】嘉永元年【諸本】繪入文庫所收。
【解説】岡本一抱子の「北條時頼記」(別項)を平
易に補述したもの。その原文のことに就いて
は作者の序にも見えるが、又その漢文序をも
載せてゐる。前編卷之一は鎌倉三代の事蹟
北條氏の執權職としての來歴を述べ、卷之二
より時頼の幼年のこと、その人と爲り、その功
績を説いて、青砥藤綱の登庸、入道して密か
に鎌倉を出るまでを盡し、後編二卷は主とし
てその後の藤綱の事蹟を、卷之三・四・五は時
頼巡視の顛末、その往生を記してゐる。なほ
巻初に北條氏系圖を掲げ、篇中諸所に浪花の
浮世繪師半山の畫を挿んでゐる。卒讀の容易
なる挿畫を以てしたことが、本書の狙ふと
ころであつたらう。この作者には、「繪本通俗
三國志」(通俗三國志参照)、「繪本夷越軍談」(通俗
吳越軍談参照)等がある。【佐野】

彌(別項)の弟(或は音阿彌の弟とも傳ふ)蓮阿彌を
祖としてゐる。
【系譜】初代蓮阿彌—二代宗阿彌—三代養阿彌—四代
一閑(北條氏政氏成に仕ふといふ。鼻高保生といはれた)
—五代重勝(親世元廣の三男。實山と號す。世に古賢生と
呼ばれた)—六代勝吉(金剛孫太郎弟、徳川氏に抱はれ
た。重勝の實子元盛は、親世八代を繼ぐ)—七代重房(九
郎左衛門)—八代重友(將監。世に古將監と呼ばれた)—
九代友春(九郎。後の將監。弟重賢は親世十二代を繼ぐ)
—十代暢榮(九郎)—十一代友精(九郎。暢榮の甥。賜
生より入る)—十二代友通(九郎。金剛三郎の子)—十三
代友勝(九郎。親世繼部の子)—十四代英勝(將監。友家
より入る。初めて流儀の隆本を版行した)—十五代友于
(彌五郎。外家より入る。外神田勲進能を行ふ)—十六代
知榮(九郎。明治時代に名を得た)—十七代重英(一族よ
り入る。現存)【佐成】

關するもので、第四編は古刊本中の佛書に就
いて、これを元弘以前と以降に分けて記し、
第五編は佛書以外の古刊本であつて慶長以前
に屬するものに就いて述べ、更に同一書で幾
つかの版のあるものを擧げてその辨別を資し
てゐる。第六編は所謂古活字本に關するもの
で、朝鮮系統のものと、南蠻系統のものとの分
けて記してゐる。而して第二編以下の各編の
終りに参考としてコロタイプ印刷による標本

稻川屋にあがる。陰間は深い仲になつてゐる
女に逢はうために、こゝに來たのである。永
代寺の明けの鐘が鳴つたので、起き出て皆々
歸り支度をする。
【構想】洒落本には、穿ちが必要である。隨つ
て珍奇な材料を捉へるのに、作者は最も苦心
した。本書が男娼を描き、更に男娼と遊女の
戀を寫すに至つては、洒落本中の珍種といは
ざるを得ない。【山崎】

した。格も「弘仁格」「貞觀格」「延喜格」の三書
を合せて分類した「類聚三代格」(國史大系所收)
があるが、更に佚文を諸書に採つて集めたも
のに、堀保己一著「格逸」(續々群從六、黒川春村
著「格逸々」(同上)がある。又この「類聚三代格」
に異本があるが、それに就いて荷田春滿著「偽
類聚三代格考」は、その偽撰であることを論じ
てゐる。式は藤原時平等撰「延喜式」(國史大系
所收)のみが残存してゐるが、この書には凡に

和八、オフセット印刷で複製した二卷本(本
文と圖録の二つに分つ)がある。【内容】我が國
に於ける舊鈔本及び古刊本に就いて、やゝ組
織的に説いたものである。第一編は總説で、
文字・假名・ヲト點・悉曇・文章・佛教の我が
文教に及ぼせる影響・料紙・書體・印刷・裝幀
等の古書研究に必要な豫備知識に就いて記
述し、附録として支那傳稱年號略表を附して
ゐる。第二編は舊鈔本に關するもので、支那
より渡來のもの、邦人の轉寫に係るもの、現存
せる支那渡來の鈔本及びこれを轉寫した鈔本
の主なものを、我が國で著作せられた書籍の
鈔本、日記類及びその他の舊鈔本、悉曇文の舊
鈔本と六つに分けて述べ、第三編は古寫經に
關するもので、我が國に現存する支那人の書
寫せる古經、邦人の願經及び舊鈔佛典の二つ
に分けて記してゐる。第四・五編は、古刊本に

(詳從四〇一)、一建武以來追加(同上)があり、式
目の註釋には、清原良雄著「建武式目注」(群
群從七)がある。戦國時代には「大内家書」(詳
從四〇二)、「早雲寺殿二十一箇條」(詳從四〇三)、
「信玄家法」(同上)、「朝倉敏景十七箇條」(同上)、
「長曾我部元親百箇條」(同上)、「長曾我部元親
式目」(續詳從六五六)等があるが、いづれも地
方の一部部の法制に過ぎないが、亦以て當時
の風尚を知るに足りよう。江戸時代には皇室

た外、歌舞伎にも直ちに移された。なほ第四段に取入れられた「肉附きの面」の傳説は、後に歌舞伎に入つて大成するが、本曲はその最も早い脚色の一つであらう。

【参考】今昔操年代記○淨瑠璃講○外題年鑑
○聲曲類纂卷之二○晴翁漫筆卷之五○西澤一風累世の傳○攝津名所圖繪大成卷之六○豐竹上野碑○攝陽奇觀卷之五○北條庫○卷之二十
五ノ上卷之三十二○傳奇作書追加上の卷○淨瑠璃作者としての西澤一風 黒木勘藏(近世演劇考)○大近松全集第二卷「最明寺殿百人

所生のことで風波を生じた。政知は長子茶々殿の武張つた暗愚の性を好まず、次子阿古殿を愛したので、自然その間に黨禍を生じ、茶々殿母子は幽閉され、菊殿は萩殿一派のために毒殺された。かくと見た茶々殿は、激怒して父の館に赴き、父と萩殿を殺し、阿古殿に負傷せしめた。長氏は正義の上から茶々殿を成敗し、亡主のため堂々と弔合戦をしたので、威名大に揚り、豆州を支配するに至つた。
【解説】本篇は新聞に載せられた時、百二十五回だったが、單行本にはこれを六十回に縮めたの

した。格も「弘仁格」「貞觀格」「延喜格」の三書を含めて分類した「類聚三代格」(國史大系所収)があるが、更に佚文を諸書に探つて集めたものに、瑞保己一著「格逸」(續々群從六、黒川春村著「格逸」(同上)がある。又この「類聚三代格」に異本があるが、それに就いて荷田春滿著「偽類聚三代格考」は、その偽撰であることを論じてゐる。式は藤原時平等撰「延喜式」(國史大系所収)のみが残存してゐるが、この書には夙に明暦版の本と雲州松江城主松平重恒校刊の雲州本とがあり、國史大系本はこの二種中勝れてゐるといはれる雲州本に近いものである。然るに近時從來珍重視された九條公爵家本も原寸大玻璃版に複製せられて世に出で、又國學院大學では、延喜式撰上一千年記念事業として「校訂延喜式」を刊行され、本文研究の上

に一大光明を加へた。式にも佚文を集めた和田英松博士編「式逸」(續々群從六)がある。これ等律令格式の末書ともいふべきものには、藤原通憲撰「法曹類林」(群從四六四)、坂上明兼撰「法曹至要抄」(群從七七)、坂上明基撰「裁判至要抄」(群從七六)、惟宗允亮著「政事要略」(改定史鑑集覽篇外二)、三善爲康著「朝野群載」(改定史鑑集覽通記類一八)、「類聚符宣抄」(一名左丞抄)(國史大系所収)、「續左丞抄」(同上)等がある。
【武家】鎌倉時代には「貞永式目」(一名御成敗式目)、(群從四〇〇)、「御成敗式目追加」(同上)、「式目新編追加」(續群從六五五)があり、式目の註釋書には清原宣賢が祖父常忠の説を記した「式目抄」(一名御成敗式目註釋)(續史鑑集覽所収)、「御成敗式目注」(續々群從七)、「式目開書」(續群從七〇四)等がある。江戸時代に入つても諸種の註釋書が出たが、中には杜撰孟浪のものも少なくない。室町時代には「建武式目條々」

關するもので、第四編は古刊本中の佛書に就いて、これを元弘以前と以降に分けて記し、第五編は佛書以外の古刊本であつて慶長以前に屬するものに就いて述べ、更に同一書で幾つかの版のあるものを擧げてその辨別に資してゐる。第六編は所謂古活字本に關するもので、朝鮮系統のもの、南蠻系統のものに分けて記してゐる。而して第二編以下の各編の終りに参考としてコロタイプ印刷による標本を掲げてゐる(彩色摺のものとは未だ印刷)。

標本は原則として實物大に撮影され、從來公けにされなかつたものの中から選擇し、著者自身多年探訪したものの中から取つたものが多い。【價値】著者が多年舊鈔本及び古刊本を蒐集し、又諸家の藏に就いて閱覽し、それ等の上に立つて叙述したのが本書である。舊鈔本・古刊本を歴史的に叙述したものとすれば、未だ不十分であるが、飽くまで實物の上に立脚し、且つこれを多くの圖版で示したのは後世の研究者を益することが多い。殊に古刊本に關しては、本書以後に相當優れたものが公けにされたが、舊鈔本に關したるものとしては依然本書が唯一のものである。【岩淵】

稻川屋にあがる。陰間は深い仲になつてゐる女に逢はうために、こゝに來たのである。永代寺の明けの鐘が鳴つたので、起き出て皆々歸り支度をす。
【構想】洒落本には、穿ちが必要である。随つて珍奇な材料を捉へるのに、作者は最も苦心した。本書が男娼を描き、更に男娼と遊女の戀を寫すに至つては、洒落本中の珍種といはざるを得ない。【山崎】

【公家】我が國最初の成文法である聖德太子の十七箇條憲法は「日本書紀」に採録されてゐる外、群書類從四七四にも收められてゐる。令の本文及び註釋には清原夏野等撰「令義解」(國史大系所収)、惟宗直本編「令集解」(國書刊行會第三期所収)があり、これが末書に、一條兼良著「令抄」(群書類從七八)、兼良の子冬良著「令聞書」(續々群書類從六)、栗原信充著「軍防令講義」(近藤芳樹著「標註令義解校本」、小中村清矩著「令義講義」等がある。律は「律疏殘篇」(群書類從七五)があつて、十二篇中僅に名例、衛禁、職制、賊盜の四篇の本文及び註を傳へるに過ぎないが、石原正明がその佚文を諸書に探り、これを集めて「律逸」(續々群書類從六)を編し、又中原章任は律條中主要な所々を抄出して説明を加へ、「金玉掌中抄」(群從七六)を著は

した。格も「弘仁格」「貞觀格」「延喜格」の三書を含めて分類した「類聚三代格」(國史大系所収)があるが、更に佚文を諸書に探つて集めたものに、瑞保己一著「格逸」(續々群從六、黒川春村著「格逸」(同上)がある。又この「類聚三代格」に異本があるが、それに就いて荷田春滿著「偽類聚三代格考」は、その偽撰であることを論じてゐる。式は藤原時平等撰「延喜式」(國史大系所収)のみが残存してゐるが、この書には夙に明暦版の本と雲州松江城主松平重恒校刊の雲州本とがあり、國史大系本はこの二種中勝れてゐるといはれる雲州本に近いものである。然るに近時從來珍重視された九條公爵家本も原寸大玻璃版に複製せられて世に出で、又國學院大學では、延喜式撰上一千年記念事業として「校訂延喜式」を刊行され、本文研究の上

【法藏比丘】淨瑠璃 五段(又は六段)【作者】未詳【名稱】曲中の主役の名に據るのであるが、法藏とは阿彌陀佛の因位に於て出家修行した時の名で、梵語曇摩迦留の譯語法寶藏の略である。【刊行】現存正本では延寶頃の版が古く思はれるが、更に多少は廻るであらう。【諸本】(一)所屬不明。但し説經節か。十七行十五丁、繪入五段本、延寶頃刊。(二)山本角太夫正本。名題「四十八願記」十七行十二丁、繪入五段本延寶頃刊。(三)岡本文彌正本。名題「四十八願記あみだの本地」十七行十五丁、繪入五段本、貞享元年近江屋次郎右衛門刊。(四)結城孫三郎正本。繪入本、

【法藏比丘】淨瑠璃 五段(又は六段)【作者】未詳【名稱】曲中の主役の名に據るのであるが、法藏とは阿彌陀佛の因位に於て出家修行した時の名で、梵語曇摩迦留の譯語法寶藏の略である。【刊行】現存正本では延寶頃の版が古く思はれるが、更に多少は廻るであらう。【諸本】(一)所屬不明。但し説經節か。十七行十五丁、繪入五段本、延寶頃刊。(二)山本角太夫正本。名題「四十八願記」十七行十二丁、繪入五段本延寶頃刊。(三)岡本文彌正本。名題「四十八願記あみだの本地」十七行十五丁、繪入五段本、貞享元年近江屋次郎右衛門刊。(四)結城孫三郎正本。繪入本、

【法藏比丘】淨瑠璃 五段(又は六段)【作者】未詳【名稱】曲中の主役の名に據るのであるが、法藏とは阿彌陀佛の因位に於て出家修行した時の名で、梵語曇摩迦留の譯語法寶藏の略である。【刊行】現存正本では延寶頃の版が古く思はれるが、更に多少は廻るであらう。【諸本】(一)所屬不明。但し説經節か。十七行十五丁、繪入五段本、延寶頃刊。(二)山本角太夫正本。名題「四十八願記」十七行十二丁、繪入五段本延寶頃刊。(三)岡本文彌正本。名題「四十八願記あみだの本地」十七行十五丁、繪入五段本、貞享元年近江屋次郎右衛門刊。(四)結城孫三郎正本。繪入本、

【法藏比丘】淨瑠璃 五段(又は六段)【作者】未詳【名稱】曲中の主役の名に據るのであるが、法藏とは阿彌陀佛の因位に於て出家修行した時の名で、梵語曇摩迦留の譯語法寶藏の略である。【刊行】現存正本では延寶頃の版が古く思はれるが、更に多少は廻るであらう。【諸本】(一)所屬不明。但し説經節か。十七行十五丁、繪入五段本、延寶頃刊。(二)山本角太夫正本。名題「四十八願記」十七行十二丁、繪入五段本延寶頃刊。(三)岡本文彌正本。名題「四十八願記あみだの本地」十七行十五丁、繪入五段本、貞享元年近江屋次郎右衛門刊。(四)結城孫三郎正本。繪入本、

【法藏比丘】淨瑠璃 五段(又は六段)【作者】未詳【名稱】曲中の主役の名に據るのであるが、法藏とは阿彌陀佛の因位に於て出家修行した時の名で、梵語曇摩迦留の譯語法寶藏の略である。【刊行】現存正本では延寶頃の版が古く思はれるが、更に多少は廻るであらう。【諸本】(一)所屬不明。但し説經節か。十七行十五丁、繪入五段本、延寶頃刊。(二)山本角太夫正本。名題「四十八願記」十七行十二丁、繪入五段本延寶頃刊。(三)岡本文彌正本。名題「四十八願記あみだの本地」十七行十五丁、繪入五段本、貞享元年近江屋次郎右衛門刊。(四)結城孫三郎正本。繪入本、

【法藏比丘】淨瑠璃 五段(又は六段)【作者】未詳【名稱】曲中の主役の名に據るのであるが、法藏とは阿彌陀佛の因位に於て出家修行した時の名で、梵語曇摩迦留の譯語法寶藏の略である。【刊行】現存正本では延寶頃の版が古く思はれるが、更に多少は廻るであらう。【諸本】(一)所屬不明。但し説經節か。十七行十五丁、繪入五段本、延寶頃刊。(二)山本角太夫正本。名題「四十八願記」十七行十二丁、繪入五段本延寶頃刊。(三)岡本文彌正本。名題「四十八願記あみだの本地」十七行十五丁、繪入五段本、貞享元年近江屋次郎右衛門刊。(四)結城孫三郎正本。繪入本、

【法藏比丘】淨瑠璃 五段(又は六段)【作者】未詳【名稱】曲中の主役の名に據るのであるが、法藏とは阿彌陀佛の因位に於て出家修行した時の名で、梵語曇摩迦留の譯語法寶藏の略である。【刊行】現存正本では延寶頃の版が古く思はれるが、更に多少は廻るであらう。【諸本】(一)所屬不明。但し説經節か。十七行十五丁、繪入五段本、延寶頃刊。(二)山本角太夫正本。名題「四十八願記」十七行十二丁、繪入五段本延寶頃刊。(三)岡本文彌正本。名題「四十八願記あみだの本地」十七行十五丁、繪入五段本、貞享元年近江屋次郎右衛門刊。(四)結城孫三郎正本。繪入本、

【法藏比丘】淨瑠璃 五段(又は六段)【作者】未詳【名稱】曲中の主役の名に據るのであるが、法藏とは阿彌陀佛の因位に於て出家修行した時の名で、梵語曇摩迦留の譯語法寶藏の略である。【刊行】現存正本では延寶頃の版が古く思はれるが、更に多少は廻るであらう。【諸本】(一)所屬不明。但し説經節か。十七行十五丁、繪入五段本、延寶頃刊。(二)山本角太夫正本。名題「四十八願記」十七行十二丁、繪入五段本延寶頃刊。(三)岡本文彌正本。名題「四十八願記あみだの本地」十七行十五丁、繪入五段本、貞享元年近江屋次郎右衛門刊。(四)結城孫三郎正本。繪入本、

寶永刊。未見。(五)佐渡七太夫豊孝正本。八、九行、繪入六段本。享保三年序、版元總兵衛等がある。【題材】觀無量壽經又は悲華經等に據る説法説話の類であらう。

【梗概】【初段】東天竺さいしやう國の帝、月上轉輪じやう王の一の王子、ぜんじやう太子は齡十六歳の年、噂に聞くとしやう國せんじ王の姫君あしゆく夫人を祕かに思ひ染めたが、それとなく老臣さう將軍れいかに路程など質した上で、一夜、闇に紛れて王城を抜け出し遙々と旅路についた。三年三月かゝつてとうしやう國に入つたところ、偶々宿つた家の娘が姫に仕へてゐるので、主人夫婦が使して太子の文を姫に届けた。文には一首「君ゆゑに心の闇はかきくれて迷ひ來る身を哀れと見給へ」とあつた。姫からは早速返歌があつた。「夢にだにまだ見ぬ人の戀しきは生れぬ先の契りなるらん」。かくて太子は、忍んで契る仲間となつた。【二段】姫には王子が生れた。太子を名もなき修行者と見て激怒した大王は、親子三人をたつせのほらで、右臣左臣をして處刑させる事とした。七日路を経て着いた刑場には、深さ十五丈の穴が掘られ、中には多くの刃が上向きにさゝつてゐた。三人を上から落した上に、土をかける「ゑい」の罪に行ふのである。併し検視に立つた老臣らごんは、この極刑から親子を救はうとしたが、右臣左臣は肯んぜずして遂に戦となつた。らごんは一時危険に瀕したが、終に右臣左臣を穴に投げ込んでしまつた。この時天地鳴動し、大磐石が落ちて自ら穴を填めた。この奇特を見た官人等は、悉くらごんと共に服して上洛する。三人は、ゑん山のたつせのほらの邊に庵を造つて、こゝに住んだ。【三段】七年を過ぎて、

夫婦の間に、ぜんくわう、せんじ宮といふ七歳・五歳の二人の若宮が揃つた。その兄弟を一度は世に出したいと悲しむ妃を宥め、太子は五年の歳月を約して本國に急いだ。その間は、猛獸類が集つて若宮等を護つた。故國の城は太子の出奔によつて廢墟の態となつてゐたが、太子の歸國に父帝の悦びは一方ならず、直ちに帝位を讓つた。やがて新帝はあしゆく夫人を迎へる行程に上つた。【四段】五年目の秋を待つたが、迎へが來ぬため、夫人は兄弟の愛兒をつれて、さいしやう國へ向つた。二年三月で、六やおんに着いて赤梅壇の下に休んだが、旅の疲れに病を發した夫人は、二十七歳を一期に世を去つた。兄は骸を茶毘に附して骨を抱き、弟を連れて進んだ。それから七日路で父帝の行列に會つた。初め官人等の打擲に逢つたが、名乗り合つて父子再會の悦びに浸つた。【五段】新帝は、六やおんに夫人を弔ふや、發心して王子等と共に剃髮し、菩提山しやうく寺に入り、せいさいいわう佛の弟子となり、法名を法藏比丘と稱した。二人の若は、さうり、そくりと名乗る。家來一同も皆佛門に入つた。父子は六やおんで禪定に入り、比丘は四十八願を誓つた。この願によつて、夫人の廟から生蓮花が現はれ、暫し昔んで再び開いたかと思ふと、中から夫人が薬師如來と現じ、東方淨瑠璃界へ飛び去つた。業によつて比丘の身が衰弱の極まる時、虚空に南無阿彌陀佛の名號が現はれた。比丘が更に阿彌陀を念ずれば必ず罪障を救ふべしと誓ふと、名號は光を放つた。長さいようかう十月十五日の曉、一天の星下りて禪定の床を照らし、明星が來て成佛を知らせる。比丘の身體は阿彌陀佛と現じた。さうり、そくりも黄金

の肌を示し、觀音・勢至と現じた。修行中の家臣等も諸々の佛體を現じた。三佛は西方極樂世界の主となつた。

【解説】阿彌陀の利益を取扱つた作としては、早く「阿彌陀胸割」(別項)もあるが、本曲はこれに直接の交渉は持たぬやうである。「阿彌陀胸割」よりも、寧ろ法談としては直接的である。直に無量壽經に據つたものではあるまいが、少くも同經を翻案した程度の法語に據つたのであらう。悲華經に見える轉輪王が作佛する時、第一太子の不肖は觀音、第二太子の尼摩は勢至と現じ、その他の太子も發願したと説く筋は直に本曲に入つた。又無量壽經に説く、國王が國を捨てて王位を捨てて沙門となり、四十八願を立てた時、天華降つて正覺を成じたところ、法語との交渉に於ては、「阿彌陀胸割」等よりも遙かに本格的な地位にある。元來説經淨瑠璃として綴られたものと想像されるが、或は相當古い時代の作に屬するかも知れない。但し五段目の蓮花の開閉とか、その中から薬師如來が現はれたり、三尊が示現したりするなどは、機巧の應用による舞臺面に違ひないから、この點からは一概に古い時代の作と認むるのも困難であらうか。初め太子が儂い見ぬ戀に憧れる件や、恐しいゑい罪の次第や、幼兒が猛獸に保護される部分等は、かかる種類の淨瑠璃に共通な傳奇的な興を誘ふのであるが、これ等は「ごすゐでん」(又は「熊野之御本地」)にも共通した脚色である。あしゆく夫人の死や太子の發心の解釋には、幾分の無理があるが、これは阿彌陀因位談に夫婦愛親子愛を以て劇的脚色を遂げようとする

つた爲めである。【守隨】

豊藏坊信海(ほうざうぼうしんかい) 狂歌師【本名】孝雄。字は子寛【別號】玉雲軒・玉虛・魯華堂・牛庵【生歿】寛永十二年生れ、元祿元年(二三四八)九月十三日歿す。享年五十四【墓所】山城男山豊藏坊【閱歴】信海は山城男山八幡の社寺豊藏坊の住持である。瀧本坊昭乘(松花堂)に就いて筆道及び狂歌を學び、小堀遠州を師として插花・點茶を學び、又松永貞徳に俳諧の教を受けたが、就中狂歌は得意とする所である。



海 信 坊 藏 豊

人頗る多く、後に浪花狂歌界の宗匠と仰がれた油煙齋貞柳(別項)の如きもその高弟である。その頃勝尾寺に義空といふ僧があつて狂歌の名人と云はれてゐたが、或る人信海に向つて「貴僧はとて、義空の腕前には及ぶまい」と詰つた時、「我歌になどてあなたが勝尾寺を嘆きぎくうさせて見せまじよ」と詠んだと云ふ。その抱負察すべきである。家集に「狂歌鳩杖集」一冊があり、歿後門人永田貞柳(油煙齋)が選んだのである。【野崎】

茅窗漫録(ぼうそうまんろく) 隨筆 三卷【著者】茅原定【刊行】天保四年【成立】本書の自序によると、寫本三冊が夙く世に行はれてゐたが、それは偽書で著者の手録のものでなかつた。依つて憤慨に勝へなかつたが、文化十二年の頃、書肆が來て請ふに任せ、改めて編述

して文政十二年に刻が成つた由である。【解説】上卷に驛路録以下十四項、中卷に馬字并百舌・百千鳥以下十五項、下卷に四百餘州以下十四項、通篇合計四十三項を収む。博物學及び考古學的の考説が多く、又藤原眞高・获生徂徠の像傳及び石川丈山の傳等がある。徂徠の像には彩畫を用ひ、その他本草等の寫生圖を加へてゐる。著者の博洽は本書によつて知られる。文政十二年の自序がある。

の自由な態度をも見ることが出来る。文章も快適で、史論家としての著者の眼識を窺ふに餘りあるものである。【高須】

法談出家形氣(ほふだんしけい) 浮世草子【作者】八文字屋自笑【本名】世法談出家形氣、又「略縁起出家形氣」と題した書がある。【刊行】明和六年正月、八文字屋八左衛門

板【解説】この作品は八文字屋本の氣質物の

の子として生れ、大正二年一月十五日歿す。享年三十八【俳系】角田竹冷門。秋聲會派【閱歴】東京英語學校卒業後、帝國圖書館の司書となり、又吉川弘文館の編輯部に勤務した。明治三十六年一月秋聲會の機關雜誌「卯杖」が發刊されるや、これを主宰した。【編著】俳諧年表、星野素人共著。○俳諧年代記○俳諧逸品帖○新俳句帳等。【伊藤】

望東尼(ぼうとうに) 歌人【姓名】野村もと。

道もその歌を重んじてゐるが、女丈夫としての性格と歌才とが相俟つて、女性らしい細緻な表現の中に熱烈な精神が見られる。こゝの國の人の姿をうつ筒はやまこまましひいかにこもれる。ものふのやまこ心をより合せ末ひみすぢの大脚にせよ。の如き男性的な勤王精神の見られる歌と、月かほもささぬ雨夜のさびしきにをちの山べは衣

又が上向きにきつてゐた。三人を上から落した上に、土をかける「悪いの罪に行ふのである。併し検視に立つた老臣らごんは、この極刑から親子を救はうとしたが、右臣左臣は肯んぜずして遂に戦となつた。らごんは一時危険に瀕したが、終に右臣左臣を穴に投げ込んでしまつた。この時天地鳴動し、大磐石が落ちて自ら穴を填めた。この奇特を見た官人等は、悉くらごんに服して上洛する。三人は、えん山のたつせのほらの邊に庵を造つて、こゝに住んだ。「三段」七年を過ぎて、

り、比丘は四十八願を誓つた。この願によつて、夫人の廟から生蓮花が現はれ、暫し蕾んで再び開いたかと思ふと、中から夫人が薬師如來と現じ、東方淨瑠璃界へ飛び去つた。業によつて比丘の身が衰弱の極まる時、虚空に南無阿彌陀佛の名號が現はれた。比丘が更に阿彌陀を念ずれば必ず罪障を救ふべしと誓ふと、名號は光を放つた。長さいようかう十月十五日の曉、一天の星の下で禪定の床を照らし、明星が來て成佛を知らせる。比丘の身體は阿彌陀佛と現じた。そより、そくりも黄金

の子として生れ、大正二年一月十五日歿す。享年三十八【俳系】角田竹冷門。秋聲會派【閱歴】東京英語學校卒業後、帝國圖書館の司書となり、又吉川弘文館の編輯部に勤務した。明治三十六年一月秋聲會の機關雜誌「卯杖」が發刊されるや、これを主宰した。【編著】俳諧年表、星野素人と共著。○俳諧年代記○俳諧逸品帖○新俳句帳等。【伊藤】

つた時、「我歌になどてあなたが勝尾寺喉きくぎくうさせて見せましよう」と詠んだと云ふ。その抱負察すべきである。家集に「狂歌鳩杖集」一冊があり、歿後門人永田貞柳（油屋齋）が選んだのである。【野崎】

して文政十二年に刻が成つた由である。【解説】上巻に藤原時宗以下十四項、中巻に藤原井百舌・百千鳥以下十五項、下巻に四百餘州以下十四項、通篇合計四十三項を収む。博物學及び考古學的の考説が多く、又藤原原高・秋生・秋生・秋生等の傳説がある。但徠の像には彩畫を用ひ、その他本草等の寫生圖を加へてゐる。著者の博洽は本書によつて知られる。文政十二年の自序がある。

の自由な態度をも見ることが出来る。文章も快適で、史論家としての著者の眼識を窺ふに餘りあるものである。【高須】

【望東尼】ばうとう 歌人【姓名】野村もと。【生歿】文化三年九月六日福岡に生れ、慶應三年十一月十三日三田尻にて歿す。享年六十二【墓所】山口縣佐波郡桑野山下。【閱歴】浦野重右衛門勝常の三女として福岡舞鶴城の後の谷既後に生れた。十七歳の時同藩士の郡三兵衛利貫に嫁したが間もなく離縁となり、後、文政十二年二十四歳の時、同藩の土野村利三郎貞貫の後妻として嫁し、先妻の子三人を育ててよく家を治めた。天保三年に夫と共に大隈言道別項の門に入つて和歌及び書を學んだ。弘化二年に貞貫は家を長男に譲つて平尾村向陵の山莊に退隠し、安政六年夫の死後剃髮して、その名もと女を望東尼と改めた。而して向陵の山莊には、平野國臣・高杉晋作を潜ましめ、僧月照の薩摩へ下るを宿し、太宰府に幽せられた三條實美に謁する等國事に盡す所あり、終に慶應元年に捕はれて女海灘の一孤島姫島に押込められた。そこにあること二年、高杉晋作が同志を遣つて救ひ出さしめたが、晋作はやがて病死し、望東尼は山口・三田尻等にあつたが、三田尻で病んで死んだ。【著書】「上京日記」「姫島日記」「防州日記」夢かぞへ」等があり、又歌集を「向陵集」(別項)といふ。【歌風】望東尼は連月尼(別項)とならんで近世の勤王女歌人として注目される。師の大隈言

道もその歌を重んじてゐるが、女丈夫としての性格と歌才とが相俟つて、女性らしい細緻な表現の中に熱烈な精神が見られる。こゝの人の姿をうつ筒はやまこましましひいかにこもれるものふのやまこまをより合せ末ひみすぢの大御にせよ

【著者小傳】茅原定。一名玄定、字は叔同、通稱文助、虚齋・茅窗・長南の號がある。中國より京都に出て、儒・醫を兼ねて本草學に精通した人。天保十一年歿す。年六十七。「詩經名物集成」等の著がある。【和田】

【法談出家形氣】ほふだんしけい 浮世草子五卷【作者】八文字屋自笑【本名】「世談出家形氣」又「略縁起出家形氣」と題した書がある。【刊行】明和六年正月、八文字屋八左衛門板【解説】この作品は八文字屋本の氣質物の形や手法を踏襲して、當時の出家生活を取扱つたもので、そしてその末流に屬するものである。即ち寄力痴禪法以下十五篇の話は、相撲・金錢・繪畫・衆道等を道樂とする出家に就いて誇張して描いたものである。【吉田】

【望東尼】ばうとう 歌人【姓名】野村もと。【生歿】文化三年九月六日福岡に生れ、慶應三年十一月十三日三田尻にて歿す。享年六十二【墓所】山口縣佐波郡桑野山下。【閱歴】浦野重右衛門勝常の三女として福岡舞鶴城の後の谷既後に生れた。十七歳の時同藩士の郡三兵衛利貫に嫁したが間もなく離縁となり、後、文政十二年二十四歳の時、同藩の土野村利三郎貞貫の後妻として嫁し、先妻の子三人を育ててよく家を治めた。天保三年に夫と共に大隈言道別項の門に入つて和歌及び書を學んだ。弘化二年に貞貫は家を長男に譲つて平尾村向陵の山莊に退隠し、安政六年夫の死後剃髮して、その名もと女を望東尼と改めた。而して向陵の山莊には、平野國臣・高杉晋作を潜ましめ、僧月照の薩摩へ下るを宿し、太宰府に幽せられた三條實美に謁する等國事に盡す所あり、終に慶應元年に捕はれて女海灘の一孤島姫島に押込められた。そこにあること二年、高杉晋作が同志を遣つて救ひ出さしめたが、晋作はやがて病死し、望東尼は山口・三田尻等にあつたが、三田尻で病んで死んだ。【著書】「上京日記」「姫島日記」「防州日記」夢かぞへ」等があり、又歌集を「向陵集」(別項)といふ。【歌風】望東尼は連月尼(別項)とならんで近世の勤王女歌人として注目される。師の大隈言

の如き男性的な勤王精神の見られる歌と、月かほもささぬ雨夜のさびしきにをちの山べは衣うつなり

【著者小傳】茅原定。一名玄定、字は叔同、通稱文助、虚齋・茅窗・長南の號がある。中國より京都に出て、儒・醫を兼ねて本草學に精通した人。天保十一年歿す。年六十七。「詩經名物集成」等の著がある。【和田】

【報知派】ちほう 【解説】森田思軒を中心として、報知新聞に據つた原抱一庵・村上浪六・遅塚麗水・村井莚齋等(以上各別項)を稱する。最初、報知新聞の文藝欄は栗本勳雲・矢野龍溪(各別項)等に依つて開拓せられ、勳雲の「五月雨草紙」(出鱈目草紙)は、朝野新聞に於ける成島柳北(別項)の隨筆と共に並び稱せられた。龍溪の「浮城物語」(別項)なども大に世の注目を惹いたのである。龍溪門下の森田思軒(別項)は、嘗て龍溪に伴はれて歐洲に漫遊し、歸來、報知新聞紙上及びその附録「報知叢話」などに據つて文壇の一方に雄視し、その門下の四天王と稱せられた抱一庵・浪六・麗水・莚齋等、何れも新進氣鋭の勢を以て得意の作品を發表した。これが報知派の名稱を生じた由來で、浪六の出世作「三日月」(別項)などは「報知叢話」の中に加へられて、俄かに文壇に一地步を占めた。【高須】

【和唐珍解】わとうちんげ 洒落本一冊【作者】唐來三和【名稱】和唐珍解は唐音で訓ませたのである。和唐珍解は和銅開闢のもぢりで、日支語珍解釋の義。和銅開闢は和銅開闢の寶字を略字で書いてあるから珍と讀み誤り、更に珍開と顛倒したのだといふ。和銅開闢は元明帝和銅元年諸國で鑄造した銅錢及び銀錢。【刊行】天明五年【諸本】徳川文藝類聚第五。洒落本代表作集(近代日本文學大系)所收【題材】珍らしい長崎丸山の遊廓を背景とし、唐音で對話を書き、左側に日本語の註解を施してある。當時長崎と言へば外國情調に満ち、一部の江戸人から憧憬の眼を以て見られた所である。それを題材にし、特に人名を李順天・吳三桂、通詞を和田藤内、遊女の名を梅檀としたのは、近松作「國姓爺合戦」(別項)中の人物

の如きにもそれが見られる。【參考】向陵集○野村望東尼とその周圍久保猪之吉(國語と國文學昭和四一〇)【佐佐木】

【刊行】明治四十一年十一月前編、同四十二年二月後編。【内容】前編は先づ信長・秀吉の出現するに至つたことを述べ、秀吉の出生より説き起し、山崎・賤ヶ嶽等の合戦を経て家康を屈服せしむるに至るまでの経緯を叙し、後編は秀吉が關白職に就いてからの行動を記してその晩年に及んであるが、中にも征韓の役の叙述が最も詳密である。補遺二篇あり、そのうち「石田三成論」に於ては大に三成のために辯じ、「淀君論」には、淀君が神史者流に傳へらるゝ如き缺點多き女性にあらざる所以を推斷してゐる。【批評】本書は公平な見地と、卓越した史眼とから、豊臣秀吉の一生及び周圍を考察し、在來の俗論を排して、努めて眞實の事相を闡明しようとしたもので、史實をも相當努力して集めたやうに見える。しかし冷静な史學者的考察でないため、時には無理と思はれるやうな、著者一流の獨斷の跡がないではないが、また其處に、民間歴史家として

【望東尼】ばうとう 歌人【姓名】野村もと。【生歿】文化三年九月六日福岡に生れ、慶應三年十一月十三日三田尻にて歿す。享年六十二【墓所】山口縣佐波郡桑野山下。【閱歴】浦野重右衛門勝常の三女として福岡舞鶴城の後の谷既後に生れた。十七歳の時同藩士の郡三兵衛利貫に嫁したが間もなく離縁となり、後、文政十二年二十四歳の時、同藩の土野村利三郎貞貫の後妻として嫁し、先妻の子三人を育ててよく家を治めた。天保三年に夫と共に大隈言道別項の門に入つて和歌及び書を學んだ。弘化二年に貞貫は家を長男に譲つて平尾村向陵の山莊に退隠し、安政六年夫の死後剃髮して、その名もと女を望東尼と改めた。而して向陵の山莊には、平野國臣・高杉晋作を潜ましめ、僧月照の薩摩へ下るを宿し、太宰府に幽せられた三條實美に謁する等國事に盡す所あり、終に慶應元年に捕はれて女海灘の一孤島姫島に押込められた。そこにあること二年、高杉晋作が同志を遣つて救ひ出さしめたが、晋作はやがて病死し、望東尼は山口・三田尻等にあつたが、三田尻で病んで死んだ。【著書】「上京日記」「姫島日記」「防州日記」夢かぞへ」等があり、又歌集を「向陵集」(別項)といふ。【歌風】望東尼は連月尼(別項)とならんで近世の勤王女歌人として注目される。師の大隈言

【和唐珍解】わとうちんげ 洒落本一冊【作者】唐來三和【名稱】和唐珍解は唐音で訓ませたのである。和唐珍解は和銅開闢のもぢりで、日支語珍解釋の義。和銅開闢は和銅開闢の寶字を略字で書いてあるから珍と讀み誤り、更に珍開と顛倒したのだといふ。和銅開闢は元明帝和銅元年諸國で鑄造した銅錢及び銀錢。【刊行】天明五年【諸本】徳川文藝類聚第五。洒落本代表作集(近代日本文學大系)所收【題材】珍らしい長崎丸山の遊廓を背景とし、唐音で對話を書き、左側に日本語の註解を施してある。當時長崎と言へば外國情調に満ち、一部の江戸人から憧憬の眼を以て見られた所である。それを題材にし、特に人名を李順天・吳三桂、通詞を和田藤内、遊女の名を梅檀としたのは、近松作「國姓爺合戦」(別項)中の人物

の如きにもそれが見られる。【參考】向陵集○野村望東尼とその周圍久保猪之吉(國語と國文學昭和四一〇)【佐佐木】

を借用したのである。又噂に上る人物に、安永頃朝鮮から薬賣りに来た弘慶子を探つた。安永以来江戸に流行した阿蘭陀の福輪糖と稱して賣つた菓子の名稱も用ひてゐる。

【梗概】長崎丸山の遊里をそゝり歩く明の李隋天、旅館の夕の徒然に通詞をつれて娼家に這入つた。通詞和田藤内密に若者に一分をやりながら言ひ合める。やがて遊女梅檀と新造が来る。朋輩女郎青柳が来る。藤内すゝめられて三味線で唐の唄を歌ふ。李隋天、唱得妙端的、是聲清韻美とほめる。折柄吳三桂が來



和唐珍解 完

る。馴染の青柳は唐音が少しわかり、呉も永年長崎にゐるので日本語がわかる。お互に自分の國語で語り合ふ。そこへ若者が御馳走を運んで来る。李、若者に花をやる。若者藤内に注意されて三拜する拍子に、袂から越中襷を落す。李、見つけて何だと尋ねる。藤内「日本頭巾」と答へる。李は紐を頤の下で結び「好這一頂新頭巾」とほめ、譲つて呉れとねだり三兩二分やる。所へ従者の崑崙奴が来る。命ぜられて輕業をやる。この男禿の持つてゐた鼠を奪ひ酒に浸して食つてしまふ。禿泣く。やがて崑崙奴嘔吐すると鼠の首玉と鈴を吐く。

皆々胸を悪くする。さて時も過ぎて皆部屋部屋に分れる。李は奥座敷で唄を歌つてゐる。藤内の許へは新造が來り、梅檀が折を見て忍んで來る由知らせる。間もなく梅檀が來る。李隋天は待ちかねて「娘子々々、梅檀婦人那裏去」と尋ねて來る。「藤哥々々」と藤内の座敷に這入らうとする。中では燈火を吹き消す。

【構想】單に筋だけで云へば、自分の馴染の遊女を大盡にすゝめ、自分は新造を買ひ、襷を見て忍び逢ふと云ふのであつて、吉原を背景とした洒落本には珍らしくない。併し丸山遊廓で通詞が日本の事情に通ぜぬ支那人相手に仕組んだのが變つてゐるのである。作者唐來三和(別項)の實傳が詳細に知られてゐないから、輕々しく斷じ得ないが、本書は純然たる寫實ではないやうである。即ち作者自身長崎に在留したことも、丸山に出入したこともないらしい。少しも丸山の地方的特色は描かれてゐない。遊女・新造・禿など皆吉原のそれである。支那人の食物に鶏の血、羊の油など書いてあるのも空想から來たものらしい。

【名】法然 浄土宗開祖 【俗姓】漆間氏 【諡號】光照大士・圓光大師・東漸大師・慧成大師・弘覺大師・慈教大師・明照大師 【生歿】長承二年四月七日美作國久米南條稻岡莊に生れ建曆二年(一八七)正月二十五日京都に歿す。享年八十。【墓所】東山大谷(關原)父は久米の押領使漆間時國、母は秦氏。保延七年、時國は稻岡莊の預所源定明に殺害された。法然

經て、行く、男女を接化し、讃岐の鹽飽より子松莊に到り、生福寺と云ふに逗留した。同年十二月八日、最勝四天王院の供養により大赦があり、殊に法然は畿内に入つて居住することの恩免があつたが、京都に往還することは制止せられた。即ち攝津押部に到つて逗留し、後、勝尾寺に寄寓し、同寺にて一切經供養を行つた。建曆元年十一月十七日、京都に入

時に九歳であつたが、その遺言に依つて佛門に投じ、同國の菩提寺觀覺の弟子となる。觀覺は母の弟で、延曆寺の衆徒となり、教學に通達してゐた。後、觀覺の意を承けて比叡山に登り、西塔北谷持法房源光の下に歸した。久安三年十一月、十五歳にして登壇受戒し、功德院皇圓に師事して天台の教學を研鑽し、同八年十八歳で、黒谷の慈眼房寂空の禪房を訪うて出離の要道を求め、尋いで保元元年、二十四歳にして嵯峨の清涼寺に參籠して祈願し、南都及び京都の地を歴回して藏俊・實範・寛雅・慶雅等の諸學僧を歴訊した。後、黒谷に還り、僧都源信の「往生要集」(別項)等を繙讀し、その後唐の善導の觀無量壽經の註疏「教善義」を繙讀し、「一心專念彌陀名號」行住坐臥

水等に遷りて幽棲し、一向專修念佛を弘通して貴賤道俗を接化した。文治二年權僧正顯眞出離の要道を問ひ、大原勝林院に諸宗の學僧を會し、法然を請じて共に法義を談論し、後發願して、大原勝林院等に不斷念佛を行つた。その後法然は上西門院統子、宜秋門院任子の請に依つて説戒し、後白河法皇の勅請に依つて説戒し、僧都源信の「往生要集」を進講して御感を蒙つた。また關白九條兼實の懇請に依つて説戒した。兼實は深く法然に歸依し、建久の頃數々第に請じて説戒を聽聞した。左大臣藤原經宗等公卿の歸依する者多く、一門の下には、法蓮房信空・善惠房證空・勢觀房源智・聖光房辨長等皆大に開えた。建久九年、源空兼實の請に依つて「選擇本願念佛集」二卷を撰

不問時節久近、念々不捨者、是名正定之業、願彼佛願故」の文に至つて大に感發し、安元元年四十三歳の時、一向專修念佛の門に歸して一宗を開く。寂空等その説を傾聽するに至る。法然の德譽漸く高く、高倉天皇の勅請を拜して授戒し奉る。東大寺大佛再興の勸進上人に請ぜられたけれども、固く辭して後乘房重源を奨めた。後、西山の廣谷、東山の吉

のミ云ふ)○淨土宗初學鈔一卷(漢語釋經一所收)○三部經釋一卷(和語釋經一所收)○無量壽經釋一卷○觀無量壽經釋一卷○阿彌陀經釋一卷(以上三部漢語釋經一所收。文治六年二月一日東大寺にて講ずるものミ云ふ)○往生要集大綱一卷○往生要集略料簡一卷○往生要集詮要(以上三部漢語釋經一所收)○類聚淨土五祖傳一卷(漢語釋經一所收)○念佛往生義一卷○念佛大意一卷○三心義一卷○元久法語(一)に登山狀ミ云ふ。以上



法然 (藏寺山廬)

す。初め安樂房蓮西筆受し、後、眞觀房感西これに替り、善惠房證空勘文の任に當つた。一部十六章一向專修念佛の教義を開説したものである。かくの如くにして貴賤道俗、法然の接化を受ける者甚だ多く、一向專修念佛の教義は一世を風靡するに至つた。然るに南都北領の學僧等これを排撃し、法相宗の解脱房貞慶、華嚴宗の明惠房高辨等は、頻りに「選擇

本願念佛集」を非難した。當時、法然の門人と稱して諸宗を誹謗し、風儀を壞亂する者があつたので、元久元年十一月七日に法然は門人等を戒飭し、延曆寺に送つたのであるが、翌二年十月、興福寺の僧綱等は法然の首唱するところを非難して過失九個條を擧げ、朝廷に訴へたのである。この訴狀は、解脱房貞慶の執筆したものと言はれてゐる。建永元年二月

經て、行く、男女を接化し、讃岐の鹽飽より子松莊に到り、生福寺と云ふに逗留した。同年十二月八日、最勝四天王院の供養により大赦があり、殊に法然は畿内に入つて居住することの恩免があつたが、京都に往還することは制止せられた。即ち攝津押部に到つて逗留し、後、勝尾寺に寄寓し、同寺にて一切經供養を行つた。建曆元年十一月十七日、京都に入

のミ云ふ)○淨土宗初學鈔一卷(漢語釋經一所收)○三部經釋一卷(和語釋經一所收)○無量壽經釋一卷○觀無量壽經釋一卷○阿彌陀經釋一卷(以上三部漢語釋經一所收。文治六年二月一日東大寺にて講ずるものミ云ふ)○往生要集大綱一卷○往生要集略料簡一卷○往生要集詮要(以上三部漢語釋經一所收)○類聚淨土五祖傳一卷(漢語釋經一所收)○念佛往生義一卷○念佛大意一卷○三心義一卷○元久法語(一)に登山狀ミ云ふ。以上

比叡山に登つて大衆の間に交はり、専ら學問修行し、智慧第一の法然房と呼ばれたと云ふ。しかし法然は、當時天台眞言等の教學の研究に依つて未だ満足せられなかつたのである。適々善導の觀無量壽經の疏を繙讀して、翻然專修念佛の一行に依り、一宗を開立するに至つたと云ふことは、一面に法然の經歷・境遇・時代等を考察して解釋せらるべきことであらう。平安時代を通じて、淨土教の信仰は盛ん

年長崎にゐるので日本語がわかる。お互に自分の國語で語り合ふ。そこへ若者が御馳走を運んで来る。李、若者に花をやる。若者藤内に注意されて三拜する拍子に、袂から越中陣を落す。李、見つけて何だと尋ねる。藤内「日本頭巾」と答へる。李は紐を頭の下で結び「好這一頂新頭巾」とほめ、譲つて呉れとねだり三兩二分やる。所へ從者の崑崙奴が来る。命ぜられて輕業をやる。この男禿の持つてゐた鼠を奪ひ酒に浸して食つてしまふ。禿泣く。やがて崑崙奴嘔吐すると鼠の首玉と鈴を吐く。

羊の油など書いてあるのも空想から來たものらしい。 【山崎】

法然 ほん 淨土宗開祖 【俗姓】 漆間氏 【名】 法然房、諱は源空、幼名勢至丸と云ふ。 【諡號】 光照大士・圓光大師・東漸大師・慧成大師・弘覺大師・慈教大師・明照大師 【生歿】 長承二年四月七日美作國久米南條稻岡莊に生れ建曆二年（一八七）正月二十五日京都に寂す。享年八十。 【墓所】 東山大谷（關西）父は久米の押領使漆間時國、母は秦氏。保延七年、時國は稻岡莊の預所源空に殺害された。法然

本願念佛集を非難した。當時、法然の門人と稱して諸宗を誹謗し、風儀を壞亂する者があつたので、元久元年十一月七日に法然は門人等を戒飭し、起請七箇條を草して弟子等二百餘人連署し、延曆寺に送つたのであるが、翌二年十月、興福寺の僧綱等は法然の首唱するところを非難して過失九箇條を挙げ、朝廷に訴へたのである。この訴狀は、解脫房貞慶の執筆したものと言はれてゐる。建永元年二月に興福寺の僧綱等朝廷に訴へて法然等を處罰せんとし、衆徒は京都に上つて宣旨を請ひ、朝廷では重臣等數々相議した。當時藏人頭左中辨藤原長兼は解脫房貞慶等に應對して大に斡旋したのである。然るに興福寺の僧綱等は固く執つて服せず。遂に同十四日に、法然の弟子法本房行空・安樂房遵西を配流に處することとなつた。しかし衆徒はなほ服せず、同年十二月に、遵西・住蓮等が東山鹿ヶ谷に別時念佛を行ひ、六時禮讚を唱へ、京都の貴賤男女の來歸する者多く、益々大に人心を動搖した。こゝに於て、遂に承元元年二月十八日に一向専修念佛を停止し、法然は土佐に配流せらるゝこととなつた。當時、遵西・住蓮等は斬罪に處せられ、行空は佐渡に、善信（親鸞）は越後に配流せられたのである。法然は當時七十五歳、度牒を奪はれて俗名を藤井元彦と云ひ、三月十六日に京都を發し、鳥羽より川舟にて攝津の經島に着し、播磨の高砂・室泊を

經て、行く／＼男女を接化し、讃岐の鹽屋より子松莊に到り、生福寺と云ふに逗留した。同年十二月八日、最勝四天王院の供養により大赦があり、殊に法然は畿内に入つて居住することの恩免があつたが、京都に往還することは制止せられた。即ち攝津押部に到つて逗留し、後、勝尾寺に寄寓し、同寺にて一切經供養を行つた。建曆元年十一月十七日、京都に入ること恩免せられ、同月二十日、京都に歸つて大谷の禪房に迎へられた。翌二年正月老病あり、同月二十五日に寂した。法臘六十六、壽

選擇本願念佛集
而無何亦念佛
道行禪師立聖道淨土二門前後聖道念佛淨土之文
安樂集上之問口一切衆生皆有佛性速切以本應
值々人佛何目至今仍自輪迴生死不出大宅
依大衆教良由不得二種勝法以排生死是以
團去盡其煩惱等語二一謂聖道念佛淨土之具

（藏寺山慶）集撰選筆自然法

八十である。諸弟子が遺骸を大谷に葬つた。然るに安貞元年三月二十二日、延曆寺衆徒が蜂起して、大谷の法然の墓を破却したので、一門の遺弟等は竊に棺柩を掘り出し、西山栗生野に遷して茶毘に附した。遺弟正信房湛空の發意にて、塔を小倉山に興し、貞永二年正月二十五日、遺骨を安んじて供養した。

【著作】 選擇本願念佛集二卷○淨土宗略要一卷○了惠の「漢語燈錄」所收。元久元年二月十七日伊豆山源延の請に依つて集むるものと云ふ○往生大要抄一卷（了惠の「和語燈錄」所收）○淨土宗略抄一卷（和語燈錄」所收。二位禪尼の請に依つて撰したる

不問時節久近、念々不捨者、是名正定之業、願彼佛願故」の文に至つて大に感發し、安元元年四十三歳の時、一向専修念佛の門に歸して一宗を開く。寂空等その説を傾聴するに至る。法然の德譽漸く高く、高倉天皇の勅請を拜して授戒し奉る。東大寺大佛再興の勸進上人に請ぜられたけれども、固く辭して俊乘房重源を奨めた。後、西山の廣谷、東山の吉

す。初め安樂房遵西筆受し、後、眞觀房感西これに替り、善惠房證空斯の任に當つた。一部十六章一向専修念佛の教義を開説したものである。かくの如くにして貴賤道俗、法然の接化を受ける者甚だ多く、一向専修念佛の教義は一世を風靡するに至つた。然るに南都北領の學僧等これを排撃し、法相宗の解脫房貞慶、華嚴宗の明惠房高辨等は、頻りに選擇

の云ふ○淨土宗初學鈔一卷（漢語燈錄」所收）○三部經釋一卷（和語燈錄」所收）○無量壽經釋一卷○觀無量壽經釋一卷○阿彌陀經釋一卷（以上三部「漢語燈錄」所收。文治六年二月一日東大寺にて講ずるものと云ふ）○往生要集大綱一卷○往生要集略料簡一卷○往生要集註要（以上三部「漢語燈錄」所收）○類聚淨土五祖傳一卷（漢語燈錄」所收）○念佛往生義一卷○念佛大意一卷○三心義一卷○元久法語（一）登山狀と云ふ。以上三部「和語燈錄」所收）○逆修說法一卷（漢語燈錄」所收）○要義問答一卷○念佛往生要義抄一卷○十二箇問答一卷○十二問答一卷○東大寺問答一卷○百四十五條問答一卷（以上六部「和語燈錄」所收）○諸問答一卷（進行集淨土隨聞記」に見ゆ）○三昧發得記一卷○七箇條起請文一卷○一枚起請文一紙○殘後遺誡文一紙○消息（和語燈錄」漢語燈錄」西方指南鈔」法然上人繪傳」等所收）

以上は、皆法然が自ら筆を執つて著したものではなく、率ね諸弟子の記録したものと言はれる。法然が歿して五十餘年の後、一門の望西樓了惠が、著作消息等を編輯して「和語燈錄」漢語燈錄」の二部となした。しかし當時法然の一門は分派をなして相容れなかつた。隨つて法然の著作消息などと云ふものを相傳へ、眞偽疑はしいものが行はれて遂に今日に至つたものがある。こゝにはただ一門の間に聞えたものだけを掲げたのである。なほ法然の和歌が「玉葉集」「新千載集」「續千載集」「新後拾遺集」「續後遺集」「夫木集」「法然上人行狀書圖」等に見える。

【人物】 法然は幼にして父の横死に遭つて人生の悲哀を痛感し、佛教の門に歸入したのであるが、當時時勢の衰亂、人心の動搖に依つて益々大に心情を刺戟せられたのであらう。

比叡山に登つて大衆の間に交はり、専ら學問修行し、智慧第一の法然房と呼ばれたと云ふ。しかし法然は、當時天台眞言等の教學の研究に依つて未だ満足せられなかつたのである。適々善導の觀無量壽經の疏を繙讀して、翻然専修念佛の一行に依り、一宗を開立するに至つたと云ふことは、一面に法然の經歷・境遇・時代等を考察して解釋せらるべきことであらう。平安時代を通じて、淨土教の信仰は盛んであつたが、法然に至つて大に新勢力を加へ、一世を風靡した狀がある。それは法然の學問德行に依るところが極めて多いのである。法然の學問は深大であつたであらう。しかしその態度は極めて謙虛であり、寛厚であつた。寧ろ學問の研究を捨て、信仰の愉悅に耽つたものと見らるゝのである。こゝに法然の眞面目があること云ふべきであらう。されば一たびその接化を受ける者は、皆深く心服したもので、自ら弟子門人と云ふ者が極めて多かつたのである。しかし法然の謙虛寛厚は、適々累をなし、それ等の者が非行をなしたので世間から指彈を受くるに至り、遂に法然は罪科に問はれて遠く配流せらるゝに至つたものであらう。しかし法然は、この累禍を以て、却つて邊陲の群生を接化する機會を得たものと思ひ、配流の途上、行く／＼諸人を接化したのである。かくの如くにして法然の眞面目が益々大に發揚せられてゐる。要するに法然は圓滿なる宗教人であり、平靜なる信仰人であると云ふべきである。それで今京都廬山寺に傳はれる國寶法然の畫像の相貌は、法然の全精神をよく表現してゐるものであらう。

【參考】 玉葉○明月記○三長記○愚管抄○百鍊鈔○吾妻鏡○皇帝記抄○砂石集○古今著

開集○源平盛衰記○平家物語○仁和寺日次記○興福寺略年代記○二尊院文書○知恩院文書○智恩寺文書○黒谷上人語燈録及び同拾遺(和語燈録・漢語燈録)○法然上人行狀書圖(四十八卷傳)○本朝祖師傳記繪詞(四卷傳)○法然上人傳記(九卷傳)○法然上人傳(西山十卷傳)○黒谷源空上人傳記(十六門記)○拾遺古德傳繪詞○正源明義鈔○法然上人秘傳○法然上人秘傳遠流記○源空上人略要年譜○圓光大師行狀翼賛○元亨釋書○淨土眞宗付法傳○淨土三國佛祖傳集○淨土八祖列全傳記纂○本朝高僧傳○鎮流祖傳○淨土傳燈録○淨土傳統總系譜○諸嗣宗脈記○勝尾寺緣起○二尊院緣起○山城名勝志○山州名跡志○作陽誌○東作誌○法然上人全集 望月信亨編○三國佛法傳通緣起(東大寺藏)○八宗綱要同上○淨土源流章同上○摧邪輪 梶山明惠高辨撰○莊嚴記同上○念佛無間地獄鈔○守護國家論○念佛者追放宣狀事○立正安國論○淨土隨聞記源智撰○選擇密要決 同上○淨土宗要集 辨撰○徹選擇本願念佛集 同上○念佛名義集 同上○念佛三心要集 同上○顯淨土眞實教行證文類親撰○嘆異抄(親鸞の弟子録)○口傳抄(親鸞)○選擇傳弘傳決疑抄(良忠撰)○選擇疑問答 同上○聖光上人傳○本願寺聖人親鸞傳○隆寛律師略傳○西山上人緣起 (鷲尾)

法然上人繪傳 繪畫【解説】淨土宗の開祖法然上人一期の行狀を中心とし、その弟子達の傳記等にも及んでゐる。主として法然上人の德行欽仰のために製作されたものであるが、同時にまた淨土信仰宣揚の好方便となつたのである。この繪傳の種類は甚だ多いが、まづ繪卷物としては以下列記する作品の如きがその主なるものである。(一)傳法繪四卷。法然繪傳中最も古く、鎌倉中葉嘉禎三年の製作である。詞は耽空書畫圖は觀空の作であるが、原本は既に亡び、今は筑後の善導寺に足利末葉頃の轉寫本が存してゐる。(二)勅修御傳四十八卷。法然繪傳中、卷數に於ても由緒に於ても最も顯著なものである。その卷數は、蓋し阿彌陀の四十八願に因んだものである。これには知恩院本と當麻



(織院恩知) 傳繪人上然法

佐吉光・土佐邦隆・姉小路長隆・姉小路長章・飛騨守惟久・土佐行光・土佐光顯・法性寺爲信の八家の合作であるといふ。これ等書者畫人の經歷等に徴するに、各人の間には年代の隔りの甚しいものもあり、又果して前後幾年を費して完成したものか、それ等に就いてはなほ研究を要すべきものである。繪は總じて精緻細密な描寫で、鎌倉末葉に大成された土佐派の典麗な様式を見ることが出来る。傳ふるところによれば、この繪傳はやがて官庫に納められたが、後又伏見院の思召で、この繪傳を正本として別にその副本を作らしめられた。その書詞はこれまた伏見・後伏見・後二條の三帝や世尊寺行俊の寄合書、繪は通卷土佐吉光の一筆であるといふ。而してこの副本は當時舜昌に下賜せられたが、その後舜昌が叡山功德院より知恩院の別當に補せらるゝや、更に官庫の正本をも拜領するに至つた。然るにその後應安年間、知恩院の第十二世誓阿上人が大和當麻の奥に往生院を創建して隱居の際、副本をば往生院に持ち來つた。これが現存の往生院本であるといふ。而してこれ等正副兩本共勅命による製作の故に、いづれも勅修御傳と呼ばれてゐる。しかし往生院本は詞や繪の圖樣等、知恩院本に近似しつつも筆致は知恩院本に及ばず、その製作年代も知恩院本よりはほど下るものと思はれ、従つて如上の傳來の如きも、なほ検討を要すべきであらう。(三)増上寺藏本二卷。(四)團圓寺藏本一卷。こゝ兩者はいづれも殘缺本である。増上寺本は土佐吉光畫、詞後二條院染筆、梶井空性法親王書き繼ぎと鑑せられてゐるもので、法然繪傳として一個別種のものであり、團家本は普通琳阿本と呼ばれる、九卷の法然傳の第七

法然上人法語 法語【解説】「法語」を見よ。放屁論 滑稽本 前編一册・後編一册【作者】風來山人(名稱)前編には、「昔語花咲男」の角書がある。「成立」前編は安永三年、後編は安永六年。「諸本」風來六々部集四册(寛政十二年)・風來山人傑作集(帝國文庫)・滑稽文學全集第十二所収。「題材」當時江戸の歡樂境たる兩國の見世物に放屁男とて曲屁をなすものがあつた。「増訂武江年表」の安永三年

もならない。江戸神田邊に貧家錢内といふ瘦浪人があつた。彼は讃州志度の浦の者であるが金に縁なく、且つ出る杭は打たれる譬へで、世に用ひられない。而も彼は自由に暮したい性質で、國恩を報ずるの一端として、人の體より火を出し、病を治する、多れきてるせゑりていといふ器を作り出した。或る日石倉新五左衛門といふ人が來り、これを見て感心し、いかなる理で火が出るかと尋ねた。そこで彼

つて再び舞ふ。起原・傳來共に未詳。恐らく朝鮮の舞であらう。(田邊)寶物集 話本 説話集 一卷【著者】平康頼【成立】平清盛に反逆を企て遠島に處せられた平康頼が、罪を許されて歸洛の後書いた事(平家物語)等に見られる。その年代は異説あるも、まづ治承二三年頃である。「諸本」最も注目すべきは、宮内省圖書寮

行 目錄はない。(一)は刊年不明、繪入平假名で毎頁十五行、目錄はない。(三)七卷本は元祿六年版で、片假名を用ひ目錄がある。以上寫本・刊本合せて十種の異本の内容には、可なり相違がある。なほ活版本には大日本佛教全書に七卷本と卷子本が收められ、日本名著

行 目錄はない。(一)は刊年不明、繪入平假名で毎頁十五行、目錄はない。(三)七卷本は元祿六年版で、片假名を用ひ目錄がある。以上寫本・刊本合せて十種の異本の内容には、可なり相違がある。なほ活版本には大日本佛教全書に七卷本と卷子本が收められ、日本名著

行 目錄はない。(一)は刊年不明、繪入平假名で毎頁十五行、目錄はない。(三)七卷本は元祿六年版で、片假名を用ひ目錄がある。以上寫本・刊本合せて十種の異本の内容には、可なり相違がある。なほ活版本には大日本佛教全書に七卷本と卷子本が收められ、日本名著

子鏡)○口傳抄寫如撰○選擇傳弘傳決疑抄良
忠撰○選擇疑問答同上○聖光上人傳○本願
寺聖人親覽傳繪○隆寬律師略傳○西山上人
緣起 (驚尾)
法然上人繪傳 (はにんしや 繪畫)【解
說】淨土宗の開祖法然上人一期の行狀を中心
とし、その弟子達の傳記等にも及んでゐる。
主として法然上人の德行欽仰のために製作さ
れたものであるが、同時にまた淨土信仰宣揚
の好方便となつたのである。この繪傳の種
類は甚だ多いが、まづ繪卷物としては以下列

往生院本と兩種がある。知恩院本は正安徳治
の交、同院第九世舜昌法印が勅を奉じて撰述
したもので、從來世に行はれた法然上人傳を
總括統一して詳細を極めてゐる。この繪傳に
は別に目錄一卷あり、徳川初世道徳大僧正の
書したものであるが、これによると、この四十
八卷傳の詞書は伏見・後伏見・後二條の三帝を
初め、徳園法親王・三條實量・世尊寺行尹・世尊
寺定成・姉小路濟氏の八筆に成り、その繪は土

とて再び舞ふ。起原・傳來共に未詳。恐らく
朝鮮の舞であらう。 (田邊)
寶物集 (たからづみ) 説話集 一卷 (著者) 平康
頼 (成立) 平清盛に反感を企て遠島に處せら
れた平康頼が、罪を許されて歸洛の後書いた
事が「平家物語」等に見られる。その年代は異
說あるも、まづ治承二三年
頃である。【諸本】最も注
目すべきは、宮内省圖書寮
の首尾の缺けた卷子本一巻
で、康頼自筆と傳へられる
ものである。次に京都本能
寺所藏本がある。二十七葉
平假名で、目錄はない。書
寫は鎌倉時代のものか。こ
の本は七卷本の第二卷の愛
別離苦の條から、卷三の十
二門開示の條までの内容を
少し加減したもので、これ
によると、當時すでに七卷
本なども出来てゐたと思は
れる。松井簡治氏藏二卷本
は、寛永六年九月の書寫で
あるが、二卷本として注意
すべきものである。版本に
は二卷本・三卷本・七卷本が
ある。(一)二卷本は片假名
で、一頁十一行で目錄はな
い。刊年不明。(二)三卷本は五種類で、(一)
は寛永十六年版、平假名木活字で目錄なく、
一頁十二行である。(二)は同じく寛永頃の片
假名木活字で目錄なく、毎頁十一行である。
(三)は續群書類從雜部の片假名の目錄のない
もの。(4)は正保五年版、平假名で各頁十一

行 目錄はない。(5)は刊年不明、輸入平假
名で毎頁十五行、目錄はない。(三)七卷本は
元祿六年版で、片假名を用ひ目錄がある。以
上寫本・刊本合せて十種の異本の内容には、可
なり相違がある。なほ活版本には大日本佛敎
全書に七卷本と卷子本が收められ、日本名著
行 目錄はない。(5)は刊年不明、輸入平假
名で毎頁十五行、目錄はない。(三)七卷本は
元祿六年版で、片假名を用ひ目錄がある。以
上寫本・刊本合せて十種の異本の内容には、可
なり相違がある。なほ活版本には大日本佛敎
全書に七卷本と卷子本が收められ、日本名著

一目瞭然たらしむる繪傳の類も多く製作され
たのであつて、三重西邊寺の二幅、廣島光照寺
の三幅、東京増上寺の三幅、京都知恩院の七幅
等も各々固有の特色があり、その餘四十八卷
傳を四幅に仕立てたものも廣く世に行はれて
ゐる。なほ江戸時代に入つては勅修御傳を冊
子装にした刊本が盛んに行はれた。寛永二十
一年刊の十卷本、寛文六年刊の十卷本、元祿
十三年刊の二十四卷本等は、その主なるもので
あるが、明治以後は刊本宮内省版等更に多数に
互つてゐる。 (田中(一))

法然上人法語 (はにんしや 法語)【見よ。
放屁論 (はちんぼん 滑稽本 前編一册・後編一
册)【作者】風來山人(名稱)前編には、「昔語
花咲男」の角書がある。【成立】前編は安永三
年、後編は安永六年。【諸本】風來六々部集四
册 寛政十二年・風來山人傑作集(帝國文庫)・滑
稽文學全集第十二所収。【題材】當時江戸の
歡樂境たる兩國の見世物に放屁男とて曲屁を
なすものがあつた。「増訂武江年表」の安永三年
の條に、筠庭の補として、「四月頃兩國に放屁
男見世物に出づ。霧降咲男といふ。大評判。
平賀鳩溪放屁論と云ふ草子を作る。咲男は錦
畫にも出づ」とある。それを題材としたもの
である。後編は作者自身の抱負或は時に容れ
られなかつた不平論、並に自己の製作せる「エ
レキテルセエリテイ」に關する理論の説明上、
放屁男が本年も亦采女原にて三國福平と名乗
つて興行してゐることに論及したのである。

【解説】兩國橋の邊で興行してゐる放屁男の
人氣は非常なものであるから、見物した歸途
に、友人の宅に立ち寄りこの話をすると、居合
せた連中の一人が、かうした尾籠なことを感
心する先生の意見は非だといつた。自分は答
へて、何の用にも立たぬ屁を工夫して、人氣が
當時一流の俳優をすら凌ぐのは彼の偉い所だ
である。世間一般を見るに、師匠につき、口傳を
重んじ、先人の糟粕を嘗めてゐるのに、獨り
彼は自ら創造した所を以て立つてゐる。そこ
に彼の偉さを認めねばならぬと言つた(以上前
編)。近來の浪人の悲惨な生活はその極に達し
てゐる。併し日本の國も武士あつて治まつて
ゐるのに、世間は其の恩澤を謝する事を知ら
ない。武士も亦この金の世界には如何とも出
來ない。如何なる名人でも金がないとどうに

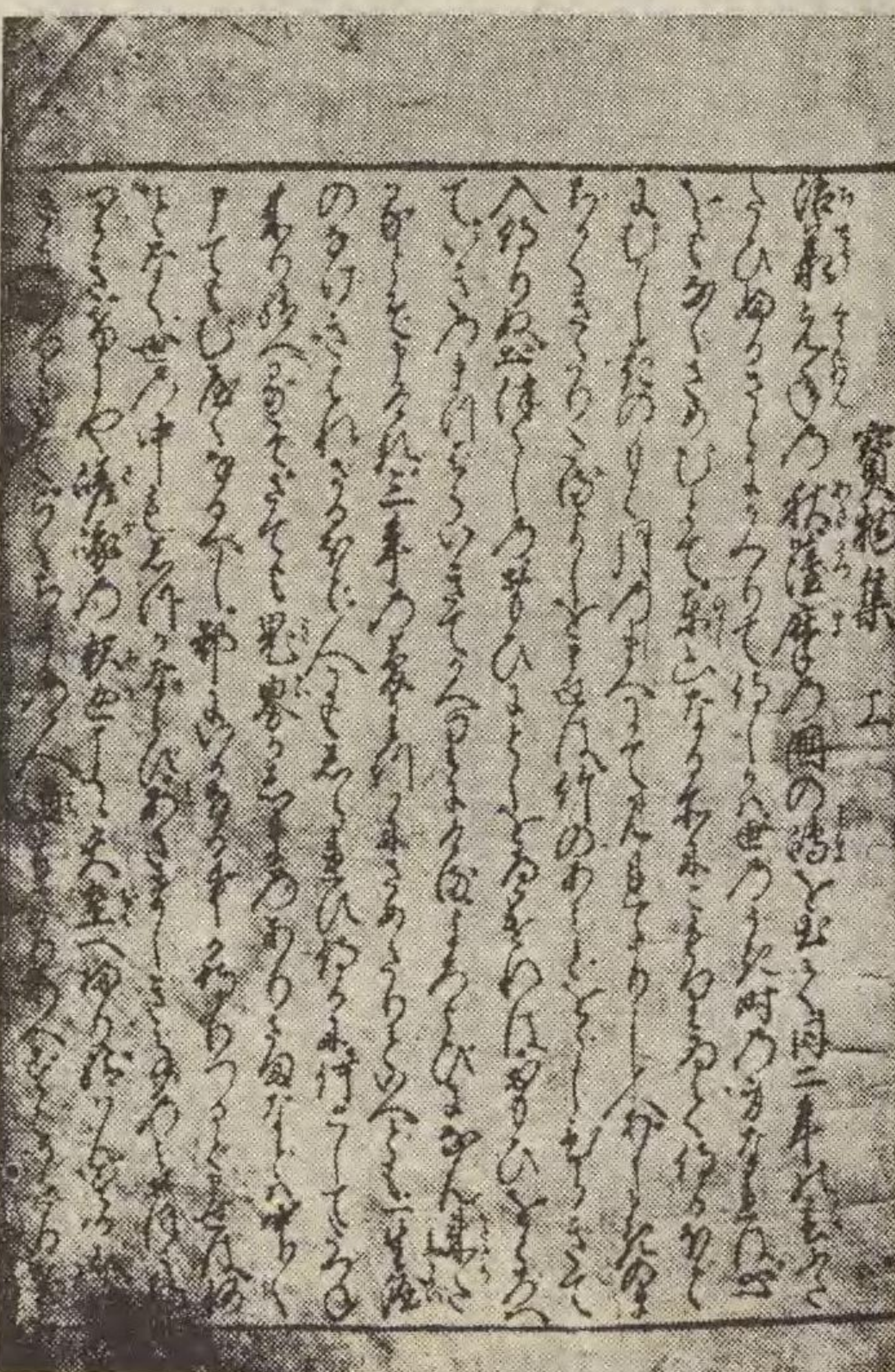
もならない。江戸神田邊に貧家鏡内といふ瘦
浪人があつた。彼は讃州志度の浦の者であるが
金に縁なく、且つ出る杭は打たれる譬へで、
世に用ひられない。而も彼は自由に暮したい
性質で、國恩を報ずるの一端として、人の體
より火を出し、病を治する、多れきてるせゑり
ていといふ器を作り出した。或る日石倉新五
左衛門といふ人が來り、これを見て感心し、
いかなる理で火が出るかと尋ねた。そこで彼
は「昔語花咲男放屁論」の小冊を出して説明し
た。併し新五左衛門は一向合點が行かなかつ
たらしく、放屁男が采女原で三國福平と名乗
つてゐるについての來歴を滔々と述べた。そ
こで錢内は、火は萬物造化の根元で、森羅萬
象これによつて生ずる。人間の體内にも火の
あるは當然である。屁の出るも火の出るも怪
しむに足らない。而もかうした機械を發明す
ると世間では山師だと誘ふ。見世物に綿羊な
どがあるが、綿羊としてその毛で羅紗をつくる。
世間の愚物は綿羊にも劣るものだと大氣焔を
あげたところ、新五左衛門はあきれて歸つて
行つた。要するに放屁男のことに託して世間
に對する不平を吐き、自家の不遇に關する憤
懣を述べたものである。 (小泉)

白濱 (しろはま) 雅樂舞曲【名稱】白濱の字義未
詳。大槻如電はこれ韓半島の地名ならんと言
つてゐる。「榮園樂」ともいふ。【性質】高麗
樂。新樂。中曲。高麗雙調曲に屬する。舞が
あり四人で舞ふ。舞者は常裝束で、拂子を持
つて舞ふ。番舞には「喜春樂」を用ひる。時と
して「萬秋樂」の答舞とする場合には、この曲
を準大曲とし、舞終つて後二人は退き、樂屋
に入つて後參掬を取つて來て舞臺の二人に渡
して退くと、舞臺に残つた二人は後參掬を持

て再び舞ふ。起原・傳來共に未詳。恐らく
朝鮮の舞であらう。 (田邊)
寶物集 (たからづみ) 説話集 一卷 (著者) 平康
頼 (成立) 平清盛に反感を企て遠島に處せら
れた平康頼が、罪を許されて歸洛の後書いた
事が「平家物語」等に見られる。その年代は異
說あるも、まづ治承二三年
頃である。【諸本】最も注
目すべきは、宮内省圖書寮
の首尾の缺けた卷子本一巻
で、康頼自筆と傳へられる
ものである。次に京都本能
寺所藏本がある。二十七葉
平假名で、目錄はない。書
寫は鎌倉時代のものか。こ
の本は七卷本の第二卷の愛
別離苦の條から、卷三の十
二門開示の條までの内容を
少し加減したもので、これ
によると、當時すでに七卷
本なども出来てゐたと思は
れる。松井簡治氏藏二卷本
は、寛永六年九月の書寫で
あるが、二卷本として注意
すべきものである。版本に
は二卷本・三卷本・七卷本が
ある。(一)二卷本は片假名
で、一頁十一行で目錄はな
い。刊年不明。(二)三卷本は五種類で、(一)
は寛永十六年版、平假名木活字で目錄なく、
一頁十二行である。(二)は同じく寛永頃の片
假名木活字で目錄なく、毎頁十一行である。
(三)は續群書類從雜部の片假名の目錄のない
もの。(4)は正保五年版、平假名で各頁十一



畫 挿 上 同



(藏 氏 堅 野 征) 集 物 寶

話文學に據つてゐる。

【内容】康頼が歸洛後、嵯峨の釋迦佛が歸國するとの世評が立ち、それを確めるため嵯峨に詣り、同詣の人達と通夜の話を始める。世の中の寶について、隱蓑や打出小槌、金玉等を論じ合ふが、結局佛法が無上の寶と定まる。その理由を尋ねる女人に、某僧が答へて、佛・法・僧の三寶を説き始め、六道輪廻因果轉生の法を説明し、道心を起して三寶に歸し、極樂往生の方法として、持戒積行、往生發願、罪障懺悔、臨終正念、善智識等の十二門を述べる。述べ終る頃に夜も明けるので、人々は散去する。この説法の裡に、三寶の靈異、六道輪廻、往生等の佛教關係の説話が列擧してある。營公の靈魂・小野小町・上陽人・楊貴妃・王昭君・堅誓獅子・金翅鳥・鹿園鹿王等の如く、説話は日本・支那・印度の三國に亘つてゐる。

【参考】鎌倉室町文學史藤岡作太郎○鎌倉時代文學新論野村八良○日本文學史潮輪木敏也○致證今昔物語集 芳賀矢一

褒貶連歌

【解説】和歌に褒貶の會を設けて互にその作の優劣を批評しあつた例に倣ひ、連歌にも同じ試みを行つたものである。心敬僧都の「さよめこと」(別項)によれば、當座にさまゝの褒貶があつて、勝負を定めること度々に及んだ由が見えてゐる。室町時代の初期には、この事の行はれたことが知られる。

寶滿長者

【作者】不詳【成立】室町期か【諸本】古板本は寛文五年板(中村五兵衛)、元祿十五年板。室町時代小説集所收。寫本は文詞に異同がある。【題材】佛教物。法談物。長者傳説(長者屋敷參照)に結び付けて「法華經」並に六字の名號

法文歌

【名稱】佛教の法文を主として歌つた歌謡であるからかく名づける。即ちその歌謡には經文を取入れ、就中「法華經」を詠んだものが最も多い。【出典】「梁塵秘抄」卷二に出づ。【解説】雜藝(別項)の一種であるが、和讃の直系を引くもので、その内容は著しく宗教的である。形式も七五・四四五四句の今様形式を嚴格に守つてゐる。他の雜藝に屬する歌謡の中には、世俗的に流れ

の功德を讃へ、父母の恩を説くが目的。諸曲にも「寶滿長者」の曲名があるが傳存しない。

【梗概】天竺摩伽陀國寶滿長者は、すいほうの靴、麝香の犬、せんざいの皮衣、せんくわの玉といふ四種の寶を持つてゐた。天聽に達して寶覽を望まれ、左大臣が遣はされると、長者は喜んで承諾し、且つ勅使に館内を巡覽させたが、寶塔の中の黄金の箱三個だけは許さず、四種の寶に添へて參内、帝の精進齋齋を願つて開くと、一には「法華經」の明文、二には六字の名號、三には父母の頭が入つてゐた。長者がその功德を説き佛を禮讃すると、帝は寶を返して千郡を與へ、左大臣に取立てられた。長者はなほ慈悲深く、堂宇を建てたとして長く榮えた。

法妙童子

【名稱】主人公の名を題號としてある。【成立】室町期【諸本】古板本は寛文六年板(三卷、松會開板、同八年板)二卷、足立三郎兵衛開板。正徳三年板(二卷、西村屋傳兵衛板)、他に鱗形屋板中本一册本、卷末に記載のない三卷本(近古小説解題には「萬治頃の刊本とおぼし」と推定してある)等。【題材】孝行談。人身御供説話。佛法物語(念佛禮讚)。内容は殆ど「さよめこと」(別項)と同一と言つてよく、童子と姫、念佛と法華、岩窟と深淵を取替へただけで、中心の事件として語られてゐる身替人身御供説話は殆ど同じく、諸曲の狂女物式盲母との再會、その眼の開く佛験も形の上の少異を除いて全く軌を一にしてゐる。兩書の何れかが一方の雛案であるべき事は疑ひを容れない。但しその先後は俄かに定め難く、本書の方が早いと見てよいやうに思はれるが、或は又「さよめこと」の古本が本書の粉本となつたのではないかと推測

したいやうな點もある。なほ本書の内容を成す説話の原據は印度の佛説であらうが、直接には「私聚百因緣集」の寶明童子(卷二)、善見童子及び專童子(卷三)並に堅陀羅國の孝子等の諸傳説が恐らく素材となつたかと思はれる。この點だけでは先づ本書が成り、そして「さよめ」に雛案されたと推定する方が自然のやうである。

【梗概】昔五天竺の内、波羅奈國に無道の暴君があり、この王殊に念佛を惡んで國中に嚴禁し、犯す者は殺すべき旨の命令が下つた。同國權臣利長者は五天竺に三人と數へられる有徳人であつたが、八歳になつた一人子の額に餌食といふ文字が現はれたのは、りやうあんのしゝたきかつよといふ窟の神事の生贖に選ばれた兆なので、その愕き歎きいふばかりなく、三七日窟に祈つて漸く身替の許を得、家入りうこう、諸國を廻つて年齢・容貌の相似た者を搜めてゐた。舍衛國に名ある武士で、主のため戦死した高六の妻子は、今は落魄して母は市中に食を乞ひ、童子の法妙は山に柴を拾ひ、辛うじて命を繋いでゐる折柄、偶々廻り来たりうこうに、母の留守を幸ひ今年八歳の法妙は百金に代へて身を賣つた。歸つて来た母は悲歎驚愕し、遂に眼を泣き潰して「母にかくして身を賣りし法妙童子やまします」と、竹杖をたよりに諸方を尋ね廻つては、里の子等に童子めくら」と嘲弄される見すばらしい乞食姿になり下つてしまつた。長者の許に買はれて行つた法妙は、當日彌宜・神主等形の如くの神事あつて愈々身替の生贖に供へられたが、思ひ餘つて唱へたその法文の聲に諸佛來迎し、八頭の大蛇は忽ち十六の角を折り身を纏すよと見る間に、十七八歳の男子となつて童子の

前に畏つた。如何なる罪業でか大蛇となつて人を服する事九百九十九人、今千人目に當つて君が念佛の功力に佛果を得る有難きよと涙を流し、君も早々故郷に歸り給へと告げ、菩薩に迎へられつつ光明を放つて西方淨土へ飛び去つた。不思議に命助かつた法妙を長者は嫡子とし、實子と兩人に家産を等分に譲る事になつたが、更にかの惡王の勅聞に達するに及んで、王は俄に改心して念佛を勧めるやうになつた上、王位をやがて童子に譲られた。新君法妙新王は今萬乘の位に昇るにつけても母を忘れ難く、遍く搜めさせて漸く尋ね出し、行幸あつて再會を遂げ、宮中に迎へた。その後尼になし奉り、内裏に近く寺を建て、供養には阿難・迦葉・富婁那の尊者達を請じ、新王自ら母のために如來に歎き祈られた孝心に感應あつて、潰れた母の尼君の兩眼忽ち開けば、貴賤男女悉く隨喜の涙に咽んだ。

【影響】萬葉應寶の合卷「釋迦八相倭文庫」(第五十五編・第五十七編(別項))の月蓋長者の娘如是姫の身替に立てられる法名童子の生贖物語は、本書を粉本とするものである。【島津】

【参考】近古小説新纂初輯(さよめ考説)

泡鳴詩集

【著者】岩野泡鳴【刊行】明治三十九年、金尾文淵堂【解説】著者の第二詩集「夕潮」第三詩集「悲戀悲歌」の二冊の合冊である。「闇の杯盤」に至る迄の彼の詩の傾向を窺ふに足るもので、「夕潮」には「圓き石」の如き名作、「悲戀悲歌」には「三界獨自」の如き好詩を収めてゐる。内容は、浪漫的なものだが、内省的傾向深く、又形式に於て、五五・七七・八六等の格調の詩多く、一つの風格を示してゐる。「圓き石」には押韻を試みてゐる。【川路】

の。「法華經」の中、分別・隨喜・法師・不輕・神力・屬果・藥王・妙音・觀音・陀羅尼・嚴王・勸發の十二品及び、「普賢經」二心經「阿彌陀經」(四首)、「無量義經」に就いて作られ、阿彌陀經の外は各一首、合計十九首の和讃を収めた卷子本である。釋迦堂は承久三年の草創であるから、この歌も承久或はその以前に行はれたものと考へられる。而してその陀羅尼品の歌、ユメ〜イカニモツシルナヨ、一乘法花ノ受持者

大の鈍金無・蓬萊歸橋・浮世偏歷・道郎若先生(生歿)未詳【閱歴】上野高崎藩大河内侯の家臣、蓬萊山人歸橋の號は深川に住めるためと推定される。富岡八幡宮正面の橋が蓬萊橋であるから、安永三年「婦美車紫野」を發表して以來數種の洒落本を著はした。主として深川が多いのは彼の生活から來たらしい。大の鈍金無の別號で狂歌を作り、本町側に屬する大田蜀山・朱樂菅江(各別項)・清水燕十朝

た例に倣ひ、連歌にも同じ試みを行つたものである。心敬僧都の「さよめこと」(別項)によれば、當座にさまゝの褒貶があつて、勝負を定めること度々に及んだ由が見えてゐる。室町時代の初期には、この事行はれたことが知られる。

寶滿長者 ちやうじや 御伽草子 一卷
【作者】不詳【成立】室町期か【諸本】古板本は寛文五年板(中村五兵衛、元祿十五年板。室町時代小説集所収。寫本は文詞に異同がある。【題材】佛敎物。法談物。長者傳説(長者屋敷參照)に結び付けて「法華經」並に六字の名號

法文歌

【名稱】佛敎の法文を主として歌つた歌謡であるからかく名づける。即ちその歌謡には經文を取入れ、就中「法華經」を詠んだものが最も多い。【出典】「梁塵秘抄」卷二に出づ。【解説】雜藝(別項)の一種であるが、和讃の直系を引くもので、その内容は著しく宗教的である。形式も七五五四五四句の今様形式を嚴格に守つてゐる。他の雜藝に屬する歌謡の中には、世俗的に流れ、形式の甚だ亂れたものがあるのに對し、最も古格を守つてゐる如く思はれる。恐らく法文歌は雜藝の中でも最も古い由來を有するものであらう。且つその歌詞には、和讃(別項)の句をその儘取つたものが散見する。例へば、白道歌が古き室、王子晋が本の跡、一々に廻りて見給ふに、昔の夢に異ならず。

これは惠心僧都の作と傳へる「天台大師和讃」の中の句である。拘尸那城には西北方、拔提河の西の岸、沙羅双樹の間には、純陀が供養を受け給ふ。これは「舍利和讃」の中の句である。舍利和讃の句は今一首法文歌に出してゐる。

眉の間の白毫は、五つの須彌をぞ集めたる、眼の間の青蓮は、四大海をぞ湛へたる。問の青蓮は、四大海をぞ湛へたる。は「順次往生講式」にもあり、また惠心僧都作の「極樂六時讚」のうち、日没讚にも出てゐる句で、それより取つたものである。かやうに法文歌は、和讃の一節を獨立させて、今様形式の一體を建てたものと云ふ事が出来る。又、極樂淨土の東門は、難波の海にぞ向へたる、轉法輪所の西門に、念佛する人參れとて。【法隆寺太子講式】の訓伽陀(別項)より取り、十方佛土の中には、西方をこそは望むなれ、九品蓮臺の間には、下品なりとも足んぬべし。

等。【題材】孝行談。人身御供説話。佛法物語(念佛禮讚)。内容は殆ど「さよめこと」(別項)と同一と言つてよく、童子と姫、念佛と法華、岩窟と深淵を取替へただけで、中心の事件として語られてゐる身替人身御供説話は殆ど同じく、諸曲の狂女物式盲母との再會、その眼の開く佛眼も形の上の少異を除いて全く軌を一にしてゐる。兩書の何れかが一方の雛案であるべき事は疑ひを容れない。但しその先後は俄かに定め難く、本書の方が早いと見てよいやうに思はれるが、或は又「さよめこと」の古本が本書の粉本となつたのではないかと推測

は、慶應保胤の極樂寺建立願文の中の言葉である。願文(別項)も歌謡の一體として、法文歌に關係深きを見る。而してこの願文は、和讃・朗詠集に取られ、「朗詠百首」では法文部の中に出してゐる。かやうに法文歌は朗詠とも關係深く、又法文歌の歌をば、今様と記して諸種の典籍に載せたものが散見する(今様參照)。「沙羅林」雜藝の一體に、沙羅林と云ふものがある。「文机談」にも沙羅林・小柳と並べ記し、「梁塵秘抄」口傳集には「沙羅林の今様」とあるので、今様形式を持つたものと思はれる。「體源抄」十の下「音曲事」に「續教訓抄」所載ノ音曲ト申ハ一節アルコトト見エタリ、法文歌習アマタアリ、イハユル沙羅林ノヤウト云、常ノ今様ヨリハ、少シフリノベテ、オウヤウニアワレナルテイニ歌フベシトアリ。只今様ノヤウニ歌ヒテ此事ヲワクモノナシ。オウヤウナリナド云テニクミテ、今ハ沙羅林ガヤウハ歌ハズ、アルマジキ事也」と記してゐる。これによつて、沙羅林は法文歌の一種なることが明かである。法文歌の中で、沙羅林の句がある歌には、

沙羅林に立つ烟、上る見しは空目なり、釋迦は常にまし、て、靈鷲山にて法を説く。沙羅や林樹の木の下に、歸る人に見えしかど、靈鷲山の山の端に、月はのどけく照らすめり。の如きがある。これ等の歌の歌ひ方より出た名稱であらう。或は「舍利講式和讃」の如く、沙羅林の句で歌ひ出す和讃もあるから、それ等より出てゐるかも知れぬ。兎に角、法文歌又は和讃より獨立せる今様形式の一體の歌謡と考へられる。【法華經讚】京都大報恩寺(千本釋迦堂)の阿難尊者の木像内から大正七年に發見せられたも

りうこうに、母の留守を幸ひ今年八歳の法妙は百金に代へて身を賣つた。歸つて來た母は悲歎驚愕し、遂に眼を泣き潰して「母にかくして身を賣りし法妙童子やまします」と、竹杖をたよりに諸方を尋ね廻つては、里の子等に童子めくら」と嘲弄される見すばらしい乞食姿になり下つてしまつた。長者の許に買はれて行つた法妙は、當日彌宜・神主等形の如くの神事あつて愈々身替の生贖に供へられたが、思ひ餘つて唱へたその法文の聲に諸佛來迎し、八頭の大蛇は忽ち十六の角を折り身を離すよと見る間に、十七八歳の男子となつて童子の

の。「法華經」の中、分別・隨喜・法師・不輕・神力・屬果・藥王・妙音・觀音・陀羅尼・嚴王・勸發の十二品及び、「普賢經」心經「阿彌陀經」(四首)、「無量壽經」に就いて作られ、阿彌陀經の外は各一首、合計十九首の和讃を収めた卷子本である。釋迦堂は承久三年の草創であるから、この歌も承久或はその以前に行はれたものと考へられる。而してその陀羅尼品の歌、ユメ／＼イカニモツシルナヨ、一乗法花ノ受持者ヲバ、二聖二十羅刹、陀羅尼ヲ説キテツ羅護スル、應當羅護如是法師。は、「梁塵秘抄」の法文歌の陀羅尼品に上二句は全く同じであつて、下二句は「藥王勇施多門持國十羅刹の、陀羅尼を説いてぞまもるなる」とあるのと同歌なる事は明かであるから、これ等の十九首は法文歌に屬する歌と考へられる。ただ違ふところは、この歌には今様形式の次に經文を添へたが、これは和讃に多い形式である。もとゞ法文歌は和讃の一節が獨立して七五(四四五)四句の形式となつたもの故、この十九首が和讃の形式を持つたとしても、七五(四四五)四句の今様形式なるは法文歌なる事を明かに示してゐる。恐らく「梁塵秘抄」に收められた如き法文歌に倣つて新作せられた歌詞が多いことであらう。必ずしも全部が實際に歌はれた歌謡とは認め難いが、「梁塵秘抄」の法文歌を補ふべき資料で、これ以後法文歌が世に現はれたか否か明かでない。【參考】大報恩寺佛體内處現の和讃(佐木信綱(心の花三〇〇・三〇二)○梁塵後録同上(増訂梁塵秘抄)藤田)

蓬萊山 いざな 「濱出」を見よ。
蓬萊山人歸橋 はうらいじん 洒落本・實表紙作者【姓名】河野氏名は未詳。【別號】

【參考】近古小説新纂初輯(さよめ考説)泡鳴詩集 はうめい 詩集【著者】岩野泡鳴【刊行】明治三十九年、金尾文淵堂【解説】著者の第二詩集「夕潮」第三詩集「悲戀悲歌」の二冊の合冊である。「闇の杯盤」に至る迄の彼の詩の傾向を窺ふに足るもので、「夕潮」には「圓き石」の如き名作、「悲戀悲歌」には「三界獨自」の如き好詩を収めてゐる。内容は、浪漫的なものだが、内省的傾向深く、又形式に於て、五五・七七・八六等の格調の詩多く、一つの風格を示してゐる。「圓き石」には押韻を試みてゐる。【川路】

大の鈍金無、蓬萊歸橋・浮世偏歷書・道郎苦先生(生歿)未詳【附歴】上野高崎藩大河内侯の家臣、蓬萊山人歸橋の號は深川に住めるためと推定される。富岡八幡宮正面の橋が蓬萊橋であるから、安永三年、婦美車紫野を發表して以來數種の洒落本を著はした。主として深川が多いのは彼の生活から來たらしい。大の鈍金無の別號で狂歌を作り、本町側に屬する大田蜀山・朱樂菅江(各別項)・清水燕十朝倉雲齋等と親交のあつた事を、自作「愚人養漢居續借金(別項)に發表してゐる。後主君の命令に依り、戯作を中止したと云ふ。「近世物の本作者部類」にこれを寛政年間(事とし、暗には誤謬である。天明六年以後著作がないからであらう。彼の洒落本作者としての地位は大田蜀山・田螺金魚(別項)と共に第一人者(京傳(別項)に次ぐもので、深川を背景とする洒落本中彼は最も多様多趣の作品を發表してゐる。狂歌師としての作例は、「枝川に餌ひろふ鳴のあし色は流れもあへぬ紅葉とや見ん」(徳和歌後萬載集「卷第四」)【著作】「洒落本」婦美車紫野(安永三年)○伊賀越増補合羽之籠(安永八年(別項)○家暮長命四季物語(同年)○美地之囃設(同年)(別項)○龍虎問答(同年)○遊婦里會談(安永九年)○通仁枕言葉(天明元年)○富賀川拜見(同二年)○愚人養漢居續借金(同三年)(以上各別項)【黃表紙】間似合噓言會我(同五年)○壁與見多細身之御太刀(同六年)等。【山崎】蓬萊曲 はうらい 劇詩【作者】北村透谷【刊行】明治二十四年五月、養眞堂【内容】柳田素雄といふ一青年、蓬萊山の麓で琵琶を抱き、人生を嘆いてゐると空中に聲あり、呼ばれて山に入る。山中、戀人の幻影仙姫に逢ふ。戀

を語らんとすれば、道士・魅鬼等出でて妨ぐ。素雄煩悶す。露姫の幻覺あらはる。素雄、姫に呼びかける。鬼出でて笑ふ。素雄死を望んで狂ひ叫ぶ。大魔王、出現して素雄の愚を叱り、人間界滅亡の有様を見せる。素雄、天界と人界の間に煩悶しながら琵琶を空中に投げ、空に繚り、風に誘はれて落ちゆく琵琶の不思議な音を感じながら素雄寂然と仆れる。

【批評】形式は劇詩であるが、何等劇的條件を考へて作つたものではない。作者の思想を表現しようとするのが主意であつた。對話は自由な詩の形であらしてゐる。主人公素雄の獨白が殆ど大部分を占め、作者の人生觀即ち人間の内部生命の矛盾、苦悶を強調してゐる。作者自身の所謂情熱をこの一篇の劇詩に盛り上げようとしたものだが、手法が未熟であつて完成された藝術にはなつてゐない。併し明治二十四年と云へば、詩の方面で僅に山田美妙・中西梅花(各別項)等の活動を始めた時期で、未だ啓蒙期に屬してゐた。その時代に於て詩を以て人生批判を試みようとした透谷の意氣は傳ふるに足るのであつて、亦彼の詩人的素質も窺知されるのである。【河井】

蓬萊物語 ほうらいものがたり 御伽草子 二卷 【成立】徳川初世【諸本】奈良繪本(京都帝國大學文學部蔵)。近古小説新纂初輯所收。【内容】繪詞風の祝儀物。漂流談、仙郷淹留談。蓬萊山にあると云ふ不老不死の靈藥に關する話を中心とし、その仙山の由來、勝景、その地を窺めた和漢の人々の諸傳説、特に最後に紀州名草郡の一漁夫安曇の安彦の浦島式神仙譚を物語つてゐる。

【参考】近古小説新纂初輯(考説) 【島津】 法樂連歌 ほうろうが 【解説】神の御心を

すゞしめ奉るために賦して奉納する連歌をいふ。蓋し法樂和歌に倣つたものである。法樂の語は「梵網經」譬喻經等に見え、諸法の眞理を觀じ、苦惱を厭離し、常に法性常樂の樂を受くる義であるが、和歌、連歌に於ては神佛に奉り、その御意を感得するためにするやうである。「今出川内相府記」によれば、花園天皇の正和四年四月二十八日、春日社御法樂として、關白近衛家平以下「法華經」を題にして和歌の獻詠を行つた事が見えてゐる。元永の人間影供の時にはまだ法樂の語が使つてない。

【起原・沿革】「連歌私淑抄」には、二條關白良基の許に、一童子が百韻の連歌を將來して加點を請うたので、披見するに、連歌も世の常の事とも見えず、童子のさまも怪しかつたので、人をつけて見させた處、北野社頭で見失つた。その時救濟の許にも同じさまの童子が百韻に點を請ひに來たので、これは北野天神が連歌を好ませられるのであると考へ、爾來北野に連歌を奉る事となつた。これが御法樂連歌の初めであるといつてゐるが、斯道に勿體を附けるために殊更に造り出でたものやうに考へられる。蓋し良基の時代に始まつたものであらうか。爾後、大社の社頭に行はれ、或は禁中に行はれた。室町時代の末期に於ては、北野社及び水無瀬宮御法樂の連歌は、恒例として行はれるやうになつた。當時の公卿の日記にその例が多く見える。【作品】法樂連歌の現存してゐる最も古いものは、文明三年宗祇が伊豆の三島社頭で賦した千句である。これに次いで、文明十九年後土御門院の御獨吟北野社御法樂、大永元年聽雪・宗碩兩吟佳吉明神千句、同二年伊勢大神宮御法樂千句、宗收の賀茂社法樂獨吟名所百韻等は、その名あるもので

ある。 法隆寺縁起白拍子 ほうろうじえん 歌謠書一卷 【作者】重懷【名稱】「白拍子記」とも云ふ。【成立】貞治三年【諸本】本書は卷子本であつて、法隆寺に傳本が存する。その本より新しく摸寫した卷子本が東京帝國大學國語研究室に藏せられる。小杉楳村博士編の「復古雜抄」天和國の部に入り、また「冥曲十帖」(國書刊行會本)、「冥曲全集」(國文東方佛敎叢書)第二期第七卷等に收められた。【内容】法隆寺の縁起七箇條を叙したものの。惣寺建立並三寶初起、鎮守龍田明神事、三經院縁起事、附講堂、西圓堂、上堂、聖靈院縁起事、御舍利、梵網經並上宮王院縁起附御寶物事、現身往生塔婆縁起事附拜石、勝鬘會縁起事、聖靈會縁起並會場事。以上の七箇條より成り各篇甚だ長大である。法隆寺の古記「蓋元記」によると、康安二年三月六日に源春房が當寺の事初を白拍子につくつて談義の次にこれを謠ひ、酒を飲み、白拍子が終つて開口を謠つた。この春房は即ち重懷で、この白拍子は康安二年の作を貞治三年に定稿としたものであらうと云ふ。【價值】法隆寺のみに所用のものであるが、白拍子の歌を記せる書としては、本書の外に見ることが出來ず、當代の謠ひ物、殊に白拍子の内容形式を探るに重要な資料である。而して延年の連事等には白拍子で謠はれる部分があるから、互に参照すれば得る所が多い。當代の佛敎歌謠として逸する事の出來ぬ雄篇である。【藤田】

鳳朗 ほうろう 俳人【姓名】田川義長。通稱東源【別號】對竹・營笠・藍蓼堂・芭蕉林・自然堂【生歿】寶曆十二年肥後に生れ、弘化二年(二五〇五)十一月二十八日江戸で歿す。享年

八十四。【墓所】江戸谷中天王寺【閱歷】肥後熊本の細川藩士。後、致仕した。一説に桂川源吾と稱した事があるといふが、浪人時代の一時的假名ではあるまいかと考へられる。熊本に在る時から對竹と號して併諧に入つたのであるが、その併諧は不明である。佐分利越人といふ虚構の人物からその祖父が與へられた芭蕉の傳書を所有してゐたと標榜する鳳朗の併諧師授は、全く不明とする外はない。肥後の對竹として遊歴すること多年、天明・寛政時代がその修業期であつた。文化時代江戸に落着き、營笠と改め芭蕉林と號した。江戸では多く道彦(別項)の推轡を受けたので、世間からは道彦門と認められてゐるが、鳳朗自らは、越人の傳統を繼いだと稱してゐる(芭蕉葉船。營笠と稱した後もなほ遊歴を怠らず、足跡全國に遍きに至り、主として各藩中の人士を目標として指導したので、門下には相當有力な武士階級の者多く、中に藩主で贊を執つて入門した者もある。蒼虬(別項)歿後、二條家から花の下宗匠の允許を得た。筑紫高良山下の桃音靈神に芭蕉大明神の神號を申下したのも鳳朗の斡旋によるといふ。この頃は自然堂鳳朗と稱してゐた。事仙子丁知の筆記によれば、天保元年には蒼虬・卓池・菊場・琴松・何丸、元峰の六人が共に古稀であつたといふ。これによつて推算すれば、鳳朗は寶曆十一年生れの享年八十五であるが、姑く通説に従つて置く。【編著】芭蕉葉ふね一冊(文化十四年刊。越人の説に基いて二別三變の目を立て、正風俳諧の眞意を説いたもので、東都蕉風林營笠居士述、信陽俳諧寺一茶坊校合、北總美濃樓廣陵著としてゐるが、鳳朗の述作に相違ないもので、文中對竹の名を用ひてゐるのを見れば、刊行の文化十四年より早い頃に

活を清算するといふのが終結である。 【批評】自傳的な小説であるだけ、小説全體から受ける感じは、泡鳴といふ人間の精力と、人生の滑稽な面、お鳥といふ女の醜いながら一抹の哀れさ、さうしたものの輪舞の中に他のものに見られない一つのイデアリスチックな、又一面浪漫的な情緒を掬むことが出來る。「放浪」と「斷橋」には、特にその點が大きい。そこに表はれた生活は「人生の旅」の間に

この集を編したのである。俳書大系近世俳諧句集所收。 【發刊】 放浪 ほうろう 小説【作者】岩野泡鳴【刊行】明治四十三年七月東京橋東雲堂書店から前編として刊行(後編は「斷橋」)後、大正八年七月一元描寫の理論に依つて作者が改訂した上、泡鳴五部作の一つとして新潮社から刊行。更に泡鳴全集第一巻に所收。【題材】樺太で鐵詰事業に失敗して北海道へ落ちた時代を中心

蓬萊物語

【成立】徳川初世「諸本」奈良繪本(京都帝國大學文學部蔵)。近古小説新纂初輯所収。【内容】繪詞風の祝儀物。漂流談、仙郷淹留談。蓬萊山にあると云ふ不老不死の靈藥に關する話を中心とし、その仙山の由來、勝景、その地を寛めた和漢の人々の諸傳説、特に最後に紀州名草郡の一漁夫安曇の安彦の浦島式神仙譚を物語つてゐる。

【参考】近古小説新纂初輯(考説) 〔島津〕法樂連歌

あらうか。爾後、大社の社頭に行はれ、或は禁中に行はれた。室町時代の末期に於ては、北野社及び水無瀬宮御法樂の連歌は、恒例として行はれるやうになつた。當時の公卿の日記にその例が多く見える。【作品】法樂連歌の現存してゐる最も古いものは、文明三年宗祇が伊豆の三島社頭で賦した千句である。これに次いで、文明十九年後土御門院の御獨吟北野社御法樂、大永元年聰雪・宗碩兩吟住吉明神千句、同二年伊勢大神宮御法樂千句、宗收の賀茂社法樂獨吟名所百韻等は、その名あるもので

のであるが、白拍子の歌を記せる書としては、本書の外に見ることが出来ず、當代の諸人物、殊に白拍子の内容形式を探るに重要な資料である。而して延年の連事等には白拍子で詠はれる部分があるから、互に参照すれば得る所が多い。當代の佛會歌謡として逸する事の出来ぬ雄篇である。

鳳朗 俳人〔姓名〕田川義長。通稱東源〔別號〕對竹、鶯登、藍堂、芭蕉林、自然堂〔生歿〕寶曆十二年肥後に生れ、弘化二年(二五〇五)十一月二十八日江戸で歿す。享年

蓬萊物語 御伽草子 二卷

この集を編したのである。俳書大系近世俳諧句集所収。

され、札幌へ來ては島田水降(愛媛山本島市郎のこゝ)と相知り、彼と共に遊歴す、き野に遊んで、偶々數鳥といふ遊女と馴染になり、知らず識らずの間にその女の淋しい心にほだされてゆく。【斷橋】すぐその後を承けて數鳥との情事關係の發展から進めて、中途北海メール社の依頼で北海道巡歴の旅行記になり、再び歸札すると、彼が東京へ殘して來た妻の清水お鳥が彼を追つかけてやつて來てゐた。二人はすぐ醜い喧嘩をする。彼はお鳥を連れて敷島に逢ひに行つてはナイーブな情趣のある旅先の女に慰められつつ、放浪を通り越して斷橋の行き惱みになつてゐる自分の姿を想ふのである。【發展】「放浪」や「斷橋」以前の生活に取材し、即ち妾お鳥と抑々の馴れそめから二人が甲州の温泉へ行く處。それから歸京後男は耳を患ひ、女は男の病をうけて子宮病になり、二人で病院通ひといふ不愉快な生活を打ち切るために、樺太で鐵話技師をしてゐる從兄弟の事を思ひ出し、うまく相談を纏めて鐵話事業を企てようと決心する。【毒藥をのむ女】「發展」のあとをうけて例の妾清水お鳥との經緯が結局毒を仰いだり、加集といふ友人とくつついたりする病氣の女を残して逃げやうに樺太へ出發してゆく男、それに本妻の千代子がかからんで、四角關係の鋭い愛慾の息づまる葛藤、別れる決心のついた女に又ちよつと未練で引つかゝつてゆく男のたよりなき。最後にその複雑な男女の胸を貫いて義雄をのせた汽車は出發の汽笛が鳴る。【憑き物】二人がいよいよ北海道から夜逃げ同様に逃げて出してから、女が又子宮の痛みを訴へ出して盛岡で下車し、男だけが先きに歸京してやつと女から逃げ出し、惡夢のやうな愛慾生活

活を清算するといふのが終結である。【批評】自傳的な小説であるだけ、小説全體から受ける感じは、泡鳴といふ人間の精力と、人生の滑稽な面、お鳥といふ女の醜いながら一抹の哀れさ、さうしたものの輪舞の中に他のものに見られない一つのイデアリスチックな、又一面浪漫的な情緒を掬むことが出来る。「放浪」と「斷橋」には、特にその點が大きい。そこに表はれた生活は「人生の旅」の間に表はれてきた行き惱みである。永遠の放浪ではなくて、やがて歸つて來る旅である。作者の激しい戰鬥力と人生への努力も、どこかに悠長な大ききが見えて、作品を自然主義の深刻な狭さから、雄大な強さへ救つてゐる。併し表現の粗大と、變化と色彩に乏しいことが小説としての興味を半減し、日記風の備忘録的な無味單調に陥つてゐる場所が隨處に見える。會話も圓滑でない。併し敷島といふ女はよく書けてゐる。「斷橋」に於て益々手に入つて來て女の持つてゐるペイソス、野性美、茶目な氣立てなどがよく描けてゐる。「發展」に至ると前二者に見る缺陷は大體補はれ、哲理のむき出しも日記的記述も殆ど影を潜め、二人の愛慾生活の鋭い各斷面が實感に充ちて描かれてゐる。併し未だ描寫に尖鋭さが不足で、筆觸もたるんだ處のあるを見逃せない。これが「毒藥をのむ女」になると、更に一段の進歩を示して、板についた情事の鋭辣な批判的な描寫となつた。「放浪」時代の主人公をして彼の半獸主義の哲理を語らせるといふ手法が徒に説明の強要でしかなく、何等具體的な効果を收め得なかつたのに反して、こゝでは痴人お鳥の一舉一動の描寫が即ち彼の思想の急所を刺して餘りあると云へる。實に泡鳴自傳體

述作して置いたものであらう。一茶が作者の名を出してゐるのは異とすべきである。俳書大系近世俳諧句集所収。○在門俳諧師説録一冊(文久二年刊。師説録、直指傳の二部に分つて、俳諧上の秘説や法式に關する事項を記したもので、文政八年乙酉季秋日齋等居士の附記によれば、「わが祖父此事を越人に受て反古の裏に書寫」したものが、鳳朗に傳はつたのであるといふ。「鵲尾冠」等の著者越智越人と熊本の佐分利越人改め薫頌とは全く別個の人で、佐分利越人は虛構的人物であると信ぜられるに至つたのであるから、鳳朗がいふ所のこの書の由來も根柢から覆つた譯である。俳諧文庫付合法全集所収。○自然堂千句二冊(天保六年刊。内題には「俳諧連歌獨吟十百韻」とある。鳳朗が獨吟で百韻十卷を賦したものを上梓したもので、天保甲午(五年)武江蕉家獨立閑花林四

山(出雲國母里の藩主松平志摩守。東幻住庵と稱す)の序がある。初版は絶えたので、弘化四年その大神忌に當つて門人惺庵西馬が再板した旨その跋に記してある。千句と十百韻とは同じく百韻十卷ではあるが、その形式上の差異があるのだから、この書は寧ろ十百韻とすべきであらう。一般俳人の連句技倆が弛緩した當時に在つてこの大篇を賦し得た鳳朗は、決して凡庸の徒ではなかつたことが分る。○鳳朗發句集二冊(嘉永二年刊。惺庵西馬編。可布庵過淵梨雲舎鶴翁・即事庵詠久校合で、百濟堂如是の序。護持院權僧正悟青の跋があり、鳳朗の四季發句を類題的に輯録したものである。如是の序によれば「先師鳳朗一たび句稿を上總の船路にてわたつみの神にかくされ、二たび續集を難波の旅寢にて相やどりのをの子にうばはれ」たので、その歿後門人等の記憶によつて

「放浪」主人公田村が歸つてくる樺太から小樽迄の連絡船の中が第一景として描寫

「梗概」



鳳朗 女(最初「未練」と朗字 いふ題で書き出した自文が、發表に當つて改題、大正三年六月、中央公論に掲載、翌年

「毒藥をのむ女」

「放浪」

「斷橋」

「發展」

「憑き物」

長篇小説の中核を占むべき作品である。「憑きもの」はやゝ藁のたつた感じだが、前編の「寝雪」はあくぬけのしたものである。又部分的に盛岡の病院で二人とも動きがとれなくなり、旅に病んで行き悩む男女の惨ましい相を書いた處など、實感に充ち満ちて、よき効果を出してゐる好個の作である。要するに泡鳴五部作として堂々たる長篇の一大聯篇である。固より有情滑稽物にあるやうな無技巧的技巧の圓滑なる手法の巧みはないが、大きさと深さ、鋭さと隠さない大膽さを貫いて眞一文字に書き上げたところに、偉大なる泡鳴の眞價値を見るのである。

【史的地位】 明治四十三年から大正七年までにわたつて、随時に發表したものであるだけに、同一列には置き難い。「放浪」發表時代の作者の苦澁はその序文に明かである。「毒藥」のむ女時代は彼の好況時代で、文壇も好評と優遇とを以て迎へた。彼は實に自然主義の作家でありながら自然主義黄金時代のジャアナリズムに迎へられずして、寧ろその凋落期に眞價と聲名を博するに至つたのであつた。

【参考】 近代の小説田山花袋 ○岩野泡鳴論正宗 白鳥○「放浪」を作つた實感と所信と(泡鳴自序) 【舟橋】

【母音】 「後期印象派」を見よ。

【壽歌】 歌謡 【名稱】 武内宿禰が瑞祥を祝し、天皇を壽き奉つて歌つた歌と言ひ傳へられたので得た名である。「出典」 「古事記」仁徳の條に長歌一首、その後片歌形式の歌を一首記して「此者本岐歌之片歌也」とある。【解説】 雅樂寮で教習した大歌の一種で、天皇御製歌「たまきはる 内の朝臣 汝こそは

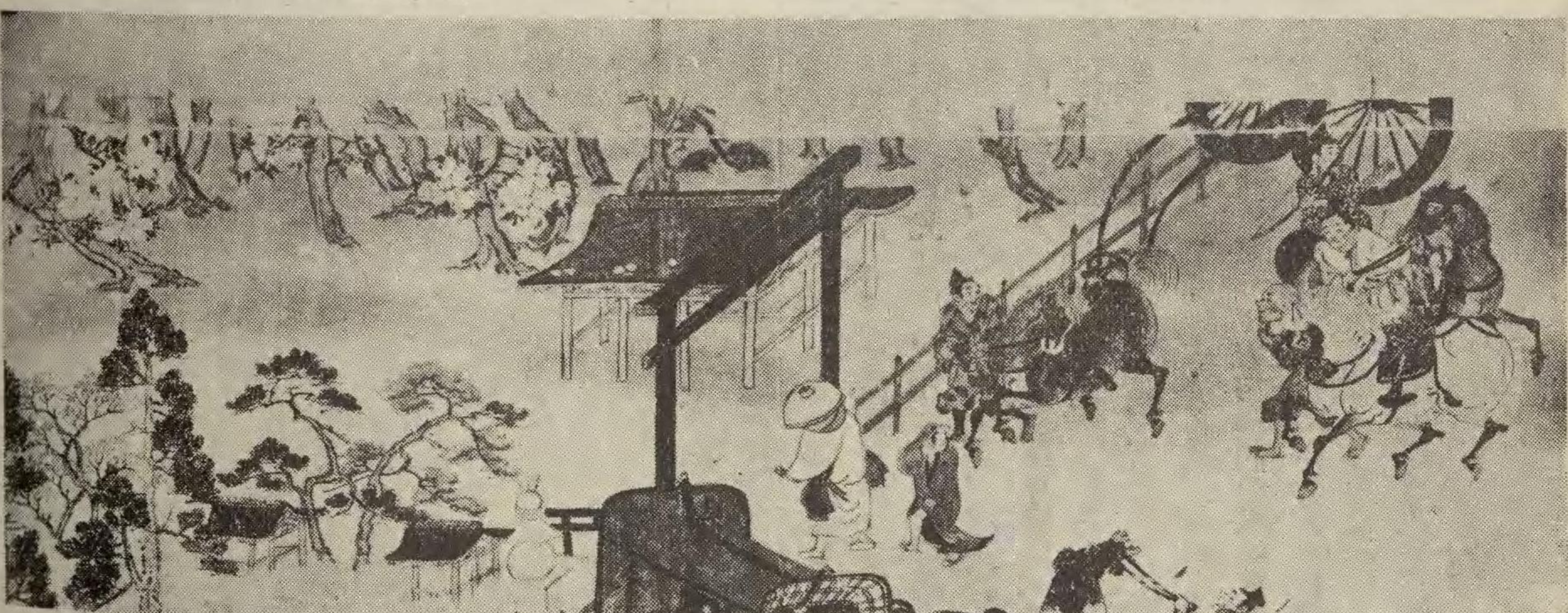
世の長人 空みつ 大和の國に 雁子産と聞くや。武内宿禰語り奉る歌「高光 日の皇子うべしこそ 問ひ賜へ まこそに 問ひ賜へ 吾こそは 世の長人 空みつ 大和の國に 雁子産と 未だ聞かず」。汝が皇子や 終に知らむと 雁は子産らし。以上の天皇御製歌以下の三首が凡て壽歌であると思はれる。或は武内宿禰の作と云ふ二首だけであるかも知れぬ。

【備考】 酒樂歌(別項)や乞食者歌(萬葉集卷十六に二首出づ)や大殿祭のホカヒもホギと同語で、これ等は同様に祝意を持つ歌である。「日本書紀」には、「古事記」所載の二首の長歌と似た歌二首を出してゐるが、歌の名稱も記さず、また歌の形式も歌詞も可なり異なつてゐる。片歌は出てゐない。

【幕歸繪詞】 繪卷・傳記【名義】 覺如上人の歸寂を戀ふる意。【成立】 西本願寺三世覺如上人の子慈俊が、上人の傳記を撰して(觀應三年十月)沙彌如心(因幡守藤原隆隆の僧名)と攝津守藤原隆昌に畫かしめたもので、詞は三條公忠初め數人の寄合書である。その製作年時は明記してゐないが、傳記撰述後程なき時のものと推察される。【諸本】 原本は西本願寺藏十卷(國寶)。原本の外、詞書のものに存覺書寫本・綱嚴書寫本があつたが、今は傳はらない。蓮如上人書寫本は享徳四年七月綱嚴本によつて書寫されたもの、蓮如上人の末子實從書寫本もある(龍谷大學圖書藏)。刊本では延寶元年板本・眞宗要法所收本・眞宗假名聖教所收本・三十幅所收本等がある。【解説】 本願寺藏の原本は、その後足利義政の懇望によつて暫く將軍家に持ち出され、文明十三年に至つて返却されたが、その時第一巻と第七巻

枚を賣賜され、その九月に表向死去を届出でた。保己一の跡はその子忠實が嗣いで、家名を盛さなかつた。保己一の門下には、屋代弘賢・石原正明・中山信名・松岡辰方(各別項)等があり、保己一を輔けて功が多かつた。明治四十四年、保己一は正四位を贈られた。群書類從の版木は今東京市澁谷區の温故學會に於て永久保存が圖られてゐる。

とが紛失してゐたので、翌十四年、この兩卷を掃部助久信に畫かして十卷完備の體をなし



(藏寺願本西) 詞繪歸幕

者の名の知られてゐるのは最も注目される。畫家はいづれも土佐派の人で、製作はさほど精秀なものでないが、南北朝乃至足利期に於ける斯派の特色が窺はれる。覺如上人の傳記として貴重なるのみならず、「親鸞上人繪傳」(別項)等と相並んで、眞宗系の繪傳として興味ある資料である。

【保己一】 姓の國學者【姓名】 堀氏。幼名實之助、また辰之助といひ、後、千彌に改め、更に保木野一と稱し、後またその字を改めて保木一とした。【號】 温故堂【生歿】 延享三年、武藏國兒玉郡保木野村に生れ、文政四年(一四八二)九月十二日江戸に歿す。享年七十六。【法名】 和學院心眼智光大居士【墓所】 東京市四谷區寺町愛染院【閱歷】 父は萩野宇兵衛といつて農を業とした。保己一は五歳で肝の病のために明を失ひ、十三歳で江戸に出て雨森校須賀一の門人となり、翌年萩原宗固の門に入つて歌書、物語の類を學び、また川島貴林に隨つて「小學」近思錄等を學び、並に神道の教を受けた。その後、山岡俊明に就いて律令その他を學び、また品川東禪寺の僧孝首座について醫書をも學んだ。明和六年二十四の歳に、更に宗固の勧めにより、賀茂眞淵の門人となつて「六國史」等を學んだが、この冬眞淵は歿したので、教を受けたのは半年ほどに過ぎなかつた。これより先き、寶曆十三年(十八歳)衆分となり、安永四年(三十歳)勾當に進んで瑞勾當と稱し、この時から名も保己一と改めた。ついで天明三年(三十八歳)に檢校となつた。この年更に又宗固の勧めによつて日野資校の門に入つて歌道を學び、資校の歿後は閑院宮に、また外山光實にも就いた。保己一の事業としては、正・續群書類從

た。かくその繪は足利期の畫繼ぎが入つてゐるが、その製作年代も明かであり、且つ各巻畫

時、芭蕉は木因亭に立寄つて居り、その後「笈の小文」の旅の時、「奥の細道」の旅の時にも立寄つてゐる。然るに元祿四年歸東の時には木因亭に立寄つた形跡がなく、芭蕉の終焉に際して木因は追悼句をも寄せてゐない。許六は「歴代滑稽傳」に於て、木因を勸當の門人の中に數へてゐるが、芭蕉には門人を勸當した確實な事實はないけれども、木因が芭蕉の晩年に、芭蕉に對して蟬りを持つてゐたらしい事

(別項)の編纂上梓を第一に擧ぐべきであるが、この叢書の編纂を企圖したのは相當に早く、安永八年三十四の歳には、その開板成就を天満宮に祈誓した。天明五年四十の歳、水戸侯に見えて「參考源平盛衰記(別項)」の校正に與り、後また「大日本史(別項)」の校正に與つた。その校正といふも、傍人に讀まして、聽いてゐて誤謬を正すのである。保己一にして始め

枚を賣賜され、その九月に表向死去を届出でた。保己一の跡はその子忠實が嗣いで、家名を盛さなかつた。保己一の門下には、屋代弘賢・石原正明・中山信名・松岡辰方(各別項)等があり、保己一を輔けて功が多かつた。明治四十四年、保己一は正四位を贈られた。群書類從の版木は今東京市澁谷區の温故學會に於て永久保存が圖られてゐる。

【参考】近作の小説『山花袋』○若野海鳴論正宗
白鳥○「放浪」を作った實感と所信と(泡鳴自
序)

【母音】「母音」を見よ。
【フオーギズム】「後期印象派」を見よ。

【壽歌】「名稱」武内宿禰が瑞祥
を祝し、天皇を壽き奉つて歌つた歌と言ひ傳
へられたので得た名である。「出典」「古事記」
仁徳の條に長歌一首、その後片歌形式の歌
を一首記して「此者本岐歌之片歌也」とある。
【解説】雅樂寮で教習した大歌の一種で、天皇
御製歌「たまきはる 内の朝臣 汝こそは

(別項)の編纂上梓を第一に擧ぐべきであるが、
この叢書の編纂を企圖したのは相當に早く、
安永八年三十四の歳には、その開板成就を天
滿宮に祈誓した。天明五年四十の歳、水戸侯
に見えて「参考源平盛衰記(別項)の校正に與
り、後また「大日本史(別項)の校正に與つた。
その校正といふも、傍人に讀まして、聽いて
ゐて誤謬を正すのである。保己一にして始め
てよくするところであつた。寛政五年四十八
の歳に、官に請うて麴町裏六番町の土地三百
坪を借り、そこに和學講談所を建て、その年
閏十一月より國書の會讀を始めた。これより
先、豫約を募つて群書類從の開板にも着手し、



(藏家瑞) 一己保堀

寛政七年五十歳の秋には、出來上つた分四十
三冊を献上し、その冬白銀十枚を賞賜された。
かくして「類從」の事業を進捗せしめる傍らに
は、國史・律令の書の校訂刊行にも従事し、享
和三年には五十八歳にして總録職となり、「類
從」その他の出版の外に、宇多天皇以降の史料
の調査編纂をも始め、幕命によつて「武家名目
抄」(別項)をも編纂した。文化の末年から文政
へかけ、七十餘の老齡を以て、自ら關西地方
に數回に亙つて探訪旅行をも試みた。文政四
年、七十六歳にして總檢校となり、その九月
に病歿した。翌年「類從」の献上残りの分、並
に「續類從」の目錄その他を献上し、白銀三十

ぼくさん ぼくさん

年時は明記してゐないが、傳記撰述後程なき
時のものと推察される。「諸本」原本は西本願
寺藏十卷(國寶)。原本の外、詞書のものに
存書寫本・網羅書寫本があつたが、今は傳は
らない。蓮如上人書寫本は享徳四年七月綱嚴
本によつて書寫されたもの、蓮如上人の末子
實從書寫本もある(龍谷大學圖書館藏)。刊本で
は延寶元年板本・眞宗要法所收本・眞宗假名聖
教所收本・三十幅所收本等がある。「解説」本
願寺藏の原本は、その後足利義政の懇望によ
つて暫く將軍家に持ち出され、文明十三年に
至つて返却されたが、その時第一巻と第七巻

枚を賞賜され、その九月に表向死去を届出で
た。保己一の跡はその子忠實が嗣いで、家名
を墜さなかつた。保己一の門下には、屋代弘
賢・石原正明・中山信名・松岡辰方(各別項)等
があり、保己一を輔けて功が多かつた。明治
四十四年、保己一は正四位を贈られた。群書
類從の版木は今東京市澁谷區の温故學會に於
て永久保存が圖られてゐる。
【編著】群書類從(二千二百七十種、六百六十五冊)
○續群書類從(二千一百三種、一千八百五十五冊)
○武家名目抄七百八卷(故實叢書所收)(各別項)○
史料(宇多天皇より後一條天皇に至る。未刊)○螢蠅
抄六卷(史籍集覽所收)○鷄林拾葉八卷(我月刊我
本にも收む)○花咲松一卷(史籍集覽に收む)○松
山集家集二卷(群書類從正續分類總目錄に附刻。校
註國歌大系にも收む)。以上の外に「日本後紀」以
下の校刻本その他がある。

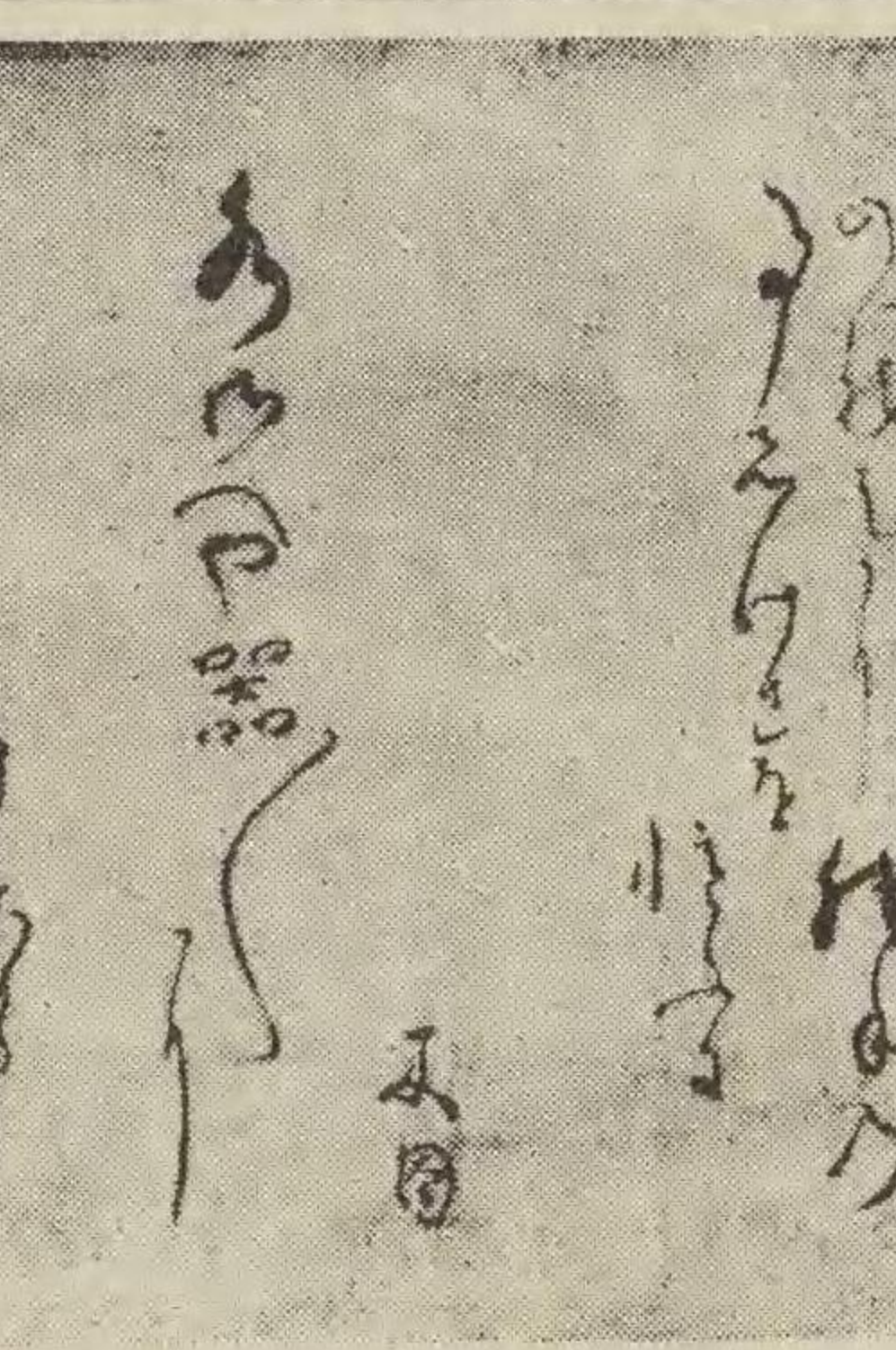
【業績・學風】保己一が盲目の身にして學問を
以て立ち、正・續群書類從の編纂刊行等、我が
國未曾有の大事業を完成して、後世の學者を
益するところの大なる、蓋し世界の文化史上
その比倫を見ざるどころであらう。保己一は
あくまでも博聞強記であつた。その學問に獨
創を缺く憾みはあるが、天は彼に與ふるに二
物を以てしなかつたのである。保己一は理智
の人であり、意力の人であつた。盲人の通有
性たる剛愎の一面をも有してゐた。併し文藝
家としての詩文の才能には乏しかつた。「松山
集」の如きも、歌集としては決して高き地位を
占め得るものでない。

【参考】温故堂瑞先生傳 中山信名群書類從正續
分類總目錄に附載)○堀前總檢校年譜(同上)○
堀檢校詳傳(堀玉縣教育會編) [森]
木因 俳人(姓名)谷氏。幼名伊勢



(藏) 松

松。通稱 九太夫。「號」木因は「後撰大鏡波
集」の作者句數のハ行に入つてゐるから「ぼく
いん」と讀むべき事が知られる。「別號」初號
木因・白櫻下・觀水軒・呂音堂・杭川翁・杭瀬川
の翁(生歿)正保三年生れ、享保十年(三八
五)九月歿す(晦日葬なれば、歿日はその二三日前
であらう)。享年八十。「俳系」初め季吟門、後芭
蕉門(閱歷)美濃大垣の人で、船問屋である。
十四歳に當る萬治二年の梅盛の「捨子集」に木
因の號で入集してゐるから、俳諧を始めたの



(藏庫文字松) 讀筆因木

は頗る早い事が知られる。初め季吟門として
貞門の俳諧に入り、後談林に化したのである
が、延寶の末か天和の初め頃に、芭蕉と木因と
の間に、「蒜の籬に鶯をながめて」鶯のある花
の賤屋とよめりけり」の附句に關する文通が
あつて、この頃二人の交渉が始まつたらしく、
かくて木因は芭蕉の門に歸するに至つた。併
し芭蕉とは本來相弟子であるので、芭蕉は木
因に對して俳友に對する如き態度を持したや
うである。貞享元年の「野ざらし紀行」の旅の

時、芭蕉は木因亭に立寄つて居り、その後「笈
の小文」の旅の時、「奥の細道」の旅の時にも立
寄つてゐる。然るに元祿四年歸東の時には木
因亭に立寄つた形跡がなく、芭蕉の終焉に際
して木因は追悼句をも寄せてゐない。許六は
「歴代遺稿傳」に於て、木因を勸當の門人の中
に數へてゐるが、芭蕉には門人を勸當した確
實な事實はないけれども、木因が芭蕉の晩年
に、芭蕉に對して蟬りを持つてゐたらしい事
は、當時の蕉門の集に木因の作の殆ど見えな
い事からも推測される。併し木因は大垣蕉
門の先輩且つ中心人物として、大垣蕉風の發
展に與つて力あつた俳人には相違ない。かく
て木因の作は、年數の長さの關係にもよるけ
れども、芭蕉生前に於けるよりも、芭蕉歿後
の方に多いのであるが、その作は年時が降る
ほど低下して行つてゐる。

【著作】「誹家大系圖」の木因の條に家書「俳諧
祕密」なるものを擧げてゐるが、その如何なる
ものかを知り得ない。柴田篁浦著「谷木因」に
よると、各家傳襲の稿本類に次のものがある
といふ。櫻下文集○おきななき○桃花一日千
句○上代の巻。
【参考】花見車 高島轡士 ○續俳家奇人談 竹内
玄々 ○誹家大系圖 生川春明 ○俳人百家撰 水
谷川柳 ○谷木因 柴田篁浦 [志田]

北山 儒者(姓名)山本信有。字は天
禧。通稱喜六「別號」孝經樓主人・笑疑翁・學
半堂逸士・竹堤隱逸。私諡して述古先生とい
ふ。「生歿」寶曆二年江戸に生れ、文化九年
(一四七二)五月十八日歿す。享年六十一。「閱
歷」世々幕府に仕へた。井上金峨の折衷學に
服してその督誨を受け、家が富饒であつたの

で、常に奇書を購入して博覧に努めた。二十歳の時、「孝經集説」を著してその名が始めて顯はれた。因つて一家の目を立て、安永八年「作詩志毅」作文志毅の二書を著し、當時天下を風靡した古文辭(別項)を排撃し、文は韓・柳を主とし、詩は宋詩の清新を主とすべきことを主張し、性靈の説を立てた。その詩社を竹堤吟社といふ。その門下からは、天明・寛政の詩壇の驍將たる市河寛齋・大窪天民などを出して、遂に詩風を一變した。【著作】文藻行藻十卷○詩藻行藻四卷○作文率四卷○孝經樓詩話二卷(別項)○孝經樓漫筆○孝經樓漫錄(各別項)○孝經樓文集五十卷。

【批評】北山が古文辭を攻撃して宋詩を唱へたのは、支那の方でいへば李王の古文辭を攻撃した袁中郎(袁宏道)字は中郎の役割を演じた譯である。尾藤二洲の「正學指掌」に、「滄溟、兪州が徒は摸擬に傷られ、公安(袁中郎)竟陵(明の鍾惺)竟陵(人)が徒は奇僻に傷らる。皆故意になし出せる家風にて大に自然の氣象に乏し。其の流弊一は剽窃塗抹となつて自ら一語をも造し得ず。一は鄙俚淺近となつて街談巷語に類せるのみ。是等みな全く風雅の趣を失へり」といひ、「拙堂文話」には、「我が邦従前の文字庸陋なり。時豪(荻生徂徠等)を指す之を患へ李王を修めて始めて雅なり。修辭の弊塗澤撲擗。時豪、北山等を指す之を患へ袁、徐(明の徐渭)字は長文を修めて始めて眞なり。皆時務を知るの俊傑と謂ふべし。然れども皆瀉下の藥にして暫く用ふ

秋田城の夏持左衛門右衛門
北山抄
北山抄
北山抄

北山抄
高野山
高野山

【内容】年中の恒例又は臨時の朝儀、太政官、近衛大将、國司等の吏務に關して記したもので、一・二卷は年中要抄、三・四卷は拾遺雜抄、六卷は備忘、七卷は都省雜事、八卷は大将要抄、九卷は羽林要抄、十卷は吏途指南と題してある。これ等は各別種の抄録であるのを後人が集めて一書とし、公任の晩年、隱栖の地である北山に因んで「北山抄」と稱したものであらうと稱せられてゐる。【價值】「古事談」に、「知足院殿仰云、四條大納言(公任)北山抄は神妙之物也。大二條殿(教通)を拜に取て、九條殿(師輔)の御記をも伺見て候たる間、めでたき物にてある也」とあるが、「延喜式(西宮記)(各別項)に次いで、一條天皇、後一條天皇頃の

べきも久しく服すべからず。今結驢(氣結の病)已に解けて、輪瀉止まずんば元氣殆ど傷を受く。宜しく梁を飯し、肉を食ひ、以て其の常に復せんことを求むべきなり」と言つて、病毒を掃ふ下劑に譬へてゐる。要するに北山は、所謂破壊者であつて建設者ではなかつた。舊弊を打破するに急であつて、自ら新作を提供するに至らなかつた。謾圃派の勢力を覆すには成功したが、詩文章界に刷新の實を擧げるには、寛政の三博士(別項)や六如・寛齋の力を借らねばならなかつた。【佐久】

北山抄

北山抄
有職 十卷
【著者】藤原公任(諸本)公任自筆の斷簡が三條公爵家に藏されてゐる。丹鶴叢書・増訂故實叢書所收。

朝儀等を知るには、重要缺くべからざる書である。【石村】

北枝

北枝(姓名)立花氏。一時土井氏を冒す。通稱源四郎(春の鹿)。【別號】鳥翠臺(壽天軒?)・趙(一字名乗か)。「生殘」生年未詳。享保三年(三七八)五月十二日歿。享年五十四歳前後か。【墓所】加賀金澤卯辰山心蓮社(開歷)加賀小松の人、金澤に住す。牧童(別項)の弟で、共に研師である。初め談林の俳諧に入つたが、後、蕉風に歸し、元祿二年七月「奥の細道」の旅の芭蕉が金澤に來た時に對顔した。この時、山中温泉での曾良・芭蕉との三吟の所謂蕪歌仙を芭蕉が改削批評したものが、後に「山中集」と題して出版され、また同温泉で芭蕉が俳諧について語つた事どもを筆記した「山中問答」も後に出版された。この時芭蕉等と句空の柳陰庵に泊つた時、秋の坊と俳諧上の諍ひをしたりした。芭蕉を送つて越前松岡の茶店で別れる時、芭蕉から扇に「物書て扇引さく名殘かな」の句を書いて與へられた。芭蕉が翌年幻住庵の柱に懸けてゐた越の菅菰は、この時北枝が芭蕉に贈つたものである。翌三年の元日に、歳暮に萬子から贈られた白米について「元日や壘の上に米俵」の歳旦吟を詠んで芭蕉から稱美の手紙を得、同年三月類焼の時、「焼けにけりされども花は散りすまし」の句を詠んで再び芭蕉から激賞された。翌四年には故友金子楚常の遺編を補修して「卯辰集」を出版し、芭蕉の歿後、三回忌の元祿九年に追善集「張の名殘」を編んだ。この頃から支考が屢々北陸地方へ來つて勢力扶植を謀り、北枝は不即不離の態度を持してゐたらしいが、北枝が寶永三年に再び類焼した時には、支考は「家見

舞」を編んでゐる。かくて享保三年、「書て見たり消したり果はけしの花」の句を辭世として歿し、霸充が追悼集「けしの花」を編んだ。【人物・作風】「俳諧世説」には數々の逸話を擧げてゐるが、どの程度まで信ぜられるかが疑はしく、人物も一種の畸人の如く叙せられてゐるが、それ程の畸人であつたと思はれない。ただ兄牧童と共に居眠りを事としたことは、「牧童傳」や彼自ら言ふ所(居眠辭)によつて確かであり、又上述の歳旦吟や類焼吟等によつて見て 金城四如軒画



立花北枝

【北宗畫】略して北畫とも云ふ。南宗畫(別項)に相對立するものである。南北名稱の由來は支那の地理上の謂ひか、禪宗の南頓北漸の區別に準じたものか、種々議論はあるが未だ詳らかでない。この兩畫派の對立を提唱したの

家大系國生川春明○俳林小傳中村光久○俳諧人物便覽三浦若海○在門名家句集卜尺の部安井小酒

見るのであつて、以後足利時代に至つては禪宗の畫僧を中心としてまつ祭え、やがて専門的な諸畫派を形成するに至つたのである。狩野派(別項)を初めとして、雲谷・長谷川(別項)・海北(曾我(別項)・土岐・山田等の諸畫派は即ち皆北宗畫の範疇に屬するものであつて、日本ではこれをまた「漢畫」とも呼んでゐるのである。この北宗畫に對立する南宗畫は、徳川中葉に至つて、初めて傳來したに過ぎず、それ

れども、これは許六の常の偏頗な論に過ぎない。北枝には「とりはやし」と云つたやうな巧緻な所はあるが、それは決して纖弱なものではない。而も享保期まで生存した蕉門の諸傑は風調の低下した人が多いのに、北枝は殆ど低下を示してゐない。こゝに北陸蕉門の雄たるに恥ぢない所がある。

【著作】山中問答一冊(嘉永頃刊)○卯辰集二

【北宗畫】略して北畫とも云ふ。南宗畫(別項)に相對立するものである。南北名稱の由來は支那の地理上の謂ひか、禪宗の南頓北漸の區別に準じたものか、種々議論はあるが未だ詳らかでない。この兩畫派の對立を提唱したの

家大系國生川春明○俳林小傳中村光久○俳諧人物便覽三浦若海○在門名家句集卜尺の部安井小酒

徒は奇僻に傷らる。皆故意になし出せる家風にて大に自然の氣象に乏し。其の流弊一は剽窃塗抹となつて自ら一語をも造し得ず。一は鄙俚淺近となつて街談巷語に頼るのみ。是等みな全く風雅の趣を失へり」といひ、「拙堂文話」には、「我が邦従前の文字庸陋なり。時豪（荻生徂徠等）を指す之を患へ李王を修めて始めて雅なり。修辭の弊塗澤摸擬。時豪（北山等）を指す之を患へ袁（明の徐渭、字は文長）を修めて始めて眞なり。皆時務を知るの俊傑と謂ふべし。然れども皆濁下の藥にして暫く用ふ

六卷は備忘、七卷は都省雜事、八卷は大將要抄、九卷は羽林要抄、十卷は吏途指南と題してある。これ等は各別種の抄録であるのを後人が集めて一書とし、公任の晩年、隱栖の地である北山に因んで「北山抄」と稱したものであらうと稱せられてゐる。【價值】「古事談」に、「知足院殿仰云、四條大納言（公任）北山抄は神妙之物也。大二條殿（教通）を尊に取て、九條殿（師輔）の御記をも伺見て候たる間、めでたき物にてある也」とあるが、「延喜式」西宮記（各別項）に次いで、「一條天皇・後一條天皇頃の

の元日に、歳暮に萬子から贈られた白米についで「元日や壘の上に米俵」の歳旦吟を詠んで芭蕉から稱美の手紙を得、同年三月類焼の時、「焼けにけりされども花は散りすまし」の句を詠んで再び芭蕉から激賞された。翌四年には故友金子楚常の遺稿を補修して「卯辰集」を出版し、芭蕉の歿後、三回忌の元祿九年に追善集「喪の名残」を編んだ。この頃から支考が屢々北陸地方へ來つて勢力扶植を謀り、北枝は不即不離の態度を持してゐたらしいが、北枝が寶永三年に再び類焼した時には、支考は「家見

ものが故友と舊師とのためのものだけに止まつてゐる點から見て、恬淡實直な一面をも想見せしめる。俳諧に於ては、芭蕉が上述の如く稱讚の手紙を與へてゐるのみならず、許六の手紙に、「加賀に北枝ありと翁の譽め給ひしも、あかしの句を聞たる故ながら（雅文せうそこ）と云つてゐる點から、芭蕉が北枝の技倆を認めてゐた事が知られる。かく傳へてゐる許六が、同門評判「俳諧問答」には「北枝が器大かたなり。花實も有りて實すくなし」とか、「りはやしばかり眼に入る」とか云つてゐるけ

れども、これは許六の常の偏頗な論に過ぎない。北枝には「とりはやし」と云つたやうな巧緻な所はあるが、それは決して纖弱なものではない。而も享保期まで生存した蕉門の諸傑は風調の低下した人が多いのに、北枝は殆ど低下を示してゐない。こゝに北陸蕉門の雄たるに恥ぢない所がある。

【著作】山中問答一冊（嘉永頃刊）○卯辰集二

冊（元祿四年刊）（各別項）○喪の名残二冊（元祿十年刊）○北枝發句集一冊（北海編天保三年刊）○蕉門名家句集北枝の部（安井小酒編）

はれる。ト尺は俳諧の方では、延寶三年の「談林十百韻」に加はつて居り、同四年の蝶々子の「俳諧當世男」や、同六年の「二葉子の「江戸通り」言水の「江戸新道」などに芭蕉と共に加はつてゐるから、やはり芭蕉と同じく貞門から談林調へ轉じたことが知られ、同八年の「桃青門弟獨吟二十歌仙」には、踞齋ト尺として加はつてゐる。この後、天和二年の千春の「武藏曲」、同三年の其角の「虚栗」や貞享二年の清風の「稻薙」などに作が見えるが、この後は元祿三年の嵐雪の「其袋」に見える「秋の空富士を色々になぶりけり」の句が、後の彼此の集に取られてゐる事が目に着く位で、その他作が殆ど目につかない位になり、七部集の各集にも更に作が見えない如き状態になつてゐる。この點から考へると、元祿頃からは殆ど俳諧を捨てたものらしく、かくて蕉風早期の作家として了るに至つた人らしい。

【参考】綾錦菊岡活涼○奥の細道菅菰抄芭蕉翁傳高橋梨一○蕉門諸生全傳遠藤日人○筠庭雜錄喜多村信節○續俳家奇人談竹内玄々一○俳

見るのであつて、以後足利時代に至つては俳宗の畫僧を中心としてまつ祭え、やがて専門的な諸畫派を形成するに至つたのである。狩野派（別項）を初めとして、雲谷・長谷川（別項）・海北・曾我（別項）・土岐・山田等の諸畫派は即ち皆北宗畫の範疇に屬するものであつて、日本ではこれをまた「漢畫」とも呼んでゐるのである。この北宗畫に對立する南宗畫は、徳川中葉に至つて、初めて傳來したに過ぎず、それまでの日本畫壇は、平安朝以來の古典的な大和繪以外は、専らこの北宗畫ばかりの状態であつた。

【参考】牧童傳各務支考（草刈館、風俗文選）○風俗文選作者列傳（森川許六）○俳諧問答同門評判同上○春の鹿魯九○芭蕉翁頭陀物語（建部涼翁）○雅文せうそこ三宅嘯山○俳諧世説高桑關更○北枝會（追善集）眉山○俳家奇人談竹内玄々一○蕉門諸生全傳遠藤日人○三四考關里○北枝の追善集（桂井未翁、懸葵昭和三ノ八）○卯辰集編者楚常に就いて（同上）（懸葵昭和五ノ一〇）○蕉門十哲志田義秀（岩波講座日本文學）

【参考】綾錦菊岡活涼○奥の細道菅菰抄芭蕉翁傳高橋梨一○蕉門諸生全傳遠藤日人○筠庭雜錄喜多村信節○續俳家奇人談竹内玄々一○俳

【作者】久米正雄（發表）大正三年三月第三次「新思潮」の第二號に「牛乳屋の兄弟」と題して發表。【刊行】改題して戯曲集「阿武隈心中」に收む。その他、久米正雄全集、日本戯曲全集等に所収。【興行】大正三年九月、有樂座にて新時代劇協會が原題の下に初演。

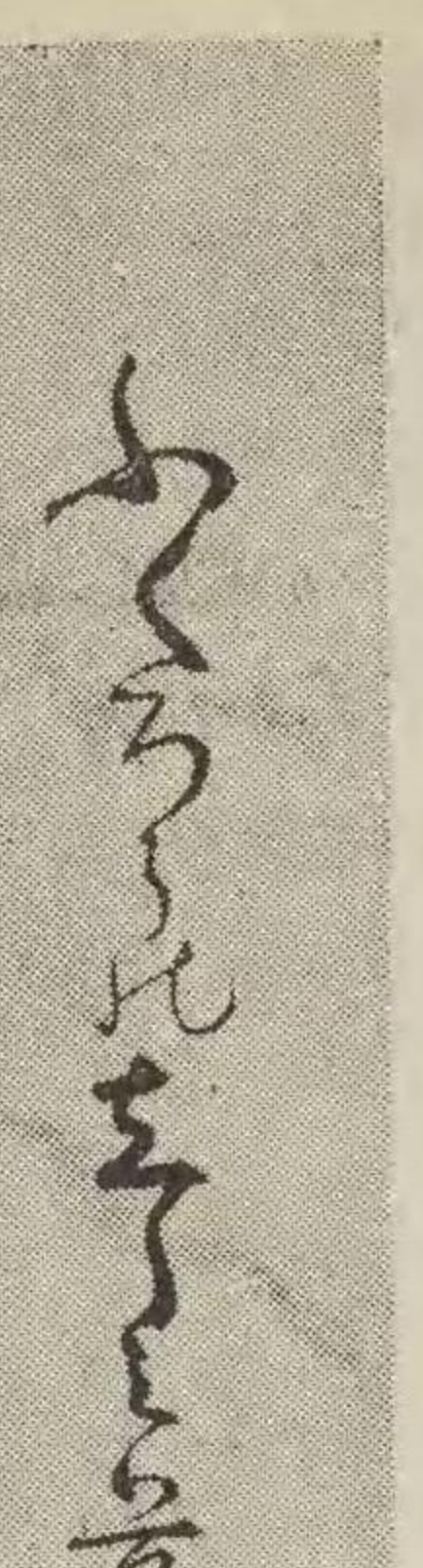
【梗概】東北地方の或る小都會に近い牧場岩木耕牧舎では、炭疽病で持牛が五頭も斃れて行き、その上に一月の賣乳禁止を食ふ悲境にあつた。牧場主の源吉はこの重なる痛手の凌ぎをつけようと焦つて、もう微菌のないのをいゝ事に、私かに牛酪を密造したり、同業者へ牛乳を密賣したりしてゐる。一方雇人の側では、給料が三分も渡らないので、ストライキを起さうと策動を企ててゐる。而も彼等の中でも配達の清藏は、牛の飼料を盗み出しては女郎買に遣つてゐるし、搾乳夫の正吉は、都會から不良で歸つて來てゐる源吉の姪を目當てに忠義立てに牛酪密造まで手傳つてゐる。それに源吉自身もまた、弟清二の妻に懸想し

ト尺（ト尺）俳人（姓名）小澤氏。通稱太郎兵衛【號】踞齋。初め孤吟。芭蕉門に入つてト尺と改む。【生歿】生年未詳、寛延四年（二四一）九月三十日歿す。享年未詳。【墓所】淺草誓願寺【前傳】初め季吟門、後芭蕉門。【閱歴】父は得入と號し、通稱太郎兵衛、江戸本船町の名主で、連俳を善くした（寶永六年十一月二十四日歿、誓願寺に葬る）。ト尺は父の業を繼いで、本船町の名主であつた。寛文十二年

【参考】綾錦菊岡活涼○奥の細道菅菰抄芭蕉翁傳高橋梨一○蕉門諸生全傳遠藤日人○筠庭雜錄喜多村信節○續俳家奇人談竹内玄々一○俳

【作者】久米正雄（發表）大正三年三月第三次「新思潮」の第二號に「牛乳屋の兄弟」と題して發表。【刊行】改題して戯曲集「阿武隈心中」に收む。その他、久米正雄全集、日本戯曲全集等に所収。【興行】大正三年九月、有樂座にて新時代劇協會が原題の下に初演。

【梗概】東北地方の或る小都會に近い牧場岩木耕牧舎では、炭疽病で持牛が五頭も斃れて行き、その上に一月の賣乳禁止を食ふ悲境にあつた。牧場主の源吉はこの重なる痛手の凌ぎをつけようと焦つて、もう微菌のないのをいゝ事に、私かに牛酪を密造したり、同業者へ牛乳を密賣したりしてゐる。一方雇人の側では、給料が三分も渡らないので、ストライキを起さうと策動を企ててゐる。而も彼等の中でも配達の清藏は、牛の飼料を盗み出しては女郎買に遣つてゐるし、搾乳夫の正吉は、都會から不良で歸つて來てゐる源吉の姪を目當てに忠義立てに牛酪密造まで手傳つてゐる。それに源吉自身もまた、弟清二の妻に懸想し



北枝の遺蹟

あらゆる點で亂脈を極めてゐるのだつた。牧場の經營を助けてゐる清二は、飽く迄も一克な正義派なので、兄が法律を犯してゐる不正を知り、又内部の亂脈が解るにつれて頻りに心を痛め、斷然兄を改めさせようとする。丁度、妊娠の身で嫉妬に狂つてゐた嫂が難産のために死んだ。その翌朝、清二は不正牛乳を搬出しようとしてゐる現場で兄を抑へ、一氣にその行爲を暴き立てて諫止する。しかし重なる災厄と經濟的な逼迫とを楯に、源吉も容易にこれに應ずることなく、遂に二人は格闘までして争ふに至る。そして清二から妻への不倫な行動を責められるに及んで、源吉は最早や錯綜した苦惱にデスペレトな氣持になつて櫻林室に飛びこんで鍵をかけ、火を放つて自殺を計つた。弟は驚いてこれを救はうとあせりながら、濃々たる煙の裡に激しく扉を叩き、狂氣の如く兄の名を連呼する。

【批評】未だ大學の一文科學生たりし時の作に拘はらず、早くも彼が卓越の素質と豐饒な才能とを發揮し、當時の創作戯曲壇の水準を抜いて華々しい出世作となつたものである。堂々たる構成の三幕物の社會劇であるが、複雑した筋を些の破綻なく纏め上げて靈妙な技巧を以て描き盡し、半歳にして脚光を浴びると共に、劇壇に矚目すべき新星の出現したことを告知するに至つた。深刻な現實的事相を題材としながら、徒らに苦澁に墜ちることなく、明快にして機智的な手法と抒情的流露感とに俟つて、この劇的物語は渾然として一個興趣に充ちた作品を成してゐる。この故を以て、舞臺的にもよく成功を齎し得て、數次の上演に於ても、つねに好評を得た。大正初期の代表的名作たるは勿論として、その後生る

加へる。「三十四編」尾上之助は機作、松枝の子越路にあひ、「三十五編」英壽丸からの迎への使者、ぬば玉蘭六と松枝とに、越路を預けて大和へ歸らせる。「三十六編」越後板鳥の宿外れで、尾上之助は多賀の浪人小柴左門の娘濱風と、その子筆吉の難儀を救ふ。「三十七編」處の地頭小田大江は、殺人の罪で捕へられた尾上之助を湯尾時放つ。「三十八編」由縁之丞は雪若と詐稱して、尾上之助の手紙

べくして多く生れざる社會劇の分野にあつては、今日と雖も、なほ推重に値する作品たるを失はない。

墨水遺稿

三卷【著者】黒川春村【編者】黒川眞道【刊行】明治三十一年弘文館、和装三册、洋装一册【解説】春村の著書が多く寫本で傳はつて刊行されたものが少いので「親しき友だち、あるは門人などの、ねんごろにすゝむるまゝに」「古物語類字鈔」(第一卷)、「競物名彙」(第二卷)、「歴代大佛師譜」(第三卷)を輯めたものである。「古物語類字鈔」は物語めかしき名を我が國古典の中から集輯し、「競物名彙」は扇合・石合・歌合等の競物の名を同じく古典より引用し、「歴代大佛師譜」は春村が佛師傳に備忘的に補筆しつづつたものである。【土井】

墨水一滴

隨筆一卷【著者】稻葉正信【解説】儒家稻葉默齋の漢文隨筆で、江戸時代初期の儒者等の逸事類を録したものである。藤原惺窩・林道春・那波道圓・山崎闇齋・佐藤直方・淺見綱齋・若林強齋・友部安宗・榎並正固・荻生徂徠・稻葉迂齋等の言行が斷片的に記されてある間に、經史類にかゝる著者の感想談も交つてゐる。明和三年著者の自序がある。

著者小傳

稲葉正信。通稱は又三郎、號は默齋。江戸の儒者迂齋の男、亦儒を以て業とした。寛政十一年歿す。享年六十八。外に「先達遺事」の著作がある。【和田】

墨水消夏錄

地誌隨筆三卷【著者】蘭洲東秋風(傳未詳)【成立】文化十四年稿【諸本】燕石十種第一所收。【解説】著者が曾て江戸京橋具足町に住した時、「遂尋其事跡廣求舊記、慶長以來百有餘年」といふや

うな一種の考證辭から、隅田川に近い淺草に移つた夏の間に、備忘的に書き綴つたものであつて、日本橋・本町・橋場・關屋の里などの地誌的なもの、幾世餅・淺草文庫・淺草海苔・清掃等の考證的なもの、道徹・吉原甚右衛門・芭蕉などの傳記的なもの等、約七十餘の項目を含む。【土井】

北雪美談時代加賀見

合卷四十八編【各編四册合二册】【作者】二世春水(初編一四十四編)柳水亭種清(第四十五編一四十八編)【畫工】豊國(香蝶樓)國貞・梅蝶樓・國明・吟光【刊行】初編安政二年刊。第四十八編明治十六年刊。若狭屋板。【名稱】「時代鏡」とも書く。加賀騒動を時代物の世界に描く意味であつて、實録物の「北雪美談金澤實記」を借用し、且つ演劇の加賀見山に通はせる。【諸本】續帝國文庫第三十編に、第四十四編迄の本文を収め、猪波曉花がその後を補作してゐる。【題材】「見語」「金澤實記」の實録物、「繪本雪鏡談」(文化二年刊、速水春曉齋作、讀本)、「加賀見山舊錦繪」(別項)その他の加賀見山狂言及び、その後日物の趣向に據る。【梗概】「初編」多賀の大領正方が狩場で傷いた時、温泉に案内して癒やさせた娘手寄は、迎へられて正方の小姓となる。「二編」手寄は實は男子で、元服して藤浪由縁之丞春辰と名告り、養母の仇討に出る。嘗てお初に殺された岩藤が夢に現はれ、由縁之丞は岩藤に血縁があり、且つ多賀家に怨みのある荒地家の者と教へ、多賀家と二世尾上(お初)の養嗣初浦尾上之助へ怨みを晴らせと告げ、化蝶の術と舊怨の草履とを授ける。多賀家横領を企てる湯尾刀監の密謀を知り、荒地の殘黨船越惣吾を手につかへ、「三編」自ら物語と偽つた由縁之

の趣向をとり入れ、岩藤の血縁者と尾上の後繼者による草履打や自害を盛つてゐる。全體的に、「白籠語」(別項)に刺戟されて創作したと思はれ、人物の取合せや趣向上に類似點が多い。變態的な時代趣味、善惡二様に働く美少年の活躍、異性の變裝等は、幕末期合卷の常である。全編を彩るものは根強い陰謀、復讐の念慮と、それに對立する正義忠節の誠心で、勤懇的な因果の關係を展開し、戀愛の如

承は、惣吾の許嫁の遊女白糸を語り、廓を脱げ出でさせる。「四編」由縁之丞は正方の信任を得て立身する。一方刀監と一味し、由縁之丞の縁者女獵師小笹も亦陰謀に加はる。「五編」小笹・白糸は由縁之丞の推舉で召抱へられ、中老笹尾・腰元菊根となる。由縁之丞と笹尾とは対根を正方にすゝめる。「六編」由縁之丞・笹尾は、物頭野澤丹下に御金藏の盜賊の責を負はせて切腹させる。「七編」白山民部の子雪若は、岩藤の小袖が由縁之丞の片袖と符合するのを訝る。御家を案じる愛妾お貞の方は、雪若と合體して刀監をおびきよせる。「八編」鳥屋萬助は、由縁之丞の養父札作に受けた恩義から、彼の逆心を諫めたが容れられない。刀監がお貞の方の術策に陥り、一味の陰謀が露顯せんとするを、妖蝶の術で由縁之丞が救ふ。「九編」丹下の伴要之助と許嫁の小萩は、越後如法寺の蜂澤に頼る。要之助は新湯の遊女屋で、新造小花の馴染品七を助け、戀敵上無無上太と決闘させる。「十編」上無一流軒は我が子無上太を勘當する。品七は一流軒が、妻魔風の妹に生ませた子である。「十一編」小萩に對する蜂澤の毒手を避けて、要之助・小萩は逃げる。「十二編」菊根の生んだ若君の病死を隠し、由縁之丞・笹尾は旅の女の赤子を替玉にする。「十三編」一流軒の留守中、魔風は品七夫婦を殺害せんとする。「十四編」替玉の若君の秘密を種に、由縁之丞をゆすりに來た旅僧戒念は、荒地英壽丸を助けて多賀家を狙ふ由縁之丞の實父矢田忠太であつて、父子共に事を謀る。「十五編」お貞の方・雪若・尾上之助は、刀監に對する謀略を練る。「十六編」菊根は蝶にさゝられて醜貌となつたが、戒念の秘法で本復する。「十七編」合法ヶ

年六十。【法名】本性院雪丸日遊居士(墓所)江戸芝區白金臺町誠瀨山妙圓寺(但し同寺院の過去帳には法名を記してゐるが、墓石及び墓所は現存せず)【開歴】越後高田榊原家の臣、江戸詰であつて、高田は「五虎猛勇傳」(天保元年刊、雪齋作)に見えるが如く、その僑居である。父は田中稻右衛門、雪齋はその三男で、兄は狂名を竹馬友成と言ひ、文化八年頃歿したらしい。雪齋は畫を喜多川菊齋に學び、雪齋の號は郷

堂々たる構図の三幕物の社會劇であるが、複雑した筋を些の破綻なく纏め上げて靈妙な技巧を以て描き盡し、半歳にして脚光を浴びると共に、劇壇に囑目すべき新星の出現したことを告知するに至つた。深刻な現實的事相を題材としながら、徒らに苦澁に墜ちることなく、明快にして機智的な手法と抒情的流露感とに俟つて、この劇的物語は渾然として一個興趣に充ちた作品を成してゐる。この故を以て、舞臺的にもよく成功を齎り得て、數次の上演に於ても、つねに好評を得た。大正初期の代表的名作たるは勿論として、その後生る

【著者小傳】稻葉正信。通稱は又三郎、號は默齋。江戸の儒者迂齋の男、亦儒を以て業とした。寛政十一年歿す。享年六十八。外に「先達遺事」の著作がある。【和田】
墨水消夏錄（傳未詳）地誌、隨筆。三卷。【著者】蘭洲東秋風（傳未詳）【成立】文化十四年稿。【諸本】燕石十種第一所收。【解説】著者が曾て江戸京橋具足町に住した時、「遂尋其跡跡廣求舊記、慶長以來百有餘年」といふや

【梗概】【初編】多賀の大領正方が狩場で傷いた時、温泉に案内して癒やさせた娘手寄は、迎へられて正方の小姓となる。【二編】手寄は實は男子で、元服して藤浪由縁之丞春辰と名告り、養母の仇討に出る。嘗てお初に殺された岩藤が夢に現はれ、由縁之丞は岩藤に血縁があり、且つ多賀家に怨みのある荒地家の者と教へ、多賀家と二世尾上（お初）の養嗣初浦尾上之助へ怨みを晴らせと告げ、化蝶の術と舊怨の草履とを授ける。多賀家横領を企てる湯尾刀監の密謀を知り、荒地の殘黨船越惣吾を手につかへ、【三編】自ら物吾と偽つた由縁之

【梗概】【初編】小萩に對する蜂澤の毒手を避けて、要之助・小萩は逃げる。【二編】苜根の生んだ若君の病死を隠し、由縁之丞・笹尾は旅の女の赤子を替玉にする。【三編】一流軒の留守中、魔風は品七夫婦を殺害せんとする。【四編】替玉の若君の秘密を種に、由縁之丞をゆすりに來た旅僧戒念は、荒地英壽丸を助けて多賀家を狙ふ由縁之丞の實父矢田忠太であつて、父子共に事を謀る。【五編】お貞の方・雪若・尾上之助は、刀監に對する謀略を練る。【十六編】苜根は蝶にさゝられて醜貌となつたが、戒念の秘法で本復する。【十七編】合法ケ

汁で戒念は入定すると見せかけ、朝日の彌陀の尊像を奪つて大和へ赴く。由縁之丞は草履で尾上之助の面上をうち、岩藤の怨念を晴らす。【十八編】尾上之助は幼時に越後へ養子に行つた双生兒の弟換作に會ひ、【十九編】それに身代りの自殺をさせる。【二十編】大和三輪の里で荒地英壽丸は女装して十六夜姫と名告り、武勇の士を求め。【二十一編】要之助は正香丹四郎と改名し、鎌倉で劍道指南をする。要之助を兄の仇と狙ふ百姓加助が弟子に住み込む。【二十二編】加助母子は、丹四郎の辯明によつて疑ひを解く。蜂澤は無上太と共に丹四郎を讒訴する。【二十三編】取調の役人佐原道平夫婦は、舊恩により丹四郎の冤を雪がうとする。【二十四編】加助は蜂澤に一味した野良松運四郎を證人として丹四郎を救ふ。【二十五編】由縁之丞は尾上之助の自殺を喜ぶ。【二十六編】彼の取りなしで、初浦家は一子鹿吉が相續する。【二十七編】由縁之丞と苜根の方との密會を、老女花江が厳しく戒め、正方の媒妁で尾上之助の兄山川直記の娘若魚を娶らせたが、奥入の際に若魚は、自害する。【二十八編】正方の妹雪姫の侍女に、關取壘ヶ嶽の妹折鬼といふ大力女を薦める。【二十九編】折鬼は荒地の浪人の子で、又一味に加はる。【三十編】盲目の門附に身を落した小萩を、熊谷の旅宿で花作が殺さうとし、【三十一編】誤つて亭主鬼門次の子鬼次郎を殺し、小萩は一流軒に救はれる。【三十二編】丹四郎・加助は國許へ歸る途中、輕井澤の野原で女賊稻妻に襲はれる。稻妻は幼時怪鳥に攫はれた丹四郎の妹露路である。【三十三編】稻妻は由縁之丞を見染め、これを妙義の山寨に拉致する。由縁之丞は稻妻を一味に

加へる。【三十四編】尾上之助は換作・松枝の子越路に會ひ、【三十五編】英壽丸からの迎への使者、ぬば玉蘭六と松枝とに、越路を預けて大和へ歸らせる。【三十六編】越後板島の宿外れで、尾上之助は多賀の浪人小柴左門の娘濱風と、その子筆吉の難儀を救ふ。【三十七編】處の地頭小田大江は、殺人の罪で捕へられた尾上之助を湯尾時放つ。【三十八編】由縁之丞は雪若と詐稱して、尾上之助の手紙を持つて來た濱風等に會ひ、文面に驚き、濱風等を監禁する。【三十九編】大江は白山父子と議して由縁之丞を警戒する。【四十編】由縁之丞の僕出子助は濱風等の毒殺を命ぜられたが、舊恩に感じてこれを遁す。【四十一編】濱風等の三人は大江に救はれたが、由縁之丞は妖術でその言葉を封じる。【四十二編】由縁之丞は稻妻の手下の天狗魂魔九郎をかたらふ。【四十三編】由縁之丞・稻妻・魔九郎等は大江を圍討しようとして失敗する。大江は偽の雪若を由縁之丞と知る。【四十四編】奴に變装した稻妻は、由縁之丞に代つて湯起請をする。由縁之丞・笹尾は正方に讒して大江・民部等の心を疑はせる。【解説】芝居の加賀見山を継ぎ、後日物に趣向するに際して、劈頭に岩藤の遺骨の祟りを出し、その荒筋を尾上之助に物語らせ、奥庭仕返しの場合、舞臺その儘に挿繪であらはず。一貫するものは、實録加賀騒動の大槻長玄の曾孫となつてはゐるが、實際は長玄に相當する由縁之丞及び、淺尾に當る笹尾の陰謀であつて、趣向の節々に、實録その儘、或はそれを脱化して見せてゐる。又、南北作の「櫻花大江戸入船」(天保八年三月中村座上演)の通稱「骨寄せの岩藤」や、合巻にも屢々見える二代目尾上

の趣向をとり入れ、岩藤の血縁者と尾上の後繼者による草履打や自害を盛つてゐる。全體的に、「白蛇譚(別項)」に刺戟されて創作したと思はれ、人物の取合せや趣向上に類似點が多い。變態的な時代趣味、善惡二様に働く美少年の活躍、異性の變装等は、幕末期合巻の常である。全編を彩るものは根強い陰謀、復讐の念慮と、それに對立する正義忠節の誠心で、勤懲的な因果の關係を展開し、戀愛の如きも全く方便視されてゐる。由縁之丞は奸佞ながらも、深慮・沈着・大膽であり、その英雄的な風貌は、刀監等の小人的な失敗と鮮かに對比され、謀計露顯の端緒には、かなり細心の用意と自然さが認められる。破綻を妖術をもつて補ふ事の頻出には、作者自身も氣附いてゐたらしい。實録・演劇の大立物堀井又助を故意に裏面にまはし、七不思議の傳説などを用ひて、土地を北越らしくしてゐる。越後・鎌倉・大和・難波と背景は移り、挿話も多いが、由縁之丞・尾上之助に總てを聯絡した點に、幾分の統一を保つてゐる。豊國は外題繪を描いたが、第四十三・四十四の兩編には、本文の繪にも筆をとつた。安政七年、默阿彌は南北の舊作に加筆して「鏡山再岩藤」を書いてゐるのは、本作の世評に刺戟された爲めであらう。明治十四年二月東京春木座に於て竹柴金作の脚色で、通し狂言として「北雪美談時代鏡」を上演し、好評を博した。柳水亭種清作(第四十五編以下)の部分は未見である。【小池】

【姓名】通稱田中善三郎、名は親義、字は廣徳。【號】敬丹舍。雪麿は「ゆきまろ」「ゆきまろ」と兩様に假名書にする。【生歿】寛政九年に生れ、安政三年(二五・一六)十二月五日歿す。享年六十。【法名】本性院雪丸日遊居士(墓所)江戸芝區白金臺町誠滿山妙圓寺(但し同寺院の過去帳には法名を記してゐるが、墓石及び墓所は現存せず)【閱歴】越後高田榊原家の臣、江戸詰であつて、高田は「五虎猛勇傳」(天保元年刊、雪麿作)に見えるが如く、その僑居である。父は田中稻右衛門、雪麿はその三男で、兄は狂名を竹馬友成と言ひ、文化八年頃歿したらしい。雪麿は畫を喜多川菊麿に學び、雪麿の號は郷國の雪に菊麿の一字を加へたものらしく、「小柳菊阿彌帶止」(文政五年刊、雪麿作)には、北川雪麿の署名が見える。狂歌は兄の影響をうけて鹿都部眞顔(別項)に學び、ついで安政に入つてから合巻の創作をはじめ、柳亭種彦(別項)に師事し、種彦校の作品をも出してゐる。中位の作者として世評も悪くなく、交友は廣かつた。公務の傍ら専ら戯作を樂みとし、越後高田に僑居した際の如きは、その地から草稿を江戸の書肆に送つてゐる。寡作であるが毎年三四部づつ創作し、文政十一年には九部を刊行、翌十二年には七部を出し、その以後は次第に減つて行くが、なほ創作を廢せず、嘉永四年に及んでゐる。謙讓・温順の好人物らしく、街學的の態度は全く見えず、正直に自己を表明し、時には自嘲の態度をさへ現はし、さらりとした江戸ッ子肌であつて、自ら「江戸戯作者の實生」と肩書する。實子を田中源治良といふ。【代表作品】【合巻】弘智法印當院廻松(文政五年、國直書)○小柳菊阿彌帶留(文政五年、國安書)○兩個嬌容(文政六年、國直書)○稽古本柳燕口(文政六年、國直書)○玉櫛菊兩個姿見(文政七年、國直書)○夏木立戀繁枝(文政八年、國直書)○鎌田又八強力譚(文政九年、英泉書)○戀

角力赤繩取組(文政十年、二世重政書) ○入船帳忠義之湊(文政十一年、英泉書) ○風俗列女傳(文政十二年初編より天保三年三編まで、國貞二世豊國書) ○傾城三國誌(天保元年初編より天保六年四編まで國貞書) ○五虎猛勇傳(天保元年初二編より天保八年四編、重政書) ○七奇越後砂子(天保四年、國安筆書) ○國姓爺合戦(天保五年、國貞書) ○千本櫻後日仇討(天保七年、貞虎書) ○人形手新圖更紗(天保九年、國貞書) ○釣華生梅廼(三日月、嘉永二年、英泉書) ○咲替舞日記(嘉永三年、初三編より嘉永五年六編まで、國輝書) ○詞花宣草紙(嘉永四年、初二編、國輝書。歿後安政五年に再版)。

【作風】支那小説やその他の俗耳に遠い物を避け、通俗平易で、子供にも喜ばれるやうな作品をよとする態度を早くから標榜した。これは天性の童心からであつたらう。「江戸作者部類」には、年毎に自己の草子の發兌を待ちわびたことを傳へてゐる。支那小説の影響は尠く、多くは先行の淨瑠璃本や演劇に取材し、率直に據るところを明示し、又郷國越後の深雪の様や北越七不思議等をも取入れてゐる。殆ど世話物の行き方であつて、芝居の影響が濃く、種々の手法を屢々眞似てゐる。京傳、馬琴、京山等の影響が見え、就中、京傳の作品との關係は深く、「骨董集」(別項)などからも取材してゐる。長篇物は不得意であり、謙遜な彼は畫工名を多くは自己の署名の上に記してゐる。狂歌も相當に作り、屢々作中に出してゐる。文章は早くから七五調を用ひ、流麗ではあるが合卷の文章としては缺陷がある。門弟には、墨春亭梅齋がある。梅齋は通稱小山平吉、後、平七と改めた。「江戸作者部類」には「御用達町人神聖方深秘藏棟梁」であると、雪齋の親友ではあるが弟子ではなく、所

望にまかせて墨の一字を送つたといふ事を雪齋の語として傳へてゐる。【小池】

【北窓瑣談】(著者)橋春暉(南窓)【刊行】文政十二年【諸本】二本ある。一本は文政八年版行、三卷、部關牛挿圖のもの。今本は外題の頭に校正の二字を加へ、文政十二年所刊、一柳嘉言挿圖のものである。蓋し今本は舊本を取捨改補したものであらう。【解説】前後兩編、每編四卷より成る。前編卷一は草花の色以下數十項、卷二は日向國高千穂峯以下數十項、卷三は人のあしき事は語るべからず以下數十項、卷四は葛草の左巻以下數十項、後編卷一は敷茂二郎先生以下、卷二は八橋檢校筑紫等の組以下、卷三は山中人の長壽以下、卷四は本邦の算術以下各數十項を収めてゐる。前編に文政八年橋春徳、無年紀橋春菴の序、後編に文政八年菅原長詔の序がある。

【著者小傳】著者橋春暉は宮川氏、字は惠風、南谿又は梅華仙史と號す。伊勢の人、京都に出でて醫を以て生業とした。博覽多識、文章の才があり、常に旅行を好んで足跡極めて廣く、これを著はすに記文を以てした。その「東遊記」「西遊記」各別項の著は汎く世に行はれてゐる。文化二年四月歿す。享年五十三。「傷寒論分註」「傷寒外傳」「傷寒論爾言」「痘疹水鏡傳」「痘疹玉環方」等の著述がある。【和田】

【北窓雜話】(著者)片山圓然【諸本】百家隨筆第三所收。【解説】著者の見聞録・感想談であるが、神儒佛三道の融合及び我が國體の萬邦無雙を説くに努め、更に西洋星學の優長を述べてゐる。又日蓮宗對淨土宗等の論争史を掲げ、柔術の濫觴を記し、自己の遭遇した江戸三大火(明和九年、寛政

九年、文化三年)、天明二年の江戸大震、天明七年の米屋騒動等を録することや、詳細である。卷一に西洋天象惑耳驚心以下十七條、卷二に四大師評判(弘法、傳教、慈覺、智證)以下十六條及び追補二十五條を収めてゐる。文政九年の著者自序がある。

【著者小傳】片山圓然は、號を松齋と云つた。和・漢・儒・佛の學に通じ、泰西の學術にも心を傾け、天明・文政間に雜學者を以て鳴つた。歿年不詳。「蒼海一滴集」「清史纂要」「王代一覽續編」等の著作がある。【和田】

【北庭樂】(著者)北庭に作られたからこの名があるといふ説があるが明かでない。【異稱】北亭子・曲亭子・北亭樂・雙鼻麗【性質】唐樂。新樂の中曲。壹越調曲に屬す。拍子十四。舞があり、四人で舞ふ。舞者は常裝束、烏甲を冠る。答舞には「八仙」(別項)を用ひる。「沿革」「教訓抄」には是は亭子院(宇多天皇の御時、不老門の北庭にて作之。作者不見。可尋也)とある。然るに「體源抄」には、或云、大國の法始成夫婦之日、於家北面奏此曲、必入妻居北面云々」と。「大日本史」禮樂志には、この兩説を掲げて「體源抄」の説に従ひ、これ唐樂なること疑ひなしといひ、「教訓抄」の説に對しては、恐らく樂名に因つてこの説を附會するなりと言つてゐる。然るに又白石の「樂考」には異説を掲げ、「本北狄の樂、唐西涼節度使益嘉運所作」と説いてゐる。諸説紛々として定まるところないが、要するに支那から傳來した曲を我が國で改作したものであらうか。樂、舞共に今に傳はつてゐる。【田邊】

【牧童】(著者)俳人(姓名)立花氏。通稱彦三郎(春の鹿)【初號】松葉【別號】帶藤軒・圃

辛亭【生歿】歿年未詳であるが、享保三年の北枝追悼集「けしの花」に悼句の見えない點その他から推して正徳の末か享保の初め頃歿したものと見るべく、又享保八年の「獅子物狂」にある支考の「弔牧童詞」に正月十九日とあれば、同日の歿なること疑ひなく、元祿十五年の支考の「牧童傳」に、「四十年の春秋も過行ぬれば」とあつて、當年四十歳許りであつた事が知られるから、五十四五歳前後で歿したことが知られる。【俳系】芭蕉門【開歷】加賀小松の産で金澤に住す。北枝(別項)の兄で、共に研師を業とした。初め北枝と共に談林に入り、後蕉門に入つた。支考の「牧童傳」は、簡單ながら牧童の正傳として唯一のものであるが、これによると、芭蕉は牧童のことを「牧童はよき者なり」と云つたといふことであり、牧童は芭蕉に見えた時(奥の細道の旅の時であらう)、芭蕉から、素堂の「浮葉茶葉此蓮風情過ぎたらん」の句の蓮は、音で讀むがよいと教へられた外は、別に何事も覺えないと云つたとある。なほ「居眠りをもて生涯の得ものとせり」ともあつて、牧童は至つて恬淡無頓着な好人物であつたらしい。俳諧の作も弟の北枝に比べては遙かに少く、金澤蕉門に於ける地位技術も北枝には劣るが、併し金澤蕉門の中では錚々たる作家である。芭蕉歿後、勢力扶植のため屢々北陸地方に來つた支考に對し、牧童はその言ふが儘になつたと見えて、支考の後見で「草苜笛」を出してゐる。丁度この頃、雲鈴が佐渡へ元祿十三年に往つて十六年に復り、その往復共に牧童を訪つてゐる。【著作】草刈笛(別項)(元祿十六年刊) ○蕉門名家句集牧童の部(同集牧童の傳)

【参考】牧童傳(草苜笛)。風俗文選各務支考。○摩

の序文を掲げてゐる。【内容】美濃判上下二卷で歌數すべて二百十餘首、その狂歌は課題により推設して作つたと思はれるものは稀れで、多くは座興的に詠んだ即吟らしいものばかりで、狂歌としては上乘とは言はれぬが、その挿畫十一丁が菱川師宣の筆だと傳へられてゐるので、今ではこの繪のために珍書として取扱はれてゐる。【野崎】

註庵入日記(卷の鹿島丸) ○獅子物狂(山

寛文六年御番醫師仰付以下の數條が録されて

【諸本】最初の刊本は天和頃

の序文を掲げてゐる。【内容】美濃判上下二

註庵入日記(卷の鹿島丸) ○獅子物狂(山田) ○評語世説(高聖園更) ○蕉門諸生全傳(遠藤) ○續俳家奇人談(竹内玄々) ○俳林小傳(中村光久) ○俳人百家撰(水谷川柳) 【志田】

寛文六年御番醫師仰付以下の數條が録されてゐて、二百依頂戴は寛文七年十二月二十三日、同九年六月十四日に卜養物領ト仙初御目見、延寶元年叙法眼の條があつて、次に同六年十二月六日願に依り隱居仰付られ、同日ト仙家督相續の事が記されてゐる。これによると、卜養は隱居の同月隱居許免、二十一日後に歿した事が知られる。俳諧では貞門の江戸五俳哲(別項)の一人であるが、「滑稽太平記」には卜

の序文を掲げてゐる。【内容】美濃判上下二卷で歌數すべて二百十餘首、その狂歌は課題により推設して作つたと思はれるものは稀れで、多くは座興的に詠んだ即吟らしいものばかりで、狂歌としては上乘とは言はれぬが、その挿畫十一丁が菱川師宣の筆だと傳へられてゐるので、今ではこの繪のために珍書として取扱はれてゐる。【野崎】

の序文を掲げてゐる。【内容】美濃判上下二卷で歌數すべて二百十餘首、その狂歌は課題により推設して作つたと思はれるものは稀れで、多くは座興的に詠んだ即吟らしいものばかりで、狂歌としては上乘とは言はれぬが、その挿畫十一丁が菱川師宣の筆だと傳へられてゐるので、今ではこの繪のために珍書として取扱はれてゐる。【野崎】

濃く、種彦の手法を屢々真似てゐる。京傳、馬琴、京山等の影響が見え、就中、京傳の作品との關係は深く、「骨董集」(別項)などからも取材してゐる。長篇物は不得意であり、謙遜な彼は畫工名を多くは自己の署名の上に記してゐる。狂歌も相當に作り、屢々作中に出してゐる。文章は早から七五調を用ひ、流麗ではあるが合卷の文章としては缺陷がある。門弟には、墨春、梅磨がある。梅磨は通稱小山平吉、後、平七と改めた。「江戸作者部類」には「御用達町人神聖方深祕職棟梁」であるとし、雪磨の親友ではあるが弟子ではなく、所

く、これを著すに記文を以てした。その「東遊記」「西遊記」各別項の著は汎く世に行はれてゐる。文化二年四月歿す。享年五十三。「傷寒論分註」「傷寒外傳」「傷寒論爾言」「痘疹水鏡傳」「痘疹玉環方」等の著述がある。【和田】
北窓雜話 著者 隨筆 二卷【著者】片山圓然【諸本】百家隨筆第三所收。【解説】著者の見聞録・感想談であるが、神儒佛三道の融合及び我が國體の萬邦無雙を説くに努め、更に西洋星學の優長を述べてゐる。又日蓮宗對淨土宗等の論争史を掲げ、柔術の濫觴を記し、自己の遭遇した江戸三大火(明和九年、寛政

と「大日本史」神皇正統記に、この神話を採じて「體源抄」の説に従ひ、これ唐樂なること疑ひなしといひ、「教訓抄」の説に對しては、恐らく樂名に因つてこの説を附會するなりと言つてゐる。然るに又白石の「樂考」には異説を掲げ、「本北狄の樂、唐西涼節度使益嘉運所作」と説いてある。諸説紛々として定まるところないが、要するに支那から傳來した曲を我が國で改作したものであらうか。樂舞共に今に傳はつてゐる。【田邊】
牧童 俳人【姓名】立花氏。通稱彦三郎(春の鹿)【初號】松葉【別號】帶藤軒・圃

は遙かに少く、金澤蕨門に於ける地位技術も北枝には劣るが、併し金澤蕨門の中では錚々たる作家である。芭蕉歿後、勢力扶植のため屢々北陸地方に來つた支考に對し、牧童はその言ふが儘になつたと見えて、支考の後見で「草笛」を出してゐる。丁度この頃、雲鈴が佐渡へ元祿十三年に往つて十六年に復り、その往復共に牧童を訪つてゐる。【著作】草刈笛(別項)(元祿十六年刊)○蕨門名家句集牧童の部(同集牧童の傳)【參考】牧童傳(草笛)。風俗文選(各務支考)○摩

詰庵入日記(卷九)○獅子物狂山
○評語世説(高聖閣更)○荏苒諸生全傳(連華)
日人○續俳家奇人談(竹内玄々)○俳林小傳
中村光久○俳人百家撰(水谷川柳)【志田】
北碑南帖論 著者 書道を見よ。

寛文六年御番醫師仰付以下の數條が録されてゐて、二百俵頂戴は寛文七年十二月二十三日、同九年六月十四日に養物領下仙初御目見、延寶元年叙法眼の條があつて、次に同六年十二月六日願に依り隱居仰付られ、同日ト仙家督相續の事が記されてゐる。これによると、ト養は隱居の同月隱居許免、二十一日後に歿した事が知られる。俳諧では貞門の江戸五俳哲(別項)の一人であるが、「滑稽太平記」にはト養の作風を評して、「ト養作意は口拍子にかゝりて徳を得る」といひ、これに據つたものか。「俳人百家撰」には、「歌俳諧ともに良吟に妙なれば、口拍子ト養と人々唱へり」とある。【著作】ト養狂歌集(別項)○同拾遺(寫本)○醉笑庵之記(延寶初頃)。

のであらう。【諸本】最初の刊本は天和頃、形屋の新版で、卷末に「このト養狂歌集世間」に種なりしを、尋もとめて二冊とし、それに繪を書加へて板行する者也」とある。數年の後相屋與市方より發行したものは、本文は鱗形屋本と異なる所はないが、挿繪に相違がある。

の序文を掲げてゐる。【内容】美濃判上下二卷で歌數すべて二百十餘首、その狂歌は課題により推説して作つたと思はれるものは稀れで、多くは座興的に詠んだ即吟らしいものばかりで、狂歌としては上乘とは言はれぬが、その挿畫十一丁が菱川師宣の筆だと傳へられてゐるので、今ではこの繪のために珍書として取扱はれてゐる。【野崎】

ト養 俳人・狂歌師【姓名】半井宗松。後、ト養。【號】雪嶺・牧羊軒【生歿】慶長十二年生れ、延寶六年(三三三)十二月二十六日歿。享年七十二【墓所】品川東海寺地中定慧院【師傳】松永貞徳門【家系】「綾錦」には、ト養の父は半井慶友と云ひ、これを又温野ト養と云ひ、牡丹花宵栢の男であるとするが、十方菴廓然の「遊歴雜記」には、ト養は和氣清磨より二十三代の後裔半井春蘭軒和氣明親の孫であるとなつて、家は代々泉州堺に住し、明親は明の武帝帝御惱の時入明して治し奉つた名醫で、天文十六年に歿し、その男半井牧羊軒亭雲がト養の父であるとする、この方が信すべきものであらう。【開歷】「遊歴雜記」に、ト養は慶長十二年堺で出生し、初め宗松、後、ト養と改め、醫を業とし、又和歌連歌を善くし、狂歌に名高かつた。大猷院の御代、御用で度々江戸へ召されて、御茶を奉り、承應二年嚴有公へ召出され、後、寛文六年十二月二十五日御番醫師となつた。この時堺の跡式を令弟半井眞泊に譲與した。ト養は二百俵を頂戴し、築地鐵砲洲明石町に屋敷を賜はつた。その頃の狂歌に、「ト養は本道とこそ思ひしにうみぢを取るは外科がのぞみか」の歌があつた。今その跡地面を下養屋敷といふ。延寶元年十二月二十八日法眼に叙し、同六年十二月二十六日病歿。享年七十二歳。品川東海寺地中定慧院に葬つたとある。南歌の「一話一言」に載せる寛文延寶年中御日記からの抄録にも

【參考】滑稽太平記北藤浮生○續家づと永田貞柳○綾錦菊岡沾涼○江戸砂子同上○誹諧家譜拾遺集(書本)○遊歴雜記(僧廓然)○俳家奇人談(竹内玄々)○一話一言(大田南畝)○誹家大系(圖生川春明)○俳人百家撰(水谷川柳)○半井ト養の事(野崎左文)(成實堂本ト養狂歌集附録)○半井ト養の醉笑庵之記(石田元季)(江戸時代文學考(志田))

ト養狂歌集拾遺 著者 半井ト養【編者】和氣瑞成【刊行】安永九年、大阪柏原屋佐兵衛【解説】「ト養狂歌集」(別項)に洩れたるト養の狂歌百五十餘首を集めたものであつて、巻頭の歌は、戌のとしの春よめる「春たつと霞も立つた松たつたこれぞさんたのいぬの年かな」といふのである。又表紙の見返しに、關月の群馬の繪があつて、これに「此集の巻首にある年ならばいか程はねんと金の言を根元とし坤元靈符を拜して子年の新版なりと夥賣周弘やうにと七ツ目の午安永九年庚子黃鐘、攝政修九阜謹言」といふ題言が記されてゐる。【野崎】

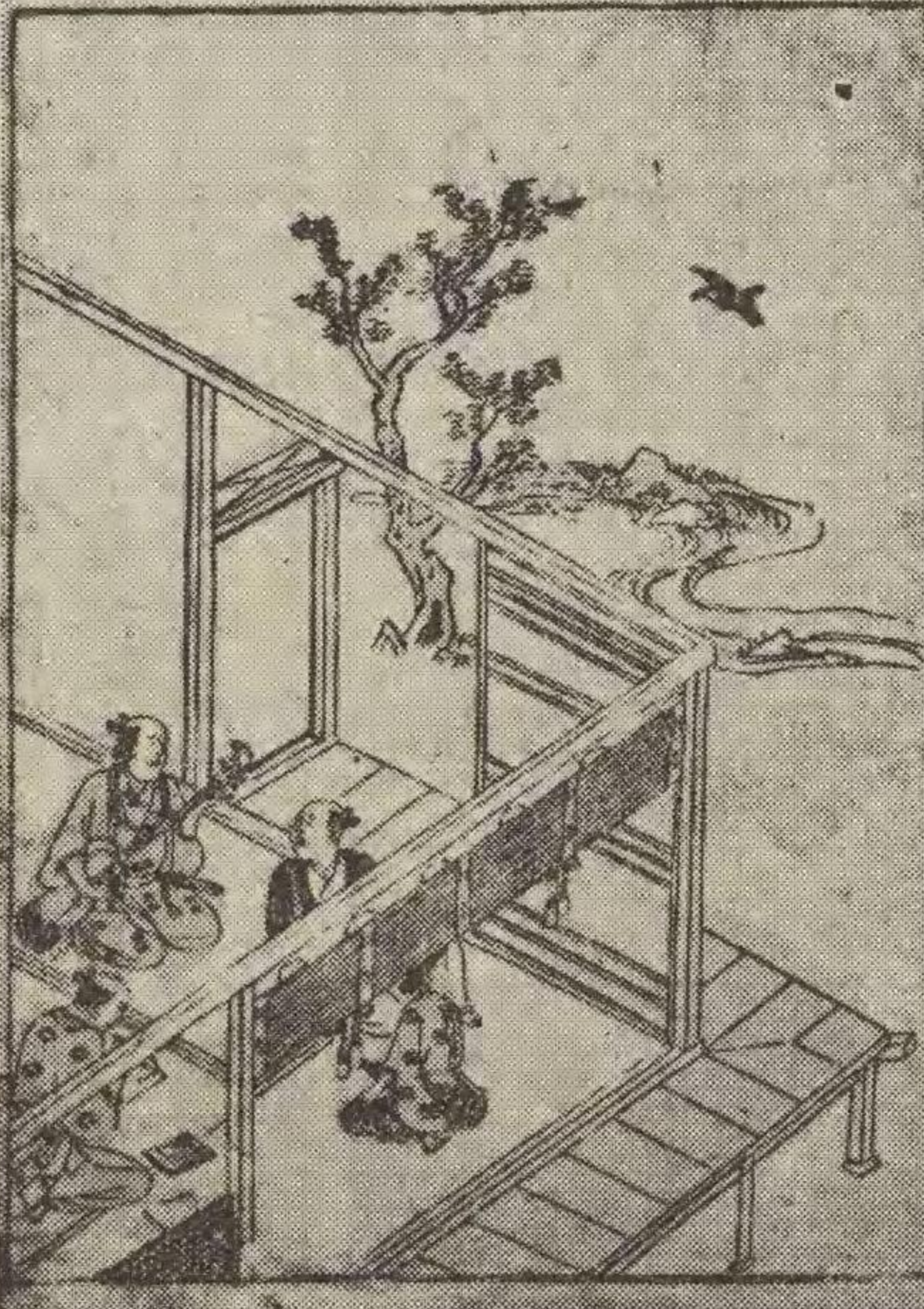
ト養狂歌集拾遺 著者 半井ト養【編者】和氣瑞成【刊行】安永九年、大阪柏原屋佐兵衛【解説】「ト養狂歌集」(別項)に洩れたるト養の狂歌百五十餘首を集めたものであつて、巻頭の歌は、戌のとしの春よめる「春たつと霞も立つた松たつたこれぞさんたのいぬの年かな」といふのである。又表紙の見返しに、關月の群馬の繪があつて、これに「此集の巻首にある年ならばいか程はねんと金の言を根元とし坤元靈符を拜して子年の新版なりと夥賣周弘やうにと七ツ目の午安永九年庚子黃鐘、攝政修九阜謹言」といふ題言が記されてゐる。【野崎】

【参考】滑稽太平記北藤浮生○續家づと永田貞柳○綾錦菊岡沾涼○江戸砂子同上○誹諧家譜拾遺集(書本)○遊歴雜記(僧廓然)○俳家奇人談(竹内玄々)○一話一言(大田南畝)○誹家大系(圖生川春明)○俳人百家撰(水谷川柳)○半井ト養の事(野崎左文)(成實堂本ト養狂歌集附録)○半井ト養の醉笑庵之記(石田元季)(江戸時代文學考(志田))

ト養狂歌集 著者 半井ト養【刊行】天和年間か。一冊【著者】半井ト養【編者】未詳。卷首に「過し頃半井ト養といへる法師和歌の道に交り、小倉山の言の葉も古風珍しからず、人も興を催す事なしとて自然と工夫して、かなたこなたの座席にて頓句自作の狂歌を詠せしむ。聞人くびをかたぶけ感吟して、につこと笑はむ春の山々、臘月の雪の積る狂歌まで取集め、ト養狂歌集と名をとなへて置く也」とあるを見れば、後人が言ひ傳へ、聞き傳へたまふのものを蒐録した

のであらう。【諸本】最初の刊本は天和頃、形屋の新版で、卷末に「このト養狂歌集世間」に種なりしを、尋もとめて二冊とし、それに繪を書加へて板行する者也」とある。數年の後相屋與市方より發行したものは、本文は鱗形屋本と異なる所はないが、挿繪に相違がある。

北里十二時 著者 石川雅望【名稱】題簽に「吉原十二時」とした本もある。北里は吉原の異稱であつて即ち江戸の北方に當つてゐるから名である。



(藏氏郎太久田小)集歌狂養ト

【刊行】未詳【諸本】温知叢書第五卷、百家説林第二卷、石川雅望集(有朋堂文庫)所收。【題材】題名の示すが如く、遊里吉原の十二時に於ける生活の變化を題材にしてゐる。

【梗概】卯時に始まつて寅時に及ぶ。朝歸りの客の賑はひ(卯、即ち朝の六時)。物乞法師、髮結などの往來の頻繁(辰、八時)。家々漸く起き始め、遊客は朝湯に入る(巳、十時)。遊女等、部屋を掃除し始める。醫師が来て病める遊女を診察する(午、十二時)。遊女の母が面會に来る。辻占を見てゐる遊女もある(未、二時)。夕日西に傾きかけ、遊女は化粧し、衣替へを始める。流連の客は酒を飲む(申、四時)。黄昏頃となり、格子外に来る煙客もある。御神燈に灯が入る(酉、六時)。遊客の酒宴漸く盛りとなる(戌、八時)。部屋に遊女の來るのを今やおそしと待つてゐる客もある(亥、十時)。九つの拍子木を打ち、戻つてゆく客もある。外には火の用心の鐵棒の音、按摩の聲(子、十二時)。流石に四邊静まる。深更に来る客もあり、獨り憤慨してゐる田舎客もある(丑、二時)。淺草寺の鐘の聲、揚屋の迎ひと寢惚聲で話す客もある(寅、四時)。

【解説】平安時代の國文に造詣の深かつた作者が態と雅言を驅使して、猥雑な世界を寫した所に本書の特殊な興味が存在する。十二時に分けた遊里生活の觀察には、清少納言が「枕草子」(別項)に於ける態度と似たものがある。擬古文の妙亦大に見るべきものがある。本篇の外に、江戸の卑俗な生活を同様の擬古文で綴つた「都の手ぶり」(別項)がある。【小柴】田道灌と傳ふ。父道眞の集か。【名稱】名義題名に二様の書き方がある。一は「慕景」であ

り、一は「慕景」である。これに就いて前田夏蔭は、「この集の名、景と京と二字一様ならず。かの樓の名を思ふに、京を慕ふといふことろにはあらで、日影をしたひて、寸陰をしむといふことをもて高どのに名づけたるにて、道灌入道の文學にふかく心を入れられしをもちかりしるべきなり」(慕景集作者考)といひ、福井久藏氏は、「集の名は、居室の慕景樓にとる」と言つてゐる(大日本歌書綜覽)。

【諸本】續國歌大觀、國歌大系第十三卷所收。【内容】一卷本・二卷本の二種がある。一卷本は三十六首を收め、そのうち、長興法師・治部少輔重頼の歌各一首を含んでゐる。二卷本は上巻歌數五十二首、下巻歌數三十八首、合計九十首を收め、卷首の題號の下に「太田道灌詠草」とある。概ね長い前書のある歌である。が、この集には道灌の作といふ花月百首(續群書類從卷三九四、京へまゐらせたる六十三首、「江戸歌合」の歌、「集外歌仙」に入つた歌を載せず、又前書の年號など、道灌と合はざる點があつて、前田夏蔭は「慕景集作者考」に、道灌の父道眞入道の作であらうと論じてゐる。

【歌風】武士の歌らしい氣概も見え、歌人の優美にのみ偏してゐない。例へば、
勝元朝臣短慮不成功といふ昌黎のつくりし詞
などそそそのはしに書きつけて此心ほへを
とひ給ひしかば
いそがずはぬれざらましを旅人のあとよりはる、
野路の村雨
教訓の意は勿論ながら、自ら叙景の歌のおもかげさへある。(道灌参照) 【松浦】
【参考】慕景集作者考 前田夏蔭(道灌本叢書所收)
補語「文」を見よ。
菩薩 雅樂舞曲【性質】林邑樂、古

樂の中曲。沙陀調の曲であるが、今は壹越調曲に屬す。序一帖、破一帖。舞があり一人で舞ふ。特殊の裝束を用ひ、假面を着ける。この舞今は滅びてしまつた。察するところ、「迦陵頻」(別項)と一組になる舞か。番舞としては「獅子」、又は「蘇利古」を用ひ、時として同じく左舞の「安摩」(別項)と組み合はせることがあるといふ。【沿革】天平八年に、印度僧婆羅門僧正並に林邑僧佛哲が本邦に傳へたもので、林邑八樂の第一にゐる。この樂の起原に就いては諸説あつて明かでない。「龍吟抄」に云ふところも單なる傳説に過ぎない。「大日本史」禮樂志には、「按文獻通考云、宋教坊有菩薩歌香花隊、衣生色窄砌衣、戴寶冠、執香花盤、横笛譜所、言與此相類、疑此曲也」と述べてゐる。單に「菩薩」といふ名稱を冠するものは支那にも多くあるであらうが、この樂は支那のものではなく、印度の樂であることは明かである。これに對して高楠順次郎氏は新説を出して、これは印度の戒日王の作られた有名な佛教歌劇「龍王の喜び」(ナーガアーナンド)の一部で、即ち乘雲菩薩が身を以て龍に代はられることを表はした劇舞であらうと述べてゐる。これは印度に於ける流行の時代から見て最も適切な考であつて、この舞に「迦陵頻」の附屬してゐることは、恐らく鳥はこの劇の一部をなす所の金翅鳥を現はしたのもらしい。又陵王は龍王の誤字であつて、これは金翅鳥に害せられんとする龍王を現はしたものである。かくして「菩薩」と「迦陵頻」と「龍王」とは相合して一つの舞劇をなしてゐたものと、我が國に於ける傳來の不完全であつたことによつて、「菩薩」は滅び、「迦陵頻」は獨立して單に鳥の舞となり、又「龍王」も獨立して支那

の「陵王」と誤り傳へられるに至つたものと思はれる。「菩薩」は本邦傳來後、東大寺大佛供養を初め、佛樂として用ひられてゐたが、平安朝の中期に至つてその舞の傳を失し、後に狛季長が一旦中興したが、また再び滅びてしまつた。併し「菩薩」の假面は今に傳へられてゐる。 【田邊】

星月夜顯晦録

【作者】高井蘭山【挿畫】蹄齋北馬【名稱】鎌倉の幕府の史話で、序に「修善寺日顯、行、惡者日晦、是所以其標題」とある。【刊行】文化六年【諸本】繪入文庫所收。

【梗概】源頼朝の歿後、左中將頼家は、家臣足立景盛の妾を奪ひ、奸臣梶原景時は景盛を殺さんと圖つた。また景時は頼朝以來の諸士を讒害し、その恨む者多きを知つて、京都の公卿を偽り院を擁して謀叛を企てたが、頼家に攻められ、尼公の計ひで事なきを得た。然るになほ景時は結城朝光を讒害せんとしたが、朝光は阿波局の知らせにより三浦義村に助けを請うたので、和田義盛・畠山重忠等の老臣は景時排斥の連判状を作り、大江廣元を通じて頼家を諒めた。景時はこれがために一の宮に移されたが、なほ陰謀を逞くしたので、所領沒收の上追放され、遂に吉香友景のために弟朝景を除いて一族皆滅ぼされた。また頼家の所行に乗じた越後の城永茂・資盛の兩人が、新に叛いたので、佐々木信綱は討伐に赴き、城方の板額女は大に勇猛を現はした。かくの如き亂れた世にあつて、頼家は逸樂を事としてゐたが、征夷使の宣下を受くるや諸臣の諫めを容れて行を正し、間もなく病を得て關西を弟千幡に、關東を嫡子一幡に譲つた。然る

を多く見せるやうになつた。 【片岡】
細田民樹 小説家【開歴】明治二十五年九月一日東京府南葛飾郡瑞穂村に生れた。七歳の時郷里廣島縣壬生町に歸り、十四年廣島縣立第一中學校を卒業する迄同地で成長した。大正四年早稲田大學文學部英文學科を卒業。同年十二月騎兵第五聯隊に入營一等卒となり、大正七年一月滿期除隊。後兵隊小説と戀愛小説とを以て文壇に出たのであ

ある(寅四時) 【解説】平安時代の國文に造詣の深かつた作者が態と雅言を驅使して、猥雑な世界を寫した所に本書の特殊な興味が存在する。十二時に分けた遊里生活の觀察には、清少納言が「枕草子」別項に於ける態度と似たものがある。擬古文の妙亦大に見るべきものがある。本篇の外に、江戸の卑俗な生活を同様の擬古文で綴つた「都の手ぶり」(別項)がある。 【小柴】 幕景集 和歌集 一卷 【作者】 太田道灌と傳ふ。父道眞の集か。【名稱】 名義題名に二様の書き方がある。一は「幕景」であ

【歌風】武士の歌らしい氣概も見え、歌人の優美にのみ偏してゐない。例へば、 勝元朝臣短慮不成功といふ昌黎のつくりし詞 などそのほかに書きつけて此心ほへを とひ給ひしかば いそがずはぬれざらましを旅人のあとよりはる、 野路の村雨 教訓の意は勿論ながら、自ら叙景の歌のおもかげさへある。(道灌参照) 【松浦】 【参考】 幕景集作者考 前田夏藤(遠本叢書所收) 補語「文」を見よ。 菩薩 雅樂舞曲 【性質】 林昌樂 古

に代はられることを表はした劇舞であらうと述べてゐる。これは印度に於ける流行の時代から見て最も適切な考であつて、この舞に「迦陵頻」の附屬してゐることは、恐らく鳥はこの劇の一部をなす所の金翅鳥を現はしたものであつた。又、又王は龍王の誤字であつて、これは金翅鳥に害せられんとする龍王を現はしたものであつた。かくして「菩薩」と「迦陵頻」と「龍王」とは相合して一つの舞劇をなしてゐたものと、我が國に於ける傳來の不完全であつたことによつて、「菩薩」は滅び、「迦陵頻」は獨立して單に鳥の舞となり、又「龍王」も獨立して支那

景時排斥の連判状を作り、大江廣元を通じて頼家を諒めた。景時はこれがために一の宮に移されたが、なほも陰謀を逞くしたので、所領没收の上追放され、遂に吉香友景のために弟朝景を除いて一族皆滅ぼされた。また頼家の所行に乗じた越後の城永茂・資盛の兩人が、新に叛いたので、佐々木信綱は討伐に赴き、城方の板額女は大に勇猛を現はした。かくの如き亂れた世にあつて、頼家は逸樂を事としてゐたが、征夷使の宣下を受けるや諸臣の諫めを容れて行を正し、間もなく病を得て關西を弟千幡に、關東を嫡子一幡に譲つた。然る

に一幡の外戚比企能員は、密に謀つて北條時政を讒し、後、これを殺さんとして、却つて尼公と時政のために謀殺されたので、頼家は時政の討伐を和義盛に命じたが果さず、尼公は頼家に出家を勧め、千幡を武將にせんとして北條の亭に移したが、牧の方の害心を知つて我が許に引き取つた。やがて建仁三年、千幡が實朝三代將軍となるや、北條氏は權を恣にせんと頼家を伊豆修善寺に移し、次いで謀叛の書を作らせ、野望を遂行せんとしたが、畠山重忠に妨げられて果さず、頼家を自殺させ、次いで稻毛重成に命じて重忠一族を亡ぼした。併し重成は幾許もなく和義盛に殺され、牧の方は實朝を北條の亭に害さんとして果さず自殺し、時政は剃髪した。この折時政の子義時は實朝を救つた功により執權職を繼いだが、別當職の義盛と反目し、これを尼公に讒したので、尼公は義盛を斥け、また髪を落して公曉と言つた善哉君を還俗させたが、後患を慮つた義盛は、大江廣元を通じて尼公に忠告し、公曉を上洛せしめ、且つ三浦義村と圖つてこれを暗殺せんとしたが果さず、その後、義盛の臣朝日奈義秀が情人松島を義時の子朝時に殺されて尼公を疑つた爲めに尼公の勘氣にふれ、一族を率ゐて領地上總に蟄居の憂目を見た。然るに偶々信濃の泉親平等が義時追討の亂を起したので、義盛は急ぎ鎌倉に赴いたが、一族胤長が亂に加はつてゐた爲めに却つて罪を得、前功によつて實朝に救されたが、次いで胤長を救はんとして尼公と義時に妨げられ、遂に義時誅戮の意を決して親しき友横山時兼と圖り先づ要害の地在柄の莊を手に入れたが、まもなく義時に奪還された。義時の子朝盛はこの情勢を厭ひ、出奔して剗

髪したが、義盛は強ひてこれを迎へて味方とし、五月三日を期して軍を起さんと時兼に報じた。この噂に義時は朝時を駿州より迎へ、鎌倉は戦備の騒ぎとなつたが、三浦義村兄弟が變心して義時に通じたので、義盛は三日を待たずして夜襲に移り、一族土屋義清・朝日奈三郎等の奮戦に義時・實朝・廣元等を法華堂に退かせ、翌朝時兼も馳せ參じて士氣大に振つたが、義時の子泰時の計に陥つて遂に敗れ、一族と共に前濱の陣に退いて自滅した。次いで義時は實朝を失はんと尼公の内意を得、公曉を招いて鶴岡の別當に任じ、公曉はやがて實朝を殺して三浦義村に誅せられ、こゝに全く北條氏の野望は成つたので、義時は京都から二歳の幼君を迎へ、これを擁して専ら權勢を振ひ、後に後鳥羽院に疎んぜられ、三院を流し奉つたが、間もなく他界して泰時が執權となるに及んで、始めて善政を施した。 【構想】 主として、「吾妻鏡」北條九代記等に據つた史實に多少の潤色を加へてゐる。殊に朝日奈と松島の情事は最も文學的なもので、作者の創作であらうと思はれる。題材構想の性質上、筋の運びが派生的になる憾みがあるが、頼朝死後の幕府の情勢を相當に書き分けてゐる。蘭山の作中第一に推すべきものであらう。なほ「實朝公風流の再話」と「朝日奈三郎義秀再話」が上下巻に分つて附されてをり、その逸話と系譜を擧げてゐる。 【笹野】

【作風】 當初は後期自然派の新進作家として惱ましい靈肉の争闘と、錯雜した男女間の關係とを多く描いて、さういふ方面への相當複雑な理解と巧みな好色の場面の描寫とを示した。併し題材が題材であり、又作者の手法がやゝ煩はしいまでの細寫主義に依存してゐた爲めに、屢々自然主義末流などと呼ばれた。中頃、この境地から脱却して一時若干の藝術主義的傾向への傾きを示したが、間もなく左翼に轉じて、現代社會の經濟的機構やその缺陷に多く目を注ぐやうになつた。この轉換後は、從來の周到緻密な寫實主義を棄てて、達者なかりにやゝ粗雑な、慌しい感じの表現

を多く見せるやうになつた。 【片岡】 細田民樹 小説家 【開歴】 明治二十五年九月一日東京府南葛飾郡瑞穂村に生れた。七歳の時郷里廣島縣壬生町に歸り、四十四年廣島縣立第一中學校を卒業する迄同地で成長した。大正四年早稲田大學文學部英文學科を卒業。同年十二月騎兵第五聯隊に入營一等卒となり、大正七年一月滿期除隊。後兵隊小説と戀愛小説とを以て文壇に出たのであつたが、處女作はずつと早く、まだ早大在學中の明治四十五年、正宗白鳥の「微光」に刺戟されて執筆し、大正二年一月刊の早稲田文學新進作家號に掲載された「泥沼」であつたといふ。昭和二年十二月勞農藝術家同盟が分裂して文藝戦線派と前衛派とが對立するやうになつた時、新に文藝派に參加して現在に及んでゐる一方、政治團體たる無産大衆黨にも籍を置いてゐる。 【著作】 「小説集」 惱める破婚者 ○母の零落 ○凱旋 ○妹の戀 ○逆生 ○大地を發す ○同胞 ○執愛の日 ○黒の死刑女囚。 【長篇小説】 極みな破局 ○或る兵卒の記録 ○日の下に ○愛人 ○黄色い窓 ○眞理の春。 【評論感想】 ドストエフスキイの人生觀 ○プロレタリア文學宣傳者に與ふ ○ゴルキイの「母」を評す ○新聰明美論 ○プロ作家の技術問題等。 【代表作】 泥沼 ○ある境涯 ○女をめぐる父子 ○母の零落 ○續母の零落 ○愛人 ○或る砲手の死 ○秋を送る ○黒の死刑女囚 ○新女 ○大檢擧の後 ○眞理の春。 【作風】 この作者に最も目立つた特徴は、その霸氣と野心と情熱の強烈さにあつた。後期自然派とはいふものの、初期以來態度は寧ろ理想派的であつて、人道主義的思想の影響多く、博大な愛と人間性の深みとを求めて人生

ほそだけ ほそた

の暗面側面を探索するといふやうな傾向を示してゐた。従つて作品のスケエルは大きかつたが、空疎不熟の難を免れなかつた。その後マルキシズム文藝に轉じてより、如上の缺點はやゝ薄らぎ、「眞理の春」は、財界暴露小説として大に世評を呼んだが、藝術品として見る時は、矢張り生硬のそしりを拒み難いものであらう。

細み 蕉風を見よ。

ほそり 歌謡【名義】細りの意で、歌曲の哀愁に富む趣より出た名稱であらう。【解説】もと西國巡禮歌より出た流行歌であらう（蠟遊笑覽の説、巡禮歌参照）。その元歌は、「淋敷座之慰」に、「昔ほそり」「大幣」には「ほそり」と題して出た「忍ぶ細道に、松と胡桃を（大幣）とし」植えまい、待つとてその身は、來る身でもなし（大幣）おじやれとて誠にくる身でもなし（さあり）の歌であらう。西國巡禮歌は關東で歌ひ出されたものと思はれるが、ほそりの流行歌も亦關東で大に行はれた。「松の葉所載の組歌破手組の中に、「下總ほそり」と題して出た六首（その中一首は右の「昔ほそり」の歌）、「當世小歌擲」に出た「關東ほそり」一首がこれである。寛永の「吾妻めぐり」にも、當時江戸で、ほそりと片撥の流行したことが見えてゐる。「吉原流行小歌惣まくり」には、「ほそりづくし」三首がある。歌詞は、可なり長い雜體の歌で、一定の形式はない。延寶天和以後は、古風の歌として流行がすたれ、ただ三味線組歌に、これが残されたのみであるが、地方の民謡には、現今まで残存したものがあり、大抵關東地方を中心としてゐる。即ち「古語集」所引「武藏古道記」の「八王子ほそり」一首、「麓の塵」所載の武藏新倉川越邊で行はれる「ほそ

り」一首等がそれで、少し離れては富士五湖の山中湖畔でも、八十年ぐらゐ前までは、ほそり唄が歌はれたと云ひ、東京府（武藏古道記）所載の歌（同じ）・茨城縣（近世調の歌）・新潟・佐渡等の俚謡に、ほそり唄、ほそり節などと云ふものが見えるのもこれであらう。八王子のほそりは女を迎へる時、川越のほそりは女の元服する時に歌ふ歌と云ひ、いづれも祝儀歌となつてゐる。

帆立貝 寫生文集【著者】阪本四方太・高濱虚子【名稱】詳しくは「寫生帆立貝」

【刊行】明治三十九年三月【内容】明治三十九年三月から三十八年十一月に至る間に雜誌「ホトトギス」に掲載された二人の寫生文の選集で、四方太の作は「飛鳥山」「檳町」「博物館」「中禪寺」「蒲鉾の頌」「賣家」「芋明月」「同鳥」「灰吹日記抄」「盆梅」、虚子の作は「幻住庵の跡」「影法師」「茶漬」「石棺」「蕪茶屋」「玄女節」「蠟燭」「雜筆」「片片文學」「ほねほり」である。寫生文集の年次から云へば、「寒玉集」「寫生文集」に次ぐべきものであるが、寫生の技が愈々圓熟の域に達してその完成を示すに足るべきものである。明治四十年に至つて始めて寫生文の存在が認められるに至つたのも、漱石の説く如く、正にこの集に依るといふべきであらう。併し四方太はなほ精緻を貴ぶ狹義の所謂寫生文に閉ぢ籠り、以前の作よりも却つて生彩に乏しい嫌ひがないでもない。又虚子はこの集中の「蠟燭」を最後として、小説「鶏頭」（別項）の作風に赴かうとしてゐることが窺はれる。（寫生文参照）

牡丹燈籠 怪異談牡丹燈籠を見よ。

北華 風俗文集を見よ。

北海 漢詩人【本名】江村綏。字は

君錫。通稱傳左衛門【生歿】正徳三年生れ、天明八年（一四四八）二月二日歿す。享年七十六【閨歴】伊藤龍洲の次子で、母は赤石の藩士河村氏の女。兄伊藤錦里、弟清田君錦と並に令名があり、世に伊藤氏の三珠樹と稱した。後丹後國宮津侯の文學江村毅庵の後を繼ぎ、江村氏を冒して同侯に仕へた。後、致仕して京都に住ひ、詩を以て鳴つた。毎月十三日諸名士及び門人子姪を賜杖堂に集めて詩會を催し

詠梅花

何處無梅樹 他處素
心青陽回北野素
靦滿南枝香 遍珠宮
冷影隨壁月 移
神多 少士 凱和 照星

北海江村綏稿

（藏氏之辰野高）蹟筆海北村江

【著作】日本詩選十四卷○日本詩史六卷○授業篇二十卷○北海詩鈔八卷、明和四年刊。集中佳句に乏しくはないが詩格孱弱、法度の中に局促する風がある。○北海文鈔三卷（和奥に滿ちた文章で、今日から見れば珍重するに足らない。刊本は極めて稀れである。）

發句 俳諧【名義】名義・名稱・發端の句の義。語としては「萬葉集」以來見られる語で、和歌の方に於ては、短歌の初句又は上

句を指し、漢詩の方に於ても用ひられた語で、漢詩では、初句又は初聯を指したのである。然るに長連歌が起つてから、長連歌の第一句を専ら發句と稱するやうになり、俳諧が連歌から獨立してからも、長篇の俳諧の第一句を同じく發句と稱したのである。なほ又長篇俳諧の第一句が獨立の詩として作られた場合でも、發句と稱することに變りはなかつた。發句は連歌に於ても早くから約めて「ほく」とも云はれ、室町時代に於ては「ほんく」とも云はれた。明治以來、俳諧の發句を俳句といふやうになつたので、俳諧の發句は便宜上別に「俳句」の項目中に記してあるから、茲には連句の發句のみに就いて述べる。

【解説】發句は長連歌の第一句として、五七五の三句十七音から成つてゐるが、既に短連歌に於て附句をする人の手腕を拘束しない禮儀觀念から、一句の意味を未完了にしない傾きを生じ、この觀念が長連歌の發句にも移動したらしく、その上一句に纏まつた思想を表現しようとする創作心理も手傳つて、おのづから發句を言ひ切つた形にするやうになつた。「八雲御抄」にも「發句は必ずいひきるべし」と述べられてゐる。さて言ひ切るには、普通かな「や」等の切字（別項）を用ひるか字止（名詞止）にするかする。例へば「日の御影花に句へるあしたかな」「櫻さく遠山守やみやこ人」に於けるが如きである。又句切は、古くは初句或は中句いづれかの末に於てするものが多かつたが、後には「吾を打つ雨や深山の秋の聲」の如く、中間句も生ずるやうになつた。又發句には、當季を結ぶといふ制が早くから起つた。これは「萬葉集」(別項)中の發句や「井蛙抄」(別項)の記事等から見て、鎌倉時代の中頃

且つ臥床が慨嘆した如く（萬葉集卷序）、鹿家の句の中にも誤謬が少くないが、兎に角かうして三家の句を夙く蒐集整理して世に傳へた功は認めねばならぬ。のみならず本書によつて當時蕪村・青蘿の二家よりも、先づこの三家が世間的に聲價のあつた状態を察せられ、「新五子稿」に先だつて世に現はれたのも、全く偶然だとばかりも思はれない。

發句帳 俳諧發句帳を見よ。

諧の發句 志田業秀（萬葉集論纂）○連歌から俳諧へ 同上 俳諧の考案 ○連歌史概説 福井久藏（改造社版俳句講座）

發句合 俳諧【名稱】句合とも云ふ。【解説】發句を合せて判者がその優劣を定めたものである。元來和歌の歌合（別項）に倣つて出來たものである。句合には衆議判と本判と即興の判とがあつた。衆議判とは一定の判者を定めて、連中が論議・批判する形式のも

までには起つてゐたと考へられる。室町時代の「白髮集」(別項)には「發句を仕るに、春夏秋冬冬ともに、その時節に相當の發句を旨とすべし」といつてある。これが季題(別項)の發達となるのである。發句は長連歌の巻頭に立ち、一卷の題目ともなる重要なものである。ので、堪能の者がこれを賦する慣習となつた。筑波問答にも「當道の至極の大事發句にて待るなり。發句わろければ一座皆けがる。されば堪

世小歌謡に出でた「關東ほそり」一首がこれである。寛永の「吾妻めぐり」にも、當時江戸で、ほそりと片撥の流行したことが見えてゐる。「吉原流行小歌惣まくり」には「ほそりづくし」三首がある。歌詞は、可なり長い雑體の歌で、一定の形式はない。延寶天和以後は、古風の歌として流行がすたれ、ただ三味線組歌に、これが残されたのみであるが、地方の民謡には、現今まで残存したものがあり、大抵關東地方を中心としてゐる。即ち「古語集」所引「武藏古道記」の「八王子ほそり」一首、麓の鹿所載の武藏新倉川越邊で行はれる「ほそり」

ものである。明治四十年に至つて始めて寫生文の存在が認められるに至つたのも、漱石の説く如く、正にこの集に依るといふべきであらう。併し四方太はなほ精緻を貴ぶ狹義の所謂寫生文に閉ぢ籠り、以前の作よりも却つて生彩に乏しい嫌ひがないでもない。又虚子はこの集中の「蠟燭」を最後として、小説「鶏頭」(別項)の作風に赴かうとしてゐることが窺はれる。(寫生文参照) [石井]

牡丹燈籠 牡丹燈籠 怪異談牡丹燈籠を見よ。
北華 北華 「風俗文集」を見よ。
北海 北海 漢詩人「本名」江村綏。字は

た。【著作】日本詩選十四卷○日本詩史六卷○授業篇二十卷○北海詩鈔八卷、明和四年刊。集中佳句に乏しくはないが詩格弱、法度の中に局促する風がある。○北海文鈔三卷(和奥に滿ちた文章で、今日から見れば珍重するに足らない。刊本は極めて稀である。)[佐久]

發句 發句 連歌、俳諧【名義・名稱】發端の句の義。語としては「萬葉集」以來見られる語で、和歌の方に於ては、短歌の初句又は上

「八雲御抄」にも「發句は必ずひびきるべし」と述べられてある。さて言ひ切るには、普通かな「や」等の切字(別項)を用ひるか字止(名詞止にするかする。例へば「日の御影花に句へるあしたかな」櫻さく遠山守やみやこ人)に於けるが如きである。又句切は、古くは初句或は中句いづれかの末に於てするものが多かつたが、後には「吾を打つ雨や深山の秋の聲」の如く、中間切も生ずるやうになつた。又發句には、當季を結ぶといふ制が早くから起つた。これは「菟玖波集」(別項)中の發句や「井蛙抄」(別項)の記事等から見て、鎌倉時代の中頃

北海江村綏稿

且つ臥床が慨嘆した如く(鹿野句集序、曉臺の句の中にも誤謬が少くないが、兎に角かつして三家の句を夙く蒐集整理して世に傳へた功は認めねばならぬ。のみならず本書によつて當時蕪村・青蘿の二家よりも、先づこの三家が世間的に聲價のあつた状態を察せられ、「新五子稿」に先だつて世に現はれたのも、全く偶然だとばかりも思はれない。)[頼田]

までには起つてゐたと考へられる。室町時代の「白髮集」(別項)には「發句を仕るに、春夏秋冬ともに、その時節に相當の發句を旨とすべし」といつてある。これが季題(別項)の發達となるのである。發句は長連歌の巻頭に立ち、一卷の題目ともなる重要なものである。ので、堪能の者がこれを賦する慣習となつた。筑波問答にも「當道の至極の大事發句にて待るなり。發句をわろければ一座皆けがる。されば堪能宿老にゆづりて、末座に斟酌あるべきなり」と述べてある。發句には又賦物(別項)を取る制がある。賦物は初めは發句以外にも詠み入れたが、後には發句以下三句に詠み入れたり、發句のみに限つたりするやうになり、遂に發句に詠み入れる賦物によつて百韻の題名を立てるに至つた。

【沿革】平安朝の末期に鎖連歌(別項)が起つて以來、その第一句を發句と稱するやうになつた。鎖連歌は百韻を基本とし、その半ばを五十韻といつたが、これ等が鎌倉時代の初めに至つて漸く盛んとなつた。當時の發句は、「菟玖波集」や「求詠初心集」等に載つてゐる。但しその初めにあつては、大やうで細かな所は少なかつたが、室町時代に至つて、幽玄にして長高きものとなつた。當時の發句は、「新撰菟玖波集」(別項)「竹林抄」等や宗祇(別項)その他個人の連歌集に載つてゐる。室町後期に俳諧が連歌から獨立して後、連歌は長く續いたけれども漸次衰頹して行つた。室町末期頃の發句を見るべきものには、「連歌大發句帳」や「連歌發句集」等がある。(連歌、俳句参照)

【沿革】貞門、談林では餘り行はれなかつたやうであるが、任口の句合を季吟の判じた「百番誹諧發句合」、芭蕉の「貝おほひ」(各別項)、風虎撰の句合を任口・季吟の判じた「六百番誹諧發句合」、不卜の「續の原」(別項)等があつた。伊丹派にも時代はやゝ後れるが、月尋に「伊丹發句合」(別項)があつた。蕉門俳人にも早く其角の「田舎句合」、杉風の「常盤屋句合」(各別項)があつた。元祿前後は特に流行した風があつて、「續の原」もこの時期であつたが、他になほ仙化の「蛙合」(別項)、風蘭の「墨栗合」(別項)、其角の「句兄弟」(別項)及び「おのがね鶴合」、路通の「月山發句合」(別項)、素堂の「とく」の句合(別項)等があつて、皆有名なのであり、なほ元祿五年に兩行の「四十三番時代不同發句合」もあつた。その後、享保年間に沾涼の「三十六番句合」や、「五色墨」(別項)の連中の試みた「百番句合」や、魚貫が其角の句兄弟に倣

【沿革】貞門、談林では餘り行はれなかつたやうであるが、任口の句合を季吟の判じた「百番誹諧發句合」、芭蕉の「貝おほひ」(各別項)、風虎撰の句合を任口・季吟の判じた「六百番誹諧發句合」、不卜の「續の原」(別項)等があつた。伊丹派にも時代はやゝ後れるが、月尋に「伊丹發句合」(別項)があつた。蕉門俳人にも早く其角の「田舎句合」、杉風の「常盤屋句合」(各別項)があつた。元祿前後は特に流行した風があつて、「續の原」もこの時期であつたが、他になほ仙化の「蛙合」(別項)、風蘭の「墨栗合」(別項)、其角の「句兄弟」(別項)及び「おのがね鶴合」、路通の「月山發句合」(別項)、素堂の「とく」の句合(別項)等があつて、皆有名なのであり、なほ元祿五年に兩行の「四十三番時代不同發句合」もあつた。その後、享保年間に沾涼の「三十六番句合」や、「五色墨」(別項)の連中の試みた「百番句合」や、魚貫が其角の句兄弟に倣

【沿革】貞門、談林では餘り行はれなかつたやうであるが、任口の句合を季吟の判じた「百番誹諧發句合」、芭蕉の「貝おほひ」(各別項)、風虎撰の句合を任口・季吟の判じた「六百番誹諧發句合」、不卜の「續の原」(別項)等があつた。伊丹派にも時代はやゝ後れるが、月尋に「伊丹發句合」(別項)があつた。蕉門俳人にも早く其角の「田舎句合」、杉風の「常盤屋句合」(各別項)があつた。元祿前後は特に流行した風があつて、「續の原」もこの時期であつたが、他になほ仙化の「蛙合」(別項)、風蘭の「墨栗合」(別項)、其角の「句兄弟」(別項)及び「おのがね鶴合」、路通の「月山發句合」(別項)、素堂の「とく」の句合(別項)等があつて、皆有名なのであり、なほ元祿五年に兩行の「四十三番時代不同發句合」もあつた。その後、享保年間に沾涼の「三十六番句合」や、「五色墨」(別項)の連中の試みた「百番句合」や、魚貫が其角の句兄弟に倣

【沿革】貞門、談林では餘り行はれなかつたやうであるが、任口の句合を季吟の判じた「百番誹諧發句合」、芭蕉の「貝おほひ」(各別項)、風虎撰の句合を任口・季吟の判じた「六百番誹諧發句合」、不卜の「續の原」(別項)等があつた。伊丹派にも時代はやゝ後れるが、月尋に「伊丹發句合」(別項)があつた。蕉門俳人にも早く其角の「田舎句合」、杉風の「常盤屋句合」(各別項)があつた。元祿前後は特に流行した風があつて、「續の原」もこの時期であつたが、他になほ仙化の「蛙合」(別項)、風蘭の「墨栗合」(別項)、其角の「句兄弟」(別項)及び「おのがね鶴合」、路通の「月山發句合」(別項)、素堂の「とく」の句合(別項)等があつて、皆有名なのであり、なほ元祿五年に兩行の「四十三番時代不同發句合」もあつた。その後、享保年間に沾涼の「三十六番句合」や、「五色墨」(別項)の連中の試みた「百番句合」や、魚貫が其角の句兄弟に倣

【沿革】貞門、談林では餘り行はれなかつたやうであるが、任口の句合を季吟の判じた「百番誹諧發句合」、芭蕉の「貝おほひ」(各別項)、風虎撰の句合を任口・季吟の判じた「六百番誹諧發句合」、不卜の「續の原」(別項)等があつた。伊丹派にも時代はやゝ後れるが、月尋に「伊丹發句合」(別項)があつた。蕉門俳人にも早く其角の「田舎句合」、杉風の「常盤屋句合」(各別項)があつた。元祿前後は特に流行した風があつて、「續の原」もこの時期であつたが、他になほ仙化の「蛙合」(別項)、風蘭の「墨栗合」(別項)、其角の「句兄弟」(別項)及び「おのがね鶴合」、路通の「月山發句合」(別項)、素堂の「とく」の句合(別項)等があつて、皆有名なのであり、なほ元祿五年に兩行の「四十三番時代不同發句合」もあつた。その後、享保年間に沾涼の「三十六番句合」や、「五色墨」(別項)の連中の試みた「百番句合」や、魚貫が其角の句兄弟に倣

【沿革】貞門、談林では餘り行はれなかつたやうであるが、任口の句合を季吟の判じた「百番誹諧發句合」、芭蕉の「貝おほひ」(各別項)、風虎撰の句合を任口・季吟の判じた「六百番誹諧發句合」、不卜の「續の原」(別項)等があつた。伊丹派にも時代はやゝ後れるが、月尋に「伊丹發句合」(別項)があつた。蕉門俳人にも早く其角の「田舎句合」、杉風の「常盤屋句合」(各別項)があつた。元祿前後は特に流行した風があつて、「續の原」もこの時期であつたが、他になほ仙化の「蛙合」(別項)、風蘭の「墨栗合」(別項)、其角の「句兄弟」(別項)及び「おのがね鶴合」、路通の「月山發句合」(別項)、素堂の「とく」の句合(別項)等があつて、皆有名なのであり、なほ元祿五年に兩行の「四十三番時代不同發句合」もあつた。その後、享保年間に沾涼の「三十六番句合」や、「五色墨」(別項)の連中の試みた「百番句合」や、魚貫が其角の句兄弟に倣

【沿革】貞門、談林では餘り行はれなかつたやうであるが、任口の句合を季吟の判じた「百番誹諧發句合」、芭蕉の「貝おほひ」(各別項)、風虎撰の句合を任口・季吟の判じた「六百番誹諧發句合」、不卜の「續の原」(別項)等があつた。伊丹派にも時代はやゝ後れるが、月尋に「伊丹發句合」(別項)があつた。蕉門俳人にも早く其角の「田舎句合」、杉風の「常盤屋句合」(各別項)があつた。元祿前後は特に流行した風があつて、「續の原」もこの時期であつたが、他になほ仙化の「蛙合」(別項)、風蘭の「墨栗合」(別項)、其角の「句兄弟」(別項)及び「おのがね鶴合」、路通の「月山發句合」(別項)、素堂の「とく」の句合(別項)等があつて、皆有名なのであり、なほ元祿五年に兩行の「四十三番時代不同發句合」もあつた。その後、享保年間に沾涼の「三十六番句合」や、「五色墨」(別項)の連中の試みた「百番句合」や、魚貫が其角の句兄弟に倣

【沿革】貞門、談林では餘り行はれなかつたやうであるが、任口の句合を季吟の判じた「百番誹諧發句合」、芭蕉の「貝おほひ」(各別項)、風虎撰の句合を任口・季吟の判じた「六百番誹諧發句合」、不卜の「續の原」(別項)等があつた。伊丹派にも時代はやゝ後れるが、月尋に「伊丹發句合」(別項)があつた。蕉門俳人にも早く其角の「田舎句合」、杉風の「常盤屋句合」(各別項)があつた。元祿前後は特に流行した風があつて、「續の原」もこの時期であつたが、他になほ仙化の「蛙合」(別項)、風蘭の「墨栗合」(別項)、其角の「句兄弟」(別項)及び「おのがね鶴合」、路通の「月山發句合」(別項)、素堂の「とく」の句合(別項)等があつて、皆有名なのであり、なほ元祿五年に兩行の「四十三番時代不同發句合」もあつた。その後、享保年間に沾涼の「三十六番句合」や、「五色墨」(別項)の連中の試みた「百番句合」や、魚貫が其角の句兄弟に倣

【沿革】貞門、談林では餘り行はれなかつたやうであるが、任口の句合を季吟の判じた「百番誹諧發句合」、芭蕉の「貝おほひ」(各別項)、風虎撰の句合を任口・季吟の判じた「六百番誹諧發句合」、不卜の「續の原」(別項)等があつた。伊丹派にも時代はやゝ後れるが、月尋に「伊丹發句合」(別項)があつた。蕉門俳人にも早く其角の「田舎句合」、杉風の「常盤屋句合」(各別項)があつた。元祿前後は特に流行した風があつて、「續の原」もこの時期であつたが、他になほ仙化の「蛙合」(別項)、風蘭の「墨栗合」(別項)、其角の「句兄弟」(別項)及び「おのがね鶴合」、路通の「月山發句合」(別項)、素堂の「とく」の句合(別項)等があつて、皆有名なのであり、なほ元祿五年に兩行の「四十三番時代不同發句合」もあつた。その後、享保年間に沾涼の「三十六番句合」や、「五色墨」(別項)の連中の試みた「百番句合」や、魚貫が其角の句兄弟に倣

【沿革】貞門、談林では餘り行はれなかつたやうであるが、任口の句合を季吟の判じた「百番誹諧發句合」、芭蕉の「貝おほひ」(各別項)、風虎撰の句合を任口・季吟の判じた「六百番誹諧發句合」、不卜の「續の原」(別項)等があつた。伊丹派にも時代はやゝ後れるが、月尋に「伊丹發句合」(別項)があつた。蕉門俳人にも早く其角の「田舎句合」、杉風の「常盤屋句合」(各別項)があつた。元祿前後は特に流行した風があつて、「續の原」もこの時期であつたが、他になほ仙化の「蛙合」(別項)、風蘭の「墨栗合」(別項)、其角の「句兄弟」(別項)及び「おのがね鶴合」、路通の「月山發句合」(別項)、素堂の「とく」の句合(別項)等があつて、皆有名なのであり、なほ元祿五年に兩行の「四十三番時代不同發句合」もあつた。その後、享保年間に沾涼の「三十六番句合」や、「五色墨」(別項)の連中の試みた「百番句合」や、魚貫が其角の句兄弟に倣

【沿革】貞門、談林では餘り行はれなかつたやうであるが、任口の句合を季吟の判じた「百番誹諧發句合」、芭蕉の「貝おほひ」(各別項)、風虎撰の句合を任口・季吟の判じた「六百番誹諧發句合」、不卜の「續の原」(別項)等があつた。伊丹派にも時代はやゝ後れるが、月尋に「伊丹發句合」(別項)があつた。蕉門俳人にも早く其角の「田舎句合」、杉風の「常盤屋句合」(各別項)があつた。元祿前後は特に流行した風があつて、「續の原」もこの時期であつたが、他になほ仙化の「蛙合」(別項)、風蘭の「墨栗合」(別項)、其角の「句兄弟」(別項)及び「おのがね鶴合」、路通の「月山發句合」(別項)、素堂の「とく」の句合(別項)等があつて、皆有名なのであり、なほ元祿五年に兩行の「四十三番時代不同發句合」もあつた。その後、享保年間に沾涼の「三十六番句合」や、「五色墨」(別項)の連中の試みた「百番句合」や、魚貫が其角の句兄弟に倣

【沿革】貞門、談林では餘り行はれなかつたやうであるが、任口の句合を季吟の判じた「百番誹諧發句合」、芭蕉の「貝おほひ」(各別項)、風虎撰の句合を任口・季吟の判じた「六百番誹諧發句合」、不卜の「續の原」(別項)等があつた。伊丹派にも時代はやゝ後れるが、月尋に「伊丹發句合」(別項)があつた。蕉門俳人にも早く其角の「田舎句合」、杉風の「常盤屋句合」(各別項)があつた。元祿前後は特に流行した風があつて、「續の原」もこの時期であつたが、他になほ仙化の「蛙合」(別項)、風蘭の「墨栗合」(別項)、其角の「句兄弟」(別項)及び「おのがね鶴合」、路通の「月山發句合」(別項)、素堂の「とく」の句合(別項)等があつて、皆有名なのであり、なほ元祿五年に兩行の「四十三番時代不同發句合」もあつた。その後、享保年間に沾涼の「三十六番句合」や、「五色墨」(別項)の連中の試みた「百番句合」や、魚貫が其角の句兄弟に倣

【沿革】貞門、談林では餘り行はれなかつたやうであるが、任口の句合を季吟の判じた「百番誹諧發句合」、芭蕉の「貝おほひ」(各別項)、風虎撰の句合を任口・季吟の判じた「六百番誹諧發句合」、不卜の「續の原」(別項)等があつた。伊丹派にも時代はやゝ後れるが、月尋に「伊丹發句合」(別項)があつた。蕉門俳人にも早く其角の「田舎句合」、杉風の「常盤屋句合」(各別項)があつた。元祿前後は特に流行した風があつて、「續の原」もこの時期であつたが、他になほ仙化の「蛙合」(別項)、風蘭の「墨栗合」(別項)、其角の「句兄弟」(別項)及び「おのがね鶴合」、路通の「月山發句合」(別項)、素堂の「とく」の句合(別項)等があつて、皆有名なのであり、なほ元祿五年に兩行の「四十三番時代不同發句合」もあつた。その後、享保年間に沾涼の「三十六番句合」や、「五色墨」(別項)の連中の試みた「百番句合」や、魚貫が其角の句兄弟に倣

【沿革】貞門、談林では餘り行はれなかつたやうであるが、任口の句合を季吟の判じた「百番誹諧發句合」、芭蕉の「貝おほひ」(各別項)、風虎撰の句合を任口・季吟の判じた「六百番誹諧發句合」、不卜の「續の原」(別項)等があつた。伊丹派にも時代はやゝ後れるが、月尋に「伊丹發句合」(別項)があつた。蕉門俳人にも早く其角の「田舎句合」、杉風の「常盤屋句合」(各別項)があつた。元祿前後は特に流行した風があつて、「續の原」もこの時期であつたが、他になほ仙化の「蛙合」(別項)、風蘭の「墨栗合」(別項)、其角の「句兄弟」(別項)及び「おのがね鶴合」、路通の「月山發句合」(別項)、素堂の「とく」の句合(別項)等があつて、皆有名なのであり、なほ元祿五年に兩行の「四十三番時代不同發句合」もあつた。その後、享保年間に沾涼の「三十六番句合」や、「五色墨」(別項)の連中の試みた「百番句合」や、魚貫が其角の句兄弟に倣

は、鑲・鈴・鈎・素・花・塗・香・燈・燒・香・得・大・勢・寶
 手・寶・幢・星・宿・寶・月・滿・月・一・切・義・成・就・勇・施
 十六菩薩、第三院には持國天・增長天・廣目天・
 毘沙門天・帝釋天・梵天・大自在天・難陀龍王・
 妙法緊那羅王・樂音乾闥婆王・如意迦樓羅王・
 羅睺阿修羅王・烏菟沙摩明王・軍荼利明王・不
 動明王・降三世明王の十六尊を配置するのが
 普通である。この曼荼羅は支那で行はれたの
 を日本に傳へたもので、入唐僧中では慈覺大
 師の請來録にその名が見
 えてゐる。法華法は平安
 朝以來盛んに修せられた
 が、遺作としては鎌倉時
 代の作に係る太山寺本・
 唐招提寺本等を擧げるよ
 り外はない。尤も彫刻と
 しては岐阜横藏寺に板彫
 の法華曼荼羅があり、藤
 原時代の製作と推定され
 る。(二)法華經變相圖。

法華經は支那に於ても古
 くから行はれ、これが日
 本にも夙に傳來したので
 あつて、この經の講讀や
 書寫や供養等法華信仰は
 廣く行はれたのである。これに伴つてこの經
 二十八品の經意を繪畫にかき現はしたものが、
 所謂變相圖も古くから盛行したらしく、支那
 では隋代に展子虔の畫いた法華變相一卷が殊
 に著名であり、その他大相國寺の二十八品功
 德變相、敬愛寺の法華太子變相壁畫なども知
 られてゐる。日本に於ては平安朝以來、天台
 法華の信仰の隆昌に伴つて、法華經の經意を
 國文學化すると共に、また畫に現はすことも



(藏寺山住海) 羅 茶 曼 華 法

盛んに行はれたらしく、道長建立の法成寺塔
 の柱に二十八品及び開結二經の經意を畫きた
 るが如きは最も著名であり、その他後白河院
 御堂や平泉嘉勝寺の障壁の變相圖も亦一例と
 して逸し難い。遺作としては法華經を書寫し
 た裝飾經の表紙見返し繪に各品の經意を表は
 したものの尠くない久能寺經や、平家納經(裝
 飾經參照)等がまづ擧げられるが、更に注目す
 べきものとしては各品一幅づつ二十八幅に圖

繪した富山縣本法寺本、四幅に圖繪した静岡
 縣本興寺本、靈鷲山說法圖を中心に一幅に圖
 繪した京都海住山寺本などを擧げ得る。これ
 等はいづれも鎌倉時代の作であつて平安朝以
 來の法華變相の内容や、描寫様式等をも知る
 に足るべき作品である。その他經意を繪卷に
 現はした法華經繪卷(藤田家・村山家藏)もこの
 種の一例といふべく、引いては觀音品に依る
 觀音變相や、靈驗品に基づく地獄・餓鬼・畜生・

阿修羅・人・天等所謂六道を現はした繪畫の如
 きも亦、等しく法華經變相の一種と見られる
 であらう。蓋し平安朝以來の佛教信仰は、一
 方に密教を中心として普及したが、他方顯教
 としては天台法華の信仰が中心をなして發展
 したのであつて、佛教美術もこの二大方面に
 區別し得べく、法華變相の如きは、蓋し後者の
 佛畫全般を代表するに足るべきものとして、
 日本の佛畫史上看過すべからざる領域を形成
 してゐるものである。(田中(一))

北國曲 はくこく 俳書 七卷七册 【撰者】
 高田の森卷耳撰 無外坊燕説補となつてゐる
 けれども、澤露川が卷耳にかゝる名義を與へ
 たものに相違ない。【名義】凡例によれば、北
 國の風流といふ義である。第三・四卷の國曲の
 初め毎に、作者不知(露川の自作らし)として、
 その國の方言を讀み込んだ句を置いてゐる。
 【刊行】享保七年【諸本】蕉門俳諧集(俳書
 大系)に所収。

【内容】「西國曲」(別項)、「東國曲」の姉妹篇で、
 露川が門人の伊勢の燕説を伴つて北國行脚を
 した際の收穫の集である。卷之一には諸國の
 發句を蒼天・晏天に分つて、三百四十八句を採
 録し、卷之二には同じく諸國の發句を晏天上
 天に分つて、三百五十一句を採録し、卷之三に
 は越前曲・加賀曲・越中曲・能登曲と標題して
 連句二十一卷(首尾表一折、餘興として發句
 二百九十九句を収め、卷之四には越後曲、こ
 れに合せて正徳五年の行脚であつたものを若
 狭曲・但馬曲・丹後曲・丹波曲と標題して連句
 七卷(首尾表一折、餘興として發句百八句を
 掲げ、又附尾として、先集に一度出した信濃・
 美濃・伊勢・伊賀・近江での首尾表等の連句十
 二卷を収め、卷之五には三越地方での露川の

發句に燕説の發句を交へて、前書を附して紀
 行體にしたもの百五十三句、その中に各地に
 於ける露川の俳文十四篇を挿み、卷之六には
 同じく三越地方での同様の吟八十七句と俳文
 三篇を掲げ、なほ紀行附録として、露川の正徳
 五年の山陰道獨行脚の記(發句五十五句・俳文四
 篇)を同様の體裁で添へ、卷之七には、露川評
 の誹諧歌仙句解一卷(卷耳が名古屋の露川の門人
 と卷いたもの)及び百韻首尾十一卷(卷耳・露川・
 燕説が名古屋の露川門人と卷いたもの)を収めてゐ
 る。卷頭に遊園堂露沾公の序、北國曲集大綱
 と標して凡例九ヶ條、卷々に享保七年六月の
 中閑令卷耳の跋がある。【批評】卷耳の跋に、
 露川は雲水の旅二十餘年、既に六十餘ヶ國を
 廻り、その徒に遊ぶもの、二千餘人と云ひ、
 四隅の道の記(二人行脚・東國曲・西國曲・北國曲)
 があると云つてゐるやうに、露川の各地への
 行脚は、蕉風の弘通ともならぬではなかつた
 が、それよりも露川一派の勢力擴張となつた
 點が多い。この點は支考の各地への度々の行
 脚及びその都度成つた「西華集」「東華集」(各別
 項)その他の著作の關係に類似してゐる。
 支考も行く先々で芭蕉に僞託して自説を宣布
 し、露川も同様であると共に傳授なることを
 やつてゐる。支考と露川との爭論は享保八年
 に始まつてゐるが、本書の行脚の頃は未だ不
 和ではなかつたと見えて、露川が金澤へ來た
 時、支考は石動にゐて、露川へ菓子一箱を贈り
 來り、露川はそれに對して禮狀を送つて、相互
 の年波の寄ることを云ひ送つたりしてゐる。
 然るにこの年に於けるこの同時の行脚が支考
 に衝擊を與へたと見えて、翌八年支考が露川
 に「口狀(露川書)を送り、露川はこれに對して
 その翌九年「相模」を送つて辯難してゐる。な

四五・東方佛教叢書第一輯所収。【解説】初め
 内親王御自撰の漢文の序があり、歌數凡て五
 十五首。四弘誓願、普賢十願、諸經の章句、
 偈文を題として詠まれ、諸經の詠歌中には、
 法華二十八品が中心となつて詠まれてゐる。
 この御歌の數首が、「新古今集」「新勅撰集」「續
 後撰集」「續拾遺集」「續後拾遺集」等に採録さ
 れてゐる。

ほ又支考は、同年に本書中の誹諧歌仙句解を
 難評した「蓮の葉風」を著してゐるのである。
 畢竟これは邪と邪との角突合と評すべき
 醜事であつたと云へる。又「西國曲」「北國曲」
 に見られる露川の俳調は頗る低俗で、實質に
 於て當時の支考の俗談平話體の低俗と違ふな
 きものである。(志田)

鳴ノ長明ハ書ケル」とあるは、「發心集」の永觀
 律師のことを明示するものである。即ち正嘉
 元年頃には長明作の「發心集」が行はれてゐた
 と見るべきである。或は又「雨居友(別項)」に
 も「發心集」の事を長明と關係づけた記述があ
 り、或は「沙石集(別項)」にも明かに「發心集」を
 認めてゐる。これ等鎌倉時代の文獻に、長明
 の「發心集」を認めてゐる以上、現存の八卷本

二に發心後に俗世の福祥を斷ち、草庵を結ん
 で遁世生活をしたたり、行脚生活をしたりする
 遁世説話。玄奘僧都の著名な遁世譚を初め、
 平等供奉・千觀内供・増賀上人等の遁世譚があ
 る。第三往生説話は極樂往生の人々を取扱つ
 たもので、佛種坊・瀧口重助・橋大夫・源頼義等
 の往生譚がある。卷四の或る女房が臨終に魔
 變を見る説話の如きは、導師に依つて魔を退

【解説】初め
 内親王御自撰の漢文の序があり、歌數凡て五
 十五首。四弘誓願、普賢十願、諸經の章句、
 偈文を題として詠まれ、諸經の詠歌中には、
 法華二十八品が中心となつて詠まれてゐる。
 この御歌の數首が、「新古今集」「新勅撰集」「續
 後撰集」「續拾遺集」「續後拾遺集」等に採録さ
 れてゐる。

本にも夙に傳來したのであつて、この經の講讀や書寫や供養等法華信仰は廣く行はれたのである。これに伴つてこの經二十八品の經意を繪畫にかき現はしたもので、所謂變相圖も古くから盛行したらしく、支那では隋代に展子虔の畫いた法華變相一卷が殊に著名であり、その他大相國寺の二十八品功德變相、敬愛寺の法華太子變相變畫なども知られてゐる。日本に於ては平安朝以來、天台法華の信仰の隆昌に伴つて、法華經の經意を國文學化すると共に、また畫に現はすことも

繪した富山縣本法寺本、四幅に圖繪した靜岡縣本興寺本、靈鷲山說法圖を中心に一幅に圖繪した京都海住山寺本などを擧げ得る。これ等はいづれも鎌倉時代の作であつて平安朝以來の法華變相の内容や、描寫様式等を知るに足るべき作品である。その他經意を繪卷に現はした法華經繪卷(藤田家・村山家蔵)もこの種の一例といふべく、引いては觀音品に依る觀音變相や、靈驗品に基づく地獄・餓鬼・畜生・

發句を煮天・曼天に分つて、三百四十八句を採録し、卷之二には同じく諸國の發句を曼天・上天に分つて、三百五十一句を採録し、卷之三には越前曲・加賀曲・越中曲・能登曲と標題して連句二十一卷(首尾表一折)、餘興として發句二百九十九句を收め、卷之四には越後曲、これに合せて正徳五年の行脚であつたものを若狭曲・但馬曲・丹波曲と標題して連句七卷(首尾表一折)、餘興として發句百八句を掲げ、又附尾として、先集に一度出した信濃・美濃・伊勢・伊賀・近江での首尾表等の連句十二卷を收め、卷之五には三越地方での露川の

支考も行く先々で芭蕉に僞託して自説を宣布し、露川も同様であると共に傳授なることをやつてゐる。支考と露川との争論は享保八年に始まつてゐるが、本書の行脚の頃は未だ不和ではなかつたと見えて、露川が金澤へ來た時、支考は石動にゐて、露川へ菓子一箱を贈り來り、露川はそれに對して禮状を送つて、相互の年波の寄ることを云ひ送つたりしてゐる。然るにこの年に於けるこの同時の行脚が支考に衝擊を與へたと見えて、翌八年支考が露川に「口狀(露川書)を送り、露川はこれに對してその翌九年「相模」を送つて辯難してゐる。な

ほ又支考は、同年に本書中の誹諧歌仙句解を難評した「運の葉風」を著してゐるのである。畢竟これは邪と邪との角突合と評すべき醜事であつたと云へる。又「西國曲」「北國曲」に見られる露川の俳調は頗る低俗で、實質に於て當時の支考の俗談平話體の低俗と選ぶべきものである。〔志田〕

鳴ノ長明ハ書ケル」とあるは、「發心集」の永觀律師のことを明示するものである。即ち正嘉元年頃には長明作の「發心集」が行はれてゐたと見るべきである。或は又「雨居友(別項)」にも「發心集」の事を長明と關係づけた記述があり、或は「沙石集(別項)」にも明かに「發心集」を認めてゐる。これ等鎌倉時代の文獻に、長明の「發心集」を認めてゐる以上、現存の八卷本全部は兎も角も、「書籍目録」の云ふ三卷本は長明の作であつたと考へ、それに後人が加筆して現存の八卷に及んだと解するが妥當であらう。〔成立〕「閑居友(承久四年成)」に「本書のことが見えるから、その著作年代を信ぜれば、承久四年(貞應元年)以前となり、更に本書を長明作とすれば、その歿年建保四年以前といふことになる。但し第二卷第九話の瀧口重助の往生譚の條に、承久の頃の語が出てゐるので、記事に誤りがないとすれば、建保四年以前といふ點に矛盾してゐる。が前述のやうに後人加筆の部ではないかと思はれるので、本書の著作年代は、長明作と考へて建保四年以前となる。〔諸本〕「本朝書籍目録」や「群書一覽」にも三卷と出でゐるが、三卷本は現今見當らない。八卷本には慶安四年版の片假名本があり、寛文十年版の平假名本があるが、内容は同様である。片假名本は大日本佛教全書に、平假名本は史籍集覽中に所収。〔系統〕本書の説話の出典又は系統と見られるものは、

二に發心後に俗世の福祿を斷ち、草庵を結んで通世生活をしたたり、行脚生活をしたりする通世説話。玄奘傳の著名な通世譚を初め、平等供養・千觀内供・増賀上人等の通世譚がある。第三往生説話は極樂往生の人々を取扱つたもので、佛種坊・瀧口重助・橋大夫・源頼義等の往生譚がある。卷四の或る女房が臨終に魔變を見る説話の如きは、導師に依つて魔を退け、往生を遂げてゐる。往生譚は、往生人を讚美するやうに、憧憬の念を以て取扱はれてゐる。なほ六道輪廻の因果説話を示すものには、心戒上人の内の目蓮、橋の蟲や蛇になる説話がある。或は因果に關係して天狗となる説話も鬼魔の説話も見落し得ぬものである。或は武州入間川の洪水説話、勲操・勲實・證空の身代説話等の内には、矢張り佛教的教訓を含めて説いてゐるものが多い。靈驗譚には長樂寺の不動、荷車を挽く不動、身代りとなる不動、三昧座主、義叡僧都、中將雅通等がある。法術説話には淨藏の鉢法等注目せられ、又靈魂と婚姻を結ぶ説話も看過出来ない。

四五・東方佛教叢書第一輯所収。〔解説〕初め内親王御自撰の漢文の序があり、歌數凡て五十五首。四弘誓願、普賢十願、諸經の章句、偈文を題として詠まれ、諸經の詠歌中には、法華二十八品が中心となつて詠まれてゐる。この御歌の數首が、「新古今集」「新勅撰集」「續後撰集」「續拾遺集」「續後拾遺集」等に採録されてゐる。

没骨法 没骨法は、繪畫【解説】東洋畫法上の術語で、墨線を中心とせず描線を没却し、墨又は色彩を以て形象を寫す手法である。「小山畫譜」に「崇嗣始めて布彩を用ふ。濃麗、態を生ず。物に背て眞に通る。故に趙昌の輩これに效ふ。多く定本を用ひて臨摹す。筆墨を落さず。これを没骨派といふ」とある。又「芥子園畫傳」三集に、徐崇嗣は描寫を用ひず、ただ丹粉を以て點染してなし、没骨畫と號したことが出てゐる。没骨の意味は、初め墨を以て勾勒して畫き、後に傳彩してその骨を没するといふのであらう。我が國では早くこの法を用ひ、倭繪中にはこの法によつたものがある。後には、勾勒を用ひず、濃淡一色を一筆に含ませて、所謂附立描にしたものも没骨法と呼んだ。〔藤懸〕

法性寺流 法性寺流「書道」を見よ。

發心和歌集 發心和歌集 一卷【作者】選子内親王【成立】御自撰の序によれば、「所以十方淨土之際、遍發往生之心、九品蓮臺之上、終殖化生之緣也」の意を以て、和歌によつて佛道と結縁し給はんとしたもので、それは内親王御自身のためのみならず、化他の意も御含みあつての御製作であつたとが序によつて知られる。御製作の年次は寛弘九年八月(御年四十九)。「諸本」群書類從四

法相宗祕事繪詞 法相宗祕事繪詞 繪卷十二卷【解説】大阪藤田男爵所蔵。もと興福寺一乘院の什寶であつたもので、法相宗の始祖たる唐の玄奘三藏の一代を叙し、殊にその渡天の行蹟を畫くこと最も精しき點に於て、恰も「大唐西域記」を繪卷化したるが如き感がある。描寫は頗る愜密精細なもので傳色も華麗を極めてゐる。その筆致畫趣とも高階隆兼筆の「春日權現繪詞(別項)」と近似する所が頗る多いので、同筆説が最も有力である。併し主題が「春日繪詞」と違つて見も知らぬ天竺が主となつてゐるので、これが描寫もなかく苦心を要したことと思はれ、人物風俗や山川草木の變化など周到に氣を配り、努めて異國情調を出さうとしてゐることが察せられる。總じて構圖描寫とも整美の趣に富んで典麗の致に終始し、活趣に乏しい點は「春日繪詞」に於けると同様に、これにも認められるが、蓋

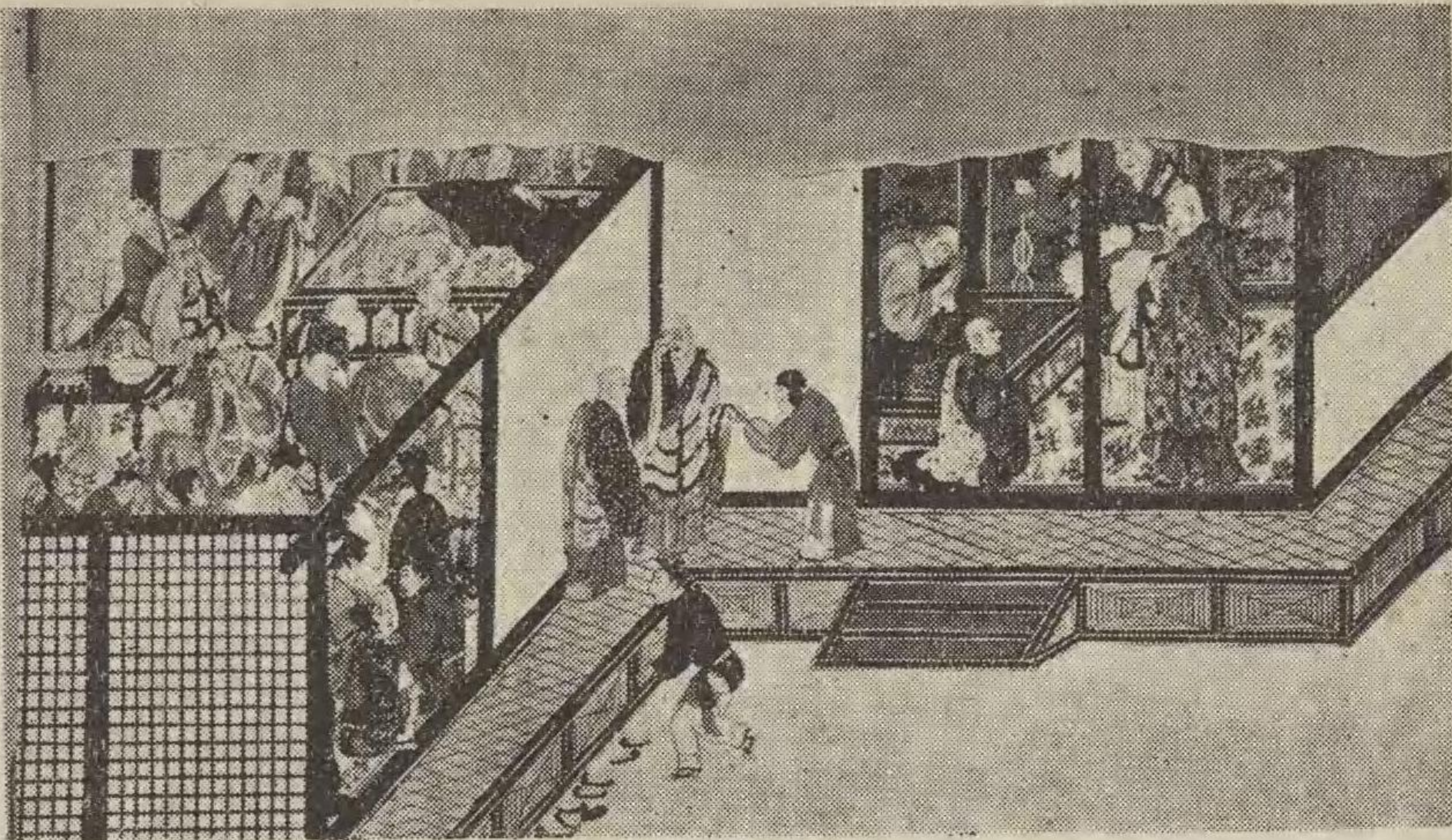
發心集 發心集【著者】鴨長明か。伴蒿蹊の「雨田耕筆」には否定してゐるが、長明と考へるが妥當であらう。〔卷冊數〕現存の「發心集」は八卷であるが、「本朝書籍目録」には三卷と出でゐる。それで原本の「發心集」は三卷であつたかと思はれる。八卷本の方には後人の加筆を認めるにしても、三卷の「發心集」は、恐らく長明の作と見るべきである。正嘉元年に出來た「私家百因緣集」に、「于今事ノ外ナル古木ニ花ノ時ハ纒ニ戀タル枝少々咲ト

本があり、寛文十年版の平假名本があるが、内容は同様である。片假名本は大日本佛教全書に、平假名本は史籍集覽中に所収。〔系統〕本書の説話の出典又は系統と見られるものは、

發心和歌集 發心和歌集 一卷【作者】選子内親王【成立】御自撰の序によれば、「所以十方淨土之際、遍發往生之心、九品蓮臺之上、終殖化生之緣也」の意を以て、和歌によつて佛道と結縁し給はんとしたもので、それは内親王御自身のためのみならず、化他の意も御含みあつての御製作であつたとが序によつて知られる。御製作の年次は寛弘九年八月(御年四十九)。「諸本」群書類從四

法相宗祕事繪詞 法相宗祕事繪詞 繪卷十二卷【解説】大阪藤田男爵所蔵。もと興福寺一乘院の什寶であつたもので、法相宗の始祖たる唐の玄奘三藏の一代を叙し、殊にその渡天の行蹟を畫くこと最も精しき點に於て、恰も「大唐西域記」を繪卷化したるが如き感がある。描寫は頗る愜密精細なもので傳色も華麗を極めてゐる。その筆致畫趣とも高階隆兼筆の「春日權現繪詞(別項)」と近似する所が頗る多いので、同筆説が最も有力である。併し主題が「春日繪詞」と違つて見も知らぬ天竺が主となつてゐるので、これが描寫もなかく苦心を要したことと思はれ、人物風俗や山川草木の變化など周到に氣を配り、努めて異國情調を出さうとしてゐることが察せられる。總じて構圖描寫とも整美の趣に富んで典麗の致に終始し、活趣に乏しい點は「春日繪詞」に於けると同様に、これにも認められるが、蓋

しこれも鎌倉末期の時代的特色と云ふべきである。而して當時相前後して製作された「一遍上人繪傳」法然上人繪傳(各別項)等と相並



(藏氏郎太平田藤) 詞繪事秘宗相法

んで當時佛寺の間に流行した宗祖繪傳の顯著な一例となる大作であつて、且つはその頃の異國に對する觀念や解釋のほどもしのばれて興味深きものがある。

【坊つちやん】小説【作者】夏目漱石【發表】明治三十九年四月、雜誌「ホトトギス」【刊行】同四十年一月、「草枕」二百十日と共に、「鶉籠」と題して刊行。漱石全集第二卷、同普及版第三卷所収。

【梗概】標題の譯名を坊つちやんと呼ばれる主人公は物理學校出身の一中學教員である。彼

争の大渦の中に巻きこまれるばかりだつた。その間、武男は黄海に奮戦して負傷し、佐世保病院に送られると無名の心づくしの小包を受け取つた。言はずと知られるその贈主の浪子は、武男からの衷情を訴へた手紙を返子で讀んだ。「身は良人を戀ひ戀ひて病よりも思ひに死なんとし、良人は斯くも思ひて居たまふを」

信子を自家に招きて子爵橋本綱常博士に診察を受けしめたが、同博士もまた肺結核との診断であつた。そこで大山家から離婚引取り方を三島家に申入れた。しかし三島家がこれに應じないので、媒人たる西郷從道侯夫妻が種々三島家を説いて信子は實家に歸り、捨松夫人の有らん限りの介抱も遂に空しく、明治二十九年五月二十一日、麴町永田町の陸軍大臣官邸にて歿したのである。明治三十一年の

のみに止まらず、英米、ドイツ、フランス、ポオランド等の各國にそれらの譯語が行はれ、中華民國では、楊少雲の長詩「不如歸行」が刊行されてゐる。

【沓手鳥孤城落月】小説【作者】史劇三幕【作者】坪内逍遙【發表】明治三十年九月、新小説【刊行】明治三十一年一月、脚本集「菊と桐」逍遙選集第一卷、日本戯曲全集所収。【上演】明治三十八年五月、大阪角座。

は單純で率直で無邪氣な多血質な性格の持主である。親ゆづりの無鐵砲で子供の時から損ばかりしてゐると告白してゐる。初めに生立ちの話があつて、第二章から本題に入る。彼の周圍には狸(校長)・赤シャツ(教頭)・うらなり・やまあらしの、だいたいこの同僚があつて、その忌むべき、笑ふべき、卑しむべき、憐むべき性格が、單純なる彼の性格と對照されてある。それから、その田舎町の堪らない地方色を代表する生徒の一群がまた對照されてある。彼の性格は遂にこの地方的、世間的惡空氣と妥協することが出来ないで彼は東京へ遁げ戻るのである。この對照を最もよく表現するものは主人公の使ふ江戸言葉と地方的方言との比較である。作者はこれを一見殆ど無技巧とも見えるやうな、直線的な、線の太い、きびしい、齒ぎれのよい語法で取り扱つてゐる。主人公の性格を描き出すには、この外の如何なる語法も適當でないと思はれるほど、びつたりした表現法である。この作品は先づこの表現法で成功してゐる。

【解説】作者は明治二十八年四月から一年間、愛媛縣松山中學校教諭であつた。俸給なども校長以上の待遇を受け、十分に敬意を拂はれてはゐたが、とにかく「此處にゐた一年間は夏目にとつては大變不愉快のものであつたらしい」と未亡人は語つてゐる(漱石の思ひ出)。「坊つちやん」は即ちこの時の作者の經驗をそのままに書いたものだと思つて解釋することは出来ないけれども、當時の印象が題材の幾部分かを成してゐること考へられる。主人公の性格が即ち作者の性格であるといふことも正しくないが、作者の心境の中に、この主人公の行動を是認するものがあつたことは認め

てよい。書き出しの主人公の幼時の追憶にも作者のそれと一致する點がある。主題は簡單で、社會の不正に對する反抗的意向と見るこゝとが出来る。創作の價値は主としてその男性的な表現の上に在るが、その中に忠實なる老女の描寫に依つて一味の情感を配合してあるのは、全體の晴れやかなユウモラスな調子を際立たせるに効果がある。「草枕(別項)」と相對して作者の初期の二つの相反する作風を代表してゐると云へる。因みに、昭和二年十一月、木村錦花の脚色で、市川猿之助等によつて本郷座に上演され、好評を得た。

【野上】秀眞「神代文字」を見よ。没理想「坪内逍遙」を見よ。

【暮笛集】詩集【著者】薄田泣菫【刊行】明治三十一年十一月、金尾文淵堂。【内容】明治二十八年後の試作を集めた著者の第一詩集。五十一篇を収め、長篇「尼が紅」絶句十九篇等がある。絶句は十四行曲に準へたものであるが、別にソネットの韻法を踏んでゐるものではない。著者の詩風は早く仄めてゐる。(薄田泣菫参照)【日夏】佛原「平家物語の謡曲」を見よ。佛舞「傀儡子」を見よ。

【ホトトギス】俳誌【創刊】明治三十年一月、松山ホトトギス發行所。【沿革】明治二十八年の秋、子規が病氣で松山に歸り、漱石の假寓に同居してゐた時、初め松山市に於て柳原極堂に依つて創刊され、三十一年八月二十日、一先づ休刊になつてゐるが、同年十月東

京に移す事となり、子規が虚子をして編輯に當らしめた。これより同誌は日本派の中央機關となり、日本派俳人に標準を與へ指導の地位に立つ勢力となつた。子規生前に於ては、俳句には子規・鳴雪・虚子・碧梧桐・漱石・四方太・露月・青々等多士濟々たるものがあり、寫生文には、子規・虚子・四方太等を初めとして寺田藪柑子・長塚節等の作家、年を逐うて多きを加へた。子規歿後は、寫生文は小説的に開展した一面をも生じ、漱石及びその門下たる鈴木三重吉・野上彌生子・安倍能成・小宮豊隆

等の清新な作が掲載され、文壇諸星の寄稿するものも多くなつた。かくて種々の關係で、同誌の俳句が一時衰へた傾きがあり、また明治四十年頃、碧梧桐が新傾向俳句に赴き、自然虚子と分離するに至つたので、同誌は全く虚子の主宰するところとなり、句作に力を注ぐに至つた虚子に依つて、大正の初め頃から再び同誌の俳句が興隆し來り、鬼城・石鼎・蛇笏・泊雲・月舟の如き作家を出すに至つた。昭和四年十二月第四百號を出すに至つたが、同人に列する者三十二名に及んでゐる。漱石の「我輩は猫である」(別項)は、最初本誌に發表

【沓手鳥孤城落月】小説【作者】史劇三幕【作者】坪内逍遙【發表】明治三十年九月、新小説【刊行】明治三十一年一月、脚本集「菊と桐」逍遙選集第一卷、日本戯曲全集所収。【上演】明治三十八年五月、大阪角座。

【沓手鳥孤城落月】小説【作者】史劇三幕【作者】坪内逍遙【發表】明治三十年九月、新小説【刊行】明治三十一年一月、脚本集「菊と桐」逍遙選集第一卷、日本戯曲全集所収。【上演】明治三十八年五月、大阪角座。

【沓手鳥孤城落月】小説【作者】史劇三幕【作者】坪内逍遙【發表】明治三十年九月、新小説【刊行】明治三十一年一月、脚本集「菊と桐」逍遙選集第一卷、日本戯曲全集所収。【上演】明治三十八年五月、大阪角座。

【沓手鳥孤城落月】小説【作者】史劇三幕【作者】坪内逍遙【發表】明治三十年九月、新小説【刊行】明治三十一年一月、脚本集「菊と桐」逍遙選集第一卷、日本戯曲全集所収。【上演】明治三十八年五月、大阪角座。

んで當時佛寺の間に流行した宗祖繪傳の顯著な一例となる大作であつて、且つはその頃の異國に對する觀念や解釋のほどものばれて興味深きものがある。

【田中(一)】

【坊っちゃん】小説【作者】夏目漱石【發表】明治三十九年四月、雜誌「ホトトギス」【刊行】同四十年一月、「草枕」二百十日と共に、「鶉籠」と題して刊行。漱石全集第二卷、同普及版第三卷所収。

【梗概】標題の譯名を坊っちゃんと呼ばれる主人公は物理學校出身の一中學教員である。彼

【水風】
【不如歸】小説【作者】徳富蘆花【發表】明治三十一年十一月二十九日より同三十二年五月二十四日まで國民新聞に連載。【刊行】明治三十三年一月民友社より單行。蘆花全集第五卷、現代日本文學全集所収。

【梗概】幼くして母を失つた浪子は、英國仕込みの冷徹な繼母の手で育てられ、父片岡陸軍中將の慈愛の蔭に「光を纏める處女」として十八の年を迎へたが、川島男爵家の若い當主に嫁するに及んで、はじめて楽しい人生の春に酔ふことが出来た。海軍少尉の快活で温情に富む武男と新婚の日を伊香保に過ごし、蕨狩に興じながら夢のやうな幸福に浸つた。間もなく夫を遠洋航海に送つた浪子は、別離の淋しさと共に、氣むづかしい姑川島未亡人に仕へて、一人で辛い試煉を忍ばなければならなかつた。半年ぶりに夫を迎へると、夫婦は再び蜜月の樂しみを繰り返す思ひだつたが、ふとした風邪が原因で浪子は恐ろしい肺結核に冒され、逗子に轉地療養することになつた。

併し夫と二人の散策に、「きつと癒りますわ」と瀧の不動で誓つたやうに、浪子が次第に回復に向つて来たところへ、思ひがけない破鏡の嘆きがその心身を打ち挫いた。かねて浪子に戀してゐた千々岩が自業自得の窮境と失戀との腹癢せに、伯母の川島未亡人に、頻りに傳染病の怖ろしさと家系の斷滅を説いて、武男が演習で不在の間に浪子を離縁せしめたのだつた。武男が歸つてこれを知つたのは、すでに日清開戦間際だつたので、母と争ふ暇もなく、捨てばちの身を砲丸の的にもなれと、軍艦松島に搭し、悲憤の涙と共に轟地に戰場に向つた。それから一切の銷魂も怨恨も暫し戦

争の大渦の中に巻きこまれるばかりだつた。その間、武男は黃海に奮戦して負傷し、佐世保病院に送られると無名の心づくしの小包を受け取つた。言はずと知られるその贈主の浪子は、武男からの衷情を訴へた手紙を逗子で讀んだ。「身は良人を戀ひ戀ひて病よりも思ひに死なんとし、良人は斯くも思ひて居たまふを」「如何なれば世は擅に二人が間を裂きたるぞ」と生きて樂しみなき命を悲しんで、思ひ出の不動の岩から海に身を投ぜんとして、キリスト信者の女に抱き止められ、こゝに漸く宗教の慰安を心に與へられるやうになつた。傷癒えて再び彈雨に苦惱を忘れようと戦地に行つた武男は、旅順で圖らずも敵に狙撃せられんとする片岡中將を救ひ得た。やがて戦果で凱旋した片岡中將は、病める浪子を慰めるために關西旅行を試みた。山科驛で折柄臺灣へ出征の途にある武男を車窓に見出した。一瞬忘れ得ぬ二人は互になつかしき名を呼び交したがそれが最後だつた。歸京して浪子の病はいよいよ重なり、伯母で仲人だつた加藤夫人に武男への遺書を託して月見草の如く淑かな生涯を終へた。訃報を得た武男が歸京の日に青山墓地を訪ねると、圖らず墓標の前で片岡中將と邂逅した。武男の手を握つて中將は言つた。「武男さん、わたしも辛かつた」「浪は死んでも、喃、わたしは矢張りあなたの爺ぢや」。

【解説】著者が初めて發表した長篇小説で、この時からその創作時代が始まつた。作中のモデルは、陸軍大將大山巖、同捨松夫人、同信子、子爵三島彌太郎、同わか子等の人々なのは事實である。即ち大山巖の長女信子が三島彌太郎と結婚後、間もなく男爵高木兼寛博士に肺患なりと診斷された事を聞いた大山家では、

準へたものであるが、別にソネットの韻法を踏んでゐるものではない。著者の詩風は早く仄めいてゐる。(薄田泣菫参照) 【日夏】

佛原の「平家物語の謡曲」を見よ。

佛舞し「傀儡子」を見よ。

ホトトギス 俳誌【創刊】明治三十年一月、松山ホトトギス發行所。【沿革】明治二十八年の秋、子規が病氣で松山に歸り、漱石の假寓に同居してゐた時、初め松山市に於て柳原極堂に依つて創刊され、三十一年八月二十日號で先づ休刊になつてゐるが、同年十月東

信子を自家に招きて子規橋本綱常博士に診察を受けしめたが、同博士もまた肺結核との診斷であつた。そこで大山家から離婚引取り方を三島家へ申入れた。しかし三島家がこれに應じないので、媒人たる西郷從道侯夫妻が種々三島家を説いて信子は實家に歸り、捨松夫人の有らん限りの介抱も遂に空しく、明治二十九年五月二十一日、麹町永田町の陸軍大臣官邸にて歿したのである。明治三十一年の夏、著者は逗子の柳屋で大山大將の副官たりし福屋中佐の未亡人安子より、信子の薄命なりし生涯とその末期の言葉を開き、これを小説化したものである。千々岩・山木父子・片岡夫人・川島未亡人その他は悉く著者が空想裡のもので、これに境遇の類似する實在の人物とは、素より何等の關係もなく、小説中の性格は寧ろ正反對である。この作は日本に於ける初期のモデル小説として好奇的に讀まれたばかりでなく、家庭内の新舊思想の衝突と、傳染病を極端に恐怖したる當時の科學的脅威を描けるとが、時代の興味に投じた理由である。また浮卑ならぬ夫婦の純愛を以て一貫してゐることが、多くの家庭に迎へられた所以であらう。凡そ明治・大正・昭和を通じてこの作ほど廣く且つ永く讀まれた著書は他にその比を見ず、明治四十二年二月には第百版を、昭和二年九月には第百九十版を發行し、なほ讀者を絶たない。演劇に映畫に上場映寫された事幾百回なるかを知らない。この作に依り青山墓地の信子の墓に詣づる者あり、逗子に浪子不動なる新名所生れ、更に青年士女は一時肺結核をロマンチックな病症と觀するまでになり、その影響と感化もまた頗る著大である。國內に於て上述の如く多くの讀者を得た

のみに止まらず、英米、ドイツ、フランス、ポオランド等の各國にそれらの譯語が行はれ、中華民國では、楊少雲の長詩「不如歸行」が刊行されてゐる。

【沖野・水木】

【沓手鳥孤城落月】小説【作者】史劇三幕【作者】坪内逍遙【發表】明治三十年九月、新小説。【刊行】明治三十一年一月、脚本集「菊と桐」。逍遙選集第一卷、日本戯曲全集所収。【上演】明治三十八年五月、大阪角座。

【役割】淀君・且元(片岡我當現仁左衛門)、常磐木・秀頼(片岡我當、千姫(中村雀右衛門)、家康(嵐橋三郎)、本多佐渡守・大藏卿(黒谷市藏後の中村嘉七)、正樂尼・大住與左衛門(中村高福)、櫻庭局(中村歌野)、井伊掃部頭(實川延三郎)、片桐出雲守(尾上多見藏)等。

【題材】大阪落城を取扱つた悲劇で、「桐一葉」と二部作をなす。

【梗概】「序幕」元和元年五月七日の夜、難攻不落と稱された大阪城も今宵限りとなつた。豊臣家滅亡の前夜、更けゆく儘に、さしもの騒ぎも静まつた大阪城の奥殿を、かねて徳川方に内通の小車局が秀頼の御臺所千姫を城外に落さんと手を取つて忍び出で、庭の木蔭に窺つてゐた本多家の奥女中常磐木に渡さうとする折、淀君は薙刀を小脇に追ひ駆けて来て小車を斬り倒し、常磐木を縛した。更に千姫の預かり人櫻庭の局を激しく責めるので、局は潔白の言譯に自害せんとするのを正樂尼が留める。常磐木は舌を噛み切つて落命する。淀君は怒りの極、半狂亂の態となり、千姫を捕へ引倒す。この時鐘姿の大野修理亮が来て御覺悟の肝要を述べ、最後の評議をなすため、一同天守に集まる。「二幕」片桐市正且元は、重病を押して茶臼山の本陣に大御所家康を訪問し

て憐憫を乞ふ。家康も彼の苦衷を察し、希望のまゝに秀頼母子の命はもとより出城の際にも相當の禮儀を盡すべきことを許し、且元をして迎へのために城内に遣はす。城中では間者の庖丁大住與左衛門が大臺所に火を放つたので、火は忽ち八方に擴がり、天守さへも危ふく見えた。この混雜に紛れて姫は被衣に人目を避けて城を逃れ出る。秀頼は淀君と共に砲火を避けて山里の精庫に移る。淀君は人質たる千姫の脱出を知つて、憤怒と無念さに激しい癡氣を發し、半ば狂人のやうになつた。その状を見兼ねて秀頼は我が佩刀に掛けんとしたが、左右の者に留められ、濟然として泣く。大野修理は徳川方よりの催促に對し、淀君の意志なりとして降服出城の旨を返答したといふので、一同反對したが、結局秀頼も母淀君のために恥辱を忍んで開城と決意する。

【三幕】作出雲守に助けられて、駕籠で本丸の櫻門前まで来た且元は、吐血氣絶してゐたが、正氣付くや、お迎への輿を城内へ急げと命する中、凄しい大筒の響きと共に天守に火の手が上つた。出雲守を見せにやると、程なくして戻り、秀頼母子の生害を報告するので、且元の懊惱はその極に達する。そこへ家康が馬上で来り、且元を憫み、千載の恨事だと慰める。且元は遂に絶命する。

【價值】作者の作中最も舞臺效果に富み、實演に適するものとの定評もあり、上演回数は三都を通じ十五回にも及んでゐる。且元の役は片岡仁左衛門・市川左團次・中村吉右衛門等により、また淀君は中村歌右衛門により八回も演ぜられ、その當り役中の當り役とされてゐる。既に「桐葉」中に淀君の特異なる性格は示されたが、この作に至つて一層その發展を

見、日本演劇史上空前の女性として描かれ、舞臺上の演出に於ては歌右衛門の適役としてその殆ど完全なる演出を見せ、單に歌右衛門の劃期的演出役となつたのみならず、歌舞伎の劇術上に一新生命を與へたものと推賞されてゐる。

【參考】續々歌舞伎年代記田村成義○明治劇壇五十年史 關根黙庵

時鳥殺し 能狂言 【別名】骨皮新發意 骨皮新發意 骨皮新發意 骨皮新發意

【梗概】住持が隠居して、寺を新發意に渡すについで、檀那方の機嫌を取るやうに、また何でも相談にのると言ふ。新發意はその好意を謝する。處へ檀那市兵衛が傘を借りに来る。新發意は來意を聽いて、お安い御用なりと傘を貸し、その旨を住持に語ると、住持は坊主の一本傘は貸さぬものだ。そのやうな場合に

は、この中外に干したら風が吹いて、骨は骨、紙は紙となつたので、繩で繋げてさらへ上げて置いたと言ふものだを教へる。次に檀那次郎兵衛がさる方へ參るにつき寺の馬を借りに来る。すると新發意は、傘を貸した時住持に教はつた通りにいふので、次郎兵衛は、それは馬の事かと訝るが、是非もないと歸つて行く。新發意は又その旨を住持に語ると、住持は、馬などには、この中草草につけた處、だぐるひをして腰が立たぬから、既に繋いだまゝである。御用に立ちますまいと斷るのでと言ひ合

める。すると今度は檀那三郎兵衛が、明目佛事につき老僧その他に齋に來て貰ひたいと頼みに来る。新發意は、私は參らうが老僧は行かれぬと、住持に教へられた馬をことわる文句で挨拶するので、檀那はけいんな顔をして

歸る。そこで又新發意は、その次第を住持に告げる。新發意の仕打が餘りなので、住持は大に立腹し、遂に喧嘩になり、新發意は住持を打倒す。住持、やるまいぞやるまいぞで新發意を追ひ込む。

【解説】この作は、和尚と小僧といふ型の童話式のもので、その可笑味は、住持の教が新發意の言動として、一つ一つ次第にくひ違つて行く點にある。これは外國文學にも類例のあることで、獨逸のグリム兄弟の童話集の三十三番にある「利口なハンス」(Der Gescheite Hans)と全く同タイプである。それからこの作のやうな趣向の時に、大抵三回の繰返し

が用ひられてゐるのは、注意すべきことである。教へられた方が却つて頑迷で、果ては喧嘩となり、教へ手に對して亂暴をするといふ點は、狂言「いろは」も同じである。【野村】

火雷神 神話 【名義】名の義は自ら明かである。松岡靜雄氏は、火雷神は借字であつて、「ほは秀の義、いかつち」は威

靈又は英主といふほどの意であらうとなしてゐるが、首肯し難い(日本古語大辭典)。

【本質】一種の雷霆神であらう。山城國乙訓郡に鎮座する神である(山城國風土記神名帳)。「三代實錄」に見ゆる保沼雷神、記、紀に見ゆる火雷(伊弉册尊の體に生り出たもの)及び大和、和泉、上野等に見ゆる火雷神社との關係は、確實には知られない。

【神話梗概】「釋日本紀」引くところの「山城國風土記」によると、丹波國神野の神伊賀古夜日賣の女王依日賣が、石河の瀬見の小川に遊ぶ時、丹塗矢が流れて來た。拾つて床邊に挿すと、感じ孕んで一男子を産んだ。外祖父建角身命が子の父を知らうとして、神々を集めて

七日七夜の宴遊を催し、男子をして父と思ふ者に酒杯をさしせると、その子は杯を擧げ、天に向ひて祭をなし、屋簷を穿つて天に昇り去つた。それは別雷神命であり、而して丹塗矢に化したのは、山城國乙訓郡に坐す火雷神であつた。

【解説】これは神婚説話の一種である。丹塗矢は蒙古民族が好んで用ひた鳴鏑の矢であり、そしてこの矢は、別雷神の父神の神靈であると共に、また同神を崇拜する部族のトーテム(Totem)であつたらしい。更に玉依姫の玉依は借字、本義は魂憑で、神が憑りますところの巫女を示す。かくて火雷神が丹塗矢に變じて玉依姫に近づいたといふ觀想は、蒙古系の一神が、トーテムの姿を採つて神の憑物である女人と靈交をなしたことを表示するとなす説がある(中山太郎氏「寶笑三千年史」)。玉依姫が魂憑であり、神の憑りましの巫女であることは疑ひない。神胎を宿す女性に「たまより」「いくたまより」といふ名の女性が多いのは、これがためである。併し神が丹塗矢に化して女性に近づいたのは、火雷神の外に大物主神もあり、且つ弓の矢は、男性の性器の象徴若しくは女性を妻にするときの儀式の要具として、婚姻と密接な關係を有する故、この神話には、トーテム的解釋以外にも説明の餘地があることを記憶しなくてはならぬ。生兒の父親が不明で、これを知る方法を講じたといふ件は、女性を通して血縁を定めた女系制の反映であらう。この制度の下には、父は一個の外者に過ぎなかつた。

【參考】日蒙類似語に就て 鳥居龍藏(史學雜誌) 八一九〇 十二支研究 南方熊雄(大陽所載) 〇 神婚神話に於ける矢の意義 松村武雄(神話學)

頼阿彌陀縁起

【松村】 鎌倉光願寺所藏二巻。同寺の本尊阿彌陀如來の功德讃を畫いたもので、これと殆ど同じ話が「沙石集」(別項)にも載せられてゐる。萬歳法師といふ下法師が妄語偷盜の罪に由つて左の頬に焼印を捺されたが、不思議にもその頬は焼けずに、却つて法師の信仰する雲慶作の可憐な如來が身代りとなり、左の頬に焼

化に伴ひ、鎌倉以後多く行はれてゐるが、この縁起の如きも亦、その顯著な一例となるものである。【田中(一)】

【参考】道頓堀花みち高平辰露○續耳塵集金子吉左衛門○古今役者大全 ○「ほめことば」の正本

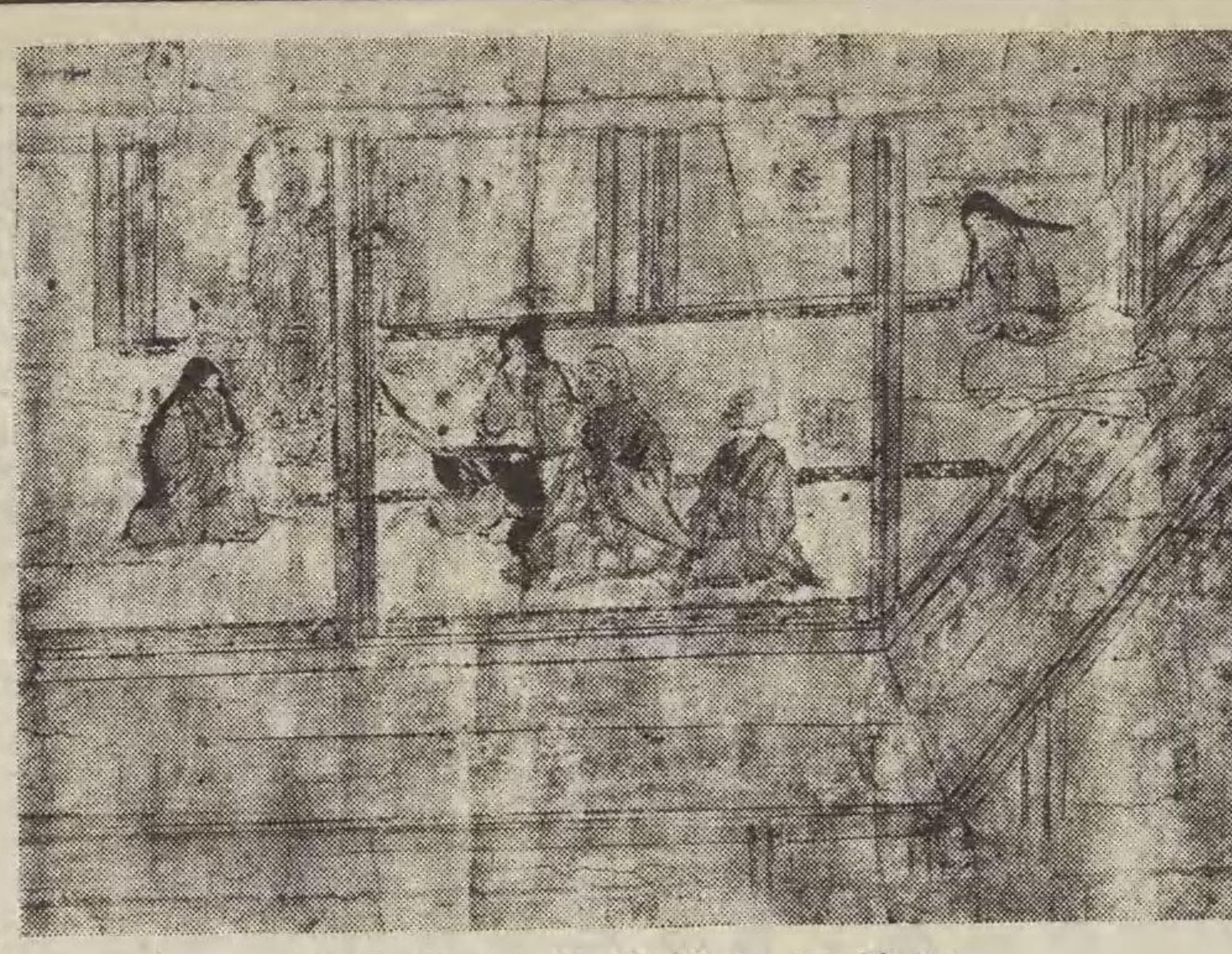
【参考】日蒙類似語に就て 鳥居龍藏(史學雜誌) 八一九〇 十二支研究 南方熊雄(大陽所載) 〇 神婚神話に於ける矢の意義 松村武雄(神話學)

て戻り、秀頼母子の生害を報告するので、且元の懊惱はその極に達する。そこへ家康が馬上で来り、且元を憫み、千載の恨事だと慰める。且元は遂に絶命する。

【價值】作者の作中最も舞臺效果に富み、賞演に適するものと定評もあり、上演回数には三都を通じ十五回にも及んでゐる。且元の役は片岡仁左衛門・市川左團次・中村吉右衛門等により、また流石は中村歌右衛門により八回も演ぜられ、その當り役中の當り役とされてゐる。既に「桐一葉」中に流石の特異なる性格を示されたが、この作に至つて一層その發展を

論考 頼焼阿彌陀縁起

【鎌倉光願寺所蔵二巻。同寺の本尊阿彌陀如來の功德譚を畫いたもので、これと殆ど同じ話が「沙石集」(別項)にも載せられてゐる。萬歳法師といふ下法師が妄語偷盜の罪に由つて左の頬に焼印を捺されたが、不思議にもその頬は焼けずに、却つて法師の信仰する雲慶作の阿彌陀如來が身代りとなり、左の頬に焼



(藏寺光)起縁陀彌阿焼頼

痕が出来たので、幾度それを修理しても遂に消えなかつたといふ。繪は土佐光興、詞書は冷泉爲相と傳へられてゐるが、固より根據あるものでない。ただその畫風は、鎌倉末葉に大成された土佐派の様式を傳へて温雅な描寫のものであつて、法印靖巖が文和四年の奥書に、多年この繪を所持すと記してゐるので見ても、また南北朝以前の作たることが明かである。佛菩薩の身代り話は、佛教信仰の民衆

ほほやけ ほりかわ

来る。すると新發意は、傘を貸した時住持に教はつた通りにいふので、次郎兵衛は、それは馬の事かと訝るが、是非もないと歸つて行く。新發意は又その旨を住持に語ると、住持は、馬などには、この中青草につけた處、だぐるひをして腰が立たぬから、既に繫いだまゝである。御用に立ちますまいと斷るのだと言ひ合める。すると今度は檀那三郎兵衛が、明目佛事につき老僧その他に齋に來て貰ひたいと頼みに来る。新發意は、私は參らうが老僧は行かれぬと、住持に教へられた馬をことわる文句で挨拶するので、檀那はけいんな顔をして

化に伴ひ、鎌倉以後多く行はれてゐるが、この縁起の如きも亦、その顯著な一例となるものである。【田中(一)】

ほめことは

歌舞伎劇【名義】褒詞・賞詞等の文字を當ててゐるが、或る役者の容姿・風手等をほめる義である。初めは「某をほめことば」といつた用法から分離して單に「ほめことば」と使ふやうになつた。【沿革】發生は女歌舞伎時代に遡るが、この語が獨立して世に行はれるやうになつたのは、寛文延寶の頃である。流行は元祿年代で、その後はやゝ形式的になつて命脈を繋いでゐるが、幕末期には殆ど滅んでしまつた。明治五年一月村山座で田之助の一世一代の時、復活されたのが最後であつたらう。【解説】歌舞伎劇の親和的本質の一方の現はれとも見るべきで、役者の風姿に接した觀衆の、自ら發する愛着の絶叫である。初め「お作ちよい」とか、「うき世の人殺し、殺せ〜」などの親和的な奇聲な語句に終始してゐるが、漸次美的な要素を加へて來た上に、文章としての發達をすら見るに至つた。更に發表者が觀衆に止まらず、舞臺上の役者を通して實現されるやうにもなつた。これは脚本の一部に侵入して、作者はこの部分に美辭麗句を用ひた。元祿時代に近松の綴つたものは、その最も上乘のものと言へる。觀衆が最良役者のために、「ほめことば」を吐く時は、演技の途中、これを中止させるのであるから、非常な演技の邪魔となる場合をも生じた。元祿時代から以後に互つて、この「ほめことば」の部分のみが印行されて世に行はれた。これには或る役者の臺詞の一部としてほめことばの場合と、觀衆の叫んだもので好評を博した場合のものがある。「ほめこ

一種の雷霆神であらう。山城國乙訓郡に鎮座する神である(山城國風土記神名帳)。「三代實錄」に見ゆる保沼雷神、記・紀に見ゆる火雷(伊弉册尊の體に生り出たもの)及び大和・和泉・上野等に見ゆる火雷神社との關係は、確實には知られない。

【神話梗概】「釋日本紀」引くところの「山城國風土記」によると、丹波國神野の神伊賀古夜日賣の女王依日賣が、石河の瀬見の小川に遊ぶ時、丹塗矢が流れて來た。拾つて床邊に挿すと、感じ孕んで一男子を産んだ。外祖父建角身命が子の父を知らうとして、神々を集めて

とばのせりふ盡しといふべきこれ等の出版物その物をも「ほめことば」と稱へるやうになつた。

【参考】道頓堀花みち高平辰露「續耳塵集金子吉左衛門古今役者大全」○「ほめことば」の正本

堀江物語

【作者】未詳【成立】未詳。徳川初期か【諸本】三卷の刊本あり、「寛文七年丁未十一月吉日、吉田彌兵衛板行」と奥にある。

【梗概】上野の國に、原新左衛門といふ豪族が居り、三男一女があつた。この女美しき較ぶるものなく、十三歳の時、源義家四代の孫で下野の國鹽谷郡堀江頼方の一子三郎頼純に嫁し、月若を生む。然るに頼方死するや、領地の大部を召上げられたから俄に貧しくなつた。原は元來強欲であつたから娘を取戻さうと考へる。時に藤原中納言の子三位中將が國司になつて下つたが、新左衛門の娘を得たいとの旨を通じ財寶を與へる。原は慾に目がくらんで頼純を殺さうと三子に謀つた。三人は仕方なく同意して、頼純には良き郎黨あれば攻め討つ事は出来ぬからと偽つて、原に代り京都の大番役を勤めん事を頼む。頼純・安藤五・安藤六等の一騎當千の兵を率ゐて上る。原は三子をしてこれを追はせ、中將は相馬をして助けしめた。兩勢は鎌倉上田山で大に戦つたが、頼純は原の三子を討ち、相馬を殺し、その最後の言により中將及び原の意圖なる事を知つて遂に自刃した。原は女を自邸に招いてその歸途を中將に奪はせる。併し娘は夢に夫の死を知り、中將の邸に到つてその首を見て遂に自刃した。中將は月若をなりの池に沈めさせ、乳母が尋ねてその池に到ると、靈蛇その

堀河院御時百首和歌

【大野木】和歌【異稱】「堀河院初度百首」「堀河院太郎百首」【諸本】群書類従一六七所收。古寫本は圖書寮・内閣文庫等に藏し、新校群書類従本は内閣文庫本を以て舊本を校合してある。

【解説】堀河天皇の康和年中に召された百首和歌である。これを「太郎百首」とは「堀河院太郎百首」など云ふのは、鳥羽天皇の永久四年の百首を「次郎百首」と呼ぶに對してである。題は春二十首、夏十五首、秋二十首、冬十五首、戀十首、雜二十首。作者は公實・匡房・國信・師頼・顯季・顯仲・仲實・俊頼・師時・顯仲(藤原)・基俊・永縁・隆源・肥後紀伊・河内の十六人である。歌數通計千六百首。百首和歌は「重之集」「曾丹集」に入れるものを最古の文獻とし、「相模集」にもあつて以後追々流行してゐるが、一首毎に題を設けたものは、この

堀河院百首に始まり、以後の組題百首の規範となつた。その點で和歌史的に意義深きものである。〔中島〕

堀河學派

〔漢學〕を見よ。

堀川波鼓

浄瑠璃 三段 世話物 〔作者〕近松門左衛門 〔興行〕寶永四年二月十五日より竹本座(明和板)外題年鑑 〔諸本〕八行三十丁本、山本九兵衛板。諸種の近松浄瑠璃集所収。〔題材〕浮世草子の「熊谷女編笠」(京畿鎖帷子)各別項)に據る。

〔梗概〕〔上卷〕因幡の藩士小倉彦九郎が江戸詰の留守宅。養子文六の鼓の師匠宮地源右衛門が稽古を終つて戻つた跡、同役磯邊床右衛門が訪ね來り、彦九郎の妻お種に、不道の戀を遂げんと脅迫する。お種は一時逃れに後會を約するを源右衛門に立ち聞きされる。床右衛門が去つて後、お種は源右衛門に他言せぬやう哀願するが、源右衛門は慈と曖昧な返事をするのでお種は憤亂し、源右衛門を捉へて他言せぬ固めの盃として茶碗酒を取り交す中、生來好きな酒の事と思はず度を過ごし、永らく孤閨を守る中年女の惱みは、酔と共に理性の絆を放れ、闌らずも源右衛門と不義の枕を交す。酔が覺めて始めて犯した罪の恐ろしさに戦くが、不幸にもその現場を床右衛門に発見される。〔中卷〕彦九郎が歸國するや、お種の妹お藤は事の露見に先立つて姉を離縁せしめようと彦九郎に艶書を送るを姉に発見される。お種は嫉妬に燃えて妹を折檻するが、自分の命を助ける手段なる事を打明けられるや相擁して涙に暮れる。お種は既に懷妊四箇月である。折柄他に嫁してゐる彦九郎の妹ゆらが訪れ來り、長刀おつ取り兄に詰めより嫂の密通の次第を語り、妻敵をも得討たぬ腰拔の

妹とは添ひ難しと離別されて來たと罵る。お種は夫の前に呼び出されるや、凡てを觀念して胸に九寸五分を貫けば、彦九郎は涙を匿して止めを刺す。〔下卷〕六月七日祇園會に彦九郎・文六・お藤・ゆらの四人は、京堀川下立賣なる宮地源右衛門が家を窺ひ、裏表より跳り込み、逃げ出づる二人を橋の上に追ひつめて討ち取る。

〔解説〕娼婦型と貞婦型とを兼ねた二重人格ともいふべきお種の複雑な性格を、人形によつて表現することは困難であつたらう。その後、浄瑠璃劇にも歌舞伎劇にも上演されなかつたやうであるが、明治になつて近松研究熱が盛んになり、三十五年四月東京眞砂座で上演され、河合武雄がお種、伊井蓉峰が彦九郎を勤めた。大正三年四月大阪中座で上演された時には、お種が徳三郎、彦九郎が多見之助、源右衛門が我童といふ役割であつた。「堀川波鼓」といふ正本は本作の外題である。

〔参考〕近松の研究 坪内・編島編 〇近松傑作全集卷之四 近松水谷不倒 〇近松名作集上 近松傑作全集卷之八 近松全集第三卷 近松水谷不倒 〇近松全集第八卷 近松全集第九卷 〇續々歌舞伎年代記 〇演藝書報(八ノ五) 〔高野正正〕

堀河百首

堀河院御時百首和歌を見よ。

堀川百首題狂歌集

〔著者〕池田正式 〔刊行〕寛文十一年 〔解説〕著者は、和州郡山本多政勝の臣で、寛文頃の俳人であるが、俳諧の傍ら狂歌を好み、和歌の堀川百首を題として左の方布留田造、右の方平群實柿の變名を以て詠じた狂歌に、正式自ら判の詞を下してその勝負を定めたもので、巻頭左右の二首は(左持

立春)「かいひよくとふたつに割れて大空にいでしひよこや春の初鳥」、(右同)「齒がためのもちひかゞみにきちやう玉打そへて見るけふの初春」といふ類である。〔野崎〕

堀河夜討

幸若舞曲(三十六番の二) 〔作者〕不詳 〔成立〕室町期 〔諸本〕古本は寛永十二年板(十行本、明曆四年板(山田市良兵衛板行)、山本長兵衛開板本。新群書類從第八舞曲部所収。節附本は全曲ではないが、越前幸若家元藏のものを、日本歌謡集成卷五に載せてある。〔題材〕判官物(義経傳説)。「平家物語」(卷十二)、「源平盛衰記」(卷四十六)、「義経記」(卷四)、「諸曲」(正尊)等と同材。史實は「吾妻鏡」(卷五、文治元年十月九日・十七日、二十六日)の外、「玉葉」(卷四十三)、「百鍊抄」(第十)等に見える。土佐坊の名昌俊を正尊としてゐるのは諸曲と同じく、且つ靜の勇戦も共通してゐる。なほこの曲は、正尊の幼名を金玉丸とし、又義盛の勘氣は「義経記」の江田源三に當る。

〔梗概〕平家を滅し、關西三十三國管領の宣言を得て堀河の館にあつた義経を、頼朝は梶原景時の讒により土佐房正尊を遣して討たうとした。正尊は八十三騎を率ゐる鎌倉殿の代官の熊野詣と觸れて上洛、五條油小路に宿つた。明夜の夜討と定め、川原で下人に馬の裾を冷させてゐると、清水詣の歸途なる伊勢三郎義盛が怪んで欺き問ひ、實を義経に告げたので直に正尊を引き來らしめたが、義盛は正尊の甘言に欺かれて使命を果さぬより閉居を申渡された。重ねて遣はされた辨慶は土佐が酒宴の席に踏み込んで正尊を捕へ歸つたが、義経自らの訊問に熊野牛玉の起請文を草し誓つて還された正尊が、果然その夜堀河を襲つた。

〔批評〕平家を滅し、關西三十三國管領の宣言を得て堀河の館にあつた義経を、頼朝は梶原景時の讒により土佐房正尊を遣して討たうとした。正尊は八十三騎を率ゐる鎌倉殿の代官の熊野詣と觸れて上洛、五條油小路に宿つた。明夜の夜討と定め、川原で下人に馬の裾を冷させてゐると、清水詣の歸途なる伊勢三郎義盛が怪んで欺き問ひ、實を義経に告げたので直に正尊を引き來らしめたが、義盛は正尊の甘言に欺かれて使命を果さぬより閉居を申渡された。重ねて遣はされた辨慶は土佐が酒宴の席に踏み込んで正尊を捕へ歸つたが、義経自らの訊問に熊野牛玉の起請文を草し誓つて還された正尊が、果然その夜堀河を襲つた。

〔批評〕初めは、雅語・詩語・文語を操ること幼稚で見るべきものがなかつたが、一意精進の熱心と眞摯とによつて漸く國語が身についた時、最初の象徴的影響から脱して感覺的・ナンセンス的輕文學——アポリネール、コクトオ等の感化に轉じた。感覺聯想の遊戯を興がる漁色詩篇を多數發表してゐる。〔日夏〕

堀口大學

詩人 〔閨歴〕明治二十五年一月東京本郷に生れ、越後長岡に育ち、同地の中學を出て慶應義塾大學文學科豫科に學んだ事がある。父堀口九萬一が外交官であつた關係から、父に従つて南米に赴き、歐洲を歴訪して歸朝。前後十年海外に在つた。〔明星〕同人として與謝野寛の門に學び、歌は晶子・勇の亞流であり、詩は明星系統「スバル」(別項)末期の影響に發して次第に變化した。〔作品〕「月光とピエロ」「昨日の花」「水の面に書きて」「失はれた寶玉」「新らしき小徑」「サマン選集」「堀口大學詩集」「砂の枕」「月下の一群」「動物詩集」等。その外ポール・モラーンの「歐羅巴の戀」「夜ひらく」「夜とさす」を初め、夥しき數の譯詩文創作詩集がある。

〔批評〕初めは、雅語・詩語・文語を操ること幼稚で見るべきものがなかつたが、一意精進の熱心と眞摯とによつて漸く國語が身についた時、最初の象徴的影響から脱して感覺的・ナンセンス的輕文學——アポリネール、コクトオ等の感化に轉じた。感覺聯想の遊戯を興がる漁色詩篇を多數發表してゐる。〔日夏〕

〔梗概〕横濱村の横濱家は、今はすつかり繁盛し、當主四郎太郎は日備百姓を仕事として母と共に家名再興に努めてゐた。一夜先祖の靈が夢に現はれ、わが子孫のために埋藏して置いた財寶が庭の椿の下にあると告げる。四郎太郎は母と共にそこを掘つて見るが何も出ない。だが、その夜又亡父の靈が夢に現はれて前後と同じ事を告げる。四郎太郎は又狂氣のやうになつて掘つて見るが、何も出ないので

壕越二三治

脚本作者 〔別號〕

堀越 〔生没〕享保六年江戸に生れ、安永七年(一四三八)二月十八日、江戸にて歿す。享年五十八。〔閨歴〕初め初代澤村宗十郎の門下で澤村三三といひ、延享二年に初めて市村座へ出たが、寛延三年、壕越と改姓、早くも立作者の位置を占め、以後二十餘年執筆の脚本に名作も少くない。常磐津浄瑠璃物に當り

年十一月、江戸森田座。荒獅子男之助の暫。〇珍敷

江戸市村座。三人節成。〇東山殿。劇。明和三年十一月、江戸市村座。出雲のお國。〇曾我和曾我(同四年正月、江戸市村座。八百屋お七)〇其名月色人(同四年九月、江戸中村座。富士淺間)〇花江戸秩父順禮(寶曆十二年七月、江戸市村座。山姥。相馬良門)〇州土故郷歸(同十一年十一月、江戸市村座。鴛鴦の精)〇殘雪。曾我(同十二年正月、江戸市村座。盛綱と景博)〇葺換月。吉原。明和八年十一月、江戸森田座。荒獅子男之助の暫。〇珍敷

陸國下館町に生る。堺利彦の先夫人美知子の兄。栃木師範學校を卒へて上京、中村敬宇の同人社に入學した。明治二十三年「東京新誌」で漢文漢詩の作者として己に名があつた。當時讀賣新聞へ川上眉山の醜聞を憤つた尾崎紅葉が、花瘦の名で「榊木笠」と題し、俳文調で痛罵し、眉山は玄雪の名でこれに應酬し、巖谷連は桑弓、江見水蔭は我俗坊其笠の名で論難に参加したが、彼も一文を送つたのを契機と

〔梗概〕横濱村の横濱家は、今はすつかり繁盛し、當主四郎太郎は日備百姓を仕事として母と共に家名再興に努めてゐた。一夜先祖の靈が夢に現はれ、わが子孫のために埋藏して置いた財寶が庭の椿の下にあると告げる。四郎太郎は母と共にそこを掘つて見るが何も出ない。だが、その夜又亡父の靈が夢に現はれて前後と同じ事を告げる。四郎太郎は又狂氣のやうになつて掘つて見るが、何も出ないので

〔梗概〕横濱村の横濱家は、今はすつかり繁盛し、當主四郎太郎は日備百姓を仕事として母と共に家名再興に努めてゐた。一夜先祖の靈が夢に現はれ、わが子孫のために埋藏して置いた財寶が庭の椿の下にあると告げる。四郎太郎は母と共にそこを掘つて見るが何も出ない。だが、その夜又亡父の靈が夢に現はれて前後と同じ事を告げる。四郎太郎は又狂氣のやうになつて掘つて見るが、何も出ないので

〔梗概〕横濱村の横濱家は、今はすつかり繁盛し、當主四郎太郎は日備百姓を仕事として母と共に家名再興に努めてゐた。一夜先祖の靈が夢に現はれ、わが子孫のために埋藏して置いた財寶が庭の椿の下にあると告げる。四郎太郎は母と共にそこを掘つて見るが何も出ない。だが、その夜又亡父の靈が夢に現はれて前後と同じ事を告げる。四郎太郎は又狂氣のやうになつて掘つて見るが、何も出ないので

の絆を放れ、闖らずも源右衛門と不義の枕を交す。酔が覚めて始めて犯した罪の恐ろしさに戦くが、不幸にもその現場を床右衛門に発見される。「中巻」彦九郎が歸國するや、お種の妹お藤は事の露見に先立つて姉を離れせしめようと彦九郎に艶書を送るを姉に発見される。お種は嫉妬に燃えて妹を折檻するが、自分の命を助ける手段なる事を打明けられるや相擁して涙に暮れる。お種は既に懐妊四箇月である。折柄他に嫁してゐる彦九郎の妹ゆらが訪れ来り、長刀おつ取り兄に詰めより嫂の密通の次第を語り、妻敵をも得討たぬ腰拔の

松全集第八巻解題 藤井乙男 ○續々歌舞伎年代記 ○演藝叢報(八ノ五) 「高野正」堀河百首 堀河院御時百首和歌を見よ。堀川百首題狂歌集 三冊 [著者] 池田正式 [刊行] 寛文十一年 [解説] 著者は、和州郡山本多政勝の臣で、寛文頃の俳人であるが、俳諧の傍ら狂歌を好み、和歌の堀川百首を題として左の方布留田造、右の方平群實柿の變名を以て詠じた狂歌に、正式自ら判の詞を下してその勝負を定めたもので、巻頭左右の二首は(左持

景時の讒により土佐房正尊を遣して討たうとした。正尊は八十三騎を率ゐる鎌倉殿の代官の熊野詣と觸れて上洛、五條油小路に宿つた。明夜の夜討と定め、川原で下人に馬の裾を冷させてゐると、清水詣の歸途なる伊勢三郎義盛が怪んで欺き問ひ、實を義經に告げたので直に正尊を引き來らしめたが、義盛は正尊の甘言に欺かれて使命を果さぬより閉居を申渡された。重ねて遣はされた辨慶は土佐が酒宴の席に踏み込んで正尊を捕へ歸つたが、義經自らの訊問に熊野牛玉の起請文を草し誓つて選された正尊が、果然その夜堀河を襲つた。

面に書きて「失はれた寶玉」新らしき小徑「サマン選集」堀河大學詩集「砂の枕」月下の一群「動物詩集」等。その外ポール・モラーンの「歐羅巴の戀」夜ひらく「夜とさす」を初め、夥しき数の譯詩文創作詩集がある。【批評】初めは、雅語・詩語・文語を操ること幼稚で見るべきものがなかつたが、一意精進の熱心と眞摯とによつて漸く國語が身についた時、最初の象徴的影響から脱して感覺的・ナンセンス的輕文學——アポリネール、コクトオ等の感化に轉じた。感覺聯想の遊戯を興がる漁色詩篇を多數發表してゐる。(日夏)

壕越二三治

脚本作者【別號】榮陽【生歿】享保六年江戸に生れ、安永七年(一四三八)二月十八日、江戸にて歿す。享年五十八。【閱歴】初め初代澤村宗十郎の門下で澤村三三といひ、延享二年に初めて市村座へ出たが、寛延三年、壕越と改姓、早くも立作者の位置を占め、以後二十餘年執筆の脚本に名作も少くない。常磐津節淨瑠璃物に當り作多く、名題の割書に最も意匠を凝らし、又敷臺の道具は彼が工夫だと傳へてゐる。

江戸市村座。三人節成。○東山殿(明和三年十一月、江戸市村座。出雲のお國)○曾我我我我(同四年正月、江戸市村座。八百屋お七)○其各月色(同四年九月、江戸市村座。富士淺間)○花江戸秩父順禮(寶曆十二年七月、江戸市村座。山姥。相馬良門)○州土故郷錦(同十一年十一月、江戸市村座。鴛鴦の精)○殘雪霖霖會我(同十二年正月、江戸市村座。盛綱と景博)○葺換月吉原(明和八年十一月、江戸市村座。荒獅子男の助の誓)○珍敷江南橋(寶曆六年七月、江戸市村座。羽左衛門の殿丹前)○葺市鏡鏡祭(同九年十一月、江戸市村座。鎌足・山上源内)○梅水仙伊豆入船(同十三年十一月、江戸市村座。梶原物狂ひ)○誰袖粧會我(明和元年正月、江戸市村座。菊五郎の祐經)○初曙鷄會我(安永元年正月、江戸市村座。富士の祐經)○けいせい紅葉橋(同元年七月、江戸市村座。伊達騷動と女清玄)○伊豆磨芝居元日(同元年十一月、江戸市村座。顔見世の曾我工藤)○色許繪會我(杯鷲)(同二年正月、江戸市村座。外郎賣)○宮柱殿舞臺(同二年七月、江戸市村座。聖徳太子傳)○初雪世界(安永二年十一月、江戸市村座。女鉢の木)○着衣始初買會我(同三年正月、江戸市村座。河東節夜の編笠)○累二代月浪(同三年八月、江戸市村座。累與右衛門)○兒櫻十三鐘(同三年十一月、江戸市村座。日本お伽話)○榮會我神樂太鼓(同四年正月、江戸市村座。曾我に富士淺間)○咲此花顔聞(同五年十一月、江戸市村座。玉藻の前・祇園女御)○幼兒硯青柳會我(同六年正月、江戸市村座。見物左衛門)○本町育浮名花婿(同六年五月、江戸市村座。本町丸綱五郎)○從韓貢入船(同六年十一月、江戸市村座。不破名古屋・絶筆)

國下館町に生る。堺利彦の先夫人美知子の兄。栃木師範學校を卒へて上京、中村敬宇の同人社に入學した。明治二十三年「東京新誌」で漢文漢詩の作者として己に名があつた。當時讀賣新聞(川上眉山の醜聞を憤つた尾崎紅葉が、花瘦の名で「榊木笠」と題し、俳文調で痛罵し、眉山は玄雪の名でこれに應酬し、巖谷連は桑弓、江見水陰は我俗坊其笠の名で論難に参加したが、彼も一文を送つたのを契機とし、紅葉と接近するに至り、硯友社が盛期に向はうとする頃、彼と本郷森川町に共同生活を始め、最初の門弟となつた。同年四月、「滑稽小説二人花婿(共隆社)、次いで七月、「むら時雨」、翌年四月、「お柳(以上都の花)を發表したが、戯作者的作風を二歩も脱却出来ず、見るべき作品はなかつた。一方、彼は讀賣新聞記者として、社會記事に艶麗の筆を揮ひ、硯友社の最盛期とも稱すべき明治二十六年頃より三十二年頃まで、讀賣新聞に於ける幕僚として、文藝及び三面欄を紅葉の思ふままに主宰した功績は没することが出来ない。後三十五年、赤門派・早稲田派(各別項)等の新興勢力に押され、衰退の兆あつた硯友社の一現象とも見るべき紅葉の讀賣新聞退社のごとが實現されるに至つた際には、己に二六新報にあつて社會部を掌握してゐた彼が、内部より社長秋山定輔、主幹小野瀬不二人を説き、長田秋濤の紹介で、十月、所謂病骨を買はしめた。彼は新聞人の宿命のやうに、所詮「影の人」であつたが、當代軟派記者としての筆力は、第一人者を以て目されてゐた。(高須)

【梗概】横溝村の横溝家は、今はすつかり繁盛し、當主四郎太郎は日備百姓を仕事として母と共に家名再興に努めてゐた。一夜先祖の靈が夢に現はれ、わが子孫のために埋藏して置いた財寶が庭の椿の下にあると告げる。四郎太郎は母と共にそこを掘つて見るが何も出ない。だが、その夜又亡父の靈が夢に現はれて前夜と同じ事を告げる。四郎太郎は又狂氣のやうになつて掘つて見るが、何も出ないので發狂する。一方今は横溝家の土地・田畑を我が手に握つて繁昌してゐる柿崎家では一女お調が行儀見習に東京のお郎に行つてゐたが、年頃になつたので夫定めに歸つて來た。金持の娘で美人で伶俐だといふので縁談は澤山あるが、お調は幼馴染の四郎太郎に嫁したいと決心してゐる。これを聞いて、流石横溝一家に好意をもつてゐる父母も賛成しなかつたが、娘の堅い決心と健氣な心ばへに動かされて遂にこれを許した。お調の眞心に四郎太郎の狂氣も本復する。二人が成婚の夜大雨があり、夜明け庭を見ると、庭の椿は根元の穴が傾れて頓落してゐた。その根の間に古い木箱があつた。これこそ横溝家の先祖が子孫の急を救ふための財寶であつた。

【解説】この小説は、決して算村作中の得意のものではなく、又當時として數ふるに足る程のものでもない。この作を人がよく記憶してゐるのは「新著百種」(別項)中に伍してゐるためであらう。勸懲的態度の露骨な點、強ひて趣向を設けた點、文章の灰汁のぬけない點など、皆平生の算村ならぬことを語つてゐる。だが、これを文學史的に見、算村研究の上から見て、この作に意義の認められるのは、當時の大家たる彼が、如何に從來の作風から方向

【別號】煙亭紫山人【閱歴】慶應三年十月、常

【別號】煙亭紫山人【閱歴】慶應三年十月、常

【別號】煙亭紫山人【閱歴】慶應三年十月、常

を轉換して、新しい小説を書かうと試みたかといふことを語る最初の記念だからである。凡例の「作者曰」は自家創作の態度を語るに託して、紅葉の「色懺悔」の創作態度を冷嘲したものだが、この一篇に却つて彼本来の面目が見える。

堀の内語

堀の内語「俳語堀の内語」を見よ。堀秀成は、國語學者「別名」茂足。通稱内記。八左衛門「號」琴舎「生歿」文政二年生れ、明治二十年十二月六日歿す。享年六十九。

堀秀成は下總國古河藩の出で、江戸の大名小路、古河の藩邸で生れた。九歳の時から馬術を、十歳の時から鎗術を學んだ。天保二年(十三歳)藩侯の近習となり、同五年納戸役に進んだ。この年から山鹿流の兵法を學んだ。天保九年(二十歳)父の重遠が歿したので、その跡を繼いで先鋒の隊長になつたが、同十二年、家督を異母弟重清に譲つて致仕した。これより先、秀成は天保七年に「職原抄支流」を見て、制度の研究を志したが、同十三年國學を志して古河城を退き、爾後嘉永元年(三十歳)まで七年間諸學者に従つて研學した。就中富樫廣蔭(別項)に最も多く教を受けた。生涯をその研究と流布とに捧げた音義説は、全く廣蔭から受けたものである(因みに、秀成は廣蔭の説を自説の如く取扱つたので破門されたと云ふ)。嘉永二年、陸奥國涌谷で國語の講義をし「音義考」を著した。爾後歿年に至るまで専ら講義と著作とに従事してゐた。その講義は制度・儀式・神道に關するものもあるが、大部分は音義説である。その講義のため、大部分は北は北海道の函館、南は阿波、讃岐から備後、出雲に及んでゐる。明治三年、少博士に任ぜられ、同五年(五十四歳)正月、御

前に於て「神武紀」を進講した。同六年大教院講師長となり、同八年皇太神宮禰宜に任ぜられ、同十年學習院語學教示を兼任した。同年九月東京妻戀坂に語學所を設けて語學の教授をした。但しこれは成功しなかつたので、翌十一年(六十歳)伊勢の神宮教院の教授になつて赴任し、同十四年まで此處で教鞭を取つてゐた。同十五年から因幡・出雲・讃岐等各地で講義をしてゐたが、同二十年腸潰瘍を病んで東京で歿した。「人物」秀成は精力絶倫の人で、三十一歳以後歿するに至るまで常に各地に於て講義をなし、而も年々二三部乃至十餘部の著述をしてゐて、その著述は約百三十部に近い。なほ講義は甚だ熱心で、且つ辯舌爽快であつたので、門人も頗る多かつた。英國公使館書記官サトウ(別項)の如きも、秀成の講義を喜んだ一人である。

【著作】「音義に關するもの」音義全書二卷二册(別項)○言靈妙用論二卷(別項)○音圖略説一卷(別項)○語學總論一卷(別項)○語學打問一卷(別項)○組音法一卷(別項)○靈氣考二卷(別項)○音圖指掌一卷(別項)○音義綱領一卷(別項)○音圖餘論二卷(別項)○神代のをつゝ二卷(別項)○古言類語十卷(別項)○五名考一卷(別項)○言語變遷考一卷(明治十四年學藝志林所載)○語源考一卷(明治十六年學藝志林所載)○事物名義考一卷(同上)○言語正訛考一卷(同上)○詞の運轉一卷(同上)○いつらのこゑのうた一卷(別項)○音義問答三卷(別項)○音義大意講録一卷(別項)○語格全圖一鋪(明治十六年刊)○雜覽(一名語格全圖解)二卷(別項)○語學階梯二卷(明治十年刊)○語法本義論三卷(別項)○朝ねがみ一卷(別項)○三集類辭四卷(別項)○三集類言一卷(別項)○助辭分類二卷

○ことばのりうた一卷(別項)○日本文典辨誤一卷(別項)○初學日本文典辨誤一卷(別項)○日本辭典辨誤一卷(別項)○雅俗文法辨誤一卷(別項)○十符の菅菟文詞論・伊勢の家づとの辨・語學階梯異見發書合一册(別項)○語學階梯章一卷(別項)○詞八種補正二卷(別項)○萬葉集類語三卷(別項)○祝詞類語・記歌類語合一卷(別項)○日本小文典辨誤一卷(別項)○「語格手爾波に關するもの」古文語脈考五卷(別項)○文範一卷(別項)○文範自註一卷(別項)○竹取物語語脈考一卷(別項)○大被詞文義考一卷(別項)○出雲國造神賀詞文義考一卷(別項)○古今集序文義考一卷(別項)○法制・有職・神道・その他」古文私撰二卷(別項)○祝詞異見一卷(別項)○刑法暗記便○皇國辨弊○法律各目○醜御楯○異音圖考○訓點考○活語徵○假名比例○官職大意○朝儀儀例○軍防令圖式○職原抄開書○名目二百首○ひとひのすさび○制度圖式○有職圖式○五氣論○滯滯考○かやり草○古傳幽顯考○古道提綱○校正韻鏡○位階沿革論○聖問略疏○民憲略疏○神祇演義○神祇俗諺○兩朝着標○說教體裁論○教名考○教憲本據○三體說教○新律圖式○南山略事○政體經緯論○さゝ栗○あし分舟○大慨餘論○說教四要論○刑法圖解○古律影蹟○政教圖說○法律要目○民事摘要○教語○神理律大意○加微之名義○古史要節解。

【業績】秀成の國語學は飽くまでも音義説に立脚してゐた。彼は言ふ、今日行はれてゐる國語の研究に二種類ある。第一は、外國の文法に摸して品詞の分類を先にするもので、「語學新書(別項)以來近時の洋學と國學を兼ねてゐる人々の研究がこれである。第二は、詞の玉緒(詞八種)各別項の流を汲む和歌者流の

研究であるが、一體國語は五十の聲音から成つてゐる。而してその聲音は、それ／＼象義を具へてゐる。即ち國語の本質を知るには、第一に五十音の音義を明かにしなければならぬ。現今行はれてゐる二種の研究法は、國語研究の根本を忘れたものである(本書語學旨義)と。併し今日から見れば秀成の研究は、音義説としては最も進んだものであるが、而もその説は常識を基とした牽強附會が多く、部分的には用ひるべき説もあるが、全體としては到底用ひ難いものである。音義説は秀成を最後として、この學風は殆どその跡を絶つてゐる。

翻案小説

【解説】原作があるものを私意を加へて作り換へるので、主として外國作品の移植の際に言はれる。つまり翻譯と云ふほど忠實でなく、中には全く自作を装つて公けにされる場合も甚だ多い。古くは「竹取物語(別項)」も印度神話の翻案であると云はれ、下つては曲亭馬琴の「八犬傳(別項)」が「水滸傳」の翻案なることは汎く人の知る所である。翻案にもその様式が數種類ある。外國種子を用ひながら殆ど全く奪胎の痕跡を留めざるものがある。岡本綺堂の「半七捕物帳」の中にさうした諸作が見える。これ等は翻案とは言ひ難、寧ろ創作に近い。海外名作中の一部のみを自作の一部に適用移植したものがあつた。坪内逍遙の「桐一葉(別項)」中の流石狂亂の場と「ハムレット」のオフィリア狂亂の場の如きがそれである。殆ど全部原作の筋を忠實に追つた翻案もある。前田暁山の「復讐」が大デユマの「モンテ・クリスト伯」に於けるが

如きである。なほ黒石漢香の諸作の如きは、譯と號してはあつたけれど、人物・固有名詞が大部分日本名に變つてゐて、筋も壓縮せられてゐるから翻案に近い。シラノ・ド・ベルジュラックに對する額田六福の「白野辨十郎」の如きは、初めから翻案と斷つてゐる上に、それを日本化するに於て適宜の取捨按配を施してゐる。翻案の典型的なものとしてよからう。

物を作り付けたり、或は種々の假装をして見せたものである。應永二十八年七月十五日には、操人形で「金を打舞」があつた。これ等の單純な念佛踊に伴ふ餘興的な風流が、盆踊を發達せしめる有力なる原因となつた。今日の郷土舞踊の盆踊にも、その風流の名残を止めたいものがある。山鉾の存在や、假裝の踊子にその痕跡を示してゐる。また盆狂言と云つて種々の演劇をやるのも、室町時代からの習慣

とは別種のものとして解釋する説がある。伊勢節が傳播した時に、神靈を或る村から隣村へ送り付ける時にこの踊を伴つてゐたから、次第に流傳したものといふ。併し神送りは原始的には、崇神をその土地から追ひ出す意味を有してゐるから、伊勢大神宮を邪神に取扱ふのはいかゞかと思ふ。古く、盆踊にはかけ踊と云ふ語があつて、或る土地の人が他村に盆踊をしかけてゆくことを云ふ。このかけ踊が、

音頭があつて音頭と踊子と掛け合ひで歌ふもの、音頭が歌を歌ひ、踊子は舞子だけを歌ふものなどがあり、口説歌には必ず音頭があるが、又音頭のないものもあり、中踊が歌つて別に舞子方をつくものなど、種々の様式がある。その形式には、圓形の輪舞と行列行進の踊との二種に分れ、圓舞式のものには、輪の中央に更に小さい踊の輪、或は數人を圍むものがあつて、この中央にある踊を中踊と云ひ、外

就中富樫廣隆(別項)に最も多く教を受けた。生涯をその研究と流布とに捧げた音義説は、全く廣隆から受けたものである(因みに、秀成は廣隆の説を自説の如く取扱つたので破門されたと云ふ)。嘉永二年、陸奥國涌谷で國語の講義をし「音義考」を著した。爾後歿年に至るまで専ら講義と著作とに従事してゐた。その講義は制度・儀式・神道に關するものもあるが、大部分は音義説である。その講義のため赴いた地は、北は北海道の函館、南は阿波、讃岐から備後・出雲に及んでゐる。明治三年、少博士に任ぜられ、同五年(五十四歳)正月、御

卷(寫)〇神代のをつゝ二卷(寫)〇古言類語十卷(寫)〇難語本義考三卷(寫)〇類語索引四卷(寫)〇五名考一卷(寫)〇言語變遷考一卷(明治十四年學藝志林所載)〇語源考一卷(明治十六年學藝志林所載)〇事物名義考一卷(同上)〇言語正訛考一卷(同上)〇詞の運轉一卷(寫)〇いつらのこゑのうた一卷(寫)〇音義問答三卷(寫)〇音義大意講録一卷(寫)〇語格全圖一鋪(明治十六年刊)〇難語(一名語格全圖解)二卷(別項)〇語學階梯二卷(明治十年刊)〇語法本義論三卷(寫)〇朝ねがみ一卷(寫)〇三集類辭四卷(寫)〇三集類言一卷(寫)〇助辭分類二卷

教名考〇教憲本據〇三體說教〇新律圖式〇南山路事〇政體經緯論〇さゝ栗〇あし分舟〇大慨餘論〇說教四要論〇刑法圖解〇古律影蹟〇政教圖說〇法律要目〇民事摘要〇教語〇神理律大意〇加微之名義〇古史要節解。【業績】秀成の國語學は飽くまでも音義説に立脚してゐた。彼は言ふ、今日行はれてゐる國語の研究に二種類ある。第一は、外國の文法に摸して品詞の分類を先にするもので、「語學新書(別項)以來近時の洋學と國學を兼ねてゐる人々の研究がこれである。第二は、詞の玉緒(詞八箇(各別項)の流を汲む和歌者流の

「水滸傳」の翻案なることは況く人の知る所である。翻案にもその様式が數種類ある。外國種子を用ひながら殆ど全く奪胎の痕跡を留めざるものがある。岡本綺堂の「半七捕物帳」の中にさうした諸作が見える。これ等は翻案とは言ひ難く、寧ろ創作に近い。海外名作中の一部のみを自作の一部に適用移植したものがあつた。坪内逍遙の「桐一葉(別項)中の淫狂狂亂の場と「ハムレット」のオフィリア狂亂の場との如きがそれである。殆ど全部原作の筋を忠實に追つた翻案もある。前田暁山の「復讐」が大デユマの「モンテ・クリスト伯」に於けるが

如きである。なほ黒石漢香の諸作の如きは、譯と號してはあつたけれど、人物・固有名詞が大部分日本名に變つてゐて、筋も壓縮せられてゐるから翻案に近い。シラノ・ド・ベルジュラックに對する額田六福の「白野辨十郎」の如きは、初めから翻案と斷つてある上に、それを日本化するに於て適宜の取捨按配を施してゐる。翻案の典型的なものと云つてよからう。外國にも日本の原作を翻案したものが多少あつたが、シーボルトが大阪で見た「鏡山」を佛の文豪ドオデに話して出來た「盲帝の曲」こそは、最も特筆に値するものであらう。【木村】

物を作り付けたり、或は種々の假装をして見せたものである。應永二十八年七月十五日には、操人形で「金を打舞」があつた。これ等の單純な念佛踊に伴ふ餘興的な風流が、盆踊を發達せしめる有力なる原因となつた。今日の郷土舞踊の盆踊にも、その風流の名残を止めたいものがある。山鉾の存在や、假裝の踊子にその痕跡を示してゐる。また盆狂言と云つて種々の演劇をやるのも、室町時代からの習慣を止めたものである。尤もこれ等の風流は、孟蘭盆ばかりでなく、正月の松離子、春秋二季の彼岸にも行はれたのであるが、盆踊の時が最も盛んで、遂に盆踊として爾來長くこれを繼承することになつた。この踊のために、踊堂が建てられたこと、今日の盆踊の踊櫓、或は踊屋臺に類似してゐる。狂言小歌に「踊堂が見たくば北嵯峨へおぢやれの、北嵯峨の踊は、つゞら帽子をしゃんと着て、踊る振が面白い」とあるのもこれである。以上の如き念佛踊とは別に、神事歌舞の系統を引くものがある。伊勢踊は、その代表的なもので、文明十一年七月十五日に、左京亮信光の安祥城攻めで、伊勢踊の踊子の中に紛れて城内に入つたと云ふから(三河記、古くより盆踊として行はれたのである。江戸時代でも、半太夫節の「京わらんべ」に「盆の踊は伊勢踊」と歌はれたやうに、廣く長く行はれ、盆踊以外にも種々の場合に用ひられた。元來、伊勢國に發し、伊勢大神宮のお蔭參りの如き狂信的流行に伴うて各地に傳播した。これを又お伊勢様踊などと稱し、就中、慶長十九年の秋冬の交に行はれたものは有名である。かくて現今も各地の盆踊に、伊勢踊が擴布してゐる。この神事歌舞の盆踊は神送りの一形式で、佛教

とは別種のものとして解釋する説がある。伊勢踊が傳播した時に、神靈を或る村から隣村へと送り付ける時にこの踊を伴うてゐたから、次第に流傳したものとも云ふ。併し神送りは原始的には、崇神をその土地から追ひ出す意味を有してゐるから、伊勢大神宮を邪神に取扱ふのはいかゞかと思ふ。古く、盆踊にはかけ踊と云ふ語があつて、或る土地の人が他村に盆踊をしかけてゆくことを云ふ。このかけ踊が、即ち神送りの状態を示すものであると云ふ。併し、かけ踊は、ただ踊を諸所方々に懸け持ちで踊り歩く意であり、「淺井三代記」に「敵味方の若者共、懸踊をかけ合ひける」とあるのは、歌を相手に言ひ掛け、かけ合ひに歌ふことで、この問答的に歌ふ形式は上代歌謡には、普通のことであつたから、問答歌舞の意とも解釋せられる。故に神送りと盆踊とが直接關係があるとは云はれないが、かやうな神事歌舞の系統を引くものもあり、念佛踊と兩者の系統が混じて今日の盆踊を作り上げたのである。この外に、七月七日の七夕踊の類、豊年踊・雨乞踊の類、獅子舞・大黒舞等、種々様々の歌舞が混じてゐる。

音頭があつて音頭と踊子と掛け合ひて歌ふもの、音頭が歌を歌ひ、踊子は舞子だけを歌ふものなどがあり、口説歌には必ず音頭があるが、又音頭のないものもあり、中踊が歌つて別に舞子方をつくものなど、種々の様式がある。その形式には、圓形の輪舞と行列行進の踊との二種に分れ、圓舞式のものには、輪の中央に更に小さい踊の輪、或は數人を圍むものがあつて、この中央にある踊を中踊と云ひ、外側にあるものを外踊と云ひ、全體を總稱して大踊とか物踊とか云ふ。行進式のものには、相當秩序だつたものと、ただ群集して無秩序に踊り廻るものがある。この式には音頭がない。圓舞式の踊は、魂祭の本來の意義を有するもので、神社・佛閣の廣場に於て、死者の靈魂を慰めるために踊られる。踊の輪の中央に、踊櫓が設けられるものもあり、又は中踊や音頭及び舞子方を圍んで踊るものもある。行進式のものには、伊勢踊の如く、神事歌舞の流を引くもので、懸踊の如きは、多く必然的にこの式の踊であつたらう。小町踊も懸踊の一種で行進式である。今日ではこの兩者共に存するものあり、圓舞によつて懸舞が濟んでから行進に移り、靈を送り届ける意味のものもあるが(信州下伊那郡且開村新野、多く行進式の踊は亡んで、圓舞式の踊が大多數である。行進式の盆踊では、阿波徳島の氣狂踊と云はれるものが名高い。この外に、種々の飾り物・持物があり、假裝狂言演劇の類をやつて見せるものがあり、古昔の風流はこの類で、踊堂が建てられたのも、そのためかも知れぬ。併しこれ等は、見物に見せるのが目的で、かねて慰靈の意味もあるが、衆庶共に踊り楽しむと云ふ盆踊の本來の目的には叶はない。なほ圓

盆踊は孟蘭盆會に踊られるものであるから、佛教の歌舞に起原がある。故に空也念佛などに、その起原を求めようとする説もある。少くとも、中世の念佛踊が近世の盆踊の有力な先祖であることは否定出來ない。念佛拍物と云ふのがこれだ。「看聞御記」の應永二十三年七月十五日の條に、「夜石井船津念佛拍物密に令見物」と見え、同二十六年七月十四日・十五日の條は特に詳しく、石井念佛拍物には、「田向青侍芝山臥ノ負ヲ作」夜山村念佛拍物有風流。畠山六郎ユイノ濱合戦人磯ノ膝ヲ作、又石井風流、爲明ガ鬼ヲ仕風情云々、事々比興之風流也。密々見物之。舟津風流勸進僧之鉢作之」と云ふ有様であつた。これ等の風流(別項)は、すべて念佛踊(別項)の餘興に山鉾の飾り

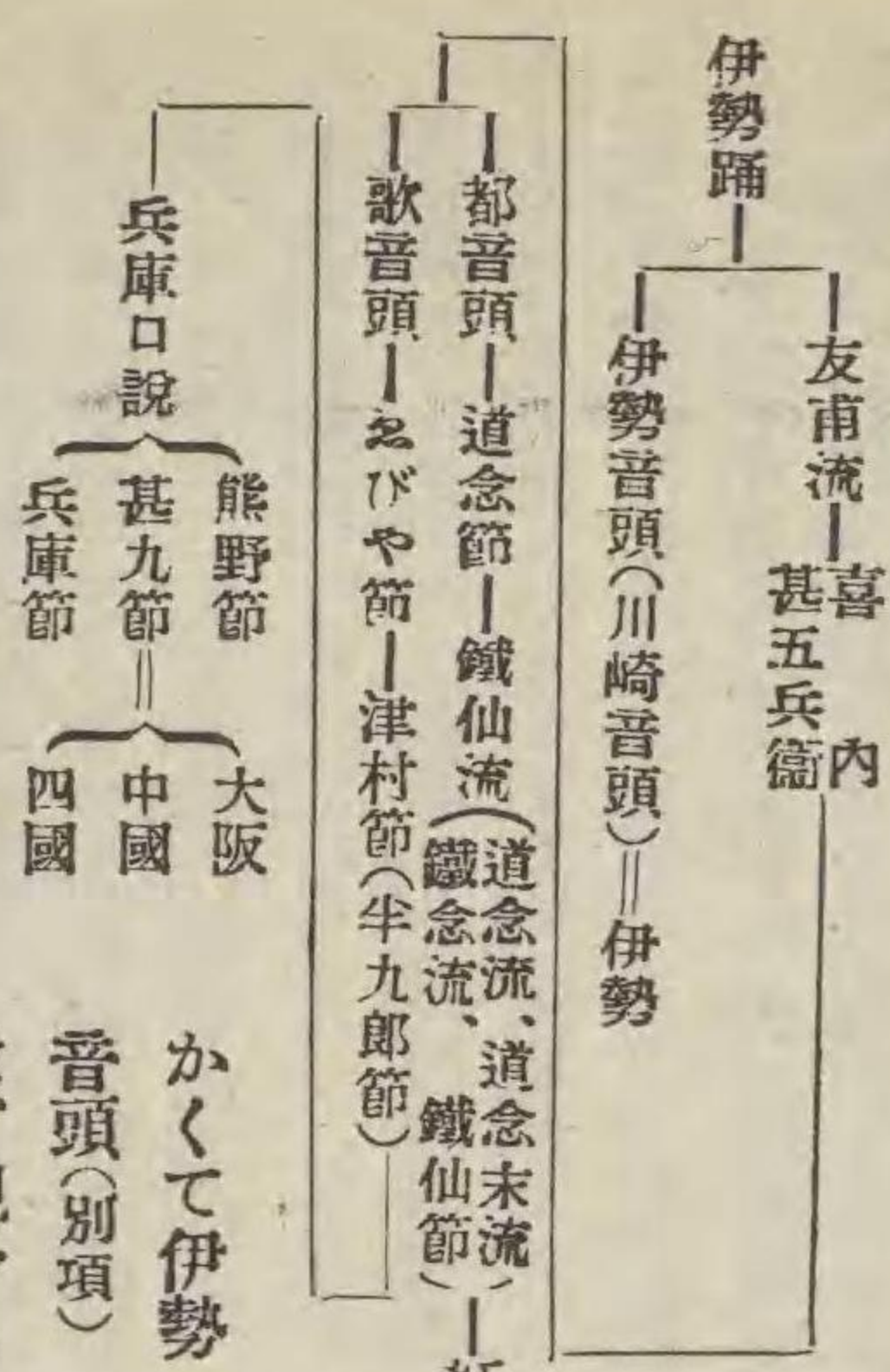
物を作り付けたり、或は種々の假装をして見せたものである。應永二十八年七月十五日には、操人形で「金を打舞」があつた。これ等の單純な念佛踊に伴ふ餘興的な風流が、盆踊を發達せしめる有力なる原因となつた。今日の郷土舞踊の盆踊にも、その風流の名残を止めたいものがある。山鉾の存在や、假裝の踊子にその痕跡を示してゐる。また盆狂言と云つて種々の演劇をやるのも、室町時代からの習慣を止めたものである。尤もこれ等の風流は、孟蘭盆ばかりでなく、正月の松離子、春秋二季の彼岸にも行はれたのであるが、盆踊の時が最も盛んで、遂に盆踊として爾來長くこれを繼承することになつた。この踊のために、踊堂が建てられたこと、今日の盆踊の踊櫓、或は踊屋臺に類似してゐる。狂言小歌に「踊堂が見たくば北嵯峨へおぢやれの、北嵯峨の踊は、つゞら帽子をしゃんと着て、踊る振が面白い」とあるのもこれである。以上の如き念佛踊とは別に、神事歌舞の系統を引くものがある。伊勢踊は、その代表的なもので、文明十一年七月十五日に、左京亮信光の安祥城攻めで、伊勢踊の踊子の中に紛れて城内に入つたと云ふから(三河記、古くより盆踊として行はれたのである。江戸時代でも、半太夫節の「京わらんべ」に「盆の踊は伊勢踊」と歌はれたやうに、廣く長く行はれ、盆踊以外にも種々の場合に用ひられた。元來、伊勢國に發し、伊勢大神宮のお蔭參りの如き狂信的流行に伴うて各地に傳播した。これを又お伊勢様踊などと稱し、就中、慶長十九年の秋冬の交に行はれたものは有名である。かくて現今も各地の盆踊に、伊勢踊が擴布してゐる。この神事歌舞の盆踊は神送りの一形式で、佛教

とは別種のものとして解釋する説がある。伊勢踊が傳播した時に、神靈を或る村から隣村へと送り付ける時にこの踊を伴うてゐたから、次第に流傳したものとも云ふ。併し神送りは原始的には、崇神をその土地から追ひ出す意味を有してゐるから、伊勢大神宮を邪神に取扱ふのはいかゞかと思ふ。古く、盆踊にはかけ踊と云ふ語があつて、或る土地の人が他村に盆踊をしかけてゆくことを云ふ。このかけ踊が、即ち神送りの状態を示すものであると云ふ。併し、かけ踊は、ただ踊を諸所方々に懸け持ちで踊り歩く意であり、「淺井三代記」に「敵味方の若者共、懸踊をかけ合ひける」とあるのは、歌を相手に言ひ掛け、かけ合ひに歌ふことで、この問答的に歌ふ形式は上代歌謡には、普通のことであつたから、問答歌舞の意とも解釋せられる。故に神送りと盆踊とが直接關係があるとは云はれないが、かやうな神事歌舞の系統を引くものもあり、念佛踊と兩者の系統が混じて今日の盆踊を作り上げたのである。この外に、七月七日の七夕踊の類、豊年踊・雨乞踊の類、獅子舞・大黒舞等、種々様々の歌舞が混じてゐる。

音頭があつて音頭と踊子と掛け合ひて歌ふもの、音頭が歌を歌ひ、踊子は舞子だけを歌ふものなどがあり、口説歌には必ず音頭があるが、又音頭のないものもあり、中踊が歌つて別に舞子方をつくものなど、種々の様式がある。その形式には、圓形の輪舞と行列行進の踊との二種に分れ、圓舞式のものには、輪の中央に更に小さい踊の輪、或は數人を圍むものがあつて、この中央にある踊を中踊と云ひ、外側にあるものを外踊と云ひ、全體を總稱して大踊とか物踊とか云ふ。行進式のものには、相當秩序だつたものと、ただ群集して無秩序に踊り廻るものがある。この式には音頭がない。圓舞式の踊は、魂祭の本來の意義を有するもので、神社・佛閣の廣場に於て、死者の靈魂を慰めるために踊られる。踊の輪の中央に、踊櫓が設けられるものもあり、又は中踊や音頭及び舞子方を圍んで踊るものもある。行進式のものには、伊勢踊の如く、神事歌舞の流を引くもので、懸踊の如きは、多く必然的にこの式の踊であつたらう。小町踊も懸踊の一種で行進式である。今日ではこの兩者共に存するものあり、圓舞によつて懸舞が濟んでから行進に移り、靈を送り届ける意味のものもあるが(信州下伊那郡且開村新野、多く行進式の踊は亡んで、圓舞式の踊が大多數である。行進式の盆踊では、阿波徳島の氣狂踊と云はれるものが名高い。この外に、種々の飾り物・持物があり、假裝狂言演劇の類をやつて見せるものがあり、古昔の風流はこの類で、踊堂が建てられたのも、そのためかも知れぬ。併しこれ等は、見物に見せるのが目的で、かねて慰靈の意味もあるが、衆庶共に踊り楽しむと云ふ盆踊の本來の目的には叶はない。なほ圓

舞式の種類に方舞式とも云ふべき四角形のものもあり、人に見物させる盆踊の中には、舞臺又は廣場で、群衆の大踊、又は惣踊を演じて見せるものもあり、豊後の團七踊の如く、中踊が團七、宮城野、信夫に扮装して踊るものもあり、その形式は種々である。

【歌謡】これに二大別があり、一は短小の小歌形式のものであつて、一は長篇の叙事歌となつてゐるものである。後者は踊音頭とか踊口説とか云はれ、前者はその土地の民謡を歌ふものである。佐渡や越後のおけき節、三階節、信州の木曾節・伊那節、加賀の山中節、越中の小原節などは、何れも盆踊歌であり、世に流傳して流行唱化した。飛騨高山の吉左右踊(別項)の如きは、その最も古いもので、木曾踊も幕初から存する。京阪に於ける踊音頭は、大體次の如く變遷してゐる。



伊勢その他に残存するが、起原は盆踊であつても、今日では盆踊歌としては使用せられない。京都松が崎の題目踊や、修學院の大目踊には、右の鐵仙節や紅葉節が行はれ、鐵仙は道念の流を汲む鐵仙梅九曜の如き人物が歌つたのであるが、これを鐵扇に附會して、鐵扇節は剛なる曲、紅葉節は柔なる曲として兩者入り交りに行はれる。甚九節や兵庫節に至つ

竹本座。【諸本】八行五十八丁本。名者全集傳。瑠璃名作集上所載。【題材】曾我物の傍系で、曾我兄弟の敵討と平家の侍伊賀平内左衛門の遺兒豊姫の父の敵討とを編ひ交ぜたもの。【梗概】【初段】(箱根権現)別當の法談があるから一山の大家は何れも列座聽聞する。早くから預けられてゐる宮王丸は、故郷から便がないのを淋しがつてゐると、鬼王が訪れて兄祐成の廓通ひを傳へ、二人は共に懺悔する。さ

ては今日も中國地方到る處に普通歌はれてゐる盆踊歌である。この種の踊音頭では、河内音頭・江州音頭・相川音頭、或は上州音頭の八木節、津輕地方のじよんがら節等、名高いものが多い。江州音頭や八木節は、祭文の影響を受けてゐる。さうして祭文と踊口説の關係は、甚だ密接なものである。同じ音頭と云ふ名稱であつても、福知山音頭や秋田音頭の如きは、長篇の口説歌でなく、小歌形式のものである。又盆踊歌には、子供の爲めのものがあり、京都や江戸にもあつた小町踊の如きは、その名高きものである。一に七夕踊と云ひ、七夕の晩の遊びが盆踊となつたもので、座敷踊にも用ひられた。大阪の「おんこく」、名古屋の「盆ならさん」なども、この類のものとして名高い。次に歌詞のない囃子のみのものもある。京洛で行はれた雀踊・花園踊・灯籠踊(花笠踊)等は、この類のもの、又念佛踊や地藏踊、題目踊等には、歌詞と云ふ程のものもなく、ただ念佛や題目を稱へるだけの、極めて

簡單な詞を持つものもある。長篇の踊歌には、個々の曲に名稱があり、大分縣西國東郡草草村の盆踊歌に、レソ(伊勢屋口説)、ヤンソレサ(吉田屋口説)、六調子(政五郎口説)などと云ふが如くである。又小歌形式のものでも、組歌の形式になつてゐて、その各々の組に、何々踊などと云ふ名稱を附したものがあつた。この類は多く、その曲名を異にするに従つて、曲節や舞踊の振を異にする。併し中には、常に同じ節、同じ踊振であるものもある。

【歌集】「日本歌謡集」所収の「聖靈踊歌」は、山城國相樂郡上狛村及び同郡鹿角山の盆踊歌で、二十七番を書き留めた。

名乗る。さて時致は非力を欺いて酒匂川に、二所權現を念じつつ一七日の荒行をする。と不思議や川波逆立つて大石が押寄せて来る。時致は流るゝ石を取つて岩に打附ければ、有難くも石火の間に不動の尊像が拜まれた。時に祐成の家來が勤行の川上を渡らうとするので、時致は金剛力を出して人馬諸共水に投げ込み、残つた裸馬に乗つて曾我の里へと歸つて行く。【三段】(祐成館)略。(大磯廓)祐成

上狛踊一いりは、二極樂踊、三名所踊、四殿御踊、五羅漢踊、六日高踊、七下草踊、八七夕踊、九帷子踊、十信濃踊。

鹿角山踊一道理、二雨乞踊、三清水踊、四大忍踊、五中忍踊、六小忍踊、七土佐の踊、八寶踊、九越前踊、十吉野踊、十一御舟踊、十二薩摩踊、十三若衆踊、十四御寺踊、十五唐船踊、十六鶴つかひ踊、十七はんや御寺踊。

同書所収の古寫本「踊唱歌」も、京都地方の盆踊歌を集めたものと思はれ、

現を念じてゐると、朝比奈の大力にも動かぬかつた大石を不思議にも祐成は易々と取退けて無事の對面を喜ぶ。虎が我が良人ならでは動くなと念じてゐた靈験の故であつた。(鎌倉城外)三浦の與一が登城する所を、朝比奈の内通に依つて少將・團三郎は、待ち受けて敵討の名乗を擧げる。與一が大勢の家來に下知すると、城内から朝比奈の母巴が出て、家來共を追ひ退け尋常の勝負をさせる。かくて兩

司馬江漢の「西遊旅讀」には、伊勢目永村の盆踊ツツク踊や、四日市盆踊の繪圖や歌詞を掲げ、安政年間には出羽國庄内鶴岡町の盆踊歌を集めて、「庄内御町々盆踊文句」と云ふ一枚刷數種を刊行してゐる。伊勢音頭も、もと盆踊歌として行はれたもので、後に座敷踊ともなり、「二見眞砂」の外、「相合傘」「相合傘二の替」「逢夜鶏」「濱萩譜」「扇子香」「調子鏡」「月明鳥」「待暮月」(以上伊勢山田河崎南町木村藤兵衛板本)、「竹調」「古市町杉村屋長兵衛板本」等の名で逐次新音頭を刊行した。盆踊の歌詞としては、

盆々々も今日明日はかり、あまつては嫁のしをれ草(淋敷座之感)。小町踊にもあり)の如きが古くより名高い。歌集ではないが、盆踊の踊り方を圖解した書に、「繪本おどりづくし」(都浪關助作、竹馬春朝齋書、安永四年刊)がある。小町踊、忍踊、さし踊、雀踊、彦惣踊、弓引踊、汐波踊、妹春踊、浪花の梅踊、雁金踊、風俗(道中にも云ふ)、黒羽等を圖示した(稀書複製會複製刊行)。

【参考】古事類苑○近世文藝叢書伴隨○俚語集文部省編○俚語集拾遺 高野・大竹兩氏共編○了阿遺書村田了阿○民族藝術(ノ七八)續諸國盆踊號○上方(第二十號)上方盆踊號○郷土風景(二七七)八盆踊號○山の民謡海の民謡松川二郎○郷土舞踊と民謡その他諸國の民謡集や民族學、郷土研究の雜誌、新聞のラヂオ版等。

【参考】近世邦樂年表(義太夫節之部)○名者全集(淨瑠璃)○浄瑠璃時代表(藤田)物五段【作者】一聲曲類纂の說に錦文流とある。【名稱】五段目に、荒熊に追はれた大磯の虎が、逃げ場に窮して大石の下に隠れた條による。【初演】元禄十二年五月六日初日。

兵庫口説 能野節 大阪 かくて伊勢
甚九節 中國 音頭(別項)
兵庫節 四國 は、現今も

伊勢その他に残存するが、起原は盆踊であつても、今日では盆踊歌としては使用せられない。京都松崎の題目踊や、修學院の大目踊には、右の鐵仙節や紅葉節が行はれ、鐵仙は道念の流を流し鐵仙梅九曜の如き人物が歌つたのであるが、これを鐵扇に附會して、鐵扇節は剛なる曲、紅葉節は柔なる曲として兩者入り交りに行はれる。甚九節や兵庫節に至つ

あり、大分縣西國東郡草束村の盆踊歌に、レソ(伊勢屋口説)、ヤンソレサ(吉田屋口説)、六調子(政五郎口説)などと云ふが如くである。又小歌形式のものでも、組歌の形式になつてゐて、その各々の組に、何々踊などと云ふ名稱を附したものがあつた。この類は多く、その曲名を異にするに従つて、曲節や舞踊の振を異にする。併し中には、常に同じ節、同じ踊振であるものもある。

【歌集】「日本歌謡集」所収の「聖靈踊歌」は、山城國相樂郡上狛村及び同郡鹿角山の盆踊歌で、二十七番を書き留めた。

【参考】「古事類聚」(近世文藝叢書) (但説集) 文部省編「俚語集拾遺」高野・大竹兩氏共編「了阿遺書」村田了阿「民族藝術」(ノ七八) 續諸國盆踊歌(上方) (第二十號) 上方盆踊歌(郷土風景) (ノ七八) 八盆踊歌(山)の民謡海の民謡(松川) 郷土舞踊と民謡その他諸國の民謡集や民族學、郷土研究の雜誌、新聞のラヂオ版等。

【参考】「近世邦樂年表」(義太夫節之部) ○名著全集「淨瑠璃名作集」上解説 黒木勲藏 (簡見)

竹本座。【諸本】八行五十八丁本。名著全集解説「淨瑠璃名作集」上解説。【題材】曾我物の傍系で、曾我兄弟の敵討と平家の侍伊賀平内左衛門の遺兒豊姫の父の敵討とを編み交せたもの。

【梗概】「初段」(箱根権現) 別當の法談があるので一山の大衆は何れも列座聽聞する。早くから預けられてゐる宮王丸は、故郷から便がないのを淋しがつてゐると、鬼王が訪れて兄祐成の廓通ひを傳へ、二人は共に懺悔する。さて將軍の件をして祐成が參詣、二人は物蔭に忍んで覗ふ。祐成は目早く宮王を見附け、自分の權勢を鼻に掛けて宮王に追従を強ひる。宮王は堪り兼ねて刀を抜いたが鬼王に留められた。(還御の舟) 美しく飾り立てた將軍の船が歸途に着くと、船頭の藤平は橋に登つて節面白く船歌を謡ふ。時に小舟に乗つて狙ひ寄つた祐成は、祐經に見咎められる。仁侠の朝比奈は祐經を押へると共に、祐成をさんく打擲してその場を逃れさす。折柄海上俄に嵐となり、西國に亡びた平家の人々の姿が現はれる。朝比奈が強弓を射ると悪靈も恐れ消え失せた。【二段】(川岸) 平家の侍伊賀の平内左衛門の娘豊姫は父の敵三浦の與一を討つたものと、相傳の若侍栗矢の三太を連れて鎌倉へ入り込む。併し二人は路銀に窮し、三太は團三郎と名を變へて祐成の許に奉公し、豊姫も亦傾城に身を賣らうとする。時に祐成は父の法養に來て橋の上で二人に行逢ふ。豊姫が橋から落ちようとしたのを祐成が抱き留めたのが縁の端で、二人は互に戀心を起す。祐成が豊姫を伴れて歸らうとすると、其處に祐經が酒盛をして呼び留める。それは祐成の女狂ひを諷めようとする朝比奈の狂言であつた。(酒匂川) 宮王は元服して五郎時致と

名乗る。さて時致は非力を欺いて酒匂川に、二所權現を念じつつ一七日の荒行をする。と不思議な川波逆立つて大石が押寄せて來る。時致は流るゝ石を取つて岩に打附ければ、有難くも石火の間に不動の尊像が拜まれた。時に祐經の家來が勤行の川上を渡らうとするので、時致は金剛力を出して人馬諸共水に投げ込み、残つた裸馬に乗つて曾我の里へと歸つて行く。【三段】(祐經館) 略。(大磯廓) 祐成は虎の心を試むべく案山子の小袖を着て様子を覗つてゐると、虎は毎日三浦の與一の席に出で、身請けされると云ふので大に怒る。さて豊姫は傾城となつて少將と呼ばれ、時致と深い仲となつてゐる。少將は祐成に、與一は親の敵であることを話し、互に身の上を同情し合つてゐる。折柄來掛つた虎は祐成の悪性と思ひ違へて口説になる。やがて時致も團三郎も來て、一同與一を歸途に待伏せる事となる。(大磯の虎道行) 装ひも美しく虎は三浦の與一に請け出されて行く。【四段】(植生の渡) 與一の一行が夜道を渡して掛つた時、待ち構へた團三郎と少將は本名を名乗つて親の敵と斬り附ける。夜の事であるので斬り合ひの中に敵も味方も散りつゝになつてしまふ。(禪師坊庵室) 越後にゐた曾我兄弟の弟禪師坊は、父の十三回忌を心掛けて植生の里に庵を結んでゐる。その夜騒動を逃れて虎のお附の小衣、きぬたの二女性は、圖らずもこの庵へ辿り着く。廓女の小衣は若僧の禪師に戯れかかるが、禪師は道心堅く却つて小衣に説法する。所へ與一の郎等共が女を奪ひに押寄せて來る。禪師は強力を示して難なく追拂ひ、女性を伴つて立ち退く。【五段】(海道) 虎は荒熊に追はれ、路傍の大石の下に隠れて二所權

現を念じてゐると、朝比奈の大力にも動かぬ大石を不思議にも祐成は易々と取退けて無事の對面を喜ぶ。虎が我が良人ならでは動くなと念じてゐた靈験の故であつた。(鎌倉城外) 三浦の與一が登城する所を、朝比奈の内通に依つて少將・團三郎は、待ち受けて敵討の名乗を擧げる。與一が大勢の家來に下知すると、城内から朝比奈の母巴が出て、家來共を追ひ退け尋常の勝負をさせる。かくて兩人は傷つきながらも目出度く敵を討つ。

【構想】極めて多様な趣向を盛る。先づ初段の口明に古淨瑠璃に流行した法談があり、次に對面の原型がある。切には船歌の節事があり、辨慶を朝比奈、義經を祐成にした「勸進帳」(別項) もどきがあり、段切は諸曲「船辨慶」の雛案である。二段目には先づ豊姫と三太の悲劇があり、一轉して祐成と豊姫の色模様となる。切の時致の荒事は「兵根元曾我」(別項) の二番目から來てゐる。三段目に廓情趣、四段目に切に説法から荒事に及ぶ。五段目には虎が石の珍趣向を凝し、最後に大女巴の活躍を加へて、血生臭い敵討に終る。【價值】驚くべき多様な技巧を盛つてゐるが、餘りに變化を事とした雑然たる脚色は、情趣を害ひ分裂を來してしまつた。思ふに浮世草子作者たるべき文流が劇的詩美を破るの結果を生んだのであらう。【影響】曾我物の傍系として各種の曾我物に原據を與へると共に、三段目祐成が案山子に化ける趣向などは、「曾我五人兄弟」(元祿十四年十一月竹本座近松作) の四段目に取入れられ、又「大磯の虎道行」の一文は「昔米萬石通」(享保十年一月豊竹座、一風千柳作) の「居ながら道行」の詞章となつてゐる。それから、初段の切に歌はれた船歌は、一中節に取入れられ

て今に生命を保つ。なほ文流は出羽若菜の作者をも兼ねて、舞臺道具に精通してゐたらしく、この興行に新工夫を仕出したと傳へられてゐる。【浄瑠璃】(別項) に「虎が石の淨瑠璃に振り手摺といふ事を仕出し、人形のつかひやうを見せ、素語といふ事ははじめたり。あやつり芝居に舞臺を附くる事此時をはじめとす」とある。

【参考】「近世邦樂年表」(義太夫節之部) ○名著全集「淨瑠璃名作集」上解説 黒木勲藏 (簡見)

【参考】「近世邦樂年表」(義太夫節之部) ○名著全集「淨瑠璃名作集」上解説 黒木勲藏 (簡見)

【参考】「近世邦樂年表」(義太夫節之部) ○名著全集「淨瑠璃名作集」上解説 黒木勲藏 (簡見)

【参考】「近世邦樂年表」(義太夫節之部) ○名著全集「淨瑠璃名作集」上解説 黒木勲藏 (簡見)

へた小説となすべきである。こゝから本格小説なる語が用ひられ出したのである。「宮島」
本歌取 ほんかとり 和歌【意義】和歌に於て、それ以前によまれた歌を素材にとり入れて新しく作歌することをいふ。題材をとり入れる程度はそれより異なるが、一語もしくは一句といふよりは歌の素材を大部分とり入れるをいふ。併し「萬葉集」に屢々見える歌の大部分が同一で、傳誦の間に文句の少しく相違を来たしたやうな歌は類歌といふべきで本歌取ではない。本歌取は意識的に行はれる表現技巧といふべきである。定家が近代秀歌の中に、「ふるきをこひねがふにとりて、昔の歌の言葉あらためよみかへるを、本歌とすと申すなり」といひ、「毎月抄」の中に「本歌とり様侍る様は(中略)花の歌をやがて花によみ、月をやがて月にてよまむ事は達者のわざなるべし。春の歌をば秋冬などによみかへ、戀の歌などをば雑や季の歌などに、しかもその歌をとれるよと聞ゆるやうによみなすべきにて候。本歌の詞をあまりに多く取る事はあるまじきにて候。其の中に詮と覺ゆる詞二つばかりとりて、今の歌の上下句に分ちおおくべきにや」とあるのによつて、當時に於ける本歌取の大體の性質を見ることが出来る。
沿革 本歌取の起原に近いものとしては「枕草子」に、清少納言が「年ふれば齡はふりぬしかはあれど花をしまれば物おもひもなし」といふ本歌を、「年ふれば齡はふりぬしかはあれど君をしまれば物おもひもなし」と變へて上つたとあるなどを擧げることが出来る。「枕草子」とは同じ平安朝中期の藤原公任の「新撰體裁」の中にも「古歌を本文にしてよめる事あり」とあるのである。それ以後の歌論書には本

歌もしくはそれと同じ意味の語が屢々用ひられてゐる。清輔の「奥義抄」にも、「内外典のみふるき詩歌、もしは物がたりなどの心をもととしてよめる事あり」とある。上覧の「和歌色葉集」には、「是は衣通姫の歌小野小町此歌を本にてよめるなり」とあり、次第に本歌取の意識も明瞭になつて來、本歌取の歌も多く試みられて來たのであり、それが新古今時代に至つて最も隆盛となつたのである。定家の見解はそれを代表するのである。それ以後も本歌取は常に行はれたが、新古今時代が最も頂點であつたと言へる。「價值」本歌取は、古歌の素材をとつて、新しい表現によつて新しい内容を與へるにある。従つて歌に於て素材に意義を認めず、表現や表現内容に中心をおく時代に於ては最も大きな意義を有してゐるのである。この點が定家を中心とした新古今時代に最も多く用ひられ、意義を認められた理由である。題材や素材も歌の一要素であるから本歌取が濫用される時、歌の清新味を失ふ弊を生ずるが、表現方法の一として多少の意義を認めることが出来る。
参考 藤原定家の歌學思想(國語國文の研究一八) 久松 義久
本願寺敵討 ほんねんじあてうち 「韓人漢文手管始」を見よ。
本行物 ほんぎよ 所作事【名義】能がかかり所作の意。【異稱】松羽目物【性質】演出様式、又は藝脈より分類したものの一類で、能や狂言より想を構へてその形式を摸したものである。尤もその中には能や狂言の儘ともいふべき直譯的のものもあるが、その形式だけを借りた創作的のものもあるが、松羽目の舞臺面であることを必須としてゐる。

【沿革】歌舞伎の初期、即ち女歌舞伎や若衆歌舞伎の舞臺構造が全く能舞臺の踏襲であり、歌舞伎の囃子や所作事の基調も亦、能の囃子や仕舞からの脱化であつたから上演せられた所作ものも、能や狂言からの所謂本行物が大半であつた事はいふ迄もない。故にその輸入脱化された種目も極めて数が多いが、當時の倅を後世まで遺存された江戸の壽狂言(別項)の如きその適例であり、又脇狂言(別項)の如きもそれに準すべきものである。かくて漸次歌舞伎の大成と共に所作事としての演出様式を有つことになり、本行物は殆どその跡を絶つに至つた。例へば「石橋」や「道成寺」(各別項)の如き、古くは能がかかりといふよりも、寧ろ能そのまゝを演じたが、寶曆期に於て「相生獅子の亂曲」「英獅子亂曲」「英執着獅子」(以上石橋参照等)や「傾城道成寺」「京鹿子娘道成寺」「江戸鹿兒男道成寺」(以上「道成寺」参照)等を生むに至つたのである。然るに幕末から明治にかけて時代好尚の影響を受け、再び本行物の傾向を辿り、明治から最近まで流行したのである。ためにこゝにいふ本行物は、所作事の大成を経た後に作られたものを指すので、その嚆矢ともいふべきは、寛政四年八月江戸市村座所演三代瀬川菊之丞の能がかり七變化所作事「七瀬川最中桂女」と見られるが、單獨では文化十二年五月中村座の「壽観猿」(「観猿」参照)とされてゐる。又諸曲の詞章その儘へ作曲し

た長唄は、文政三年四月杵屋六左衛門の節附「外記の石橋」(別名「大石橋」「石橋」参照)を以て最初としてゐる。
主要曲目 【能系】(常磐津)今やう高野物狂(弘化四年十一月市村座。作詞三代櫻田治助。作曲五代岸澤式佐。振附西川芳次郎。十二代市村羽左衛門等
 所演)○今様望月(石橋参照)○實榮源氏(舞鶴)(通稱七騎落。明治十四年三月久松座。作詞三代瀬川如草。作曲常盤津文字兵衛。振附花柳壽輔。三代中村仲義等所演)等。(清元)角田川(「観猿」参照)(長唄)小鍛冶(別項)○勸進帳(別項)○翁千歳(三番叟)(三番叟参照)○紀州道成寺(「道成寺」参照)○連獅子(「石橋」参照)○今様竹生鳥(文久二
 尼・波羅尼)である。後更にカーティヤヤナ(Katyayana)及びパタンチャリ(Patanjali)等頭社稱、西紀前二世紀中葉)の補修を経て古典梵語は確立し、その後些細の變化はあつたにしろ、文法の原則に何等の改變なく、標準文語の使命を果して今日に及んでゐる。波羅門教哲學書「ウパニシャッド」(Upanishad、優波尼沙陀、優波尼殺曇)、祭式摘要書「スートラ」(Sutra、修多羅・蘇阻囉)の言語は、概して古典梵語と同じ



(繪 錦) 慶 辨 舟

年月八中村座)○安達ヶ原(明治三年二代杵屋勝三
 郎作曲、謡曲の「黒塚」その儘)○壽一人狸々(通稱
 一人狸々。明治七年七月河原崎座。作詞河竹新七(或阿
 彌)、作曲三代杵屋正次郎。振附花柳壽輔。九代市川團
 十郎等所演。大薩摩の掛合。大正三年一月歌舞伎
 座上場の時、杵屋佐吉が増補したのが現行のもので
 ある)○牡丹蝶扇彩(石橋参照)○土蜘蛛(別項)○
 今様望月(通稱大望月、石橋参照)○茨木(別項)○
 船辨慶(新歌舞伎十八番の一。明治十八年十一月新

十月市村座)○猿舞(富常)○猿屋頭(に據つたもの)
 ○棒しばり(大正五年一月市村座。作詞岡村柿紅、
 作曲杵屋巳太郎)○太刀盗人(大正六年七月市村座。
 作詞岡村柿紅、作曲杵屋巳太郎。狂言の「長光」から脚
 色したもの)等。その他、岡村柿紅作詞の「芋掘
 長者」「鈍太郎」「業平餅」「茶壺」、岡鬼太郎作
 詞の「悪太郎」等がある。

【参考】日本舞臺舞踊史 岡田博三(演藝書報七ノ
 一)○能と歌舞伎 高安月郊(同上)○所作事類

ノド・イラン語派と稱せられる。希臘語・羅何
 語・獨逸語・英語・露西亞語等と同一基本語か
 ら派生したものである。
 【沿革】「古代印度語」(廣義の梵語)アリア
 人種に屬する印度人が、印度半島の西北部
 パンヂャップ地方に侵入した年代は明確でな
 いが、西紀前約二千年を下限と見れば大過な
 いものと思はれる。アリアン系印度人が、次

じきにて候、其の中に詮と覺ゆる詞二つばかりとりて、今の歌の上下句に分ちおくべきにや」とあるのによつて、當時に於ける本歌取の大體の性質を見ることが出来る。

【沿革】本歌取の起原に近いものとしては「枕草子」に、清少納言が「年ふれば齡はふりぬしかはあれど花をしまれば物おもひもなし」といふ本歌を、「年ふれば齡はふりぬしかはあれど君をしまれば物おもひもなし」と變へて上つたとあるなどを擧げることが出来る。「枕草子」とは同じ平安朝中期の藤原公任の「新撰體麗」の中にも「古歌を本文にしてよめる事あり」とあるのである。それ以後の歌論書には本

義を認めることが出来る。
【参考】藤原定家の歌學思想(國語國文の研究一八)
【久松】
本願寺敵討(のたがわらじ)「韓人漢文手管始」を見よ。

本行物

【名義】能がかかり所作の意。【異稱】松羽目物【性質】演出様式、又は藝脈より分類したものの一類で、能や狂言より想を構へてその形式を摸したものである。尤もその中には能や狂言の儘ともいふべき直譯的のものもあれば、その形式だけを借りた創作的のものもあるが、松羽目の舞臺面であることを必須としてゐる。

年月八中村座。○安達ヶ原(明治三年二代村座三郎作)○黒塚(その儘)○壽二人狸々(通稱二八狸々。明治七年七月河原崎座。作詞河竹新七(歌阿彌)。作曲三代村屋正次郎。振附花柳壽輔。九代市川團十郎等所演。大薩摩の掛合。大正三年一月歌舞伎座上演の時、村屋佐吉が増補したが現行のものである)○牡丹蝶扇彩(石橋參照)○土蜘蛛(別項)○今様望月(通稱大望月。石橋參照)○茨木別項)○船辨慶(新歌舞伎十八番の一。明治十八年十一月新宮座。作詞古河歌阿彌。作曲三代村屋正次郎。振附花柳壽輔。九代市川團十郎等所演。因に明治三年二代村屋勝三郎作曲の同名異曲があり、歌詞は殆ど謡曲の「船辨慶」その儘である)○新作五條橋(通稱五條橋。明治四十五年四月歌舞伎座。作詞三宅宅野。作曲十三代村屋六左衛門(現寒玉)。振附二代藤間勘右衛門。先代市川段四郎等所演。因に明治元年大薩摩絃太夫(銀原勘五郎)作曲の同名異曲があり、歌詞は謡曲の「橋辨慶」を手入れたに過ぎない等。その他、謡曲の詞章を殆どその儘へ節附けしたものに

「吉野天人」(天保十四年村屋六翁作曲)、「鶴龜」(嘉永四年十代村屋六左衛門作曲)、「羅生門」(慶應二年十一代村屋六左衛門作曲)、「熊野」(明治二十八年三代村屋六四郎作曲)、「新曲羽衣」(大正七年三代村屋樂藏作曲)等があり、少しく改訂したものに「枕草子」(文久元年五代村屋三郎助作曲)、「今様春日龍神」(明治二十年前後、三代村屋正次郎作曲)、「葵の上」(明治三十八年四代吉住小三郎と三代村屋六四郎作曲)等がある。

【狂言系】(常磐津)釣女(能狂言)釣女(參照)○三人片輪(能狂言)三人片輪(參照)○つんぼ座頭等。(清元)寢聲(昭和四年七月明治座。長唄との掛合)。(長唄)釣狐(別項)○襖落那須語(後に「素襖落」改題。能狂言)素襖落(參照)○二人袴(能狂言)二人袴(參照)○吹取妻(能狂言)釣女(參照)○身替座禪(能狂言)花子(參照)○花見座頭(明治四十四年

十月市村座。猿轡(常盤)「三猿座頭」に據つたもの)○梅しぼり(大正五年一月市村座。作詞岡村柿紅。作曲村屋巳太郎)○太刀盗人(大正六年七月市村座。作詞岡村柿紅。作曲村屋巳太郎。狂言の「長光」から脚色したものと等)その他、岡村柿紅作詞の「芋搦長者」「鈍太郎」「業平餅」「茶壺」、岡鬼太郎作詞の「悪太郎」等がある。

【参考】日本舞臺舞踊史(町田博三)演藝書報七ノ一)能と歌舞伎(高安月)同上)○所作事類纂(松羽目物)小谷青楓(歌舞伎研究二)○歌舞伎概論(飯塚友一郎)歌舞伎細見同上)「秋葉」

梵語(梵)言語學【解説】世界の言語の。梵天所説の言語の義。サンスクリット語を指す。サンスクリット(Sanskrit)は「完成された語」即ち俗語に對する雅語の意で、古代印度の標準文語である。西紀前四世紀の頃文藝家の努力により整理されて以來、印度に於ける文學・哲學・宗教・學術書類の標準語として用ひられ、現今もなほ學者間の共通文語として、恰も中世歐洲に於ける羅蘭語の如き位置を占めてゐる。廣義の梵語(「古代印度語」)を大別して、古代梵語、或は吠陀語(Vedic Sanskrit)と古典梵語、或は單に梵語(Classical Sanskrit)とに分つ。古來、支那及び我が國に於て梵語と稱して來たものは、佛敎經典に使用された所謂佛敎梵語で、古典梵語の一支分と見るべく、文法は時に嚴正を缺くが、概して古典梵語と一致し、ただ教理に關する語彙に於て大に特徴をもつてゐる。【系統】梵語はインドヨーロッパ語族(別項)に屬し、殊に吠陀語は古代波斯の聖典アヴェスタに用ひられたアヴェスタ語及びアケメニア朝諸王の楔形文字碑文に用ひられた古代波斯語に酷似してゐる。故に印度語と波斯語とは一括してイ

ンド・イラン語派と稱せられる。希臘語・羅蘭語・獨逸語・英語・露西亞語等と同一基本語から派生したものである。

【沿革】「古代印度語」(廣義の梵語)アリア人種に屬する印度人が、印度半島の西北部パンヂャップ地方に侵入した年代は明確でないが、西紀前約二千年を下限と見れば大過ないものと思はれる。アリア系印度人が、次第に土着の民族を征服して領土を擴張するに従ひ、その言語及び文化も亦、印度の西北部から次第に東部・南部に傳播し、先住民の言語文化は或は驅逐され、或は同化され、或は影響を蒙つた。現今もなほ南印度には、梵語と系統を異にするドラヴィダ語(テलग語・タミール語・カナリ語等)、中央印度には、ムンダ語・モンクメール語が存在する。吾人の知り得る梵語の最古形は吠陀語で、「リグヴェーダ」(Rigveda, 頌歌・有力)、「ヤヂルヴェーダ」(Yajurveda, 耶樹治受)、「サーマヴェーダ」(Sāmaveda, 婆摩・三應)、「アタルヴェーダ」(Atharvaveda, 阿達・阿圖)の四吠陀(韋陀・皮陀・禪陀等)及びこの各々に屬する釋義書「プラトマナ」(Brahmana)に保存されてゐる。内容は波羅門教祭祀呪術に用ひる讚誦・供施・歌咏・禱災・調伏の詞藻及びその儀軌・釋義である。殊にリグヴェーダは十卷から成り、收める所の讚歌千二十八篇、その中特に優秀なものは古代宗教文學の精華である。これ等の經典を誤謬なく完全に相承せんとする宗教的要求から、印度に於ては早く音韻學(Prātiśākhya)・文法(Vakaraṇa, 昆伽羅・昆耶瑪刺誦)の研究起り、言語觀察が異常な發達を遂げた。その研究を整理大成し、古典梵語の基礎を築いた者は、西紀前四世紀に出たパーニニ(Pāṇini, 波爾

「京鹿子娘道成寺」「江戸鹿兒男道成寺」(以上「道成寺」參照)等を生むに至つたのである。然るに幕末から明治にかけて時代好尚の影響を受け、再び本行物の傾向を辿り、明治から最近まで流行したのである。ためにこゝにいふ本行物は、所作事の大體を經た後に作られたものを指すので、その嚆矢ともいふべきは、寛政四年八月江戸市村座所演三代瀬川菊之丞の能がかり七變化所作「七瀬川最中柱女」と見られるが、單獨では文化十二年五月中村座の「壽報猿」(觀猿)參照とされてゐる。又謡曲の詞章その儘へ作曲し

所演)○今様望月(石橋參照)○實榮源氏(舞鶴(通稱七騎落。明治十四年三月久松座。作詞三代瀬川如草。作曲常盤津文字兵衛。振附花柳壽輔。三代中村仲義等所演)。(清元)角田川(「賤盛帯」參照)。(長唄)小鍛冶(別項)○勸進帳(別項)○翁千歳(三番叟)參照)○紀州道成寺(「道成寺」參照)○連獅子(石橋參照)○今様竹生鳥(文久二

尼・波羅尼)である。後更にカーティヤヤナ(Katyayana)及びパタンヂヤリ(Patanjali)等頭社傳、西紀前二世紀中葉)の補修を経て古典梵語は確立し、その後些細の變化はあつたにしろ、文法の原則に何等の改變なく、標準文語の使命を果して今日に及んでゐる。波羅門教哲學書「ウパニシャッド」(Upaniṣad, 優波尼沙陀・優波尼殺曼)・祭式摘要書「スートラ」(Sūtra, 修多羅・蘇阻羅)の言語は、概して古典梵語と同じであるが、僅かに吠陀語の特徴を保持してゐる。大叙事詩「マハーバータ」(Mahābhārata)、「ラーマヤナ」(Rāmāyana)を経て、始めて純粹古典梵語に達する。以後アシワメーシヤ(Asvaghosa, 馬鳴。西紀一世紀)・バーサ(Bhāsa)・カリーダーサ(Kalidasa, 四世紀)・バーラヅ(Baravi, 六世紀)・スバンドゥ(Subandhu, 七世紀)・バーナ(Bāna, 同上)・ダンカン(Dandin, 同上)・バルトリハリ(Bhartrihari, 代撥同利)・ハプンデーテ(Bhābhūti, 七世紀)・ヤーガ(Yāgya, 八世紀)等の文豪詩聖輩出し、戯曲・叙事詩・抒情詩・神史・傳奇小説・敎訓譚等に數多の傑作を残した。又宗教・哲學・法制・處世・文法・修辭・占星・天文・數學・醫學に關する専門的著述は充棟汗牛の觀がある。佛敎は最初梵語によらず、寧ろ通俗語を用ひた。現今保存されてゐる南方小乗敎の三藏も、次節に説くパーリ語を用ひてゐる。併し梵語が標準文語の位置を確保するに至り、西紀以後北方大乘敎は梵語を採用した。かくの如く隆昌を極めた梵語梵文學も、印度が回教徒の侵略を蒙り、更に近世歐洲諸國植民競争の舞臺となり、遂に英國の支配下に置かれるに至つて昔日の盛觀を失つた。

【中期印度語】標準文語の傍に在つて、或は獨

七一九



立の文學を有し、或は梵語戯曲中に使用され
てゐる數種の中期通俗文學を總稱して「プラー
クリット語」(Prakṛita)「梵語を基礎とする語」或
は「自然語」の義と云ふ。阿育王碑文(西紀前三世
紀中葉)の言語、南方小乗教の用いた「パーリ語
(Pāli)は古プラークリット語に屬する。佛教
と並び起つた耆那教(Jainism)は、アルダマ
ーガニー(Ardham'gadhī, Jaina-Pakṛiti)・
チャイナマーナーラーシシュトリー(Jaina-Mā-
hāśṣṭī)等を用ひた。又梵語の戯曲に於ては
婆羅門(僧侶・刹帝利)王族以外の庶民及び婦
人は通則として「プラークリット」を使用する。
即ち「マーナーラーシシュトリー」(Mahāśṣṭī)・
シャウラセニー(Sauraseni)・マーガデー
(Māgadhī)・ハイシャーチー(Pāśāci)等がこれ
に屬する。併しプラークリット語は梵語から
派生したものでなく、吠陀語時代の口語方言
を基礎として轉化したものである。以上擧げ
たものは皆文學的に使用された形で、當時の
口語を忠實に傳へたものではないが、これを
梵語に比べれば、一般に音韻語形が簡略にな
つてゐて、近代印度語に近づく傾向を示して
ゐる。殊に諸種の「アパブランシヤ語」(A-pahra-
nśa)に於て著しい。

〔近代印度語〕中期印度諸方言は、西紀十一世
紀頃から次第に轉化して近代印度諸語を形成
した。現今用ひられる「アリアン系印度語」は約
二十五を算し、これを用ふる者は二億三千万
以上と云はれる。その主要なものを次に列擧
する。Kāśmīrī, Panjābī, Kaipālī, Sindī,
Gujarātī, Marāṭhī, Hindī, Bihārī, Bengālī,
Orīyā, Pākārī, Singhalēse 等。これ等は何れ
も獨特の文學を有してゐるが、皆梵文學の影
響を受けてゐる。北方印度の一般通用語たる

ヒンドゥスターニー(Hindustānī, Urdu)は、
多數の波斯語を借用した西部ヒンドゥスターニーの一
形である。

【特徴】梵語はその音韻組織、名詞變化(八轉
聲・動詞變化(二九韻十羅聲)の複雑な點に於
て印歐語族の代表的古代語である(悉曇參照)。
なほ梵語の特徴としては、造語法の發達、合
成語(六合聲)を自由に造り得る事、分詞形使
用の盛んなる事、好んで受動表現法を能動表
現法に代へる事等を擧げ得る。カーリダーサ
以後の古典詩人は修辭技巧を偏重し、屢々内
容よりも外形に全力を注ぎ、長大な合成語と
相俟つて美文梵語の特徴をつくつた。これを
カーヴィヤ體(Kāvya-style)と云ふ。これに反
し寸鐵的短句の中に深長な意を含めたものを
スートラ體と稱し、パーニニ文典はその代表
的なものである。

【研究史】前述の如く印度に於ては早くから
文法の研究が起り、その成績は實に驚嘆に價
するものがある。音韻の音聲學的排列法、母
韻の階程(Ādhat)に當る、語根の發見、造語
の法則、合成語の分類等は、その著しいもので
ある。梵語研究が近世歐洲に於て比較言語學
を發達せしめる導火線となつたのも怪しむに
足りない。

〔泰西に於ける研究〕古代中世を通じて、印度に
關する知識は多少歐洲に傳へられてゐたが、
十五世紀末ヴスコダガマが印度航路を發見し
て以來、基督教宣教師の報告及び著書、旅行者
の見聞記等により印度の宗教・風俗・言語・文
學等が次第に明細に紹介され、その興味を喚
起した。但し梵語梵文學の學術的研究は、十
八世紀末に先づ英國人の手によつて始められ
(Sir William Jones, Charles Wilkins, H.

Thomas Colebrooke, H. H. Wilson)「次いで
獨逸・佛蘭西の學者も研究に着手」(Fr. von
Schlegel: Über die Sprache und Weisheit
der Indier. Heidelberg 1838, A. W. von
Schlegel; A. L. de Chézy, Eugène Burnou-
f 等)十九世紀の初めには比較言語學的研究
の基礎確立(Franz Bopp: Über das Conju-
gationssystem der Sanskritsprache in Ver-
gleichung mit jenem der griechischen, latei-
nischen, persischen und germanischen Spra-
chen Frankfurt a. M. 1816) 同世紀中葉から
は吠陀語研究盛んに起り(R. von Roth: Zur
Literatur und Geschichte des Weda Stutt-
gart 1846) ヴェルブルグ梵語字典の完成は
斯學の大進歩を促した(O. von Böhtlingk
und R. von Roth: Sanskrit-Wörterbuch.
St. Petersburg 1852-1875) その後、印度

及び本邦の學者も歐米學者に伍して研究を進
め、今や尨大なる梵文學の主要な作品は概ね
出版され、或は翻譯されるに至つた。
〔東洋に於ける梵語の傳播〕東洋に於ける梵
語の知識は、佛教の弘通と共に傳播した。支
那に於ては後漢(西紀二世紀)以來、印度及び西
域諸國から來つて譯經に従事する者多く、こ
れと共に梵字梵語の知識が輸入された。西域
は印度と支那との中間に位し、大月氏・安息・
康居・于闐・龜茲・疏勒・高昌等の諸國は、早
くから佛教に歸依し、佛學と共に梵語の知識
も大に發達してゐたことは、近時の中亞發掘
研究によつて明瞭である。支那に來つて譯經
に従つた婁迦讖は月氏國の人、世高は安息の
人、また有名な鳩摩羅什は龜茲の人である。
支那僧で自ら印度に旅行し、梵語に熟達した
ものもあつた。北朝の佛國記(399-415)に

English ed.: A Sanskrit-English dictio-
nary London 1924. || A. A. Macdonell:
Sanskrit-English dictionary London
1893, New ed.: A practical Sanskrit
dictionary London 1924. || Yaman Shiv-
ram Apte: The practical Sanskrit-
English dictionary, 3rd ed. Bombay
1924. || N. Stenoupek, L. Nitti et L. Ren-
on: Dictionnaire Sanskrit-farvains.

并の大唐西域記(629-645) 義淨の南海寄歸
内法傳(671-695)等は當時の印度文化を知る
ために無上の好資料である。本邦に於ける梵
字は古くから悉曇と云はれ、梵字梵語の研究
も悉曇の名で行はれた。(別項(悉曇參照))

【國語中の梵語】漢譯佛典を通じて邦語に入
つた梵語音譯語は頗る多いが、大部分は佛教
専門語である。併し佛教が一般信仰となつた
爲め、俗間宗教と密接な關係をもつに至つた
梵語音譯語も少くない。元來梵語と支那語と
は、その音韻組織を全く異にするため、漢譯佛
典中の梵語音譯法も不完全なるを免れず、同
一梵音に多數の異なる漢字を充當し、或は同一
漢字を以て異なる梵音を寫すのみならず屢々
省略形を用ひ(Bodhisatvaを菩薩とし、悉曇
多 Siddharthaを悉曇・悉陀に作る類)・
又は音譯と意譯とを併用するため(Jetavana
を祇陀林、略して祇園・祇園とする類)著しく
梵語の原形より遠ざかり、更にこれ等の漢譯
梵語が本邦に於て音讀されるに當つて、益々
その音價を變化せしむるに至つた。而してこ
れ等の音譯語中意味の一般化或は轉化によつ
て日常語彙中に入つたものもある。例へば、
佛: Buddha (淨土譯)「ぼつた」菩薩: Bod-
hisatva, 羅漢: Arhan (阿羅漢譯)「あらん」釋
迦牟尼: Sakyamuni, 阿彌陀: Amitābha (無
量光) Amityus (無量壽) 文殊: Mañjuśrī,
毘盧舍那: Vairocana, 梵天: Brahman, 婆羅
賀摩: Sakto devānām indraḥ (釋提桓
因) 毘沙門: Vaiśravaṇa, 摩利支天: Marīci,
閻魔: Yama, 寶頭觀音: Piṅgola, 達摩: Bo-
dhidharma (菩提經譯)「ぼつだ」阿修羅: Asura,
夜叉: Yakṣa, 羅刹: Rakṣa, Rakṣasa, 阿
闍梨: aryā, 和尚・和上: upādhyāya (譯)「あ

systems of Sanskrit grammar. Poona
1915. || F. Kielhorn: A grammar of
the Sanskrit language Bombay 1870,
4th ed. 1896. || German translation by
W. Solf Berlin 1888. || W. D. Whitney:
A Sanskrit grammar. Leipzig 1879,
3rd ed. 1896, reprinted Cambridge
(Mass.) 1921; (German translation by H.
Zimmer Leipzig 1879) || J. Wackernagel:

systems of Sanskrit grammar. Poona
1915. || F. Kielhorn: A grammar of
the Sanskrit language Bombay 1870,
4th ed. 1896. || German translation by
W. Solf Berlin 1888. || W. D. Whitney:
A Sanskrit grammar. Leipzig 1879,
3rd ed. 1896, reprinted Cambridge
(Mass.) 1921; (German translation by H.
Zimmer Leipzig 1879) || J. Wackernagel:

systems of Sanskrit grammar. Poona
1915. || F. Kielhorn: A grammar of
the Sanskrit language Bombay 1870,
4th ed. 1896. || German translation by
W. Solf Berlin 1888. || W. D. Whitney:
A Sanskrit grammar. Leipzig 1879,
3rd ed. 1896, reprinted Cambridge
(Mass.) 1921; (German translation by H.
Zimmer Leipzig 1879) || J. Wackernagel:

Literatur Leipzig-Berlin 1906, z. A. A.
1925. || M. Winternitz: Geschichte der
indischen Literatur Leipzig 1909—
1920. (Vol. I translated into English by
Mrs. S. Ketcher Calcutta 1927) || A. B.
Keith: Classical Sanskrit literature
London 1923, The Sanskrit drama
Oxford 1924, A history of Sanskrit
literature Oxford 1928. || H. von

systems of Sanskrit grammar. Poona
1915. || F. Kielhorn: A grammar of
the Sanskrit language Bombay 1870,
4th ed. 1896. || German translation by
W. Solf Berlin 1888. || W. D. Whitney:
A Sanskrit grammar. Leipzig 1879,
3rd ed. 1896, reprinted Cambridge
(Mass.) 1921; (German translation by H.
Zimmer Leipzig 1879) || J. Wackernagel:

systems of Sanskrit grammar. Poona
1915. || F. Kielhorn: A grammar of
the Sanskrit language Bombay 1870,
4th ed. 1896. || German translation by
W. Solf Berlin 1888. || W. D. Whitney:
A Sanskrit grammar. Leipzig 1879,
3rd ed. 1896, reprinted Cambridge
(Mass.) 1921; (German translation by H.
Zimmer Leipzig 1879) || J. Wackernagel:

systems of Sanskrit grammar. Poona
1915. || F. Kielhorn: A grammar of
the Sanskrit language Bombay 1870,
4th ed. 1896. || German translation by
W. Solf Berlin 1888. || W. D. Whitney:
A Sanskrit grammar. Leipzig 1879,
3rd ed. 1896, reprinted Cambridge
(Mass.) 1921; (German translation by H.
Zimmer Leipzig 1879) || J. Wackernagel:

systems of Sanskrit grammar. Poona
1915. || F. Kielhorn: A grammar of
the Sanskrit language Bombay 1870,
4th ed. 1896. || German translation by
W. Solf Berlin 1888. || W. D. Whitney:
A Sanskrit grammar. Leipzig 1879,
3rd ed. 1896, reprinted Cambridge
(Mass.) 1921; (German translation by H.
Zimmer Leipzig 1879) || J. Wackernagel:

ある。殊に諸種のマハ・ブラン・シヤ語(Apabhraṁśa)に於て著し。

【近代印度語】中期印度諸方言は、西紀十一世紀頃から次第に轉化して近代印度諸語を形成した。現今用ひられるアリアン系印度語は約二十五を算し、これを用ふる者は二億三千万以上と云はれる。その主要なものを次に列挙す。

Kashmirī, Panjābī, Kaipālī, Sindī, Gujarātī, Marāṭhī, Hindī, Bihārī, Bengālī, Oriyā, Pakāri, Singhalēse 等。これ等は何れも獨特の文學を有してゐるが、梵文學の影響を受けられてゐる。北方印度の一統通用語たる

ある。梵語研究が近世歐洲に於て比較言語學を發達せしめる導火線となつたのも怪しむに足りない。

【泰西に於ける研究】古代中世を通じて、印度に關する知識は多少歐洲に傳へられてゐたが、十五世紀末ヴスコダガマが印度航路を發見して以來、基督教宣教師の報告及び著書、旅行者の見聞記等により印度の宗教・風俗・言語・文學等が次第に明細に紹介され、その興味を喚起した。但し梵語・梵文學の學術的研究は、十八世紀末に先づ英國人の手によつて始められ

Sir William Jones, Charles Wilkins, H. 那に於ては後漢(西紀一世紀)以來、印度及び西域諸國から來つて譯經に従事する者多く、これと共に梵字梵語の知識が輸入された。西域は印度と支那との中間に位し、大月氏・安息・康居・于闐・龜茲・疏勒・高昌等の諸國は、早くから佛教に歸依し、佛學と共に梵語の知識も大に發達してゐたことは、近時の中亞發掘研究によつて明瞭である。支那に來つて譯經に従つた婆迦羅は月氏國の人、世高は安息の人、また有名な鳩摩羅什は龜茲の人である。支那僧で自ら印度に旅行し、梵語に熟達したものは、北朝の佛國記(39—415)に

て日常語彙中に入つたものもある。例へば佛: Buddha(佛羅海圖「ぼつた」)、菩薩: Bodhisattva, 羅漢: Arhan(阿羅漢「ぼん」)、釋迦牟尼: Sakyamuni, 阿彌陀: Amitābha(無量光)、Aniāyus(無量壽)、文殊: Mañjuśrī, 毘盧舍那: Vairocana, 梵天: Brahman, 婆羅賀摩: Sakto devānām indraḥ(釋提桓因)、毘沙門: Vaiśravaṇa, 摩利支天: Marīci, 閻魔: Yama, 寶頭盧: Tigōla, 達摩: Bodhidharma(菩提達摩)、阿修羅: Asura, 夜叉: Yakṣa, 羅刹: Rakṣa, Rakṣasa, 阿闍梨: acārya, 和尚・和士: upādhyāya(僧師),

梵: Śramaṇa(「僧」)、比丘・比丘尼: bhikṣu, bhikṣuṇī, 僧羅: namas(羅漢の譯) 梵陀: bodhi, 毘鉢: nīrvāṇa, 羅漢: prajña(聖智の譯) 梵羅漢: pāramitā(羅漢の譯) 羅漢陀: dhyaṇa(禪) 三昧・三摩地: samādhi, 梵陀: nāraka(羅漢の譯) 檀那・日那・檀越: dānapati(檀越の譯) 伽藍: saṅghārāma(伽藍の譯) 僧園・精舍(譯) 曼陀羅: maṇḍala(曼陀羅の譯) 婆伽婆: kaṣṭya, 修羅羅: sūra, 婆羅婆・婆羅: stūpa, 舍利: śāri, 阿迦・迦迦: arghya, 阿迦: dhūtiguṇa(著者等の譯) 迦行) 羅迦: dakṣiṇa(布施の譯) 迦蘭迦: ullambana(羅漢の譯) 迦羅・迦羅迦羅迦: Mēru, Sumeru, 祇園: Jetavana(祇園の譯) 林) 沙羅樹: sāla, sāla, 梅檀: candana, 伽羅: kālāguru, 優曇鉢: udumbara(優曇鉢の譯) 琉璃: vaidūrya(琉璃の譯) 玻璃: sphatika(玻璃の譯) 婆伽婆: sahā(羅漢の譯) 刹那: kṣāra, 木蘭: narmā(木蘭の譯) 羅末摩: narmāchid, cochid, 奈良朝及びその以前に本邦へ渡來した印度人から直接聞かされた單語も多少あるが、その辨別は困難で原語も明確にならぬものが多。

【參考】【文典】(ペーニ派)Pāṇini: *Grammatik*, ed. Böhtlingk Leipzig 1887. || Patanjali: *Mahabhāṣya* ed. Kielhorn Bombay 2nd ed. 1906—9. || *Kāṭikā Yrtti* ed. Benares 1898. || (非ペーニ派) Sarvaśrama: *Kāṭikā* ed. Eggeling Calcutta 1874—8. || Candragomin: *Yyā-karṇa* ed. Liebich Leipzig 1902. || Candragomin: *Yrtti* ed. Liebich Leipzig 1918. || (印度文典系統に就く) S. K. Bellalkar: *An account of the different*

systems of Sanskrit grammar. Poona 1915. || F. Kielhorn: *A grammar of the Sanskrit language* Bombay 1870, 4th ed. 1896. || (German translation by W. Solt Berlin 1888.) || W. D. Whitney: *A Sanskrit grammar*. Leipzig 1879, 3rd ed. 1896, reprinted Cambridge (Mass.) 1921; (German translation by H. Zimmer Leipzig 1879) || J. Wackernagel: *Altindische Grammatik*. I Göttingen 1896, II. I 1905, III. 1929—1930. || A. Thunb.: *Handbuch des Sanskrit*. I. Teil Grammatik Heidelberg 1905, 2. Auflage (verbessert und mit Nachträgen versehen von H. Hirt) 1930. || A. A. Macdonell: *Vedic grammar*. Strassburg 1910. || I. Ronon: *Grammaire sanscrite*. Paris 1930. || V. Pisan: *Grammatico dell'antico Indiano*. Roma 1930 (in progress). || [文典] Bühler, Fick, Bhandardkar, Geiger, Stenzler-Pischel-Geidner, Macdonell, Courbin 等の初歩文典がある。解説梵語學 補卷三郎 同附卷 實習梵語學 跋原書來 ○ 梵語文法 編者・田中

【叢書】O. Böhtlingk und R. Roth: *Sanskrit-Wörterbuch* St. Petersburg 1852—1875. || O. Böhtlingk: *Sanskrit-Wörterbuch in kürzerer Fassung* St. Petersburg 1879—1889, Neudruck Leipzig 1923—1925; Nachträge by R. Schmidt Hannover 1924—1928. || M. Monier-Wilkins: *Sanskrit-English dictionary* New ed. Oxford 1899. || C. Cappeller: *Sanskrit-Wörterbuch* Strassburg 1887,

English ed.: *A Sanskrit-English dictionary* London 1924. || A. A. Macdonell: *Sanskrit-English dictionary* London 1893, New ed.: *A practical Sanskrit dictionary* London 1924. || Yaman Shiram Apte: *The practical Sanskrit-English dictionary*, 3rd ed. Bombay 1924. || N. Stenoupek, I. Nitit et L. Renon: *Dictionnaire Sanskrit-français*. Paris 1931—1932. || [研究史] E. Windisch: *Geschichte der Sanskrit-Philologie und indischen Altertumskunde* Strassburg 1917, Drei nachgelassene Kapitel des III. Teils: *Philologie und Altertumskunde in Indien* Leipzig 1921. || W. Wüst: *Indisch* Berlin-Leipzig 1929. || [文學史] A. Weber: *Akademische Vorträge über indische Literaturgeschichte* Berlin 1852, 2. Auflage 1876. (English translation from the 2nd ed. by J. Mann and Th. Zachariae: *The history of Indian literature* London 1878) || F. Max Müller: *A history of ancient Sanskrit literature*. London 1859, 2nd ed. 1860; reprinted London-Allahabad 1912, 1926. || I. von Schröder: *Indians Literatur und Cultur in historischer Entwicklung* Leipzig 1887, Neudruck 1922. || A. A. Macdonell: *A history of Sanskrit literature* London 1900. || H. Oldenberg: *Die Literatur des alten Indien* Stuttgart 1903, 2. Aufl. 1923. || V. Henry: *Les littératures de l'Inde*. Paris 1904. || R. Pischel: *Die indische*

Literatur Leipzig-Berlin 1906, 2. Aufl. 1925. || M. Winternitz: *Geschichte der indischen Literatur* Leipzig 1909—1920. (Vol. I translated into English by Mrs. S. Ketchkar Calcutta 1927) || A. B. Keith: *Classical Sanskrit literature* London 1923, *The Sanskrit drama* Oxford 1924, *A history of Sanskrit literature* Oxford 1928. || H. von Glasenapp: *Die Literaturen Indiens* Potsdam. 1929. [編者]

梵字 梵文 【名義】梵語 Brahmi Ipi の譯 梵天(Brahmā)所説の文字の義。【解説】世界の文字の一種。廣義では印度古代の右行文字即ちブラーフミー文字(後述)及びそれから派生した、梵語を書き表はすに用ゐる一群の字體。狹義では、古來支那・日本に於て梵字即ち悉曇文字と稱して來た字體。これは廣義の梵字の中の一系統である。以下は廣義のものについて述べる。狹義の梵字は「悉曇」參照。【特徴】(一)母韻文字に獨立體(多)と半體(體書)とある事。(二)子音文字(體文)は常に「韻を含む」その他の母韻との結合を示すためには「子音文字に半體母韻符合を附加する事。a 韻を含ませる子音のみを表はすには、子音文字に「ヴァー」(Virāma)符號を附加する。(三)子音と子音とが直接に連續する時は「それ等の文字を合體して一連續字を作する事。」この點に於て梵字は純粹な單音文字と純粹な音節文字との中間に位するものと云ふ事が出来る。(四)最古の遺物に屬する僅少なる例外を除き「ブラーフミー」系統の文字は一般に左より右へ向つて横書せらる。

【古代印度文字及びその起原】古代印度に於

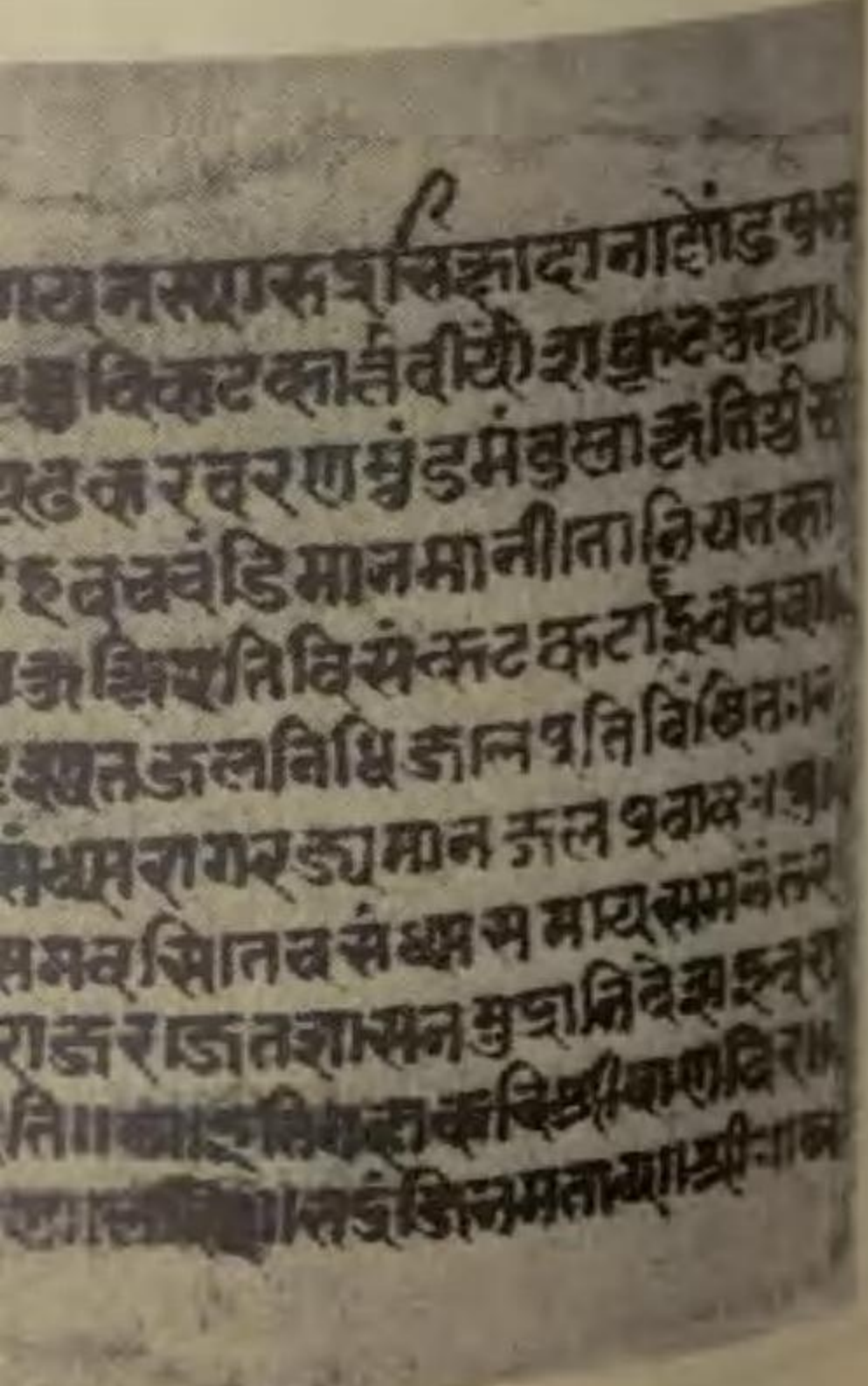
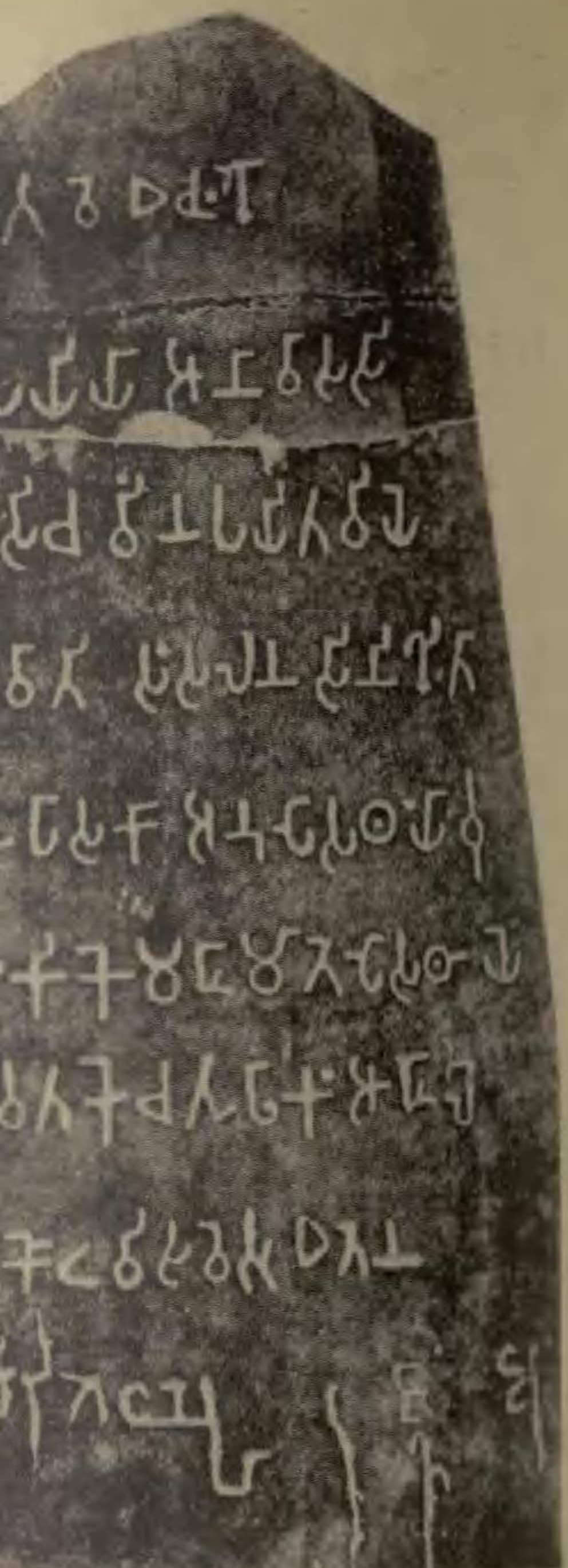
て使用された文字に二種ある。(一)ブラーフミー文字 (Brāhmī lipi: Lalitavistara ed. by Lehmann p. 125 l. 19, 「梵書普曜經現書品・大正藏三・四九八」梵書普曜經現書品・同上五五九、「梵天所說書佛本行集經十一・同上七〇三」。最古形は西暦前四世紀の後半に屬するイラン貨幣に残る六文字で、左書きの迹を示してゐる。併し最も重要な研究資料は西暦前三世紀の中葉に屬する阿育王勅諭碑文の右行文字である。碑文の文字が地方的區別を有するまでに發達してゐる點から考へて、印度に於ける文字の使用は西暦前三世紀より遙か以前に始まつた事を知る。ウエーベル (ZDMG. X. 1856 p. 389 ff.) 及びビュレルの研究に従へば、この字體の系統は北方セム系文字の最古形(即ちフェニキア文字)から發し、古代フェニキア碑文及び所謂メーシヤ王碑文(西紀前八九〇年頃)の文字に最も近く、恐らくメソポタミアを経てその地方の影響を蒙り、通商者の手に依つて西紀前八〇〇年頃印度へ齎されたものらしい。この北セム系の文字は、印度に於て次第に字體の改變を受け、梵語を正確に表はし得るやうに改良されて、俗間日常事務の使用の外、更に高尚な用途に適應されたのである。(二)カローシユティ文字 (Kharoshthī lipi: Lalitavistara loc. cit., 「梵書普曜經」・「法盧底書」・大莊嚴經・「法盧底書」佛本行集經)。この字體は本項で説く梵字の定義外のものであるが、古代印度文字としては重要である。法路瑟吒文字、略して法盧(依禮・迦留)書は、印度西北部に於て西暦前四世紀から西暦後三世紀まで使用された左行文字で、字體は西暦前五〇〇年乃至四〇〇年頃の北セム系アラメア文字に最も近い。即ちアラメア文字がベルシャ領西北印度に輸入されて、梵語を表はすために改良されたものである。また前記のブラーフミー文字の影響も明かに認められる。法留書で書かれた阿育王碑文も殘存してゐるが、印度に於ては餘り廣く用ひられずして終つた。併し中央亞細亞に於て大發達を遂げた事は最近の中亞發掘研究の數へる所である。名稱に關しては古來傳説的にカローシユタ即ち驢唇仙人の所造と云はれてゐるが、眞義については定説がない。

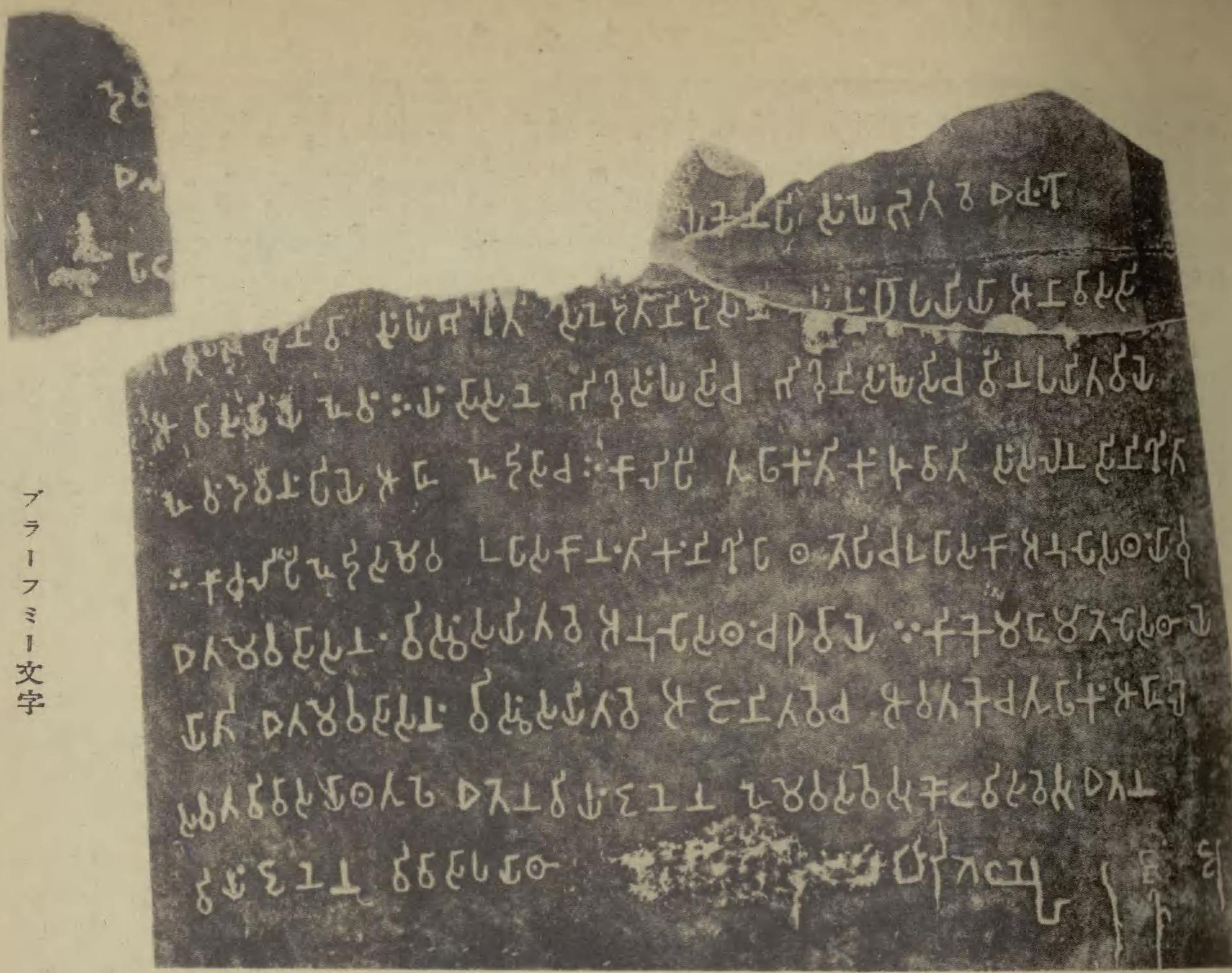
【ブラーフミー文字の變遷】ブラーフミー文字はその後種々な變遷を経て諸種の字體を派生したが、西暦四世紀の中葉からこれ等を大別して北方系と南方系とに分つ事ができる。北方系に屬するグプタ(Gupta)文字から六世紀に發達した一種に、ビュレルの所謂銳角型文字(der spitzwinklige Typus)がある。即ち線頭は楔形を呈し、線尾は尖角を呈するのを特徴としてゐる。伽耶の碑文(六世紀末)、ラッカマンダルの頌讚文、法隆寺貝葉(六世紀前半)等がその古形を代表する。これ即ち柔曼文字である。同じく北方系に屬するナーガリー文字(Nāgarī)は端を七世紀に發し、上部横線の發達を特徴とする。八世紀の半にはナーガリー文字の碑文があり、十世紀以後には益々廣く行はれて、遂に印度の大部分を風靡するに至つた。前記の銳角型文字も、八世紀以後は次第にナーガリー文字の影響を受け、これに接近した。現今梵語を書くに用ひる文字は、ナーガリー型の轉化したもので、普通デーヴナーガリー(Devanagari)と稱し、南印度に行はれるナンディナーガリー(Nandinagari)と區別する。

【參考】G. Bühler: Indische Palaeographie. Philo Strassburg 1896. G. Bühler: On the origin of the Indian Brāhmī alphabet 2nd ed. Strassburg 1898. H. Jensen: Geschichte der Schrift Hannover 1925 p. 144 ff. 【福島】

本式 ほんしき 連歌・俳諧【名義】本式とは本式目の略。式は法式、目は條目の義で、連歌の作法に關する法則を記した條目をいふ。本式といふは新式(別項)に對する稱である。【解説】長連歌は、その種類が種々あるけれども百韻を以て其準とする。而してこれを懷紙に記すには四枚を用ひる。里村昌休の開書の「連歌新式開書」に、「本式目東山清水寺に残在之云々」とあるが、明應年間に斯界の泰斗飯尾宗祇がこの式目によつて本式何人百韻や、なほ一巻の本式百韻を賦してゐるが、共に四枚懷紙である。本式百韻は、一の懷紙の表十句、同裏十四句、二・三懷紙の表裏及び四の懷紙の表十四句、名殘の裏六句となし、一の表は懷紙を三つ折となし、その初めの部に年月日を一行に、次に本式連歌の四字を一行に、次に賦何連歌といふ文字を一行に、次に發句を二行に記し、中の部に四句半、末の部に四句半書く。この記載法と共に、賦物(別項)の取りやう、季の物・景物(別項)・降物・寄物等の去嫌(別項)の制があつて、一々作家はこれに準據して句を吐くべき慣習となつてゐた。なほその精しい點は、明應元年猪苗代兼載の奥書ある「連歌本式」(群書類從連歌部)によつて知られる。【沿革】本式の成立はいつの頃か明かでない。「筑波問答」には「文和(文永の誤であらう)弘安の比より、本式・新式などいふもの出で來侍り。鎌倉には爲相卿藤がやつての式目とて、北林と號して出されたり。當時用ひたる新式は

爲世卿作られ侍るにや云々」とある。これによつて、京師で用ひられた二條家制定のものは新式であるが、鎌倉で冷泉家の制定した藤が谷の式目は本式か新式か明かでない。「連歌辨義」の追考には、「新式は爲家卿の御時よりありけるを、阿佛尼公の書添へ給ひしを、爲相卿鎌倉へ下り給ひて後、かの式を出し給ふ時、北林といふ名は阿佛尼公の御事なれば、やがて式目の號とはなし給ふなり云々」とあつて、これによつて藤が谷の式目も新式である事になる。然るに圖書寮本「連歌初學抄」に善阿の定めた式目は三枚懷紙であつて、一の表が十句、一の裏が二十句、中の折が四十句、名殘の折が三十句と見えてゐる。毛利公府家藏の毛利元就自筆の明應四年賦白何百韻は三枚懷紙であつて、その句數の配り方は善阿式目といふものに合致してゐる。されば表十句とする式目のあつた事も確かである。然るに最近宇野量介氏によつて研究された定家卿獨吟百韻は、新式の表八句、名殘の裏八句とするに合致する四枚懷紙のものであり、勝峰晋風氏及び頼原退藏氏によつて紹介された金澤文庫藏の元弘・正慶の三巻の百韻も同様の四枚懷紙のものである。これによると、連歌の式目の定型成立當時の式は新式の如きものであつたと考へられる事になり、従つて本式といふものは、本式といふに拘らず、その後の制定のものとも考へられねばならぬ事になり、善阿式と稱する三枚懷紙の式も或る時期に一部に於て試みられたものであるやうに思はれて來る。兎に角明應に兼載の記した「連歌本式」は、當時の本式の制によつて定めたものである筈で、これが本式の基本となり來つてゐるものである。俳諧時代に入つても兼載の本式



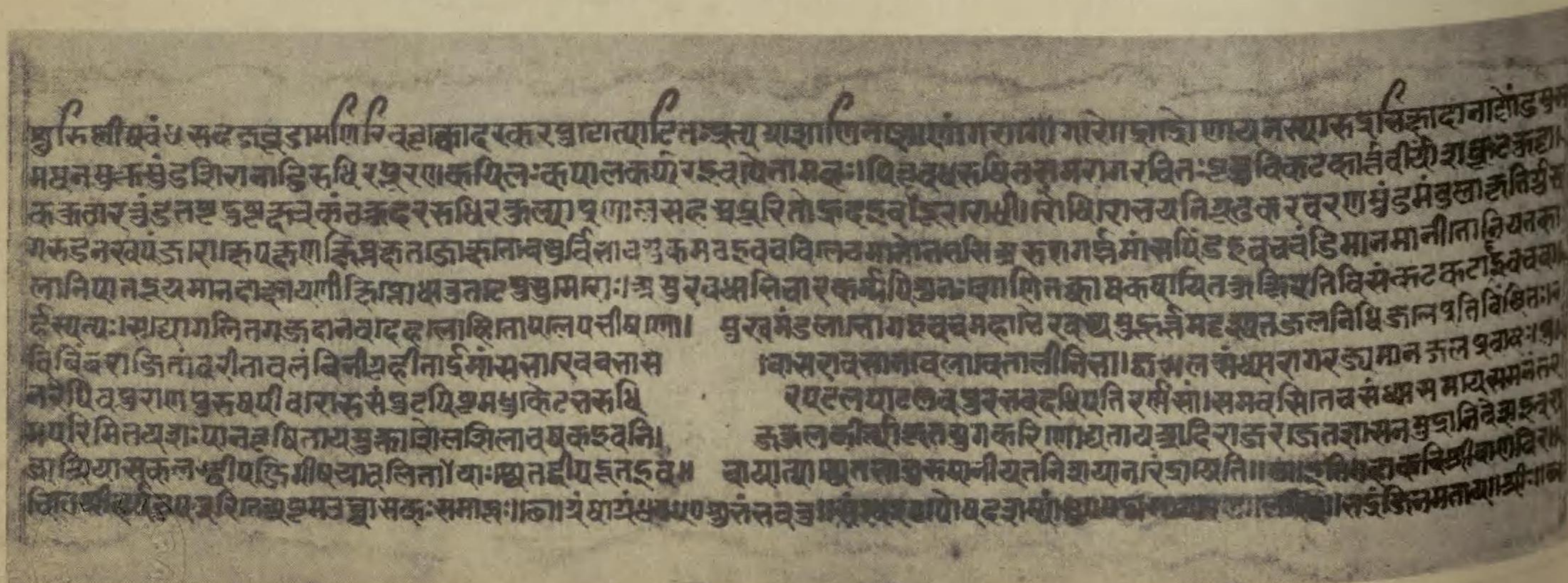


ブラーフミー文字

阿育王鹿野苑碑文



隨唐文字 Wardak, 51 A. D



デーヴナーガリー文字 十五世紀

字は、印度に於て次第に字體の改變を受け、俗語を正確に表はし得るやうに改良されて、俗間日常事務の使用の外、更に高尚な用途に適應されたのである。(二)カローシニティー文字 (Kharoshthi lipi: Iaitavistara loc. cit., 「佉書」普羅經、「佉盧虱底書」大莊嚴經、「佉盧虱吒書」佛本行集經)。この字體は本項で説く梵字の定義外のものであるが、古代印度文字としては重要である。佉路瑟吒文字、略して佉盧(佉羅、迦羅)書は、印度西北部に於て西曆前四世紀から西曆後三世紀まで使用された左行文字で、字體は西曆前五〇〇年乃至四〇〇年頃の北セム系アラメア文字に最も近い。即

である。同じく北方系に屬するナーガリー文字 (Nagari) は端を七世紀に發し、上部横線の發達を特徴とする。八世紀の半にはナーガリー文字の碑文があり、十世紀以後には益々廣く行はれて、遂に印度の大部分を風靡するに至つた。前記の鋭角型文字も、八世紀以後は次第にナーガリー文字の影響を受け、これに接近した。現今梵語を書くに用ひる文字は、ナーガリー型の轉化したもので、普通デーヴナーガリー (Devanagari) と稱し、南印度に行はれるナンディナーガリー (Nandinagari) と區別する。

【参考】 G. Bühler: Indische Palaeogra-
行に記し、中の部に四句半、末の部に四句半書く。この記載法と共に、賦物(別項)の取りやう、季の物・景物(別項)・降物・糞物等の去嫌(別項)の制があつて、一々作家はこれに準據して句を吐くべき慣習となつてゐた。なほその精しい點は、明應元年猪苗代兼載の奥書ある「連歌本式」(群書類從連歌部)によつて知られる。

【沿革】本式の成立はいつの頃か明かでない。「筑波問答」には「文和(文永の誤であらう)弘安の比より、本式・新式などいふもの出で來侍り。鎌倉には爲相卿藤がやつ(の)式目とて、北林と號して出されたり。當時用ひたる新式は、當時の本式の制によつて定めたものである。兔に角明應に兼載の記した「連歌本式」に於て試みられたものであるやうに思はれて來る。兔に角明應に兼載の記した「連歌本式」は、當時の本式の制によつて定めたものである。これが本式の基本となり來つてゐるものである。俳諧時代に入つても兼載の本式

二字梵
字文曇悉

Handwritten text in a historical script, likely a transcription of a sutra or commentary, with some characters in red ink.

Second block of handwritten text in a historical script, continuing the transcription.

法隆寺貝葉般若心經及尊勝陀羅尼

Vertical column of handwritten characters, possibly a list or index of characters used in the sutra.

Large block of handwritten text in a historical script, likely a transcription of the Heart Sutra and the Victorious Mantra.

天慶五年書寫梵文心經

傳弘法大師書字母集

Large block of handwritten text in a historical script, likely a collection of letters or characters used in Buddhist texts.

淨嚴手寫法隆寺貝葉

Vertical column of handwritten characters on the left page, including the character '阿' (A) and '汗' (Han).

Vertical column of handwritten characters on the left page, including the character '阿' (A) and '汗' (Han).

Vertical column of handwritten characters on the left page, including the character '阿' (A) and '汗' (Han).

Vertical column of handwritten characters on the left page, including the character '阿' (A) and '汗' (Han).

三字梵

字文曇悉

如	是	我	開	一	時	住
𑖀	𑖁	𑖂	𑖃	𑖄	𑖅	𑖆
𑖇	𑖈	𑖉	𑖊	𑖋	𑖌	𑖍
𑖎	𑖏	𑖐	𑖑	𑖒	𑖓	𑖔
𑖕	𑖖	𑖗	𑖘	𑖙	𑖚	𑖛

經陀彌阿漢梵書明常

𑖀	𑖁	𑖂	𑖃	𑖄	𑖅	𑖆	𑖇	𑖈	𑖉	𑖊	𑖋	𑖌	𑖍	𑖎	𑖏	𑖐	𑖑	𑖒	𑖓	𑖔	𑖕	𑖖	𑖗	𑖘	𑖙	𑖚	𑖛	𑖜	𑖝	𑖞	𑖟	𑖠	𑖡	𑖢	𑖣	𑖤	𑖥	𑖦	𑖧	𑖨	𑖩	𑖪	𑖫	𑖬	𑖭	𑖮	𑖯	𑖰	𑖱	𑖲	𑖳	𑖴	𑖵	𑖶	𑖷	𑖸	𑖹	𑖺	𑖻	𑖼	𑖽	𑖾	𑖿	𑗀	𑗁	𑗂	𑗃	𑗄	𑗅	𑗆	𑗇	𑗈	𑗉	𑗊	𑗋	𑗌	𑗍	𑗎	𑗏	𑗐	𑗑	𑗒	𑗓	𑗔	𑗕	𑗖	𑗗	𑗘	𑗙	𑗚	𑗛	𑗜	𑗝	𑗞	𑗟	𑗠	𑗡	𑗢	𑗣	𑗤	𑗥	𑗦	𑗧	𑗨	𑗩	𑗪	𑗫	𑗬	𑗭	𑗮	𑗯	𑗰	𑗱	𑗲	𑗳	𑗴	𑗵	𑗶	𑗷	𑗸	𑗹	𑗺	𑗻	𑗼	𑗽	𑗾	𑗿	𑘀	𑘁	𑘂	𑘃	𑘄	𑘅	𑘆	𑘇	𑘈	𑘉	𑘊	𑘋	𑘌	𑘍	𑘎	𑘏	𑘐	𑘑	𑘒	𑘓	𑘔	𑘕	𑘖	𑘗	𑘘	𑘙	𑘚	𑘛	𑘜	𑘝	𑘞	𑘟	𑘠	𑘡	𑘢	𑘣	𑘤	𑘥	𑘦	𑘧	𑘨	𑘩	𑘪	𑘫	𑘬	𑘭	𑘮	𑘯	𑘰	𑘱	𑘲	𑘳	𑘴	𑘵	𑘶	𑘷	𑘸	𑘹	𑘺	𑘻	𑘼	𑘽	𑘾	𑘿	𑙀	𑙁	𑙂	𑙃	𑙄	𑙅	𑙆	𑙇	𑙈	𑙉	𑙊	𑙋	𑙌	𑙍	𑙎	𑙏	𑙐	𑙑	𑙒	𑙓	𑙔	𑙕	𑙖	𑙗	𑙘	𑙙	𑙚	𑙛	𑙜	𑙝	𑙞	𑙟	𑙠	𑙡	𑙢	𑙣	𑙤	𑙥	𑙦	𑙧	𑙨	𑙩	𑙪	𑙫	𑙬	𑙭	𑙮	𑙯	𑙰	𑙱	𑙲	𑙳	𑙴	𑙵	𑙶	𑙷	𑙸	𑙹	𑙺	𑙻	𑙼	𑙽	𑙾	𑙿	𑚀	𑚁	𑚂	𑚃	𑚄	𑚅	𑚆	𑚇	𑚈	𑚉	𑚊	𑚋	𑚌	𑚍	𑚎	𑚏	𑚐	𑚑	𑚒	𑚓	𑚔	𑚕	𑚖	𑚗	𑚘	𑚙	𑚚	𑚛	𑚜	𑚝	𑚞	𑚟	𑚠	𑚡	𑚢	𑚣	𑚤	𑚥	𑚦	𑚧	𑚨	𑚩	𑚪	𑚫	𑚬	𑚭	𑚮	𑚯	𑚰	𑚱	𑚲	𑚳	𑚴	𑚵	𑚶	𑚷	𑚸	𑚹	𑚺	𑚻	𑚼	𑚽	𑚾	𑚿	𑛀	𑛁	𑛂	𑛃	𑛄	𑛅	𑛆	𑛇	𑛈	𑛉	𑛊	𑛋	𑛌	𑛍	𑛎	𑛏	𑛐	𑛑	𑛒	𑛓	𑛔	𑛕	𑛖	𑛗	𑛘	𑛙	𑛚	𑛛	𑛜	𑛝	𑛞	𑛟	𑛠	𑛡	𑛢	𑛣	𑛤	𑛥	𑛦	𑛧	𑛨	𑛩	𑛪	𑛫	𑛬	𑛭	𑛮	𑛯	𑛰	𑛱	𑛲	𑛳	𑛴	𑛵	𑛶	𑛷	𑛸	𑛹	𑛺	𑛻	𑛼	𑛽	𑛾	𑛿	𑜀	𑜁	𑜂	𑜃	𑜄	𑜅	𑜆	𑜇	𑜈	𑜉	𑜊	𑜋	𑜌	𑜍	𑜎	𑜏	𑜐	𑜑	𑜒	𑜓	𑜔	𑜕	𑜖	𑜗	𑜘	𑜙	𑜚	𑜛	𑜜	𑜝	𑜞	𑜟	𑜠	𑜡	𑜢	𑜣	𑜤	𑜥	𑜦	𑜧	𑜨	𑜩	𑜪	𑜫	𑜬	𑜭	𑜮	𑜯	𑜰	𑜱	𑜲	𑜳	𑜴	𑜵	𑜶	𑜷	𑜸	𑜹	𑜺	𑜻	𑜼	𑜽	𑜾	𑜿	𑝀	𑝁	𑝂	𑝃	𑝄	𑝅	𑝆	𑝇	𑝈	𑝉	𑝊	𑝋	𑝌	𑝍	𑝎	𑝏	𑝐	𑝑	𑝒	𑝓	𑝔	𑝕	𑝖	𑝗	𑝘	𑝙	𑝚	𑝛	𑝜	𑝝	𑝞	𑝟	𑝠	𑝡	𑝢	𑝣	𑝤	𑝥	𑝦	𑝧	𑝨	𑝩	𑝪	𑝫	𑝬	𑝭	𑝮	𑝯	𑝰	𑝱	𑝲	𑝳	𑝴	𑝵	𑝶	𑝷	𑝸	𑝹	𑝺	𑝻	𑝼	𑝽	𑝾	𑝿	𑞀	𑞁	𑞂	𑞃	𑞄	𑞅	𑞆	𑞇	𑞈	𑞉	𑞊	𑞋	𑞌	𑞍	𑞎	𑞏	𑞐	𑞑	𑞒	𑞓	𑞔	𑞕	𑞖	𑞗	𑞘	𑞙	𑞚	𑞛	𑞜	𑞝	𑞞	𑞟	𑞠	𑞡	𑞢	𑞣	𑞤	𑞥	𑞦	𑞧	𑞨	𑞩	𑞪	𑞫	𑞬	𑞭	𑞮	𑞯	𑞰	𑞱	𑞲	𑞳	𑞴	𑞵	𑞶	𑞷	𑞸	𑞹	𑞺	𑞻	𑞼	𑞽	𑞾	𑞿	𑟀	𑟁	𑟂	𑟃	𑟄	𑟅	𑟆	𑟇	𑟈	𑟉	𑟊	𑟋	𑟌	𑟍	𑟎	𑟏	𑟐	𑟑	𑟒	𑟓	𑟔	𑟕	𑟖	𑟗	𑟘	𑟙	𑟚	𑟛	𑟜	𑟝	𑟞	𑟟	𑟠	𑟡	𑟢	𑟣	𑟤	𑟥	𑟦	𑟧	𑟨	𑟩	𑟪	𑟫	𑟬	𑟭	𑟮	𑟯	𑟰	𑟱	𑟲	𑟳	𑟴	𑟵	𑟶	𑟷	𑟸	𑟹	𑟺	𑟻	𑟼	𑟽	𑟾	𑟿	𑠀	𑠁	𑠂	𑠃	𑠄	𑠅	𑠆	𑠇	𑠈	𑠉	𑠊	𑠋	𑠌	𑠍	𑠎	𑠏	𑠐	𑠑	𑠒	𑠓	𑠔	𑠕	𑠖	𑠗	𑠘	𑠙	𑠚	𑠛	𑠜	𑠝	𑠞	𑠟	𑠠	𑠡	𑠢	𑠣	𑠤	𑠥	𑠦	𑠧	𑠨	𑠩	𑠪	𑠫	𑠬	𑠭	𑠮	𑠯	𑠰	𑠱	𑠲	𑠳	𑠴	𑠵	𑠶	𑠷	𑠸	𑠹	𑠺	𑠻	𑠼	𑠽	𑠾	𑠿	𑡀	𑡁	𑡂	𑡃	𑡄	𑡅	𑡆	𑡇	𑡈	𑡉	𑡊	𑡋	𑡌	𑡍	𑡎	𑡏	𑡐	𑡑	𑡒	𑡓	𑡔	𑡕	𑡖	𑡗	𑡘	𑡙	𑡚	𑡛	𑡜	𑡝	𑡞	𑡟	𑡠	𑡡	𑡢	𑡣	𑡤	𑡥	𑡦	𑡧	𑡨	𑡩	𑡪	𑡫	𑡬	𑡭	𑡮	𑡯	𑡰	𑡱	𑡲	𑡳	𑡴	𑡵	𑡶	𑡷	𑡸	𑡹	𑡺	𑡻	𑡼	𑡽	𑡾	𑡿	𑢀	𑢁	𑢂	𑢃	𑢄	𑢅	𑢆	𑢇	𑢈	𑢉	𑢊	𑢋	𑢌	𑢍	𑢎	𑢏	𑢐	𑢑	𑢒	𑢓	𑢔	𑢕	𑢖	𑢗	𑢘	𑢙	𑢚	𑢛	𑢜	𑢝	𑢞	𑢟	𑢠	𑢡	𑢢	𑢣	𑢤	𑢥	𑢦	𑢧	𑢨	𑢩	𑢪	𑢫	𑢬	𑢭	𑢮	𑢯	𑢰	𑢱	𑢲	𑢳	𑢴	𑢵	𑢶	𑢷	𑢸	𑢹	𑢺	𑢻	𑢼	𑢽	𑢾	𑢿	𑣀	𑣁	𑣂	𑣃	𑣄	𑣅	𑣆	𑣇	𑣈	𑣉	𑣊	𑣋	𑣌	𑣍	𑣎	𑣏	𑣐	𑣑	𑣒	𑣓	𑣔	𑣕	𑣖	𑣗	𑣘	𑣙	𑣚	𑣛	𑣜	𑣝	𑣞	𑣟	𑣠	𑣡	𑣢	𑣣	𑣤	𑣥	𑣦	𑣧	𑣨	𑣩	𑣪	𑣫	𑣬	𑣭	𑣮	𑣯	𑣰	𑣱	𑣲	𑣳	𑣴	𑣵	𑣶	𑣷	𑣸	𑣹	𑣺	𑣻	𑣼	𑣽	𑣾	𑣿	𑤀	𑤁	𑤂	𑤃	𑤄	𑤅	𑤆	𑤇	𑤈	𑤉	𑤊	𑤋	𑤌	𑤍	𑤎	𑤏	𑤐	𑤑	𑤒	𑤓	𑤔	𑤕	𑤖	𑤗	𑤘	𑤙	𑤚	𑤛	𑤜	𑤝	𑤞	𑤟	𑤠	𑤡	𑤢	𑤣	𑤤	𑤥	𑤦	𑤧	𑤨	𑤩	𑤪	𑤫	𑤬	𑤭	𑤮	𑤯	𑤰	𑤱	𑤲	𑤳	𑤴	𑤵	𑤶	𑤷	𑤸	𑤹	𑤺	𑤻	𑤼	𑤽	𑤾	𑤿	𑥀	𑥁	𑥂	𑥃	𑥄	𑥅	𑥆	𑥇	𑥈	𑥉	𑥊	𑥋	𑥌	𑥍	𑥎	𑥏	𑥐	𑥑	𑥒	𑥓	𑥔	𑥕	𑥖	𑥗	𑥘	𑥙	𑥚	𑥛	𑥜	𑥝	𑥞	𑥟	𑥠	𑥡	𑥢	𑥣	𑥤	𑥥	𑥦	𑥧	𑥨	𑥩	𑥪	𑥫	𑥬	𑥭	𑥮	𑥯	𑥰	𑥱	𑥲	𑥳	𑥴	𑥵	𑥶	𑥷	𑥸	𑥹	𑥺	𑥻	𑥼	𑥽	𑥾	𑥿	𑦀	𑦁	𑦂	𑦃	𑦄	𑦅	𑦆	𑦇	𑦈	𑦉	𑦊	𑦋	𑦌	𑦍	𑦎	𑦏	𑦐	𑦑	𑦒	𑦓	𑦔	𑦕	𑦖	𑦗	𑦘	𑦙	𑦚	𑦛	𑦜	𑦝	𑦞	𑦟	𑦠	𑦡	𑦢	𑦣	𑦤	𑦥	𑦦	𑦧	𑦨	𑦩	𑦪	𑦫	𑦬	𑦭	𑦮	𑦯	𑦰	𑦱	𑦲	𑦳	𑦴	𑦵	𑦶	𑦷	𑦸	𑦹	𑦺	𑦻	𑦼	𑦽	𑦾	𑦿	𑧀	𑧁	𑧂	𑧃	𑧄	𑧅	𑧆	𑧇	𑧈	𑧉	𑧊	𑧋	𑧌	𑧍	𑧎	𑧏	𑧐	𑧑	𑧒	𑧓	𑧔	𑧕	𑧖	𑧗	𑧘	𑧙	𑧚	𑧛	𑧜	𑧝	𑧞	𑧟	𑧠	𑧡	𑧢	𑧣	𑧤	𑧥	𑧦	𑧧	𑧨	𑧩	𑧪	𑧫	𑧬	𑧭	𑧮	𑧯	𑧰	𑧱	𑧲	𑧳	𑧴	𑧵	𑧶	𑧷	𑧸	𑧹	𑧺	𑧻	𑧼	𑧽	𑧾	𑧿	𑨀	𑨁	𑨂	𑨃	𑨄	𑨅	𑨆	𑨇	𑨈	𑨉	𑨊	𑨋	𑨌	𑨍	𑨎	𑨏	𑨐	𑨑	𑨒	𑨓	𑨔	𑨕	𑨖	𑨗	𑨘	𑨙	𑨚	𑨛	𑨜	𑨝
---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---